兵庫県文化財調査報告第207冊

有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ

-都市計画道路伊丹飛行場線(中工区)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)-

2000年3月

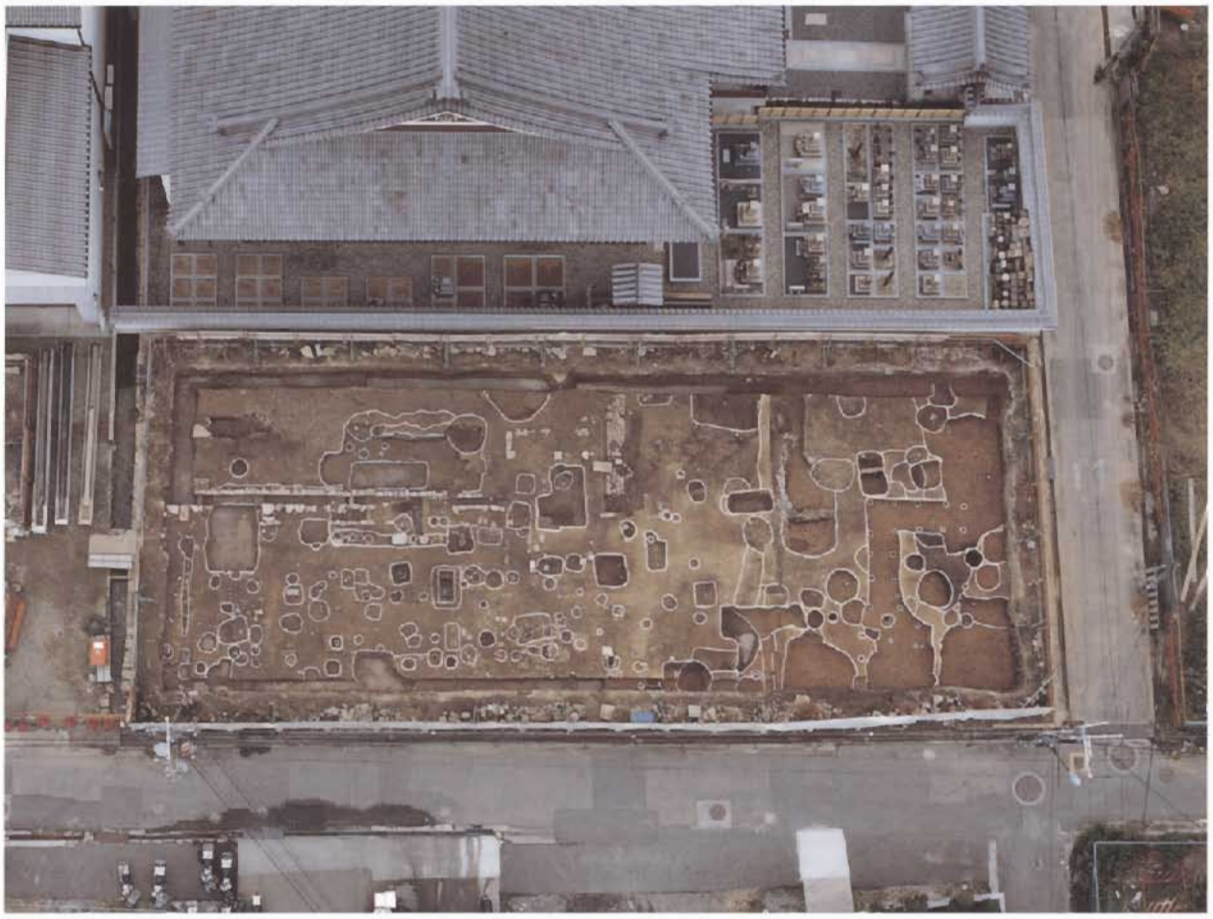
兵庫県教育委員会

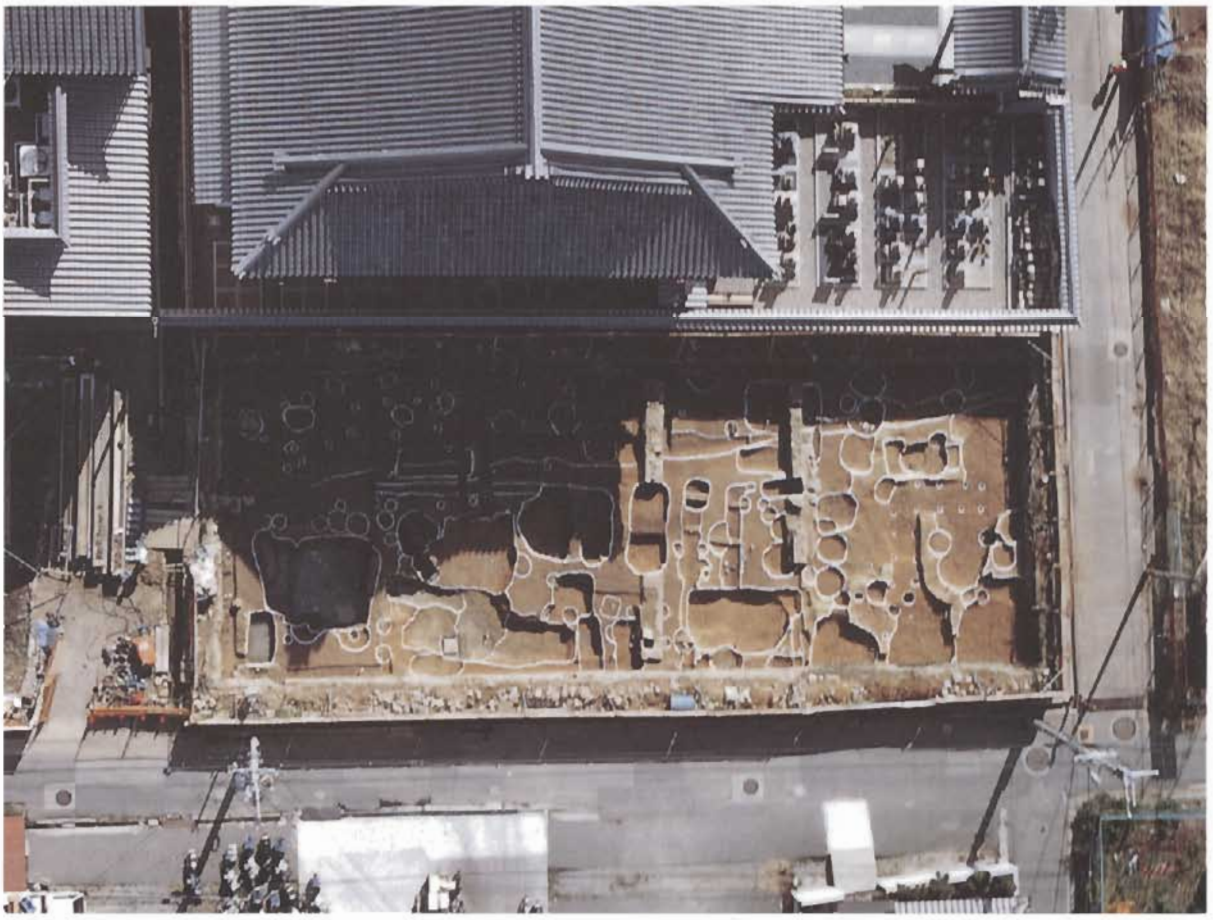
1. 北斜め上空から

2. 西斜め上空から

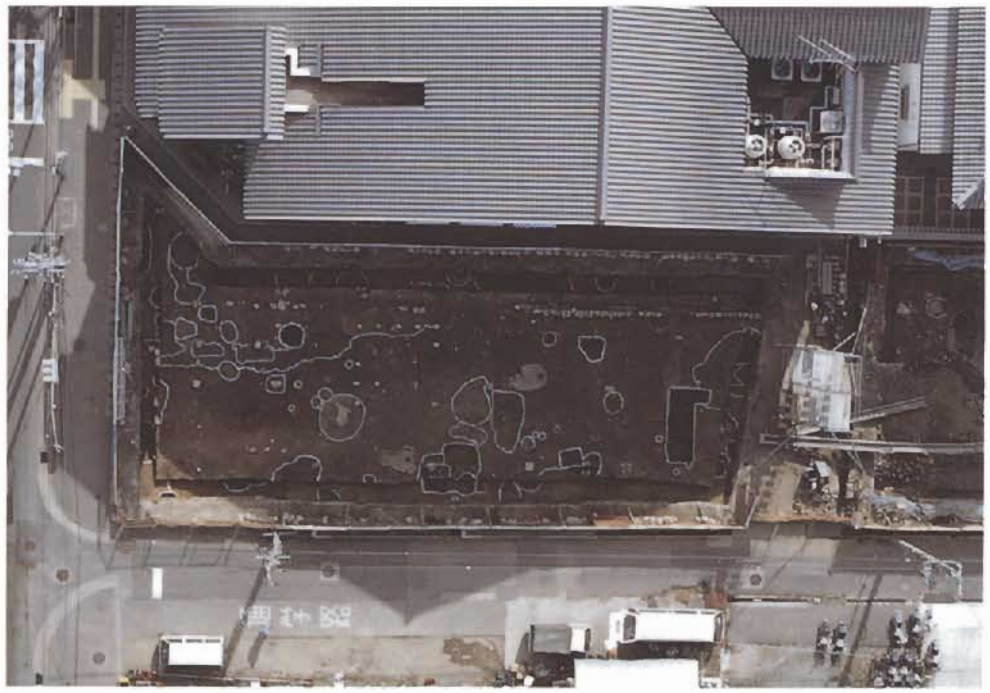
1. 東斜め上空から

2. 第114次調査地点と光明寺





B地区遺構面（第Ⅰ面・第Ⅲ面）



C地区遺構面（第Ⅰ面・第Ⅱ面・第Ⅲ面）

木簡・漆器・櫛

巻首図版六　第一一四次調査出土土器・土製品（一）

巻首図版八 第一一四次調査出土金属製品・骨製品・土製品（三）

第114次調査

例　　言

1．本書は都市計画道路伊丹飛行場線改良工事に伴い、平成４年７月27日から平成５年１月14日まで事前調査を実施した兵庫県伊丹市宮ノ前１丁目・２丁目に所在する有岡城跡・伊丹郷町遺跡の第114次調査の発掘調査報告書である。

2．過去、兵庫県教育委員会が発行した有岡城跡・伊丹郷町関連の調査報告書には、兵庫県文化財調査報告書123冊『伊丹郷町発掘調査報告書－宮の前地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』1993年及び兵庫県文化財調査報告第164 冊『有岡城・伊丹郷町遺跡Ⅱ－都市計画道路伊丹飛行場線道路改良工事に伴う発掘調査報告（１）』 1997年があり、本書はその第３冊目に当たるため、書名を「有岡城・伊丹郷町遺跡Ⅲ－都市計画道路伊丹飛行場線（中工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）』とした。

3．遺構の実測は、調査員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。

4．写真は、遺構を調査員が撮影し、遺物については（株）衣川に委託した。

5．本書の執筆は埋蔵文化財調査事務所、岡崎　正雄、岡田章一、西口圭介、菱田淳子、長濱誠司、松岡千寿及び兵庫県県民生活部芸術文化課の長谷川眞が分担し、文責は目次に明記した。

6．本書の編集は、岡崎の指導のもと、岡田、菱田、松岡が行った。

7．遺物属性表に記載の数値の単位は、法量についてはcm、重量についてはｇを使用した。なお、有効桁数については小数点以下２位とし、（　）は現存の法量を表す。

8．本書で使用した標高は大阪湾平均海水準を基とし、方位は国土座標５ 系の座標北を指す。

9．木製品については、京都大学木質科学研究所の伊東隆夫教授に分析を依頼し、鑑定結果についての玉稿を頂戴している。

10．出土人骨については、京都大学霊長類研究所の片山一道教授に鑑定を依頼し、所見を戴いたものを岡崎が別表（第７表　光明寺近世墓　人骨集成）にまとめ掲載した。

11．種実についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に分析を依頼し、報告を掲載している。

12．出土品並びに写真、図面類は埋蔵文化財調査事務所で保管している。

13．発掘調査及び出土品整理に際しては、下記の機関並びに個人から御指導、御教示を得た。ここに、貴機関名並びに御芳名を記して深甚の謝意を表する。

京都大学霊長類研究所、京都大学木質科学研究所、伊丹市教育委員会、大手前女子大学史学研究所、明石市教育委員会、堺市埋蔵文化財センター、（財）大阪市文化財協会、関西近世考古学研究会、パリノ・サーヴェイ株式会社、片山一道、伊東隆夫、藤井直正、川口宏海、前川　要、嶋谷　和彦、森　毅、稲原　昭嘉、細川桂子、角田　茂、豆谷　浩之、赤松　和佳　他、（順不同）

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯……岡崎正雄・岡田章一…1

2．調査の経過……岡崎・岡田……1

3．調査体制……岡崎・岡田……4

4．調査日誌抄……岡崎……5

Ⅱ．遺跡をとりまく環境

1．伊丹城・有岡城の沿革

(1) 伊丹城と伊丹氏……岡田……9

(2) 有岡城と荒木村重……岡田……9

2．伊丹郷町

(1) 伊丹郷町の成立……岡田……10

(2) 酒造業の発展……岡田……10

(3) 近代以降の伊丹郷町……岡田……11

3．光明寺の沿革と墓碑調査……岡崎・岡田……11

Ⅲ．遺構

1．B地区

(1) 遺構の概要……岡崎・西口圭介……17

(2) 基本層序と遺構面の設定……岡崎・西口……17

(3) 移転以前の墓地と第Ⅰ面の遺構……岡崎・西口……19

(4) 第Ⅱ面（第2遺構面）の遺構……岡崎・西口……20

(5) 第Ⅲ面（第3・4・5遺構面）の遺構……岡崎・西口……24

(6) 本堂遺構について……岡崎・西口……30

2．C地区

(1) 遺構の概要……岡崎・西口……32

(2) 基本層序と遺構面の設定……岡崎・西口……32

(3) 第Ⅰ面（第1・2遺構面）の遺構……岡崎・西口……33

(4) 第Ⅱ面（第3遺構面）の遺構……岡崎・西口……35

(5) 第Ⅲ面（第4・5・6遺構面）の遺構……岡崎・西口……38

Ⅳ．出土遺物

1．土器・陶磁器

(1) 土師器及び土師質土器……長谷川眞……41

(2) 陶器…… 岡田・長谷川……43
(3) 磁器…… 岡田……48
2．土製品……岡田……51
3．瓦……長谷川……53
4．石製品……長濱誠司……53
5．金属製品……松岡千寿……55
6．木製品……菱田淳子……58

V．自然科学分野の分析
1．伊丹郷町遺跡出土の樹種……京都大学木質科学研究所　伊東隆夫…63
2．有岡城跡・伊丹郷町の種実分析……パリノ・サーヴェイ株式会社……65

Ⅵ．おわりに
1．B・C地区の土地利用の変遷……西口・岡田……66
2．光明寺本堂及び近世墓の成立と展開……西口・岡田……67
3．酒蔵遺構について……西口・岡田……68
4．光明寺近世墓出土人骨及び副葬品について……岡崎・岡田……69

図　版　目　次

巻首図版　1　有岡城跡・伊丹郷町空中写真(1)　1.北斜め上空から　2.西斜め上空から

巻首図版　2　有岡城跡・伊丹郷町空中写真(2)　1.東斜め上空から　2.第114次調査地点と光明寺

巻首図版　3　第114次調査地点空中写真(1)　B地区遺構面(第Ⅰ面・第Ⅲ面)

巻首図版　4　第114次調査地点空中写真(2)　C地区遺構面(第Ⅰ面・第Ⅱ面・第Ⅲ面)

巻首図版　5　第114次調査出土木製品　木簡・漆器・櫛

巻首図版　6　第114次調査出土土器・土製品(1)

巻首図版　7　第114次調査出土土器・土製品(2)

巻首図版　8　第114次調査出土金属製品・骨製品・土製品(3)

図版　1　有岡城跡・伊丹郷町の位置

図版　2　有岡城跡・伊丹郷町周辺地形環境図

図版　3　有岡城跡・伊丹郷町周辺等高線図

図版　4　飛行場線と調査地区

図版　5　第114次調査地区と伊丹郷町絵図

図版　6　第114次調査B・C地区の遺構と調査区割り

図版　7　第114次調査B・C地区基本土層模式図

図版　8　第114次調査光明寺墓地と墓石

図版　9　第114次調査墓碑(1)

図版　10　第114次調査墓碑(2)

図版　11　第114次調査B地区遺構の概観

図版　12　第114次調査B地区土層図

図版　13　第114次調査B地区遺構　第Ⅱ・Ⅲ面遺構　墓地Ⅰ

図版　14　第114次調査B地区遺構　墓地境溝と石造品

図版　15　第114次調査B地区遺構　第Ⅱ・Ⅲ面遺構　墓地Ⅱ

図版　16　第114次調査B地区遺構　蔵骨器(1)

図版　17　第114次調査B地区遺構　蔵骨器(2)

図版　18　第114次調査B地区遺構　蔵骨器(3)

図版　19　第114次調査B地区遺構　桶棺(1)

図版　20　第114次調査B地区遺構　桶棺(2)

図版　21　第114次調査B地区遺構　箱棺(1)

図版　22　第114次調査B地区遺構　箱棺(2)

図版　23　第114次調査B地区遺構　石敷（SF01）と築地塀（SF02）

図版　24　第114次調査Ｂ地区遺構　石敷（ＳＦ01）・築地塀（ＳＦ02）と石垣
図版　25　第114次調査Ｂ地区遺構　光明寺本堂と墓地
図版　26　第114次調査Ｂ地区遺構　光明寺本堂（礎石）と火災層
図版　27　第114次調査Ｂ地区遺構　光明寺本堂復元Ⅰ（第Ⅱ面）
図版　28　第114次調査Ｂ地区遺構　光明寺本堂復元Ⅱ（第Ⅱ面）
図版　29　第114次調査Ｂ地区遺構　第Ⅲ面遺構と下層遺構
図版　30　第114次調査Ｃ地区遺構　第Ⅰ面遺構
図版　31　第114次調査Ｃ地区遺構　池・屋敷境溝・竈
図版　32　第114次調査Ｃ地区遺構　第Ⅱ面遺構
図版　33　第114次調査Ｃ地区遺構　屋敷境溝・敷瓦
図版　34　第114次調査Ｃ地区遺構　男柱
図版　35　第114次調査Ｃ地区遺構　竈（１）
図版　36　第114次調査Ｃ地区遺構　竈（２）
図版　37　第114次調査Ｃ地区遺構　井戸
図版　38　第114次調査Ｃ地区遺構　酒蔵Ⅰ・Ⅱ期
図版　39　第114次調査Ｃ地区遺構　第Ⅲ面遺構
図版　40　第114次調査Ｃ地区遺構　中世区画溝と掘立柱建物に伴う根石群
図版　41　第114次調査Ｃ地区遺構　中世墓・鍛冶炉
図版　42　第114次調査出土遺物（１）　土器・土製品（１）　火消壺（１）
図版　43　第114次調査出土遺物（２）　土器・土製品（２）　火消壺（２）
図版　44　第114次調査出土遺物（３）　土器・土製品（３）　火消壺（３）
図版　45　第114次調査出土遺物（４）　土器・土製品（４）　火消壺（４）
図版　46　第114次調査出土遺物（５）　土器・土製品（５）　火消壺（５）
図版　47　第114次調査出土遺物（６）　土器・土製品（６）　火消壺（６）
図版　48　第114次調査出土遺物（７）　土器・土製品（７）　火消壺（７）
図版　49　第114次調査出土遺物（８）　土器・土製品（８）　火消壺（８）
図版　50　第114次調査出土遺物（９）　土器・土製品（９）　火消壺（９）
図版　51　第114次調査出土遺物(10)　土器・土製品(10)　陶磁器（１）
図版　52　第114次調査出土遺物(11)　土器・土製品(11)　陶磁器（２）
図版　53　第114次調査出土遺物(12)　土器・土製品(12)　陶磁器（３）
図版　54　第114次調査出土遺物(13)　土器・土製品(13)　陶磁器（４）
図版　55　第114次調査出土遺物(14)　土器・土製品(14)　陶磁器（５）・ミニチュア（１）
図版　56　第114次調査出土遺物(15)　土器・土製品(15)　ミニチュア（２）
図版　57　第114次調査出土遺物(16)　土器・土製品(16)　ミニチュア（３）
図版　58　第114次調査出土遺物(17)　土器・土製品(17)　ミニチュア（４）・陶磁器（６）
図版　59　第114次調査出土遺物(18)　土器・土製品(18)　陶磁器（７）
図版　60　第114次調査出土遺物(19)　土器・土製品(19)　陶磁器（８）

図版	61	第114次調査出土遺物(20)	土器・土製品(20)	陶磁器(9)
図版	62	第114次調査出土遺物(21)	土器・土製品(21)	陶磁器(10)
図版	63	第114次調査出土遺物(22)	土器・土製品(22)	陶磁器(11)
図版	64	第114次調査出土遺物(23)	土器・土製品(23)	陶磁器(12)
図版	65	第114次調査出土遺物(24)	土器・土製品(24)	陶磁器(13)
図版	66	第114次調査出土遺物(25)	土器・土製品(25)	陶磁器(14)
図版	67	第114次調査出土遺物(26)	土器・土製品(26)	陶磁器(15)
図版	68	第114次調査出土遺物(27)	土器・土製品(27)	陶磁器(16)
図版	69	第114次調査出土遺物(28)	土器・土製品(28)	土師器・焼塩壺
図版	70	第114次調査出土遺物(29)	土器・土製品(29)	土師器・白磁・近現代陶磁器
図版	71	第114次調査出土遺物(30)	瓦・瓦製品(1)	鬼瓦
図版	72	第114次調査出土遺物(31)	瓦・瓦製品(2)	軒丸瓦(1)
図版	73	第114次調査出土遺物(32)	瓦・瓦製品(3)	軒丸瓦(2)・道具瓦・土管
図版	74	第114次調査出土遺物(33)	瓦・瓦製品(4)	軒平瓦
図版	75	第114次調査出土遺物(34)	瓦・瓦製品(5)	敷瓦・井戸瓦
図版	76	第114次調査出土遺物(35)	石製品(1)	墓石(1)
図版	77	第114次調査出土遺物(36)	石製品(2)	墓石(2)
図版	78	第114次調査出土遺物(37)	石製品(3)	石仏(1)・一石五輪搭(1)
図版	79	第114次調査出土遺物(38)	石製品(4)	石仏(2)・一石五輪搭(2)
図面	80	第114次調査出土遺物(39)	石製品(5)	一石五輪搭(3)
図版	81	第114次調査出土遺物(40)	石製品(6)	一石五輪搭(4)
図版	82	第114次調査出土遺物(41)	石製品(7)	一石五輪搭(5)
図版	83	第114次調査出土遺物(42)	石製品(8)	一石五輪搭(6)
図版	84	第114次調査出土遺物(43)	石製品(9)	一石五輪搭(7)・五輪搭
図版	85	第114次調査出土遺物(44)	石製品(10)	石臼
図版	86	第114次調査出土遺物(45)	石製品(11)・骨製品	硯・砥石他
図版	87	第114次調査出土遺物(46)	金属製品(1)	銅製品(1)
図版	88	第114次調査出土遺物(47)	金属製品(2)	鉄製品(1)・銅製品(2)
図版	89	第114次調査出土遺物(48)	金属製品(3)	鉄製品(2)・銅製品(3)
図版	90	第114次調査出土遺物(49)	金属製品(4)	鉄製品(3)・銅製品(4)
図版	91	第114次調査出土遺物(50)	金属製品(5)	銭(1)
図版	92	第114次調査出土遺物(51)	金属製品(6)	銭(2)
図版	93	第114次調査出土遺物(52)	金属製品(7)	銭(3)
図版	94	第114次調査出土遺物(53)	木製品(1)	箱棺(1)
図版	95	第114次調査出土遺物(54)	木製品(2)	箱棺(2)
図版	96	第114次調査出土遺物(55)	木製品(3)	箱棺(3)
図版	97	第114次調査出土遺物(56)	木製品(4)	箱棺(4)

図版　98　第114次調査出土遺物(57)　木製品(5)　桶棺(1)
図版　99　第114次調査出土遺物(58)　木製品(6)　桶棺(2)
図版　100　第114次調査出土遺物(59)　木製品(7)　桶棺(3)
図版　101　第114次調査出土遺物(60)　木製品(8)　箱棺(5)他
図版　102　第114次調査出土遺物(61)　木製品(9)　箱棺(6)
図版　103　第114次調査出土遺物(62)　木製品(10)　木簡・数珠玉・棗・容器
図版　104　第114次調査出土遺物(63)　木製品(11)　容器・漆製品(1)箱
図版　105　第114次調査出土遺物(64)　木製品(12)　漆製品(2)箱・箸・椀
図版　106　第114次調査出土遺物(65)　木製品(13)　箱(1)
図版　107　第114次調査出土遺物(66)　木製品(14)　箱(2)
図版　108　第114次調査出土遺物(67)　木製品(15)　箱(3)
図版　109　第114次調査出土遺物(68)　木製品(16)　箸他
図版　110　第114次調査出土遺物(69)　木製品(17)・竹製品　棺台・煙管羅宇
図版　111　第114次調査出土遺物(70)　木製品(18)
図版　112　第114次調査出土遺物(71)　木製品(19)　下駄・櫛・縄他
図版　113　第150次調査遺構配置図
図版　114　第150次調査遺構(1)(土坑・便所)
図版　115　第150次調査遺構(2)(水琴窟)
図版　116　第150次調査遺構(3)(土坑)
図版　117　第150次調査遺構(4)(長方形焼土土坑)
図版　118　第150次調査遺構(5)(土坑)
図版　119　第150次調査遺構(6)(埋桶)
図版　120　第150次調査時期毎の遺構変遷図
図版　121　第150次調査周辺調査地区全体図
図版　122　第150次調査屋敷境の遺構平面図
図版　123　第150次調査屋敷地復元図
図版　124　第150次調査出土土器(1)(土師質土器)
図版　125　第150次調査出土土器(2)(陶器擂鉢)
図版　126　第150次調査出土土器(3)(陶器・瓦)
図版　127　第150次調査出土土器(4)(染付磁器)
図版　128　第150次調査出土土器(5)(青磁染付・青磁・白磁・陶器甕)
図版　129　第150次調査出土土器(6)(近代遺物)

写真図版目次

写真図版　1　第114次調査地点空中写真　1.西上空から遠景　2.真上から　3.調査地点と光明寺
写真図版　2　第114次調査遺構写真（1）　B地区（1）　1.第Ⅰ面　2.第Ⅱ面　3.第Ⅲ面
写真図版　3　第114次調査遺構写真（2）　B地区（2）　光明寺墓地(1.東から　2.南から)
写真図版　4　第114次調査遺構写真（3）　B地区（3）　1.第Ⅱ面(西から)　2.第Ⅲ面(西から)
写真図版　5　第114次調査遺構写真（4）　B地区（4）　第Ⅱ面(南から連続と石敷SF01)
写真図版　6　第114次調査遺構写真（5）　B地区（5）　第Ⅲ面(石敷SF01と築地塀SF02)
写真図版　7　第114次調査遺構写真（6）　B地区（6）　第Ⅲ面(石垣と本堂火災状況)
写真図版　8　第114次調査遺構写真（7）　B地区（7）　下層の遺構(溝SD03と井戸SE01)
写真図版　9　第114次調査遺構写真（8）　B地区（8）　光明寺墓地　蔵骨器（1）
写真図版　10　第114次調査遺構写真（9）　B地区（9）　光明寺墓地　蔵骨器（2）
写真図版　11　第114次調査遺構写真(10)　B地区(10)　光明寺墓地　蔵骨器（3）・墓石
写真図版　12　第114次調査遺構写真(11)　B地区(11)　光明寺墓地　蔵骨器（4）
写真図版　13　第114次調査遺構写真(12)　B地区(12)　光明寺墓地　蔵骨器（5）・土器棺
写真図版　14　第114次調査遺構写真(13)　B地区(13)　光明寺墓地　蔵骨器（6）
写真図版　15　第114次調査遺構写真(14)　B地区(14)　光明寺墓地　火災層と土器
写真図版　16　第114次調査遺構写真(15)　B地区(15)　光明寺創建期本堂と墓地
写真図版　17　第114次調査遺構写真(16)　B地区(16)　光明寺墓地　桶棺（1）と蔵骨器（7）
写真図版　18　第114次調査遺構写真(17)　B地区(17)　光明寺墓地　桶棺（2）と箱棺（1）
写真図版　19　第114次調査遺構写真(18)　B地区(18)　光明寺墓地　桶棺（3）
写真図版　20　第114次調査遺構写真(19)　B地区(19)　光明寺墓地　箱棺（2）
写真図版　21　第114次調査遺構写真(20)　B地区(20)　光明寺墓地　箱棺（3）
写真図版　22　第114次調査遺構写真(21)　C地区（1）　空中写真(第Ⅰ面・第Ⅱ面・第Ⅲ面)
写真図版　23　第114次調査遺構写真(22)　C地区（2）　第Ⅰ面(屋敷・井戸・池・防空壕)
写真図版　24　第114次調査遺構写真(23)　C地区（3）　第Ⅰ面(建物・竈・井戸)
写真図版　25　第114次調査遺構写真(24)　C地区（4）　第Ⅱ面(酒蔵・井戸・区画溝)
写真図版　26　第114次調査遺構写真(25)　C地区（5）　第Ⅱ面(酒蔵礎石)
写真図版　27　第114次調査遺構写真(26)　C地区（6）　第Ⅱ面(井戸・竈・酒搾り場男柱)
写真図版　28　第114次調査遺構写真(27)　C地区（7）　第Ⅱ面(竈１－１)
写真図版　29　第114次調査遺構写真(28)　C地区（8）　第Ⅱ面(竈１－２)
写真図版　30　第114次調査遺構写真(29)　C地区（9）　第Ⅲ面(溝・土坑・井戸・墓)
写真図版　31　第114次調査遺構写真(30)　C地区(10)　酒蔵火災層と竈
写真図版　32　第114次調査発掘調査風景
写真図版　33　第114次調査出土遺物（1）　土器・土製品（1）　蔵骨器（1）　火消壺（1）
写真図版　34　第114次調査出土遺物（2）　土器・土製品（2）　蔵骨器（2）　火消壺（2）

写真図版　35　第114次調査出土遺物（3）　土器・土製品（3）　蔵骨器（3）　火消壺（3）
写真図版　36　第114次調査出土遺物（4）　土器・土製品（4）　蔵骨器（4）　火消壺（4）
写真図版　37　第114次調査出土遺物（5）　土器・土製品（5）　蔵骨器（5）　火消壺（5）
写真図版　38　第114次調査出土遺物（6）　土器・土製品（6）　蔵骨器（6）　火消壺（6）
写真図版　39　第114次調査出土遺物（7）　土器・土製品（7）　蔵骨器（7）　火消壺（7）
写真図版　40　第114次調査出土遺物（8）　土器・土製品（8）　蔵骨器（8）　火消壺（8）
写真図版　41　第114次調査出土遺物（9）　土器・土製品（9）　蔵骨器（9）　火消壺（9）
写真図版　42　第114次調査出土遺物(10)　土器・土製品(10)　蔵骨器(10)　火消壺(10)
写真図版　43　第114次調査出土遺物(11)　土器・土製品(11)　蔵骨器(11)　火消壺(11)
写真図版　44　第114次調査出土遺物(12)　土器・土製品(12)　蔵骨器(12)　火消壺(12)
写真図版　45　第114次調査出土遺物(13)　土器・土製品(13)　蔵骨器(13)　火消壺(13)
写真図版　46　第114次調査出土遺物(14)　土器・土製品(14)　蔵骨器(14)　火消壺(14)
写真図版　47　第114次調査出土遺物(15)　土器・土製品(15)　蔵骨器(15)　陶磁器（1）
写真図版　48　第114次調査出土遺物(16)　土器・土製品(16)　蔵骨器(16)　陶磁器（2）
写真図版　49　第114次調査出土遺物(17)　土器・土製品(17)　蔵骨器(17)　陶磁器（3）
写真図版　50　第114次調査出土遺物(18)　土器・土製品(18)　蔵骨器(18)・土器棺（1）　陶磁器（4）
写真図版　51　第114次調査出土遺物(19)　土器・土製品(19)　土器棺（2）　陶磁器（5）
写真図版　52　第114次調査出土遺物(20)　土器・土製品(20)　蔵骨器(19)　陶磁器（6）
写真図版　53　第114次調査出土遺物(21)　土器・土製品(21)　蔵骨器(20)　陶磁器（7）
写真図版　54　第114次調査出土遺物(22)　土器・土製品(22)　蔵骨器(21)　陶磁器（8）
写真図版　55　第114次調査出土遺物(23)　土器・土製品(23)　副葬品（1）　陶磁器（9）
写真図版　56　第114次調査出土遺物(24)　土器・土製品(24)　副葬品（2）　陶磁器(10)
写真図版　57　第114次調査出土遺物(25)　土器・土製品(25)　副葬品（3）　数珠玉・土鈴・面子
写真図版　58　第114次調査出土遺物(26)　土器・土製品(26)　副葬品（4）　ミニチユア（1）
写真図版　59　第114次調査出土遺物(27)　土器・土製品(27)　副葬品（5）　ミニチユア（2）
写真図版　60　第114次調査出土遺物(28)　土器・土製品(28)　副葬品（6）　ミニチユア（3）
写真図版　61　第114次調査出土遺物(29)　土器・土製品(29)　陶磁器(11)　漳州窯・肥前他
写真図版　62　第114次調査出土遺物(30)　土器・土製品(30)　陶磁器(12)　備前・瀬戸美濃・丹波他
写真図版　63　第114次調査出土遺物(31)　土器・土製品(31)　陶磁器(13)　土師器他
写真図版　64　第114次調査出土遺物(32)　土器・土製品(32)　陶磁器(14)　肥前Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
写真図版　65　第114次調査出土遺物(33)　土器・土製品(33)　陶磁器(15)　唐津（1）
写真図版　66　第114次調査出土遺物(34)　土器・土製品(34)　陶磁器(16)　唐津（2）・現川
写真図版　67　第114次調査出土遺物(35)　土器・土製品(35)　陶磁器(17)　京焼風
写真図版　68　第114次調査出土遺物(36)　土器・土製品(36)　陶磁器(18)　唐津・肥前Ⅰ・Ⅱ
写真図版　69　第114次調査出土遺物(37)　土器・土製品(37)　陶磁器(19)　肥前Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ
写真図版　70　第114次調査出土遺物(38)　土器・土製品(38)　陶磁器(20)　肥前Ⅳ・Ⅴ・美濃
写真図版　71　第114次調査出土遺物(39)　土器・土製品(39)　陶磁器(21)　肥前Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ

写真図版　72　第114次調査出土遺物(40)　土器・土製品(40)　陶磁器(22)　肥前小杯・猪口・碗
写真図版　73　第114次調査出土遺物(41)　土器・土製品(41)　陶磁器(23)　肥前碗・猪口・鬢盥
写真図版　74　第114次調査出土遺物(42)　土器・土製品(42)　陶磁器(24)　肥前鉢
写真図版　75　第114次調査出土遺物(43)　土器・土製品(43)　陶磁器(25)　肥前香炉・鉢
写真図版　76　第114次調査出土遺物(44)　土器・土製品(44)　陶磁器(26)　丹波壺・甕・灰器・水盤
写真図版　77　第114次調査出土遺物(45)　土器・土製品(45)　陶磁器(27)　丹波擂鉢
写真図版　78　第114次調査出土遺物(46)　土器・土製品(46)　陶磁器(28)　丹波擂鉢・甕・瀬戸・美濃椀
写真図版　79　第114次調査出土遺物(47)　土器・土製品(47)　陶磁器(29)　丹波蓋・甕
写真図版　80　第114次調査出土遺物(48)　土器・土製品(48)　陶磁器(30)　備前甕・徳利他・瀬戸・美濃椀
写真図版　81　第114次調査出土遺物(49)　土器・土製品(49)　陶磁器(31)　擂鉢
写真図版　82　第114次調査出土遺物(50)　土器・土製品(50)　陶磁器(32)　瀬戸・美濃・志野他
写真図版　83　第114次調査出土遺物(51)　土器・土製品(51)　陶磁器(33)　甕
写真図版　84　第114次調査出土遺物(52)　土器・土製品(52)　土師器皿(1)
写真図版　85　第114次調査出土遺物(53)　土器・土製品(53)　土師器皿(2)
写真図版　86　第114次調査出土遺物(54)　土器・土製品(54)　土師器鍋・焙烙・焼塩壺
写真図版　87　第114次調査出土遺物(55)　土器・土製品(55)　土師器火鉢・灯明皿・灯明台・こんろ他
写真図版　88　第114次調査出土遺物(56)　土器・土製品(56)　陶磁器(34)　白磁碗・近現代燭台・香炉・花瓶
写真図版　89　第114次調査出土遺物(57)　瓦・瓦製品(1)　鬼瓦(1)
写真図版　90　第114次調査出土遺物(58)　瓦・瓦製品(2)　鬼瓦(2)
写真図版　91　第114次調査出土遺物(59)　瓦・瓦製品(3)　鬼瓦(3)他
写真図版　92　第114次調査出土遺物(60)　瓦・瓦製品(4)　軒丸瓦(1)
写真図版　93　第114次調査出土遺物(61)　瓦・瓦製品(5)　軒丸瓦(2)
写真図版　94　第114次調査出土遺物(62)　瓦・瓦製品(6)　軒丸瓦(3)
写真図版　95　第114次調査出土遺物(63)　瓦・瓦製品(7)　軒丸瓦(4)・土管
写真図版　96　第114次調査出土遺物(64)　瓦・瓦製品(8)　軒丸瓦(5)・道具瓦
写真図版　97　第114次調査出土遺物(65)　瓦・瓦製品(9)　軒平瓦
写真図版　98　第114次調査出土遺物(66)　瓦・瓦製品(10)　丸瓦(1)
写真図版　99　第114次調査出土遺物(67)　瓦・瓦製品(11)　丸瓦(2)
写真図版　100　第114次調査出土遺物(68)　瓦・瓦製品(12)　丸瓦(3)
写真図版　101　第114次調査出土遺物(69)　瓦・瓦製品(13)　平瓦他
写真図版　102　第114次調査出土遺物(70)　瓦・瓦製品(14)　敷瓦・井戸瓦
写真図版　103　第114次調査出土遺物(71)　石製品(1)　墓石(1)
写真図版　104　第114次調査出土遺物(72)　石製品(2)　墓石(1)・石仏(1)他
写真図版　105　第114次調査出土遺物(73)　石製品(3)　石仏(2)
写真図版　106　第114次調査出土遺物(74)　石製品(4)　石仏(3)・一石五輪塔(1)
写真図版　107　第114次調査出土遺物(75)　石製品(5)　一石五輪塔(2)
写真図版　108　第114次調査出土遺物(76)　石製品(6)　一石五輪塔(3)

写真図版　109　第114次調査出土遺物(77)　石製品(7)　一石五輪塔(4)
写真図版　110　第114次調査出土遺物(78)　石製品(8)　一石五輪塔(5)
写真図版　111　第114次調査出土遺物(79)　石製品(9)　五輪塔(1)・石臼(1)
写真図版　112　第114次調査出土遺物(80)　石製品(10)　石臼(2)
写真図版　113　第114次調査出土遺物(81)　石製品(11)　硯・砥石
写真図版　114　第114次調査出土遺物(82)　金属製品(1)・骨製品　煙管・銅線・骨製品
写真図版　115　第114次調査出土遺物(83)　金属製品(2)　釘(1)
写真図版　116　第114次調査出土遺物(84)　金属製品(3)　釘(2)他
写真図版　117　第114次調査出土遺物(85)　金属製品(4)　釘(3)・鎌他
写真図版　118　第114次調査出土遺物(86)　金属製品(5)　毛抜き他
写真図版　119　第114次調査出土遺物(87)　金属製品(6)　把手・刀子他
写真図版　120　第114次調査出土遺物(88)　金属製品(7)　釘(4)・包丁他
写真図版　121　第114次調査出土遺物(89)　金属製品(8)　小柄他
写真図版　122　第114次調査出土遺物(90)　金属製品(9)　銅銭(1)
写真図版　123　第114次調査出土遺物(91)　金属製品(10)　銅銭(2)・鉄銭
写真図版　124　第114次調査出土遺物(92)　金属製品(11)　銅銭(3)
写真図版　125　第114次調査出土遺物(93)　金属製品(12)　銅銭(4)
写真図版　126　第114次調査出土遺物(94)　木製品(1)　箱棺(1)
写真図版　127　第114次調査出土遺物(95)　木製品(2)　箱棺(2)
写真図版　128　第114次調査出土遺物(96)　木製品(3)　桶棺(1)
写真図版　129　第114次調査出土遺物(97)　木製品(4)　桶棺(2)・箱棺(3)
写真図版　130　第114次調査出土遺物(98)　木製品(5)　木簡・数珠玉
写真図版　131　第114次調査出土遺物(99)　木製品(6)　漆製品　櫃・容器・箱
写真図版　132　第114次調査出土遺物(100)　木製品(7)　箱(1)
写真図版　133　第114次調査出土遺物(101)　木製品(8)　箱(2)・箸
写真図版　134　第114次調査出土遺物(102)　木製品(9)　棺台他
写真図版　135　第114次調査出土遺物(103)　木製品(10)　下駄・擂・縄他
写真図版　136　第114次調査出土遺物(104)　鉄滓・自然遺物他
写真図版　137　第150次調査地点空中写真　調査地遠景　1.西上空から　2.東上空から
写真図版　138　第150次調査遺構写真(1)　1.調査区全景(北西から)　2.調査区北半(東から)
写真図版　139　第150次調査遺構写真(2)　1.調査区北半(北から)　2.調査区南半(北から)　3.礎石建物跡(東から)
写真図版　140　第150次調査遺構写真(3)(上:水琴窟1検出状況(北から)　中:水琴窟1断割り状況(北から)　下:同上(北から))
写真図版　141　第150次調査遺構写真(4)　1.水琴窟2検出状況(北から)　2.便甕1・2検出状況(南から)　3.カマド検出状況(南から)
写真図版　142　第150次調査遺構写真(5)　1.石組遺構(北から)　2.SK4(南から)　3.SK62(南から)

写真図版　143　第150次調査遺構写真（６）（上：長方形焼土坑群（西から）　中：同断面（西から）　下：ＳＫ79（東から））
写真図版　144　第150次調査遺構写真（７）
写真図版　145　第150次調査出土遺物（１）　土師器・陶器
写真図版　146　第150次調査出土遺物（２）　陶磁器（１）・瓦
写真図版　147　第150次調査出土遺物（３）　陶磁器（２）
写真図版　148　第150次調査出土遺物（４）　陶磁器（３）
写真図版　149　第150次調査出土遺物（５）　陶磁器（４）
写真図版　150　第150次調査出土遺物（６）　陶磁器（５）
写真図版　151　第150次調査出土遺物（７）　陶磁器（６）
写真図版　152　伊丹郷町出土木製品の顕微鏡写真（１）
写真図版　153　伊丹郷町出土木製品の顕微鏡写真（２）

表　目　次

第１表　伊丹郷町災害史年表……13
第２表　光明寺墓地・墓石集成……14
第３表　光明寺墓地の墓碑の変遷……16
第４表　出土銭貨の初鋳年……57
第５表　六道銭の出土遺構と種類……58
第６表　伊丹郷町木製品樹種同定資料一覧……64
第７表　光明寺近世墓　人骨集成……71
第８表　土器・陶磁器・土製品属性表……76
第９表　瓦属性表　……91
第10表　石製品属性表……93
第11表　金属製品属性表……95
第12表　木製品属性表……99

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

今回、調査が実施された伊丹市宮ノ前地区では伊丹市が行う市街地再開発事業と並行して、兵庫県土木部西宮土木事務所が主管する都市計画道路伊丹飛行場線道路改良事業が計画されていた。

宮ノ前地区は、有岡城跡・伊丹郷町の中に存在するため、道路改良事業に伴い、過去３回にわたって、発掘調査が実施されている（第65次・84次・99次調査）。

今回の調査地点は土地買収の遅れに伴い調査が未着手となっていた部分について実施し、宮ノ前地区の西に１ヵ所（Ａ地区）、東に２ヵ所（Ｂ・Ｃ地区）の計３ヵ所の調査区について、第114次調査として、調査を実施した。

Ａ地区は平成３年度に調査を実施した第99次調査の継続地区であり、すでに既刊の『有岡城・伊丹郷町発掘調査報告書Ⅱ』で報告しているため、本報告書では記述を割愛した。

Ｂ地区は再開発に伴い移転した浄土宗光明寺と墓地の跡地にあたり、また、Ｃ地区はその東隣接地にあたっている。

Ｂ地区は、光明寺の移転に伴いすでに、伊丹市教育委員会が本堂の南部について発掘調査を実施しており、墓地についても伊丹市教育委員会と大手前女子大学（藤井直正研究室）が合同で墓碑調査を実施している。

また、Ｃ地区については、伊丹市美術館・柿衛文庫建設に伴い一部発掘調査が実施されている。

今回の調査（第114次調査）の実施に当たっては、伊丹市史などに掲載された古絵図の分析及び上記の既往の調査成果を参考として、調査計画を立て、調査を実施した。

2．調査の経過

（1）調査の方法

第114次調査は、Ａ地区154.8㎡、Ｂ地区396.7㎡、Ｃ地区367.5㎡の計919㎡について実施した。掘削は現在の家屋を解体整理する際に生じた整地盛土層を機械力で除去し、遺物包含層及び遺構の掘削は人力で行った。

図面は平面・断面図については1/20スケールのものを基本として作成したが、遺構の種類によっては、1/10・1/5スケールのものを適宜作成した。

写真は基本的には４×５判サイズのモノクロネガ及びカラーポジを撮影したが、補助として35㎜サイズのモノクロネガ・カラーネガ・カラーポジを併せて撮影した。

また、遺構全景写真については、足場写真の他、航空写真撮影を併せて行った。

（2）調査の目的

調査に当たっては、既往の調査成果、古絵図の分析などを基に、江戸時代の伊丹郷町の遺構面調査を中心に、更に下層の中世有岡城・伊丹氏城館関連の遺構面調査をも調査対象として実施した。

特にＢ地区においては、光明寺に残る光明寺縁起の整合性の確認を主眼に、縁起に記された元亀２年

（1571）の開基創建、天正２年（1574）の伽藍の完成、元禄15年（1702）の大火災と宝永８年（1711）の再建、明和年間（1765～66）の大火による類焼と天明８年（1782）の再建などメルクマールとなる事象についての発掘調査成果からの解明を主要な調査目的として、調査を実施した。

（３）調査成果の概要

①　Ｂ地区

Ｂ地区は前述した通り、光明寺の跡地にあたる。調査は寺堂、墓地、庫裏の跡地を対象に行い、庫裏を片づけた際のゴミ穴及び盛土を重機で除去する作業から開始した。

庫裏跡はゴミ穴と戦時中の防空壕で大部分が攪乱を受けていたが、江戸時代中期の築地塀の基礎が検出され、それを鍵層として遺構面を設定し、遺構面からは江戸時代中期の火災の際に作られた塵芥の廃棄土坑が数多く検出された。

また、下層では古墳時代後期の須恵器を含む柱穴と溝が検出され、当該地区に僅かに残された古代の遺構を調査することができた。

墓地跡の調査はまず、伊丹市教育委員会と大手前女子大学が合同で行った墓碑調査の成果に基づき調査直前の墓地の復元から開始したが、墓地改葬後に盛土を行った際、かなりの部分で破壊が進み、十分に復元できなかった。

本格的な発掘調査は江戸時代後期の墓地跡から開始した。

墓は事前調査、発掘調査を通じて、現代～江戸時代後期の近・現代墓が89基、江戸時代後期～江戸時代前期の近世墓が150基存在していたことが明らかになった。

調査直前の墓地の配置については、前述した事前調査から、石敷道が寺本堂から墓の入口（門）を通り、墓地中央部の檀家総代家の墓前を経て、東奥の歴代住職の墓に至っていたことが判明している。

近世墓の調査にあたっては、この石敷道の上面と同一レベルにある面を墓の最上層の掘り込み面と想定して調査を開始した。

調査の結果、近世墓は埋葬形態の違いから土葬墓と火葬墓に大別される。

土葬墓に使用された棺は木製の箱棺・桶棺が大部分を占めるが、陶器製の大型の甕も僅かではあるが検出されている。また、土葬墓には副葬品が多く伴っており、その種類も数珠、茶箱、茶道具、土鈴、玩具、煙管など多種多様で、被葬者の生前の生活を彷彿とさせる興味深い資料を提供している。

火葬墓に使用された蔵骨器は火消壺の転用もしくは火消壺形を呈するものが最も多いが、他に丹波焼壺・甕、施釉陶器の土瓶・急須を転用したもの、白磁壺などがあり、その多くは蓋を伴った状態で検出されている。

また、火葬墓は家族墓もしくは同族墓と考えられ、同一の墓壙内から複数の骨壺が検出された例が多い。

土葬墓、火葬墓を通じて、墓の埋葬時期を決定する上で重要な要素となる紀年銘をもつ墓石も寛文６年（1666）と宝暦７年（1757）銘の２例が出土しており、このことから、少なくとも江戸時代前半の17世紀中葉にはすでに墓地が形成されていたことがわかる。

その後、江戸時代中期に相次で発生した宝暦、明和の大火後の伽藍再建の際、大きく改葬されており、火災の際生じた塵芥を捨てた廃棄土坑が多数掘削され、墓壙が破壊されているのが確認された。これらの

結果から、現存の墓地は天明年間以降に再整備されたことが窺える。

また、出土人骨については京都大学霊長類研究所の片山一道教授に鑑定を依頼し、その結果、3～4歳の幼児から老齢の骨格の大きい男性人骨を含む60体について鑑定結果を頂いた。

② C地区

C地区では近代～中世に及ぶ合計5面の遺構面を検出し、調査を実施した。

第1面は幕末～近代の生活面である。ここでは、大正4年の地籍図を参考に建物配置の復元を試みた

その結果、西側に防空壕と池を配し、東側の泉通りに面して礎石立ちの母屋（SB01）を配する屋敷が復元できた。この屋敷地と南隣の屋敷地との境界は、江戸時代末期から存在する石組溝で区画されていることが確認できた。また、屋敷地の内部では井戸やレンガ積みの竈が検出されている。

第2・3面では江戸時代中期～後期の酒蔵及び酒造関連の遺構が数多く発見されている。

当該地点については宝暦7年（1757）付けの伊丹の酒造家樽屋利兵衛が発給した土地売買に関する文書が残っており、検出された遺構群は文書からこの綛屋四郎三郎の酒造施設であったことがうかがわれる。

検出された主な遺構には酒造用竈、酒造用井戸の他、酒を絞る「阿弥陀車」などがある。

第4面では元禄の大火以前の遺構群が多く発見されている。検出された遺構群の中で出土層位から最も時代が遡ると考えられるものには、江戸時代初頭の遺物を含む火災層の下で検出された掘立柱建物があり、有岡城時代の遺構と考えられる。また、江戸時代前期の鍛冶遺構も検出されており、中から碗形鉄滓や炉壁が出土している。これらの遺構群の存在から、酒蔵が建設される以前の中世末～近世前期の土地利用の状況が部分的ではあるが、ある程度明らかになっている。

第5面では12世紀～15世紀代の溝で区画された屋敷地と12世紀後半～13世紀前半代の華南産白磁碗を副葬する墓が検出されている。これは、一連の有岡城・伊丹郷町関連の調査では事例の乏しい伊丹氏以前の状況を示すものとして注目される遺構群である。

以上述べてきたように、B・Cの2地区の調査を通じて当該調査地における中世前期から近代に至る土地利用の変遷がある程度明らかになった。

特にB地区で調査された光明寺近世墓は従来、有岡城・伊丹郷町関係の調査では事例の少ない近世墓地がある程度まとまって調査された数少ない事例であり、出土した棺、蔵骨器、副葬品、人骨など、近世墓の実態を考える上で貴重な資料を提供した。

また、C地区で検出された綛屋関連の酒造遺構は、少なくとも江戸時代中期にまで遡るものであり、「日本名所図絵」などの文献史料に記載された内容を考古学的方法で検証しうるものとして注目に値する資料である。

3. 調査体制

（1） 発掘調査の体制

発掘調査は兵庫県土木部西宮土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下の通りである。

調査期間　平成４年７月27日～平成５年１月14日

調査面積　919㎡

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

	所　長		池水　義輝
	副所長		渡邉　清　（事務担当）
			三木　正則（土木担当）
	主任調査専門員		大村　敬通
	総　務　課	課　　長	石井　守・主査　津守　芳輝
	企画調整班	調査専門員	池田　正男　主査　水口　富夫
	調査第２班	調査専門員	輔老　拓治
調査担当者	調査第２班	主　　査	岡崎正雄　　主任　西口　圭介

（2） 整理調査の体制

整理調査は兵庫県土木部西宮土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が主体となり、埋蔵文化財調査事務所で、平成９年度～11年度の３カ年に渡って行った。年度毎の体制及び作業内容は以下の通りである。

平成９年度　作業内容　ネーミング、接合補強、実測・拓本、復元、金属製品・木製品の保存処理
担当職員　岡崎　正雄・西口　圭介・加古　千恵子（金属器保存処理担当）・中村　弘（木製品保存処理担当）

平成10年度　作業内容 写真撮影、写真整理、遺構図補正、トレース
担当職員　岡崎　正雄・西口　圭介

平成11年度　作業内容 レイアウト、分析鑑定、報告書印刷
担当職員　岡崎　正雄・西口　圭介・岡田　章一・菱田 淳子・長濱　誠司・松岡 千寿・長谷川 眞（県民生活部芸術文化課）

平成９年度～11年度の整理担当嘱託員
宮田　麻子・板東　明子・岸野　奈津子・本窪田　英子・小山　みゆき・八木　和子・松本　睦・岡田　美穂・綾小路　公子・萩原　聡美・山口　幸恵・中西　睦子・島村　順子・栗山　美奈

4．調査日誌抄

平成４年７月14日（火）本日から発掘調査開始。浜田組及び西宮土木事務所伊丹出張所と現地立会。

平成４年７月20日（月）Ａ地区の調査について浜田組、下請け安西工業と打合せを現地で行う。

平成４年７月22日（水）監督員詰所が設置される。

平成４年７月27日（月）Ｂ地区の光明寺墓地について、伊丹市教育委員会小長谷氏と大手前女子大学藤井直正教授から情報の提供・教示を戴く。Ａ地区では地形測量から調査を始める。

平成４年７月29日（水）Ｂ地区の墓地の塀の土台石組みを除去し、立入り防止柵を設置する。

平成４年７月30日（木）Ｃ地区の立入り防止柵を設置する。

平成４年７月31日（金）Ｂ地区は機械掘削を開始し、客土・表土層を除去する。

平成４年８月４日（火）Ｂ地区でサブトレンチを設定し、遺構の状況と土層堆積状況を把握する。

平成４年８月10日（月）Ｂ地区サブトレンチの平板実測を開始する。

平成４年８月11日（火）Ｂ地区サブトレンチ南壁の土層堆積状況を検討する。

平成４年８月12日（水）Ｂ地区サブトレンチ南壁の土層図を作成。明日からお盆休み。

平成４年８月17日（月）作業を再開する。

平成４年８月18日（火）19日（水）の両日台風のため作業は中止。室内で図面等の整理を行う。

平成４年８月20日（木）台風の後片付けから作業を再開し、Ｂ地区は土層図の作成。

平成４年８月27日（木）Ｂ地区で人力掘削のためにベルトコンベヤーを設置。

平成４年８月28日（金）Ｂ地区は調査を本格的に開始する。

平成４年８月31日（月）Ｂ地区は遺構面の検出を急ぐ。

平成４年９月１日（火）Ｂ地区で未改葬の骨壺を発見し、光明寺に供養後引き取って貰う。

平成４年９月２日（火）墓地遺構の調査を継続する。

平成４年９月７日（月）県教育委員会社会教育・文化財課岸本氏が現地立会及び指導に来られる。

平成４年９月９日（水）墓地遺構と寺の全景写真（第１面）を撮る。

平成４年９月10日（木）墓地遺構（第１面）の平板測量を行う。

平成４年９月11日（金）墓地遺構平板測量図を補正する。

平成４年９月17日（木）墓地・寺地境界の石列の実測。

平成４年９月18日（金）墓地より西攪乱土坑の掘削を行う。

平成４年９月21日（月）Ｂ地区の第２面遺構（西部）検出面の写真撮影。石列溝を実測し、五輪塔他の細部調査を行う。なお、西宮土木事務所伊丹出張所とＣ・Ｄ・Ｅ地区の調査について打合せを行い、通路と通用道の確保のために調査方針を検討することになる。

平成４年９月22日（火）Ｂ地区第２面遺構面（東部）を検出。

平成４年９月25日（金）雨中、石列溝の遺構図を完成させる。

平成４年10月５日（月）寺本堂基壇北石列断面図作成。墓地遺構の蔵骨壺群の写真撮影を続ける。

平成４年10月７日（水）蔵骨壺群の位置を平板測量で作図する。

平成４年10月10日（土）Ｂ地区第２面遺構全体写真撮影の準備を行う。平板にて遺構配置図の補足を行う。

平成４年10月12日（月）Ｂ地区第１回航空写真撮影を行い、撮影後に東部遺構平板測量図を完成させる。蔵骨器の細部実測を開始する。

平成４年10月13日（火）Ｂ地区第３面遺構の検出を開始する。大手前女子大学藤井教授が来訪され、光明寺墓地形成について種々の教示を戴く。

平成４年10月14日（水）小雨の中、墓の遺構実測を継続する。埋蔵文化財調査事務所の池田企画調整班長が来訪され、調査の進捗状況と遺構等について検討を行った。

平成４年10月19日（月）久しぶりの暑さの中、骨壺の実測と西部遺構（SDO2，SK02，SK60，SK69他）の土層図を作成。

平成４年10月20日（火）Ｂ地区第３面西部遺構の平板測量図を作成し、寺の築地塀の断面図を作成する。骨壺の実測と取り上げを繰り返す。

平成４年10月21日（水）土坑の土層断面図を作成する。

平成４年10月22日（木）火災片付け土坑の土層堆積図を作成する。

平成４年10月23日（金）遺構断面図を作成する。骨壺は平面図と断面図とを組合せ、図面完成後に取り上げを行う。

平成４年10月26日（月）Ｂ地区東の粘土取り穴の堆積土層の掘削を行い、多くの木製品を発見して取り上げを行う。下駄・箸等と瓦・陶磁器類が共伴しており、18世紀後半と考えられる。

平成４年10月27日（水）Ｂ地区の箱棺SX118の人骨と新たな箱棺を調査する。社会教育・文化財課岸本氏が現地立会で来られる。

平成４年10月28日（水）Ｂ地区第２回航空写真撮影を行う。陝西省社会科学院王副所長と李三槐氏が現場を見学される。光明寺と猪名野神社も見学される。

平成４年10月29日（木）Ｂ地区遺構の部分写真撮影を行う。遺構実測も継続する。

平成４年10月30日（金）雨のため、室内で写真等の整理を行う。

平成４年11月２日（月）Ｂ地区遺構実測を続ける。Ｃ地区のトレンチ断面精査を行う。

平成４年11月４日（水）Ｂ地区は第２回中間工事検査を受ける。

平成４年11月５日（木）Ｂ地区は石敷遺構等の実測を行う。

平成４年11月６日（金）小雨の中Ｂ地区SX118の人骨の取り上げを行う。

平成４年11月10日（火）Ｃ地区にベルトコンベアーを設置する。

平成４年11月11日（水）Ｃ地区第１面の掘削を開始する。Ｂ地区は東壁の土層図作成とSX226の実測と人骨の取り上げを行う。

平成４年11月12日（木）Ｃ地区第１面の掘削を継続する。Ｂ地区は下層遺構の実測を行う。

平成４年11月16日（月）Ｃ地区第１面遺構図（西部）を平板にて作成する。

平成４年11月17日（火）Ｃ地区第１面遺構図（東部）を平板にて作成する。

平成４年11月18日（水）Ｃ地区第１回航空写真撮影を行う。

平成４年11月19日（木）Ｂ地区は石敷の実測図を完成させる。築地下の断面図の作成も行う。また、旧

本堂下の礎石下層の土層図を作成する。

平成４年11月24日（火）Ｃ地区は遺物の取り上げを行う。

平成４年11月25日（水）Ｂ地区は最下層溝出土の土師器皿の図面を作成。Ｃ地区は遺構細部写真撮影後に池SX01，SX02他の遺構断面図を作成する。

平成４年11月26日（木）Ｂ地区は最下層溝出土の土師器皿を取り上げる。

平成４年11月27日（金）Ｃ地区の瓦管・防空壕・礎石などの図面を作成する。

平成４年11月30日（月）Ｂ地区は南壁土層断面図を作成。Ｃ地区はSK18他の遺構の断ち割りを行う。

平成４年12月２日（水）Ｂ地区はSX66断ち割り土層図を作成する。Ｃ地区はサブトレンチや遺構の断面図を作成する。

平成４年12月３日（木）Ｃ地区は第２面の遺構検出を急ぐ。Ｂ地区出土骨壺の人骨整理を始める。

平成４年12月７日（月）雨で作業は中止。人骨整理を続ける。県立歴史博物館の岡田章一学芸員が近世陶磁器を見学。

平成４年12月８日（火）小雨の中、Ｂ地区SX216の棺内の竹製品の写真撮影と実測を行う。京都大学理学部人類学研究室の片山一道教授に依頼して、人骨の鑑定を始める。

平成４年12月９日（水）Ｃ地区は第２面遺構の検出状況を平板にて図を作成する。片山教授との人骨整理を継続する。

平成４年12月10日（木）大雨。陶芸家正田氏一行が陶磁器を見学される。

平成４年12月11日（金）Ｃ地区第２面遺構検出状況図のレベルを完成させる。

平成４年12月14日（月）寒さが厳しい。Ｃ地区の第２面遺構を掘削する。

平成４年12月15日（火）Ｃ地区は第２面遺構掘削と土層図作成に追われる。

平成４年12月16日（水）Ｃ地区で第２回目となる航空写真撮影を行う。

平成４年12月17日（木）久しぶりの暖かい調査日。遺構の土層断面図の作成。

平成４年12月18日（金）荒田の調査事務所から整理普及班長他が見学に来られる。

平成４年12月21日（月）Ｃ地区は遺構のレベルを補足する。Ｂ地区は南・西壁の土層を検討しながら全ての実測を完了する。

平成４年12月22日（火）Ｃ地区は第３面の遺構面を検出する。調査工事について現場で輔老班長、企画調整班種定主任と工程会議を行い、年末年始の予定を決める。

平成４年12月24日（木）Ｃ地区で竈９、SK62他の遺構実測を行う。第３面遺構状況図を平板にて作成する。

平成４年12月25日（金）Ｃ地区で第３回航空写真撮影を行う。後、全景写真を撮り、遺構図の作成を開始する。また、年末年始の安全対策について浜田組と協議し、正月明けの調査再開までの遺構の保全に努めるよう打ち合せを行う。

平成５年１月５日（火）Ｃ地区の調査を再開する。遺構実測。

平成５年１月６日（水）遺構実測を継続する。竈の図化を急ぐ。

平成５年１月７日（木）小雨の中、遺構のレベルをとる。

平成５年１月８日（金）遺構の実測・レベル、遺物の取り上げを暗くなるまで繰り返す。

平成５年１月11日（月）Ｃ地区第３面遺構の断ち割りと一部第４面遺構の検出を行う。壁の土層図の再

検討を行う。火災焼土面と火災片付け層の確認を四周の壁で復元する。

平成５年１月12日（火）Ｃ地区第４面遺構の掘削と実測図化と写真撮影を行う。

平成５年１月13日（水）Ｃ地区は壁土層図の作成。

平成５年１月14日（木）雨の中、第３回工事中間検査を終了し、調査を一応終了する。

Ⅱ．遺跡をとりまく環境

1．伊丹城・有岡城の沿革

（1）伊丹城と伊丹氏

伊丹城の名が文献上で確認されるのは、南北朝の動乱期の文和２年（1353）伊丹氏の一族であった森本左衛門次郎基長の軍忠状に現れるのが初現である。

この伊丹城を居城とした伊丹氏は平安時代末期から伊丹を本拠とした武士で、文治２年（1186）年、関東下文を拝領した加藤右馬允親俊の孫親元が伊丹右馬入道と称したのが伊丹氏を称するはじめとされている。伊丹氏の行動が史料的に確認できるのは親元の孫親盛の名が正和４年（1315）の『離宮八幡宮文書』に見えるのが最初である。親盛以後の南北朝期の伊丹氏の動静は伊丹氏の庶流森本氏に伝わり、江戸時代後期に水戸藩の彰考館で写し取られた『北河原森本文書』及び東京大学史料編纂所に所蔵されている『北河原氏家蔵文書』などから窺うことができる。

これらの史料によると、伊丹氏は細川頼氏、畠山国清、赤松光範、土岐頼康、佐々木高秀と次々に主家を変え、南北朝の動乱期を巧みに生き延び、やがて細川管領家が摂津守護になるとその被官となる。

応仁元年（1467）に幕府を支える有力守護の一つであった畠山氏の内訌を契機として勃発した応仁・文明の大乱はやがて全国的な争乱へと発展するが、この乱に際して、伊丹氏をはじめとする主だった摂津の国人は西上してきた西軍の大内政弘の軍門に一時的に降り、摂津の政治情勢は混迷の度を加える事になる。

やがて、文明11年（1479）、大内政弘が本拠の周防に帰還すると、伊丹氏をはじめとする国人層はまた細川氏の被官に復帰し、摂津の政治情勢は安定をとりもどす。

管領細川政元が暗殺された後、細川管領家に、その跡目をめぐって２派に分かれての内紛が生じると、伊丹氏もその内紛に巻き込まれ、元扶、国扶などが戦死し、その間に、伊丹城も２度落城したことが史書の記載からわかる。

永禄11年（1568）、天下布武を目指す織田信長が摂津に侵攻すると、伊丹城の伊丹親興はいち早くこれに応じ、三好三人衆（三好長逸・三好政康・岩成友通）を攻め、その功により伊丹城を安堵されている。

天正２年（1574）、信長の家臣荒木村重は伊丹城を攻めて、伊丹親興を追い、伊丹城を有岡城と名付けてその城主となった。

（2）有岡城と荒木村重

有岡城に入った村重は城に大規模な改修を加え、強固な「惣構え」の城を完成させた。

村重によって改修された有岡城は摂津を手中に収めた荒木氏の居城に相応しく、より強固なものに改められ、惣構えは南北1.7km、東西0.8kmに及び、その内側は大きく、主郭（城郭）部、内郭部、外郭部の３部分から構成されていた。

主郭は伊丹台地の東縁断崖上にあり、その外側に内郭と外郭が大溝筋で区画されて、防御帯として主郭を取りまいていた。内郭には侍屋敷が配置され、外郭には要所に岸・女郎塚・鵜塚の３つの砦が置か

れ、また寺院などを配した町場が形成され、堅固な城塞を形作っていた。

天正６年（1578）、村重は本願寺及び毛利氏と結び、有岡城に籠もって信長に反旗を翻した。驚いた信長は、家臣の滝川一益、丹羽長秀、明智光秀に命じて、有岡城を攻撃させたが、城は容易に落城せず、10カ月にも及ぶ籠城の後、ついに、翌天正７年（1579）11月に落城した。

落城の直前、村重は妻子を捨てて、尼崎城へ逃亡する。残された村重の妻子31人は捕らえられ、京都六条河原で処刑された。

落城後の有岡城は、羽柴秀吉の手によって、４年後の天正11年（1583）廃城となり、堅塁を誇った有岡城も村重の改修後僅か９年でその歴史を閉じた。

その後、伊丹の地には再び城が築かれることはなく、「惣構え」の構造は近世の伊丹郷町へと引き継がれることになる。

２．伊丹郷町

（１）伊丹郷町の成立と発展

摂津国川辺郡伊丹村は文禄年間（1592～96）にはすでに15町からなる町場になっていた。

江戸時代になって、この町に酒造業が発展すると、町場はさらに拡大し、寛文年間（1661～73）には古い町15町に加えて、北之口町・鍛冶屋町が増え、元禄年間（1688～1704）にはさらに湊町・大手町・住吉町・常磐町・天王町・扇子町ができて町数は合計24町となっている。その後正徳年間（1711～16）に橘町と宮崎町が生まれ、また享保年間（1716～36）には戎町ができて、伊丹村は27町からなる町場へと発展した。

この町場の周囲には北少路村、昆陽口村など14カ 村が隣接していたが、酒造業の発展に伴って、隣接14カ村は次第に町場に組み込まれ、18世紀前半には伊丹郷町として一体化し、現在の伊丹郷町の原形が形作られることになる。

当時の状況の詳細は元禄５年～宝永元年（1692～1704）に、伊丹郷町の８カ村（北少路・昆陽口・北中少路・南中少路・高畑・新野田・外城・外崎）を領有した幕府側用人柳沢吉保の領村の状況を描いた柳沢吉保絵図から窺うことができる。それによると、領民のうち農民の占める割合は１割５分程度で、他は商人、職人、雑業となっており、郷村と言うより、商工業人口の比率の高い郷町の名に相応しい職業比率を示している。

（２）酒造業の発展

伊丹における酒造はすでに江戸時代以前の文禄・慶長年間から始まっており、急速に発展する江戸を市場とする江戸積酒の産地として発展して行く。

伊丹の酒造業発展の要因としては、従来の酒造りが、酒を年に何度も少しづつ仕込む方法で行われていたのに対して、寛文10年（1670）に、幕府より、寒造り集中の方向に仕込むよう指示が出され、伊丹の酒造業がすでにこの幕府の指導の誘因をなす技術を開拓したことがあげられる。

伊丹の酒造業は元禄期には最盛期を迎え、元禄８年（1695）年刊行の『本朝食鑑』には江戸を市場とする江戸積酒の銘醸酒として伊丹酒があげられている。

江戸積酒造業はその後も、伊丹の主要産業として継続され、江戸時代中頃の正徳５年（1715）には酒

造家72軒、酒造株数103株、株高６万石を記録し、元文５年（1740）には、伊丹酒は将軍の御膳酒となり、「丹醸」として歓迎されている。

しかし、江戸時代中期の享保16年（1731）に米価の引き上げを目的として、幕府が従来の酒造統制策を転換して、酒造奨励策とるようになると、新興の西摂の海岸地帯の灘目と呼ばれる地域を中心とする灘の酒造業が台頭してくる。

灘の酒造業はその後ますます発展し、18世紀後半には伊丹、池田を圧倒するようになる。

このように、伊丹の酒造業は18世紀後半以降も現在に至るまで継続するものの、江戸積酒の主要産地としての地位は完全に灘に奪われ、「灘の生一本」と呼ばれる銘酒と共に、灘がわが国を代表する酒造地帯となって、今日に至っている。

（３）近代以降の伊丹郷町

明治になると、江戸時代以来、酒造株制度で統制されていた酒造業は大きく変貌し、新たに酒造鑑札制度が導入され、増税と酒造業再編の動きの中で伊丹の酒造業は決定的な打撃を被る。

一方、灘五郷は対象的に、一時的に生産量は激減するが、明治15年には明治４年の造石高の２倍にまで回復し、伊丹との差は更に大きくなった。

このような酒造業の衰退に伴い、酒造業にかわって、伊丹にはランプ、綿ネル、マッチなどの近代工業が移植されて、伊丹の産業構造は大きく変化してゆく。

一方、産業を支える交通機関の発展を見ると、明治24年には尼崎伊丹間に川辺馬車鉄道が開通し、更に明治37年には大阪舞鶴間を結ぶ、福知山線の前身である阪鶴鉄道が開通する。その後、大正６ 年塚口－伊丹間に阪急電鉄伊丹線が開通すると、伊丹は大阪市の近郊住宅都市の一つとして脱皮し、伊丹台地上の住宅化が促進された。また、福知山線の開業を契機に国鉄伊丹駅付近の沖積地には大正から昭和にかけて、東洋リノリューム、フジコー、日東紡績、日本圧延、大阪機工、台地上には住友電工、ミノルタカメラなどが相次いで進出し、工業都市化が進み、第２次世界大戦を迎えることになる。

このように、酒造業を中心に近世を通じて発展してきた伊丹は明治維新を契機に大きく変貌し、工業都市、あるいは住宅都市へとその性格を変えて行くことになる。

３、光明寺の沿革と墓碑調査

今回、Ｂ地区の調査の対象地となった光明寺は正式には浄土宗摂取山遍照院光明寺と称し、現在、川辺西国観世音霊場33所の第32番札所となっている。

寺伝によれば、この寺の創建は荒木村重が入城する３年前の元亀２年（1571）にまで遡り、開祖は百万遍知恩寺門跡玉春上人とされている。

その後、寺は元禄15年（1702）、明和２年（1765）の２度にわたって類焼し、現在の堂宇は天明２年（1782）に中興純誉上人が再建したものとされている。

昭和54年の兵庫県近世社寺建築緊急調査表によると、光明寺は本堂〔天明２年（1782）建立の木造平屋建瓦葺入母屋造桁行８間　65.83坪〕、山門〔同左〕、庫裏〔同左〕と離れ〔昭和32年（1957）建築の木造平屋建入母屋造18坪〕及び墓地とで構成されている。境内には笠塔婆塔身（鎌倉時代前期）、俳人池田宗旦（也雲軒）墓碑（元禄６年）などがある。

光明寺墓地の墓碑については、伊丹市教育委員会と大手前女子大学の合同調査が行われている。

その結果、墓地内にあった建立時期が分かる墓碑は江戸時代前期の慶安年間（1648～1651）から昭和年間（1926～1988）までのものを含む109基に上っている。

これらの中で明治から昭和建立の近・現代のものを除く江戸時代のものに限ると、元禄の大火後の宝永（1711～1715）～享保年間（1716～1735）建立のものが計14基あって最も多く、次いで大火直前の元禄年間建立の７基が続いている。

また、明和２年（1765）の大火以降、堂宇が再建される天明２年までの安永（1774～1780）～天明年間（1781～1788）建立のものは計５基となっている。

更に、元禄の大火以前の慶安～元禄年間建立のものが18基、元禄の大火以降、明和の大火までに建立されたものが27基、明和の大火以降、明治初年までに建立されたものが33基あって、明和以降のものが最も多い。慶安～元禄年間は58年、宝永～明和年間は70年、安永～慶応年間は88年で、それぞれの時期の１年間の建立数を計算すると、慶安～元禄年間は0.3基、宝永～明和年間は0.38基、安永～慶応年間は0.375基で約２～３年に１基の割合で建立が行われている。

これを、元禄大火の直後の宝永年間の年平均建立数0.5基、明和大火後の安永から天明年間の年平均建立数0.57基と比べると、建立基数は大火後が平年と比べると1.6倍から２倍となっており、大火後改葬が行われて、墓が新造されたことが窺われる。

以上のことから、この近世墓については次のように言うことができよう。

すなわち、光明寺墓地は、少なくとも17世紀中頃には形成され、伊丹の酒造業が最盛期を迎える元禄年間には、その建立基数の一つのピークを迎える。

しかし、元禄の大火によって大きな被害を受け、その復興が行われる宝永年間に大きく改葬されている。

その後、明和２年の被災を経て、天明の堂宇再建期に再び改葬され、その後、大きな改葬を受けることなく、現在に至っている。

注

1. 兵庫県史編集専門委員会　1978年『兵庫県史』第３巻　兵庫県
2. 兵庫県史編集専門委員会　1980年『兵庫県史』第４巻　兵庫県
3. 伊丹市史編纂専門委員会　1972年『伊丹市史』第３巻　伊丹市
4. 兵庫県大百科事典刊行委員会　1983年『兵庫県大百科事典』神戸新聞出版センター
5. 小長谷正治・川口宏海　1996年「伊丹郷町の酒造業」『関西近世考古学研究』Ⅳ　関西近世考古学研究会

第１表　伊丹郷町災害史年表　　△は墓碑の紀年銘

西　　暦	年　号	事　　項	光明寺関連事項
1180	治承４	「山槐記」に伊多美武者所の名が見える。	
1303	嘉元元	多田神社文書「田地寄進状」に「伊丹」の地名初見。	
1353	文和２	「伊丹城」の名が初めて古文書に見える。	
1520	永正17	伊丹城は一旦落城するが「細川両家記」によれば、「惣構え」の先駆的形態が見られる。	
1533	天文２	一向一揆の猛攻に耐える。	
1549	天文18	三好長慶の勢力に抗し、難攻不落の城の名声を得る。（「細川両家記」）	
1568	永禄11	伊丹城最後の城主伊丹親興は織田信長が入京すると信長方につき摂津三守護と呼ばれる。	
1571	元亀２		摂取山遍照院光明寺開創。
1574	天正２	荒木村重が伊丹親興を破って伊丹に入城し、有岡城と改める。	
1578	天正６	村重が信長に反旗を翻し、信長軍によって有岡城は落城。	
1592～1595	文禄年間	この頃、藁屋町・柴屋町・魚屋町・材木町・中之町・竹屋町・鍋屋町・柳町・井筒町・米屋町・紺屋町・裏屋町・新町・南町・無足町の各町あり。	
1596～1614	慶長年間		
1615～1623	元和年間		
1624～1643	寛永年間		
1644～1647	正保年間		
1648～1654	慶安年間		△1651（慶安４）
1655～1657	明暦年間		
1658～1660	万治年間		
1661～1672	寛文年間	この頃までに、北ノ町・鍛冶屋町ができる。	△1662（寛文２）他
1675	延宝２	福円寺焼ける。	△1676（延宝４）他
1677	延宝５	家数、昆陽村61、北少路村76、中少路村18、外崎村18、外城村19、高畑村12。	
1684	貞享元	万徳寺堂宇焼ける。	△1684（貞享元）
1688～1703	元禄年間	この頃までに、常磐町・天王町・扇子町・湊町・大手町・境町・住吉（袋）町できる。	△1691（元禄４）他
1688	元禄元	井筒町から出火し、160軒が焼ける。	
1690	元禄３	無足町を伊勢町と改名する。	
1699	元禄12	天王町から札ノ辻まで酒家16軒などが焼け、飛び火して下市場も焼ける。万徳寺堂宇再び焼ける。	
1702	元禄15	中少路村から北ノ口町へかけて439軒が焼ける。	
1704～1710	宝永年間		△1705（宝永２）他
1711～1715	正徳年間	宮崎町・橘（鰻）町できる。	△1705（正徳元）他
1712	正徳２	吹家飛び火で鰻町焼ける。	
1716～1736	享保年間	戎町できる。	△1718（享保３）他
1729	享保14	北少路村西裏から出火し、80軒が焼ける。	
1740	元文５	洪水で外崎村・下市場村が流失し、井手堤160軒が川床となる	△1739（元文４）他
1741～1743	寛保年間		△1743（寛保元）
1746	延享３	外崎村・高畑村・外城村などの川成・砂入地が復旧される。	△1744（延享元）
1748	寛延元	大手町鍋屋宗兵衛および植松庄右衛門の酒蔵が焼ける。	△1749（寛延元）
	宝暦７	法専寺焼ける。	△1753（宝暦３）
1757	宝暦９	北少路村から出火し、13軒が焼ける。	△1764（明和元）
1759	明和２	北少路村から出火し、６軒が焼ける。	伊丹大火にて光明寺類焼。
1765	明和３	戎町から出火し、６軒が焼ける。	
1766	安永元	大風で野宮ノ向井の立木75株倒れる。	
1774	天明２		△1775（安永２）他
1782			光明寺中興純誉春賚上人が堂宇を再建する。△1782（天明２）他
1792	寛政４	綿屋町鍋屋源左衛門の醤油蔵２棟が焼ける。	△1764（寛政元）他
1801～1803	享和年間		
1812	文化９	南中少路村・北中少路村で火災あり。	△1816（文化13）
1816	文化13	野宮御供所から出火し、３人が死ぬ。	
1818～1829	文政年間		△1819（文政２）他
1830～1843	天保年間		△1830（天保元）他
1844～1847	弘化年間		
1848～1853	嘉永年間		△1848（嘉永元）
1854～1859	安政年間		△1855（安政元）他
1860	万延元		△1860（万延元）
1861～1863	文久年間		△1863（文久元）
1864	元治元		
1866	慶応２	大洪水で古城下の堤が切れる。	△1865（慶応元）
1868	明治元		△1874（明治７）他
1991	平成２	光明寺墓地改葬	△1917（昭和13）他

矢島恭仁雄氏の伊丹郷町災害史年表（「有岡庄年代秘記」から抜粋）

第２表　光明寺墓地・墓石集成(1)

＊備考欄年号は卒年

No.	西暦	年号	備考
1			16世
2	1965	昭和40	17世入寂
3	1973	昭和48	18世入寂
4			
5			
6			
7			
8	1718	享保３	台石
9	1701	元禄14	台石
10	1731	享保16	台石は1713（正徳３）７世
11	1740	元文５	1719（享保４）
12			
13			
14	1942	昭和17	建之
15	1943	昭和18	建之
16	1943	昭和18	建之
17	1958	昭和33	建之
18	1858	安政５	吉兵衛
19	1956	昭和31	建之
20	1970	昭和45	建之
21	1978	昭和53	木製
22	1965	昭和40	建之
23	1978	昭和53	
24	1964	昭和39	
25			地蔵立像
26			
27			
28	1940	昭和15	
29	1753	宝暦３	卒・1746（延享３）卒
30	1875	明治８	造立
31	1816	文化13	
32			
33	1887	明治20	寂
34	1858	安政５	建之
35	1938	昭和13	建之
36	1878	明治11	建立之
37	1776	安永５	＊蔵骨器確認
38	1848	嘉永元	建之　＊蔵骨器確認
39	1797	寛政９	
40	1830	文政13	
41	1784	天明４	
42			
43			五輪の水輪
44	1975	昭和50	地蔵信者一同
45	1821	文政４	
46			
47	1958	昭和33	建立
48			
49	1735	享保20	
50	1819	文政２	再建立
51			
52	1739	元文４	
53	1917	大正６	建立
54			
55			＊蔵骨器確認
56			＊蔵骨器確認
57	1874	明治７	1824（文政７）
58			
59			寛文9，10・宝永２
60			
61	1834	天保５	建立
62	1925	昭和14	建立
63	1973	昭和48	建之
64			
65	1743	寛保３	
66	1782	天明２	1752（宝暦２）
67	1720	享保５	
68	1956	昭和31	建之
69	1749	寛延２	1746（延享３）
70	1951	昭和26	
71	1758	宝暦８	1694，1697（元禄7，10）
72			
73	1744	寛保４	1729（享保14）
74	1829	文政12	
75	1725	享保10	＊蔵骨器確認
76	1975	昭和55	建立
77			＊蔵骨器確認
78	1764	明和元	
79			五輪塔
80			石仏地蔵
81			台座のみ
82	1816	文化13	建之
83	1899	明治32	1860，1858，1856建立
84			
85			
86			
87	1682	天和２	1662（寛文２）
88			石仏地蔵
89	1711	正徳元	
90	1709	宝永６	天保２（1831）
91			
92			
93	1698	元禄11	1693（元禄６）
94			＊蔵骨器確認
95	1705	宝永２	1677（延宝５）
96	1724	享保９	地蔵立像
97			
98			＊蔵骨器確認
99	1980	昭和55	木製
100	1981	昭和56	建立，1944（昭和19）
101	1980	昭和55	
102	1691	元禄４	
103	1684	貞享元	1651（慶安４）
104	1676	延宝４	1678，1681，1684，1694
105	1784	天明４	建立
106			地蔵
107	1789	天明９	
108	1968	昭和43	建立
109	1948	昭和23	建立
110	1863	文久３	
111	1740	元文５	1711（正徳元）
112	1792	寛政４	立之
113	1775	安永４	
114			
115			
116			
117			
118			
119			
120			
121	1756	宝暦６	1755（延享２）
122	1754	宝暦４	
123			石仏地蔵
124			石仏地蔵
125			
126			不詳
127			五輪塔
128			五輪塔
129			五輪塔
130			不詳
131			不詳
132	1816	文化13	
133	1731	享保16	
134	1773	安永２	
135	1731	享保16	
136			石仏地蔵
137			
138			
139			
140			
141			
142			
143			石仏地蔵
144			石仏
145			五輪塔
146			石仏地蔵

第２表　光明寺墓地・墓石集成(2)

＊備考欄年号は卒年

No.	西暦	年号	備考	No.	西暦	年号	備考
147			石仏地蔵	220			
148				221			
149				222	1816	文化13	
150				223			
151				224			
152	1786	天明６		225			
153			不詳	226			石仏地蔵
154				227			
155				228			五輪塔
156				229			五輪塔
157	1717	享保２		230			
158			石仏地蔵	231			石仏
159				232			
160				233			
161				234			
162			石仏	235			
163	1835	天保６		236			石仏地蔵
164		享保?		237			石仏地蔵
165			台座のみ	238			五輪塔
166			石仏	239			五輪塔
167	1797	寛政９		240	1745	延享２	
168	1834	天保５		241			五輪塔
169	1753	宝暦３	卒・1746（延享３）卒	242			五輪塔
170				243			水入
171				244			不詳
172	1811	文化８		245			
173			五輪塔	246			
174			五輪塔	247			石仏地蔵
175			石仏地蔵	248			
176			五輪塔	249			
177	1747	延保４	1734（享保19）	250			地蔵
178				251			石仏地蔵
179				252			
180				253			五輪塔
181				254			五輪塔
182				255			五輪塔
183			不詳	256			五輪塔
184				257			五輪塔
185				258			五輪塔
186			石仏地蔵	259			
187				260			石仏地蔵
188				261			五輪塔
189				262			台座のみ
190	1720	享保５	丸屋六兵衛	263			五輪塔
191			地蔵	264			五輪塔
192				265			五輪塔
193			五輪塔	266			五輪塔
194			五輪塔	267			
195				268			五輪塔
196				269			五輪塔
197				270			五輪塔
198				271			五輪塔
199				272			
200				273			五輪塔
201		天和６		274			五輪塔
202		元禄？		275			石仏地蔵
203				276			五輪塔
204				277			五輪塔
205				278			五輪塔
206							
207							
208							
209							
210							
211	1767	明和４	1761（宝暦11）				
212			五輪塔				
213							
214							
215			石仏地蔵				
216	1755	宝暦５					
217	1696	元禄９					
218							
219							

第3表　光明寺墓地の墓碑の変遷

西　　暦	年　号	墓碑年号	基数	備　　考
1648～1651	慶安年間	1651(慶安４)	1	
1652～1654	承応年間		0	
1655～1657	明暦年間		0	
1658～1660	万治年間		0	
1661～1672	寛文年間	1662(寛文２),1669(寛文９),1670(寛文10)	3	
1673～1680	延宝年間	1676(延宝４),1677(延宝５),1678(延宝６)	5	
1681～1683	天和年間	1681(天和元),1682(天和２)	1	
1684～1687	貞享年間	1684－２(貞享元)	1	
1688～1703	元禄年間	1691(元禄４),1693(元禄６),1696(元禄９),1967(元禄10),1698(元禄11),1701(元禄14),1702(元禄15)	7	元禄大火
1704～1710	宝永年間	1705－２(宝永２),1709(宝永６)	3	
1711～1715	正徳年間	1711－２(正徳元),1713(正徳３)	0	
1716～1735	享保年間	1718(享保３),1719(享保４),1720(享保５)1724(享保９),1725(享保10),1729(享保14),1731(享保16) 1735(享保20) 1739(元文４),1740－２(元文５)	11 3	
1736～1740	元文年間	1743(寛保元)	3	
1741～1743	寛保年間	1744(延享元),1746－２(延享３)	1	
1744～1747	延享年間	1749(寛廷元)	3	
1748～1750	寛延年間	1753(宝暦３),1758(宝暦８)	1	
1751～1763	宝暦年間	1764(明和元)	2	
1764～1773	明和年間	1775(安永２),1776(安永３)	1	昭和大火
1774～1780	安永年間	1782(天明２),1784－２(天明４)	2	
1781～1788	天明年間	1789(寛政元),1792(寛政４),1797(寛政９)	3	天明の堂宇再建
1789～1800	寛政年間		3	
1801～1803	享和年間	1816(文化13)	0	
1804～1817	文化年間	1819(文政２),1821(文政４),1824(文政７),1829(文政12)	1	
1818～1829	文政年間	1830(天保元),1831(天保２),1834(天保５)	4	
1830～1847	天保年間		3	
1844～1847	弘化年間	1848(嘉永元)	0	
1848～1853	嘉永年間	1855(安政元),1856(安政２),1858－３(安政４)	1	
1854～1859	安政年間	1860(万延元)	4	
1860	万延年間	1863(文久３)	1	
1861～1863	文久年間		1	
1864～1865	元治年間	1865(慶応元)		
1866～1868	慶応年間	1874(明治７),1875－２(明治８),1876(明治９)	1	
1868～1911	明治年間	1878(明治11),1886(明治19),1887(明治20), 1899(明治22) 1917(大正６),1924(大正13),1925(大正14)	8	
1912～1925	大正年間	1938(昭和13),1940－２(昭和15),1942(昭和17),	3	
1926～1988	昭和年間	1943－２(昭和18),1948(昭和23),1951(昭和26), 1956－２(昭和31),1958－２(昭和33),1964(昭和39), 1965－２(昭和40),1968(昭和43),1970(昭和45), 1973－２(昭和48),1974(昭和49),1975－２(昭和50), 1978－２(昭和53),1980－２(昭和55),1981(昭和56)	28	墓地改葬

Ⅲ．遺構

1．Ｂ地区

（1）遺構の概要（図版６）

Ｂ地区はＣ地区の西隣に接して設定されており、現光明寺の北側、旧境内部分の主に墓地として利用されていた部分である。調査区は南北約33m・東西約12mの長方形を呈しており、約396.7㎡について調査を実施した。

当該地は、調査前は、光明寺の敷地となっており、大正４年の地籍図では西側１/３は宅地、東側２/３は光明寺の本堂及びその前面（北側）に営まれた墓地となっている。

調査は墓地跡と光明寺本堂跡、西側に存在した宅地の調査から始め、宅地・本堂移転に伴う盛土とゴミ穴を機械力にて除去した後、人力による精査を実施した。

調査の結果、移転以前の光明寺に伴う、本堂、墓地、本堂と墓地を結ぶ墓道や本堂と墓地を区切る溝、寺と宅地を仕切る築地、幾度かの火災に伴うゴミ穴など17世紀から19世紀にわたる光明寺に係わる遺構の他、鎌倉時代の溝、古墳時代後期の溝を検出した。

これら各時期の遺構面は、地山面上から形成が始まり、基本的には火事と片付け・整地（盛土）の段階を踏んで嵩上げされ、現地表に至っているが、現代の墓や家屋解体に伴うゴミ穴や防空壕の掘削によって宅地であった西側を中心に全体の相当部分が地山以下まで掘削されており、遺構自体が消失している。また、残りの部分についても墓地改葬や本堂の移転による削平・攪乱を大きく受けている部分が多くみられた。

（2）基本層序と遺構面の設定（図版７）

調査区の南壁面において看取できる基本的な層序は以下の通りである。

①盛土・②土壌層Ⅰ・③火災層Ⅰ・④整地層Ⅰ・⑤火災層Ⅱ・⑥整地層Ⅱ・⑦火災層Ⅲ・⑧整地層Ⅲ・⑨火災層Ⅳ・⑩整地層Ⅳ・⑪火災層Ⅴ・⑫土壌層Ⅱ・⑬整地層Ⅴ・⑭地山層

火災層は微細に見れば、火災による受熱面（赤化した層）、火災によって被覆した炭・灰・焼土層、更に被覆した炭・灰・焼土層を均した火事片付け層に分かれるが、本稿では一括して火災層と表現する。

①層盛土は本堂の移転工事に伴うものである。

②層土壌層Ⅰは、移転前の本堂に伴い形成された土壌層である。上面より本堂移転前の礎石の抜き取り穴が切り込む。

③層は整地層Ⅰ上に薄く広がる炭・焼土層である。標高約18.9m前後。火災層Ⅰと呼ぶ。

④層は火災層Ⅰ・Ⅱ間に広がる厚さ15cm前後の黄茶色砂礫よりなる整地層Ⅰである。上面より礎石の据え付け穴が切り込む。

⑤層は整地層Ⅱ上に薄く広がる炭・焼土層である。標高約18.7m前後。

⑥層は火災層Ⅱ・Ⅲ間に広がる厚さ25cm前後の黄褐色砂礫・灰色極細砂よりなる整地層である。上面より礎石の据え付け穴が切り込む。灰色極細砂は部分的に土壌化しており、⑥層が形成されるまでの間に若干の時間が経過したことを窺わせる。整地層Ⅱと呼ぶ。

⑦層は⑧層上面を被覆する厚み10cm弱の炭・焼土層である。調査区の東側において比較的厚く、調査区西側では、地山の出現レベルが高いため、⑥層形成時に削られ残っていない。火災層Ⅲと呼称する。

⑧層は標高18.40m前後において広がる黄褐色シルトまじり極細砂よりなる整地層である。厚みは約10cmと薄い。整地層Ⅲと呼ぶ。

⑨層は調査区全域に厚く広がる火災層－ 炭・焼土層である。火災層Ⅳと呼ぶ。

⑩層は標高18.20m前後において広がる整地層である。層は薄く、黄褐色砂礫・灰色粗砂などを敷き延べて形成されている。整地層Ⅳと呼ぶ。

⑪層は⑫層・⑬層上で検出された炭・焼土層である。厚みは20cmを越える部分も存在する。火災層Ⅴと呼ぶ。標高18.10m前後。

⑫層は⑬層・⑭層上を厚く被覆する土壌層－ 茶灰色シルトまじり極細砂層である。標高18.00m前後。

⑫層は15世紀末の遺物を含むＳＸ244・SD07・光明寺本堂創建期に本堂基壇部分に造られたと考えられる方形土坑を被覆している。

⑬層は⑭層（地山）直上に部分的に検出される整地層である。整地の時期・性格には不明な部分が多いが、SD07によって切られている部分もある。整地層Ⅵと呼ぶ。

⑭層は土地利用の違いもあり、調査区西側では高く標高18.30m前後から、東側では低く、18m前後で出現している。

以上、調査の結果、少なくとも５回の火災が平面・土層断面において確認された。このため、調査は、火災層を鍵層として実施することに努めた。但し、火災層が薄い部分も多く、実際の調査においては、基本的には、移転前の墓地の面より下を大きくに３面に分けて調査を実施した。即ち、④層上面－火災層Ⅰ下の整地面上を第Ⅰ面（第１遺構面）、⑥層上面を主として検出した火災層Ⅱ下の整地面上（第２遺構面）を第Ⅱ面とし、⑧層上面の火災層Ⅲ下の整地面（第３遺構面）及び⑬層・⑭層上面－火災層Ⅳ下の整地面（第４遺構面）及び火災層Ⅴ下の整地面・地山面（第５遺構面）上の遺構については、調査期間の制約もあり、最終的には地山面において検出し、全景写真・航空写真撮影を行い、第Ⅲ面とした。但し、第４遺構面については本堂基壇の変遷過程を把握するため、精査を行い平板測量を実施している。

さて、光明寺は、寺縁起では元亀２年（1571年）に百万遍智恩寺門跡玉春上人によって開基創立され、天正２年（1574年）に伽藍が完成したとされている。

また寛文九年（1669年）『伊丹郷町絵図』において光明寺は確認できる。

光明寺周辺は、『有岡庄年代秘記』によれば元禄12年と元禄15年に続けて大火に罹っており、元禄12年には『寺院六ケ寺、酒家十六軒』が焼失し、光明寺はこの時に焼失したと考えられている。さらに、元禄15年には『竈数439 軒』が焼亡したとされている。

元禄15年の大火の後、本堂は『有岡庄年代秘記』の記載及び近年発見された棟札から宝永８年（1711年）に再建されたことが判っている。

寺は更に、宝暦７年（1756年）・明和年間（1765 年・66年）の伊丹大火で類焼し、天明２年（1782年）には中興純誉春寮上人によって再建されたとされる。

以上の寺縁起・火事記録・伊丹市教育委員会の調査成果・本堂の解体記録に加え、今回調査の出土遺物の年代観を勘案して、結論だけを述べると、炭層が厚く、非常に良く焼けた火災層Ⅴは時期的には17世紀前半の火災によるもの、火災層Ⅳは元禄12年（1699 年）或いは元禄15年（1702 年）の大火に伴う

ものと考えられ、第3整地層は宝永7年（1710年）の本堂再建に伴うもの、火災層Ⅲは宝暦7年（1756年）もしくは明和年間（1765年・1766年）の大火による類焼によるもの、⑥層は天明2年（1782年）の再整備に係わる整地であると考えられる。

以下、各面（遺構検出面）の概要について述べる。

（3）移転以前の墓地と第Ⅰ面の遺構（図面8～11）

第Ⅰ面は、標高18.8m前後に広がる移転前の本堂・墓地の状態を示す遺構面である。

但し、検出した第Ⅰ面は、移転前の寺域の旧地表より一層下であり、間に火災層と考えられる炭層（火災層Ⅰ）を挟んでいることから、厳密には、移転前の本堂・墓地（これを現代の寺・墓地と呼んでおく。）よりもやや古い状況を示していると考えられる。

第Ⅰ面の具体的な時期は詳らかではないが、主に近現代の遺構を検出している。後述する第Ⅱ面では19世紀前半の遺物を副葬する墓が検出されており第Ⅱ面の時期を18世紀後半～19世紀前半と想定するならば19世紀中葉以降とすることができよう。

第Ⅰ面では、移転前まで残っていた現代の墓の区画が明らかにされており、区画内から、改葬された現代の骨壺よりも古い骨壺が出土している。また、区画外からも、現代よりも古い、江戸時代後期の骨壺が検出されており、新旧混在した状態で検出されていることが判る。

移転前の墓の区画等については、第Ⅰ面の調査によって明らかになったが、墓石については、発掘調査前にすでに撤去されていた。しかし、墓石の撤去前に大手前女子大学による墓碑調査が実施されており、この調査によって、墓石の配置状況と年号が明らかになっている。

それによると、移転前の墓地には、本堂の北側の東西約20m・南北10m弱の敷地内に112基の墓が確認されており、西南角の墓門を入って、東西方向に4列・敷地西端に南北に1列と東側に南北に1列、さらに東奥に歴代僧侶の墓所を配置していた。

墓碑銘の一部は図版9・10に図示し、第2表に集成したが、江戸時代前期の慶安4年（1651年）から延宝4年（1676年）・天和元年（1681年）・貞享元年（1684年）や中期の元禄15年（1702年）・宝永2年（1677年）・享保20年（1735年）・元文4年（1739年）・安永5年（1776年）・天明4年（1784年）、後期の文化・文政年間（1816～1829年）、幕末の慶応元年（1865年）までの墓碑銘を確認している。このことから、墓地の形成が少なくとも江戸時代前期にまで遡ることが明らかとなっている。

遺構は、調査区の西半部では、火災に伴う火事かたづけのゴミ穴ＳＫ01・ＳＫ02を除けば、同時期の遺構と認識できるものは乏しく、近現代の遺構である防空壕が2ヵ所存在する以外は宅地撤去時の攪乱が存在するにすぎない。

調査区東半については、本堂と墓地に係わる遺構が検出されている。西半の宅地部分と東半の本堂・墓地の境を示す遺構は検出されていない。

墓の区画・骨壺以外には、調査区の南端では、移転前の本堂の基壇の北面を区画する石列が検出されており、石列に付けられた本堂へ上がる階段が見つかっている。

基壇北面の石列は、現況では階段部分を中心に4m程度残存しているに過ぎないが、溝状の痕跡として西走し、調査区の東端から約15.5mの地点で直角に曲がり、北西の隅を造りだしている。

調査区東端に存在する礎石は、東壁断面に存在する礎石の抜き取り・据え付け痕とともに本堂の北東

端の２間分の礎石であったと考えられる。

また、石列の前面には、東西方向に走る墓地と本堂とを仕切る石列溝が存在している。石列溝は自然石に加え墓石･一石五輪塔によって造られており、溝内法約40cmを測る。（この石列溝は第Ⅱ面においてすでに営まれていたものと考えられる。）石列溝は調査区の東端から出現し、約12m西走し、直角に南へ曲がり、基壇石列へと延び、更に基壇の北西隅に沿ってクランクしている。

この石列溝は本堂の西面から北面更に墓地との境を巡り、Ｂ・Ｃ地区間に現在も流れる溝へ取りついていたと考えられる。

また、基壇北西隅の前面には、墓石を転用した墓門の礎石及び塀跡が検出されている。墓門の幅は約1.5mを測る。

墓門から、墓地内には玉石を敷いた墓道が存在している。敷石は墓門から約３ｍで東へ曲がり、墓所中央にある檀家総代の墓所付近まで延びることが確認された。

第Ⅰ面の遺構の配置は、西半部に宅地跡と考えられる遺構の乏しい部分、東半の南端に本堂、その前面に本堂と墓地を分ける溝があり、本堂の北西端の前面から墓地へ入る墓門と敷石の墓道がはじまっていたと推定される。

（４）第Ⅱ面（第２遺構面）の遺構（図版13～18）

Ａ．概要

第Ⅱ面は火災層Ⅱ下の整地層Ⅱ上において検出した、基本的には第Ⅰ面へとつづくレイアウトをもつ遺構面である。第Ⅱ面は基本的には第Ⅰ面へと続くレイアウトをもつが、後述する下層の第Ⅲ面とは大きくレイアウトを違えており、第Ⅲ・第Ⅱ面間で、寺・墓地の利用状況が大きく変化したことが判明した。

第Ⅱ面の時期は不明な点も多いが、19世紀前半の遺物が副葬されているSX218を時期を考える要素の一つとして、第Ⅱ面の成立を天明２年（1782年）の光明寺の再整備以降と捉えるならば、18世紀末～19世紀前半代の時期が与えられよう。

遺構は、調査区西半部においてはゴミ穴・火事片付け土坑、中央部では墓門・墓道、東半部では本堂の北面の石列及び本堂と墓地を分ける石列溝そして火葬による墓地が検出された。

調査区の西１／３には、ゴミ穴・火事片付け土坑であるＳＫ03・ＳＫ06・ＳＫ07・ＳＫ09・ＳＫ25・ＳＫ30・ＳＫ35・ＳＫ58が穿たれており、住居・墓地としては使用されていない。南北方向に設置された土管（SD03）は排水に使用されたと考えられる。

東半のレイアウトは、基本的には第Ⅰ面と同じである。本堂と墓地に係わる遺構が検出されている。また、西半の宅地部分と東半の本堂・墓地の境を示す遺構は検出されていない。土管溝ＳＤ03と平行して南北に走る築地塀（ＳＦ02）は、第Ⅱ面においてまだ輪郭を残しているが、ＳＫ25・ＳＫ35に切られていること、土層断面では、築地塀を切った土坑の上面を火災層Ⅱが被覆していることから、第Ⅱ面ではすでに無くなっていた可能性が高い。

墓の区画・骨壺以外には、調査区の南端では、光明寺本堂の一部が確認されている。調査区北・東壁の観察から礎石は第Ⅱ面の火災後も同一箇所で持ち上げられており、本堂を限る石列・礎石は、全て第Ⅰ面に継続され、基本的なレイアウトは第Ⅰ面に引き継がれたものと考えられる。

第Ⅱ面の遺構のレイアウトは、西半部に宅地跡と考えられる遺構の乏しい部分、東半の南端に本堂、その前面に本堂と墓地を分ける溝があり、本堂の北西端の前面から墓地へ入る墓門と墓道がはじまる。墓門の位置は第Ⅰ面に引き継がれる。墓道についても、木棺墓ＳＸ218が石敷に面して営まれていることから、第Ⅱ面においても、墓道は敷石をもち、第Ⅰ面とほぼ同じ位置を通っていたと考えられる。

検出された墓は、一部に箱式木棺が使用されているが、大半は、火葬による埋葬が主体であり、土師質の火消し壺や丹波焼壺・甕などを骨蔵器として使用していた。

墓は、第Ⅰ面・現代墓の分布とほぼ重複して検出されている。その分布から、以下の通りにグルーピングできる。

①群　墓門を入り正面にある墓群（SX104・SX176・SX178・SX179・SX184・SX218）。

②群　墓門を入り、石列溝に沿った列（SX174・SX175・SX102・SX103・SX173・SX172・SX171・SX170・SX168・SX169・SX203・SX146・SX147・SX148・SX170・SX204・SX199・SX200・SX201・SX197）。

③群　②群とは墓道を挟んで北側の列（SX111・SX149・SX150・SX160・SX162・SX163・SX164・SX165・SX167・SX177・SX220）。

④群　②群・③群の東側にある墓群（SX144・SX145・SX143・SX107・SX108・SX109・SX110・SX208）。

⑤群　④群の更に背後（東側）、歴代僧侶の墓所の位置にある墓群（SX180・SX181）。

⑥群　①・③群とは墓道と考えられる空間を挟んで北側・④郡の西側の列（SX142・SX141・SX140・SX136・SX139・SX134・SX135・SX128・SX129・SX126・SX127・SX130・SX132・SX124・SX125・SX116・SX119・SX120・SX121・SX122・SX123・SX117・SX189・SX106・SX183・SX228・SX236・195）。

⑦群　調査区北壁部分に位置する墓群（SX245他）。

⑧群　下層の墓道を越えて西側へ広がった墓群（SX112・SX113・SX114・SX115・SX190・SX191・SX240・SX242・SX243・SX239）。

墓の大半は火葬墓であるが、①群には、19世紀初頭の遺物を副葬した箱式木棺ＳＸ218が存在している。箱式木棺はＳＸ218以外にＳＸ167・ＳＸ232・ＳＸ228・ＳＸ236の４基が存在しており、ＳＸ228・ＳＸ236の木棺についても第Ⅱ面に伴う可能性が考えられる。これに対し、ＳＸ232では上層より第Ⅱ・Ⅲ面間に伴うと考えられる火葬骨壺（火消壺）が入れられており、第Ⅲ面に伴うものと考えられる。

また、ＳＸ149では宝暦７年（1756年）の墓碑が倒れたまま検出されており、墓石を残したまま整地したことが窺える。第Ⅱ面が整地・整備された時期を知る手掛かりとなる。

後述する火災層Ⅲから第Ⅱ面整備完了時までの間には約30年の時間が経過しており、その間に営まれたと考えられる火葬墓も多いと考えられる。

第Ⅱ面において検出した墓の中にもやや時代が逆上るものが幾つか含まれており、火消壺の編年から、ＳＸ108・ＳＸ195・ＳＸ198・ＳＸ119・ＳＸ163・ＳＸ136・ＳＸ103・ＳＸ120・ＳＸ116・ＳＸ121・ＳＸ192などは第Ⅱ・Ⅲ面間に営まれたものと考えられる。

これに対して、第Ⅱ面整備後に営まれた火葬墓としては、ＳＸ146～ＳＸ148・ＳＸ199・ＳＸ211などがあげられる。

B．主な遺構

① 石列溝（図版14）

石列溝は調査区東端より出現し、西側へ約12m分が検出された。墓地と本堂とを仕切るために営まれたものと考えられる。石列溝は径15cmから40cm程度の自然石に加え墓石・一石五輪塔によって造られており、溝の内法は幅約40cm、深さ約10cm前後である。

この石列溝は第Ⅰ面においても継続して使用され、概要において述べたように本堂基壇の西側に沿って走り、墓地の前面を通り、C地区との境を南北に走る溝に流れ込むものと考えられる。

② 木棺墓ＳＸ218（図版21）

調査区中央部より検出した箱式木棺墓である（①群）。墓は、墓門より北へ入った正面に位置しており（①群）、移転前の墓碑調査による№57の直下に営まれている。また、ＳＸ210と切り合い先行する。

墓は、火事片付け土坑SK71を切って営まれており、長方形の墓壙に箱式木棺（座棺）を入れている。

墓壙の規模は長辺約105 cm・短辺約85cm・残存する深さ約85cmを測る。掘削は地山に達する。

箱式木棺（座棺）は、一辺が約56cm・他辺が約54cmのほぼ正方形を呈しており、残存する深さは約37cmである。使用した木棺の底板は２枚の板、残存する側板は一枚の板によって造られており、各板は鉄釘によって接合されている。

木棺は若干軸を東に振るが、ほぼ東西南北に各面を向けて安置されている。棺内からは北東半に頭蓋骨、北西半に数珠とともに肋骨・上腕骨などが検出されている。また、棺の南半部には茶道具を入れた茶箱と考えられる薄板が散乱して検出され、その下より脛骨が検出されている。

本木棺からは楽焼写しの茶碗や茶巾筒・漆塗りの棗が出土している。それらの多くは棺の南半部から出土しているが、原位置の特定はできなかった。棺の北西半部には数珠と肋骨・上腕骨が集中し、南西半には茶箱らしき薄板が多数散乱している。薄板の下より脛骨が出土したことから、遺体は棺の西よりに安置され、膝の前もしくは上に茶道具が副葬されたものと推測される。

楽焼写しの茶碗の時期から19世紀代前半の時期が考えられる。

③ 木棺墓ＳＸ228（図版22）

調査区北壁沿い中央より検出した箱式木棺墓である（⑥群）。西隣に接して木棺墓ＳＸ236が存在する。移転前の墓碑調査による№74の直下に営まれている。

*ＳＸ228はＳＸ236と隙間がないほど密着して並んで埋葬されているが、若干の重なり具合と出現レベル*から、ＳＸ236よりも後に埋葬されたと考えられる。

墓壙はＳＸ236と共用している可能性が高く、不整な長方形を呈している。長辺（東西）約1.30m・短辺（南北）約90cm・深さ約125cmを測る。

箱式木棺（座棺）は、蓋があり完存する。規模は、一辺が約54cmのほぼ正方形を呈しており、内法では48cmを測る。棺の全高は約88cm、棺身の全長は80cmあり、棺底には高さ４cmの脚が付く。

使用した木棺の底板は３枚の板から、側板も３枚の板によって造られており、各板は鉄釘によって接合されている。

棺内からは櫛１本の他、往生要集を記した短冊状の木簡が出土している。また、棺底には竹製品が入れられていた。竹製品は竹を銅線で結わえた球状の籠様の物であったと考えられる。竹製品がひしゃげた状態で出土していることから、遺体が竹製品の上に乗っていた可能性も考えられる。

④　木棺墓ＳＸ236（図版22）

調査区北壁沿い中央より検出した箱式木棺墓である（⑥群）。東隣に接して木棺墓ＳＸ228が存在する。移転前の墓碑調査による№74と№76の間に営まれている。

ＳＸ236はＳＸ228と隙間がないほど密着して並んで埋葬されているが、若干の重なり具合と出現レベルから、ＳＸ228よりも先に埋葬されたと考えられる。

墓壙はＳＸ236と共用している可能性が高く、不整な長方形を呈している。長辺（東西）約1.30m・短辺（南北）約90cm・深さ約170cmを測る。また、ＳＸ236は蓋の上に２本の間地石を並べて乗せている。蓋石は長さ約１m・幅15cm程度の大きさである。

箱式木棺（座棺）は、蓋があり完存する。規模は、一辺が約54cmのほぼ正方形を呈しており、内法では48cmを測る。棺の全高は約88cm、棺身の全長は80cmである。

使用した木棺の底板は２枚の板から、側板も２枚の板によって造られており、各板は鉄釘によって接合されている。

棺内からは煙管１本・櫛２本が出土している。

⑤　火葬墓SX146・SX147・SX148（図版16）

火葬墓SX146・SX147・SX148は調査区の東半、石列溝沿いに営まれた墓址である（②群）。

墓は、石列溝沿いに長さ約90cm幅約70cm、深さ30cm以上の舌状の墓壙を穿ち、３個の骨壺と、１個の白磁合子の遺髪入れを埋納している。更にその下には、径40cmの墓壙を穿ち骨壺１個（SX148下層）を埋納している。

これら計５個の骨壺・遺髪入れは、意図的に同じ場所に納めたもので、家墓の状態を示しているものであろう。特に、SX146・SX147・SX148の３基は、横一列に並んでいる。

また、舌状の墓壙の背後には、一石五輪塔残欠３基を含む５個の石材が集められており、墓の上部に何らかの墓標となる施設をつくり出していたものと考えられる。

SX146・SX147・SX148の３基の埋納順は、中央のSX147、SX148、SX146の順である。

SX146・SX147・SX148の墓壙の更に下には、SX234があり、SX234自体も幾つかの早桶の切り合いの後に営まれたことが判明している。SX146・SX147・SX148に連なる家墓は土葬から火葬墓へと同一地点で変遷し、長期間使用された墓地であったと捉えることができる。

⑥　火葬墓SX149・SX150・SX160（図版15）

火葬墓SX149・SX150・SX160の一群は、調査区の東半、②群とは墓道を挟んで北側の列（③群）にある。墓は、一辺約70cm前後の方形の墓壙を穿ち、２個の骨壺（SX150･SX160）と、１個の墓碑SX149が検出されている。

墓碑SX149は、碑文を下に倒れた状態で検出されており、碑文には、原田屋清助の名と、『宝暦７年丁丑天　十二月廿一日　(梵字)加雪智光信女』と刻まれていた。墓碑に記された宝暦７年は西暦1756年であり、恐らく後の墓地の整備（第２面形成に伴うものと推測される。）に伴ってそのままに埋め込まれたものと考えられる。その点では、第Ⅱ面・第Ⅲ面間に形成された墓と捉えることができる。

墓壙に埋納されたSX150･SX160のうち、SX150は墓碑SX149に肩部を壊されていることから、墓碑が健常であった時点で埋納されていたものと推定できる。また、壺内に石が入れられている。

SX160については、判断する材料をもたない。

墓碑SX149・SX150・SX160の一群は下層に土葬墓等はなく、長期間使用された墓址とは言い難い。しかし、移転前の墓碑調査では、墓碑SX149と同一銘文の墓碑が発見されており、注目される。

⑦　火葬墓SX144 ・SX145（図版17）

SX144・SX145 は②群・③群の東側にある墓群（④群）の墓である。墓壙の南側の一部を攪乱によって削られた状態で検出された。

SX144は径約40cm、深さ約30cmの円形の墓壙に埋納された火消壺を蔵骨器とする火葬墓である。

SX145はSX144の下層から検出されており径20cm程度の円形の墓壙に小型の壺を入れて蔵骨器としている。SX144の掘削によって元位置から浮き上がった状態で検出されている。

複数の蔵骨器を纏めた墓壙の掘方は存在しないが、東側に接して同規模の火消壺を蔵骨器とする火葬墓が存在している。

（5）第Ⅲ面（第3遺構面・第4遺構面・第5遺構面・第6遺構面）の遺構（図版13～15・22・25）

A．概要

第Ⅲ面では第3遺構面・第4遺構面・第5遺構面・第6遺構面の遺構を検出している。

第3遺構面は元禄12年以後、宝永・明和年間の火災以前に営まれた寺及び墓地に係わる遺構群で構成される遺構面である。

第4遺構面は、17世紀前半から元禄12年の焼失までの期間に営まれたと考えられる寺及び墓地に係わる遺構群で構成される遺構面である。

第5遺構面は、光明寺創建期（17世紀前半）及びそれ以前の有岡城に関連する時期（戦国～安土桃山時代）の遺構群で構成される遺構面である。第6遺構面は鎌倉時代・古墳時代後期の遺構群で構成される遺構面である。

B．第3遺構面の概要（図版13～15）

第3遺構面は、火災層Ⅲと火災層Ⅳの間に営まれた遺構面である。

調査区西半部には南北方向に築地（ＳＦ02）が走り、その西側については、ゴミ穴・火事片付け土坑が穿たれている。

築地（ＳＦ02）と平行して調査区中央には、敷石遺構（ＳＦ01）が走っている。ＳＦ01は第Ⅰ・Ⅱ面の石敷の墓道の下層に位置しており、第3遺構面に伴う墓道であったと認識できる。

ＳＦ01の東側は、主に火消し壺を骨蔵器とした火葬墓を主体とした墓地であったと考えられる。第3遺構面に伴う火葬墓は第2遺構面の火葬墓とも混在しているため詳らかではなく、加えて、後述する第4遺構面廃絶時（火災層Ⅳ）から第3遺構面整備完了時までの間には約10年の時間が経過しており、その間に営まれたと考えられる火葬墓も多いと考えられる。

火消壺の編年から、第4遺構面廃絶時（火災層Ⅳ以後）から第3遺構面廃絶時（火災層Ⅲ）までの約50年間には、ＳＸ110・ＳＸ112・ＳＸ177・ＳＸ125・ＳＸ140・ＳＸ164・ＳＸ137・ＳＸ133E・ＳＸ162・ＳＸ139・ＳＸ138・ＳＸ241などが営まれたと考えられる。

また、箱式木棺ＳＸ232、早桶を使用したＳＸ233についてもこの間に営まれた可能性が高い。

早桶を使用したものとしては、この他に、SK94を掘り込んで造られたＳＸ229、SK73を掘り込んで造られたＳＸ225・ＳＸ226・ＳＸ230、SK89を掘り込んで造られたSK85（桶を埋めており、早桶と考えら

れる。)、近接するSK84についてもこの間に営まれた可能性が高い。

本堂と墓地の境については、墓地の西側については先述した通り南北に通る墓道があったと考えられるが、第Ⅰ・Ⅱ面に存在した墓門・塀の存在は認められない。第Ⅰ・Ⅱ面において墓地と本堂を南北に分けた石列溝は、下層の第Ⅲ面では、素掘りの溝SD06としてほぼ同一の場所で検出されており、第Ⅱ面と同様に墓地と本堂を南北に区切っていたことが判明した。

第Ⅲ面の本堂の礎石は、殆どが抜き取られているが、礎石１・ＳＫ66・ＳＫ74が対応するものと考えられる。

墓の配置や墓道を詳細に復元することは難しいが、大まかには、墓の配置は以下の通りにグルーピングできる。

Ａ群－溝ＳＤ06に沿って並ぶ一列（SX173・SX232・SX233）

Ｂ群－墓地の中央を東西に並ぶ一列（SX162・SX164・SX177・SX230・SX225・SX226）。

Ｃ群－調査区の北壁に沿って並ぶ一列（SX133・SX136・SX137・SX110・SX251・SX125）。

Ｄ群－墓道の西側に営まれた墓（SX112）。

また、墓道については、敷石遺構SF01から墓地内へ入る墓道が、Ａ・Ｂ群間、Ｂ・Ｃ群間に存在したことが想定できる。

第３遺構面の墓の配置は、Ａ群は②群に、Ｂ群は①・③群、Ｃ群は④群・⑥群、Ｄ群は⑧群へと、細分化して第２遺構面に踏襲されたと考えられる。これは、第３遺構面では墓地の西端を南北に走っていた敷石をもつ主墓道が、第２遺構面では南西隅から墓地内に入り、東西方向に営まれることを受けて、細分化していったものであろう。

Ｃ．第３遺構面の主な遺構

①　土葬墓ＳＸ232（図版20）

ＳＸ232は調査区東半部より検出した箱式木棺墓である。ＳＸ232は東側に並ぶＳＸ233・ＳＸ234・ＳＸ235、西側のＳＸ222と一列に並んでおり、ＳＸ233とは切り合い、新しい。

ＳＸ232は当初、箱式木棺が営まれたが、上層より火葬骨壺（66・67）が埋納されている。

この２個の火葬骨壺の時期は18世紀中頃～末にかけてと考えられ、第Ⅱ面の時期に入れられたと考えられるが、２個ともに横倒しになった状態で出土している。これは、ＳＸ232の蓋が腐食し、棺内へ落ち込んだことによって、上部の骨壺（66・67）までが、落下したためと考えられる。このことから、箱式木棺と骨壺の埋葬時期には、さほどの時間的隔たりはなかったと考えられる。

墓壙の規模は径85cm、残存する深さ約70cmを測る。墓壙の形が円形である点は他の箱式木棺とは異なる。掘削は地山に達する。

箱式木棺（座棺）は、一辺が約57cm・他辺が約58cmのほぼ正方形を呈しており、残存する高さは約47cmである。使用した木棺の底板は 枚の板、残存する側板は一枚の板によって造られており、各板は鉄釘によって接合されている。

②　土葬墓ＳＸ233（図版20）

ＳＸ233は調査区東半部より検出した。桶（いわゆる早桶）を棺として使用している。ＳＸ233は東側に並ぶＳＸ234・ＳＸ235、西側のＳＸ233・ＳＸ222と一列に並んでおり、ＳＸ232とは切り合い、先行する。

桶は直径約90cm残存する深さ約50cmの墓壙に据えられており、桶の大きさは残存最大径約58cm、17枚の桶側によって造られている。

桶内からは、人骨が出土しており、上層からは蓋材と考えられる木片とともに漆器が出土している。

③土葬墓ＳＸ234（図版20）

ＳＸ234はＳＸ233の東側から検出された。棺材は残存していないが、検出した墓壙の形状から桶（いわゆる早桶）を使用したと推測される。

検出した痕跡から、桶は直径約60cm程度の墓壙に据えられており、桶の大きさは痕跡からは詳らかではないが、内部に収められた豊富な遺物の出土状況から径約40cmを大きく出ないものであったことが判る。墓壙の深さはＳＸ233と比べ約30cm浅いが、使用された桶の大きさによるものであろう。

ＳＸ234を特徴付けるものとして豊富な出土遺物があげられる。桶底より、31点のミニチュア陶器・土人形・面子が出土している。

ＳＸ234の位置は、第Ⅱ面において述べたＳＸ146～ＳＸ148が営まれた墓の直下にあり、明瞭な先後関係をもつ墓址である。

④　土葬墓ＳＸ225・ＳＸ226（図版19）

ＳＸ225・ＳＸ226は、第４遺構面に伴う火事片付け土坑SK73を切って埋納された桶（いわゆる早桶）を棺としている墓である。また、土坑SK76よりも先行する可能性が高い。

ＳＸ225はＳＸ226に切られ古い。桶は直径約80cm、残存する深さ約40cmの墓壙に据えられており、桶の大きさは残存最大径約50cmを測る。

ＳＸ226はＳＸ225を切り、後出する。桶は直径約90cm、残存する深さ約30cmの墓壙に据えられており、桶の大きさは残存最大径約60cmを測る。

桶内からは、人骨が出土しており、上層からは火葬骨壺が傾いた状態で出土している。

また、桶底外面には、桶を縛った十文字の縄が残存していた。

⑤　土葬墓ＳＸ230（図版19）

ＳＸ230は、第４遺構面に伴う火事片付け土坑SK73を切って埋納された桶（いわゆる早桶）を棺としている墓である。桶は直径約80cm、残存する深さ約50cmの墓壙に据えられており、桶の大きさは径約45cmである。桶内には、桶の蓋材の他、２個の火葬骨壺（81・104）が埋納されている。

また、ＳＸ230の墓壙掘方埋土には骨壺片が含まれており、古い火葬墓を壊して墓を埋めた可能性がある。

⑥　火葬墓SX136・SX137・SX138（図版16）

調査区の中央北より、③群の墓道と考えられる空間を挟んで北側及び東側の列⑥群に位置する墓址である。

SX136・SX137・SX138の３基の蔵骨器が縦一列に並んで検出された。

墓は、全長約１m、幅約55cmの長方形の墓壙を穿ち、中央にSX137を据え、SX136・SX138を後から埋納している。墓壙の深さはSX137部分で約35cm、SX136・SX138部分では約20cm前後である。

火葬墓SX136・SX137・SX138は、第Ⅱ面において墓壙を検出し、調査を行ったため、第Ⅱ面の項において記述したが、蔵骨器に使用された火消壺の編年観からは、SX136は18世紀中頃から末、SX137・SX138については、やや古く、18世紀前半代の時期が与えられ、第３遺構面に伴うものである。

⑦　築地（ＳＦ02）（図版24）

調査区の西半部より検出された築地と考えられる遺構である。部分的にＳＫ25・ＳＫ35によって損壊されているが、規模は、幅約50cm～60cm・残存長約7.5m・残存高約20cmを測る。

築地は、基底部に径10cm～20cmの石を敷き、地山土からなる濁黄茶色細砂混じりシルト（厚み約10cm）・平瓦・濁黄茶色細砂混じりシルト・平瓦の順で積み重ねて造っている。

ＳＦ02の延長上にSD01が存在するが、ＳＦ02と関連するかについては不明である。

⑧　墓道（ＳＦ01）（図版24）

調査区の中央部より検出された墓道と考えられる遺構である。南北に走り、調査区を横断して検出されている。墓道は、調査区中央部ではＳＫ70によって損壊されており、調査区北端では、SX115・SX192・SX193が上面より掘り込まれ、石敷を損壊している。

石敷の規模は、幅約70cm、径10cm前後の石を使用している。石敷は、両側には比較的直線的な面をもつ石が使用され、内側には比較的不整な石を使用している。

⑨　溝SD06

溝SD06は第１面・第２面において検出した石列溝の下層より検出した。幅50cm・深さ15cmを測る。

溝は全長約７ｍを検出している。流末は、上層の石列溝と同様にＣ地区との境に存在する地割りの溝に流れ込んでいたと考えられる。また、溝の始まりについては西端をＳＫ71よって切られており、判然としない。

Ｄ．第４遺構面の概要

第４遺構面は、火災層Ⅳの下面にある整地層Ⅳ上に営まれた遺構群である。第３遺構面と第４遺構面の間には火災層Ⅳのかたづけと整地層Ⅲ形成時の土取り穴があいており、特に墓地部分での遺構面の残りは非常に悪い状態である。しかし、本堂基壇部分については攪乱を受けていなかったため、基壇周辺については第４遺構面（正確には整地層Ⅳが薄いため、火災層Ⅴ上面）において一部精査を行い、第４遺構面に伴う礎石の抜き取り穴を検出することができた。

第４遺構面に対応する遺構としては、築地ＳＦ02下に存在する土坑ＳＫ47・ＳＫ48、井戸ＳＫ58、更に土坑ＳＫ47・ＳＫ48と切り合い先行する石垣遺構、石垣遺構と切り合い、先行もしくは同時期に存在していたと考えられる土坑ＳＫ46などがある。また、第３遺構面において述べた墓道（ＳＦ01）・溝ＳＤ06は第４遺構面において既に存在していたと考えられる。

溝ＳＤ06の北側については、寺域の整備に使用した土取り穴と考えられるＳＫ92・ＳＫ93・ＳＫ94、火災層Ⅳの片付けに伴う土坑ＳＫ71・ＳＫ73・ＳＫ76・ＳＫ88・ＳＫ91があき、大きく遺構面を損壊している。

築地（ＳＦ02）については、先述した様にＳＦ02が17世紀末～18世紀代の土器を廃棄したSK48を埋めていることから、第４遺構面形成時には存在していなかったと考えられるが、ＳＦ02と平行して南北に走る石垣遺構が、寺域の西を限る境であった可能性がある。

第４遺構面に伴うと考えられる墓は、土葬墓が主と考えられ、ＳＦ01の下層より検出されたSX250など早桶が使用されているものが第４遺構面に伴う墓と考えられる。また、SX222・SX234・SX235についても同時期であろう。また、箱式棺SX232・SX233についてもこの時期まで遡る可能性も残る。

また、出土した蔵骨器の時期からは、SX216・SX168が第４遺構面の時期に入り、SX119－123・SX109・

SX141・SX173－２・SX194・SX189・SX191・SX71がこの時期まで遡る可能性がある。

これらの墓の配置から墓道を復元することは難しいが、溝ＳＤ06に沿う一列（SX222･SX234･SX235)、火事片付けによって遺構面が大きく破損しているため、更に調査区の北壁際に近い、SX229からSX224を通る北側の一列の計２列の土葬墓の列が想定出来、その間に墓道が通っていたことが想定できる。

Ｅ．第４遺構面の主な遺構

①　土葬墓ＳＸ250・ＳＸ240（図版22・23）

ＳＸ250はＳＦ01の下層より検出された、墓址と考えられる土壙である。形状は、径50cmの土壙と径55cmの土壙が重複した状態で検出されており、ともに深さは10cm前後である。

ＳＸ250を切って上層よりＳＸ243が営まれている。

ＳＸ250と同様に、ＳＦ01の下層より検出されるものに、ＳＸ240がある。径約50cm・深さ約35cmを測るやや不整な円形の土壙である。

ＳＸ240を切って上層よりＳＸ115が営まれている。

ＳＸ250・ＳＸ240ともに、上層のほぼ同一の場所に新たに墓が営まれていることから、墓と推定しておく。

②　石垣遺構（図版23・24）

築地遺構（ＳＦ02）の下層より、ＳＦ02と平行する方向に検出された。石垣遺構は土坑ＳＫ46と切り合っており、後出するが、ＳＫ46を埋めずに土坑内に石垣を構築していることから、土坑と同時存在していた可能性もある。

石垣遺構は、全長約3.1m分が検出できた。径40cmから70cm前後の大型の石を土坑底に並べており、１段もしくは２段が残存している。その高さは約50cmを測る。また、大型の石を積まない部分では、径10cm～20cm程度の石を密に積んでいる。

石垣遺構の性格は詳らかではなく、ＳＦ02に先行する寺域を限る築地の基底部の可能性もある。

Ｆ．第５遺構面の概要（図版29）

第５遺構面の遺構は、17世紀前半の遺物を含む火災層Ｖの下面より検出された。基本的には、地山面上において検出しているが、一部、整地層Ⅵ上面から切り込むものがある。また、土壌層Ｖ上面から切り込むものも存在している可能性は高い。

第５遺構面の遺構は，大きくは，２つの時期に分かれる。

一番目は、15世紀末から16世紀前半、今一つは16世紀末から17世紀前半の遺物をもつ遺構である。

本堂基壇下に存在する方形土坑、土師器皿群が出土した溝状遺構SX244、SX244 の上層にあるSD07、石垣遺構と切り合い先行する土坑ＳＫ46、井戸ＳＥ01・ＳＥ02がある。

本調査区の南側において平成２年度伊丹市教育委員会によって実施した第100次調査では17世紀前半の火災によって焼け落ちたと考えられる創建期（Ｉ期）の本堂が検出されている。

この17世紀前半の火災層が、本調査区の火災層Ｖにあたる。

火災層Ｖによる炭・焼土は本堂基壇部分に厚く堆積しており、西側に向かって徐々に薄くなっており、調査区内では東端から東西約10m・南北約３mの方形に広がっている。

火災層Ｖ下には、⑫層茶灰色細砂混じりシルト層が被覆している。⑫層は旧地表を形成していたと考えられる土壌層である。その下面には礎石据え付け穴・方形土坑・土師器群を出土するＳＸ244などが存

在する。方形土坑は、ＳＤ07と伴に薄い整地層（整地層Ⅵ）を切って掘られており、地山上に整地を行い、遺構が営まれたことが判る。

方形土坑はその位置の検討から、第100次調査において検出された創建期（Ⅰ期）の本堂基壇内に位置していることが分かり、創建期の本堂基壇に伴う遺構と考えることができる。

創建期（Ⅰ期）の本堂基壇の四周のうち、西裾は、後述するSX244の上面に位置する幅約1.7ｍ・深さ約30cmを測る逆台形の断面形状を呈する溝状の遺構（以下、SD06と仮称する。）が、基壇の裾部を巡る浅い溝にあたる可能性が考えられる。ＳＤ07は平面検出は行われていないため、詳らかではないが、第100次調査における創建期の基壇の西裾の延長上に位置している。これに対して、本堂基壇の東裾部分については、調査区東端から約１ｍの部分において基壇裾部と考えられる窪みを断面において確認できている。

基壇以外の遺構としては、地山面から掘り込む井戸ＳＥ01・ＳＥ02がある。何れも一石五輪塔以外には出土遺物がなく、或いは更に古く、有岡城期の可能性もある。

Ｇ．第５遺構面の主な遺構

①　方形土坑（図版29）

方形土坑は調査区東半南壁際より検出した。土坑の大半は調査区外にあると考えられるが、検出状況から、土坑の形状は長方形と考えられる。

規模は、東西（長辺）全長約3.8ｍ・南北（短辺）検出長0.5ｍ・深さ約20cmを測る。土坑は、伊丹市教育委員会による第100次調査では検出されておらず、Ｂ地区と第100次調査区との間で南北辺は収まることが判明した。このことから南北（短辺）の規模は１ｍ以内と捉えることができる。

土坑は全体に厚さ５cm前後の粘土を貼り付けており、⑫層によって埋没している。性格は不明であるが、創建期の本堂基壇部分に、創建期に掘られていることから、本堂基壇に伴う遺構と捉えることはできる。

②　溝状遺構ＳＸ244

ＳＸ244は、南北方向に走る溝状遺構である。先述したＳＤ05が埋没してゆく最終段階において流れ込んできているか、もしくは、埋没後に流れ込んできている。上層には、ＳＤ07が重複して存在している。

溝の断面形状は皿状を呈しており、規模は幅約1.2m・深さ約10cmを測り、約1.5m分を検出した。溝は北側において不分明となる。創建期（Ⅰ期）の本堂基壇の西裾に位置していること、また、走行についても、本堂基壇の西辺の向きと矛盾のないことから、SD07をＳＸ244の一部と考え、ＳＸ244自体が、基壇の裾部を巡る浅い溝であった可能性も残るが、出土遺物の時期からは、創建期以前の遺構である可能性が高い。

溝内からは多量の土師器皿（566～572・574・576・577・580・587）が出土している。皿の時期は15世紀末から16世紀前半まで遡ると考えられる。

③　井戸ＳＥ01（図版29）

調査区西半部より検出した。井桁は一石五輪塔によって造られており、基底の一石が残っていた。井桁の掘り方は楕円形を呈しており、長軸約1.6m・短軸約1.3m、検出面から約15cmの深さ、井桁の内径は約１ｍを測る。

井側は径約0.9mを測り、約２ｍ掘削したが、安全のため、基底部までは掘削できなかった。

④　井戸ＳＥ02（図版29）

調査区西半部北壁際より検出した素掘りの井戸である。径1.1mを測る。約１mの深さまで掘削したが、安全のため、基底部までは掘削できなかった。

Ｈ．第６遺構面の概要（図版29）

第６遺構面は、鎌倉時代と古墳時代後期と考えられる遺構である。

鎌倉時代の遺構は、溝ＳＤ02・ＳＤ03・ＳＤ04がある。

古墳時代後期の遺構は、溝状遺構ＳＫ59がある。

また、詳細な時期は、不明であるが、鎌倉時代から室町時代にかけて存在したと考えられるＳＤ05がある。

Ｉ．第６遺構面の主な遺構

①　溝ＳＤ02（図版29）

ＳＤ02は東西方向に走る溝である。幅約１m、深さ15cmを測る。ＳＤ02は東へ延び、Ｃ地区においても東西方向で約25m分検出されており、更に東端で南へ直角に曲がることが確認されている。

②　溝ＳＤ03・ＳＤ04（図版29）

ＳＤ03は幅0.9m・深さ0.28m・検出長4.6m、ＳＤ04は幅0.8m・深さ0.15m・検出長７mを測り、約１mの間隔を空けて、両者は平行して南北方向に走っている。流末は共に、ＳＤ02と約１m前後の空間を空けて終わっており、計画性を伺せる。また、ＳＤ03では溝肩に約15～20cmの川原石を側石として並べている。溝内の出土遺物から各溝の時期は鎌倉時代と推定される。

③　溝ＳＤ05

ＳＤ05は、調査区の東壁中央から出現して西向きに走り、やや斜行して調査区西半において南壁へと消える幅約3.5m・深さ約１m前後、浅いＵ字形の断面形状をもつ溝状の遺構である。ＳＤ05はその大半が、基壇下に潜っているため、下層への断ち割りトレンチによってのみ把握している。このため、不明な点が多いが、ＳＤ02と切り合い、新しいと考えられる。また、浅く開く断面形状から、自然流路の可能性も高い。溝内からは、瓦片が出土しているが、時期を決定できるものは乏しい。後述するSX244はＳＤ05が埋没してゆく最終段階において流れ込んできているか、もしくは、埋没後に流れ込んできている可能性が高く、大まかには、鎌倉時代以降、室町時代末までの間に機能していたと考えてよいであろう。

④　溝状遺構ＳＫ59

溝状遺構ＳＫ59は、調査区南西隅において検出している。幅約90cm・残存長約１m・深さ20cmを測るが、ＳＤ02に切られ、形状・性格ともに判然としない。須恵器片が出土しており、古墳時代後期と推定される。

（６）本堂遺構について（図版27・28）

本堂の基壇遺構については、各面の概要の箇所において部分的に触れてきた。ここでは、本堂遺構の変遷を明確にするため、第２・３・４・５遺構面の状況について、まとめておきたい。

Ａ．第５遺構面形成時の本堂遺構（図版28）

第５遺構面における本堂遺構については、詳らかな部分が少ない。伊丹市教育委員会の第100次調査

では、本調査の火災層Ⅴのより創建期と考えられる本堂遺構を検出している。[1]

第100次調査において検出された基壇は東西12．8mと報告されている。本調査区では、第100次調査において検出された基壇の裾部にあたるものとして、西側のSX244及び調査区東端の落ちがある。

第5遺構の基壇に伴う礎石・抜き取り穴は、礎石1下層・ＳＫ72・ＳＫ66・ＳＫ65・ＳＫ86があげられる。礎石の据え付け穴の規模は1ｍ前後である。

礎石1下層とＳＫ74の間隔は約2ｍ、ＳＫ74・ＳＫ66、ＳＫ66・ＳＫ65の間隔はそれぞれ約4ｍ、ＳＫ65･ＳＫ86の間隔は約2ｍである。このことから、創建期の本堂遺構は、身舎東西2間（8ｍ）、に半間（2ｍ）の庇部が付くことが判明した。この柱配置は、第100次調査においても確認されており、南北2間（12ｍ）、東西2間（8ｍ）の身舎に、半間（2ｍ）の庇（もしくは縁）が東・西・南3方に巡ることが判明した。北面の庇については柱穴が調査区内で検出されておらず、なかった可能性が高い。

第5遺構における基壇の規模は、第100次調査の調査結果を勘案するならば、東西12.8mを測る。南北については、北側の基壇裾が第5遺構においては不分明のため、推測となるが、第4遺構面の基壇裾から推定するならば、南北16m程度と考えられる。

また、礎石穴列の内側（南側）を中心に調査区内では19個の柱穴及び礎石据え付け穴が検出されており、時期差のある小規模な礎石建物もしくは、基壇に伴う何らかの施設が存在した可能性が高い。

Ｂ．第4遺構面形成時の本堂遺構

第4遺構面は第100次調査において検出したⅡ期にあたる。

第4遺構の基壇に伴う礎石・抜き取り穴は、第5遺構面と同様に、礎石1下層・ＳＫ72・ＳＫ66・ＳＫ65・ＳＫ86があげられる。礎石の据え付け穴の規模は1ｍ前後である。

基壇の規模については、第5遺構面に存在した裾部の溝はなく、不明である。

Ｃ．第2遺構面・第3遺構面形成時の本堂遺構（図版27）

第3遺構面における本堂遺構は詳らかではないが、第2遺構面の礎石の幾つかが、第3遺構面から継続していることから考えて、第2遺構面において認識できる本堂に近い規模の建物が存在した可能性がある。

第2遺構面に対応する礎石は、平面では、礎石1以外には検出されていないが、調査区の南壁断面において6ヵ所、調査区の東壁断面において1ヵ所礎石もしくは礎石据え付け穴もしくは抜き取り穴が確認されている。このことから、本堂遺構は、身舎東西4間（約12.5m）、に東西両側に幅1.5m程度の庇部が付くことが判明した。但し、北西隅には礎石はなく、墓道に合わせて庇が切れていたと考えられる。

2. C地区

（1）遺構の概要

C地区はB地区の東隣に接して設定されており、現柿衛文庫の北側に位置し、東辺は県道13号尼崎池田線に面している。調査区は南北長31.4m・東西長12～15.5mの変形5角形を呈しており、約367.5㎡について調査を実施した。

当該地は、大正4年の地籍図では宅地となっており、調査は近現代の盛土とゴミ穴の一部を機械力にて除去した後、人力による精査を実施した。

調査の結果、幾度かの火災に伴うゴミ穴など近代の宅地に係わる遺構の他、江戸時代の酒蔵・酒造関係の遺構・鎌倉時代の溝・木棺墓を検出した。

これら各時期の遺構面は、地山面上から形成が始まり、基本的には火事と片付け・整地（盛土）の段階を踏んで嵩上げされ、現地表に至っているが、現代の家屋解体に伴うゴミ穴や防空壕の掘削によって攪乱を受けており、遺構が消失しているものもある。

（2）基本層序と遺構面の設定（図版7）

調査区の南壁面において看取できる基本的な層序は以下の通りである。

C地区の土層堆積は基本的にはB地区と同じである。第1面の火災層が余り明瞭に残っていないことを除けば、以下に4枚の火災層が看取できる。最下層の地山面に中世の遺構があり、整地層・土壌層・火災層が積み重なり幕末へと至っている。

基本的な層序は以下の通りである。

①盛土・②土壌層Ⅰ・③火災層Ⅰ（不分明）・④整地層Ⅰ・⑤火災層Ⅱ・⑥整地層Ⅱ・⑦火災層Ⅲ・⑧整地層Ⅲ・⑨火災層Ⅳ・⑩土壌層Ⅳ・整地層Ⅳ・⑪火災層Ⅴ・⑫土壌層Ⅴ・⑬地山層

①層盛土は調査前の宅地移転工事に伴うものである。

②層土壌層Ⅰは、移転前の宅地に伴い形成された土壌層である。調査区の西端部分以外は削られ残る部分は少ない。

③層は整地層Ⅰ上に薄く広がる炭・焼土層であるが、B地区に比べ遺存状況が悪く殆ど残っていない。（火災層Ⅰ）

④層は火災層Ⅰ・Ⅱ間に広がる厚さ15cm前後の黄茶色砂礫よりなる整地層Ⅰである。上面より礎石の据え付け穴が切り込む。

⑤層は整地層Ⅱ上に薄く広がる炭・焼土層である。調査区西側では標高約18.8m前後で出現し、調査区東側では厚さ20cmを越え、厚く堆積している。

⑥層は火災層Ⅱ・Ⅲ間に広がる厚さ25cm前後の黄褐色砂礫・灰色極細砂よりなる整地層である。調査区東半部では整地層は厚み約5cmと薄い。整地層Ⅱ。

⑦層は⑧層上面に被覆する厚み10cm弱の炭・焼土層である。調査区の東側において比較的厚く、調査区西側では、地山の出現レベルが高いため、⑥層形成時に削られ残っていない。火災層Ⅲ。

⑧層は標高18.50m前後において広がる黄褐色シルトまじり極細砂よりなる整地層Ⅲである。

⑨層は調査区全域に厚く広がる火災層－炭・焼土層である。西半部では火災層Ⅲと重なり不分明となる。（火災層Ⅳ）

⑩層は標高18.20m前後において広がる整地層である。層厚は薄く、黄褐色砂礫・灰色粗砂などを敷き延べて形成されている。土壌化する部分もある。土壌層Ⅳ・整地層Ⅳ。

⑪層は⑫層上に検出されている炭・焼土層である。西半部で厚く、20cmを越える部分も存在する。（火災層Ⅴ）標高18.15m前後。

⑫層は⑬層上に被覆する土壌層－ 褐灰色シルト砂質土である。鎌倉時代の遺構に被覆し、溝の埋土ともなっている。土壌層Ⅴ。標高18.00m前後。⑫層上が第５遺構面。

⑬層は地山である。標高18m前後で出現している。地山面上が第６遺構面。

以上、調査の結果、少なくとも５回の火災が平面・土層断面において確認された。このため、調査は、火災層を鍵層として実施することに努めた。しかし、火災層が薄い部分も多く、実際の調査においては、基本的には、移転前の屋敷の面より下を大きくに３面に分けて調査を実施した。即ち、④層上面－火災層Ⅱ下の整地面上を第Ⅰ面（第１・第２遺構面）、⑧層上面を主として検出した火災層Ⅲ下の整地面上（第３遺構面）を第Ⅱ面とし、⑩層上面－火災層Ⅳ下の整地面（第４遺構面）上の遺構・⑫層上面－火災層Ⅴ下の整地面（第５遺構面）上の遺構については、調査期間の制約もあり、最終的には第６遺構面－地山面において検出し、全景写真・航空写真撮影を行い、第Ⅲ面（第４・第５・６遺構面）とした。

Ｃ地区の層序は、Ｂ地区と基本的に違いはないが、平面精査を実施した遺構面は、Ｂ地区では第Ⅰ面では第１遺構面、第Ⅱ面では第２遺構面、第Ⅲ面では第３～第５遺構面を調査対象としたのに対し、Ｃ地区では、第Ⅰ面では第１・第２遺構面、第Ⅱ面では第３遺構面、第Ⅲ面では第４遺構面～第６遺構面の遺構を調査対象として調査を行っている。

以下、各面の遺構について概略を述べる。

（３）第Ⅰ面（第１遺構面～～第２遺構面）の遺構（図版30）

Ａ．概要

第Ⅰ面では幕末から近代にかけての生活面を検出した。

Ｃ地区周辺は大正４年の地籍図では宅地とされており、東側の泉町通りに面して、細長い地割りが記されている。Ｃ地区は泉町通りと鍋屋町通りの角地にあたる一筆をほぼ調査区の中に取り込んだ地点である。

調査の結果、泉通りに面した東側では礎石建物１棟・井戸２基（ＳＥ03・ＳＥ04）・コンクリート水槽１基・ゴミ穴群、中央部には池２基、竈２基、更に西端では防空壕１ヵ所・ゴミ穴（ＳＫ44）を検出した。

また、調査区の南端からは東西方向に走る石組の溝が検出されている。

調査区の南端を東西方向に走る石列溝は、大正４年の地籍図においても記されているもので、南側の一筆との境に存在する。第１面においては北側を石組とし、南側（即ち隣の宅地側）については平瓦を並べて溝肩としている。この溝は、Ｂ地区の石列溝とは位置を違え、同一の地割り上には存在しない。溝底には一部漆喰が遺存している。また、第Ⅱ面の調査に伴い、第Ⅰ面の溝の下層では、第Ⅰ面の溝に比べ小振りな川原石によって組まれた溝を検出し、溝底にはやはり漆喰が敷かれていた。このことから溝は少なくとも伊丹郷町において溝に漆喰が使用される幕末まで遡ることが確かめられた。

調査区の東半部には礎石建物が一棟検出されている。礎石は38箇所で検出されており、径約50cm程度ものを使用している。

礎石建物の規模は明確ではなく或いは複数棟が重複している可能性も残るが、東端に並ぶ一列を東の梁行きと考え、東西棟行き14.8m・南北梁行き7.4mの建物を想定しておく。井戸ＳＥ04は建物内に設置された井戸であろう。また、建物の範囲と重複し、南半部を中心に土間が検出されている。

これに対し、西側には池が存在することから、主に庭として使用されていたらしく、建物は存在しない。

調査区北壁際において検出された２基の竈は煉瓦を使用し、何れも近代のものであるが、竈に伴う上屋施設は確認されていない。

Ｂ．第Ｉ面の主な遺構

① 礎石建物ＳＢ01（図版30）

調査区の東半部において検出された礎石建物である。礎石は38箇所で検出されており、径約50cm程度ものを主に使用している。

検出した礎石のうち建物の隅に据えられたと考えられるものは一石のみで、その大半は内部の柱支えか、梁行き・桁行きの地桁に伴うものである。残存した礎石の配置から建物の規模及び間取りを復元することは難しく、或いは複数棟が重複している可能性も残るが、現状では１棟と考えておく。調査区東端に並ぶ一列を東の梁行きと考え、東西棟行き14.8m・南北梁行き7.4mの建物を想定しておく。礎石間の距離は、約0.9mを測るものが大半であり、その点から建物の規模は、北西の東西４間・南北３間を欠く、東西棟行き16間、南北梁行き８間の規模の建物と言うことができよう。

建物の範囲と重複して、南半部を中心に三和土を敷いた土間が検出されている。これに対して北半分には焼土が広く検出されており、建物内での利用の仕方に差異があることが判る。後述する井戸ＳＥ04と北西隅にある水槽ＳＸ03はいずれも建物に伴うものと考えられる。

ＳＥ04・ＳＸ03が建物に伴う施設であるのに対して、南桁行き際に並行に存在する瓦列は、後述する石列溝北肩の延長の施設と考えられる。即ち、石列溝よりも建物は後に建てられ、建物の範囲の内側に瓦列が残存したと捉えることができる。石組溝の西半部は建物の範囲から免れたため、残存し、そのまま敷地内の排水に利用されたと考えられる。

② 石列溝（SD01～SD03）（図版30・31）

石列溝はＣ地区南端を東西方向に流れる溝である。溝は19世紀代を通じて幾度か造り替えられたと考えられ、少なくとも第１面から下層の第２面に至るまでにSD01～SD03の３度の溝を検出した。

SD01は先述したように北溝肩を主に径約30cm前後の石で、南溝肩は主に桟瓦によってつくり出している。溝は、調査区内を縦断して存在していたと考えられ、途切れ途切れであるが全長約30m分を検出した。規模は、幅（溝内法）約25cm・深さ約７cmを測る。

SD02はSD01の下層より検出している。下層のSD03の溝底に漆喰を貼ったものである。途切れ途切れであるが、残存延長約10m分を検出した。規模は幅（溝内法）約20cm・深さ約15cmを測る。

SD03はSD01の下層より検出している。南北両溝肩を主に径約15cm前後の石を並べて造っている。途切れ途切れであるが、残存延長約10m分を検出した。規模は幅（溝内法）約40cm・深さ約15cmを測る。

③ 井戸ＳＥ04（図版30）

調査区東半部より検出した瓦井戸である。径約1.2mの円形の掘り方に一枚約25cmの井戸瓦を使用して内径約90cmの井筒を造っている。井戸瓦は２段分残っているが、掘り方上面のレベルから推定すると更

に２段は上部に積まれていた可能性が高い。

井筒の下面からは全長1.4 m・幅30cmの見地石２本と全長0.9m・幅30cmの見地石２本によって工の形に組み合わせた井桁が検出されている。井戸は安全のため完掘できなかったため、深さなどは不明である。なお、このＳＥ04はＳＢ01の屋内に設えられた井戸と考えられる。

（４）第Ⅱ面（第３遺構面）の遺構

Ａ．概要

第Ⅱ面（第３遺構面）では18世紀代を中心とした生活面を検出した。

第３遺構面は、火災層Ⅲと火災層Ⅳの間に営まれた整地面上の遺構を中心とした遺構群である。出土遺物及びＢ地区の調査成果を勘案するならば元禄12年以後、宝永・明和年間の火災以前に営まれた遺構と捉えることができよう。

第２面では、酒蔵及び酒造関連遺構が数多く検出された。遺構は全域に及んでいる。特に、調査区のほぼ全域を覆って巨石を使用した礎石が点在しており、大規模な建物の存在が伺える。

当該地点ついては、後述するように、宝暦７年（1757年）付けの伊丹の酒造家綛屋四郎三郎が発給した土地売買に関する文書が残っており、検出された18世紀代の遺構はこの綛屋の酒造施設である可能性が高い。加えて、当該地周辺には多数の酒蔵・酒造関連施設が現存しており、南側には『岡田家』が現存している。加えて南隣の伊丹市美術館・柿衛文庫建設に伴う調査においても岡田家に関連した酒蔵関連施設が検出されている。

礎石建物は調査区全域を覆う大規模なものと考えられるが、具体的な規模は明確ではない。また、複数棟が重複している可能性も高い。店舗・釜屋と洗い場・酒蔵といった個々の機能をもつ複数の建物が複合し建物群を構成している可能性が高いと考えられるが、ここでは、遺構の上屋構造の復元には言及できないため一棟の建物として記述する。

建物の規模は、溝によって光明寺側と区画されている西側と現道（泉町通り）に面する東側についてはほぼ調査区内で建物は収まり、棟行き10間（約30m）と考えることができる。北側については、現鍋屋町通りに北面しているが、礎石16と切り合って、酒搾り作業に伴う男柱と考えられる遺構（SK157・SK106）が調査区北壁沿いで検出されていることから、更に建物の範囲は北側に広がるものと考えられる。現道下へ遺構が延びることはB地区光明寺墓地においても確認されており、江戸時代の通りの幅が現道よりも狭かった可能性が考えられよう。また、南側については、調査区南壁に複数の竈があり、調査区南壁を越えて建物の範囲が広がることは確実である。調査区東南端の矩形に張り出した調査区端から礎石41が検出されており少なくとも建物の南端は礎石41まで延びる可能性が考えられる。以上のことから推測される建物の規模は、東西棟行き10間（30m）・南北梁行き３間（12.5m）以上の規模が考えられるのである。

建物に伴う遺構としては、土坑・井戸・竈・男柱状遺構などがある。調査区東端、礎石32～42を結ぶ線より東側については小規模な土坑が密集して検出されている。これらはゴミ穴として使用されたものが多く、通りに面し、店舗などに使用された空間であることが窺われる。

調査区北東端では先に述べた男柱状遺構（SK157・SK106）が存在しており、男柱状遺構の南側は遺構が疎らな空間である。

調査区の中央には大型の井戸SE07及び近接して石積の焚口をもつ大型の竈10・竈11が検出されている。これらは酒米蒸しに使用されたものであろう。また、竈10・竈11の南側には洗い場であったと考えられる石敷が検出されている。更に調査区中央やや西よりの南壁付近にも大型の竈９が顔を見せている。竈10・竈11の西側には火事片付けのゴミ穴が大きく掘られているが、それ以外は遺構が疎らな空間となっている。

調査区の西半部には小規模な竈７・８及び瓦積みの井戸SE06が存在している。

以上のことから、遺構は東からゴミ穴群・男柱と空間・井戸と大型竈・空間・小規模な竈と井戸の順に並んでいることが窺える。

第１面において検出した石組溝（SD01）は、第２面では小規模な石を使用した漆喰貼りの溝（SD02・03）となり、礎石建物を含む他の遺構より上層で営まれている。このため、礎石建物が存在した時点（18世紀）には南側の敷地との間に地割りはなかったものと考えられる。

B．第Ⅱ面の主な遺構

① 礎石建物ＳＢ02（図版32）

使用された礎石は、一辺約１m前後の方形の掘り方をもつ径50cm前後の石を重ねた大型の礎石と、礎石の掘り方が明瞭でない、径30cm前後の石による小規模な礎石に分かれている。そのうち、１mを越える掘り方をもつ礎石17・礎石19・礎石67・礎石１を巡る東西棟行き８間（約28m）・南北梁行き２間（約８m）の範囲に大型の礎石建物が立っていたことは確実であろう。更に、現道（泉通り）に面する東側については調査区断面に礎石の掘り方の可能性がある土坑ＳＫ20や、やや規模が小さい礎石39があること、多数の土坑が調査区の東端に密集していることから少なくとも現調査区際から１間（約２m）分は東へ延びる可能性があり、東西棟行き９間（約30m）の規模が考えられる。

梁行きについては、不明な点が多い。調査区東端に想定される柱の並びの南への延長上には、調査区端において礎石41が検出されていて、建物の南端は礎石41まで延びる可能性が考えられる。北側については、現道に北面しているが、礎石16と切り合って、酒搾り作業に伴う男柱遺構（SK157・SK106）が調査区北壁沿いで検出されていることから、更に建物の範囲は北側に広がるものと考えられる。現道下へ遺構が延びることはB地区光明寺墓地においても確認されており、江戸時代の鍋屋町通りの幅が現道よりも狭かった可能性が考えられよう。C地区の南側において調査・修理が行われた旧岡田家の酒蔵[22]では梁行きが４間のプランとなっており、その点からも調査区内で検出できた梁行き２間分以上に北側へ広がる可能性は高いと考えられる。

南側については、調査区南壁に複数の竈があり、調査区の南壁を越えて建物の範囲が広がることは確実である。但し、建物の南側については、礎石２・４・10と切り合い重複して東西に走る溝SD03及びSD03の南肩には石列が存在している。溝は建物の南側を巡る地桁の痕跡の可能性が考えられ、同様の石列は旧岡田家の酒蔵においても検出されており、酒蔵壁に伴う布石礎石と認識されている。また、ＳＢ02では、礎石19・礎石62・礎石10・石列・礎石54の桁行と平行して約50cm内側に礎石44・礎石46・礎石63・礎石61・礎石58・礎石56・礎石59・礎石60・礎石４・礎石22の列が見受けられる。桁行きに２列に延びる礎石列は旧岡田家においても検出されている。これらの点から礎石19・礎石62・礎石10・石列・礎石54の桁行き部分がＳＢ02の南壁であった可能性は高いと考えられる。

以上のことから推測される建物の規模は、東西棟行き９間（30m）・南北梁行き３間（８m）以上の規

模となる。

では、竈９を中心とした調査区南壁に接する遺構群はSB02に属さないのであろうか。明確ではないが、SB02の南桁行と平行して、礎石48・礎石13・礎石25が存在している。礎石25はSB02の礎石４と接していること、礎石48についても礎石47と近接して並んでいることから、SB02と結合した建物が南側に存在した可能性が考えられる。旧岡田家では、釜屋部分が突出しているプランが認められることから、SB02においても少なくとも東西桁行17m分においてはSB02と結合した建物があった、もしくはSB02から突出した建物部分が存在した可能性が考えられる。機能的には、井戸・竈が置かれた釜屋部分であったと考えられる。

② 井戸ＳＥ06（図版30・37）

調査区西端より検出した。井桁が瓦積みで、井側が素掘りの井戸である。井桁の掘り方は直径約1.35ｍの円形を呈している。井桁は掘り方内に水平に平瓦を９段積んでおり、瓦と土が互層になるように積まれている。残存する高さは約45cmであるが、ＳＥ06は上部を現代の攪乱によって損壊しているため、更に40cm以上はあったと考えられる。

井側は直径約90cmの円形を呈している。深さは更に１ｍ以上掘削したが、安全に配慮し完掘していない。

③ 井戸ＳＥ07（図版30）

調査区中央東より検出した。大型の竈10・11に近接して存在しており、酒米蒸しに使用された井戸と考えられる。

井戸は、井側が素掘りの井戸である。井筒の径は約2.1ｍを測り、井側は若干窄まり、直径約1.35ｍの円形を呈している。深さは１ｍ以上掘削したが、更に下へと続いている。

④ 竈９・ＳＫ93（図版36）

調査区南壁に沿って一部が検出されている。酒米蒸し用の２基連基型の半地下式の大型竈であろう。焚口のある方形の掘形（ＳＫ93）と燃焼室（竈９）の一部を検出している。

掘形（ＳＫ93）は燃焼室側の壁については瓦と土を互層に積んで壁を造っているが、それ以外については、径30cm～50cmの自然石による石積みによって壁を造りだしている。

掘形の規模は、全長約1.70ｍ・検出幅1.0ｍ・深さは床面まで約1.0ｍを測る。

燃焼室の規模は、内法で直径約1.35ｍ・高さ0.88ｍを測る。

燃焼室の底部に据えられていたと考えられる灰落としの溝状の施設は調査区外もしくは調査区の側溝にあたり判然としない。

⑤ 竈10・竈11・ＳＫ100（図版35）

調査区中央より検出した。竈10・竈11・ＳＫ100は酒米蒸し用に使用された半地下式の２基連基型の大型竈である。

掘形（ＳＫ100）は、焚口側を除く３方の壁を径30cm～40cmの自然石による石積みによって壁を造りだしている。掘形の規模は、全長約1.55ｍ・幅2.55ｍの横長形を呈しており、残存する石組みの深さは床面まで約0.65ｍを測る。掘形の北西隅には、高さを違えて、石が３段に据えつけられており、焚口に下りる階段としていた。

燃焼室は２つあり、焚口に向かって左手にあるやや小規模な竈10と右手にある竈11がそれにあたる。

竈10は、掘形の軸線に対してやや北向きに振って営まれた竈である。

規模は内法で直径約1.17m・高さ約0.70mを測る。燃焼室の壁は黄灰色細砂質極細砂を用いて構築され、石材が骨材として埋め込まれている。

燃焼室の底部には内法で長さ約1.40m・幅約20cm・深さ15cmの『凹』形に組んだ石囲いの灰落としが設けられている。使用された石材の厚みは8cm前後を測る。

竈11は、掘形の軸線に対して平行に営まれた竈である。

規模は内法で直径約1.30m・高さ約0.70mを測る。燃焼室の壁は赤褐色細砂質極細砂を用いて構築され、内壁には補強材として焚口を含め全面に幅20～40cm・高さ40cm前後、厚み15cm内外の短冊形の石材が巡っている。

燃焼室の底部には内法で長さ約1.70m・幅約30cm・深さ約15cmの『凹』形に組んだ石囲いの灰落としが設けられている。使用された石材の厚みは側石で13cm前後・底石では約20cmを測る。

⑥　男柱状遺構（SK157・SK106）（図版34）

SK157・SK106は調査区東半の調査区北壁際より検出された土坑である。規模の近似した隅丸方形の土坑が約30cmの間隔をおいて一列に並んでおり、SK157は長辺145m・短辺0.85m・深さ1.2mを測る。SK106は長辺1.5m・短辺0.8m・深さ1.2mを測り、両者は幅50cm・深さ約20cmの溝によって結ばれている。

2基の土坑は直に深く穿たれており、ともに灰色もしくは灰茶色細砂を埋土とし、ゴミ穴・火事片付けといった廃棄土坑とは様相を異にしており、溝で結ばれた遺構配置からも一つの遺構（酒造に係わる装置）の可能性が高い。

酒蔵には酒搾りの圧搾作業に使用するために建てる柱－男柱が存在する。深く穿ったSK157・SK106は2基並んだ男柱遺構の掘り方であった可能性が考えられる。但し、SK157・SK106には男柱とセットで存在する圧搾された酒を溜める垂壺の遺構がないなど、従来の調査例とは遺構の形状に違いがあるため、断定はできず、酒米をつり上げる起重機である阿弥陀車の柱の掘り方である可能性も残る。

（5）第Ⅲ面（第4遺構面・第5遺構面・第6遺構面）の遺構（図版39）

A．概要

第Ⅲ面において検出した遺構は大きく、第4遺構面～第6遺構面の遺構に分かれる。

第4遺構面は17世紀前半から元禄15年の大火（1705年）以前、第5遺構面は有岡城時代から17世紀前半、第6面は鎌倉時代である。

B．第4遺構面の遺構

第Ⅲ面は地山まで掘削を行って遺構検出を行っているため、第4遺構面に伴う遺構と確定できるものは少ない。

第4遺構面の遺構と考えられるものとして、鍛治炉・土坑ＳＫ185・ＳＫ187・ＳＫ109・ＳＫ173・ＳＫ198・ＳＫ161・ＳＫ170・ＳＫ171・ＳＫ172があげられる。

鍛治炉遺構を除いた土坑群は、楕円もしくは不整円形をしており、概ねゴミ穴として掘られたものと理解できる。

①　鍛治炉遺構（図版39・41）

鍛冶炉遺構は、調査区中央北壁よりから検出した。井戸ＳＥ10と切り合い先行する。平面形状は、長軸約2.00m強・短軸約1.18mの不整形な長楕円形を呈する。断面形状は深さ約25cmの浅い皿状である。土坑内からは碗型鉄滓・炉壁片が出土している。

Ｃ．第５遺構面の遺構

第５遺構面の遺構と考えられるものは、掘立柱建物がある。

掘立柱建物を構成する柱穴の一部には根石として一石五輪塔・石仏を使用しているものがあり、江戸時代前期の火災層Ｖの下より柱穴が検出されたこと、第６遺構面として認識している鎌倉時代の溝を切って掘られていることから、有岡城時代の遺構の可能性も考えられる。

掘立柱建物は３棟検出されている。

① 掘立柱建物Ａ（図版39）

掘立柱建物Ａは調査区の中央部において検出された。桁行き方位をＮ82°Ｅにとる、東西桁行き８間（約12.5m）・南北梁行き５間（約8.7 m）の規模が推測される。柱穴の大半は後世の遺構によって損壊・消失しており、径35cm内外の柱穴が20個以上検出されているが、建物の構造・規模は明らかではない。内側の柱が殆ど検出されないことから、方形の柵であった可能性も残る。

② 掘立柱建物Ｂ（図版39）

掘立柱建物Ｂは調査区東半部において検出された。掘立柱建物Ａと切り合い新しい。桁行き方位をＮ80°Ｅにとる、東西桁行き４間（約８m）以上・南北梁行き３間（約８m）の規模が推測される。柱穴の大半は後世の遺構によって損壊・消失しており、径30cm内外の柱穴が10個以上検出されているが、建物の構造・規模は明らかではない。

③ 掘立柱建物Ｃ（図版39）

掘立柱建物Ｃは調査区東半部において検出された。掘立柱建物Ｂと重複するが先後関係は判らない。桁行き方位をＮ80°Ｅにとる、東西桁行き２間（約4.3m）以上・南北梁行き３間（約４m）の規模が推測される。柱穴の大半は後世の遺構によって損壊・消失しており、根石を持つ径40cm内外の柱穴が７個検出されているが、建物の性格・規模は明らかではない。

Ｄ．第６遺構面の遺構

第６遺構面の遺構と考えられるものは、墓及び溝がある。

① 墓ＳＫ162（図版41）

墓（SK162）は調査区の中央東北から検出された。

墓は木棺墓の可能性が高く、不整な隅丸長方形の墓壙内に木棺の痕跡と見られる有機質を含んだ長方形の変色部がみられた。

墓壙の規模は全長約1.75m・幅約0.80m・深さ約28cmを測り、横断面形状は逆蒲鉾形を呈している。木棺の痕跡は全長約1.19m・北側の小口幅約50cm・南側の小口幅約35cmを測り、墓壙底に最大で約４cmの窪みとして痕跡が残っている。

木棺は小口の幅の広い北側が頭部であったと考えられ、棺外には北側小口の西側の墓壙壁際に、３枚の土師器皿と１個の白磁碗が副葬されていた。

土器は、３枚の土師器皿が白磁碗の下に置かれた状態で、棺側に傾いた状態で出土している。

② 溝　ＳＤ10・ＳＤ13・ＳＤ14・ＳＤ15（図版39・40）

鎌倉時代の溝は４本検出された。この内、ＳＤ15はＢ地区から延びるもので、Ｂ地区ではＳＤ02と呼称している。

ＳＤ15はC 地区では調査区西壁から出現し、東へ約25m走り、直角に曲がり、約6.5m南へ流れて調査区外へと延びている。溝の走向は、N75°Ｅを測り、幅1.6 m前後、深さ約15cmを測り、断面形状は浅い皿状を呈している。

ＳＤ14はＳＤ15と約1.4mの間隔をあけ、南北方向に並行する。調査区の南壁から出現し、北へ約５m延びる。溝の先端はＳＫ198に切られ定かではない。走向をN15°Ｗにとり、幅50cm前後、深さ約５cmを測る浅い溝である。溝の中程にはＳＤ13が取りついており、同時期に存在したと推測される。

ＳＤ13は調査区東壁から出現し、西へ約５m走り、ＳＤ14へと取りついている。溝の走向は、N70°Ｅを測り、幅１m前後とやや広く、深さ約20cmを測り、断面形状は皿状を呈している。

ＳＤ10は調査区東壁から出現し、西へ約９m走り、ＳＫ162に切られて消滅している。溝の走向は、N80°Ｅを測り、ＳＤ13・ＳＤ15とほぼ並行して存在する。溝の規模は中程では幅１m前後、深さ約20cmを測る。溝は幾度か掘り直された可能性がある。溝の東･西端はともに1.5 m～２m程度に広がっており、あるいは幅１m・長さ６m程度の張出部が存在した可能性もある。

これら４本の溝の時期は出土遺物に乏しく時期が判然としないが、12世紀後半～13世紀前半期の遺物をもつＳＫ162に切られて先行することを含め、12世紀代と推定される。

また、溝の性格については、ＳＤ15はＢ地区を含め東西方向65m以上の長さをもち、直角に曲がることから、集落や屋敷地に伴う区画溝の可能性があげられる。

４本の溝は中世集落に伴う区画溝と考えておく。

引用・参考文献

（１） 小長谷　正治　1992「Ⅳ－５　有岡城･伊丹郷町　第100次調査」『伊丹市埋蔵文化財調査概報１』伊丹市教育委員会

（２） （財）文化財建造物保存技術協会編　2000『重要文化財　旧岡田家住宅』保存修理工事報告書　伊丹市

Ⅳ. 出土遺物

1．土器・陶磁器

（1）土師器及び土師質土器

土師器及び土師質土器の器種としては、皿・鍋・火舎・焜炉・甕・壺および同蓋・火消壺および同蓋・焼塩壺・灯明具などがある。これらのうち、焜炉や火消壺の中には陶器と考えた方がよいものも存在し、火消壺および同蓋は湊焼の可能性が高いが、今回は土師質土器として扱った。

ここでは、各器種ごとにその概略ならびに特徴を述べる。

① 皿（図版69 556～591）

皿には、ロクロ使用のものとロクロ未使用のものとがある。

ロクロ使用のもの（584）は、底部切り離し技法は糸切りで、底部内面の不定方向ナデが認められないものである。

ロクロ未使用のものは、成形・調整技法からみると、内面ナデ・外面オサエの後、口縁部にヨコナデが施されるものと、ヨコナデが認められないいわゆる「手づくね」のもの（567・571・572・586・591）とがある。口縁部にヨコナデが施されるものは、底部の凹むいわゆる「ヘソ皿」の形態をとるもの（566・568 ～570・574・576・578・580・581・588）や16世紀末に西日本一帯で通有に認められる形態のもの（585）、底部が丸味を持ち体部からそのまま口縁部に至るもの（580・589）、底部が丸味を持ち体部からそのままやや尖り気味の口縁部に至るが厚手のもの（579・582・583・587）、底部が丸味をもたないもの（573・575・577）などがあり、バラエティーに富む。なお、573・575・577・582・583・591 の底部外面には、籠目痕が認められる。

② 鍋（図版66 532・図版69 592～598）

鍋には、いわゆる「叩き造り」のもの（Ⅰ類）と「型造り」のもの（Ⅱ類）とがある。

いわゆる「叩き造り」のⅠ類は、成形時に底部から口縁部まで叩き技法によって作るもので、成形時の叩き痕を残すⅠA類（592・593・595・598）と残さないⅠB類（532・594・596）とがある。いずれも、底部外面はケズリによって薄く整形され、底部内面はナデもしくはヘラナデ調整が施され、口縁部内外面はヨコナデ調整される。なお，ⅠB類は，口縁部外面のヨコナデ調整が口縁部下端まで及んでおらず，叩き痕を消した時のナデ調整が外面の体部上端～口縁部下端付近に認められる。

いわゆる「型造り」のⅡ類（597）は、底部の成形に凹型を使用するもので、口縁部を底部とは別個に粘土の積み上げによって造り、底部外面には成形時「離れ砂」の痕跡が認められる。口縁部内外面はヨコナデ調整されているが、底部内面にナデ調整が認められる。

これらの鍋の存続期間は、ⅠA類は16世紀末～17世紀後半、ⅠB類は17世紀前半～17世紀末、Ⅱ類は17世紀末葉～18世紀前半と考えられる。

③ 火舎（図版59 327・図版79 603・604）

火舎には、鉢状のもの（603・604）と円筒状のもの（327）とがあり、前者は3足を持ち、後者は吊手を持つ。

④ 焜炉（図版59 605）

焜炉（605）は、逆台形を呈し、長方形の焚き口部で、灰の掻き出し口を下部に持ち、体部外面には陽刻の文様帯がある。

⑤ 甕（図版68 564・565）

甕には、最大径を体部上位に持ち、口縁部の外反するもの（564）があり、体部内外面はナデ調整で、口縁部内外面はヨコナデ調整が施されている。なお、体部内面刷毛目調整、体部外面へラケズリの後ナデ調整のもの（565）がある。

⑥ 壺および同蓋（図版42 4～6）

壺には無頸壺に近い形態のもの（Ⅰ類）と直口壺（Ⅱ類）とがある。

Ⅰ類には体部の張り出しの強いもの（6）と弱いもの（4）とがあるが、いずれも粘土積み上げによって成形されており、体部と口縁部との境に段を持つ。なお、出土状況からは、5が前者に伴う蓋と考えられる。

⑦ 火消壺および同蓋（図版42～50）

火消壺には、ロクロ使用のもの（Ⅱ類）とロクロ未使用のもの（Ⅰ類）とがある。

Ⅰ類（1～3・8・10・11・13・15・17・18・20・22・24～28・30・32・34～36・38）は、粘土積み上げによって成形されており、体部内面に成形時のオサエの痕跡を残し、体部外面はナデ調整で、口縁部内外面はヨコナデ調整が施されている。

Ⅱ類は、Ⅰ類と同様に粘土の積み上げによって成形されるが、体部の粘土積み上げは2回に分けて行われている。また、1回目の粘土積み上げ部分が底部から外反気味ではあるがほぼ直線的に立ち上がるⅡA類（40～42・44・47・49・51・52・54～58・60・62・63・65・67・86）と大きく外反して立ち上がるⅡB類（69・71～73・76・77・79～81・83・84・88）とに分けられる。なお、88は、形態等の特徴からⅡB類に分類されるが、体部外面にはナデ調整が施されている。

また、出土状況からは、7・14・16・19・21・29・31・33・37はⅠ類に伴う蓋で、39・44・46・48・50・53・59・61・64・66・85はⅡA類に伴う蓋である。

これらの火消壺および蓋の存続期間は、Ⅰ類は18世紀前半、ⅡA類は18世紀中頃～末、ⅡB類は18世紀末～19世紀前半と考えられる。

⑧ 焼塩壺（図版59 339・図版69 599～601）

焼塩壺には、粘土積み上げによって成形されるもの（Ⅰ類）と粘土塊を刳り貫いて成形するもの（Ⅱ類）とがある。

Ⅰ類（339・599・600）は、内面に成形時のオサエの痕跡が確認できる体部はコップ状を呈し、端部がやや尖り気味に収まる口縁部は、内外面共ヨコナデ調整が施されている。また、Ⅱ類（601）は、筒状の体部内面には板状工具による粘土掻き取り痕が確認でき、端部が尖り気味に収まる口縁部は内外面共ヨコナデ調整が施されている。Ⅰ類・Ⅱ類共、17世紀代の所産と考えられる。

⑨ 灯明具（図版70 606・607）

灯明具には、灯明皿とひょうそくとがある。灯明皿（606）は、灯心立てを持ち、体部内外面のナデ調整の後、口縁部内外面にヨコナデ調整が施されている。ひょうそく（607）は、体部外面は刷毛目調整で、口縁部内外面はヨコナデ調整が施されている。

（2）陶器

陶器には産地別に見ると、丹波、備前、堺・明石、肥前、瀬戸・美濃、京・信楽・舞子・明石及び産地不明のものがある。ここでは、各産地別にその概要及び特徴を述べる。

① 丹波

いわゆる「丹波」の生産地を考えると、広義には、旧丹波国のうち現在兵庫県に編入されている篠山市・氷上郡の地域、旧播磨国のうち西脇市と多可郡・加東郡、旧摂津国のうち三田市を含む地域が考えられ、狭義には、篠山市・氷上郡の地域が考えられる。厳密には、後者で生産されたものを「丹波」と呼ぶべきであろう。しかしながら、出土品そのものからは明瞭に分別しがたいので、本報告では、あえて区別せずに両者を包括的に「丹波」と呼ぶことにした。

丹波には、甕・壺・片口・徳利・蓋・擂鉢・鉢・火入れなどがある。

(a) 甕（図版51 101～112・図版52・図版53・図版54 114・115・図版66 531・539・540）

甕には、口縁部が内彎気味に立ち上がるもの（Ⅰ類）と口縁部が外反気味に立ち上がるもの（Ⅱ類）、口縁部がいわゆる「T字状」を呈するもの（Ⅲ類）、口縁部がくずれた「T字状」を呈するもの（Ⅳ類）、口縁部がいわゆる「L字状」を呈するもの（Ⅴ類）とがある。

Ⅰ類（531）は、16世紀後半代に備前から技術移入して生産を開始したいわゆる「丹波系」の大甕の系譜を引くもので、口縁部外面に凹線を持つ。Ⅱ類の口縁端部は丸く収まるが、口縁部の外反度が強くほぼ水平方向に開くもの（540）と緩やかに外反するもの（110）とに分けられ、後者の体部外面の頸部から体部中位には凹線が巡る。

Ⅲ類には、体部外面にカキ目の認められるもの（ⅢA類）と地釉の上に上釉が施釉されるもの（ⅢB類）、地釉のみのもの（ⅢC類）とがある。ⅢA類の口縁部端部には2～3条の凹線が施されるが、体部外面のカキ目の施文範囲によって、頸部から体部中位に施文されるⅢA1類と体部上位にのみ限られるⅢA2類とに分けられる。また、ⅢB類の上釉の施釉方法には、流し掛け手法で施釉されたⅢB1類（101～103）と筒描手法によるⅢB2類（105）とがある。ⅢC類（104）は、外面に褐色釉、内面に灰オリーブ色釉が施釉されている。

Ⅳ類は、Ⅲ類に比べて体部上位の張りの少ない体部形態を呈し、筒描手法で2～3カ所の流し掛け風に施釉するもの（113・115）と筒描手法による流し掛け風の施釉とともに4～5条のカキ目を施文するもの（114・539）とがある。Ⅴ類には、最大径を口縁部に持つもの（107）と体部上位に持つもの（108）とがあるが、ともに施釉方法は筒描手法である。

また、窯詰技法の判るものには、胎土目のもの（103・107・113～115・539）と輪トチのもの（112）とがある。

これらの甕の存続時期は、Ⅰ類・Ⅱ類は17世紀代、ⅢA1類は17世紀後半～18世紀初頭、ⅢA2類は18世紀代、ⅢB1類は17世紀後半～18世紀前半、ⅢB2類は18世紀末～19世紀前半、ⅢC類は18世紀後半、Ⅳ類・Ⅴ類は18世紀末～19世紀と考えられる。

なお、Ⅳ類については、ここでは丹波焼として報告するが、口縁部形態や赤褐色を呈する胎土の色調、暗赤褐色に発色する釉調等の特徴から大谷焼の可能性が高い。

(b) 壺（図版51 91・93～95・97～100・図版54 119～122・124・図版63 509・図版68 562）

壺には、外反する口縁部を持つⅠ類（509）といわゆる「呂宋壺」の形態を模倣した横耳の付く四耳壺

であるⅡ類（562）、縁帯状の口縁部を持つⅢ類、口縁部が玉縁状を呈するⅣ類、口頸部が短く立ち上がるいわゆる「直口壺」の形態を呈するⅤ類、口縁部が受口状を呈するⅥ類（95・97・98・120・121）とがある。

Ⅰ類は、短く外反する口縁部端部が尖り気味に収まる。Ⅱ類は、体部上半に最大径を持ち、直立する頸部と端部を折り返した玉縁状口縁を持つ。Ⅲ類は、縁帯部に凹線（99）または沈線（119）を持ち、前者は体部上位に稜線が形成され、体部にカキ目が施されている。Ⅳ類には、耳の付くもの（ⅣB類）と耳の付かないもの（ⅣA類）の両者があり、ⅣA類（100）の口縁部形態は、体部からそのまま口縁部に至り、口縁部が外方に丸く肥厚する。また、ⅣB類には、尖り気味に収まる口縁部のもの（122）と外傾する口頸部端部が玉縁状になるもの（124）とがある。Ⅴ類には、口縁部が内傾するⅤA類（91）とほぼ直立するⅤB類（93・94）とがある。

なお、Ⅲ類・ⅤA類の体部外面には釉薬が流し掛けの手法で施釉されたもの（100・119）があり、また、Ⅵ類の体部外面の施釉方法はすべて筒描手法である。また、窯詰技法の判るものには、胎土目のもの（97・100・120）がある。

これらの壺の存続時期は、Ⅰ類は17世紀代、Ⅱ類は17世紀前半、Ⅲ・ⅤA類は17世紀後半～18世紀前半、ⅣA類は18世紀後半、ⅣB類・ⅤB類・Ⅵ類は18世紀末～19世紀前半と考えられる。

(c) 片口（図版51　89・90・図版63　507）

片口は、最大径を体部中央に持ち体部形態が壺形を呈するもので、口縁部が短く立ち上がるもの（89・90）と受口状の口縁部になるもの（507）とがある。また、窯詰技法の判るものには、胎土目のもの（89）がある。

(d) 徳利（図版51 92）

徳利（92）は、いわゆる「船徳利」の形態をとり、口縁部はやや角張る端部が玉縁状を呈する。

(e) 蓋（図版51 96・図版54 123）

胎土・色調などから丹波と考えられるものには、粘土紐を貼り付けたつまみを持つもの（96）と成形時に作り出したつまみをもつもの（123）とがある。前者は外面に黒色泥で文様が描かれており、後者の底部切り離し技法は糸切りである。

なお、出土状況からは、96は壺Ⅵ類に、123は壺ⅣB類に各々伴い、これら壺の存続期間はともに18世紀末～19世紀前半と考えられる。

(f) 擂鉢（図版59 326・351・図版64・65）

擂鉢の分類およびその編年・存続期間については、先学の研究（長谷川　2000年）がある。

ここではそれらの研究にもとづいて概略を述べる。なお、以下の記述は、長谷川分類等に準拠する。Ⅰ類には中世丹波の系譜を純粋に引くⅠA類と、口縁部が外傾する端面となる等やや変容した形で中世丹波の系譜を引くⅠB類とがあるが、今回の調査では、ⅠA2（ヘラ）類(514)とⅠB1類(518)、ⅠB2（クシ）類(515・519～522)、ⅠB3類(326・523)とが出土しており、前2者は17世紀中頃までの所産と考えられ、後2者は17世紀中葉～17世紀末ならびに17世紀中頃～18世紀前半の所産と考えられる。

また、Ⅰ類のうち外傾する口縁部端面を残すⅠB類は、口縁部外面に肥厚部を持つⅡ類へとその形態的・技術的系譜を引き継ぐが、今回の調査では、ⅡA類（351・525・526）とⅡB類（524）とが出土しており、前者は17世紀後半～18世紀前半の、後者は17世紀末～18世紀中頃の所産と各々考えられる。

縁帯部を持つⅣ類は、16世紀後半代に備前から技術移入して生産を開始したいわゆる「丹波系」の擂鉢の系譜を引くものであるが、今回の調査では、ⅣA類（516・517・527）およびⅣB類（528）が出土しており、前者は17世紀後葉～18世紀中頃の所産と考えられ、後者は18世紀中頃～18世紀末の所産と考えられる。

(g) 鉢（図版54 116）

鉢（116）は、やや内彎気味に立ち上がる体部からそのまま口縁部に至り、口縁端部が丸く収まるもので、体部外面にヘラ彫りの波文を持つ。

(h) 火入（図版63 511・512）

火入は（511・512）は、双耳で、体部中央で一度くびれる形態をとるが、そのくびれ度合いは小さく、その出土状況および共伴遺物、周辺の調査事例（兵庫県教育委員会 1993）から、17世紀末～18世紀中頃の所産と考えられる。

② 備前

備前産と考えられる製品には壺・甕・徳利がある。

(a) 壺（図版59 317・図版63 508・図版66 543）

317は平底で体部はほぼ直線的に上方に立ち上がる。外面の体部下半にヘラケズリ調整を施す。16世紀後半～17世紀前半代の製品であろう。508は平底で体部は大きく内彎し、口縁部が外反する。外面は施釉される。543は平底で体部は大きく屈曲し、短い頸部を持つ。油壺の可能性が考えられる

(b) 甕（図版66 541・542）

541・542はいずれも、口縁部が上下に拡張し、外面には凹線を2条施す。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代の所産と考えられる。

(d) 徳利（図版645 66 544～548）

544～548はいずれも徳利片である。546の体部外面には窯印がヘラ描きされる。

③ 堺・明石（図版67）

堺・明石産の擂鉢については、底部の内外面に焼台の使用痕跡を残し、体部外面がヘラケズリ整形される点を共通点とする一方で、底部内面の擂目は、堺産擂鉢がいわゆる「ウールマーク」を持ち、明石産擂鉢が「放射状」を呈する点に差異があるとされてきたが、明石にもいわゆる「ウールマーク」の製品が存在することから、両産地の分別は困難である（稲原 2000）。したがって、ここでは堺・明石として一括して扱う。なお、以下の記述は稲原分類等に準拠する。

今回の調査では、従前堺産とされてきたⅠ類と明石産とされてきたⅡ類とがある。Ⅰ類にはⅠ－1類（554）とⅠ－2類（553）とがあり、前者は18世紀前半～19世紀前半、後者は18世紀後半～19世紀後半と考えられる。Ⅱ類（555）は、Ⅱ－1類に該当し、18世紀後葉～19世紀後半の所産と考えられる。

④ 肥前

肥前産と考えられる製品には皿、椀、瓶、壺、鉢がある。

(a) 皿（図版59 300・305・410 図版61 456・457）

300・305はいずれも、低い高台をもち、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は大きく外反する。17世紀前半の時期が考えられる。410は高台を浅く、粗く削り出し、体部は中位で屈曲し、内面に段をもつ。内外面とも施釉するが、外面の体部下半以下は露胎である。17世紀初頭の時期が考えられる。

456は比較的幅の広い輪高台をもち、体部は僅かに内彎する。内外面とも鋼緑釉を施釉し、底部内面は蛇ノ目状釉ハギする。17世紀後半～18世紀前半の時期が考えられる。457は比較的幅が広く、低い高台をもち、体部は上位で屈曲する。内外面とも施釉するが、外面の体部下半以下は露胎である。17世紀中頃～後半の時期が考えられる。

(b) 椀 (図版60 358・359・406・407・411・412・図版61 423・424)

椀は高台の形態及び全体の形状から、高台を浅く粗く削り出し、口縁部が若干外反するもの (407・411)、やや深い幅の広い輪高台を削り出し、口縁部内面に凹部をもつもの (406)、幅の狭い端整な輪高台をもち、外面に施釉の後、白泥で波状に施文するいわゆる刷毛目唐津椀 (412)、細く比較的低い輪高台をもち、全体に京焼風の端整なプロポーションを呈する肥前系京焼風陶器椀 (358・359・423・424) に分類できる。刷毛目唐津椀、京焼風陶器椀は高台裏まで全面に施釉されるが、406・407・411 は外面の体部下半以下は露胎である。407・411 は17世紀初頭、406 は17世紀前半、412 は17世紀後半～18世紀前半、358・359・423・424 は17世紀後半～18世紀前半の時期がそれぞれ与えられる。

(c) 花瓶 (図版60 408)

408 は短い頸部をもち、口縁部は大きく外反する花瓶である。施釉の後、更に、白濁釉を施釉し、2釉が溶け合って滲んだ印象を与える。いわゆる朝鮮唐津花瓶で17世紀前半代の所産である。

(d) 壺 (図版60 409・419)

409 は粘土紐を巻き上げ、内外面を叩いて成形するいわゆる叩き唐津で飯胴甕窯の製品と考えられ、17世紀初頭の時期が与えられる。414 は体部は内彎し、直立する短い頸部をもち、口縁部は端部を水平方向につまみ出す。外面に灰釉施釉の後、鉄釉で簡単な草花文を描く。絵唐津壺で17世紀初頭の時期が与えられる。

(e) 鉢 (図版60 415～421)

鉢は施文方法の違いから、内面に篦彫りで蓮弁文、七宝繋文、草花文などを施文し、更に白泥で象嵌するいわゆる三島手の鉢 (415～419) と鉄釉施釉の後、白濁釉で波状に施文する刷毛目唐津鉢とに分類される。三島手鉢は口縁部の形態から、口縁部が外反するもの (415・416・419) とそのまま斜め上方に引き上げるものに分類できる。いずれも17世紀後半～18世紀前半の時期が与えられる。

⑤ 瀬戸・美濃

瀬戸・美濃産と考えられる製品には、向付、天目椀、香合、皿、蓮華台がある。

(a) 向付 (図版59 323)

323は平底で、底部を浅く円形に削り出し、体部は直立する。17世紀初頭の志野向付の底部である。

(b) 天目椀 (図版59 341・550・図版66 549)

341・550 は底部を欠失するが、口縁部は僅かに外反する。549 は比較的幅の広い輪高台を浅く削り出し、体部は上位で屈曲する。口縁部は僅かに外反する。いずれも大窯期後半から連房式登窯期前期の製品と考えられ、17世紀前半以降の時期が与えられる。

(c) 椀 (図版59 551)

体部がほぼ直立する灰釉椀で19世紀前半以降の時期が考えられる。

(d) 香合 (図版66 552)

方形を呈する型物香合で、外面は緑釉、鉄釉で施文する青織部香合である。17世紀前半の時期が考え

られる。

(e) 皿 (図版59 316・図版68 560)

316は低い高台をもち、内外面とも灰釉を施釉する。大窯期の製品であろう。560は細く低い高台をもち、口縁部は外反し、型押しで波状に整形するいわゆるひだ皿である。19世紀前半の時期が考えられる。

(f) 蓮華台 (図版68 561)

型物で内面に鉄釉で草花文を施文する。

⑥ 京・信楽

京・信楽産と考えられる製品には茶巾筒、椀、鬢盥がある。

(a) 茶巾筒 (図版55 140)

平底で体部は直立する。外面には鉄釉で雁行文を施文する。

(b) 椀 (図版55 141)

手づくね成形で、腰に丸みをもち、体部はほぼ直立し、口縁部は僅かに内傾する。赤楽茶椀の写しと考えられる小振りの椀である。

(c) 鬢盥 (図版62 498)

長楕円形の底板に体部を貼り付けて成形する。外面には揚羽蝶文を鉄釉でスタンプしている。

⑦ 舞子・明石

在地の舞子・明石産と考えられる製品には蓋、土瓶がある。

(a) 蓋 (図版54 127・129・図版68 562)

127は128の蓋である。中央に球形の摘みをもつ。129は130の蓋である。落蓋で中央部に楕円形の摘みをもつ。559は中央部に環状の摘みをもち、外面に沈線で施文する。

(b) 土瓶 (図版54 128・130)

いずれも底部はやや上げ底状を呈し、体部は大きく内彎する。体部外面上位にツル受けと注口を貼り付ける。蓋、土瓶とも19世紀前半以降の時期が考えられる。

⑧ 産地不明の陶器

この他、産地の明確でない施釉陶器には壺、甕、蓋、椀、急須、鉢などがある。

(a) 壺 (図版51 89・90)

いずれも、平底で体部はやや内彎し、口縁部は僅かに内傾する。

(b) 甕 (図版51 99・100・図版54 122)

99は平底で、体部は上位で屈曲する。口縁部は肥厚し上下に拡張する。100は平底で体部は内彎し、口縁部は玉縁状に拡張する。122は平底で体部は僅かに内彎し、肩部に2カ所耳を貼り付ける。

(c) 蓋 (図版54 123・127・図版57 216・217・図版66 533・図版68 557・図版70 611)

蓋には急須の蓋(216)、落蓋(123・557)、円盤状の偏平な蓋、近・現代の香炉の蓋などがある。

(d) 椀 (図版61 425・図版62 470・488・図版68 563)

椀には体部が内彎し、口縁部をそのまま上方に挽き出すもの(425)、体部が直立する筒形椀(470)、見込みが比較的広く、体部が内彎するもの(488)、体部が内彎し、口縁部が外反するもの(563)などがある。

(e) 急須 (図版57 217)

蓋 (216) とセットになるもので体部上位に棒状の把手をもつ。

(f) 鉢 (図版55 144・図版60 422・図版61 458)

鉢には平底で体部が直立するもの (144)、口縁部が外反し、波状に整形するもの (422)、大型で口縁部が玉縁状に肥厚するもの (458) などがある。

(3) 磁器

磁器には産地別では中国製、肥前、瀬戸・美濃及び産地不明のものがあり、種別では白磁、青磁、染付青磁、染付、色絵磁器などがある。ここでは、産地別にその概要及び特徴を述べる。

① 中国製

中国製磁器には白磁碗と青花碗がある。

(A) 白磁碗 (図版70 608)

高台は浅く削り出し、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉するが、外面の体部下半以下は露胎である。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類に相当し、12世紀後半～13世紀前半の時期が与えられる。

(B) 青花碗 (図版59 266)

266は比較的幅の広い高台をもち、内底見込みは広く、体部は直線的に外上方に延びる。外面には草花文を施文する (写真図版61 263～266参照)。胎土、色調から17世紀前半の漳州窯の製品と考えられる。

この他、細片のため、図化していないが、写真図版61 256～260は16世紀後半～17世紀前半の景徳鎮産の青花碗と考えられる。

② 肥前

肥前産と考えられる磁器には白磁皿・紅皿、青磁香炉、染付青磁及び染付がある。

(A) 白磁

白磁には皿と紅皿がある。

皿は細片のため図化していないが、写真図版61 288～291・295は17世紀前半の初期伊万里の型打ち皿と考えられる。

紅皿 (図版55 138・139・185・図版57 225～227・図版58 241) はいずれも型造り成形で、外面に放射状に沈線を施文し花弁を表現する。内外面とも透明釉を施釉するが、外面の高台脇以下は露胎である。225は小型で実用品と言うよりはむしろミニチュア製品であろう。また226は他の紅皿に比べて高台径が大きい。いずれも、18世紀後半～19世紀前半の時期が考えられる。

(B) 青磁香炉 (図版63 503)

比較的幅が広く低い高台をもち、体部はほぼ直立する。口縁端部は内側に水平に折り曲げる。外面は青磁釉を施釉するが内面は露胎である。

(C) 染付青磁

染付青磁には碗と鉢がある。

(a) 碗 (図版62 501・502)

いずれも口縁部が外反し、外面は青磁、内面は染付である。

(b) 香炉（図版63 506）

丸底で、3カ所に棒状の脚を貼り付け、口縁部は外反する。外面は青磁、内面は染付である。

(D) 染付

染付には碗、杯、蓋、懸花生、蕎麦猪口、皿、御酒徳利、仏具碗、鉢などがある。

(a) 碗（図版55 131・133・135・137・143・図版60 362～364・図版61 449・450・466・図版 483・486・487・490・492 ～494）

碗には底部の器壁が厚く、淡い呉須で施文するいわゆるくらわんか手碗（131・487・490）、高台が細く高い広東碗（466）、口縁部が外反する端反碗（492）、京焼風の端整なプローションを呈する京焼風碗（135・493・494）、焼成があまく胎土が陶質の陶胎染付（362～364）などがある。くらわんか手は18世紀後半代、広東碗は18世紀後半～19世紀前半、端反碗は19世紀前半以降、京焼風碗は18世紀代、陶胎染付は17世紀後半～18世紀前半の時期がそれぞれ考えられる。また、外面の文様には一重網目文（449・450）、二重網目文（486）、雪輪に梅文（131）、丸文（490）、七宝繋文（143）などがある。

この他、細片のため図化していないが、写真図版61 267・270・277・282・283は17世紀前半の初期伊万里と考えられる。

(b) 杯（図版55 132・134・図版62 478・479・481・495）

杯は平底で口縁部をそのまま斜め上方に挽き上げるもの（134・479・495）と低い輪高台をもち口縁部が外反するもの（132・478・481）に分類される。高台をもつものは施文方法の違いからコンニャク印判で施文するもの（132・481）と手描きのもの（478）に区分される。132・481は18世紀前半代に、478は18世紀中葉～後半代に、平底のものは19世紀前半代にそれぞれ比定される。

(c) 蓋（図版55 142・図版61 467・468）

いずれも碗の蓋で、142 は碗（143）とセットである。

(d) 懸花生（図版59 268）

平底で体部は直立する。外面に呉須で界線を1条施す。17世紀前半の初期伊万里である。

(e) 蕎麦猪口（図版60 395・図版62 496・497）

いずれも低い高台をもち、体部は直立する。外面の文様には蛸唐草文（395）、草花文（496）、菊花文（497）などがある。いずれも19世紀前半代の製品である。

(f) 皿（図版59 280・図版61 454・図版68 558）

280 は底部は碁笥底を呈し、口縁端部は尖り気味に収める。17世紀前半の初期伊万里である。

この他、細片の為、図化していないが、写真図版61 271～275・278 ～280・284・285・292 ～294 は17世紀前半の初期伊万里と考えられる。

454・558 はいずれも粗製の皿で、内外面とも透明釉を施釉するが、外面の高台脇以下は露胎である。また、底部内面には蛇ノ目状釉ハギが認められる。18世紀前半代の波佐見の製品であろう。

(g) 御酒徳利（図版61 461）

腰のくびれた梅瓶形を呈し、口縁部は外反する。18世紀後半代の製品である。

(h) 仏具碗（図版61 462・463）

短い脚部をもち、碗の体部は内彎する粗製の磁器である。18世紀後半代の時期が考えられる。

(i) 鉢（図版62 499・500）

いずれも蛇の目凹形高台をもつ。500は体部が上位で屈曲し、口縁部は僅かに外反する。いずれも19世紀前半代に比定される。

(j) 香炉（図版63 504）

平底で短い脚を3か所貼り付ける。体部は直立し、口縁部は水平に内側に折り曲げる。

③ 瀬戸・美濃

瀬戸・美濃産と考えられるものには染付皿がある。

(a) 染付皿（図版55 136）

やや濃い呉須で草花文を施文し、呉須はやや滲んでいる。19世紀前半以降に比定できる。

④ 産地不明の磁器

この他、産地の明確でない磁器には白磁、青磁、染付、色絵磁器がある。

(A) 白磁

白磁には蓋、壺、皿、杯などがある。

(a) 蓋（図版54 125）

壺（126）とセットになるもので、環状の摘みをもつ。蔵骨器として使用されている。

(b) 壺（図版54 126）

低い高台をもち、体部は直立する。蓋（125）とセットで蔵骨器として使用されている。

(B) 青磁

青磁には鉢、香炉と花生がある。

(a) 鉢（図版59 281）

体部が大きく内彎する鉢である。

(b) 香炉（図版61 429）

低い高台をもち、体部は大きく内彎する。

(c) 花生（図版61 430）

低い高台をもち体部下位は大きく内彎し、頸部は直立する尊形を呈する。

(C) 染付

染付には蓋、散り蓮華、碗、皿・杯などがある。

(a) 蓋（図版57 212・図版62 475）

いずれも碗の蓋で、草花文を描くもの（212）と広東碗の蓋（475）がある。

(b) 散り蓮華（図版58 255）

型造り成形で、内面に草花文を描く。近代以降の製品であろう。

(c) 碗（図版59 266・図版61 451・452・471～473・476・482・484・485）

碗には体部が直線的に外上方に延びるもの（266）、体部が内彎するもの（451・452・471・472・473）、広東碗（476）、小型のもの（482・484・486）などがある。

(d) 皿（図版61 464）

外面に草花文を描き、内面に不明文をスタンプする。或いは杯の可能性も考えられる。近代以降の製品であろう。

(D) 色絵磁器

色絵磁器には水滴、仏具、花瓶がある。

(a) 水滴（図版61 431）

型物の人物形の水滴である。背面に注口が穿孔される。

(b) 仏具（図版70 609）

金属器を模倣した鎮檀具である。ガラス質で光沢に富む。近代以降の製品である。

(c) 花瓶（図版70 610）

609・611と一連のもので、金属器を模倣し、ガラス質で光沢に富む。近代以降の製品である。

2．土製品

土製品には数珠玉、土鈴、器物形、ミニチュア土器・陶磁器、人形、動物形、面子、不明土製品などがある。

（1）数珠玉（図版55 146～155）

直径0.6～0.8cmを測り、中央に穿孔する数珠玉である。表面の彩色は全て失われている。

（2）土鈴（図版55 156～162・図版56 195）

長さ1.05～4.3cm、高さ1.2～2.7cmを測る。型造り成形で、中央部に貼り合わせ痕が残る。上面には紐を通す孔を穿孔し、内部には球形の玉を入れる。外面の彩色は全て失われている。

（3）器物形（図版55 183・191・192・図版57 214・図版58 248・249・253）

日常生活で使用された器物を写した器物形には竈形（183・248・249）、灯籠形（191）、祠形（192）、風炉形（214・249）、焜炉の簀の子形（253）などがある。214の灯籠形は両型造り、竈形（183）、祠形（192）は片型造りである。

（4）ミニチュア土器・陶磁器

ミニチュアの土器・陶磁器の器種には、壺、蓋、急須、土瓶、椀、徳利、水差し、油差し、行平鍋、重箱、皿などがある。

(a) 壺（図版57 215）

平底で体部が内彎し、短い口縁部をもつ。外面に蓮弁文と雷文帯を型押し施文する。

(b) 蓋（図版57 216・218・220）

216は217とセットになる急須の蓋である。218は219と対になる土瓶の蓋である。220は221～223とセットになる重箱の蓋である。

(c) 急須（図版55 191・図版57 217）

いずれも.体部上面に棒状の把手と注口を貼りつける。オリジナルの形態を忠実に模倣している。

(d) 土瓶（図版57 219・図版58 245）

219は蓋（218）とセットになる。外面はヘラ削り調整する。245は体部上面に花蝶文を線刻する。

(e) 椀（図版57 228～230・図版58 242・243・254）

いずれも型造り成形で、228 は外面に型押しで亀甲文を施文する。

(f) 徳利（図版55 184・187）

184は体部外面を押さえて、動物文を貼りつける。187は同様に体部外面を押さえて布袋像を貼り付ける備前焼布袋徳利を忠実に模倣した徳利である。

(g) 水差し（図版55 192・193・図版57 224）

いずれも、口縁部に 1 カ所注口を貼り付ける水差しである。

(h) 油差し（図版55 186）

蓋をもち、体部上面に型押しで花弁文を施文する。ミニチュアとしては比較的大きく、あるいはオリジナル製品の油差しの可能性も考えられる。

(i) 行平鍋 （図版57 213）

短い注口と扁平な把手をもつ。オリジナルを忠実に模倣している。

(j) 重箱（図版57 221～223）

蓋（220）とセットになる。八角形の底板に粘土板を貼り付けて成形する。オリジナルを忠実に模倣した精巧なミニチュアである。

(k) 皿（図版57 231・232.・234・235・図版58 244））

いずれも型造り成形で、231は外面に蓮弁文、232は内面に幾何学文、花弁文をスタンプする。244 は菱形を呈し、内面に菊花文を型押しで施文する。235は織部焼を模倣したものである。

(l) 鉢（図版57 233）

型造りの鉢に粘土棒を捻った把手を貼り付けたものである。

(m) 盆形土製品（図版58 237）

形造り成形で内面には木目を表現する。木製の盆を忠実に模倣した土製品である。

（5）人形 （図版56 194・197・201・図版57 203～205・図版58 236・238 ～240）

人形には両型造りのもの（194・197・201・205・236））と手づくね成形のもの（203・204）とがある。両型造りのものには福助像（194・236）、恵比寿像（197）、子守像（201）、太鼓持ち像（236）などがある。また、手づくね成形のものには花嫁像（203）、荷を背負う商人像（204）などがあってバラエティーに富んでいる。また、人形ではないが、片型造りの目、鼻、耳などあり、福笑いの部品と考えられる。

（6）動物形 （図版56 198・199）

動物形には両型造りの切株に腰掛ける猿像（198）と手づくね成形の手長猿像（199）がある。特に、198は刷毛状工具で猿の体毛を表現した精巧な製品である。

（7）泥面子 （図版57 207～211）

いずれも、粘土板から型抜きしたもので、表面に「角」字（207）、幾何学文（208）、篆書（209）、鶴文（210・211）をそれぞれ型押し施文する。

（8）不明土製品（図版66 200）

中央部で屈曲し、先端を尖らせる土製品で男根形を呈するが用途は不明である。

3．瓦

瓦には、軒丸瓦・軒平瓦をはじめとする屋根瓦と、井戸瓦、甎瓦などの道具瓦とがある。

ここでは、各種別ごとにその概略及び特徴を述べる。

（1）屋根瓦

屋根瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦がある。

軒丸瓦は、大型のものと小型のもの（K27～K32）とがあり、瓦当部の文様は、大型のものには三ツ巴文（K12～K20・K22 ～K25・K34 ～K36）と幾何学文（K21）、桜と思われる花文（K26）とがあり、小型のものは菊花文である。三ツ巴文の周辺には、いずれも珠文が配されるが、珠文数は12個のもの（K12・K25）・13個のもの（K13・K14・K16・K23）・14個のもの（K15・K19）・16個のもの（K17・K18・K20・K22・K24・K34）などがあり、また、巴の尾が長く圏線状になるもの（K19・K25）と尾が短く圏線状にならないもの（K12～K18・K20・K22 ～K24・K34 ～K36）とがある。また、幾何学文を持つものは、幾何学文の周辺に14個の珠が配される。なお、K35 は、瓦当が三日月状に欠損しており、通常の軒丸瓦とは異なる使用方法をされたものと考えられる。また、菊花文を持つ小型のものは、築地塀などに使用されたと考えられ、８葉のもの（K28～K30・K32）と10葉のもの（K27）とがある。

軒平瓦（K38～K55）は、瓦当文様が唐草文のもののみである。なお、全体の形状は不明であるが、鬼瓦の一部と考えられるもの（K10・K11）が堂焼土などから出土している。現存する部分は、K10が21.2cm×12.7cmで厚さ2.5cmを測り、K11 は38.6cm×23.8cmを測る。

（2）道具瓦

道具瓦には、井戸瓦・甎瓦がある。

井戸瓦（K74･K75）は、28.8cm×24.7cm及び25.8cm×23.0cmで、ともに厚さ3.9cmを測り、やや内側に彎曲し、外側に滑り留めの山形の刻みを２列に持つ。

甎瓦（K72・K73）は、ともに一辺28cmの正方形を呈し、表面にはクシ描きの文様を持ち、四隅の角を穿孔する。

4．石製品

今回の調査では石製品が約190点出土し、このうち63点を実測した。内訳は石造物53点、石臼３点、硯３点、砥石４点である。

石造物

今回の調査対象地は光明寺墓地の跡地ということもあって多数の石造物が出土した。ただし光明寺墓地は道路建設に先立って移転し、この時地上にあった墓石や石塔類はすべて移転先へ移動されている。今回出土した石造物は供養塔としての性格を失ったもので、埋没していたもの、または溝の石列、井戸、礎石などに転用されたものである。したがって残存状態も良好とはいえない。

図化にあたっては銘文のあるもの、残存状態の良好なものを優先している。

墓石（Ｓ１～Ｓ５） 方柱状を呈するもので、正面と側面を加工し、背面のみ未加工で粗面を残している。底部は平坦に加工され台座に設置するものである。正面は方形に彫りくぼめて戒名と命日、左側面に施主を刻書している。頭部の形状は残存するＳ１・Ｓ２についてはかまぼこ状である。Ｓ１は宝暦七年（1757）銘がある。Ｓ２・３は年号の一部のみ残存するが、Ｓ２は宝暦年間、Ｓ３は安永３年（1774）の可能性があり、18世紀中～後半のものである。Ｓ４は残欠のため全容は明らかでないが、寛文六年（1666）銘がある。正面は２段に彫りくぼめ戒名を刻書する。背面は未加工である。推定復元幅は30cm、奥行きは25.7cmである。他の墓石と比較して大型のものである。石材はＳ２・５が砂岩製、他は花崗岩製である。

板碑（Ｓ７） 法華経題目を刻書する題目板碑である。頭部は山形を呈し、額部に２本の切れ込みをもつ。正面を方形に彫りくぼめて法華経の題目を刻書する。紀年銘はないが17世紀以前のものであろう。

石仏（Ｓ６・Ｓ８・Ｓ９） Ｓ６は花崗岩製で、板状の石材に座像を浮刻する。仏像の表現は簡略化されているが手は定印を結んでいる。Ｓ８は破損が著しいが、本来は舟形を呈するものと推定する。正面に浅く座像を浮刻するが摩滅のため細部の様子は明確でない。花崗岩製である。Ｓ９は頭部が丸い舟形を呈する。正面は光背状に彫りくぼめて座像を浮刻している。花崗岩製である。

一石五輪塔 すべて花崗岩製である。再利用に伴い打ち欠かれ全容のわかるものはない。残存状況をみると、火輪以下が残存（Ｓ12・Ｓ15～20・Ｓ31・Ｓ32）、火・水輪が残存（Ｓ21～30・Ｓ34～36）、水輪以上が残存（Ｓ37・38・42）、火輪以上が残存（Ｓ39～41）、風・火水輪が残存（Ｓ43・44）、風・火輪が残存（Ｓ47）、空・風輪が残存（Ｓ45・46）がある。再利用にあたっては、地輪、火・水輪、空・風輪に分割される傾向にあり、断面が丸く先の尖る空・風輪の利用頻度は低いようである。

なお、Ｓ47の風・火輪に梵字を刻書しているが、他のものには銘文などは一切認められない。

空・風輪部は残存するものは少ないが、Ｓ45は球体に近い空輪と半球状の風輪からなり、両者の境は深く彫り込まれている。数量的に多いのは胴の張った円柱状の風輪の上に半球状の空輪を置いたような形状のものである。Ｓ42は風・火・水輪の幅がほとんど変わらず、境が線刻のみで表現されている。

火輪部は軒端部を打ち欠くなど残存状態は良好でない。軒は平らで端部付近から反り始めるもの、軒全体が反るものがある。また端部の形状は、やや外側に開くもの、ほぼ直立するものがある。

水輪部は最も形態の変化を看取できる部位である。五輪塔のそれを写実的に模倣し、断面・平面形とも円形を呈するもの、平面はやや丸みを残すものの断面は隅丸方形を呈するもの、扁平化し火・地輪との境を線刻のみで表現するものがあり、この順で変遷していると考える。Ｓ15など丸みを持つ水輪部をもつものは他の部位も五輪塔の形態をよく残しており本調査区出土の一石五輪塔の中では古いタイプのものであろう。逆に扁平な水輪部をもつＳ31などは他の部位の退化も進んでおり、時代の下るものと考える。

地輪部は形態の変化に乏しいため、単独で出土したものについては図化していない。Ｓ15～Ｓ19・Ｓ33は直方体に近い形状で底部を平坦に加工しているため、設置式と考える。Ｓ31・Ｓ32は下半部が未整形または自然面を残しているため埋立式と考える。なおＳ31・32は直方体に近い亜円礫に軽度の加工を施して一石五輪塔としているようである。

Ｓ10・Ｓ11・Ｓ12は地輪部正面を舟形光背状に彫りくぼめて座像を浮刻したている。仏像の表現は簡

略化され、S10・12は足の表現が認められない。手は線状の表現ながら定印を結んでいると思われる。いずれも地輪部の下半は欠損しているが幅に比べ長さがあることから埋立式の一万五輪塔と考える。

五輪塔（S13・S14、S48～53） 各部位が単独で出土したもので、セット関係にあるものはない。材質はすべて花崗岩製である。S48～52は火輪である。S48・49・51は上面に、S50・52は上下面にほぞ穴が穿たれている。幅33cmのもの（S48）と22cm前後のもの（S49～52）に大別でき、さらに後者は高さ14cmのもの（S49～51）、12cmのもの（S52）に分けられる。

S53は水輪である。最大径を中位付近にもち、その断面形は円形を呈する。下部は上部より幅が狭いため下部がすぼまる形態となる。上下面とも平坦に加工され、中央にほぞを打ち欠いた痕跡がある。S13・S14は五輪塔地輪部と思われる台座に座像を浮刻する。S13は欠損が著しいが、上面の中央にほぞ穴を穿ち、底部は粗整形である。正面には舟形光背状に彫りくぼめた中に半円状に退化した蓮華座と錫杖を持つ座像を浮刻する。S14は正面・左右側面・背面の4面に隅から中央へ浅く彫りくぼめて座像を浮刻している。座像の表現は、正面は合掌し、右側面と背面は左手に宝珠らしき仏具を持ち、左側面は定印を結んでいる。背面の座像のみ袈裟状の表現が認められる。

石臼（S54～S56） 粉挽臼の上臼（S54）と下臼（S55）、茶臼（S56）を図化した。粉挽臼は花崗岩製である。S54は約1/2残存し、復元径は32.6cmである。溝の切り方は8分画・8溝である。S55は約1/2残存し、復元径は30.2cmである。溝の切り方は8分画・6溝である。S56は茶臼の下臼である。約1/2が残存するが、周縁部および底部が欠損している。復元径は約20cm、受け皿部の径は約15cmあり、中央に芯棒穴が穿たれている。

硯（S57～59） いずれも長方硯である。S57は海部の一部を欠く。硯面は長方形で陸部の縁は欠損して低い。背部に「上□□□高」の刻書がある。S58は硯面が長方形を呈し、海部と陸部の区別が不明瞭である。縁は比較的シャープである。背部に生産元をしめす「赤間関」の刻書がある。S59は残欠であるが背部に判読不明の刻書がある。

砥石（S60～63） いずれも欠損しているが、2面以上の使用痕が認められる。

5.金属製品

金属製品には、銅製品と鉄製品がある。銅製品には、煙管・銅線・銅銭・仏具などがあり、鉄製品には、釘・小刀・鎌・鍬・火箸・鋏などがある。

（1） 煙管（図版46 F1～F5）

煙管は雁首・羅宇・吸口から構成されているが、今回出土した煙管は、羅宇の部分が無く、F1・F4・F5は、雁首と吸口がセットで、F2・F3は、雁首のみ出土している。

材質は、F1～F4は銅製品、F5は真鍮製である。F1・F4には、鍍金が施されていた。

F1～F3はいずれも、脂返しの湾曲がかろうじて残るが、火皿の補強帯はない形態であり、F1は火皿の部分が欠損している。

F4・F5は、脂返しの湾曲が無く、頸部と胴部が一体化している形態である。

F5については、雁首と吸口表面に漆が塗られ、吸口側には、桜の花が線彫りされていた。この吸口については、実体顕微鏡での詳細な観察の結果、表面に塗布されている漆の下にも梅の花が彫られてい

ることが判明した。これらの状況から、梅の花を線彫りしたが、何らかの理由で失敗したため、この文様を叩いてつぶしたのち、漆を塗布し桜の花が線彫りされたのであろう。なお、Ｆ５については、材質分析を奈良国立文化財研究所の村上隆氏にお願いした。

煙管の変遷については、先学の研究から次の様に要約できる。①火皿が大型から小型化する。②脂返しが大きく湾曲する「河背型」のものから湾曲が小さくなり無くなる。③火皿補強帯があるものからないものに変化する。これらの変遷の特徴をふまえて古泉弘氏による煙管の編年に対応させるとＦ１～Ｆ３は、Ⅳ期で18世紀後半、Ｆ４・Ｆ５は、Ⅴ期で19世紀代に対応する。[28]

（２） 釘類（図版47・49）

今回の調査では、多くの釘と鎹・楔が各１点出土した。釘については、全て断面方形の和釘である。

和釘は、頭の形状から大別すると、頭作り出し類・切釘類・折釘類に分類できる。[29]

頭作りだし類の中では、頭に逆台形状の板状の作りだしをつくる角釘（Ｆ24・40・42・62・81・82・86・88）と小型の釘で頭が半球状を呈する蟹目釘（F89）がある。

切釘類の中では、頭の作り出しがない切釘（F83・84・43）と両端の尖った真直な釘で、板などをつなぐのに用いられた合釘（F76・87）とがある。

折釘類では、基部と同じ太さで頭の曲がった折釘（Ｆ17～19・24・88・F90）が出土している。

これら出土した釘のなかで、ＳＸ218・ＳＸ228・ＳＸ232・ＳＸ236出土のものについては、出土状況から木棺に使用された釘であることが判明している。

Ｆ116は楔、F119は２つの材を合わせるための鎹である。

（３） 農具類（図版47 Ｆ91・図版49 Ｆ120）

鎌・鍬がある。F91の鎌は片刃の鎌である。茎の部分の木質は欠損している。

F120の鍬は刃の部分が３本に分岐したいわゆる備中鍬である。備中鍬は、江戸時代後半（元禄以降）に現れたとされている。

（４） 武器類（図版 48 Ｆ105・106）

小刀，小柄の柄がある。Ｆ105・Ｆ106の小刀は刃部のみ残っている。F118は小柄の柄で、片面のみ刻み文様があり、全面に鍍金が施されている。

（５） 仏具類（図版48 Ｆ95）

六器は、高台のついた碗に台皿を備えたものが普通の形であるが、今回は、高台のついた碗のみが出土している。

F95は、銅製で、高台はあまり高くなく、口縁部は外反する。摩擦による使用痕が認められる。

（６） 装身具類（図版48 Ｆ96）

銅製の毛抜きが出土している。Ｆ96は、両側面に魚々子で文様を施している。

（7） 台所用具類（図版48 F 103・図版49 114・115）

鉄製の包丁と火箸などが出土している。F 113の包丁は刃先が狭いいわゆる出刃包丁である。柄の部分には木質が残存していた。F 114・115の火箸は木製の柄はなく、F114は上部に円形の飾りが付属している。F103は、たばこ刻み包丁の可能性があるが細片のため不明である。

（8） 家具類（図版48 F 100・F 102・F 103）

F 101・102は、箪笥の引き手金具と考えられる。いずれも蕨手形の引き手金具で、F 101には、径2.5cmの円形座金具が、またF 102には径2.5cm菊花座金具が付属していた。

F100は、箪笥や戸襖の引き手に巻かれた巻き金具の一部の可能性がある。木質に金具が巻かれ鋲で留めている。

（9） その他

上記のほかに、銅線・飾り金具などが出土している。

F 7 ～F16・F92は、径0.05cmの銅線である。F 7 ～F16が出土したＳＸ218は、竹カゴが放射状にくずれた状況で出土しており、この出土状況からこれらの銅線はこの竹かごを留めるために使用されたと考えられる。

F99は、銭貨をいれた巾着袋の残存であるが、当初どのような形状だったのかは不明である。

F104は、飾り金具と考えられる。上部は菱形で透かしが施され、柄がついている。

（10） 銭貨（図版50～52）

銭貨は合計125枚出土した。大きく渡来銭と本邦銭がある。渡来銭はほとんど北宋銭であるが、一部明銭や南宋銭が含まれている。

出土した渡来銭は、元豊通寶（F208）、元祐通寶（F209・F210）、紹聖通寶（F211）、天禧通寶（F184）皇宋通寶（F216・F230）、治平元寶（F231・F232）、永楽通寶（F190）、大観通寶（F234）などがあり、図化したもの以外にも、熙寧元寶、聖宋元寶、景定元寶が出土している。

また、本邦銭としては、寛永通宝がある。寛永通宝は元来、佐藤新助という水戸の商人が1626年（寛永三年）から鋳造を始めた一種の私鋳銭であるが、1636年になって江戸幕府は公鋳を始め、それ以降幕末まで230余年の間鋳造された。寛永通宝の鋳造期間は３期に大別されており、Ⅰ期（古寛永）は、寛永13年（1636年）～明暦２年（1656年）、２期（文銭）は、寛文８年（1668年）から天和３年（1683年）、３期（全国各地で増鋳）元禄10年（1697年）～延享４年（1747年）に分かれている。[21]

今回出土したものの多くは、新寛永に属するものであるが、２期に鋳造され、背に「文」字を配する文銭も14枚確認できた。

また、一文銭ではなく、背面に波文のある四文銭も１点出土している（F236）。その他に、古寛永の可能性があるものも見られる。

銭 貨 名	初鋳年
天禧通寶	1017年
皇宋通寶	1038年
治平元寶	1064年
熙寧元寶	1068年
元豊通寶	1078年
元祐通寶	1086年
紹聖通寶	1094年
聖宋元寶	1101年
大観通寶	1107年
景定元寶	1260年
永楽通寶	1408年

第４表　出土銭貨の初鋳年

これらの銭貨の中には、墓の副葬品である六道銭に関係すると考えられるものがある。

仏教において現世に生をうけた衆生は、その業（善悪の行為）の結果に応じて死後六道（地獄道・飢餓道・畜生道・修羅道・人間道・天道）を輪廻する宿命にあるとされ、六道銭は、この六道輪廻の思想に基づき、死者を葬る際に棺や墓壙内に埋葬される銭のことである。18世紀半ばには、通貨損失の観点から禁止令が出されるほど盛行する。[18]

六道銭を構成する銭種は、さまざまな渡来銭が組み合わされる場合と特定の銭のみが組み合わされる場合とがある。

今回出土した六道銭については、全て寛永通宝が使用され、中には、文銭が六枚そろった例もあるため、同種類の銭貨を組み合わせた意図がうかがえる。

遺構	種　類	枚数
SX216	寛永通宝(文銭)	6枚
SX223	寛永通宝	6枚
SX224	寛永通宝	6枚
SX228	寛永通宝	6枚
SX235	寛永通宝	6枚

第５表　六道銭の出土遺構と種類

６．木製品

（１）箱棺（図版94～97）

Ｗ１～Ｗ４はいわゆる箱棺である。

Ｗ１はSX218から出土した平面形が正方形の浅い木棺（箱棺）である。底板は60cm×61cmのほぼ正方形で、２枚の板を接合面に２箇所釘を打って接いでいる。合釘を打つ場所には墨で線が引かれている。側板の残存高は39.9cm。側板の継ぎ目は、溝にホゾをはめ込むように組まれている。板の厚さは1.7～2.1cmである。蓋は失われている。

Ｗ２はSX228から出土している。平面は正方形、側面は縦長の長方形の箱棺である。底板は53cm×59.5cmで、３枚の板をそれぞれ３箇所の釘で接いでいる。幅3.2cm程度細い板の中央を幅９cm×２cmほど切り欠いた棺台が四周に打ち付けられている。蓋板は53.8cm×55cmでやはり２枚の板を３箇所の釘で接いでいる。側面の板はやはり３枚の板を接いでいる。板の厚みは2.8～3.4cmである。蓋も含めた全体の高さは85.4cmである。この大きさから考えると、座棺であろう。側面には、紐跡らしきものがみられる。

Ｗ３はSX232から出土している。底板は２枚の板を接いでおり、55.7cm×55.3cm。底部外面には、カンナ傷がよく残っている。側板の残存高は46.5cm。垂直方向に釘を打つ目安の墨の線が残っている面もある。板の厚さは1.7cm。蓋は失われている。

Ｗ４はSX236から出土している。蓋を含めた全体の大きさは59.6×61.4×77.2cm。他の棺が底板の上に側板を載せるタイプであるのに対して、これは組み合わせた側板の下端から２cmほど浮かせた位置に底板をはめこみ、釘で留めつけるものである。なお、側板の下端の中央は1.8×1.2cm程度の切り込みがある。１枚板の蓋の裏側には刃物の痕がみられる。蓋以外は２枚の板を接いでおり、厚さは2.7～2.8cmである。側面には、紐跡が残るものもある。

（２）桶（図版98～100）

Ｗ５～13は、桶、もしくは結桶を利用した棺（早桶）である。Ｗ５～９は側板、Ｗ10～13は桶の底板である。底板の直径は欠損しているものもあるが、45cm～50cmで、いずれも１枚板ではなく、何枚かの板を木釘で継いでいる。継ぎ合わせている個々の板の幅は一定しない。厚さは0.8～2.7cmとばらつきが

ある。

側板も幅に大小があって一定の規格はみとめられない。厚さは0.6～1.35cmである。下端の少し上にはタガの痕跡が残るもののある。

（3）板材（棺材）（図版101・102）

W14～W20は板材 である。W14～W17はＳＸ216から出土した箱板である。いずれも、長辺の一方が磨耗著しく、もう一方の長辺から少し内側に釘穴が並ぶ。W16・17は釘穴のある辺に２箇所切り欠きがあるW18～W20はＳＸ232から出土している。これも長辺が磨耗している。短辺はホゾ組のため、一段薄く削ったり、細長いホゾ穴を削りこんだりする加工がなされている。

W21はＳＸ216の掘方から出土している。破損のため、元の形状は不明であるが、２辺が曲線を描く板である。

（4）数珠玉（図版103）

各墓より、多数の数珠玉が出土している中のいくつかを図化している。数珠玉には、W22～25、29、34、35、103、04のように直径１cm前後の大型、W39～41、63、64の直径８mm前後の中型、W38、99～102、163～166の直径５mm前後の小型の三種の大きさがある。W29、39、103、104は直交する方向にも孔が開けられている。W63、64は側面形が算盤玉形である。W99、W100は扁平な平玉、W123、124は扁平で側面に稜がある平玉である。それ以外は直径が高さをしのぎ、側面がややひしゃげた楕円形である。

（5）木簡（図版103）

W169は、ＳＸ228より出土した。将棋の駒を縦長に引き伸ばしたような形態の墨書のある木簡である。頭部を鈍角に尖らせ、そこから３cmほど下がったところまで、側面を数mm削っている。幅5.5cm、長さ29cm。下の両測縁が剥離により欠損している。一番上には「為」と一字が書かれ、「空海が心の中に咲花は/阿弥陀より他に志る人ぞなし」という和讃が二行に分かち書きされている。(22)

（6）棗（図版104）

W170はＳＸ218から出土した直径5.3cm、器高4.4cmの身に、器高1.6cmの蓋が伴う黒漆塗棗である。蓋と身を合わせた総高は5.2cm。底部は碁笥底である。

（7）容器（図版104・105）

W171はＳＸ236から出土した煙草の道具である。 垂直方向に穿孔した四角い把手（別材を挿入）のついた容器である。口径2.5cm、胴部最大径は3.8cm、器高は4.1cmである。口縁直下に２条の凹線がめぐる。

W172もＳＸ236から出土している。一辺5.9cmの隅丸方形の板で、蓋であろうか。厚さは３mmである。片面の周縁は３mm幅で斜めに削っている。

W173はＳＸ94から出土した12.8×10cmの隅丸長方形の漆塗りの板である。厚さは２mm。両面に漆が塗られているが、片面の両短辺の端から３mm幅で塗られていない部分があり、もう一面は、両短辺の端から2.5mm内側に２mm幅でやはり塗られていない部分がある。この短辺には３箇所、長辺には中央に１箇所、

径0.5㎜の小孔を穿っている。脚付きの箱の底板であろうか。

W174はＳＫ71から出土した漆塗りの箱の側板である。17.6×４㎝の長方形の板の短辺の中央を他の側板のほぞと組み合わせるため1.4㎝×0.2㎝の大きさに切り欠いている。厚さは３㎜である。両面とも漆塗りであるが、外面は黒漆に退色のため元の色は不明であるが、桜の花などの模様を描き、内面は赤漆を一面に塗っている。内面の短辺の端、幅４㎜ほどは、他の材と組み合う接点となるため、一部漆が塗られていない。側面の組み合う部分は有機質の釘で留められていたようである。

W175はＳＫ94から出土した漆塗りの箱の底板である。破片であるため全体の形状は不明であるが、丸みを帯びた形である。厚さは2.5㎜。両面に漆が塗られているが、側板と接する部分には漆は塗られていない。

（８）箸（図版105・109）

W176は直径３㎜、残存長14.5㎝の箸である。断面は円形で、漆塗りである。

W195・196、199～203は漆塗りではない箸である。W195・196はＳＸ218から出土したセットで、長さは16㎝前後、断面は四辺形で、太さは0.6㎝と実用にはやや太い。W199～203はＳＫ94から出土している。27.8㎝とやや長いものも１点あるが、他は22～23.5㎝とほぼ揃っている。断面はほぼ円形で、太さは0.5～0.8㎝である。

（９）漆椀（図版105）

W177・178はＳＸ94から出土した漆椀である。いずれも高台付近の破片で、全体の大きさは不明である。W177は底部が極めて厚い。

（10）箱・箱材（図版106～109）

W179～194はＳＸ218から出土しており、茶道具、茶箱の箱板である可能性が高い。

W179～182、188～194は、長方形または正方形の板である。大きさは、9.5×14㎝～8.5×8.5㎝。厚さはおよそ２㎜。短辺あるいは小口面を斜めに削り落としている。

W183・184は２×13㎝のほぼ同型同大の細長い板材である。短辺を斜めに削っている。

W185は12.8×4.5㎝、厚さ２㎜の板材に円孔を穿ち、直径３㎜、長さ２㎝の棒材を垂直に差し込んでいる。

W197・198はＳＸ228の棺内から出土しているほぼ同形同大の細長い薄い材である

W204～206はＳＸ216から出土した箱などの一部の細長い板で、接合のための釘穴がある。W204.205はほぼ同じ大きさで、平面だけではなく短側面にも釘穴がある。W206は長側面に穴がある。

W207・208はＳＸ94、W209はＳＸ236から出土した細長い部材で、これらも接合のための釘穴がある。

（11）煙管羅宇（図面110）

W210は煙管の羅宇である。破片は２片に分かれ、直径９㎜、残存長さ5.7㎝である。

（12）棺台ほか（図面110・111）

W211はＳＸ228から出土した座板で、箱棺の底面に打ちつけられていたものであろう。角材に刳りこみの加工があり、釘穴が見られる。

W212は細長い板材の両短辺にホゾを作り出した部材である。

W213～230はＳＫ94より出土している。いずれも細長い角材の両端を薄く削りこむ加工を施した部材で、この部分に小孔が開いている。W213のみ大きいが、W214～W230はほぼ同型同大である。この薄く加工された部分を残存していない素材に並べて釘で打ちつけたスノコや桟のようなものの一部と考えられる。

(13) 下駄（図面112）

W231は楕円形の台部に台形の歯を組み合わせた構造下駄のうち、木内にはめ込まれた歯が台部を貫通し、表からみえるタイプのいわゆる露卯下駄である。このタイプは江戸では、江戸初期から17世紀前半にかけて盛行し、それ以降徐々に減っていくという。長さ20.5cm、幅7.5cm、高さ５cm。大きさから考えて女物か。

(14) 払子・笄（図面112）

W232は仏具の払子（ほっす）の柄の握りの部分である。直径およそ２cm、残存長17.4cm。

W233は笄（こうがい）である。頭部はおよそ２cmの立方体の上面のみ角を面取りした形で、体部は最大径1.2cmから細くなって尖端は尖る。

(15) 櫛（図面112）

W234～237は櫛である。W234はＳＸ228から出土している。歯が全て失われているが、棟の背面には丸の中に四弁の唐花（花弁の左右に入隅があって、尖端が三個の丸い突起をなすようにみえる）を配した模様が３つ金色で描かれている。背の山は弓なりで、いわゆる鎌倉形タイプの飾り櫛（挿櫛）であろうか。

W235～237は全てＳＸ236から出土している。W237に商標らしき「山に正」の文字がある以外は無文の実用的な櫛である。W235は端が直線的にカットされており、棟の曲線が緩やかである。背の厚みが９㎜と厚い。W236は棟が山なりに中高になっており、端は鋭角にカットしており、背側の幅が歯の部分の幅より広くなっている。背の厚みは５㎜である。W237の棟は丸味をおびており、端も丸くおさめている。背は９㎜とW235と同様に厚い。

(16) 縄ほか（図版112）

W238はＳＫ94から出土した３本撚りの縄である。Ｓ字撚りである。中央の部分は撚られたままで残っているが、端はほつれた状態である。棺を結ぶ縄であろう。

W239もＳＫ94から出土している。一方は欠損しているが、長方形の角を落とした薄板である。小孔がみられ、一部焦げ目がみられる。

引用・参考文献

（1）川口宏海　1995年「江戸時代の土師質土器の製作技法―兵庫県伊丹郷町遺跡出土遺物を中心として―」　『研究集録』　第15号　大手前女子短期大学

（2）長谷川　眞　2000年「近世丹波系擂鉢とその系譜関係」『関西近世考古学研究』Ⅷ　関西近世考古学研究会

（3）長谷川　眞　1993年『伊丹郷町発掘調査報告書』　兵庫県教育委員会

（4）稲原昭嘉　2000年「明石擂鉢の編年について」『近世の実年代資料』第12回　関西近世考古学研究会大会資料集　関西近世考古学研究会

（5）大橋康二　1984年「肥前陶磁の変遷と出土分布―発掘調査を中心として―」『国内出土の肥前陶磁』　九州陶磁文化館

（6）大橋康二　1993年『肥前陶磁』　ニューサイエンス社

（7）楢崎彰一他　1980年『日本焼物集成　瀬戸　美濃　飛騨』　平凡社

（8）井上喜久男　1992年『尾張陶磁』　ニューサイエンス社

（9）藤澤良祐　1987年「本業焼の研究（1）」　研究紀要　Ⅵ　瀬戸市民俗資料館

（10）藤澤良祐　1988年「本業焼の研究（2）」　研究紀要　Ⅶ　瀬戸市民俗資料館

（11）藤澤良祐　1989年「本業焼の研究（3）」　研究紀要　Ⅷ　瀬戸市民俗資料館

（12）稲垣正宏　2001年「考古資料からみた信楽焼」『近世信楽焼をめぐって』研究集会資料集　関西陶磁史研究会

（13）畑中英二　2001年「近世信楽に於ける陶器生産」『近世信楽焼をめぐって』研究集会資料集　関西陶磁史研究会

（14）鈴木裕子　2001年「江戸遺跡出土の信楽焼」『近世信楽焼をめぐって』研究集会資料集　関西陶磁史研究会

（15）野上建紀　2000年「磁器の編年（色絵以外）1　碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会

（16）大橋康二　2000年「磁器の編年（色絵以外）2　鉢・猪口・蓋付鉢・合子・蓋置」『九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会

（17）川副麻理子　2000年「磁器の編年（色絵以外）4　仏飯器・水滴・灯火具・緒締玉・戸車」　『九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会

（18）鈴田由紀夫　2000年「磁器の編年（色絵以外）5　瓶・花生・仏花器・油壺・水注」『九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会

（19）江戸遺跡研究会編　2001年『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房

（20）金箱文夫　1984年「近世の釘」『物質文化』43

（21）兵庫埋蔵銭調査会　1993年『日本出土銭総覧』

（22）熱田　公・小林基伸・小栗栖健治・松井良祐氏らのご教示による。

V.自然科学分野の分析

1．伊丹郷町遺跡出土木製品の樹種

京都大学木質科学研究所　伊東隆夫

兵庫県伊丹市宮前２丁目に所在する伊丹郷町（第114次調査Ｂ地区）は江戸時代寺院墓地として知られる。同地区において、天正年間の創建縁起のある江戸時代寺院「光明寺」の本堂の一部と墓地が調査され、多数の土葬、火葬の埋葬遺構と土塀・石敷や火災片づけの土坑が検出されており、慶長年間から明治時代まで約300年間の寺院と墓地が検証されている。

墓地の埋葬遺構の桶棺・箱棺、土葬副葬品の数珠・櫛・漆塗椀などの副葬品と火災片づけ土坑内に寺院で使用されていた漆器・茶箱・下駄・壺・箸・仏具・簪などの木製品が数多く出土している。

ほとんどが原形をとどめた木製品であるので、同定用試料は割れ目部分や欠損部分から採取し、最小限に留めた。

これら、木片から安全カミソリで薄い切片を作製し、スライドガラスに載せて、カバーガラスを被せ、ガムクラールで封じた。

樹種同定上の顕微鏡的特徴

二葉マツ（Pinus L.Subgen.Haploxylon koehne）：樹脂道が存在する。樹脂細胞はみられない。放射仮道管が存在する。放射仮道管の水平壁に鋸歯状突起がみられる。

スギ（Cryptomeria japonica D.Don）：晩材幅がやや広い。樹脂細胞が晩材部で接線方向に疎らに存在する。分野壁孔は典型的なスギ型。

ヒノキ（Chamaecyparis obtusa Endlicher）：晩材幅が狭い。樹脂細胞が晩材部で接線方向に疎らに存在する。分野壁孔は典型的なヒノキ型。

オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim.subsp.sieboldiana Kitamura）：散孔材。大形の道管が疎らに分布する。

ブナ（Fagus crenata Maxim.）：散孔材。道管は単穿孔と階段穿孔を有する。放射組織は単列放射組織から広放射組織まで様々な幅のものが分布する。

ヤマグワ（Morus australis Poiret）：環孔材。小道管は不規則な集団をなす。単穿孔でチロースが存在する。放射組織は異性。

イスノキ（Distylium racemosum Sieb.et Zucc.）：散孔材。階段穿孔。軸方向柔細胞は接線状。放射組織は異性。

ナシ属（Pyrus spp.）：散孔材。単穿孔。道管にらせん肥厚。軸方向柔細胞は散在する。放射組織は同性。

サクラ属（Prunus spp.）：散孔材。単穿孔。道管にらせん肥厚。放射組織は数列。

ウメ（Prunus mume Sieb.et Zucc.）：散孔材。年輪はじめの道管はやや大きく環孔状となる。単穿孔。道管にらせん肥厚。

ツゲ（Buxus microphylla Sieb.et Zucc.）：散孔材。道管はきわめて小さい。階段穿孔。木繊維の壁は厚い。放射組織は異性で、通常２列。

エゴノキ属（Styrax spp.）：散孔材。階段穿孔。軸方向柔細胞は晩材部で接線状にかつ層状にならぶ。放射組織は多列部が単列部をはさんで上下に連なる。

伊丹郷町遺跡出土木製品の樹種同定結果は第６表に示す通りである。同表から同遺跡出土木製品の樹種の出土傾向をみると、以下のような傾向がみられる。

（１）数珠玉にはウメやナシ属のような緻密で硬い材が用いられている。

（２）櫛にはイスノキやツゲのほかナシ属が用いられ、いずれも相当に硬い材である。

（３）棺材には二葉マツやスギのような針葉樹材が用いられている。

（４）漆椀にはブナが用いられている。

第６表　伊丹郷町木製品樹種同定資料一覧

資料No.	報告書No.	遺物名	遺構名	時代	樹種
1	W170	棗	ＳＸ218	江戸	エゴノキ
2	W24	数珠玉	ＳＸ218	江戸	ウメ
3	W181	茶箱?	ＳＸ218	江戸	ヤマグワ
4	－	桶棺蓋	ＳＸ225	江戸	二葉マツ
5	W39	数珠玉	ＳＸ226	江戸	ナラ属？
6	W10	桶棺底	ＳＸ226	江戸	スギ
7	W104	数珠玉	ＳＸ228	江戸	ウメ
8	W11	桶棺底	ＳＸ233	江戸	二葉マツ
9	W235	櫛	ＳＸ236	江戸	ツゲ
10	W236	櫛	ＳＸ236	江戸	ナラ属？
11	W237	櫛	ＳＸ236	江戸	イスノキ
12	W171	壺	ＳＸ236	江戸	サクラ
13	W171	壺の栓	ＳＸ236	江戸	オニグルミ
14	W199	箸	ＳＫ94	江戸	ヒノキ
15	W232	仏具	ＳＫ94	江戸	ヒノキ
16	W233	簪	ＳＫ94	江戸	スギ
17	W177	漆椀	ＳＸ94	江戸	ブナ
18	W178	漆椀	ＳＫ94	江戸	ブナ
19	W230	簀の子状	ＳＫ94	江戸	ヒノキ
20	W173	漆箱	ＳＫ94	江戸	ヒノキ
21	W231	下駄		江戸	スギ
22	W231	下駄歯		江戸	散孔材

2．有岡城跡・伊丹郷町の種実分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

天正年間に創建された江戸時代の寺院「光明寺」本堂の一部と墓地が今回調査された。その結果、多数の土葬、火葬の埋葬遺構と土塀・石敷や火災片付けの土坑が検出されている。墓地の埋葬遺構（SX235）の棺桶底の副葬品とともに種実が検出された。これらは3つの土師器皿の上に置かれていたものであり、埋葬時の供物や埋葬儀式用副葬品の一部と考えられる。これらの種類を知り、他の江戸時代寺院墓地との比較を行う意味で、種実同定を行った。

1．試料

試料は、SX235から検出された種実遺体3点（No.1～3）である。1試料には数個の破片が入っている。

2．方法

双眼実体顕微鏡で、その形態的特徴から種類を同定した。

3．結果

3試料のうち、No.3は土塊や礫であり、種実ではなかった。No.1およびNo.2は種実片で、本来1個体であったものが、それぞれ4～5の破片に分かれたと考えられる。推定される形状は6mm前後で、やや縦につぶれた球形である。灰褐色で表面はざらつく。木質で固く、4～5裂する性質がある。このような形態から、この種子はシナノキ科のボダイジュ（TiliaMiquelianaMaxim.）であると考えられる。

4．考察

ボダイジュは中国原産の木で、仏教にゆかりのある樹木として寺院などによく植えられている（ほんとうのボダイジュは、クワ科のインドボダイジュでシナノキ科のボダイジュとは別種）。ボダイジュは新宿の發昌寺（百原，1991）や法光寺（パリノサーヴェイ株式会社、未公表試料）で数珠として検出されており、当時数珠の素材として使われていた痕跡がある。おそらく寺院等に植えられていたボダイジュの実を、副葬品として納めたものと考えられる。そのほか、法光寺ではメロンやトウガンなどが副葬品として添えられていた遺構もある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1996）。

Ⅵ．おわりに

1．Ｂ・Ｃ地区における土地利用の変遷について

今回の調査では、Ｂ地区では光明寺の近世墓群を中心に、また、Ｃ地区では酒蔵遺構を中心に、古代から現代に至るそれぞれ６面の遺構面が確認され、また、時期区分の上では、遺構面及び出土遺物の検討から、大きくⅠ～Ⅷ期の８時期に、さらに、火災とその後の整地終了までの時間を考慮すると、14小期にわたる土地利用の変遷が想定できる。

以下、ここでは、当該調査区における土地利用の変遷について、確認された火災面を中心にまとめてみたい。

なお、火災面は５面確認されており、そのうち、第２次火災面は元禄12年（1699）あるいは元禄15年（1702）の火災面、第３次火災面は明和年間（1765・66）の火災面と考えられるが、第１・４・５次の火災については文献上の記載はみられない。

Ⅰ期　Ｂ地区で溝状遺構ＳＫ59が構築される時期である。出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

Ⅱ期　Ｂ地区で溝ＳＤ02～04、Ｃ地区ではＳＤ10・ＳＤ13～15、墓ＳＫ162が構築される時期である。墓ＳＫ162から出土した白磁碗Ⅳ類の時期から、12世紀後半～13世紀前半の時期が考えられる。

Ⅲ期　Ⅲ期は大きく中世後半期に属する遺構群で構成される時期である。出土遺物の年代から、３小期に細分される。

Ⅲ－１期　Ｂ地区において溝状遺構ＳＸ244が営まれ時期である。出土した土師器Ⅲの年代観から15世紀後半～16世紀前半代の時期が考えられる。

Ⅲ－２期　Ｂ地区において井戸、Ｃ地区において根石をもった掘立柱建物が営まれる時期である。出土遺物からは明確な時期比定は困難であるが、光明寺本堂の創建期に先行する、有岡城期の遺構群である可能性が高く、ここでは16世紀後半代と捉えておく。

Ⅲ－３期　Ｂ地区において、光明寺の本堂が創建されて、第１次火災によって消失するまでの時期である。検出面の上層を被覆する火災層Ⅴからは、貿易陶磁では、景徳鎮窯産の青花、漳州窯産の青花、国産陶器では、瀬戸・美濃系天目椀、志野向付、肥前系では、唐津壺・椀・鉢、初期伊万里碗・花生などが出土しており、これらの遺物から、17世紀前半を下限とする時期が想定される

Ⅳ期　Ⅳ期は第１次火災から第２次火災までの時期、すなわち、17世紀前半から17世紀後半の時期である。

Ⅳ－１期　Ｂ・Ｃ地区において、第１次火災の火事片付けを行い、整地を完了するまでの時期である。17世紀前半の時期が考えらえる。

Ⅳ－２期　Ｂ地区において、光明寺の本堂が再建され、墓地が営まれはじめ、Ｃ地区において、鍛冶炉・ゴミ穴などの遺構が構築され、第２次火災によって焼失するまでの時期である。出土遺物には土師器火消壺、焙烙、肥前系の三島手唐津鉢・刷毛目唐津鉢、京焼風陶器椀、陶胎染付椀などがあり、これらの遺物の年代観から、17世紀中頃～後半の時期が考えらえる。

Ⅴ期　Ⅴ期は第２次火災から第３次火災までの時期である。

Ⅴ－１期　第２次火災によって消失したＢ・Ｃ地区で火事片付が行われ整地が完了する時期である。第２次火災が元禄12年（1699）もしくは元禄15年（1699）に発生したと考えられること、及び近年発見された光明寺の再建時の棟札銘が宝永８年（1711）であることから、Ⅴ－１期は18世紀の10年代と考えられる。

Ⅴ－２期　Ⅴ－２期は本堂の再建がなった宝永８年（1711）から第３次火災によって消失する明和年間(1764～71)の間すなわち18世紀前半～中頃と考えられる。出土遺物には肥前系の緑釉皿、くらわんか手碗・皿などがある。この時期、Ｃ区では酒蔵遺構が構築される。

Ⅵ期　Ⅵ期は第３次火災から第４次火災までの時期である。

Ⅵ－１期　Ⅵ－１期は第３次火災によって消失したＢ・Ｃ区で火事片付けが行われ、整地が完了するまでの時期である。光明寺の本堂は寺伝では天明12年(1782)には再建されていることから、Ⅵ－１期は明和年間（1764～71）から天明12年（1782）の間すなわち18世紀中頃の20年間と考えられる。

Ⅵ－２期　Ⅵ－２期はＢ地区では本堂が再建され、墓地についても再整備が行われ、第４次火災によって焼失するまでの時期であり、出土遺物から、18世紀後半～19世紀前半の時期が考えられる。Ｃ地区ではこの時期にはⅤ期に引き続き酒蔵遺構が稼働していた時期である。出土遺物には堺・明石産擂鉢、肥前系くらわんか手碗・皿・広東碗、瀬戸・美濃系染付磁器などがある。

Ⅶ期　幕末以降、近代を含む時期である。Ｂ地区ではⅥ期に引き続き、墓地が営まれる。Ｃ地区では調査区との境に石列溝がつくられ、南側の敷地との間に境界が意識されるようになる。

Ⅷ期　光明寺移転前の状態で、調査直前の状況である。Ⅵ期とは火災層を挟むが、土地利用の状況は大きく変わらない。

2. 光明寺本堂及び近世墓の成立と展開

次に、今回の調査で検出された遺構群の中で特徴的な、光明寺に係わる本堂基壇、近世墓地の変遷について、本堂基壇が創建されるⅢ期から近世後半のⅦ期までについてやや詳しく見てみたい。

Ⅲ期

前節で概観したように、光明寺の本堂基壇はⅢ－３期にはすでに第１次火災によって焼失している。検出面の上面に堆積する火災層Ⅴに含まれる遺物群から、Ⅲ－３期は17世紀前年を下限とする時期であることは前節で述べた通りである。それでは、本堂基壇の創建期はいつまで遡れるのであろうか。火災層Ⅴには16世紀後半代にまで遡ることが可能な唐津壺、明青花などが含まれており、明確ではないものの、天正年間（1573～1591）には堂宇が完成したとする寺伝に伝えられる時期とそう隔たりのない時期に、本堂基壇の創建期は求められよう。また、この時期には墓地はまだ形成されていない。

Ⅳ期

Ⅳ－１期には明確な遺構は見られないが、続くⅣ－２期には第１次火災で焼失した本堂が復興し、また近世墓の使用が開始される。墓は、早桶を棺とする土葬墓が中心であるが、土葬墓では他に丹波焼甕を棺としたもの、また火葬墓では丹波焼壺を骨壺としたものなどがある。

Ⅴ期

Ⅴ－1期は第2次火災で焼失した寺の整地が行われた時期であり、火事片付けの際に穿たれた廃棄土坑ＳＫ71・76・88・91などがある。土坑内からは肥前系の唐津椀・皿、三島手鉢、刷毛目唐津鉢、肥前系京焼風陶器椀、丹波焼擂鉢など17世紀前半～後半の時期の遺物が出土している。

Ⅴ－2期は第2次火災で焼失した本堂が再度復興した時期である。

墓地は、土葬墓では、早桶、箱式木棺、丹波焼甕を棺として使用するものがあり、また、火葬墓では土師器の火消壺、丹波焼壺、施釉陶器壺・甕などの日常雑器を骨壺として転用したものがある。

Ⅵ期

Ⅵ－1期は第3次火災で類焼した本堂の整備時期であり、下限を天明2年（1782）におくことができる。

また、墓の配置は大きく改変されており、火事片付けに伴う土坑は調査区の西1/3部分に集中して穿たれている。

Ⅵ－2期は第3次火災で類焼した本堂が3回目の復興を遂げる時期である。以後本堂は立て替えることなく、平成の移転の時期まで存続する。

墓地は土葬墓では箱式木棺、丹波焼甕を棺として使用するものが、火葬墓では土師器火消壺、丹波焼甕・壺、施釉陶器壺・甕などの日常雑器を骨壺に使用したものがあるが、土葬墓は減少し、火消壺を骨壺として使用した火葬墓が圧倒的に多くなり、施釉陶器の日常雑器を骨壺に転用したものがそれに次ぐ。

Ⅶ期

Ⅶ期は第4次火災によってⅥ期と区分され、19世紀の前半以降明治までの時期と考えられる。Ⅵ期に属するものには丹波焼甕を棺として使用する土葬墓、また白磁壺を骨壺として使用する火葬墓などが見られる。

3．酒蔵遺構について

Ｃ地区で営まれた遺構の中で特徴的なものとしては酒蔵遺構があげられる。これらの酒蔵遺構が最初に営まれるのはⅤ－2期すなわち18世紀前葉以降と考えられる。酒蔵遺構はその後、第4次火災によって焼失するが、再建されⅥ期を通じて操業し、Ⅶ期入ってその活動を終息させたものと考えられる。

それでは、Ⅴ期、Ⅵ期のそれぞれ時期の酒蔵の所有者は誰であったかについて、文献上から窺われる成果をもとに少し触れてみたい。

当該地点は『天保15年（1844）伊丹郷町分間絵図』から、伊丹郷町のうちの伊丹村（町）の泉町に属していたことがわかる。ここでは、考証の便宜上、『大正4年伊丹町地籍図謄本』に従い、本町通りに添う泉町の土地一筆一筆に番地を付し、以下この地番によって記述する。なお、197・198番地は近代に分筆されたもので江戸時代には一続きの土地であった。

まず、194番地は江戸期には米問屋・鹿島屋（岡田）利兵衛邸があり、それを取り巻く193番地は初め酒造家・松屋与兵衛、後には同じく酒造家・鹿島屋清右衛門が所有して明治に至っている。

この岡田家に伝わる岡田家文書の中に宝暦7年（1757）5月付けの和泉町（ママ）の樽屋利兵衛から鹿島屋利兵衛に宛てた家屋敷譲り状がある。

譲渡された屋敷地は、和泉町西側で表口3間、裏行町並であり、東は大道、西は溝切、南は次郎兵衛、

北は四郎三郎とある。面積は2畝8歩である。

東は本町通りに接し、西の溝切りは、すぐ西に隣接する光明寺との境を限る溝であると考えると、譲渡された屋敷地は196番地に該当すると考えられる。前記大正4年の地籍図に示された面積が2畝15分とそれと近いことも傍証となろう。したがって、南側の195番地が次郎兵衛後家、北側の197・198番地は四郎三郎の所有地にあたると推定できる。

今回検出された酒蔵遺構のうち197・198番地で検出された酒蔵遺構はこの四郎三郎の所有地内にあったもので、このことから四郎三郎は伊丹の酒造家・綛屋四郎三郎と考えられる。綛屋四郎三郎は寛文3年（1750）には外城村に本蔵と出店を持ち、伊丹町にも出店を持っていた。検出された酒蔵遺構のうちⅤ期に属するものは、この伊丹町の出店のものと考えられる。

また、Ⅵ期にはこの蔵は津国屋庄兵衛（あるいは庄太郎）の酒蔵であったと考えられる。その根拠としては、梶曲阜の著した『有岡古続語』「伊丹酒家盛衰之事」に、泉町の酒家として「紙八」「津庄」の2蔵が記されている。「紙八」は有力酒造家・紙屋（八尾）八左衛門であるが、彼は泉町内では東側の337番地に「天印家」蔵をもっていた。したがって、残るのは「津庄」の蔵と言うことになり、197・198番地の蔵がそれに該当すると考えられるからである。

更に明治16年（1883）には三木左七が197番地に居住していたことが伊丹酒造組合文書から分かる。彼も酒造家であったらしいが、実態は現在のところ不明である。[1]

今回の調査では、第Ⅱ面上において、一律に酒蔵遺構を検出したために、Ⅴ期の酒蔵遺構とⅥ期の酒蔵遺構を分けて検出することができなかった。その中で、検出された大型の礎石はⅤ期・Ⅵ期を通じて使用された可能性が高いものである。

また、竈10・11は火災層Ⅲによって埋没しており、Ⅴ期の酒蔵遺構に伴う竈である。また、竈10・11との位置関係から同時に機能していたと考えられる井戸7もまた、Ⅴ期に稼働し、火災層Ⅲによって切られている。これに対し、調査区南端に存在する竈4～7については、火災層Ⅲを切って造られており、上面には火災層Ⅱが堆積している。このことから、これらについてはⅥ期の酒蔵遺構に伴うものと考えてよいであろう。

また、また、三木左七宅と考えられる明治以降の遺構群からは当該地点が酒蔵であった可能性は低いと考えられるが、煉瓦製の竈遺構が検出されている。

4．光明寺近世墓出土人骨及び副葬品について

光明寺近世墓からは全部で63体の骨が出土したが、内2体は動物骨で、また人骨と断定出来ないものが1体含まれており、人骨と鑑定されたものは60体である。

これらの人骨は京都大学霊長類研究所の片山一道教授に鑑定を依頼し、所見を頂いたものを岡崎が表にまとめ、第7表として掲載している。出土人骨の詳細については第7表に譲るが、ここでは、表から読み取れる事項及び副葬品などから推定できる被葬者の生前の生活について、若干触れておきたい。

まず、人骨の内訳であるが、男性骨が12体、男性骨の可能性が高いもの6体、女性骨が5体、女性の可能性が高いもの11体、性別不明のものが26体確認されている。性別の比率は男性骨及びその可能性の高いものが30%、女性骨及びその可能性の高いものが27%、性別不明のものが43%で、性別が判定可

能な人骨では男性骨の比率が若干高くなっている。

また、年齢別では、男性骨では壮年前後のものが1体、壮年～熟年が4体、熟年が1体、熟年あるいは老年が2体と壮年以降の比較的年齢の高いもので占められているのに対して、女性骨では20代後半が1体、壮年が3体、壮年～熟年1体、18～50歳が1体と男性に比べ、年齢がやや低くなっている。

また、男性骨の可能性の高いものでは、成人が2体、壮年～熟年が1体、熟年～老年が1体、20～40歳が1体であるのに対して、女性骨の可能性の高いものでは、18～25歳の青年骨が1体、壮年若しくは熟年が2体、熟年が1体、熟年若しくは老年が1体、20～50歳が1体と、やはり男性に比べて、比較的若い年齢での死亡率がやや高くなっている。

更に、性別不明の人骨では、3歳～5歳の幼児が3体、10歳～18歳の少年が3体、20歳～30歳の青年が1体、成人骨が8体、壮年が2体、40歳～60歳が1体、壮年～熟年が1体、熟年が1体、不明が1体となっている。幼児骨が14.2%、少年骨が14.2%、青年骨4.7%と若年層の死亡率が33.1%にも及び、その死亡率が高いことがわかる。

最後に、被葬者の性別・年齢・あるいは生前の生活を偲ばせるものとして重要な副葬品について、若干触れておきたい。

副葬品には椀、鬢盥などの陶磁器、ミニチュア陶器・人形・土鈴、面子などの土製品、銅銭、煙管などの金属製品など、種類・用途から見ても様々なものが含まれる。これらの中で被葬者の人骨と副葬品がどちらも存在し、被葬者の生前の生活を偲ばせる事例としては、ＳＸ218の出土例があげられる。ＳＸ218からは人骨と共に、楽焼写しの茶碗、京焼系の茶巾筒、棗などの茶道具が出土している。埋葬時期は楽焼写しの椀が了入の写し[2]であることから、19世紀中頃以降と考えられる。

また、被葬者は50～70代の男性と考えられ、茶道を趣味とした幕末の伊丹の商人の生活を彷彿とさせるものである。

被葬者の人骨と副葬品がどちらも残っていた例はこのＳＸ218のみで、副葬品と被葬者の年齢、性別とが比較検討できる資料には恵まれなかったが、この他、特筆すべきものとして、ＳＸ234出土の副葬品がある。ＳＸ234からは人形、泥面子、ミニチュア陶器が大量に出土している。ミニチュアの陶器はオリジナルの製品を忠実に模倣しており、特にNO.235の皿は、復興織部を写したものと考えらえる。これだけ多様な陶器が墓に一括埋納されることはオリジナルの製品では考えらず、オリジナルの製品からは窺い知れない、18世紀後半代から19世紀前半代の陶磁器のセット関係を知ることができる貴重な資料である。

また、ＳＸ221、ＳＸ235では、伝統的な土師器皿の埋納が見られる。さらに、ＳＸ216・233・224・228・235では寛永通宝による六道銭の埋納が見られた。

今回の報告では、人骨と副葬品が共伴した例が少なかったこと、ミニチュアの陶器類については、そのオリジナルで製品について、一部を除いて、産地同定が困難であったことなどから、詳しく検討できなかったが、近世墓から出土するこれらの豊富な副葬品は近世の伊丹の商人層の日常生活を復元する上で貴重な情報を提供しており、これらの副葬品の分析・検討は今後の課題としたい。

注

（1）この項については、伊丹市立博物館長 和島恭仁雄氏から御教示を受けた。

（2）楽焼写しの椀については楽吉左衛門氏より御教示を得た。

第７表　光明寺近世墓　人骨集成（１）

No.	埋葬	棺・蔵骨器	人骨部位と特徴	性別・死亡年齢・特徴	副葬品
骨壺No.1	火葬	火消壺10	頭蓋骨・下顎骨（歯の脱落）・肩甲骨・上腕骨・胸椎・腰椎（骨増殖あまりしていない）・寛骨・膝関節・大腿骨（骨頭大きい）・脛骨／焼成不良	男・熟年	
骨壺No.3	火葬	火消壺29,30			
墓79の下	火葬	火消壺	顔面頭蓋・仙骨・指骨・脛骨（骨頭に骨端線が残る）／形態が異常矮小	？・成人（青年か）	釘F89
SX102	火葬	火消壺87	頭蓋骨・下顎骨・寛骨	？・成人	
SX103	火葬	火消壺55	頭蓋骨・肩甲骨・大腿骨・椎骨・長管骨（数片）	男・壮年から熟年	
SX104	火葬	火消壺69.68	頭蓋骨・下顎骨（歯が小さく華奢、切歯と犬歯を除く歯は生前に脱落、虫歯による膿胞痕あり）・第２頸椎・肩甲骨・鎖骨（小柄）・肋骨（第１肋骨の肋軟骨は骨化が進む）・椎骨（頸椎から下位胸骨の破片）・大腿骨または脛骨／肋軟骨の骨化が進む	女？・熟年か老年	
SX104-2	火葬	火消壺77,74			
SX105	火葬	陶器壺89	頭蓋骨・胸椎骨・腰椎骨（骨増殖有り）・寛骨・仙骨・大腿骨（骨頭）	？・成人	
S106	火葬	陶器壺356,357			
SX108	火葬	火消壺40,39	頭蓋骨・仙骨（仙骨山甲角の角度がにぶい）・大腿骨（左右骨頭・遠位端片）・尺骨・上腕骨／恥骨結合面の輪郭が明瞭であり、年齢は壮年から熟年	男？・壮年から熟年	
SX109	土葬	丹波壺91	人骨ではなく犬猫の寛骨／焼成されていない		
SX110	火葬	火消壺15.14	頭蓋骨・上腕骨（近位端及び遠位部）・腰椎（弱い骨増殖）・撓骨（近位端小さい）・寛骨・各種長管骨多数・指骨／焼成良・小さい・かなりの年齢	女？・壮年から熟年	
SX112	火葬	火消壺17,16	頭蓋骨・肋骨・上腕骨・寛骨・中手骨・大腿骨（小ぶり）・脛骨・中足骨／全身の骨がほぼある・恥骨結合が波うった感じで20代・出産痕有り・焼成むらがあり、部位によっては焼成不良、特に下腿以下の骨が焼成不良	女・20代後半	
SX113	火葬	火消壺3			
SX114	火葬	火消壺22.14	第２頸椎・上腕骨（遠位端・近位端）・腰椎・撓骨（近位端骨化）・寛骨・大腿骨（骨頭華奢）／全身の骨がある・頭蓋底と頸椎は焼成不良・小柄	女？・壮年から熟年	
SX115	火葬	丹波壺94	頸椎	？・40～60歳	肥前京焼風椀424
SX115	火葬		歯（未生の下顎第１大臼歯）	？・３～４歳	
SX116	火葬	火消壺62,61			
SX118	火葬		寛骨・大腿骨／人骨であると思うが断定できない・焼成不良	？	
SX119	火葬	火消壺44,43,45	頭蓋骨・下顎骨・寛骨・長管骨／骨が比較的頑丈なのでおそらく成人	女？・成人	
SX119-123	火葬	丹波壺99			
SX120	火葬	火消壺57	頭蓋骨（眼窩及び乳様突起部の形状から男）・脛骨・胸椎・肩甲骨・寛骨・上腕骨・長管骨／各関節面に老人性の骨増殖がないので成人から壮年、焼成良	男・壮年成人	
SX121	火葬	火消壺63	頭蓋骨（縫合線が明瞭に残っており壮年から熟年の初め・下顎第１大臼歯２本生前に離脱（人為的な可能性あり・第３臼歯生えている）・頸椎・指骨・胸椎・腰椎・寛骨（右寛骨から男性の可能性高い）・趾骨／全身の骨がある・腸骨の骨端線が消えている・骨の縮小変形激しい・焼成良（右前腕骨の焼成やや不良）	男？・30～40歳	

第７表　光明寺近世墓　人骨集成（２）

No.	埋葬	棺・蔵骨器	人骨部位と特徴	性別・死亡年齢・特徴	副葬品
SX122					
SX123	火葬	陶器壺90			
SX124	土葬	丹波甕112			
SX125	火葬	火消壺2	頭蓋骨・下顎骨・頬骨・仙骨	？・成人？	
SX125-2	火葬	火消壺11	頭蓋骨・頸椎・肩甲骨・肋骨・胸椎・腰椎・寛骨・大腿骨／全身の骨がある	男・壮年から熟年	
SX130	火葬	丹波壺95			
SX133	火葬	火消壺80			
SX133A					
SX133B	火葬	火消壺35	大腿骨		
SX133C	火葬		頭蓋骨		
SX133D	火葬	火消壺50,51			
SX133E	火葬	火消壺25	頭蓋骨（眼窩縁の形状から女）・肋骨・仙骨・上腕骨・大腿骨・長管骨・寛骨（腸骨端はつく）	女？・壮年から熟年	
SX134	火葬	丹波118			
SX135	火葬	火消壺76,12			
SX136	火葬	火消壺54,53	頭蓋骨・第２頸椎・寛骨（一部）・大腿骨（骨端線ゆ合）／全身は残っていない・長管骨片あり・焼成良（大腿骨骨頭周辺の焼成はやや悪い）	女？・20～40歳	
SX137	火葬	火消壺27			
SX138	火葬	火消壺32,31	頭蓋片・第２頸椎・肋骨片少々・椎骨片少々・長管骨片・大腿骨１本（左右不明）／一部の骨のみ入る	？・成人の可能性	
SX139	火葬	火消壺34,33			
SX140	火葬	火消壺6,5,9	頭蓋骨（顔面頬骨・後頭骨・側頭骨）・上腕骨（骨頭ゆ合）	女？・壮年	
SX141	火葬	丹波甕103	頭蓋骨（数十片あり）・尺骨（縫合線よく残っている）／全身の骨がある・１個体か否かは不明・細片多数	？・壮年	
SX142	火葬	磁器上瓶130,129			
SX143甕内	火葬		椎骨（胸椎・腰椎）・大腿骨（頑丈そう・骨端ゆ合）・脛骨（骨端ゆ合）	男？・成人	
SX146	火葬	火消壺86,85			
SX147	火葬	火消壺60,59	頭蓋・頸椎・上腕骨（骨頭断片あり）・胸椎（下位）・椎骨片５～６片／各種長管骨破片10片以上・全体に焼成温度低い	？・壮年成人（20歳以上）	遺髪入れ145
SX148	火葬	丹波甕97,96	頭蓋骨・胸椎・大腿骨・左脛骨／全身骨格があると考えた方がよい・歯は残らない・焼成良	女？ 20～50歳	
SX148F	火葬	火消壺71,70	下顎骨・頬骨・胸椎・腰椎・仙骨・上腕骨・脛骨・長管骨／手足の骨はない・焼成良	？・壮年から熟年	
SX150	火葬	火消壺23			
SX160	火葬	火消壺4			
SX162	火葬	火消壺52			
SX162-2	火葬	火消壺28	頭蓋骨５、６片・腰椎骨片５、６片・四肢長管骨？／何人分あるのか？	？	土玉146～152
SX163	火葬	火消壺49,48			
SX164	火葬	火消壺20,19			
SX165					
SX167	土葬	丹波甕108			釘F18～F25,F27,F28

第７表　光明寺近世墓　人骨集成（３）

No.	埋葬	棺・蔵骨器	人骨部位と特徴	性別・死亡年齢・特徴	副葬品
SX168	火葬	丹波甕111	頸椎・肋骨・胸椎・腰椎・寛骨・大腿骨・膝蓋骨・距骨／おそらく全身の骨があるものと考えられる・大坐骨切痕が大きい・焼成は部分的にやや不良	女・壮年	
SX169		丹波甕110			
SX170	火葬		微細骨片多数・焼成人骨であろう	?	
SX171					
SX173		丹波甕116			
SX173-2	火葬	丹波甕101	頭蓋骨・肩甲骨・上腕骨（下端）・大腿骨	?・18歳以上	
SX173-3	火葬	火消壺26（墨書）	頭蓋骨・下顎骨（歯エナメル質がとび、歯根損壊・切歯と臼歯あり）・肩甲骨・鎖骨・胸椎・仙骨・上腕骨・大腿骨・脛蓋骨／均等にかなり高温で焼成	女?・18～25歳	
SX175	火葬	火消壺72	頭蓋骨・上腕骨・脛骨・歯／種々の長管骨片かなりまじる・１体分かどうかも不明・焼成非常に良	?・壮年	釘F86,F87
SX176	火葬	火消壺56			
SX176他		丹波甕386			
SX177	火葬	火消壺8,7	仙骨	?・20から30歳	
SX177	火葬	丹波甕105	頭蓋骨（３片）・頸椎・肩甲骨・肋骨・仙骨・寛骨・胸椎（胸椎骨体３個）／他微小骨片	?・成人	
SX177U	火葬	火消壺1			
SX178					花生け90,91
SX183					
SX184					
SX185		丹波壺100			
SX251	火葬	火消壺13			
SX189		丹波壺119			
SX190	火葬	火消壺47,46 丹波壺367	上腕骨（骨頭がはなれている）・寛骨・大腿骨（骨頭が離れている）・膝蓋骨	?・14～18歳	甕117
SX190	火葬		歯（下顎大臼歯第１か第２大臼歯、咬耗はほとんどないことから未萌出であったと考えられる）・上腕骨・胸椎・腰椎	?・10～15歳	
SX252	火葬	火消壺38,37	頭蓋骨（頬骨頑丈・下顎骨は歯がない）・鎖骨・肩甲骨・肋骨・寛骨（坐骨部分）・腰椎・大腿骨（粗線が発達）・膝蓋骨（大きく頑丈）・尺骨・腓骨・橈骨・距骨・中足骨／全身の骨がそろう・かなり大柄・筋肉がよく発達していた・焼成のため全体に縮む・足の骨で焼成が不充分な部分がある	男?・20～40歳	
SX192	火葬	火消壺65,64 丹波甕115	頭蓋骨・椎骨（胸椎・腰椎）・尺骨（下端）・大腿骨	男・熟年あるいは老年	
SX193	火葬	火消壺38	頭蓋骨・椎骨・上腕骨	?・成人?	
SX194	火葬	丹波甕102,135	頭蓋骨・肋骨・胸椎・腰椎・寛骨	男・壮年前後	猪口135
SX195	火葬	火消壺41 陶器124,123	頭蓋骨・胸椎・鎖骨・腰椎・上腕骨・大腿骨・寛骨・仙骨	男?・壮年の後半～熟年	ミニチュア184,185,186,197
SX196	火葬	丹波壺92	頭蓋骨（左上頬骨・歯）・頸椎・鎖骨・胸骨・上腕骨（骨頭）・前腕骨・寛骨	男・壮年から熟年	
SX197	火葬	火消壺79,78	頭蓋骨（破片多数・鼻骨・頬骨・下顎骨）・歯は犬歯と切歯２～３本のみ、他は生前に離脱・眼窩の周縁の形状から男・頸椎・鎖骨・肩甲骨・上腕骨（よく焼成）・尺骨・中手骨１片・指骨１片／全身の骨がある・わりと小柄・胴体部の骨の焼成は比較的弱い	男・熟年から老年	

第７表　光明寺近世墓　人骨集成（４）

No.	埋葬	棺・蔵骨器	人骨部位と特徴	性別・死亡年齢・特徴	副葬品
SX198	火葬	火消壺42			猪口138・杯137
SX199	火葬	火消壺42 丹波壺93			
SX200	火葬	火消壺75	頭蓋骨（下顎骨右下顎角部分残存）・肩甲骨・腰椎片多数（嘴状骨増殖が強く発達している）・大腿骨（左大腿骨）／頭部の焼成やや悪い（この部分の縮小が少ない）	男・熟年	銭F136～F141
SX202	土葬				土師皿581
SX203	火葬	火消壺60			猪口133・杯136
SX203他		陶器壺122			
SX204	火葬	丹波甕131	頭蓋骨・肩甲骨・尺骨・寛骨・上腕骨・腰椎骨・大腿骨（遠位端）・脛骨（近位端）／長管骨の破片は多数	？・成人	肥前焼碗131
SX210	火葬	火消壺84	頭蓋骨・鎖骨・胸骨・肋骨・寛骨・仙骨・前腕骨・腰椎・大腿骨・長管骨／椎骨にリッピングスあり・やや小柄か	？・熟年	棺釘F88,145
SX211	火葬	丹波甕98	頸椎・胸椎・肩甲骨・骨盤骨・脛骨・上腕骨／腰椎が小さい・華奢・小柄	女・壮年	
SX212					
SX214					
SX216	土葬	丹波甕 109.107 木棺２～８	頭蓋骨・頸椎・肋骨・上腕骨・胸椎・腰椎・橈骨・尺骨・足根骨／全身の骨格あり	？・３～４歳の幼児	玩具・土鈴161,162 F92・銭F143～F147 箱板W204～206
SX217	火葬	磁器126,125			
SX218	土葬	箱棺	頭蓋骨（歯は右の第２小臼歯より後が生前離脱、左は第１小臼歯より後は生前離脱）・第１頸椎／165～170cmくらいの高身長	男・50～70歳	土師器火鉢604 楽茶碗141・茶巾費140 棗W170・数珠玉W22～W38 W79～W185他
SX219					ミニチュアセット 246～255
SX220	火葬	火消壺88			
SX221	土葬	桶棺			土師皿579,582 F91・銭F148～ F153
SX221-2	土葬	桶棺			
SX222	土葬	桶棺			ミニチュアセット 236～245
SX223					銭F154～164
SX224	土葬	桶棺			土師皿587
SX225	土葬	桶棺			桶底板W12・側板W9
SX226	土葬	桶棺	頭蓋骨（後頭骨）・肩甲骨・肋骨・手根骨・中手骨・大腿骨（左）	女・壮年	ミニチュア201,202 桶側板W5,W6 桶底板W10・W21 数珠玉W39～W102
SX227	火葬	火消壺58	頭蓋骨・腰椎・寛骨（恥骨下角が小さい）・膝蓋骨／全身の骨があるものと考えられる	男・壮年から熟年	煙管F4・銭 F178,F179 玉・櫛・他
SX228			歯		鋼線F7～F16・釘F40～75 銭F165～F170 数珠玉W103～W169他

第７表　光明寺近世墓　人骨集成（５）

No.	埋葬	棺・蔵骨器	人骨部位と特徴	性別・死亡年齢・特徴	副葬品
SX229					W7・W13
SX230	火葬	火消壺81,59 丹波甕104 桶棺	頭蓋骨（下顎骨の臼歯は生前に離脱・ほとんどの前歯は抜けていたと考えられる）・頸椎・肩甲骨・上腕骨（骨頭）・胸骨／上半身が存在、下肢骨なし・焼成良（縮小のため体格は不明）	男？・熟年から老年	紅皿501
SX230	火葬	火消壺84			
SX230N	火葬	火消壺83			
SX230掘方内	火葬		仙骨（分節がゆ合していないことから若年成人）・寛骨	？・若年成人	
SX232	火葬 土葬	火消壺67,66 箱棺W18～20	頭蓋骨・下顎骨・腰椎・大腿骨（骨体破片）／微小破片多数	女？・熟年	釘F76～F80 W18～W20
SX233	土葬	桶棺344	歯		釘F81,F82・座板W11
SX234	土葬	桶棺			ミニチュア203～205,207～211,213～235
SX235	土葬	桶棺			ミニチュア猿199 土師皿573,575,577 銭F171～F176
SX236	土葬	桶棺	歯		經草の道具W171・櫛材W209 經管W210 櫛W235～W237
SX239	土葬	桶棺			土鈴158～160・人形そく206・金魚
SX241	火葬	火消壺36	頭蓋骨・寛骨・大腿骨・下位椎骨／骨質はぜい弱・出産痕がある	女・壮年から熟年	
SX242	土葬	桶棺			土玉153~155・ミニチュア139,143,144,187
SX243	土葬	桶棺			ミニチュア142,189,191
SX244	土葬	桶棺			土師皿200,201,246～248,254,566～572,574, 576,578,580
SX245	火葬	火消壺83,82	頭蓋骨（大臼歯まだ生えていない状態）・肩甲骨・椎骨・寛骨	？・３～５歳	玉43,44
SX	火葬	火消壺73	頭蓋骨・鎖骨・寛骨・指骨・椎骨片あり・下肢から上肢の長管骨破片あり／小柄・焼成良（部分的に不良）	女・18～50歳	
SX *a*	火葬	火消壺73	頭蓋骨・頸椎・胸椎・腰椎・寛骨・歯／成人であろう	？・成人か	
SX119 ～12			牛骨		
不明	火葬		頭蓋骨・頸椎・鎖骨・肩甲骨・胸椎・寛骨・大腿骨・膝蓋骨・足根骨／椎骨のリッピングスは軽微	？・若年の成人	

第８表　土器・陶磁器・土製品属性表（１）

No	地区	遺　構	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	残存率	備　　考
1	B	SX177	土師器	火消壺	15.45	31.6	20.35	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
2	B	SX125	土師器	火消壺	(20.6)	28.3	21.3	4/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
3	B	SX113	土師器	火消壺	(19.8)	27.3	20.9	2/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
4	B	SX160	土師器	骨壺	8.4	8.55	12.1	5/6	蔵骨器
5	B	SX140	土師器	火消壺蓋	(13.5)	2.0	-	5/6	蔵骨器
6	B	SX140	土師器	火消壺	10.0	9.0	12.1	完形	蔵骨器
7	B	SX177	土師器	火消壺蓋	20.4	4.5	-	完形	蔵骨器
8	B	SX177	土師器	火消壺	16.1	26.7	17.9	完形	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
9	B	SX140	土師器	火消壺	17.9	4.05	-	3/6	蔵骨器
10	B	骨壺1	土師器	火消壺	15.2	24.95	19.4	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
11	B	SX125	土師器	火消壺	(18.3)	27.1	20.5	3/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
12	B	SX135	土師器	火消壺蓋	20.0	3.3	-	5/6	蔵骨器
13	B	SX251	土師器	火消壺	18.0	28.3	19.5	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
14	B	SX110	土師器	火消壺蓋	16.5	3.7	-	5/6	蔵骨器
15	B	SX110	土師器	火消壺	12.8	20.2	14.3	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
16	B	SX112	土師器	火消壺蓋	16.1	3.6	-	完形	蔵骨器
17	B	SX112	土師器	火消壺	11.4	19.0	12.4	完形	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
18	B	SX199	土師器	火消壺	(14.4)	(22.1)	17.2	1/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
19	B	SX164	土師器	火消壺蓋	16.95	(2.35)		4/6	蔵骨器
20	B	SX164	土師器	火消壺	(12.7)	20.5	13.5	4/6	蔵骨器
21	B	SX114	土師器	火消壺蓋	(16.2)	(4.0)	-	1/6	蔵骨器
22	B	SX114	土師器	火消壺	13.0	21.0	14.3	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
23	B	SX150	土師器	火消壺	(11.3)	(21.3)	14.6	4/6	蔵骨器
24	B	骨壺	土師器	火消壺	(18.4)	28.4	19.2	4/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
25	B	SX133	土師器	火消壺	12.1	20.6	13.7	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
26	B	SX173	土師器	火消壺	(12.3)	(20.8)	14.25	2/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
27	B	SX137	土師器	火消壺	17.5	27.2	18.7	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
28	B	SX162	土師器	火消壺	(10.6)	(20.8)	14.9	3/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
29	B	骨壺3	土師器	火壺蓋	16.4	4.2	-	4/6	蔵骨器
30	B	骨壺3	土師器	火消壺	12.8	19.15	14.3	4/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
31	B	SX138	土師器	火消壺蓋	22.5	5.1	-	5/6	蔵骨器
32	B	SX138	土師器	火消壺	(16.1)	24.8	17.7	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
33	B	SX139	土師器	火消壺蓋	23.1	5.2	-	完形	蔵骨器
34	B	SX139	土師器	火消壺	18.2	25.9	20.9	完形	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
35	B	SX133B	土師器	火消壺	(16.3)	(25.8)	18.4	4/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
36	B	SX241	土師器	火消壺	(12.1)	(21.1)	14.7	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
37	B	SX252	土師器	火消壺蓋	20.7	5.2	-	5/6	蔵骨器
38	B	SX252	土師器	火消壺	16.4	24.1	18.7	5/6	蔵骨器　Ⅰ類 18C前半
39	B	SX108	土師器	火消壺蓋	22.95	6.3	-	5/6	蔵骨器
40	B	SX108	土師器	火消壺	16.5	26.0	17.55	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
41	B	SX195	土師器	火消壺	19.8	27.8	20.2	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末

第8表　土器・陶磁器・土製品属性表（2）

No	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存率	備考
42	B	SX198	土師器	火消壺	(20.1)	(27.8)	22.8	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
43	B	SX119	土師器	火消壺蓋	(24.8)	(4.8)	-	3/6	蔵骨器
44	B	SX119	土師器	火消壺	(20.4)	26.6	(21.5)	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
45	B	SX119	土師器	火消壺蓋	(14.0)	4.1	-	1/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
46	B	SX190	土師器	火消壺蓋	(18.9)	(3.95)	-	2/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
47	B	SX190	土師器	火消壺	14.7	22.7	17.2	5/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
48	B	SX163	土師器	火消壺蓋	(16.0)	3.6	-	2/6	蔵骨器
49	B	SX163	土師器	火消壺	(12.1)	(17.9)	13.75	2/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
50	B	SX133D	土師器	火消壺	12.45	20.4	(14.5)	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
51	B	SX133D	土師器	火消壺蓋	17.8	4.65		1/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
52	B	SX162	土師器	火消壺	(12.2)	(18.6)	14.8	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
53	B	SX136	土師器	火消壺蓋	(17.8)	3.2	-	1/6	蔵骨器
54	B	SX136	土師器	火消壺	12.25	17.6	15.65	完形	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
55	B	SX103	土師器	火消壺	(14.3)	19.5	14.7	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
56	B	SX176	土師器	火消壺	(13.0)	18.7	13.4	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
57	B	SX120	土師器	火消壺	11.3	16.3	12.8	完形	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
58	B	SX227	土師器	火消壺	16.9	23.9	18.7	5/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
59	B	SX147	土師器	火消壺蓋	(17.1)	4.3	-	1/6	蔵骨器
60	B	SX147	土師器	火消壺	14.6	20.4	15.3	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
61	B	SX116	土師器	火消壺蓋	-	(4.05)	-	1/6	蔵骨器
62	B	SX116	土師器	火消壺	16.8	24.7	18.85	5/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
63	B	SX121	土師器	火消壺	12.46	19.2	14.2	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
64	B	SX208	土師器	火消壺蓋	(16.0)	2.3	-	1/6	蔵骨器
65	B	SX208	土師器	火消壺	12.6	18.3	14.6	4/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
66	B	SX232	土師器	火消壺蓋	14.3	3.2	-	4/6	蔵骨器
67	B	SX232	土師器	火消壺	10.7	16.3	12.0	完形	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
68	B	SX104	土師器	火消壺蓋	17.0	3.5	-	4/6	蔵骨器
69	B	SX104	土師器	火消壺	11.2	16.5	12.8	完形	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C前半
70	B	SX148F	土師器	火消壺蓋	15.5	3.0	-	完形	蔵骨器
71	B	SX148F	土師器	火消壺	11.8	17.7	12.0	完形	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C前半
72	B	SX175	土師器	火消壺	(18.0)	23.2	17.9	4/6	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C前半
73	B	SXα	土師器	火消壺	(12.5)	(17.1)	12.55	4/6	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C前半
74	B	SX104	土師器	火消壺蓋	(17.7)	4.3	-	3/6	蔵骨器
75	B	SX200	土師器	火消蓋	16.55	4.0	-	4/6	蔵骨器
76	B	SX135	土師器	火消壺	(16.1)	(22.5)	(15.5)	4/6	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C前半
77	B	SX104	土師器	火消壺	(13.9)	21.2	(15.8)	3/6	蔵骨器
78	B	SX197	土師器	火消壺蓋	15.1	3.9	-	完形	蔵骨器
79	B	SX197	土師器	火消壺	11.0	17.15	14.1	完形	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C前半
80	B	SX133	土師器	火消壺	11.0	17.38	12.8	1/6	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C前半
81	B	SX230	土師器	火消壺	(12.3)	17.75	(12.3)	2/6	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C前半
82	B	SX245	土師器	火消壺蓋	14.4	3.6	-	完形	蔵骨器

第8表　土器・陶磁器・土製品属性表（3）

No	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存率	備考
83	B	SX245	土師器	火消壺	9.9	15.55	11.7	5/6	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C 前半
84	B	SX210	土師器	火消壺	13.7	19.8	14.2	5/6	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C 前半
85	B	SX146	土師器	火消壺蓋	13.4	2.9	-	4/6	蔵骨器
86	B	SX146	土師器	火消壺	10.4	16.1	11.8	5/6	蔵骨器　ⅡA類 18C中頃～末
87	B	SX102	土師器	火消壺	10.75	15.99	11.9	3/6	蔵骨器ⅡB類 18C末～19C 前半
88	B	SX220	土師器	火消壺	14.7	17.51	14.2	完形	蔵骨器
89	B	SX105	施釉陶器	壺	9.25	12.55	8.4	完形	蔵骨器　丹波焼
90	B	SX123	施釉陶器	壺	7.8	13.25	11.68	完形	蔵骨器　丹波焼
91	B	SX109	施釉陶器	壺	9.8	15.75	15.65	5/6	蔵骨器　丹波焼　VA類
92	B	SX196	施釉陶器	徳利	6.0	15.35	11.7	完形	
93	B	SX199	施釉陶器	壺	8.2	14.6	7.4	2/6	蔵骨器　丹波焼　VB類
94	B	SX115	施釉陶器	壺	9.4	12.95	8.0	5/6	蔵骨器　丹波焼　VB類
95	B	SX130	施釉陶器	甕	(10.6)	17.4	(8.55)	1/6	蔵骨器　丹波焼　Ⅵ類
96	B	SX148	施釉陶器	甕	(12.0)	(4.0)	-	4/6	蔵骨器　丹波焼
97	B	SX148	施釉陶器	甕	(9.3)	2.0	-	5/6	蔵骨器　丹波焼　Ⅵ類
98	B	SX211	施釉陶器	甕	10.52	14.0	9.0	完形	蔵骨器　丹波焼　Ⅵ類
99	B	SX119	施釉陶器	壺	(13.8)	15.9	10.4	4/6	蔵骨器　丹波焼　Ⅲ類
100	B	SX185	施釉陶器	壺	9.9	14.45	9.65	完形	蔵骨器　丹波焼　ⅣA類
101	B	SX173	施釉陶器	甕	15.35	21.8	12.1	4/6	蔵骨器　丹波焼　ⅢB 1 類
102	B	SX194,195	施釉陶器	甕	(16.0)	21.7	11.4	4/6	蔵骨器　丹波焼　ⅢB 1 類
103	B	SX141	施釉陶器	甕	18.05	20.7	11.15	完形	蔵骨器　丹波焼　ⅢB 1 類
104	B	SX230	施釉陶器	甕	19.9	23.1	13.1	4/6	蔵骨器　丹波焼　ⅢC 1 類
105	B	SX204	施釉陶器	甕	21.6	17.05	13.45	完形	蔵骨器　丹波焼　ⅢB 2 類
106	B	Ⅲ面	施釉陶器	甕	(19.3)	22.45	(15.6)	4/6	蔵骨器　丹波焼　ⅢA 2 類
107	B	SX216	施釉陶器	甕	41.85	50.12	25.9	4/6	蔵骨器　丹波焼　V類
108	B	SX167	施釉陶器	甕	32.05	40.75	17.4	4/6	蔵骨器　丹波焼　V類
109	B	SX216	施釉陶器	甕	(18.6)	20.25	13.8	2/6	蔵骨器　丹波焼　ⅢA 1 類
110	B	SX169	施釉陶器	甕	18.9	21.1	15.7	完形	蔵骨器　丹波焼　Ⅱ類
111	B	SX168	施釉陶器	甕	21.3	23.5	14.8	完形	蔵骨器　丹波焼　ⅢA 1 類
112	B	SX124	施釉陶器	甕	(41.8)	(51.8)	19.9	4/6	蔵骨器　丹波焼　ⅢA 2 類
113	B	墓35	施釉陶器	甕	48.5	59.7	25.55	完形	蔵骨器　丹波焼　Ⅳ類
114	B	墓36	施釉陶器	甕	47.1	47.3	20.15	4/6	蔵骨器　丹波焼　Ⅳ類
115	B	SX192	施釉陶器	甕	(19.9)	22.5	13.3	2/6	蔵骨器　丹波焼　Ⅳ類
116	B	SX173	施釉陶器	鉢	18.4	12.75	12.3	完形	蔵骨器　丹波焼
117	B	SX190 他	施釉陶器	甕	10.15	10.8	5.85	1/6	蔵骨器
118	B	SX134	施釉陶器	甕	32.55	25.95	19.6	完形	蔵骨器　丹波焼
119	B	SX189	施釉陶器	壺	(14.2)	16.45	11.45	5/6	蔵骨器　丹波焼　Ⅲ類
120	B	SX191	施釉陶器	壺	(10.0)	12.6	8.4	3/6	蔵骨器　丹波焼　Ⅳ類
121	B	SX71	施釉陶器	壺	10.0	12.3	8.45	4/6	蔵骨器　丹波焼　Ⅳ類
122	B	SX203 他	施釉陶器	壺	(12.4)	(21.4)	(11.6)	1/6	蔵骨器　丹波焼　ⅣB類
123	B	SX209	施釉陶器	蓋	(10.6)	2.5	4.7	2/6	蔵骨器　丹波焼

第８表　土器・陶磁器・土製品属性表（４）

No	地区	遺　構	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	残存率	備　　考
124	B	SX209	施釉陶器	三耳壺	(10.6)	19.4	12.9	4/6	蔵骨器　丹波焼　ⅣB類
125	B	SX217	白磁	壺蓋	13.65	4.4	-	完形	蔵骨器
126	B	SX217	白磁	壺	15.0	10.8	10.2	完形	蔵骨器　125と対
127	B	SX217	施釉陶器	土瓶蓋	6.4	4.4	-	完形	蔵骨器　舞子・明石焼
128	B	SX217	施釉陶器	土瓶	7.6	13.4	7.9	完形	蔵骨器　舞子・明石焼
129	B	SX142	施釉陶器	土瓶蓋	10.5	2.55	-	4/6	蔵骨器　舞子・明石焼
130	B	SX142	施釉陶器	土瓶	14.5	13.2	8.25	4/6	蔵骨器　舞子・明石焼
131	B	SX204	染付磁器	碗	9.3	5.15	3.7	完形	肥前系くらわんか手　18C後半
132	B	SX73	染付磁器	杯	6.95	4.2	3.2	完形	肥前系くらわんか手　18C前半
133	B	SX203P1	染付磁器	碗	6.6	3.3	2.5	完形	肥前系
134	B	SX75	染付磁器	杯	7.5	5.92	4.62	完形	肥前系　19C前半
135	B	SX194	染付磁器	碗	5.8	3.0	2.3	完形	肥前系　18C代
136	B	SX203P2	染付磁器	皿	7.8	2.53	3.18	完形	瀬戸・美濃系
137	B	SX198	染付磁器	杯	(5.25)	2.6	(2.8)		肥前系
138	B	SX198	白磁	紅皿	5.1	1.4	1.55	5/6	肥前系 18C後半～19C前半
139	B	SX242	白磁	紅皿	4.4	1.3	2.45	完形	肥前系 18C後半～19C前半
140	B	SX218	施釉陶器	茶巾筒	2.6	5.25	2.75	完形	京焼系
141	B	SX218	施釉陶器	椀	6.5	5.9	3.2	完形	楽焼写し
142	B	SX243	染付磁器	蓋	6.95	2.45	2.85	完形	肥前系
143	B	SX242	染付磁器	蓋物	7.4	3.23	3.7	完形	肥前系 142と対
144	B	SX222	磁器	香炉	9.0	4.98	6.5	完形	
145	B	SX147下層	磁器	遺髪入れ		6.5		完形	
146	B	SX162	土製品	数珠玉	長 0.65	巾 0.7	厚 0.6	完形	
147	B	SX162	土製品	数珠玉	長 0.7	巾 0.75	厚 0.7	完形	
148	B	SX162	土製品	数珠玉	長 0.7	巾 0.75	厚 0.6	完形	
149	B	SX162	土製品	数珠玉	長 0.55	巾 0.6	厚 0.5	完形	
150	B	SX162	土製品	数珠玉	長 (0.6)	巾 0.7	厚 0.6	4/6	
151	B	SX162	土製品	数珠玉	長 0.7	巾 0.7	厚 0.65	4/6	
152	B	SX162	土製品	数珠玉	長 (0.3)	巾 0.6	厚 0.6	3/6	
153	B	SX242	土製品	数珠玉	長 0.75	巾 0.7	厚 0.8	完形	
154	B	SX242	土製品	数珠玉	長 0.65	巾 0.8	厚 0.75	完形	
155	B	SX242	土製品	数珠玉	長 0.7	巾 0.7	厚 0.7	完形	
156	B	SX239	土製品	土鈴	横 2.15	高 1.6	-	完形	
157	B	SX239	土製品	土鈴	横 2.2	高 2.65	-	完形	
158	B	SX239	土製品	土鈴	横 2.3	高 2.95	-	完形	
159	B	SX239	土製品	土鈴	横 2.2	高 2.89	-	完形	
160	B	SX239	土製品	土鈴	横 2.3	高 2.7	-	完形	
161	B	SX216	土製品	土鈴	横 1.05	高 1.2	-	完形	
162	B	SX216	土製品	土鈴	横 1.15	高 1.3	-	完形	
163	C	K4Ⅲ面	土製品	面子					72.0g
164	C	K4Ⅱ面	土製品	面子					40.5g

第８表　土器・陶磁器・土製品属性表（５）

No	地区	遺　構	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	残存率	備　　考
165	B	SK85	土製品	面子					47.0g
166	B	SK85	土製品	面子					26.0g
167	B	SK20	土製品	面子					37.0g
168	B	Ⅱ面	土製品	面子					39.0g
169	B	SK09	土製品	面子					32.0g
170	C	SD02南	土製品	面子					28.0g
171	B	SK25	土製品	面子					52.0g
172	B	SK85	土製品	面子					27.5g
173	C	SD08	土製品	面子					36.0g
174	C	SK03	土製品	面子					35.5g
175	C	SK07	土製品	面子					37.5g
176	B	SK09	土製品	面子					39.0g
177	B	Ⅰ面	土製品	面子					10.5g
178	B	SK75	土製品	面子					17.5g
179	C	J３Ⅱ面	土製品	面子					14.5g
180	C	J４Ⅱ面	土製品	面子					15.0g
181	B	SX12	土製品	灯籠形	巾 2.8	高 6.4	厚 2.6	完形	両型
182	B	SX12	土製品	鐘楼形	巾 4.0	高 5.05	厚 2.05	完形	両型
183	B	SX12	土製品	竈形	巾 5.45	高 1.5	長 3.4	完形	片型
184	B	SX195	施釉陶器	徳利	1.8	5.9	2.7	完形	型物
185	B	SX195	白磁	紅皿	4.6	1.55	1.4	完形	肥前系　18C後半～19C 前半
186	B	SX195	軟質施釉陶器	急須	4.25	2.65	2.8	完形	型物
187	B	SX242	無釉陶器	徳利	1.1	5.3	2.35	完形	備前布袋徳利ミニチュア
188	B	B 焼土	施釉陶器	徳利	5.05	4.4	2.05	完形	型物
189	B	SX243	軟質施釉陶器	椀	3.9	2.0	1.45	完形	型物
190	B	SX72	土師器	椀	5.1	7.4	2.8	完形	型物
191	B	SX243	軟質施釉陶器	急須	(2.6)	4.0	2.6	完形	型物
192	B	B 礫E	軟質施釉陶器	片口	5.65	2.45	2.85	完形	型物
193	B	B 礫E	軟質施釉陶器	片口	5.15	2.4	2.75	完形	型物
194	C	SE11	土製品	人形	巾 3.45	高 4.9	厚 2.7	4/6	両型　福助人形
195	B	SK85	土製品	土鈴	巾 4.3	高 3.7	-	完形	
196	C	SK06	土製品	人形					両型　虚無僧
197	B	SX195	土製品	人形	巾 8.3	高 11.4	厚 5.85	完形	両型　恵比寿像
198	B	G3G4砂礫層	施釉陶器	動物形	巾 6.6	高 8.05	厚 5.5	完形	両型　猿形
199	B	SX235	土製品	動物形	巾 2.95	高 4.55	長 5.15	完形	手捏ね成形　猿形
200	B	SK38	土製品	陽物	巾 2.7	長 11.0	-	?	
201	B	SX226	土製品	人形	巾 4.2	高 8.01	厚 2.85	完形	両型　子守像
202	B	SX226	土製品	人形	巾 4.85	高 8.6	厚 2.45	完形	両型　二番叟　鈴
203	B	SX234	土製品	人形	巾 3.7	高 8.3	厚 2.0	完形	手捏ね成形　嫁人形
204	B	SX234	土製品	人形	巾 3.25	高 6.15	厚 2.55	完形	手捏ね成形　荷売女
205	B	SX234	土製品	人形	巾 2.41	高 2.9	厚 1.35	完形	両型　福助人形　耳に鉄釉

第８表　土器・陶磁器・土製品属性表（６）

No	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存率	備考
206	B	SX239		人形ろうそく	巾 0.7	(4.6)	-	?	ろうそく
207	B	SX234	土製品	面子	φ 3.0				7.5g 「角」
208	B	SX234	土製品	面子	φ 2.9				10.0g
209	B	SX234	土製品	面子	φ 2.9				8.0g 「桐」
210	B	SX234	土製品	面子	φ 2.9				10.5g 「鶴」
211	B	SX234	土製品	面子	φ 2.8				9.5g 「鶴」
212	B	SX234	軟質施釉陶器	蓋	6.45	1.5	-	完形	鍋島焼写し
213	B	SX234	軟質施釉陶器	急須	6.8	3.7	3.05	完形	
214	B	SX234	軟質施釉陶器	風炉	6.2	4.85	3.9	完形	
215	B	SX234	軟質施釉陶器	壺	(2.9)	4.2	3.15	4/6	
216	B	SX234	軟質施釉陶器	蓋	2.2	0.65	-	完形	
217	B	SX234	軟質施釉陶器	急須	2.6	4.0	2.7	完形	216と対
218	B	SX234	軟質施釉陶器	蓋	2.9	1.75	2.2	完形	
219	B	SX234	軟質施釉陶器	土瓶	2.3	4.95	3.15	完形	
220	B	SX234	軟質施釉陶器	蓋	4.1	0.61	3.22	完形	
221	B	SX234	軟質施釉陶器	重箱	4.05	1.4	3.15	完形	220と対
222	B	SX234	軟質施釉陶器	重箱	4.05	1.5	3.18	完形	220と対
223	B	SX234	軟質施釉陶器	重箱	3.9	1.58	3.2	完形	220と対
224	B	SX234	軟質施釉陶器	片口	3.45	1.8	1.65	完形	
225	B	SX234	白磁	紅皿	2.15	0.9	0.75	完形	肥前系
226	B	SX234	白磁	紅皿	4.2	1.6	1.85	完形	肥前系
227	B	SX234	白磁	紅皿	4.7	1.5	1.4	完形	肥前系
228	B	SX234	軟質施釉陶器	椀	2.1	1.5	1.18	完形	
229	B	SX234	軟質施釉陶器	椀	2.3	1.5	1.3	完形	
230	B	SX234	軟質施釉陶器	椀	2.5	1.4	1.4	完形	
231	B	SX234	軟質施釉陶器	皿	4.6	1.0	2.3	5/6	
232	B	SX234	軟質無釉陶器	皿	5.15	1.19	2.85	完形	
233	B	SX234	軟質無釉陶器	皿	-	2.7	2.4	完形	
234	B	SX234	軟質施釉陶器	皿	5.85	1.3	3.4	完形	
235	B	SX234	軟質施釉陶器	皿	5.9	1.45	3.45	完形	織部写し
236	B	SX222	土製品	人形	巾 3.4	高 4.75	厚 2.9	完形	両型
237	B	SX222	土製品	盆形	7.8	0.9	6.75	完形	木製盆の写し
238	B	SX222	土製品	目形	縦 1.45	横 2.85	厚 0.35	完形	福笑いの一部
239	B	SX222	土製品	鼻形	縦 2.7	横 3.2	厚 0.65	完形	福笑いの一部
240	B	SX222	土製品	口形	縦 1.8	横 3.85	厚 0.75	完形	福笑いの一部
241	B	SX222	染付磁器	紅皿	4.8	1.55	1.65	完形	肥前系
242	B	SX222	軟質施釉陶器	椀	1.8	1.05	0.9	完形	
243	B	SX222	軟質施釉陶器	椀	1.6	1.1	0.8	完形	
244	B	SX222	軟質施釉陶器	皿	4.2	0.7	1.5	完形	
245	B	SX222	軟質施釉陶器	土瓶	2.05	2.9	2.0	完形	
246	B	SX219	施釉陶器	羽釜蓋	-	2.1	-	完形	

第８表　土器・陶磁器・土製品属性表（７）

No	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存率	備考
247	B	SX219	施釉陶器	羽釜	3.7	2.9	2.25	完形	
248	B	SX219	土製品	竈	(4.7)	5.9	8.4	完形	
249	B	SX219	施釉陶器	七輪	4.55	4.88	3.75	3/6	
250	B	SX219	施釉陶器	羽釜蓋	-	1.2	-	完形	
251	B	SX219	施釉陶器	羽釜	2.3	2.1	1.45	完形	
252	B	SX219	土製品	蓋置	2.45	2.15	2.1	完形	
253	B	SX219	施釉陶器	蓋	-	0.5	-	完形	
254	B	SX219	施釉陶器	鉢	4.0	1.95	1.3	完形	
255	B	SX219	染付磁器	散り蓮華	-	4.9	-	完形	肥前系
256	B	G２焼土	青花磁器	碗					明青花 16C末～17C 前半
257	B	G２焼土	青花磁器	碗					明青花 17C前半
258	B	G２焼土	青花磁器	碗					明青花 17C前半
259	B	G２焼土	青花磁器	碗					明青花 17C前半
260	B	G２焼土	青花磁器	碗					明青花 17C前半
261	B	G２焼土	染付磁器	碗					肥前系　初期伊万里 17C前半
262	B	G２焼土	染付磁器	碗					肥前系　初期伊万里 17C前半
263	B	G２焼土	青花磁器	碗					漳州窯 17C前半
264	B	G２焼土	青花磁器	碗					漳州窯 17C前半
265	B	G２焼土	青花磁器	碗					漳州窯 17C前半
266	B	G２焼土	青花磁器	碗	(18.1)	(7.7)	(7.2)	2/6	漳州窯 17C前半
267	B	G２焼土	染付磁器	碗					肥前系　初期伊万里 17C前半
268	B	G２焼土	染付磁器	縣花入		(3.4)	(8.1)	2/6	肥前系　初期伊万里 17C前半
269	B	G２焼土	青磁	碗					肥前系　初期伊万里 17C前半
270	B	G２焼土	染付磁器	碗					肥前系　初期伊万里 17C前半
271	B	G２焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
272	B	G２焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
273	B	G２焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
274	B	G２焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
275	B	G２焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
276	B	G２焼土	青磁	碗					肥前系　初期伊万里 17C前半
277	B	G２焼土	染付磁器	碗					肥前系　初期伊万里 17C前半
278	B	G２焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
279	B	G２焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
280	B	G２堂基壇	染付磁器	皿	(8.26)	1.4	(2.9)	2/6	肥前系　初期伊万里 17C前半
281	B	G２焼土	青磁	皿	(15.0)	(3.5)	-	1/6以下	肥前系　初期伊万里 17C前半
282	B	G２焼土	青磁	碗					肥前系　初期伊万里 17C前半
283	B	G２焼土	染付磁器	碗					肥前系　初期伊万里 17C前半
284	B	G２焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
285	B	G２焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
286	B	G２焼土	染付磁器	手塩皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
287	B	G２焼土	染付磁器	手塩皿					肥前系　初期伊万里 17C前半

第8表　土器・陶磁器・土製品属性表（8）

No	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存率	備考
288	B	G2焼土	白磁	型打ち皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
289	B	G2焼土	白磁	型打ち皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
290	B	F2焼土	白磁	型打ち皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
291	B	堂焼土	白磁	型打ち皿	(13.7)	(2.6)	-	1/6	肥前系　初期伊万里 17C前半
292	B	G2焼土	染付磁器	皿	(13.3)	4.1	(6.2)	1/6	肥前系　初期伊万里 17C前半
293	B	G2焼土	染付磁器	皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
294	B	G2焼土	染付磁器	皿	9.4	2.62	3.5	3/6	肥前系　初期伊万里 17C前半
295	B	G2焼土	白磁	型打ち皿					肥前系　初期伊万里 17C前半
296	B	G2堂焼土	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　胎土目17C初頭
297	B	G2焼土	施釉陶器	椀					肥前系　絵唐津　17C 初頭
298	B	G2焼土	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　17C 前半
299	B	G2焼土	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　17C 前半
300	B	堂焼土	施釉陶器	皿	12.54	3.11	(3.6)	4/6	肥前系　唐津　胎土目17C 初頭
301	B	堂焼土	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　胎土目17C 初頭
302	B	堂焼土	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　17C 前半
303	B	堂焼土	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　17C 前半
304	B	堂焼土	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　17C 前半
305	B	堂焼土	施釉陶器	皿	(12.4)	3.2	(4.3)	2/6	肥前系　唐津　17C 前半
306	B	堂焼土	施釉陶器	皿					肥前系　唐津　17C 前半
307	B	F2焼土	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　胎土目17C 初頭
308	B	堂焼土	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　17C 前半
309	B	G2焼土	施釉陶器	椀	-	(6.8)	4.65	4/6	肥前系　唐津　17C 前半
310	B	G2焼土	施釉陶器	皿					肥前系　唐津　17C 前半
311	B	SF01東	施釉陶器	皿					肥前系　唐津　17C 前半
312	B	堂焼土	施釉陶器	皿					肥前系　唐津　17C 前半
313	B	堂焼土	施釉陶器	椀					中国製天目椀
314	B	堂焼土	無釉陶器	壺					丹波焼
315	B	堂焼土	施釉陶器	皿					瀬戸・美濃系　16C 後半
316	B	F2焼土	施釉陶器	皿	-	(1.95)	(5.4)	2/6	瀬戸・美濃系　16C 後半
317	B	堂焼土	無釉陶器	壺	-	(4.4)	4.8	4/6	備前焼
318	B	堂焼土	無釉陶器	壺					
319	B	SF01東	施釉陶器	椀					瀬戸・美濃系　天目椀
320			施釉陶器						
321	B	堂焼土	無釉陶器	壺					備前焼
322	B	SF01東	無釉陶器	壺					
323	B	G2焼土	施釉陶器	向付	-	(2.9)	(6.8)	3/6	美濃系　志野　17C 初頭
324	B	G3,4砂礫	施釉陶器						
325	B	堂D	無釉陶器	甕	(60.7)	(9.15)	-	1/6	備前焼
326	B	G2焼土	無釉陶器	擂鉢	(35.2)	(11.5)	-	1/6	丹波焼　ＩＢ３類
327	B	堂焼土	無釉陶器	火桶	(26.5)	(13.4)	-	2/6	丹波焼
328	C	礎石5堀方	土師器	焙烙					

第８表　土器・陶磁器・土製品属性表（９）

No	地区	遺　構	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	残存率	備　　考
329	B	西北隅瓦理込攪乱	白磁	Ⅲ					
330	B	西北隅瓦理込攪乱	白磁	Ⅲ					
331	B	西北隅瓦理込攪乱	青磁	碗					
332	B	西北隅瓦理込攪乱	青磁						
333	B	西北隅瓦理込攪乱	染付磁器	碗					
334	B	西北隅瓦理込攪乱	施釉陶器						
335	B	西北隅瓦理込攪乱	染付磁器	碗					
336	B	西北隅瓦理込攪乱	施釉陶器	椀					
337	B	西北隅瓦理込攪乱	施釉陶器	椀					
338	B	石垣下のST	土師器	Ⅲ					
339	B	石垣下のST	土師器	焼塩壺	(7.0)	(6.95)	-	1/6	Ⅰ類　17C代
340	B	石垣下のST	無釉陶器	火入れ	(12.3)	6.1	(12.1)	1/6	丹波焼　17C末～18C中頃
341	B	石垣下のST	施釉陶器	椀	(11.4)	(7.15)	-	2/6	瀬戸・美濃系　17C前半
342	B	石垣下のST	土師器	Ⅲ					
343	B	石垣下のST	土師器	焙烙					
344	B	石垣下のST	瓦質土器	火鉢	(28.5)	(8.3)	-	1/6	
345	B	石垣下のST	無釉陶器	擂鉢					備前焼
346	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					
347	B	石垣下のST	土師器	焙烙					
348	B	石垣下のST	瓦質土器	火鉢					
349	B	石垣下のST	無釉陶器	甕					備前焼
350	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					
351	B	SK75	無釉陶器	擂鉢	(32.6)	(8.9)	-	1/6以下	丹波焼　ⅡA類
352	B	SK75	施釉陶器	火鉢					瀬戸・美濃系　19C前半
353	B	SK75	施釉陶器	火鉢					瀬戸・美濃系　19C前半
354	B	SK75	土師器	火消壺					
355	B	SK75	施釉陶器	椀					在地産 19C前半
356	B	SK75	染付磁器	碗					
357	B	SK75	染付磁器	碗	(7.08)	3.75	3.35	2/6	中国製
358	B	SK94	施釉陶器	椀	(10.2)	6.8	(4.4)	3/6	肥前系京焼風陶器　17C後半
359	B	SK94	染付磁器	碗	(9.1)	6.7	(3.75)	2/6	肥前系
360	B	SK94	染付磁器	杯					肥前系 17C前半
361	B	SK94	施釉陶器	椀					肥前系京焼風陶器　17C後半
362	B	SK94	施釉陶器	椀	(9.7)	7.13	4.14	1/6	肥前系陶胎染付　17C後半
363	B	SK94	施釉陶器	椀	(10.1)	6.65	4.55	1/6	肥前系陶胎染付　17C後半
364	B	SK94	染付磁器	碗	(8.78)	(5.45)	-	1/6	肥前系陶胎染付　17C後半
365	C	N４Ⅱ面	施釉陶器	椀					肥前系　唐津　17C前半
366	C	N４Ⅱ面	染付磁器	Ⅲ					肥前系　17C後半
367	C	N４Ⅱ面	染付磁器	碗					肥前系　17C後半～18C前半
368	C	N４Ⅱ面	染付磁器						
369	C	N４Ⅱ面	染付磁器	碗					肥前系　18C前半

第8表　土器・陶磁器・土製品属性表（10）

No	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存率	備考
370	C	N4Ⅱ面	染付磁器	皿					肥前系 18C前半～中葉
371	C	N4Ⅱ面	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C初頭
372	C	N4土間より北側	染付磁器	碗	(9.84)	5.7	(3.95)	2/6	肥前系 17C後半～ 18C前半
373	C	N4Ⅱ面	染付磁器	碗					肥前系 17C後半～ 18C前半
374	C	N4Ⅱ面	染付磁器	碗					肥前系 18C前半
375	C	N4Ⅱ面	施釉陶器	椀					肥前系京焼風 18C前半～中葉
376	C	N4Ⅱ面	染付磁器	皿					肥前系 17C中葉～末
377	C	N4Ⅱ面	色絵磁器						肥前系　赤絵 17C後半
378	C	N4Ⅱ面	染付磁器	碗					肥前系 17C後半～ 18C初頭
379	C	N4Ⅱ面	染付磁器						肥前系 17C後半～ 18C初頭
380	C	N4Ⅱ面	施釉陶器	鉢					肥前系 17C後半～ 18C前半
381	C	N4Ⅱ面	染付磁器	碗					肥前系 18C前半
382	C	N4Ⅱ面	染付磁器	皿					肥前系 18C後半
383	C	N4Ⅱ面	染付磁器	碗					肥前系 18C前半
384	C	N4Ⅱ面	染付磁器	碗					肥前系 18C代
385	B	SK75	施釉陶器	椀					肥前系京焼風 17C後半
386	B	SK75	施釉陶器	椀					肥前系陶胎染付 18C前半
387	B	SK75	染付磁器	碗					肥前系 18C前半～中葉
388	B	SK75	青磁						肥前系 18C後半
389	B	SK75	施釉陶器	椀					肥前系 17C後半
390	B	SK75	施釉陶器	椀					肥前系陶胎染付 18C前半
391	B	SK75	染付磁器	碗					肥前系 18C前半～中葉
392	B	SK75	染付磁器	蓋物					肥前系 18C初頭
393	B	SK75	染付磁器	碗					肥前系 17C後半
394	B	SK75	染付磁器						肥前系 18C前半
395	B	SK75	染付磁器	蕎麦猪口	(6.6)	5.4	(5.9)	3/6	肥前系 18C後半～19C 前半
396	B	SK75	染付磁器	碗					肥前系 18C後半
397	B	SK75	染付磁器	碗					肥前系 17C後半
398	B	SK75	染付磁器						肥前系 18C前半
399	B	SK75	染付磁器	蕎麦猪口					肥前系 18C後半～19C 前半
400	B	SK75	染付磁器	碗					肥前系 18C後半
401	B	SK75	施釉陶器	椀					肥前系京焼風 17C末
402			染付磁器	碗					肥前系 18C前半～中葉
403	B	SK75	染付磁器	碗					肥前系 18C後半～19C 前半
404	B	SK75	染付磁器	碗					肥前系 18C後半～19C 前半
405	B	SK20	染付磁器						肥前系 18C後半～19C 前半
406	B	SX78	施釉陶器	椀	(11.2)	7.1	4.2	2/6	肥前系　唐津 17C前半
407	C	SK03	施釉陶器	椀	(10.6)	6.55	(4.4)	3/6	肥前系　唐津 17C前半
408	B	G2焼土	施釉陶器	瓶	(6.6)	(9.45)	-	1/6	肥前系　唐津 17C前半
409	B	防空壕1西遺構	施釉陶器	徳利	-	(5.4)	-	1/6	肥前系　朝鮮唐津 17C前半
410	B		施釉陶器	輪花皿	(12.2)	3.48	(4.7)	2/6	肥前系　唐津 17C初頭

第8表　土器・陶磁器・土製品属性表（11）

No	地区	遺　構	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	残存率	備　　考
411	B	SK48	施釉陶器	椀	(10.7)	6.8	4.5	4/6	肥前系　唐津 17C前半
412	C	Ⅱ面	施釉陶器	椀	10.55	4.65	3.9	4/6	肥前系 17C後半～18C 前半
413	C	SK109	施釉陶器	鉢	(18.9)	5.45	6.9	2/6	肥前系 17C後半～18C 前半
414	C	SK97	施釉陶器	壺	20.1	(26.2)	-	4/6	肥前系　絵唐津 17C前半
415	B	SK46	施釉陶器	鉢	(27.3)	4.55	-	2/6	肥前系 17C後半～18C 前半
416	C	Ⅱ面	施釉陶器	鉢	(26.0)	(6.8)	-	2/6	肥前系 17C後半～18C 前半
417	C	SK145	施釉陶器	鉢	(22.2)	(4.55)	-	1/6以下	肥前系 17C後半～18C 前半
418	C	D2土間より北側	施釉陶器	鉢	-	(3.48)	-	1/6	肥前系 17C後半～18C 前半
419	C	SK78西半	施釉陶器	鉢	(27.6)	(5.55)	-	1/6	肥前系 17C後半～18C 前半
420	C	Ⅱ Ⅲ面	施釉陶器	鉢	(33.8)	10.0	(13.4)	2/6	肥前系 17C後半～18C 前半
421	C	Ⅲ面	施釉陶器	鉢	(31.4)	8.92	12.6	1/6	肥前系 17C後半～18C 前半
422	B	SK71	施釉陶器	鉢	(20.0)	7.18	8.9	4/6	肥前系 17C後半～18C 前半
423	B	SK71	施釉陶器	椀	12.15	5.1	4.8	4/6	肥前系京焼風 17C後半
424	B	SX115	施釉陶器	椀	(9.02)	5.78	5.33	3/6	肥前系京焼風 17C後半
425	B	SK15	施釉陶器	椀	(11.9)	4.9	(4.3)	2/6	肥前系京焼風 17C後半
426	B	北西隅サブトレ	施釉陶器	椀					肥前系京焼風 17C後半
427	C	竈	色絵磁器	皿	(14.1)	3.25	8.5	2/6	肥前系
428	B	SK73	染付磁器	蓋	7.9	0.68	-	3/6	肥前系　鍋島 17C後半
429	B	SK73	染付磁器	香炉	-	(6.15)	(8.32)	3/6	肥前系　唐津 17C前半
430	B	SK73	青磁	香炉	-	(5.95)	(5.2)	2/6	肥前系
431	C	SK78西半	色絵磁器	水滴	巾(4.0)	(2.65)	長(4.25)	2/6	肥前系
432	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
433	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
434	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
435	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
436	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
437	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
438	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
439	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
440	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
441	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
442	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
443	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
444	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
445	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
446	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
447	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
448	B	石垣下のST	施釉陶器	椀					肥前系　唐津 17C前半
449	B	SK17南半	染付磁器	杯	(10.0)	6.9	(3.7)	1/6	肥前系
450	B	防空壕1	染付磁器	杯	(10.8)	7.2	4.65	2/6	肥前系
451	B	SK25	染付磁器	碗	(9.2)	6.2	4.0	3/6	肥前系

第８表　土器・陶磁器・土製品属性表（12）

No	地区	遺　構	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	残存率	備　　考
452	B	SK94	染付磁器	碗	(9.65)	6.65	(4.2)	4/6	肥前系
453	B	SK46	染付磁器	皿	13.55	3.15	6.25	2/6	肥前系
454	C	Ⅱ面	染付磁器	皿	11.9	3.55	4.15	5/6	肥前系 18C前半
455	C	SD08	白磁	輪花皿	(14.0)	3.4	6.3	2/6	肥前系
456	B	SK46	施釉陶器	皿	(12.9)	3.72	5.05	3/6	肥前系　唐津 17C後半～18C前半
457	C	SK100	施釉陶器	皿	(17.8)	5.1	(6.0)	2/6	肥前系　唐津 17C後半～18C前半
458	B	G２焼土	施釉陶器	鉢	(29.2)	(4.6)	-	1/6以下	肥前系　唐津
459	B	SK41	白磁	紅皿	4.6	1.25	1.4	完形	肥前系 18C後半～19C 前半
460	B	SK10	染付磁器	手塩皿	(9.9)	2.05	5.45	2/6	肥前系
461	B	SK25	染付磁器	御酒徳利	1.95	9.85	3.8	完形	肥前系　18C 後半
462	C	SK49	染付磁器	仏飯具	(6.86)	6.51	3.95	2/6	肥前系　18C 後半
463	B	SK41	染付磁器	仏飯具	7.6	7.35	4.55	4/6	肥前系　18C 後半
464	C	瓦列	染付磁器	皿	8.86	2.55	3.78	完形	瀬戸・美濃系 19C前半
465	C	SK49	染付磁器	杯	8.15	2.75	3.25	4/6	肥前系 18C後半～19C 前半
466	C	SK49	染付磁器	碗	(9.15)	4.87	4.55	1/6	肥前系　広東碗　19C 前半
467	C	かまど10	染付磁器	蓋	8.45	2.5	-	完形	肥前系
468	C	SE09	染付磁器	蓋	10.0	3.35	4.3	5/6	肥前系
469	B	SK46	施釉陶器	椀	(9.8)	6.9	4.7	2/6	肥前系
470	B	SK46	施釉陶器	椀	(9.0)	7.3	4.4	2/6	肥前系
471	B	堂北石列	染付磁器	碗	11.4	6.15	4.9	5/6	肥前系
472	B	SK41	染付磁器	碗	10.65	5.65	4.5	完形	肥前系
473	B	SK46	施釉陶器	椀	8.7	6.72	4.68	3/6	肥前系
474	B	SK46	染付磁器	碗	9.6	5.55	4.0	4/6	肥前系
475	B	SK41	染付磁器	蓋・碗	10.25	2.65	5.75	完形	肥前系
476	B	SK41	染付磁器	碗	11.15	5.95	6.5	4/6	肥前系　広東碗　19C前半
477	B	BG３ 礫	白磁	杯	7.2	4.55	3.2	完形	肥前系
478	B	SX72	染付磁器	杯	6.55	4.4	3.25	完形	肥前系 18C中葉～後半
479	B	BFⅢ	染付磁器	杯	6.85	4.88	3.8	完形	肥前系 19C前半
480	B	SK76	染付磁器	杯	(7.35)	4.85	3.55	4/6	瀬戸・美濃系 19C前半
481	B	SX221	染付磁器	杯	6.88	4.39	2.85	完形	肥前系 18C前半
482	B	BG３ 礫	染付磁器	杯	7.25	3.5	2.95	4/6	肥前系
483	B	SX203	染付磁器	碗	6.48	3.1	2.64	完形	肥前系
484	B	SK41	染付磁器	碗	7.0	4.71	2.46	4/6	肥前系
485	B	SK46	染付磁器	小碗	(5.4)	2.75	(2.8)	3/6	肥前系
486	C	st２	染付磁器	碗	9.8	5.1	4.15	完形	肥前系
487	B	B 礫E	染付磁器	碗	10.15	5.55	3.4	完形	肥前系　くらわんか手 18C後半
488	B	SK94	染付磁器	碗	9.1	6.75	4.6	完形	肥前系
489	C	SX03	染付磁器	碗	6.6	5.0	3.65	4/6	肥前系
490	C	SK49	染付磁器	碗	11.15	53.2	4.55	完形	肥前系　くらわんか手 18C後半
491	C	Ⅱ面	染付磁器	碗	10.55	6.1	4.3	完形	肥前系
492	C	Ⅱ面	染付磁器	碗	10.05	4.95	3.6	4/6	肥前系 19C前半以降

第8表　土器・陶磁器・土製品属性表（13）

No	地区	遺　構	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	残存率	備　　考
493	C	Ⅱ面	染付磁器	碗	9.65	4.95	4.0	4/6	肥前系 18C代
494	C	SK49	染付磁器	碗	6.8	3.2	2.5	4/6	肥前系 18C代
495	C	SK97	染付磁器	蕎麦猪口	7.4	4.9	5.1	5/6	肥前系 18C後半～19C 前半
496	C	SE	染付磁器	蕎麦猪口	8.0	5.4	4.2	完形	肥前系 18C後半～19C 前半
497	C	SK49	染付磁器	蕎麦猪口	6.77	5.75	3.74	3/6	肥前系 18C後半～19C 前半
498	B	SK07	施釉陶器	鬢盥	11.85	4.05	13.05	完形	京焼系
499	C	SE09	染付磁器	皿	14.1	4.15	8.8	5/6	肥前系 19C前半
500	C	CL 5　竈	染付磁器	輪花鉢	21.9	8.2	12.1	5/6	肥前系 19C前半
501	C	SK09	染付青磁	碗	18.8	8.5	5.3	2/6	肥前系
502	B	SX75	青磁	碗	14.7	7.02	6.38	4/6	肥前系
503	B	SK94?	青磁	香炉	19.9	11.35	11.05	4/6	肥前系
504	B	SK08,09	染付磁器	香炉	(17.7)	(11.5)	(16.0)	2/6	肥前系
505	C	SK09	染付青磁	鉢	(27.0)	7.95	8.5	3/6	肥前系
506	C	Ⅳ面	青磁	三足皿	17.7	4.3	4.3	5/6	肥前系
507	C	CL 3 Ⅳ	施釉陶器	壺	4.5	8.8	7.25	完形	丹波焼
508	B	甕 No.1	施釉陶器	壺	6.25	7.67	6.53	3/6	備前焼
509	B	SK25	無釉陶器	壺	13.2	16.1	(13.9)	4/6	丹波焼　Ⅰ類
510	B	SK46西	無釉陶器	甕	(25.4)	25.9	(16.7)	2/6	丹波焼
511	B	SK48	無釉陶器	火入れ	(12.8)	6.5	(11.6)	3/6	丹波焼 17C末～ 18C中頃
512	B	SK94	無釉陶器	火入れ	12.9	6.85	8.65	2/6	丹波焼 17C末～ 18C中頃
513	B	Ⅲ面	無釉陶器	水盤	(31.2)	8.3	33.4	1/6以下	丹波焼
514	B	SK87	無釉陶器	擂鉢	(35.3)	15.58	13.0	3/6	丹波焼　ⅠA 2 類
515	C	SK08	施釉陶器	片口鉢	(33.9)	17.1	(13.7)	3/6	肥前系　唐津
516	C	SD08	無釉陶器	擂鉢	(35.6)	15.2	(16.5)	1/6	丹波焼　ⅣA類
517	B	SK67	無釉陶器	擂鉢	(35.6)	15.75	15.45	4/6	丹波焼　ⅣA類
518	C	SK103	無釉陶器	擂鉢	(33.0)	(8.1)	-	1/6	丹波焼　ⅠB 1 類
519	C	礎石67下	無釉陶器	擂鉢	-	(7.5)	-	1/6以下	丹波焼　ⅠB 2 類
520	B	SK42下層	無釉陶器	擂鉢	(32.2)	(11.1)	-	1/6	丹波焼　ⅠB 2 類
521	C	SK79	無釉陶器	擂鉢	-	(8.5)	-	1/6以下	丹波焼　ⅠB 2 類
522		SK79	無釉陶器	擂鉢	(33.6)	(8.62)	-	1/6	丹波焼
523	C	SD08	無釉陶器	擂鉢	-	(9.2)	-	1/6以下	丹波焼　ⅠB 3 類
524	C	SK09	無釉陶器	擂鉢	-	(11.8)	-	1/6以下	丹波焼　Ⅱ類
525	C	SK78西半	無釉陶器	擂鉢	-	(6.15)	-	1/6以下	丹波焼　ⅡA類
526	C	SK58他	無釉陶器	擂鉢	-	(7.75)	-	1/6以下	丹波焼　ⅡA類
527	C	SD08	無釉陶器	擂鉢	(49.4)	(12.7)	-	1/6以下	丹波焼　ⅣA類
528	C	SK19	無釉陶器	擂鉢	(37.4)	(7.0)	-	1/6	丹波焼　ⅣB類
529	B	SF01	無釉陶器	擂鉢	(24.1)	5.98	18.4	1/6以下	丹波焼
530	B		施釉陶器	椀					瀬戸・美濃系　天目椀
531	C	SD08	無釉陶器	甕	(43.4)	(17.9)	-	1/6	丹波焼　Ⅰ類
532	C	SD08	土師器	焙烙	(27.6)	(5.7)	-	1/6	ⅠB類　17C 前半～17C 末
533	B	堂北石列	施釉陶器	蓋	5.95	1.45	-	完形	丹波焼

第8表　土器・陶磁器・土製品属性表（14）

No	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存率	備考
534	B	墓41～43南	施釉陶器	蓋					
535	B	墓44	施釉陶器	蓋					
536	B	墓31・32Ⅱ面	施釉陶器	蓋					
537	B	墓31	施釉陶器	蓋					
538	B	墓53よりⅡ面	施釉陶器	蓋					
539	C	SX02	施釉陶器	甕	9.3	5.15	3.7	完形	丹波焼
540	C	SX01	施釉陶器	甕	(25.8)	24.15	15.4	2/6	丹波焼　Ⅰ類
541	C	SK210	無釉陶器	甕	60.0	19.5	-	1/6	備前焼　Ⅴ期　16C代
542	B	SK16	無釉陶器	甕	(53.0)	(20.4)	-	1/6	備前焼　Ⅴ期　16C代
543	B	SK38	無釉陶器	花瓶	-	(4.95)	8.75	5/6	備前焼
544	B	SK03	無釉陶器	徳利	3.8	(4.55)	-	1/6	備前焼
545	B		無釉陶器	徳利	-	(5.18)	-	2/6	備前焼
546	B		無釉陶器	徳利	-	(5.95)	-	2/6	備前焼
547	B	SK25	無釉陶器	徳利or甕	-	(4.43)	(9.9)	2/6	備前焼
548	B	SK30南	無釉陶器	徳利	(4.5)	(13.5)	-	1/6	備前焼
549	B	SK48	施釉陶器	天目椀	(11.4)	7.5	(5.8)	3/6	肥前系　唐津　17C前半
550	B	堂焼土	施釉陶器	天目椀	(11.4)	(6.55)	-	2/6	瀬戸・美濃系　17C前半
551	B	G2焼土	施釉陶器	椀	(9.75)	(5.35)	-	1/6	瀬戸・美濃系　19C前半
552	C	第4面検出	施釉陶器	合子(身)	-	1.8	-	1/6以下	美濃系　織部　17C前半
553	B	SK46	無釉陶器	擂鉢	39.05	(14.5)	-	完形	堺・明石　18C後半～19C後半
554	C	SE09	無釉陶器	擂鉢	34.4	12.75	15.85	4/6	堺・明石　18C後半～19C前半
555	C	EST	無釉陶器	擂鉢	(35.7)	13.25	(15.7)	1/6以下	堺・明石　18C後半～19C後半
556	B	堂基壇北面石列	施釉陶器	灯明皿					京・信楽系
557	C	Ⅱ面	施釉陶器	蓋	4.15	1.45	4.45	完形	
558	C	SK114	染付磁器	皿	12.6	3.5	4.25	完形	肥前系 18C前半
559	B	SK36	施釉陶器	鍋蓋	7.6	3.3	5.0	5/6	
560	B	SK24	施釉陶器	ひだ皿	6.4	1.75	2.7	4/6	瀬戸・美濃系 19C前半
561	B	SK24,25	施釉陶器	蓮華置き	-	3.7	-	3/6	瀬戸・美濃系
562	B	E2第3面検出	施釉陶器	四耳壺	(8.65)	20.65	9.25	1/6	丹波焼　Ⅱ類
563	C	SK49	施釉陶器	椀	(8.61)	4.71	(3.24)	3/6	瀬戸・美濃系
564	C	SK10	無釉陶器	甕	70.5	70.1	40.7	4/6	丹波焼
565	C	SK128	無釉陶器	便甕	-	(64.0)	46.85	2/6	丹波焼
566	B	SX244	土師器	皿	9.7	2.0	-	完形	
567	B	SX244	土師器	皿	9.4	1.9	-	完形	
568	B	SX244	土師器	皿	7.98	1.5	-	4/6	
569	B	SX244	土師器	皿	8.1	1.55	-	完形	
570	B	SX244	土師器	皿	(7.75)	1.4	-	2/6	
571	B	SX244	土師器	皿	8.15	1.43	-	4/6	
572	B	SX244	土師器	皿	(7.5)	1.5	-	2/6	
573	B	SX235	土師器	皿	11.2	2.13	-	完形	
574	B	SX244	土師器	皿	7.8	1.55	-	完形	

第8表　土器・陶磁器・土製品属性表（15）

No	地区	遺　構	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	残存率	備　　考
575	B	SX235	土師器	Ⅲ	11.0	1.8	-	完形	
576	B	SX244	土師器	Ⅲ	7.95	1.45	-	完形	
577	B	SX235	土師器	Ⅲ	11.1	1.8	-	完形	
578	B	SX244	土師器	Ⅲ	8.05	1.65	-	完形	
579	B	SX221	土師器	Ⅲ	9.9	1.85	4.2	5/6	
580	B	SX244	土師器	Ⅲ	8.55	1.75	-	完形	
581	B	SX202	土師器	Ⅲ	10.6	1.7	5.7	完形	
582	B	SX221	土師器	Ⅲ	10.2	1.95	-	完形	
583	B	SK85	土師器	Ⅲ	10.55	1.9	-	完形	
584	B	堂北石列	土師器	Ⅲ	5.85	1.15	2.75	4/6	灯明皿
585	B	SK48E	土師器	Ⅲ	10.5	2.4	4.85	完形	
586	B	B基壇下	土師器	Ⅲ	7.6	1.65	-	完形	
587	B	SX224	土師器	Ⅲ	10.5	2.0	-	完形	
588	C	SK162	土師器	Ⅲ	8.85	1.5	-	4/6	
589	C	SK162	土師器	Ⅲ	8.4	1.7	3.95	4/6	
590	C	L23 Ⅱ	土師器	Ⅲ	9.65	2.25	-	完形	
591	C	SK108	土師器	Ⅲ	10.2	1.8	-	完形	
592	B	SK48	土師器	焙烙	(25.6)	(8.25)	-	3/6	ⅠA類　16C末～17C後半
593	B	堂焼土	土師器	焙烙	(25.0)	(6.84)	(24.5)	1/6	ⅠA類　16C末～17C後半
594	B	SK67西	土師器	焙烙	(23.5)	(5.3)	-	4/6	ⅠB類　17C前半～17C末
595	B	SK46	土師器	焙烙	(25.3)	(5.9)	-	1/6	ⅠA類　16C末～17C後半
596	B	SK46N	土師器	焙烙	(25.7)	(6.5)	-	1/6	ⅠB類　17C前半～17C末
597	C	SK97	土師器	焙烙	30.15	7.8	-	完形	Ⅱ類　17C末～18C前半
598	B	SK46	土師器	焙烙	(25.6)	(6.65)	-	2/6	
599	B	SK48	土師器	焼塩壺	5.4	8.0	5.3	1/6	Ⅰ類　17C代
600	B	SK48	土師器	焼塩壺	5.45	8.7	-	5/6	Ⅰ類　17C代
601	B	SK30	土師器	焼塩壺	(5.5)	7.65	5.0	5/6	Ⅱ類　17C代
602	B	西攪乱1	土師器						
603	B	D2焼土	土師器	火鉢	(22.9)	(10.0)	(16.3)	2/6	
604	B	SX218	土師器	火鉢	(26.0)	12.45	(25.3)	4/6	
605	C	Ⅲ面	土師器	コンロ	(18.5)	13.5	16.0	3/6	
606	B	壺8-24	土師器	灯明皿	3.7	1.5	2.05	5/6	
607	B	SK15	土師器	ひょうそく	4.8	3.0	3.2	4/6	
608	C	SK162	白磁	碗	15.3	6.25	6.2	完形	Ⅳ類 12C後半～13C前半
609	B	西攪乱1	色絵磁器	灯明皿	-	(21.6)	13.15	3/6	近～現代
610	B	西精査	色絵磁器	仏花瓶	4.2	19.9	7.05	完形	近～現代
611	B	西攪乱1	色絵磁器	香炉	11.15	6.3	-	5/6	近～現代

第9表　瓦属性表（1）

No	地区	遺構	種別	器種	長さ	巾	厚み	残存率	備考
K 1	B	攪乱	瓦	鬼瓦	49.5	(45.0)	21.8		
K 2	B	SK20　防空壕	瓦	鬼瓦	40.3	(23.4)	(12.8)		
K 3	B	SK30	瓦	鬼瓦	(35.0)	(37.7)	(14.3)		
K 4	B	西ST中央攪乱	瓦	鬼瓦	(23.9)	(23.1)			
K 5	B	SK71	瓦	鬼瓦	(21.1)	(18.8)			
K 6	B	SX193	瓦	鬼瓦	(27.1)	(16.0)			同一個体
K 7	B	SX193	瓦	鬼瓦	(22.1)	(16.2)			同一個体
K 8	B	SK60	瓦	鬼瓦	(17.6)	(24.0)			
K 9	B	SK60	瓦	鬼瓦	(23.7)	(25.7)			
K10	B	堂焼土	瓦	鬼瓦	(21.2)	(12.3)	(4.7)	?	桃形
K11	B	SK60	瓦	鬼瓦	(26.0)	(40.5)			雲形文
K12	B	SK94	瓦	軒丸瓦	(14.2)	(4.3)	-	完形	
K13	B	SK94	瓦	軒丸瓦	14.15	(16.0)	-	完形	
K14	B	SK71	瓦	軒丸瓦		14.8			面径とする
K15	C	SE13	瓦	軒丸瓦		14.7			
K16	C	Ⅱ面	瓦	軒丸瓦	13.6	15.2	-		
K17	B	SK94	瓦	軒丸瓦		(14.3)	-	完形	
K18	B	南東隅攪乱	瓦	軒丸瓦		13.2			
K19	B	SK73	瓦	軒丸瓦		14.1			
K20	C	SK97	瓦	軒丸瓦	(29.9)	15.35	-		
K21	B	南東隅攪乱	瓦	軒丸瓦		14.3			
K22	B	SK60	瓦	軒丸瓦		14.0			
K23	B	SK38	瓦	軒丸瓦		10.5			
K24	B	西攪乱 1	瓦	軒丸瓦		11.1			
K25	B	G 2 焼土	瓦	軒丸瓦	8.7	13.1	-	5/ 6	
K26	B	SK46	瓦	軒丸瓦		10.8			
K27	B	SK60	瓦	軒丸瓦		6.9			
K28	B	北西隅ST攪乱	瓦	軒丸瓦		8.0			
K29	B	堂基壇北面石列北	瓦	軒丸瓦		8.0			
K30	B	SK60	瓦	軒丸瓦		8.3			
K31	B	西北隅土壙A	瓦	軒丸瓦		8.2			
K32	B	SK85	瓦	軒丸瓦		7.8			
K33	B	築地下	瓦器	土管 2	8.6	24.2	-	完形	
K34	B	SK60	瓦	軒丸瓦		15.2			(鳥衾瓦)
K35	B	西攪乱	瓦	軒丸瓦		15.4			(鳥衾瓦)
K36	B	SK64	瓦	軒丸瓦		16.0			(鳥衾瓦)
K37	B	Ⅲ面	瓦	面子瓦	14.95	9.8	2.2	完形	
K38	C	SK67	瓦	軒平瓦	3.6	23.4			
K39	C	SK97	瓦	軒平瓦	4.2	24.5	-		
K40	B	SK81	瓦	軒平瓦	4.5	25.7			
K41	B	SK87	瓦	軒平瓦	4.2	(22.8)			

第９表　瓦属性表（２）

No	地区	遺構	種別	器種	長さ	巾	厚み	残存率	備考
K42	B	SK76	瓦	軒平瓦	3.8	(18.6)			
K43	B	SK71	瓦	軒平瓦	3.8	(15.4)			
K44	B	西北隅攪乱	瓦	軒平瓦	4.0	(16.3)			
K45	C	SE13	瓦	軒平瓦	4.8	(20.9)			
K46	B	SX113D	瓦	軒平瓦	3.7	(23.6)			
K47	B	SK71	瓦	軒平瓦	3.8	(21.4)			
K48	B	南東隅攪乱	瓦	軒平瓦	3.6	(11.0)			
K49	B	SK60	瓦	軒平瓦	3.7	(18.8)			
K50	C	SE07	瓦	軒平瓦	5.2	(20.0)			
K51	B	西北隅攪乱C	瓦	軒平瓦	3.7	(18.0)			
K52	B	南東隅攪乱C	瓦	軒平瓦	4.1	(16.8)			
K53	B		瓦	軒平瓦	3.6	(14.3)			
K54	C	SE13	瓦	軒平瓦	4.3	(29.8)			
K55	B	SK20	瓦	軒平瓦	3.2	(12.3)			
K56	B	SK71	瓦	丸瓦	27.1	14.2			
K57	C	SK62	瓦	丸瓦	27.2	14.6			
K58	C	SE13	瓦	丸瓦	21.4	13.5			
K59	C	SE09	瓦	丸瓦	26.2	13.4			
K60	C	SK08	瓦	丸瓦	(23.9)	14.4			
K61	B	SK85	瓦	丸瓦	12.2	広 10.0	狭 5.2		「大坂」
K62	B	SK85	瓦	丸瓦	12.7	広 11.2	狭 5.0		
K63	B	SK85	瓦	丸瓦	17.7	広 9.8	狭 4.8		
K64	B	G3,4Ⅲ面	瓦	丸瓦	12.5	広 10.0	狭 4.2		
K65	B	SK85	瓦	丸瓦	11.8	広 9.7	狭3.7		
K66	B	SK85	瓦	丸瓦	11.8	広 9.9	狭2.3		
K67	B	SK85	瓦	丸瓦	11.9	広 10.1	狭 1.8		
K68	B	SX230	瓦	輒	23.4	12.3	5.5		
K69	B	SX113D	瓦	平瓦	27.0	(23.1)	1.8		
K70	B	SX113D	瓦	平瓦	25.5	(23.4)	1.7		
K71	B	SK73	瓦		23.6	(16.6)	1.7		
K72	C		瓦	敷瓦	27.5	26.8	2.8		
K73	B	G２焼土	瓦	敷瓦	27.3	27.3	2.4		
K74	C	SE04	瓦	井戸瓦	25.2	28.5	4.4		「金岡瓦宗」
K75	B	SX197	瓦	井戸瓦	23.5	25.5	3.9		

第10表　石製品属性表（1）

実No	地区	遺構	種別	器種・形状	法量	石材	備考
S 1	B	SX149	石製品	墓碑	24.2×15.5×24.2　5 / 6	砂岩	宝暦七年
S 2	B	墓No.28	石製品	墓碑	15.5×6.45×23.5　2 / 6	砂岩	宝暦　一圓　九
S 3	B	墓35	石製品	墓碑	40.7×15.2×24.5　5 / 6	砂岩	三申
S 4	B	SX174	石製品	墓碑	20.4×25.6×25.8　1 / 6	花崗岩	寛文六
S 5	B	墓No.1	石製品	墓碑	12.3×10.9×22.5　2 / 6	砂岩	屋　治兵衛
S 6	B	SK94上層	石製品	石仏	51.5×12.2×25.3　4 / 6	花崗岩	B　石仏
S 7	B	S18	石製品	板碑	30.4×10.2×22.6　3 / 6	花崗岩	南無妙法
S 8	C	SK205	石製品	石仏	20.6×13.5×21.2　3 / 6	花崗岩	
S 9	B	堂焼土	石製品	石仏	14.0×　6.3×17.7　3 / 6	花崗岩　火化	
S10	B	石S26	石製品	石塔　石仏	31.5×17.1×17.6　1 / 5	花崗岩　火化	地　地石仏
S11	B	石列溝19	石製品	石塔　石仏	29.3×13.9×14.3　1 / 5	花崗岩	地　地石仏
S12	B	石列溝31	石製品	石塔　石仏	35.2×15.6×16.8　2 / 5	花崗岩	地水火　地石仏
S13	B	SX199	石製品	石塔　石仏	18.7×24.4×24.3　1 / 5		地
S14	B	石S26	石製品	石塔　石仏	21.2×18.9×20.2　1 / 5	花崗岩	地　地石仏 4
S15	B	石22	石製品	一石五輪塔	47.3×18.2×20.8　3 / 5	花崗岩	地水火
S16	C	礎石35	石製品	一石五輪塔	41.1×15.9×18.4　3 / 5	花崗岩	地水火
S17	B	石列溝28	石製品	一石五輪塔	36.2×15.9×17.9　3 / 5	花崗岩	地水火
S18	B	石列溝13	石製品	一石五輪塔	31.2×16.9×18.6　3 / 5	花崗岩	地水火
S19	B	No.4	石製品	一石五輪塔	30.7×15.7×15.3　3 / 5	花崗岩　火化	地水火
S20	B	石列溝23	石製品	一石五輪塔	25.7×13.8×15.8　3 / 5	花崗岩	地水火
S21	B	石列溝29	石製品	一石五輪塔	25.0×16.5×17.4　2 / 5	花崗岩	水火
S22	B	石列溝16	石製品	一石五輪塔	23.5×17.0×17.0　2 / 5	花崗岩	水火
S23	B	石列溝12	石製品	一石五輪塔	20.0×14.7×15.9　2 / 5	花崗岩	水火
S24	B	SE02　1	石製品	一石五輪塔	18.8×14.0×16.0　2 / 5	花崗岩	水火
S25	C	SE01	石製品	一石五輪塔	18.8×14.6×13.6　2 / 5	花崗岩	水火
S26	B	(西南区)	石製品	一石五輪塔	21.0×14.2×15.8　2 / 5	花崗岩	水火
S27	B		石製品	一石五輪塔	19.0×15.3×15.7　2 / 5	花崗岩	水火
S28	B	石列溝32	石製品	一石五輪塔	20.2×12.8×16.1　2 / 5	花崗岩	水火
S29	B	(174)	石製品	一石五輪塔	13.8×14.1×15.2　2 / 5	花崗岩	水火
S30	B	S17	石製品	一石五輪塔	17.6×14.0×15.3　2 / 5	花崗岩	水火
S31	B	墓43～41	石製品	一石五輪塔	39.6×16.6×18.9　3 / 5	花崗岩	地水火
S32	B	SE02　5	石製品	一石五輪塔	42.8×15.5×15.4　3 / 5	花崗岩　火化	地水火
S33	B	SE02	石製品	一石五輪塔	28.1×14.2×14.2　2 / 5	花崗岩	地水
S34	B	SE02　1	石製品	一石五輪塔	25.1×18.2×19.8　2 / 5	花崗岩	水火
S35	B	SX173	石製品	一石五輪塔	25.6×19.4×20.4　2 / 5	花崗岩	水火
S36	B	SK36	石製品	一石五輪塔	24.9×18.2×18.1　2 / 5	花崗岩	水火
S37	C	カマド 9 SK10	石製品	一石五輪塔	43.4×19.5×22.1　4 / 5	花崗岩	
S38	B	SE02掘方	石製品	一石五輪塔	27.8×13.4×13.7　4 / 5	花崗岩	水火風空
S39	B	SE02(6)	石製品	一石五輪塔	27.2×15.3×16.2　3 / 5	花崗岩	火風空
S40	C	SK62	石製品	一石五輪塔	22.1×12.5×16.8　3 / 5	花崗岩	火風空
S41	B	S25	石製品	一石五輪塔	23.6×15.1×14.9　3 / 5	花崗岩	火風空

第10表　石製品属性表（2）

実No	地区	遺構	種別	器種・形状	法量	石材	備考
S42	B	SE01	石製品	一石五輪塔	31.5×13.6×14.7　4／5	花崗岩	水火風空
S43	B	石列溝11	石製品	一石五輪塔	21.9×14.7×15.8　3／5	花崗岩	水火風
S44	B	防空壕下	石製品	一石五輪塔	22.5×13.4×15.4　3／5	花崗岩　火化	水火風
S45	B	堂焼土AB	石製品	一石五輪塔	16.2×12.5×12.5　2／5	花崗岩	風空
S46	B	SE01	石製品	一石五輪塔	10.3×　9.5×　9.8　2／5	花崗岩　火化	風空
S47	B	SE01	石製品	一石五輪塔	16.2×12.4×16.2　2／5	砂岩	水火
S48	B	SK70	石製品	五輪塔　笠	19.1×　　×33.7　1／5	花崗岩	火
S49	B	石列溝17	石製品	五輪塔　笠	14.4×　　×24.3　1／5	花崗岩	火
S50	B		石製品	五輪塔　笠	14.0×　　×22.1　1／5	花崗岩	火
S51	B	SX174東	石製品	五輪塔　笠	14.1×　　×21.5　1／5	花崗岩	火
S52	B	SX131南	石製品	五輪塔　笠	11.8×　　×20.1　1／5	花崗岩	火
S53	C	SD12pit	石製品	五輪塔	18.8×24.1×23.9　1／5	花崗岩	水
S54	C	SK162	石製品	石臼	9.5×32.6×16.0　3／6	花崗岩	
S55	C	SK162	石製品	石臼	10.5×30.1×15.5　3／6	花崗岩	
S56	B	西北隅土壙A	石製品	石臼(茶臼)	4.2×　9.6×19.7　3／6		
S57	B	杭1	石製品	砥石	11.9×　5.2×　1.1　4／6		
S58	C	CL5かまど	石製品	赤間関硯	10.4×　5.8×		
S59	C	Ⅱ面まで	石製品	硯	7.6×　4.5×　0.7		
S60	B	F2焼土	石器	砥石	8.8×　4.1×　1.8		
S61	C	SE09,13	石器	砥石	6.1×6.　3×　0.8		
S62	B	堂基壇1	石器	砥石	7.6×　45×　07		
S63	B	SD03	石器	砥石	9.9×4　.7×　2.3		

第11表　金属製品属製表（1）

煙　管　　＊は残存長

No.	地区	遺　構	種別	器種	全長	火皿径	径	厚さ	備　考
F 1	B	堂焼土	銅製品	吸口	7.2		1.2	0.1	表面に鍍金を施す
F 1	B	堂焼土A区	銅製品	雁首	5.6	欠損	1.4	0.1	表面に鍍金を施す
F 2	C−K4	カマドⅠ下層土器群	銅製品	雁首	6.9	1.7	1.1	0.1	
F 3	B	SK64	銅製品	雁首	6.4	1.8	1.1	0.1	
F 4	B	SX227	銅製品	雁首	4.4	1.4	1.0	0.1	表面に鍍金を施す
F 4	B	SX227	銅製品	吸口	＊12.3		1.3	0.1	表面に鍍金を施す
F 5	B	SX236	真鍮	雁首	＊4.3	1.5	1.1	0.1	漆塗り
F 5	B	SX236	真鍮	吸口	7.0		1.1	0.1	外面は漆塗りの上に桜が線彫りで表現
F 6	B	SK64瓦埋込土	銅製品	不明	8.7			0.2	板状製品

銅　線　　＊は残存長

No.	地区	遺　構	種別	器種	全長	径	備　考
F 7	B	SX228棺内	銅製品	銅線	41.2	0.04	
F 8	B	SX228棺内	銅製品	銅線	21.3	0.04	
F 9	B	SX228埋土	銅製品	銅線	15.4	0.04	
F10	B	SX228埋土	銅製品	銅線	10.8	0.04	
F11	B	SX228埋土	銅製品	銅線	10.4	0.04	
F12	B	SX228埋土	銅製品	銅線	9.3	0.04	
F13	B	SX228埋土	銅製品	銅線	6.5	0.04	
F14	B	SX228埋土	銅製品	銅線	6.2	0.04	
F15	B	SX228埋土	銅製品	銅線	6.0	0.04	
F16	B	SX228埋土	銅製品	銅線	3.5	0.04	

釘　　＊は残存長

No.	地区	遺　構	種別	器種	全長	幅	備　考
F17	B	SX167釘No.1	鉄製品	釘	9.2	1.0×0.8	折釘、木質残存
F18	B	SX167	鉄製品	釘	7.4	1.4×0.4	折釘、木質残存
F19	B	SX167	鉄製品	釘	8.0	1.2×0.7	折釘、木質残存
F20	B	SX167	鉄製品	釘	＊6.9	1.0×1.0	頭欠損、木質残存
F21	B	SX167	鉄製品	釘	＊6.4	1.0×0.6	頭欠損、木質残存
F22	B	SX167	鉄製品	釘	＊6.6	1.0×0.6	頭欠損、木質残存
F24	B	SX167釘	鉄製品	釘	4.6	1.3×0.9	角釘、木質残存
F25	B	SX167	鉄製品	釘	＊3.9	1.8×0.7	角釘、足部欠損木質残存
F26	B	SX167	鉄製品	釘	＊3.3	1.6×0.9	角釘、足部欠損
F31	B	SX228	鉄製品	釘	＊3.5	0.4×0.5	頭欠損
F36	B	SX228	鉄製品	釘	＊2.3	0.4×0.3	頭欠損
F40	B	SX229	鉄製品	釘	7.6	0.5×0.6	角釘
F41	B	SX228	鉄製品	釘	＊4.6	0.4×0.4	頭欠損
F42	B	SX228南1西土1番目	鉄製品	釘	＊3.5	0.8×0.3	角釘
F43	B	SX228	鉄製品	釘	＊5.2	0.4×0.6	頭欠損、木質残存
F57	B	SX228	鉄製品	釘	＊6.8	0.4×0.4	頭欠損
F61	B	SX228	鉄製品	釘	＊6.4	0.7×0.4	頭欠損
F62	B	SX228	鉄製品	釘	＊5.8	0.9×0.9	頭巻釘、足部欠損

第11表　金属製品属製表（2）

F64	B	SX228	鉄製品	釘	＊4.9	0.4×0.3	頭欠損
F67	B	SX228底南1東	鉄製品	釘	＊2.9	0.4×0.4	頭欠損、木質残存
F76	B	SX232西2北1番下	鉄製品	釘	＊5.0	0.4×0.3	合釘、木質残存
F81	B	SX233桶底	鉄製品	釘	5.7	0.8×0.2	角釘
F82	B	SX234桶底	鉄製品	釘	4.4	0.5×0.2	角釘
F83	B	SX236東2北1番下	鉄製品	釘	＊6.5	0.7×0.4	頭欠損、木質残存
F84	B	SX236	鉄製品	釘	＊6.8	0.5×0.4	切釘
F86	B	SX175	鉄製品	釘	＊5.1	0.5×0.4	角釘
F87	B	SX175	鉄製品	釘	＊6.6	0.5×0.5	合釘
F88	B	SX210	鉄製品	釘	＊5.5	1.1×0.7	角釘、木質残存
F89	B	骨壺No.4	鉄製品	釘	4.0	1.1×0.8	蟹目釘
F90	B	西撹乱3精査	鉄製品	釘	＊3.7	3.7×0.9	折釘
F107	C	SD10	鉄製品	釘	＊10.0	＊1.8×0.7	折釘、木質残存
F108	C	I面	鉄製品	釘	＊8.3	＊1.3×0.7	折釘
F109	C	SK49	鉄製品	釘	＊10.3	1.8×0.6	折釘
F110	C	カマド3	鉄製品	釘	＊6.7	0.4×0.4	折釘
F111	C	カマド2	鉄製品	釘	＊9.0	0.5×0.5	角釘、木質残存
F112	C	カマド2	鉄製品	釘	＊5.6	0.9×0.6	角釘

その他　　＊は残存長

No.	地区	遺　構	種別	器種	全長(口径)	幅(底径)	厚さ(器高)	備　考
F91	B	SX221	鉄製品	鎌	＊18.0	3.2	0.5	
F92	B	SX216	銅製品	銅線		2.4×2.4	0.03	
F93	B	SX222	銅製品	銅環		2.0×1.8	0.1	鍍金あり
F94	B	SK149	銅製品	飾り金具	＊7.0	1.1	0.06	片面のみ鍍金を施している
F95	B	撹乱土坑No.3	銅製品	六器	6.6	3.4	3.1	摩擦による使用痕あり
F96	B	SK41	銅製品	毛抜き	6.9	1.7	0.6×0.1	全面に鍍金をし、その上から魚魚子地で文様を施す
F97	B	北サブトレNo.51の抜き取り	銅製品	柄?	5.1	1.2		板状のものを組合わせている
F98	B	SK71	銅製品	金具?	＊3.6	＊3.3	0.2	
F99	B	SK73	銅製品	銭巾着袋	＊2.4	＊2.9	＊1.1	銅銭を包んでいた布が錆化したもの
F100	B	SK36	銅製品	柄	＊8.0	＊1.9	＊1.5	木質残存、金具を袋状折り曲げ鋲止め
F101	B	SK38	銅製品	引き手金具	10.4	7.3	1.0×1.0	座金具径2.5cm
F102	B	防空壕No.2	銅製品	引き手金具	9.8	5.4	0.7×0.7	菊花座金具径2.3cm
F103	B	SK78	銅製品	タバコ切り	＊7.9	＊5.5	0.6	裏面に木質らしきもの付着
F104	C	M3	銅製品	金具	＊7.9	＊4.8	0.3	菱形で透かしあり
F105	B	SK48	鉄製品	刀子柄	＊7.4	＊1.6	0.2	
F106	B	SK41	鉄製品	刀子(刀部)	＊13.5	＊2.6	0.5	
F113	C	カマド	鉄製品	包丁	＊28.0	4.7	0.8	刃部欠損、柄部長さ8.5cm、幅1.6cm、木質残存
F114	C	J4	鉄製品	火箸	＊36.3	0.7		上部欠損?
F115	C		鉄製品	火箸	＊21.1	0.7		上部径1.1cm
F116	C	I面	鉄製品	楔	15.9	9.4	1.3×1.4	L字形
F117	C	O4	鉄製品	鎌?	＊7.5	＊3.4	0.5	
F118	B	G2区	真鍮製品	小柄の柄	9.1	1.4	0.5	片面のみ刻み目文様、全面に鍍金

第11表　金属製品属製表（3）

F119	B	G2区	鉄製品	鏃	5.1	1.9	0.5×0.7	
F120	B	SD03	鉄製品	備中鍬	16.2	16.7	1.9	目針穴?

銭貨　　＊は残存長

No.	地区	遺　構	径	備考	No.	地区	遺　構	径	備考
F121	B	SX12(下層)	＊2.3	寛永通寶	F176	B	SX235	2.3	寛永通寶
F122	B	SX12(下層)	2.5	寛永通寶(文銭)	F177	B	SX35～25	2.5	寛永通寶
F124	B	SX12(下層)	2.5	寛永通寶(文銭)	F179	B	SX227	2.3	寛永通寶
F125	B	SX12(下層)	2.3	寛永通寶(文銭)	F180	B	SX18	2.3	寛永通寶
F136	B	SX202	2.6	寛永通寶(文銭)	F182	B	六道銭	2.5	寛永通寶
F137	B	SX202	2.5	寛永通寶	F183	B	六道銭	2.5	寛永通寶
F138	B	SX202	2.5	寛永通寶	F184	B	六道銭	2.5	天禧通寶(真書)
F139	B	SX202	2.5	寛永通寶	F188	B	SK10	2.4	寛永通寶
F140	B	SX202	2.3	寛永通寶	F189	B	SK46	2.5	寛永通寶(文銭)
F142	B	SX216	2.5	寛永通寶(文銭)	F190	B	SK66	2.5	永楽通寶
F143	B	SX216	2.5	寛永通寶(文銭)	F194	B	F2E	2.4	寛永通寶
F144	B	SX216	2.5	寛永通寶(文銭)	F195	B	南東隅	2.5	寛永通寶
F145	B	SX216	2.5	寛永通寶(文銭)	F196	B	西撹乱	2.5	寛永通寶
F146	B	SX216	2.6	寛永通寶(文銭)	F197	B	北西隅	2.3	寛永通寶
F147	B	SX216	2.5	寛永通寶(文銭)	F200	B	中央北精査	2.4	寛永通寶
F148	B	SX221	2.4	寛永通寶	F202	B		2.5	寛永通寶
F149	B	SX221	2.5	寛永通寶	F208	B	下層石敷	2.4	元豊通寶(行書)
F150	B	SX221	2.3	寛永通寶	F209	B	下層石敷	2.5	元祐通寶(行書)
F151	B	SX221	2.4	寛永通寶	F210	B	下層石敷	2.5	元祐通寶(篆書)
F155	B	SX223	2.5	寛永通寶	F211	B	下層石敷	2.4	紹聖通寶(行書)
F156	B	SX223	2.5	寛永通寶	F215	C	SK49	2.5	寛永通寶
F157	B	SX223	2.4	寛永通寶	F216	C	SK36	2.4	皇宋通寶(篆書)
F158	B	SX223	2.5	寛永通寶	F218	C	J3J4	2.4	寛永通寶
F159	B	SX224	2.5	寛永通寶	F219	C	石列精査	2.3	寛永通寶
F160	B	SX224	2.4	寛永通寶	F220	1C		2.4	寛永通寶
F162	B	SX224	2.5	寛永通寶	F221	1C		2.5	寛永通寶(文銭)
F163	B	SX224	2.5	寛永通寶	F222	C	L3	2.3	寛永通寶
F165	B	SX228	2.5	寛永通寶	F224	C	K3	2.5	寛永通寶
F166	B	SX228	2.3	寛永通寶	F225	C	M4	2.5	寛永通寶
F167	B	SX228	2.4	寛永通寶	F226	C	O4	2.5	寛永通寶
F168	B	SX228	2.4	寛永通寶	F228	C	N4	2.5	寛永通寶
F169	B	SX228	2.3	寛永通寶	F229	C	北サブトレ	2.5	寛永通寶
F170	B	SX228	2.3	寛永通寶	F230	C	N3	2.4	皇宋通寶(篆書)
F171	B	SX235	2.3	寛永通寶	F231	C	N4	2.4	治平元寶(真書)
F172	B	SX235	2.5	寛永通寶	F232	C	M4		治平元寶(篆書)
F173	B	SX235	2.3	寛永通寶	F234	C	O3	2.4	大観通寶
F174	B	SX235	2.3	寛永通寶	F235	C	SK115 SK116	2.4	景定元寶
F175	B	SX235	2.4	寛永通寶	F236	C	K3	2.8	寛永通寶(背11波文)

第11表　金属製品属製表（4）

No.	地区	遺　構	径	備考	No.	地区	遺　構	径	備考
F237	C	第1面	2.4	寛永通寶	F242	C	表採	2.5	寛永通寶
F238	C	N 4	2.5	寛永通寶	F243	C	表採	2.5	寛永通寶(文銭)
F239	C	N 3	2.5	寛永通寶	F244	C	不明	2.5	寛永通寶
F240	C	M 4	2.4	寛永通寶	F245	C	K 4	*2.5	寛永通寶(文銭)
F241	C	東中央	2.5	寛永通寶					*は残存長

第12表　木製品属性表（1）

No	地区	遺　構	器　種	長(口径)	幅(腹径)	厚(器高)	底　径	孔　径	備　考
W 1	B	SX218	箱棺	59.9	61.2	39.5			
W 2	B	SX228	箱棺	53.0	54.0	85.5			
W 3	B	SX232	箱棺	55.2	56.0	39.0			
W 4	B	SX236	箱棺	61.1	60.2	79.9			
W 5	B	SX226	桶側板	(24.8)	18.95	1.35			
W 6	B	SX226	桶側板	35.5	9.5	1.3			
W 7	B	SX229	桶側板	(15.5)	8.2	0.8			
W 8	B	SK94	桶側板	8.8	5.5	0.6			
W 9	B	SX225	桶側板	(21.0)	12.6	0.8			
W10	B	SX226	桶底板	48.4	50.0	2.7			
W11	B	SX233	桶底板	47.65	47.8	0.8			座板
W12	B	SX225	桶底板	42.5	43.6	2.0			
W13	B	SX229	桶底板	44.8	32.5	1.5			座板
W14	B	SX216	箱板	41.9	13.5	1.3			
W15	B	SX216	箱板	44.4	16.35	1.15			
W16	B	SX216	箱板	43.55	(11.3)	1.1			
W17	B	SX216	箱板	43.5	(12.9)	1.2			
W18	B	SX232		54.3	(23.45)	1.4			
W19	B	SX232		54.8	9.9	1.7			
W20	B	SX232		51.9	19.5	1.5			
W21	B	SX226	堀方内板	(20.03)	(13.6)	8.5			
W22	B	SX218	数珠玉	1.10	0.98	1.10		0.19	
W23	B	SX218	数珠玉	1.10	0.95	1.10		0.20	
W24	B	SX218	数珠玉	1.05	0.94	1.05		0.20	
W25	B	SX218	数珠玉	1.08	0.98	1.08		0.20	
W26	B	SX218	数珠玉	1.12	0.96	1.12		0.22	
W27	B	SX218	数珠玉	1.11	0.98	1.11		0.21	
W28	B	SX218	数珠玉	1.07	0.96	1.07		0.22	
W29	B	SX218	数珠玉	1.42	1.24	1.46		0.25	3孔
W30	B	SX218	数珠玉	1.07	0.93	1.07		0.20	
W31	B	SX218	数珠玉	1.07	0.94	1.07		0.23	
W32	B	SX218	数珠玉	1.07	0.89	1.07		0.22	
W33	B	SX218	数珠玉	1.10	0.96	1.10		0.18	
W34	B	SX218	数珠玉	1.13	1.00	1.12		0.22	
W35	B	SX218	数珠玉	1.12	0.97	1.10		0.20	
W36	B	SX218	数珠玉	1.12	0.97	1.12		0.20	
W37	B	SX218	数珠玉	1.06	0.92	1.06		0.21	
W38	B	SX218	数珠玉	0.45	0.33	0.45		0.14	
W39	B	SX226	数珠玉	1.04	0.62	1.04		0.12	
W40	B	SX226	数珠玉	0.73	0.67	0.73		0.10	
W41	B	SX226	数珠玉	0.65	0.75	0.64		0.13	
W42	B	SX226	数珠玉	0.72	0.67	0.69		0.11	

第12表　木製品属性表（2）

No	地区	遺　構	器　種	長(口径)	幅(腹径)	厚(器高)	底　径	孔　径	備　考
W43	B	SX226	数珠玉	0.68	0.75	0.68		0.12	
W44	B	SX226	数珠玉	0.70	0.70	0.67		0.11	
W45	B	SX226	数珠玉	0.69	0.69	0.66		0.11	
W46	B	SX226	数珠玉	0.82	0.73	0.72		0.12	
W47	B	SX226	数珠玉	0.66	0.78	0.75		0.12	
W48	B	SX226	数珠玉	0.67	0.74	0.69		0.11	
W49	B	SX226	数珠玉	0.70	0.70	0.67		0.11	
W50	B	SX226	数珠玉	0.73	0.71	0.70		0.11	
W51	B	SX226	数珠玉	0.73	0.71	0.68		0.11	
W52	B	SX226	数珠玉	0.63	0.70	0.66		0.11	
W53	B	SX226	数珠玉	0.71	0.69	0.67		0.12	
W54	B	SX226	数珠玉	0.69	0.70	0.69		0.11	
W55	B	SX226	数珠玉	0.71	0.74	0.71		0.12	
W56	B	SX226	数珠玉	0.70	0.68	0.66		0.12	
W57	B	SX226	数珠玉	0.72	0.69	0.68		0.11	
W58	B	SX226	数珠玉	0.62	0.69	0.64		0.12	
W59	B	SX226	数珠玉	0.63	0.67	0.64		0.11	
W60	B	SX226	数珠玉	0.72	0.72	0.71		0.11	
W61	B	SX226	数珠玉	0.60	0.71	0.62		0.11	
W62	B	SX226	数珠玉	0.65	0.61	0.61		0.13	
W63	B	SX226	数珠玉	0.55	0.74	0.74		0.13	
W64	B	SX226	数珠玉	0.54	0.74	0.74		0.12	
W65	B	SX226	数珠玉	0.54	0.74	0.73		0.11	
W66	B	SX226	数珠玉	0.56	0.74	0.73		0.11	
W67	B	SX226	数珠玉	0.54	0.72	0.72		0.12	
W68	B	SX226	数珠玉	0.54	0.76	0.75		0.11	
W69	B	SX226	数珠玉	0.50	0.72	0.72		0.11	
W70	B	SX226	数珠玉	0.52	0.74	0.73		0.11	
W71	B	SX226	数珠玉	0.48	0.78	0.78		0.11	
W72	B	SX226	数珠玉	0.50	0.68	0.68		0.11	
W73	B	SX226	数珠玉	0.54	0.77	0.77		0.12	
W74	B	SX226	数珠玉	0.50	0.75	0.72		0.11	
W75	B	SX226	数珠玉	0.50	0.72	0.72		0.11	
W76	B	SX226	数珠玉	0.51	0.74	0.73		0.12	
W77	B	SX226	数珠玉	0.51	0.75	0.75		0.10	
W78	B	SX226	数珠玉	0.48	0.73	0.72		0.11	
W79	B	SX226	数珠玉	0.54	0.77	0.77		0.11	
W80	B	SX226	数珠玉	0.51	0.76	0.75		0.12	
W81	B	SX226	数珠玉	0.50	0.68	0.67		0.11	
W82	B	SX226	数珠玉	0.52	0.78	0.74		0.11	
W83	B	SX226	数珠玉	0.55	0.75	0.75		0.11	

第12表　木製品属性表（3）

No	地区	遺　構	器　種	長(口径)	幅(腹径)	厚(器高)	底　径	孔　径	備　考
W84	B	SX226	数珠玉	0.52	0.72	0.72		0.12	
W85	B	SX226	数珠玉	0.50	0.73	0.70		0.11	
W86	B	SX226	数珠玉	0.52	0.75	0.68		0.11	
W87	B	SX226	数珠玉	0.54	0.74	0.74		0.11	
W88	B	SX226	数珠玉	0.50	0.76	0.76		0.11	
W89	B	SX226	数珠玉	0.47	0.72	0.72		0.11	
W90	B	SX226	数珠玉	0.46	0.72	0.67		0.11	
W91	B	SX226	数珠玉	0.44	0.68	0.65		0.11	
W92	B	SX226	数珠玉	0.55	0.75	0.72		0.11	
W93	B	SX226	数珠玉	0.53	0.75	0.75		0.11	
W94	B	SX226	数珠玉	0.45	0.72	0.72		0.10	
W95	B	SX226	数珠玉	0.48	0.74	0.72		0.11	
W96	B	SX226	数珠玉	0.52	0.76	0.71		0.11	
W97	B	SX226	数珠玉	0.55	0.76	0.76		0.11	
W98	B	SX226	数珠玉	0.55	0.77	0.77		0.11	
W99	B	SX226	数珠玉	0.18	0.53	0.51		0.11	
W100	B	SX226	数珠玉	0.20	0.55	0.53		0.11	
W101	B	SX226	数珠玉	0.33	0.48	0.47		0.15	
W102	B	SX226	数珠玉	0.33	0.50	0.47		0.13	
W103	B	SX228	数珠玉	1.12	1.20	1.21		0.23	
W104	B	SX228	数珠玉	1.11	1.24	1.23		0.23	
W105	B	SX228	数珠玉	1.08	0.94	0.89		0.11	
W106	B	SX228	数珠玉	1.11	0.94	0.87		0.12	
W107	B	SX228	数珠玉	1.09	0.97	0.90		0.11	
W108	B	SX228	数珠玉	1.09	0.96	0.88		0.11	
W109	B	SX228	数珠玉	1.07	0.92	0.88		0.11	
W110	B	SX228	数珠玉	1.09	1.00	0.93		0.12	
W111	B	SX228	数珠玉	1.07	0.96	0.89		0.11	
W112	B	SX228	数珠玉	1.07	0.90	0.88		0.10	
W113	B	SX228	数珠玉	1.00	0.84	0.82		0.14	
W114	B	SX228	数珠玉	1.08	0.94	0.90		0.12	
W115	B	SX228	数珠玉	1.09	0.94	0.89		0.11	
W116	B	SX228	数珠玉	1.10	0.97	0.92		0.12	
W117	B	SX228	数珠玉	1.09	0.97	0.92		0.13	
W118	B	SX228	数珠玉	1.09	0.96	0.90		0.10	
W119	B	SX228	数珠玉	1.10	0.92	0.89		0.11	
W120	B	SX228	数珠玉	1.08	0.93	0.89		0.11	
W121	B	SX228	数珠玉	1.10	0.97	0.89		0.11	
W122	B	SX228	数珠玉	1.08	0.93	0.87		0.11	
W123	B	SX228	数珠玉	0.42	0.88	0.88		0.13	
W124	B	SX228	数珠玉	0.43	0.88	0.88		0.13	

第12表　木製品属性表（4）

No	地区	遺　構	器　種	長(口径)	幅(腹径)	厚(器高)	底　径	孔　径	備　考
W125	B	SX228	数珠玉	0.43	0.88	0.88		0.13	
W126	B	SX228	数珠玉	0.42	0.87	0.86		0.13	
W127	B	SX228	数珠玉	0.42	0.88	0.87		0.13	
W128	B	SX228	数珠玉	0.43	0.88	0.87		0.14	
W129	B	SX228	数珠玉	0.43	0.89	0.87		0.13	
W130	B	SX228	数珠玉	0.43	0.87	0.87		0.13	
W131	B	SX228	数珠玉	0.43	0.86	0.86		0.13	
W132	B	SX228	数珠玉	0.42	0.87	0.87		0.13	
W133	B	SX228	数珠玉	0.43	0.87	0.87		0.13	
W134	B	SX228	数珠玉	0.44	0.87	0.87		0.13	
W135	B	SX228	数珠玉	0.42	0.87	0.87		0.13	
W136	B	SX228	数珠玉	0.44	0.87	0.87		0.14	
W137	B	SX228	数珠玉	0.43	0.87	0.87		0.13	
W138	B	SX228	数珠玉	0.43	0.87	0.87		0.13	
W139	B	SX228	数珠玉	0.43	0.88	0.87		0.13	
W140	B	SX228	数珠玉	0.42	0.88	0.88		0.13	
W141	B	SX228	数珠玉	0.43	0.88	0.88		0.13	
W142	B	SX228	数珠玉	0.43	0.88	0.88		0.13	
W143	B	SX228	数珠玉	0.43	0.87	0.87		0.13	
W144	B	SX228	数珠玉	0.43	0.87	0.87		0.13	
W145	B	SX228	数珠玉	0.42	0.88	0.88		0.13	
W146	B	SX228	数珠玉	0.43	0.87	0.87		0.13	
W147	B	SX228	数珠玉	0.42	0.88	0.88		0.13	
W148	B	SX228	数珠玉	0.42	0.87	0.87		0.13	
W149	B	SX228	数珠玉	0.42	0.86	0.86		0.13	
W150	B	SX228	数珠玉	0.44	0.87	0.87		0.13	
W151	B	SX228	数珠玉	0.42	0.86	0.86		0.12	
W152	B	SX228	数珠玉	0.42	0.87	0.87		0.12	
W153	B	SX228	数珠玉	0.43	0.88	0.88		0.13	
W154	B	SX228	数珠玉	0.44	0.87	0.87		0.13	
W155	B	SX228	数珠玉	0.43	o.88	0.88		0.13	
W156	B	SX228	数珠玉	0.42	0.86	0.86		0.13	
W157	B	SX228	数珠玉	0.42	0.87	0.87		0.13	
W158	B	SX228	数珠玉	0.43	0.89	0.89		0.13	
W159	B	SX228	数珠玉	0.42	0.89	0.89		0.13	
W160	B	SX228	数珠玉	0.41	0.88	0.88		0.13	
W161	B	SX228	数珠玉	0.43	0.89	0.89		0.13	
W162	B	SX228	数珠玉	0.41	0.86	0.86		0.13	
W163	B	SX228	数珠玉	0.56	0.59	0.58		0.11	
W164	B	SX228	数珠玉	0.59	0.54	0.54		0.13	
W165	B	SX228	数珠玉	0.42	0.44	0.44		0.11	

第12表　木製品属性表（5）

No	地区	遺　構	器　種	長(口径)	幅(腹径)	厚(器高)	底　径	孔　径	備　考
W166	B	SX228	数珠玉	0.42	0.45	0.45		0.11	
W167	B	SX228	数珠玉	0.43	0.44	0.44		0.10	
W168	B	SX228	数珠玉	0.41	0.44	0.44		0.11	
W169	B	SX228	木簡	28.8	5.6				
W170	B	SX218	棗身 棗蓋	4.45 5.2	5.2 5.3	4.4 1.55	2.9		
W171	B	SX236	容器	4.1	4.4				たばこの道具
W172	B	SX228	方形板	4.99	5.81	0.61			
W173	B	SK94	箱?	16.8	13.4	0.45			漆付着
W174	B	SK71	箱側板	17.4	4.1	0.65			
W175	B	SK94	曲物	9.8	4.6	0.5			
W176	B	SE06	箸	(14.5)	0.65	0.65			
W177	B	SK94	漆椀	①(13.1)	(4.8)				
W178			漆椀	②(10.3)	(1.5)				
W179	B	SX218	箱板	9.7	14.0	0.31			
W180	B	SX218	箱板	9.6	14.0	0.2			
W181	B	SX218	箱板	7.3	13.9	0.3			
W182	B	SX218	箱板	7.9	13.88	0.31			
W183	B	SX218	箱板	1.8	13.9	0.32			
W184	B	SX218	箱板	1.85	13.85	0.34			
W185	B	SX218	箱板	4.59	8.08	0.31			別材挿入
W186	B	SK94	箱板	7.8	3.4	0.25			刳り方あり
W187	B	SX218	箱板	4.4	7.7	0.3			
W188	B	SX218	箱板	8.1	13.1	0.2			
W189	B	SX218	箱板	8.3	13.2	0.25			
W190	B	SX218	箱板	7.4	9.26	0.36			
W191	B	SX218	箱板	74.2	9.25	0.35			
W192	B	SX218	箱板	8.4	8.5	0.25			
W193	B	SX218	箱板	8.4	8.4	0.3			
W194	B	SX218	箱板	8.1	8.1	0.3			
W195	B	SX218	箸	16.65	0.6	0.3			
W196	B	SX218	箸	16.7	0.5	0.6			
W197	B	SX228	箸	0.7	9.6	0.1			棺内NO.5
W198	B	SX228	箸	9.9	0.7	0.1			棺内NO.5
W199	B	SK94	箸	23.4	0.55	0.6			
W200	B	SK94	箸	(27.8)	0.7	0.7			
W201	B	SK94	箸	22.6	0.85	0.6			
W202	B	SK94	箸	23.5	0.7	0.65			
W203	B	SK94	箸	22.0	0.7	0.65			
W204	B	SX216	箱板	42.5	3.05	1.1			
W205	B	SX216	箱板	42.55	3.1	1.0			

第12表　木製品属性表（6）

No	地区	遺　構	器　種	長(口径)	幅(腹径)	厚(器高)	底　径	孔　径	備　考
W206	B	SX216	箱板	42.7	1.7	1.0			
W207		SK94		29.5	1.5	1.85			
W208		SK94		14.4	2.4	0.7			
W209	B	SX236	箱棺材	59.0	2.45	1.6			
W210	B	SX236	煙管	5.7 5.7	0.9 0.8	0.85 0.35			
W211	B	SX228	箱棺材	(32.3)	4.55	3.55			
W212	B	SK94		32.3	3.2	0.85			
W213	B	SK94		33.4	1.95	1.2			
W214	B	SK94		29.0	1.8	1.4			
W215	B	SK94		28.4	1.8	1.4			
W216	B	SK94		28.9	1.8	1.35			
W217	B	SK94		27.8	1.63	1.3			
W218	B	SK94		28.8	1.1	1.28			
W219	B	SK94		28.6	1.5	1.2			
W220	B	SK94		28.5	1.05	1.12			
W221	B	SK94		28.7	1.4	1.1			
W222	B	SK94		28.6	1.5	1.25			
W223	B	SK94		28.4	1.5	1.12			
W224	B	SK94		28.7	1.75	1.31			
W225	B	SK94		28.35	1.55	1.2			
W226	B	SK94		28.6	1.51	1.18			
W227	B	SK94		28.7	1.62	1.19			
W228	B	SK94		28.8	1.48	1.1			
W229	B	SK94		28.81	1.6	1.05			
W230	B	SK94		15.9	1.5	1.03			
W231	B-G 3		下駄	20.6	8.0	5.1			
W232	B	SK94	払子	(17.35)	2.8	2.65			
W233	B	SK94	笄(こうがい)	18.7	2.0	1.8			
W234	B	SX228	櫛	(8.6)	(2.9)	(5.65)			
W235	B	SX236	櫛	3.2	12.8	0.95			
W236	B	SX236	櫛	3.9	13.4	0.5			
W237	B	SX236	櫛	3.5	14.45	0.95			
W238	B	SK94	縄	55	1.2	1.0			
W239	B	SK94		13.4	(10.25)	0.3			

第150次調査

例　　言

1．本書は都市計画道路伊丹飛行場線道路改良事業に伴う、有岡城跡・伊丹郷町第150次調査の発掘調査報告書である。調査地点は伊丹市宮ノ前１丁目に所在する。

2．調査は平成７年６月21日～８月３日の期間実施し、調査面積は249㎡である。

3．遺構の実測は、調査員・調査補助員が行い、遺構の製図及び遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。

4．本書の編集・執筆は、山上雅弘・服部寛が行い、嘱託員小山みゆきの補助をえた。

5．遺物の番号は、本文・挿図・図版とも統一している。

6．本書で使用した標高は大阪湾海水準を基とし、方位は国土座標系第Ⅴ系の座標北を指す。

7．調査で使用した遺物や、作成した写真・図版などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において保管している。

〒 652－0032　兵庫県兵庫区荒田町２丁目－１－５　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

☎　078－531－7011

8．本調査においては下記の方々から御教示を賜った。記して感謝します。

河口宏海・小長谷正治・細川佳子・角田誠

本　文　目　次

第１章　調査の概要……105
第２章　遺　構……105
第３章　遺　物……108
第４章　まとめ……112

表　目　次

第１表　埋桶一覧表……107
第２表　土坑一覧表……107
第３表　出土遺物観察表……114

図　版　目　次

図版　1　有岡城跡・伊丹郷町の位置
図版　2　有岡城跡・伊丹郷町周辺地形環境図
図版　3　有岡城跡・伊丹郷町周辺等高線図
図版　113　第150次調査遺構配置図
図版　114　第150次調査遺構（１）（土坑・便所）
図版　115　第150次調査遺構（２）（水琴窟）
図版　116　第150次調査遺構（３）（土坑）
図版　117　第150次調査遺構（４）（長方形焼土土坑）
図版　118　第150次調査遺構（５）（土坑）
図版　119　第150次調査遺構（６）（埋桶）
図版　120　第150次調査時期毎の遺構変遷図
図版　121　第150次調査周辺調査地区全体図
図版　122　第150次調査屋敷境の遺構平面図
図版　123　第150次調査屋敷地復元図
図版　124　第150次調査出土土器（１）（土師質土器）
図版　125　第150次調査出土土器（２）（陶器擂鉢）
図版　126　第150次調査出土土器（３）（陶器・瓦）
図版　127　第150次調査出土土器（４）（染付磁器）
図版　128　第150次調査出土土器（５）（青磁染付・青磁・白磁・陶器甕）
図版　129　第150次調査出土土器（６）（近代遺物）

写真図版目次

写真図版　137　第150次調査地点空中写真　1.（調査地遠景西上空から）　2.（調査区遠景東上空から）

写真図版　138　第150次調査遺構写真（1）　1.調査区全景（北西から）　2.調査区北半（東から）

写真図版　139　第150次調査遺構写真（2）　1.調査区北半（北から）　2.調査区南半（北から）
3.礎石建物跡（東から）

写真図版　140　第150次調査遺構写真（3）　（上：水琴窟1検出状況　中：水琴窟1断割り状況　下：同上）

写真図版　141　第150次調査遺構写真（4）　1.水琴窟2検出状況（北から）　2.便甕1・2検出状況
（南から）　3.カマド検出状況（南から）

写真図版　142　第150次調査遺構写真（5）　1.石組遺構（北から）　2.ＳＫ4（南から）　3.ＳＫ62（南から）

写真図版　143　第150次調査遺構写真（6）　（上：長方形焼土坑群　中：同断面　下：ＳＫ79）

写真図版　144　第150次調査遺構写真（7）

写真図版　145　第150次調査出土遺物（1）土師器・陶器

写真図版　146　第150次調査出土遺物（2）陶磁器（1）・瓦

写真図版　147　第150次調査出土遺物（3）陶磁器（2）

写真図版　148　第150次調査出土遺物（4）陶磁器（3）

写真図版　149　第150次調査出土遺物（5）陶磁器（4）

写真図版　150　第150次調査出土遺物（6）陶磁器（5）

写真図版　151　第150次調査出土遺物（7）陶磁器（6）

写真図版　152　伊丹郷町出土木製品の顕微鏡写真（1）

写真図版　153　伊丹郷町出土木製品の顕微鏡写真（2）

第１章　調査の概要

調査の概要

第150次調査は有岡城跡・伊丹郷町の調査の内、伊丹飛行場線に伴う調査の第75次調査区と第99次調査区との間に所在する。本調査は伊丹飛行場線に伴う調査の最後の調査である。

調査地付近の標高は17.5m前後を測るが、調査地の西側は緩やかに傾斜して下り、東側には高くなる。西隣の第75次調査区では遺構面が２面検出できたが、本調査区では東に向けてやや堆積土が薄くなる傾向があるうえ、全体に削平が著しいため遺構面の検出は１面のみでおこなった。

第２章　遺　構

調査の結果、建物跡、石組側溝、長方形焼土土坑、カマド、便所、水琴窟、埋桶、土坑など屋敷に関わる様々な遺構が出土した。

１．礎石建物（図版113）

礎石痕跡の並びから、調査区南端に建物を復元した。並びは必ずしも一定ではないが調査区内で11間×５間の規模を有する。但し、調査区の西側にも延びており、第75次調査の東端に建物の続きが検出されている。昭和63年度調査時の空中写真撮影の建物の間取りと今回検出した礎石の位置がほぼ重なっているため、礎石は現在まで建物の基礎として使用されてきたようだ。但し、この礎石は後世の建て替時に若干移動したものと思われ、上面にコンクリートの付着が認められた。また、建物内の一部で土間状の貼床を確認した。

２．石組側溝（図版113）

調査区東辺に沿って南北方向に通る石組側溝（ＳＤ01）の西肩部を検出した。第99次調査区で検出している溝２と同一のものである。深さは0.2m前後を測る。底部には漆喰を貼り、現在まで屋敷境の側溝として機能していた。

染付碗（76）が出土している。

３．長方形焼土土坑群（ＳＫ32・33・34・35）（図版113）

調査区中央東寄りで検出した遺構群である。ＳＫ32・ＳＫ33・ＳＫ34・ＳＫ35の４つの焼土土坑が並行して検出された。いずれも平面が隅丸の長方形を呈するもので、長軸を東西方向に向ける。長さ3.8m前後、幅1.0～1.8m、深さ0.2m前後である。内部には多量の炭・焼土が充填されていた。

同様の遺構は同じく伊丹飛行場線に伴う調査である第114次調査区などにも認められ、火事片付け土坑ではないかと考えられている。

長方形焼土土坑群からは多量の炭・焼土と共に多量の遺物が出土している。ＳＫ32から磁器小碗（43）・染付碗（68）、ＳＫ33から蓋物蓋（48）・染付碗（70）・染付皿（86）、ＳＫ34から擂鉢（20）、ＳＫ35から

擂鉢（23）・秉燭（37）・丹波焼壺（54）・染付碗（71）が出土している。

4．カマド（図版114）

調査区中央東よりで検出した遺構である。平面は柄鏡状を呈し、長軸を南北方向に向ける。上部は大きく削平されているため全く不明で、基底部分のみ残存していた。残存規模は長さ0.9m、幅0.3～0.6m、深さ約0.2mを測り、漆喰で基底部を築いていた。凹状に窪んだ燃焼室上面は熱により赤変している。長方形焼土坑群のＳＫ32・ＳＫ33を切っている。

5．便所（図版114）

調査区の北西隅で検出された遺構群である。便甕、便槽および排水施設がまとまって検出された。便甕は２基並んだ状態で検出した。上部は大きく削平されているため底部のみ残存していた。甕の内部には漆喰が塗ってあった。便槽および排水施設は便甕のすぐ北側に位置し、便槽とコンクリート製の集水枡と両者を結ぶ排水管の抜き取り痕を検出した。便槽は長さ1.9m、幅1.6m、深さ約1.2mを測り、壁の上半を漆喰で補強している。埋め戻しの際、多量の瓦を放り込んでいた。

6．水琴窟（図版115）

今回の調査では明らかに水琴窟とわかる遺構を２基検出した。

水琴窟１（ＳＫ03）は調査区の南西側に検出された遺構である。上部は長さ1.1m、幅0.9mの範囲で石を敷き漆喰を塗り込めていた。漆喰の厚さは５cm前後で、集水できるように中央をくぼめてある。下部は径0.5m、深さ0.45mの円形の掘り方に明治期の醤油瓶（108）を正位に据えている。醤油瓶は底部を打ち欠いており、底部には平瓦を１枚敷いていた。平瓦の上には染付碗の蓋（105）を逆位に、染付皿（106）を正位に重ねて置いて水受けとしていた。

水琴窟２は調査区の北西端に検出された遺構である。長さ0.65m、幅0.5mの楕円形の掘り方内に丹波焼きの甕を伏せた状態で検出した。上部はＳＫ22などによって破壊されている。

7．埋桶（図版116・117）

今回の調査では平面円形の土坑が多数検出された。本遺構は平面円形を呈するもので、検出面から壁が直に掘削され、底部は水平に掘られる。総じて円筒形を呈する遺構の一群である。桶の痕跡が観察されたものはないが、これまでの調査の類例と比較して埋桶と考えられる。埋桶の遺構は16基出土している。以下、第１表に埋桶の一覧を掲載する。

8．土坑（図版118）

土坑には、地下室の貯蔵穴（ＳＫ62）、瓦礫の片付けの為のゴミ穴、不明のものなどがある。以下、代表的なものについて記述する。

ＳＫ62は調査区の北東付近で検出された土坑である。平面は長方形を呈し、内部に木枠を組み、小型の室を造る。堀方の規模は長さ1.75m、幅1.15m、深さ0.6mを測る。土坑内の木枠は底板３枚、側板は各辺１面の計４枚で作られており、形状は長さ1.5m、幅0.95mの長方形を呈する。側部と底部には横板

を組み、隅部を桟止めする。ＳＫ70を切っている。

ＳＫ62からは多量の陶磁器が出土している。ミニチュア茶釜（９）、柿釉灯明皿（29）（30）、陶器小皿（35）、土瓶（50）、染付碗（64）、型押皿（84）、台付鉢（99）が出土している。

第１表　埋桶一覧表

遺構（ＳＫ）	規模（m）（残存）	深さ（m）	形状	位置	出土遺物	備考
17	1.1×1.1	0.25	楕円形	調査区北東	(12)(39)(103)	
21	1.1	0.6	円形	調査区中央西端		
39	1.6×1.5	0.65	円形	調査区北東	(60)(62)	
40	1.7×1.4	0.7	楕円形	調査区中央西端		ＳＫ67.72を切る
41	1.2×(0.5)	0.5	円形	調査区北東隅	(2)(3)(4)(5)(16)(19)(56)(66)(74)(93)(98)	便槽に切られる
43	1.6×(1.3)	0.8	楕円形	調査区南西		
45	0.8×0.7	0.35	円形	調査区中央西端	(11)(21)(102)	
48	1.4×1.2	0.25	楕円形	調査区中央	(28)(45)(57)(72)(75)(79)(96)	ＳＫ34.55を切る
49	1.9×1.7	0.7	楕円形	調査区中央		ＳＫ55に切られる
55	1.4×(1.0)	0.7	楕円形	調査区中央	(36)(49)(58)	ＳＫ35.71を切り ＳＫ48に切られる
56	(2.0)×(0.6)	0.35	長楕円形	調査区中央東端		ＳＤ01に切られる
66	1.3×1.3	0.7	円形	調査区北東隅	(69)	ＳＫ19に切られる
68	1.6×1.5	0.25	円形	調査区北西	(24)	
71	1.3×0.7	0.3	長楕円形	調査区中央	(17)(61)(87)(89)	ＳＫ35.80を切り ＳＫ55に切られる
80	1.7×(0.85)	0.3	長楕円形	調査区中央		ＳＫ35.71に切られる
82	1.7×1.4	0.2	長楕円形	調査区中央		ＳＫ33.34を切る

第２表　土坑一覧表

遺構ＳＫ	規模（m）（残存）	深さ（m）	形状	位置	出土遺物	備考
4	0.65×0.4	0.15	長楕円形	調査区南西	(13)	
5	0.7×(1.5)	0.4	楕円形	調査区南西	(110)	調査区西壁
8	(1.7)×1.6	0.25	円形	調査区北西隅	(88)	調査区西壁
19	2.1	0.15	円形	調査区北東隅		ＳＫ66を切る
28	(0.4)×0.5	0.2	楕円形	調査区南東隅	ＳＫ27に切られる	ＳＫ27に切られる
30	(0.4)×(0.4)	0.15	隅丸方形	調査区北東	(47)(53)(78)	ＳＫ29を切る
38	(0.8)×0.7	0.3	楕円形	調査区南東隅	(6)(22)(67)(77)(80)(85)(100)	ＳＫ66を切る
44	(0.7)×0.5	0.3	長方形	調査区北東	(26)	ＳＫ27に切られる
46	(0.5)×0.5	0.1	長楕円形	調査区南西	(52)(90)	ＳＫ47を切る
47	1.8×0.8	0.25	長方形	調査区南西	(10)(46)	ＳＫ46に切られる
53	1.0×0.55	0.25	長方形	調査区中央東端	(63)(73)(81)(82)(83)(91)(92)(94)(97)	
54	0.65×(0.4)	0.25	円形	調査区中央東端	(55)	ＳＤ01に切られる
57	(0.7)×0.75	0.2	楕円形	調査区南西	(14)	ＳＫ43に切られる
69	1.1×0.9	0.7	楕円形	調査区中央東端		
70	(1.1)×(1.3)	0.4	隅丸方形	調査区中央北端	(27)	ＳＫ62に切られる
75	0.8×0.5	0.3	長楕円形	調査区中央東端	(8)(95)	ＳＫ43に切られる
81	(2.2)×1.0	0.25	長方形	調査区中央北	(7)(15)(18)(25)	

第3章　遺　物

今回の調査で出土した遺物には近世～近代の遺物が含まれ、このうち近世遺物には土師器（皿・鍋・炮烙・鉢）、土製品（ミニチュア茶釜）、陶器（擂鉢・皿・平灰・猪口・小碗・急須・土瓶・徳利・鉢・壺・甕）、染付磁器（猪口・碗・蓋物・鉢・皿・仏飯具）、青磁染付（椀・蓋物・鉢）、青磁（鉢）、白磁（皿）、瓦（軒丸瓦・鯱瓦）、銅銭（寛永通宝）がある。近代遺物には染付磁器（皿・蓋物・碗）、青磁（碗）、陶器（甕・壺）がある。遺物の出土数はコンテナ20箱であるが、この内図化したものは　111点（拓影３点を含む）を数える。以下では近世遺物の土師器・陶器・磁器・瓦・銅銭、近代遺物の磁器・陶器の順に報告する。

１．土師器・土製品

皿（１～８）出土した土師器皿はすべて小皿であるが、手づくねによって成形するもの（５・７・８）とロクロ成形後底部を糸切りする（１～４・６）２タイプがある。手づくね皿は外面の底体部の境が明瞭でなく、口縁部が歪むものがめだち、内面底部には不定方向のナデが観察される。底部糸切りの皿は内面が平滑で１・２・６は外面の底体部の境が明瞭である。糸切り痕跡は微細な同心円の渦が観察される。

炮烙（10～18）炮烙は小破片が多く全形を知ることができるものは少ない。図化できた破片から観察すると型造りによって成形された個体のみで占められていると判断される。10～14は底部の成形に凹型を使用し、口縁部を底部とは別個に粘土を積み上げて造るものである。15～18は型によって底部を成形し同時に口縁部を造りだしたものである。口縁部が断面三角形の縁帯となり、型造り部分との間の段差を削り取らずにそのまま残す。

両者とも底部は薄くケズリ調整し、口縁部内外面はヨコナデ調整する。

鉢（19）口径29.95cm、高さ12.4cmの鉢で厚い器壁をもち、口縁部を直角に折って上端面をつくる。

土製品（９）茶釜を模倣した土製品である。鍔を欠損するが内面にも窪みをもうけ、肩部には把手をわずかに表現する。

２．陶器

擂鉢（20～27）　丹波焼（20･21）と備前系（22～27）のものがある。丹波焼は斜め上方に立ち上がる体部が口縁部付近でやや外反気味になり、口縁部の縁帯を三角形に肥厚させるものである。外面には指頭痕跡が多数残り、底部はヘラケズリする。内面の櫛目は10本前後を単位として施されるが、単位ごとの櫛目の間にやや間隔が開く。口縁部内面はナデ調整する。

備前系の擂鉢は小破片が多く全形を知ることができるものはない。口縁部の観察によれば口縁部内面に突帯を持つもの（25）、口縁部内面に段を持つもの（22・24・26・27）、内面を大きくナデ、突帯や段を持たないもの（23）がある。櫛目はすべて密に入り、櫛目間に空白は認められない。

皿（28～36）　28～33は柿釉皿と呼ばれるもので、素焼きの生地に透明釉を施した個体である。底部には微細な糸切り痕跡が観察され、内面底部に鏡を持つ個体（２）もある。

34～36は伊賀・信楽焼の製品で36は受けのあるタイプである。淡黄色の生地に透明釉を施す、内面に灯芯を据えるための切り欠きを持つ。

乗燭（37～38） 37･38は信楽焼系の製品である。脚部内面を空洞にし、内面に灯芯置きのための切り欠きを持つ。

猪口（40）・**小碗**（41～45）40・41は肥前系の猪口である。42・43は同じく肥前系の製品であるが京焼を模倣したもので、42の高台内側には清水の刻印が認められ、43の内面には楼閣山水の絵付けが施される。44・45は萩焼ビラ掛け碗である。

蓋物(47～49) 47は鉄釉を掛けた製品で壺などの蓋と思われる。鉄釉と厚手の器肉が重厚感を持たせている製品である。48・49は急須や土瓶の蓋と考えられる。外面にイッチン掛けの草花文と思われる文様を施す。

急須・土瓶（50～52） 50は瀬戸系陶器の急須、51・52は土瓶ないし急須の破片である。いずれも器壁がうすく、50の外面には馬の目文が鉄絵で描かれる。

徳利（53）偏平で歪んだ体部をもつ徳利である。

鉢（46）備前系の小型鉢である。口径20.3cm、高さ7.25cmを測る。厚い器壁を持ち、外面底部をヘラ削りする。内面に粗い板ナデが観察され、斜め上方に立ち上がる体部を有する個体である。口縁部は端部が外反気味に丸く終える。

壺（54）備前系の小型壺である。厚手の器肉に、粘土紐痕跡が明瞭に残る個体である。

甕（104）水琴窟の共鳴具として使用された丹波焼の甕である。底部は大きく打ち欠いて使用していたと思われる。口縁端部を水平に厚肥させている。体部全体に褐色の鉄釉が掛けられ、肩部から体部に掛けて黒褐色の釉が流し掛けされる。体部やや上半には凹線文と波状文が施文されている。

3．染付磁器

猪口（59）口縁端部が外反するもので、外面に赤壁賦が描かれる。内面は口縁部に花文を描く。

碗（60～77）60～62・64・66～69は口径9.7～11.05cmのやや厚手のもので、底部から内湾ぎみに立ち上がる体部を持ち口縁部を丸く納めるもので、高台畳付は無釉である。いわゆるくらわんか手と呼ばれる一群で、総じて厚手の体部を持つ粗製品である。

60・66は外面に草花文を描き、61は外面に２重網手文、内面には太く雑な網手文を描く。62は外面に草花文、高台に回線、高台内に記号様の銘を持つ。64は外面に丸文を描く。66は外面に草花文と高台周辺に回線、67は外面に笹竹文と格子文、内面には形の崩れた菊文と２重圏線、68は外面草花文と高台周辺に回線。69は内面に形の崩れた菊文と圏線が描かれる。

63・70・71は小型の丸碗でやや直線的に立ち上がる体部と尖り気味に終える口縁部を持つ一群である。70は見込みに寿字文、71にも見込みに雲文を描く。

72～75は半筒茶碗の一群である。72は外面によろけ鎬を描き高台側面に回線を持つ。73・74は同形・同文で外面に型紙摺の花文を描いている。77は蓋の付くタイプの碗である。高台がハの字に踏ん張るもので外面体部に松枝文、下部に雷文を描く。内面にも松文と圏線を施す。65は端反碗である。区画線で区画された各々の中に斜格子文と梅文と思われる図柄を施文する。76は広東碗である。見込みに昆虫文の変形したものと圏線、外面は鎬文に扇子をあしらった文様を描く。

蓋物(79～81)　いずれも碗の蓋である。同一器形で上部に輪状の把手を付ける。79は内面に3単位の亀甲文、外面は全体を亀甲文で飾る。80は見込みに源氏香文、口縁部内面には斜格子文、外面には雪輪文を描いている。81は内面に捩じり花文と圏線、口縁部に四方襷文、外面にコンニャク印判で桐の葉文の形が崩れたものをスタンプする。

鉢（82・83）両者とも小型の鉢で、口縁部の破片である。82は外面に花卉文、下端に蓮華文を描く、内面の口縁部には四方襷文が入る。83は外面に窓絵を描き内部に竹、外部には草花文を描いている。

皿（84～90）84は型押皿である、平面方形で四隅に稜が入る。全体に濃い青色の釉調で見込みの双鳥の部分のみに白濁釉が掛けられる。瀬戸の本業焼の製品と考えられる。

85は内面に五弁花、高台内面に渦福の銘、内面体部に菊文、外面体部に唐草文が描かれる。86は内面体部に亀甲文が描かれ外面は無文である。

87は外面と内面の見込みにコンニャク印判の菊文を押印し、見込みにはさらに2重の圏線を描く。

88は内面見込みに帆掛け舟の記号化したものと圏線、体部は鳥居文と山水文を組み合わせたような文様を描く。89は内面に雲文を描き外面体部に唐草文を描く。90は内面に楼閣山水を描き、外面には高台内面に記号様の銘、体部に唐草文を描く。

仏飯具（39）1点を図化した。外面に草花文を描く。

4．青磁染付・青磁・白磁

青磁染付は外面が青磁、内面が染付になる一群である。18世紀後半から多くなるもので、今回の調査でも一定量が出土している。

青磁染付碗（91）はすべて内面見込みに五弁花と二重圏線を描き、口縁内面に四方襷文を施す。91は小型の筒茶碗、他は腰の張った碗形の個体である。92・94の底部高台内には角福、93の底部高台内には意味不明の文字が認められる。

青磁染付蓋物（95～97）は碗の蓋と考えられる一群で、輪状のつまみを持つ。95の内面には五弁花と二重圏線、外面把手内には意味不明のくずし文字銘が認められ、口縁内面には四方襷文が描かれる。96では内面に波濤文と二重圏線。97は内面に形の崩れた五弁花と二重圏線、さらに口縁部には四方襷文が施され、外面把手内には角福が認められる。

青磁染付鉢（98）高台内面が蛇の目凹型高台になるものである。高台内面には角福、内面には松文が描かれ、見込みに圏線、口縁部に四方襷の縁線が施され、内面の加飾が華やかな個体である。

青磁鉢（99）三田青磁の鉢である。外面に算木文を型押し、口縁下に円形の付文を持つ。口縁部は内側に折り込み体部が内弯気味に立ち上がる個体である。底部にはおそらく3方に獣足をつけていたと思われる。

白磁皿（101）角張った高台とやや厚手の器壁を持つ個体で、見込みは露胎となる。

5．瓦

掲載した瓦は55・57・58は軒丸瓦、56は鯱瓦の破片である。55は「東□寺」の文字を刻む。56の鯱瓦は鰭部の小破片である。端部に鱗を線刻し、縦に鯱の鰭を線刻する。

6．銅銭

掲載したものはすべて寛永通宝である。

7．近代遺物

105は染付の蓋、高台内に「味仙」の朱書きの銘が観察され、外面は濃みが施される。方形に縁取りした内部に富士に帆掛け舟、鳥・樹木に橋などの絵柄が描かれる。106は皿で内面見込みには幾何学文、さらに周囲を囲む区画線の内部には蝶・菊水文・吉祥文・花文などが描かれる。105・106は水琴窟1の共鳴具として108の底部に据えられていたものである。108は丹波焼の醤油瓶である。水琴窟1に据えられたもので底部を打ち欠いて使用する。体部下端に直径1.6cmの円孔があり、醤油の注ぎ口として使われたと思われる。

109・110は包含層遺物であるがいずれも碗である。109は見込みに松枝文が描かれる。110は花弁を模して口縁部に凹凸をつける。107は蓋が付く丹波焼の壺である。小さく立ち上がる口縁部と肩が張りやや大きめの底部を持つ個体である。口径10.3cm、高さ11.35cmの小型品で外面に鉄釉を施し景色を意識した釉垂れが観察される。

8．遺物の様相

今回出土した遺物は概ね18世紀後半～19世紀前半の遺物群であるが、調査によってこの時期以降に調査地点周辺の町屋が大きく発展したことを明らかにした。最後に遺物群の様相について少し述べる。

灯火具としての皿は土師器と陶器のものがある。土師器の皿には手づくねのもの、ロクロを使用するものがあり、陶器には柿釉皿と呼ばれる一群が含まれていた。また、陶器の灯火具では平灰や内面に灯芯をのせる受けを伴うものが認められるなどバリエーションがある。土師器の製品については18世紀代、陶器のものについては18世紀末から19世紀初頭に出現しているとされる。

焙烙は18世紀前半まで出土する底型のものと、18世紀後半から盛行する型造りのものがある。

擂鉢はすべて陶器製で丹波焼のものと、備前系のものがある。丹波焼のものは18世紀前半に登場するとされるものであるが、丹波焼の擂鉢全般には18世紀の中頃に伊丹郷町では衰退してゆくとされており、備前系のものは18世紀後半に登場するものである。以上から、これらの擂鉢の様相は18世紀代のものと考えてよいだろう。

碗には陶器のものと磁器のものがある。陶器には関西系、肥前系、萩焼などがある。磁器は肥前系（波佐見焼が大半を占める）、瀬戸系がある。磁器のものの大半はいわゆるくらわんか茶碗とよばれるものが多く、つづいて半筒茶碗、丸碗、広東碗、端反碗等がある。これらの製品はすべて日常に使用される雑器の類である。時期はくらわんか茶碗の他に、広東碗、端反碗などの後出の碗が混在して出土しているので概ね18世紀後半から19世紀前半頃の一群といえよう。

以上のべた通り、今回出土した遺物群のうち丹波焼擂鉢や染付磁器、土師器の幾つかは18世紀前半に焼成された可能性もある遺物群であるが、他の大半の遺物群は18世紀後半から19世紀前半に多く出土するものであるため、これらの遺物の廃棄の年代は18世紀後半から19世紀前半と捉えて問題がなさそうである。

第4章　まとめ

今回の調査は伊丹飛行場線に関わる最後の調査で、この調査をもって本路線の有岡城跡・伊丹郷町の調査が終了した。また、周辺の飛行場線の成果については「有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ」で既に報告がなされたが、今回の調査地点はこの第99次調査の西側、第75次調査の東側に挟まれた地点である。

第99次・75次の両調査では一部に17～18世紀代前半の遺構も検出できたが、大多数の遺構は18世紀後半～19世紀前半以降のものであった。このことは今回の調査成果とも一致しており、第150次調査でも18世紀代の遺物は少なからず認められたものの大半の遺構は18世紀後半以降に帰属する。

以下、第150次調査の個々について概要をまとめると、遺構には①江戸期と②明治期以降の２時期がある。江戸期の遺構には埋桶や貯蔵穴・長方形焼土土坑・竈など多彩なものが見られ、明治期以降の遺構には水琴窟やゴミ穴などが認められた。特に、明治期には屋敷の建て替えに伴って廃材やゴミを敷地内で処理した様子が明らかになった。また、この時期の遺構では水琴窟が完存していたことや、便所が屋敷の北西隅に造られ何度かの改修を経ていることなどがたどれた。この便所の最後のものは漆喰による大型の便層で、現代まで使用されたものである。

江戸期の遺構では18世紀後半～19世紀初頭と思われる長方形焼土土坑（ＳＫ32・33・34・35）の検出から、この時期に火災によって敷地が整地され、屋敷の建替えがおこなわれたことが明らかになった。この時期に伊丹郷町で発生した火災には「有岡庄年代秘記」に記載された明和３年（1766）の火事があるが、あるいはこの時の火災ではないかと思われる。また、周囲の埋桶群は明らかに焼土土坑を切り込んでおり、屋敷建替え後に据えられた遺構であることが明らかである。さらに、この埋桶群と埋土の状況が酷似する遺構が多いことから、建替え後に遺構が激増していると推定される。遺物についても前述のとおりこの時期のものが大多数を占め、江戸期後半になって周辺の宅地化が進んだことを推測させる。この他、この時期の遺構には屋敷の北東に集中する埋桶と方形土坑の一群が特徴的で、この一角は裏庭のような箇所に当たると推測される。

屋敷の建物については礎石構造の建物が南の道路に面して検出された。この建物は既述のとおり現在の建物の基礎石に使用されたもので、総ての礎石が原位置を保つものかどうかは疑わしい。このため構造については疑わしいが、先の貯蔵遺構の集中箇所と礎石の分布から考えると、建物は調査区の南半分に限定されていることが確実で、この範囲が建物敷地であることは江戸期以降現代に至るまで大きく変化していないようである。（但し、現代の屋敷では南が店棚、北東が裏庭であることに変わりはないが、昭和63年の航空写真によれば北西にも建物が置かれていることが知れ、この点は江戸期と異なるようである。）

以上、18世紀後半以降の町家について述べた。しかし、当地では柳沢吉保領伊丹郷町絵図によれば元禄７年（1694年）には既に二郎衛門が居住したことが知られ、17世紀後半には宅地となっていたことが明らかである。たしかに、遺物の中には18世紀代のものが少なからず認められるため、恐らく町家遺構の存在は疑いのないものであろう。従って、この段階まで確実に逆上れる遺構が皆無なのは18世紀後半の町家建て替えに伴う土砂等の移動が大きな原因ではないだろうか。また、この現象は他の調査区においても既に報告のとおり大同小異で、18世紀後半の建物の建替えが大規模であったことを推測させる。

屋敷の範囲については既に前述の報告書によって考察が行われ、今回調査の地点については東側が第99次調査の溝１・２（図版121）、西側が第75次調査の溝５が境となることが元禄絵図などとの比較から知られている。従って、現代の敷地は江戸期よりやや狭くなったことになる。また、北側についても、両隣と異なって調査区のさらに北側に延びて広いことが知られ、現代はやはり調査区の範囲に縮小されている。建物の範囲は前述のとおり南側に限定されるようであるが、背後には長く二郎衛門の敷地が延びていたようである。東側の敷地境の溝は第150次調査でも一部現代のものが検出されている。最終的にはコンクリート構造のものとなるが、その前は石組側溝（SD01）であったようで、コンクリートの下には石組みが残されていた。また、第99次調査区溝１との間は幅が１ｍ程あるがこの空間は西に敷地が縮小したか、裏路地が存在したかのどちらかであろう。

以上のとおり、第150次調査は周囲の既往調査の成果と大きく変化はなく、これらの成果を補強する調査であると評価づけできることがわかった。また、江戸期の屋敷地については現在のものと配置に大きな変化は無いが、当時の敷地規模は周囲に広がっていたことも判明した。

第3表　出土遺物観察表

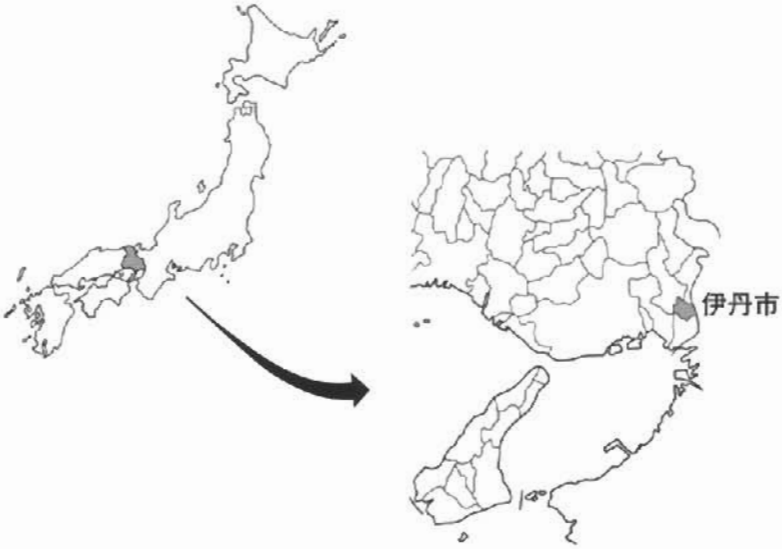
No	器種	出土場所	法量(単位cm)			備考
			口径	高さ	底径	
1	土師器皿	包含層	8.00	1.20	—	糸切り皿
2	土師器皿	SK41	6.05	1.30	—	糸切り皿
3	土師器皿	SK41	6.40	1.40	—	糸切り皿
4	土師器皿	SK41	6.80	1.20	3.50	糸切り皿
5	土師器皿	SK41	7.20	1.50	—	手づくね皿
6	土師器皿	SK38	7.60	1.70	4.55	糸切り皿
7	土師器皿	SK81	7.50	1.70	—	手づくね皿
8	土師器皿	SK75	9.80	2.00	—	手づくね皿
9	土製品茶釜	SK62	1.65	2.30	1.55	ﾐﾆﾁｭｱ
10	土師器炮烙	包含層	20.30	7.25	14.30	口縁部紐造り
11	土師器炮烙	SK45	24.00	4.70	24.00	口縁部紐造り
12	土師器炮烙	SK17	27.90	4.75		口縁部紐造り
13	土師器炮烙	SK04	24.95	7.60		口縁部紐造り
14	土師器炮烙	SK57	34.00	4.80	—	口縁部紐造り
15	土師器炮烙	SK81	27.55	4.45	—	口縁部・底部同時成形
16	土師器炮烙	SK41	30.70	2.55	—	口縁部・底部同時成形
17	土師器炮烙	SK71	31.30	4.65	—	口縁部・底部同時成形
18	土師器炮烙	SK81	38.60	4.45	—	—
19	土師器鉢	SK41	29.95	12.40	22.70	—
20	擂鉢	SK34	36.30	13.20	16.20	丹波焼
21	擂鉢	SK45	35.00	14.30	15.60	丹波焼
22	擂鉢	SK38	38.50	11.40	—	備前系
23	擂鉢	SK35	39.20	(8.70)	—	備前系
24	擂鉢	SK68	34.60	(5.80)	—	備前系
25	擂鉢	SK81	38.90	(3.85)	—	備前系
26	擂鉢	SK44	39.70	23.30	—	備前系
27	擂鉢	SK70	—	(5.92)	—	備前系
28	施釉陶器皿	SK48	6.95	3.10	—	柿釉皿
29	施釉陶器皿	SK62	5.30	0.80	—	柿釉皿
30	施釉陶器皿	SK62	5.90	0.70	—	柿釉皿
31	施釉陶器皿	包含層	5.20	0.70	—	柿釉皿
32	施釉陶器皿	包含層	5.80	1.00	—	柿釉皿
33	施釉陶器皿	包含層	6.10	1.10	—	柿釉皿
34	施釉陶器皿	包含層	7.40	1.60	3.10	瀬戸施釉皿
35	施釉陶器皿	SK62	8.40	1.50	—	瀬戸施釉皿
36	施釉陶器灯明皿	SK55	7.00	1.50	3.20	瀬戸施釉皿
37	陶器平灰	SK35	3.05	3.70	4.10	瀬戸施釉皿
38	陶器平灰	包含層	7.15	5.15	5.35	瀬戸施釉皿
39	磁器仏飯具	SK17	5.90	5.28	3.52	肥前系
40	陶器猪口	SK62	6.20	3.70	3.30	肥前系

No	器種	出土場所	法量(単位cm)			備考
			口径	高さ	底径	
41	陶器猪口	SK65	—	2.85	4.20	肥前系
42	陶器小碗	包含層	—	2.70	4.85	京焼写し肥前系
43	陶器小碗	SK32	—	2.30	4.70	京焼写し肥前系
44	萩焼小碗	包含層	8.20	3.70	—	萩焼
45	萩焼小碗	SK48	10.60	3.80	4.00	萩焼
46	陶器鉢	SK47	20.30	7.25	14.30	備前焼
47	陶器蓋	SK30	8.40	2.60	—	—
48	陶器蓋	SK33	7.80	1.62	3.50	—
49	陶器蓋	SK55	9.15	4.20	—	関西系陶器
50	陶器急須	SK62	11.30	11.80	—	関西系陶器
51	陶器急須	SK81	11.00	3.50	—	関西系陶器
52	陶器急須	SK46	—	7.40	9.45	関西系陶器
53	陶器徳利	SK30	—	9.80	5.70	不明
54	陶器壺	SK35	12.50	15.30	—	備前焼
55	軒丸瓦	SK54	—	—	—	
56	鯱瓦	SK41	—	—	—	
57	軒丸瓦	SK48	—	—	—	
58	軒丸瓦	SK55	—	—	—	
59	染付磁器猪口	SK65	6.00	(2.55)	—	肥前系
60	染付磁器碗	SK39	9.70	5.20	4.20	肥前系
61	染付磁器碗	SK71	9.90	3.80	—	
62	染付磁器碗	SK39	—	4.05	4.10	肥前系
63	染付磁器碗	SK53	8.30	4.50	3.00	肥前系
64	染付磁器碗	SK62	12.60	3.90	—	肥前系
65	染付磁器碗	SK48	10.90	4.20	—	肥前系
66	染付磁器碗	SK41	11.05	5.80	(4.40)	肥前系
67	染付磁器碗	SK38	10.70	5.45	4.25	肥前系
68	染付磁器碗	SK32	—	2.45	3.50	肥前系
69	染付磁器碗	SK66	—	2.90	4.05	肥前系
70	染付磁器碗	SK33	9.90	4.50	3.60	肥前系
71	染付磁器碗	SK35	9.25	4.95	3.70	肥前系
72	染付磁器碗	SK48	7.70	5.60	4.50	肥前系
73	染付磁器碗	SK53	8.45	5.90	3.55	肥前系
74	染付磁器碗	SK41	8.40	5.70	3.80	肥前系
75	染付磁器碗	SK48	7.10	5.05	3.60	肥前系
76	染付磁器碗	SD01	9.80	5.90	4.55	肥前系
77	染付磁器碗	SK38	10.80	6.10	4.55	肥前系
78	染付磁器碗	SK30	—	5.50	6.50	肥前系
79	染付磁器蓋	SK48	9.65	2.80	3.80	肥前系
80	染付磁器蓋	SK38	9.70	3.00	3.60	肥前系

No	器種	出土場所	法量(単位cm)			備考
			口径	高さ	底径	
81	染付磁器蓋	包含層	10.10	2.95	—	肥前系
82	染付磁器鉢	SK53	14.50	5.70	—	肥前系
83	染付磁器鉢	SK53	22.60	5.95	—	肥前系
84	染付磁器皿	SK62	7.60	2.50	3.80	肥前系
85	染付磁器皿	SK38	13.40	3.90	7.80	肥前系
86	染付磁器皿	SK33	15.00	4.10	10.40	肥前系
87	染付磁器皿	SK71	8.90	3.40	3.40	肥前系
88	染付磁器皿	SK08	9.80	2.50	4.40	肥前系
89	染付磁器皿	SK71	17.70	3.25	9.90	肥前系
90	染付磁器皿	SK46	20.20	2.45	11.40	肥前系
91	青磁染付碗	SK53	7.30	6.10	3.45	肥前系
92	青磁染付碗	SK53	—	2.90	4.10	肥前系
93	青磁染付碗	SK41	10.65	6.00	4.35	肥前系
94	青磁染付碗	SK53	11.00	6.15	4.00	肥前系
95	青磁染付蓋	SK75	9.70	3.20	3.80	肥前系
96	青磁染付蓋	SK48	10.60	3.80	4.00	肥前系
97	青磁染付蓋	SK53	9.80	3.05	4.20	肥前系
98	青磁染付鉢	SK41	16.30	7.25	9.20	肥前系
99	青磁香炉	SK62	21.00	7.10	16.00	肥前系
100	青磁蓋	SK38	9.95	3.20	4.20	肥前系
101	白磁皿	SK71	9.95	2.80	3.10	肥前系
102	白磁猪口	SK45	6.55	3.70	2.80	肥前系
103	白磁碗	SK17	13.55	4.85	4.35	肥前系
104	丹波焼甕	SK81	28.55	39.15	19.95	丹波焼
105	染付磁器蓋	水琴窟01	10.60	2.85	4.15	不明
106	染付磁器皿	水琴窟01	12.95	2.05	7.75	不明
107	丹波焼壺	SK43	10.30	11.35	8.70	
108	丹波焼醤油瓶	水琴窟01	7.45	43.15	27.75	
109	青磁	包含層	—	3.70	—	不明
110	青磁	SK05	12.18	5.12	4.60	不明

図版

図版一　有岡城跡・伊丹郷町の位置

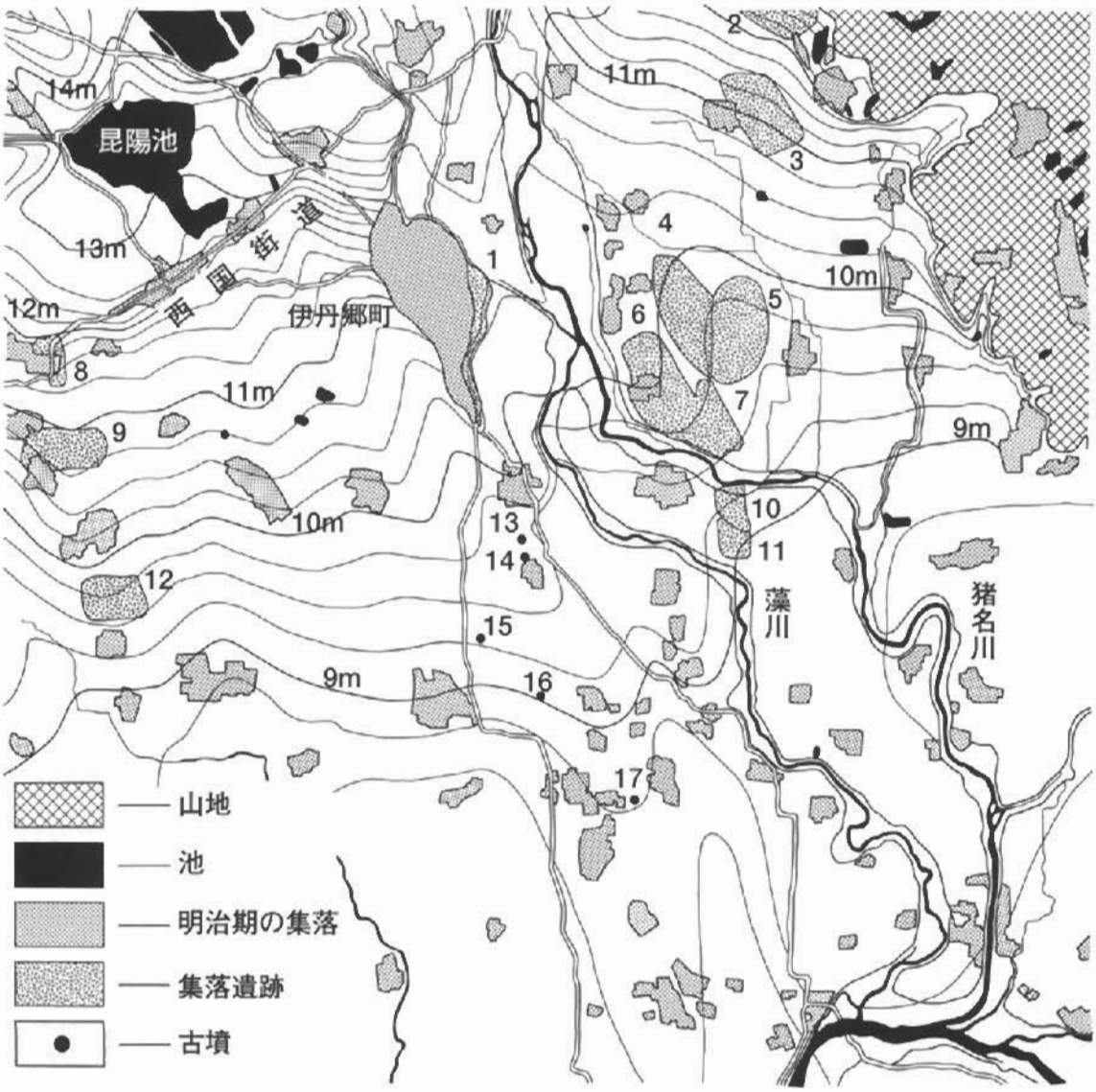


1. 114次調査地点
2. 150次調査地点
3. 有岡城主郭跡
4. 伊丹郷町遺跡
5. 有岡城岸ノ砦跡
6. 大鹿遺跡
7. 高台遺跡台第3地点
8. 高台遺跡台第2地点
9. 昆陽林田遺跡
10. 南野出口遺跡
11. 南野遺跡
12. 御願塚遺跡第1地点
13. 御願塚遺跡第2地点
14. 御願塚遺跡第3地点
15. 御願塚古墳
16. 平松町遺跡
17. 南本町遺跡
18. 松原遺跡
19. 西桑津遺跡
20. 森本居館跡
21. 口酒井遺跡
22. 森本遺跡

0　1km

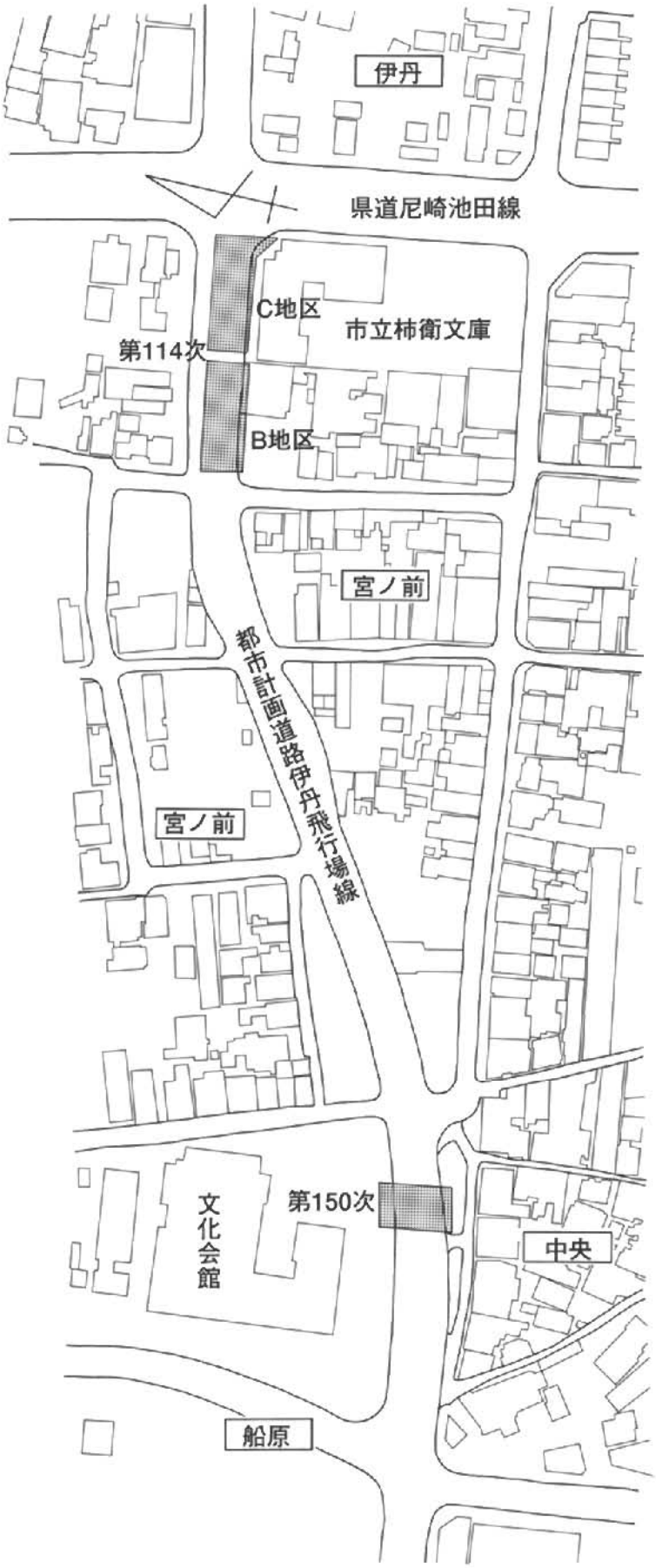
図版二　有岡城跡・伊丹郷町周辺地形環境図

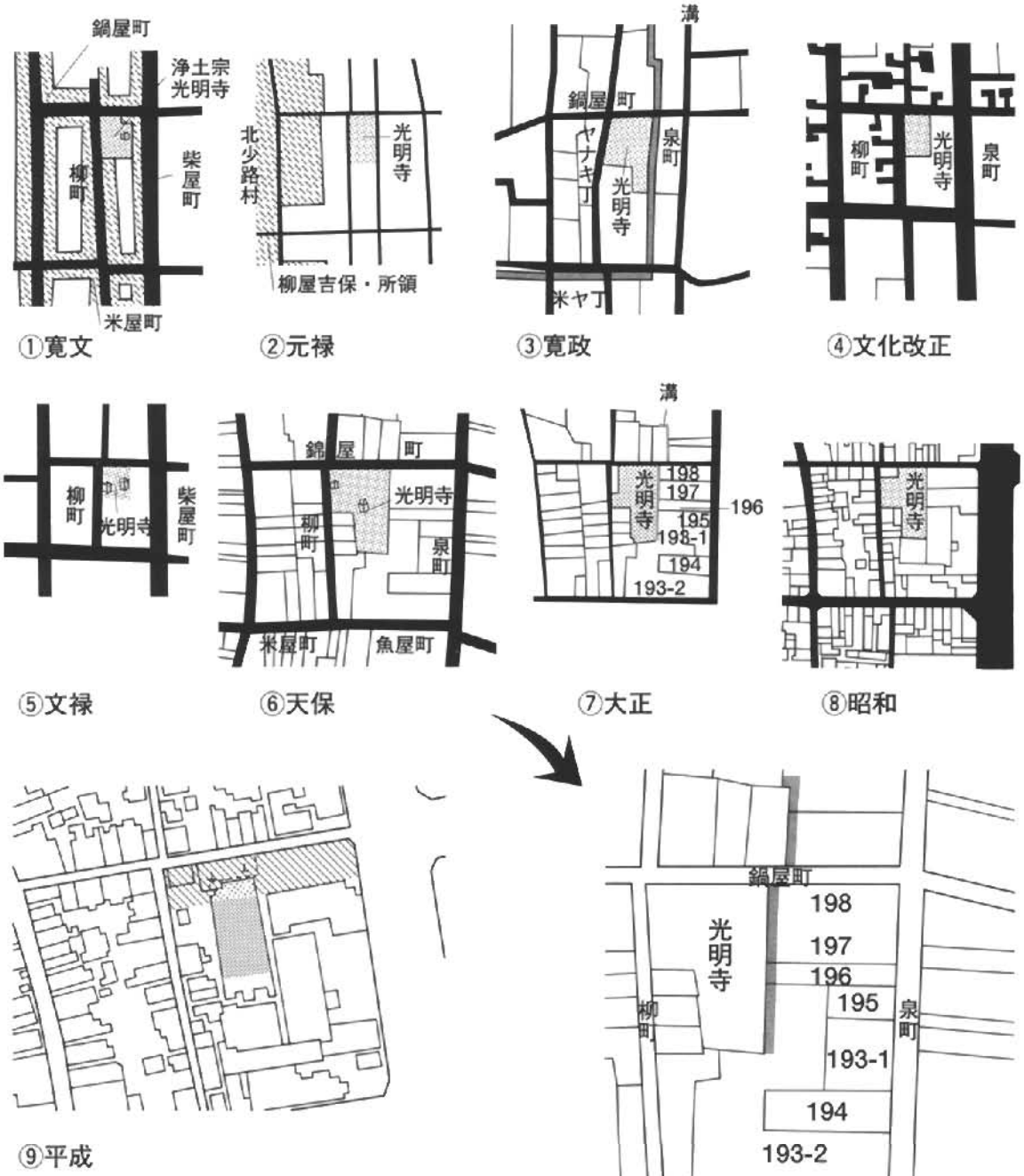
図版三　有岡城跡・伊丹郷町周辺等高線図



1. 伊丹郷町遺跡
2. 宮の前遺跡
3. 蛍池西遺跡
4. 森本遺跡
5. 岩屋遺跡
6. 口酒井遺跡
7. 田能遺跡
8. 昆陽寺境内遺跡
9. 山田遺跡
10. 田能高田遺跡
11. 四ノ坪遺跡
12. 武庫庄遺跡
13. 大塚山古墳
14. 南清水古墳
15. 池田山古墳
16. 御園古墳
17. 伊居太古墳

図版四　飛行場線と調査地区

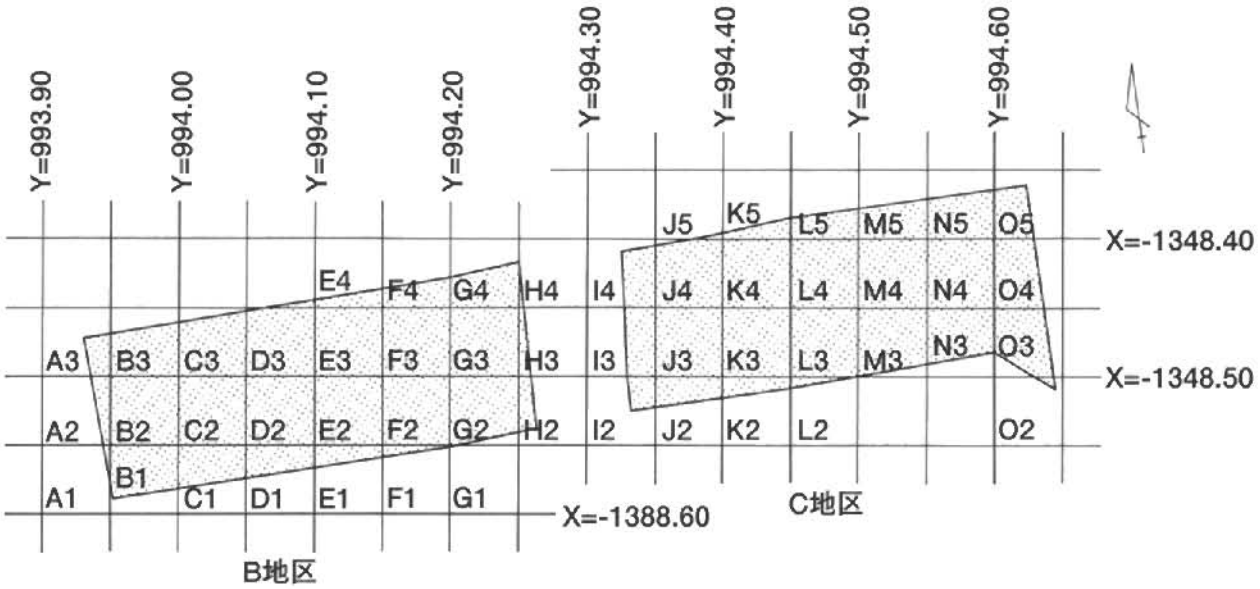


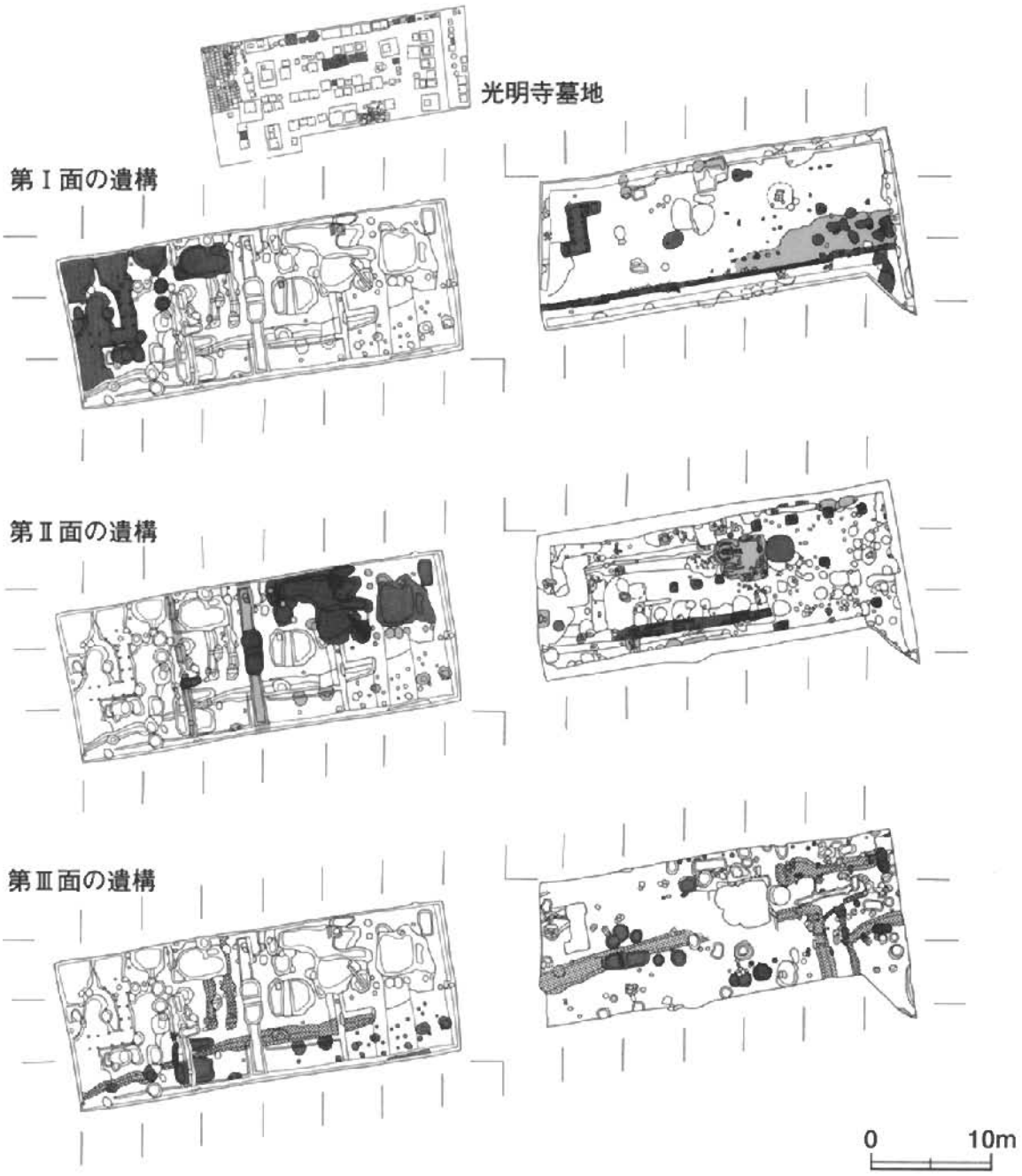


参考文献

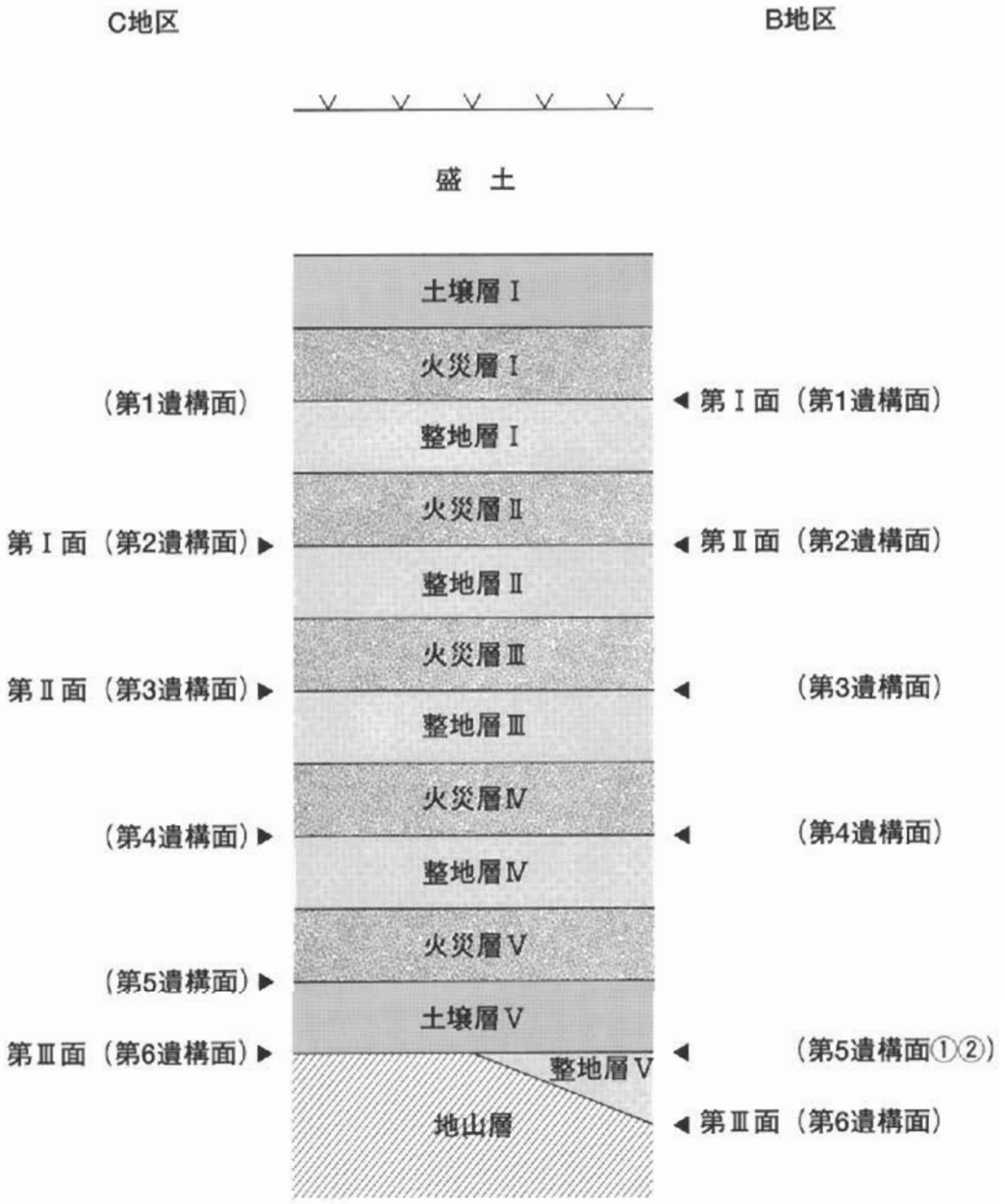
①「寛文9年 伊丹郷町絵図」
②「元禄7年 柳沢吉保領伊丹郷町絵図」
③「寛政8年 伊丹細見図」
④「文化改正 伊丹之図」
⑤「文禄絵図写し」 文禄伊丹之図
⑥「天保15年 伊丹郷町分間絵図」
⑦「大正4年 伊丹町　地籍図 謄本」
⑧「兵庫県近世社寺建築緊急調表―1次調査―」1978年（伊丹市光明寺）
⑨ 伊丹市埋蔵文化財調査報告書第15集「伊丹市埋蔵文化財調査 概報Ⅰ」1992年
⑩「大正15年 伊丹郷町文間絵図」・「大正15年 伊丹町　地籍図 謄本」

図版六　第一一四次調査B・C地区の遺構と調査区割り

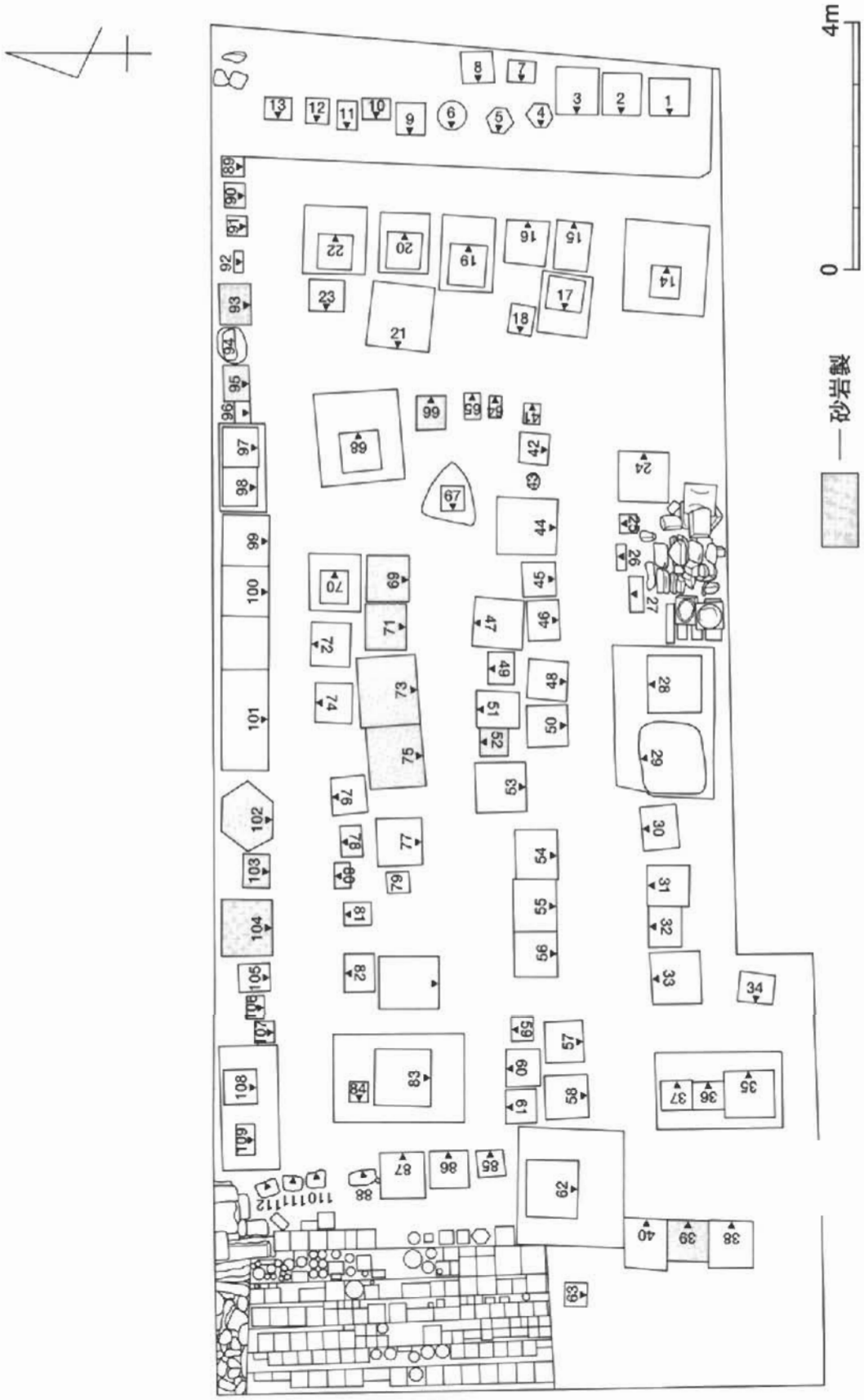


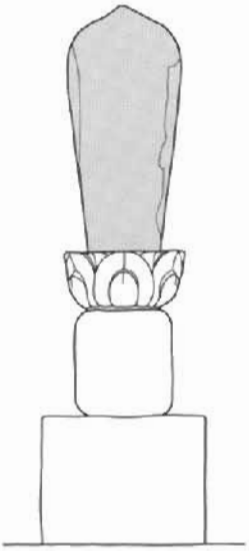


図版七　第一一四次調査B・C地区基本土層模式図

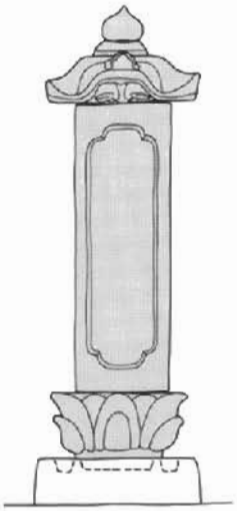


図版八　第一一四次調査光明寺墓地と墓石

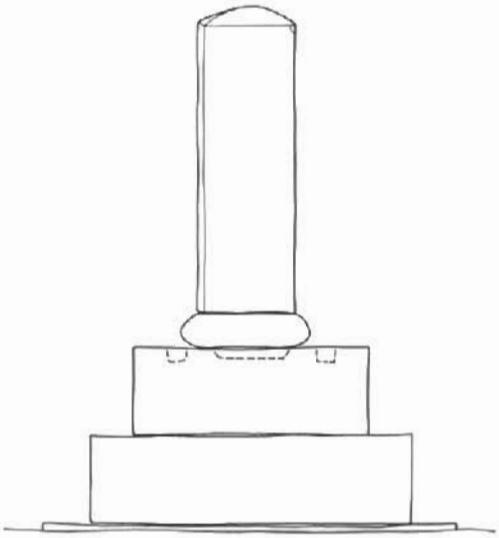




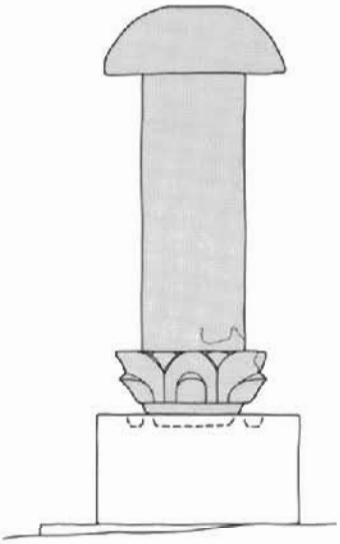
10　享保16年（1731）



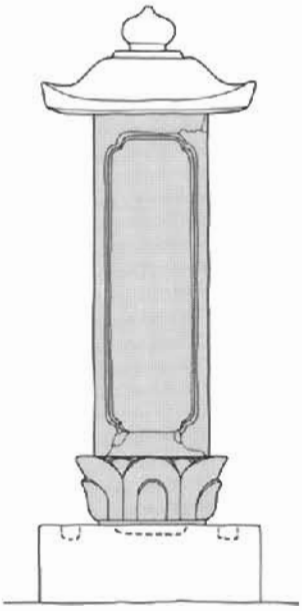
52　元文4年（1739）



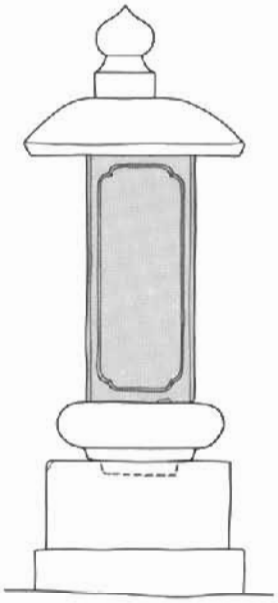
73　延享元年（1744）



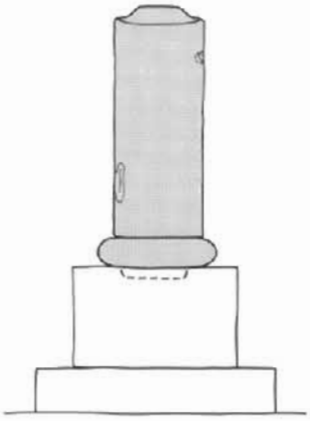
69　寛延2年（1749）



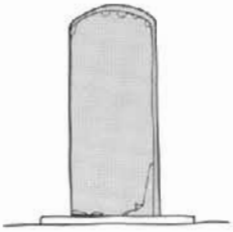
71　宝暦8年（1758）



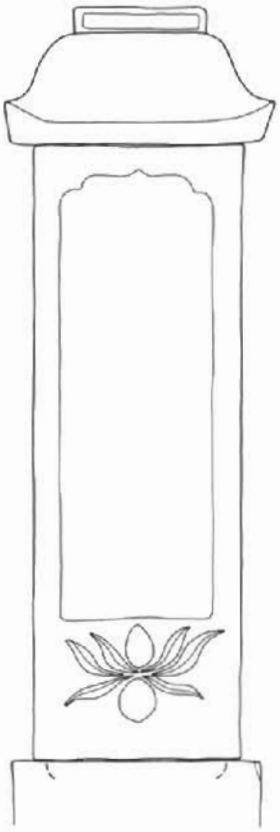
66　天明2年（1782）



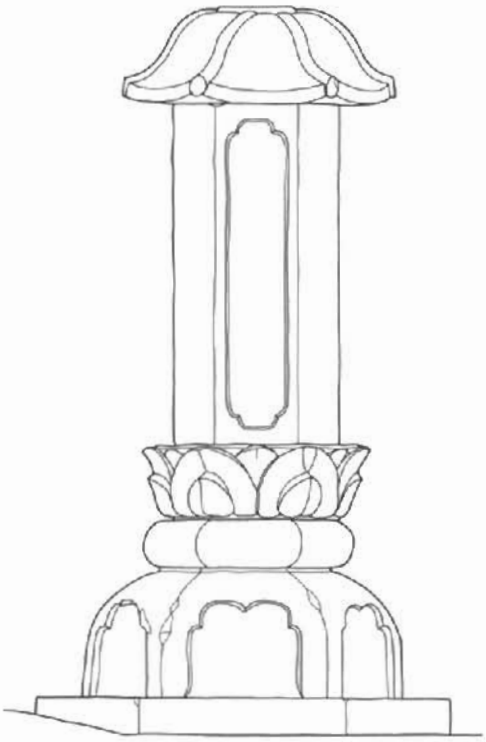
39　寛政9年（1797）



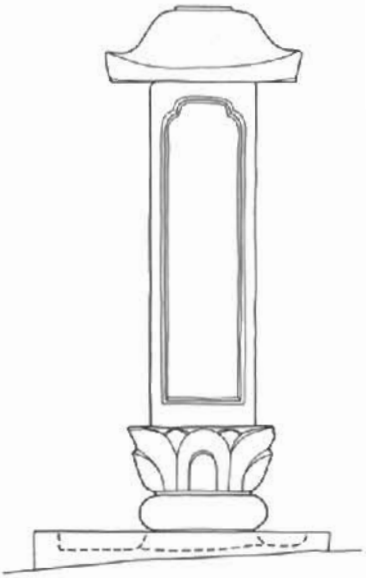
90　天保2年（1731）



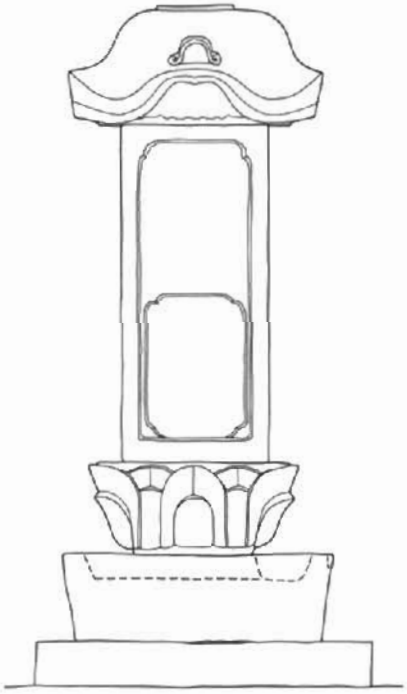
103　貞享元年（1684）



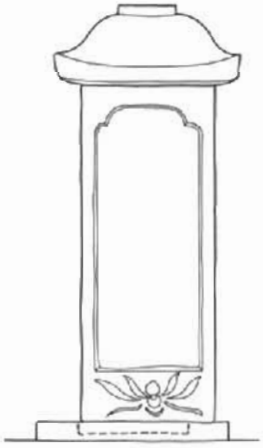
102　元禄7年（1694）



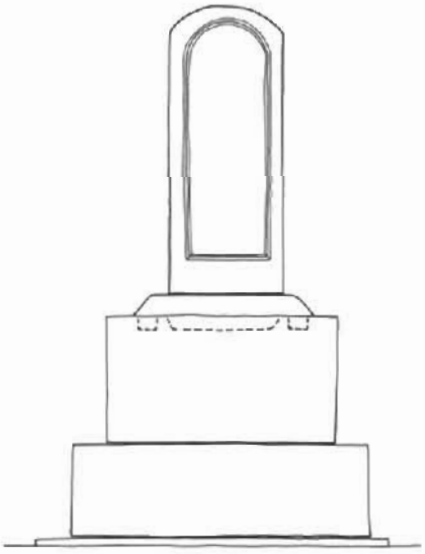
93　元禄11年（1698）



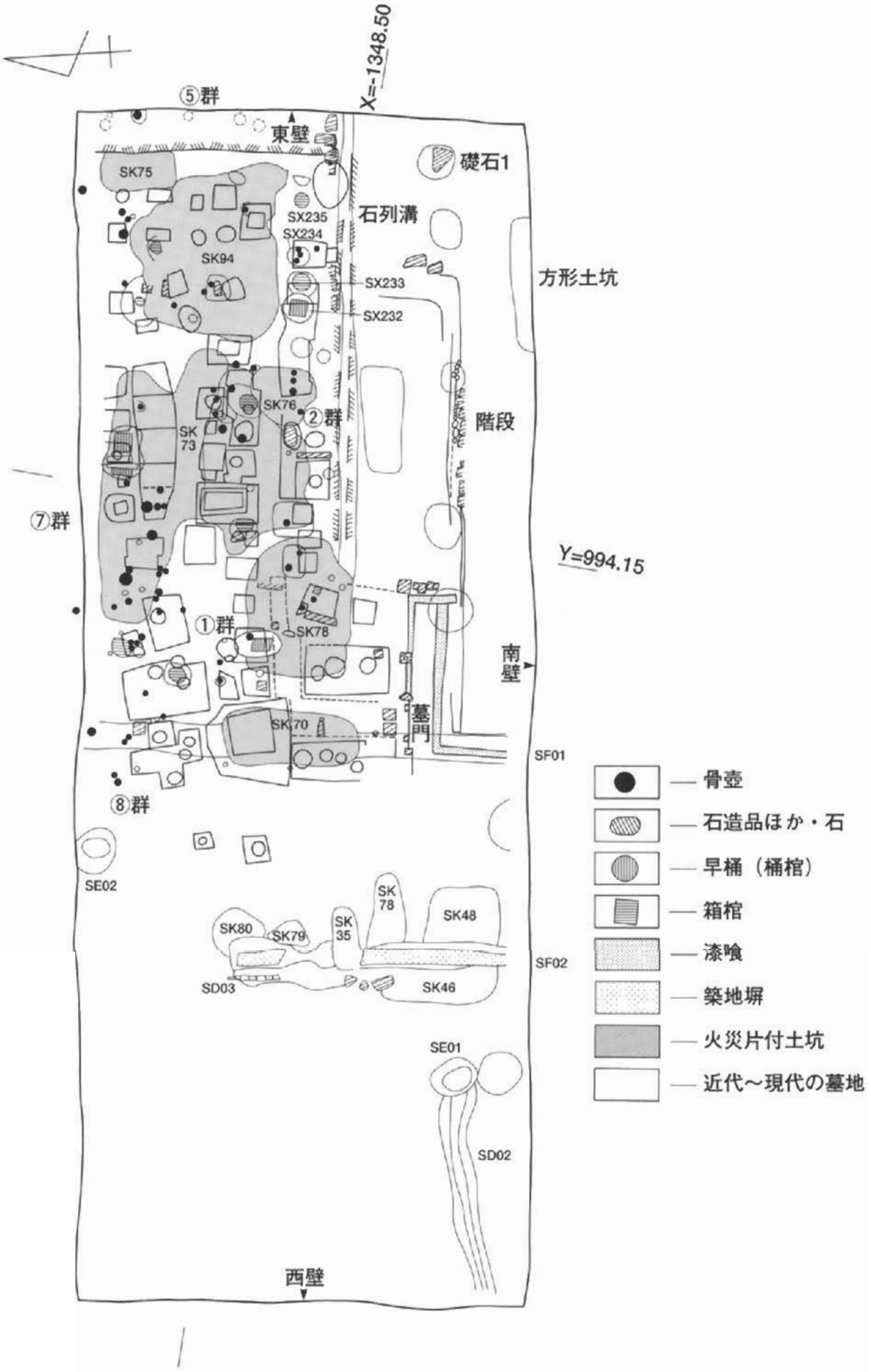
104　宝永2年（1705）

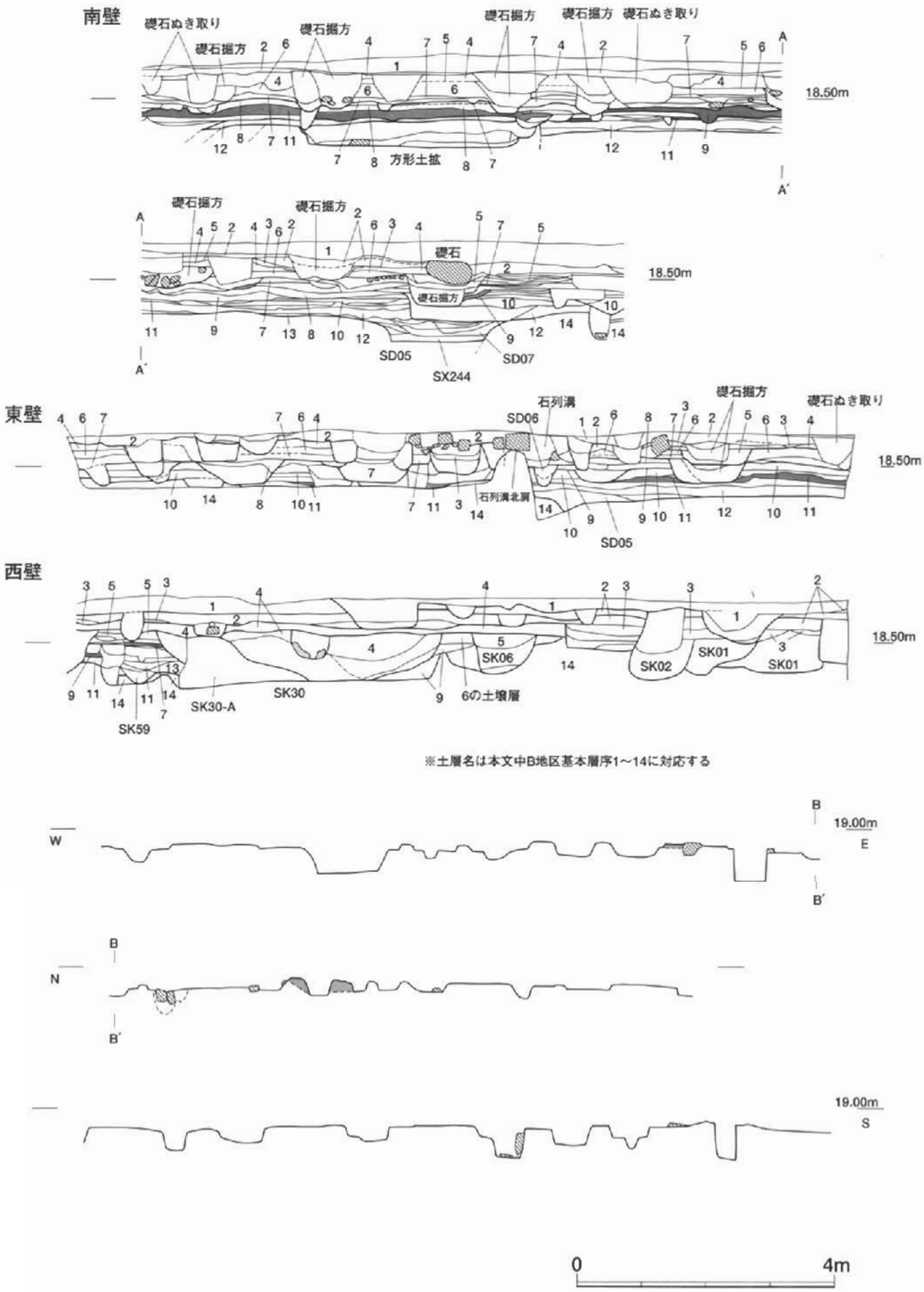


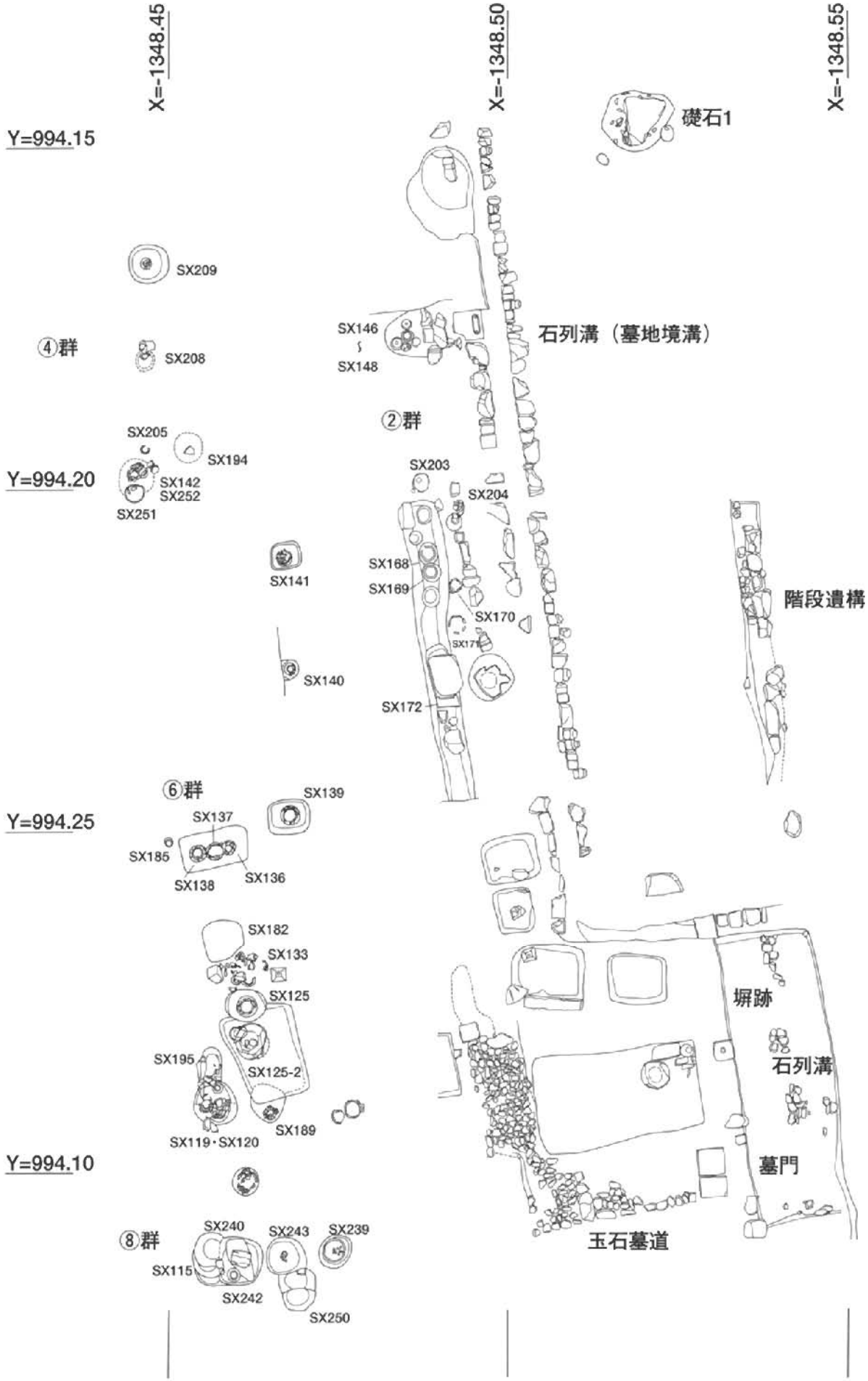
95　宝永2年（1705）

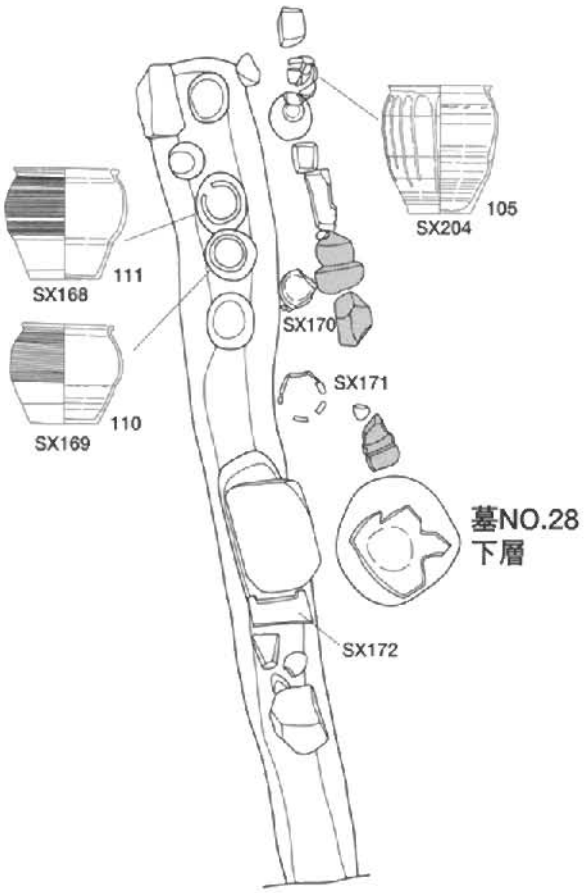


75　享保10年（1725）


X=-1348.50
⑤群
東壁
礎石1
SK75
SX235
SX234
石列溝
SK94
SX233
SX232
方形土坑
SK76
②群
SK
73
階段
⑦群
Y=994.15
①群
SK78
南
壁
墓
門
SK70
SF01
⑧群
SE02
SK
78
SK48
SK80
SK79
SK
35
SF02
SD03
SK46
SE01
SD02
西壁
骨壺
石造品ほか・石
早桶（桶棺）
箱棺
漆喰
築地塀
火災片付土坑
近代～現代の墓地

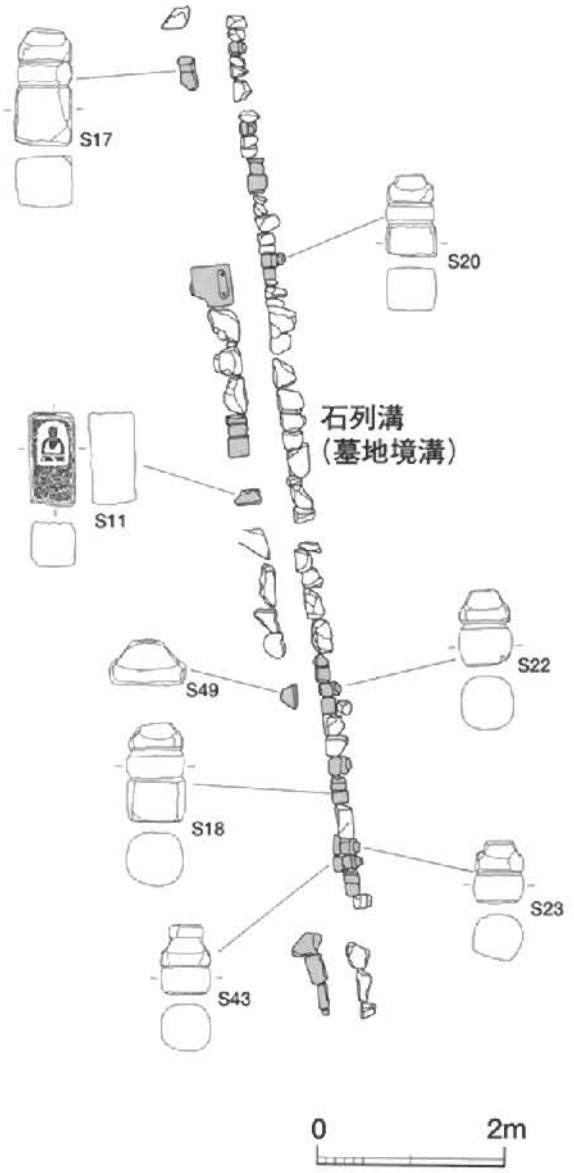

南壁
礎石ぬき取り
礎石掘方
礎石掘方
礎石掘方
礎石掘方
礎石ぬき取り
方形土拡
18.50m
礎石掘方
礎石掘方
礎石
礎石掘方
SD05
SX244
SD07
18.50m
東壁
石列溝
SD06
礎石掘方
礎石ぬき取り
石列溝北肩
SD05
18.50m
西壁
SK06
SK02
SK01
SK01
SK30
SK30-A
SK59
6の土壌層
18.50m
※土層名は本文中B地区基本層序1～14に対応する
W
E
19.00m
N
S
19.00m
0
4m

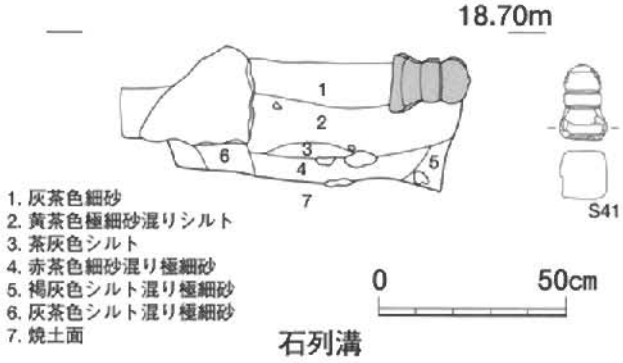

X=-1348.45
X=-1348.50
X=-1348.55
Y=994.15
Y=994.20
Y=994.25
Y=994.10
礎石1
SX209
④群
SX208
SX146
SX148
石列溝（墓地境溝）
②群
SX205
SX194
SX142
SX252
SX251
SX203
SX204
SX141
SX168
SX169
SX170
SX171
SX140
SX172
階段遺構
⑥群
SX139
SX137
SX185
SX138
SX136
SX182
SX133
SX125
SX195
SX125-2
SX189
SX119・SX120
塀跡
石列溝
墓門
玉石墓道
⑧群
SX240
SX243
SX239
SX115
SX242
SX250



②群　墓群（部分）

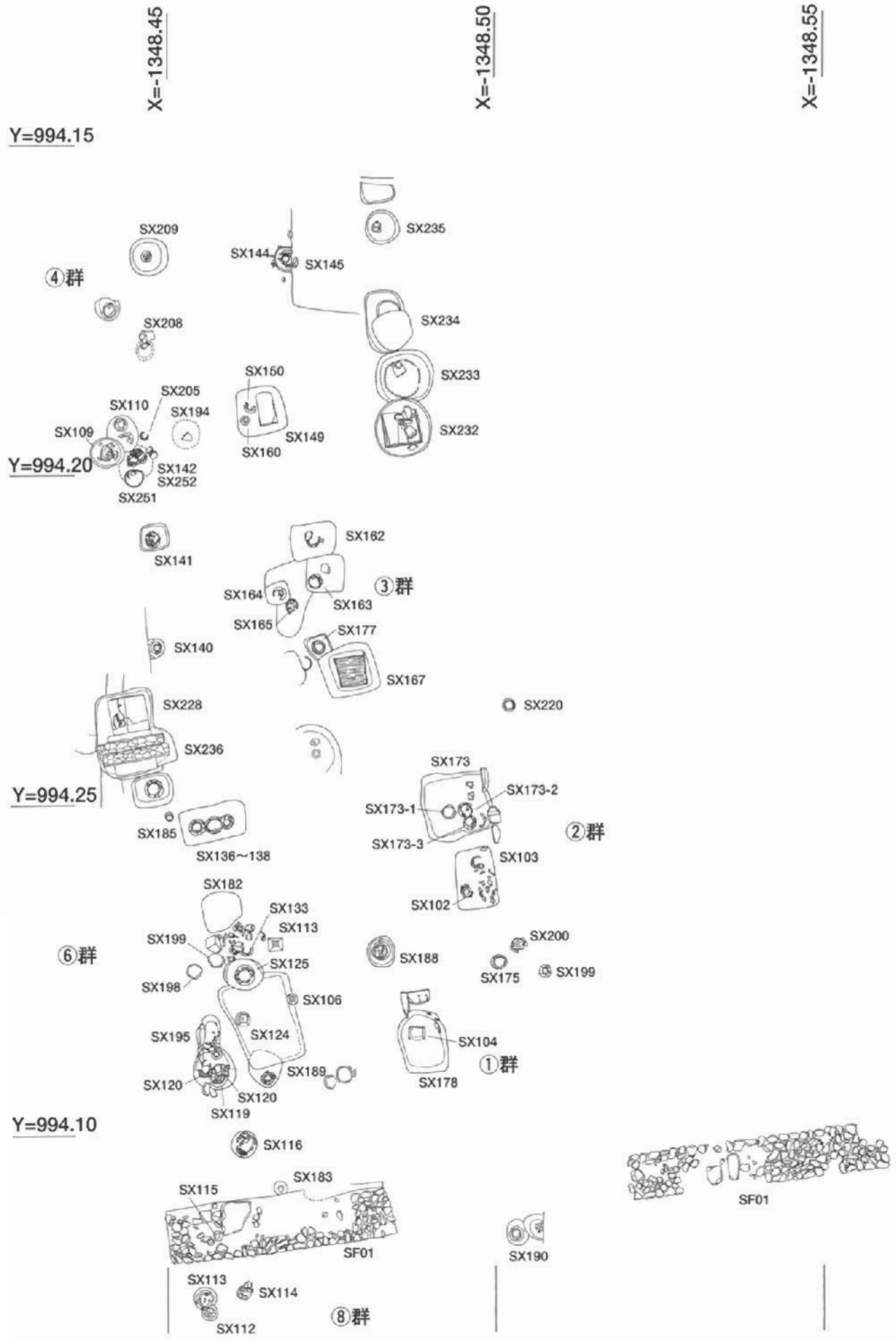
0　1m



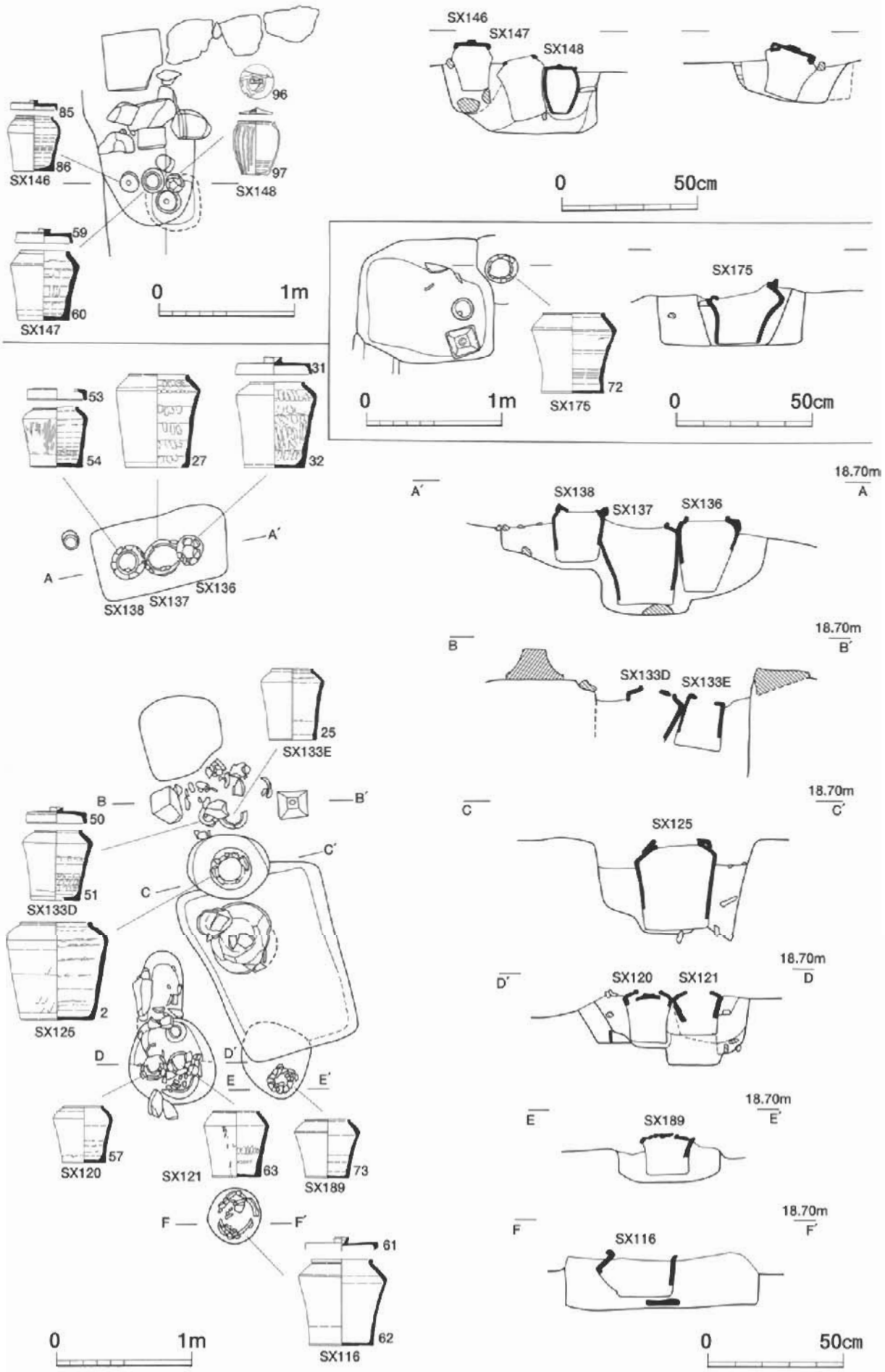


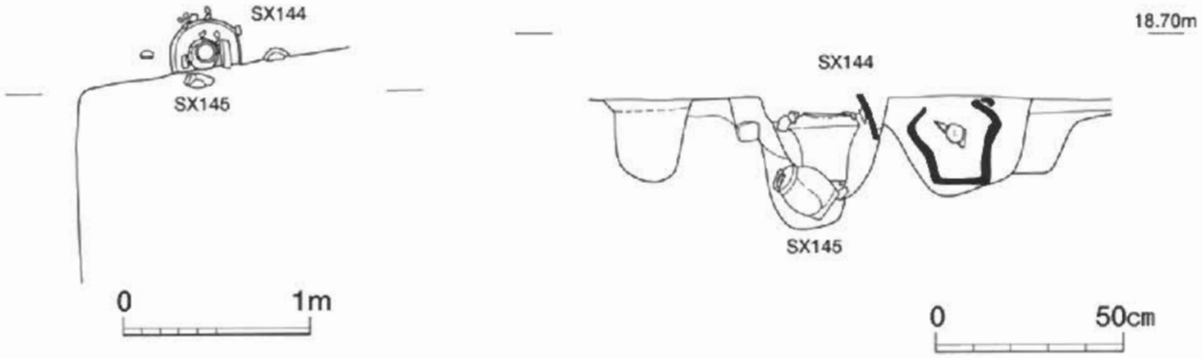
1. 灰茶色細砂
2. 黄茶色極細砂混りシルト
3. 茶灰色シルト
4. 赤茶色細砂混り極細砂
5. 褐灰色シルト混り極細砂
6. 灰茶色シルト混り極細砂
7. 焼土面

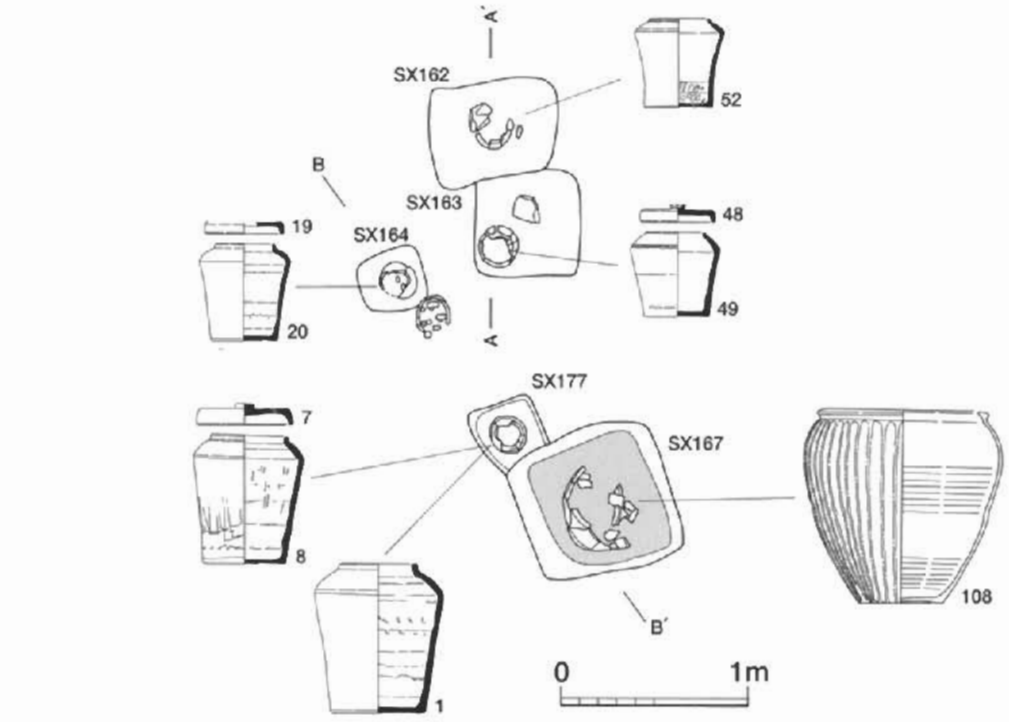
石列溝

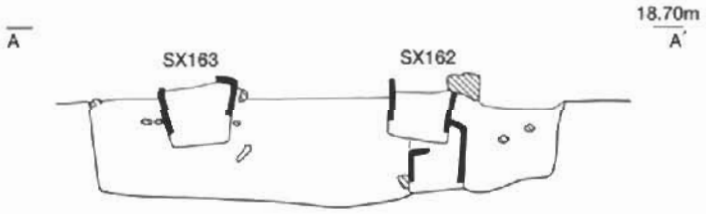

X=-1348.45
X=-1348.50
X=-1348.55
Y=994.15
Y=994.20
Y=994.25
Y=994.10
④群
③群
②群
①群
⑥群
⑧群
SX209
SX208
SX144
SX145
SX235
SX234
SX233
SX232
SX150
SX149
SX160
SX205
SX110
SX194
SX109
SX142
SX252
SX251
SX141
SX162
SX164
SX163
SX165
SX177
SX167
SX140
SX228
SX220
SX236
SX173
SX173-2
SX173-1
SX173-3
SX103
SX102
SX185
SX136～138
SX182
SX133
SX113
SX199
SX125
SX188
SX200
SX175
SX199
SX198
SX106
SX195
SX124
SX104
SX189
SX178
SX120
SX120
SX119
SX116
SX183
SX115
SF01
SF01
SX190
SX113
SX114
SX112

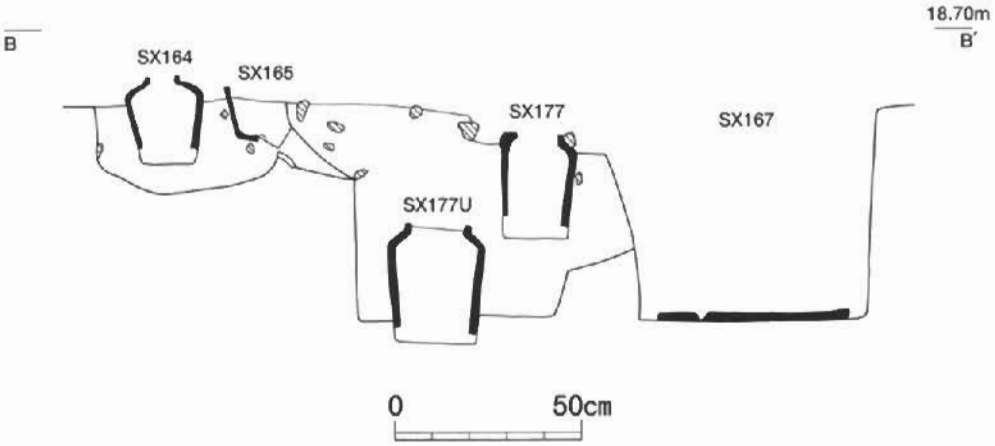
図版一六　第一一四次調査B地区遺構　蔵骨器（一）

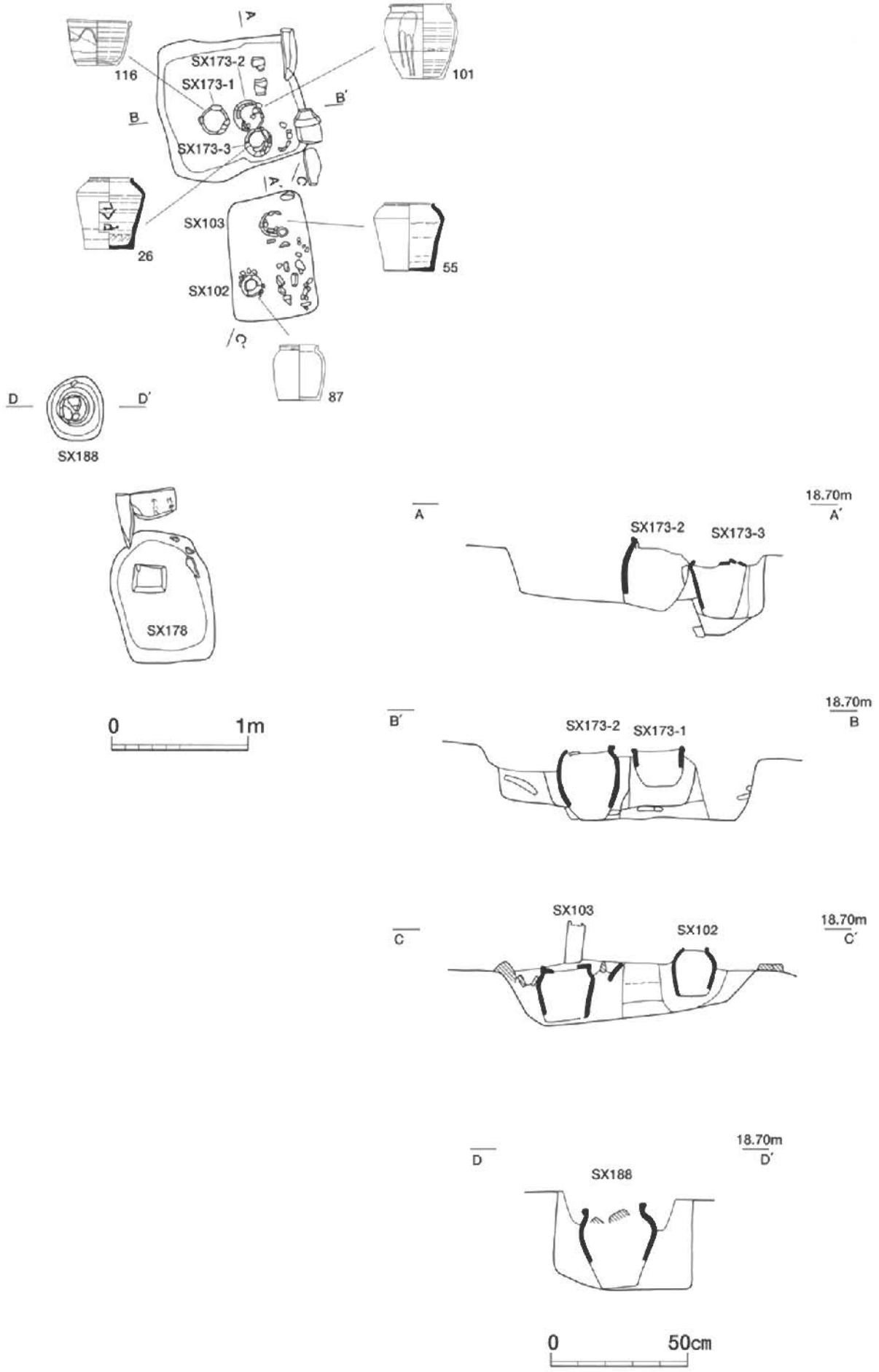


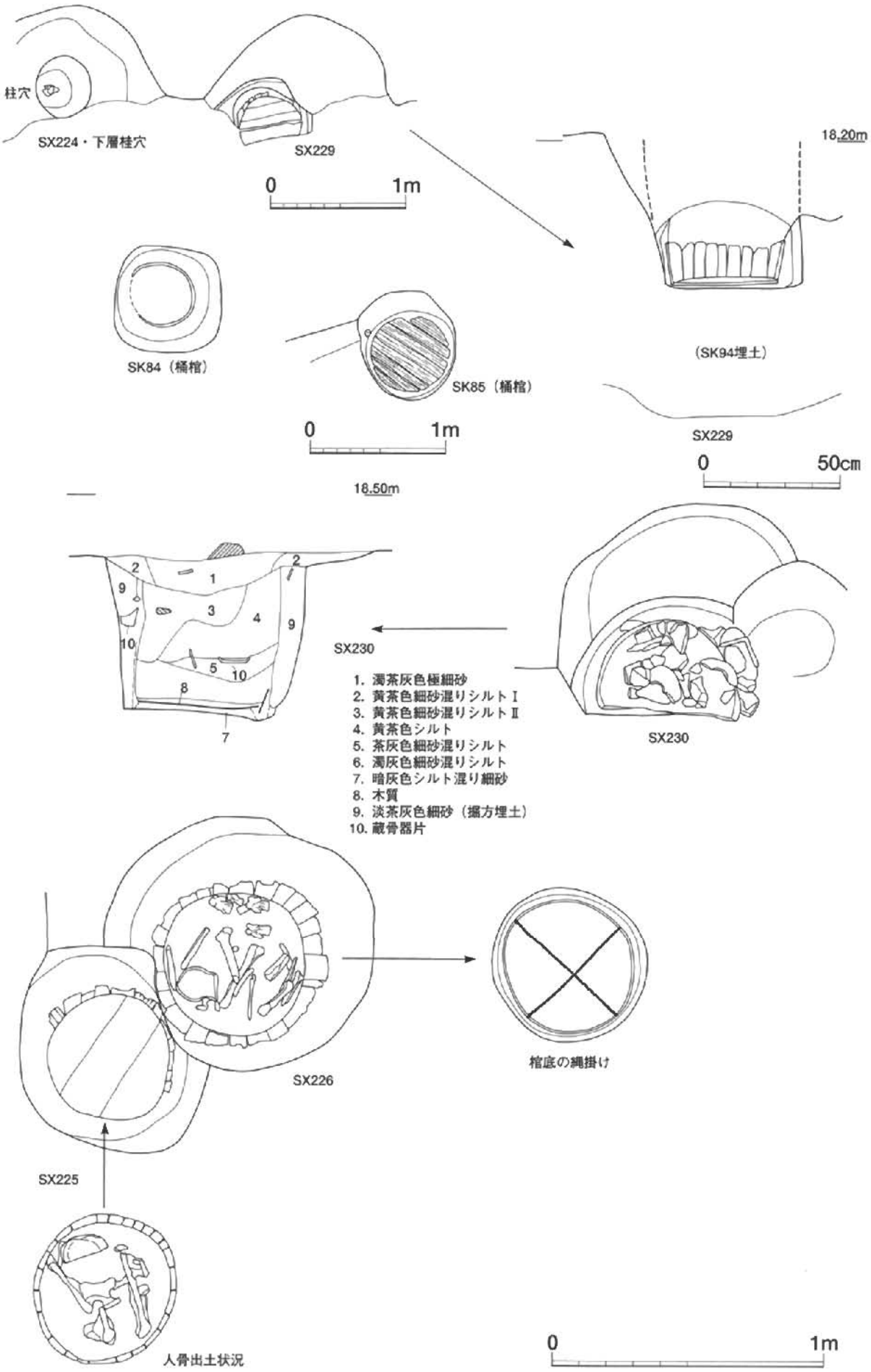

SX144
SX145
0
1m
18.70m
SX144
SX145
0
50cm

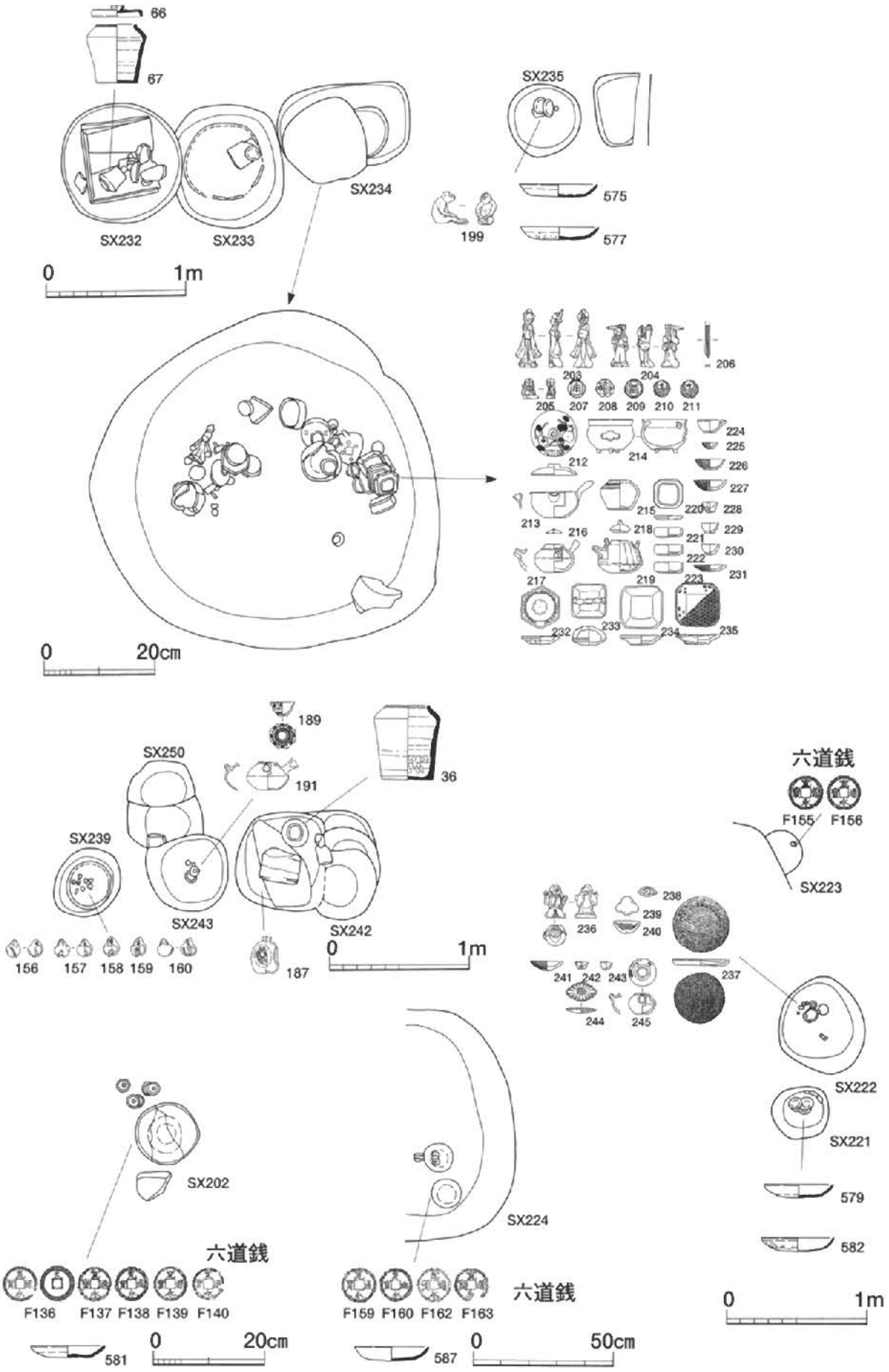

A'
SX162
52
B
SX163
48
19
SX164
20
49
A
SX177
7
SX167
8
108
B'
1
0
1m

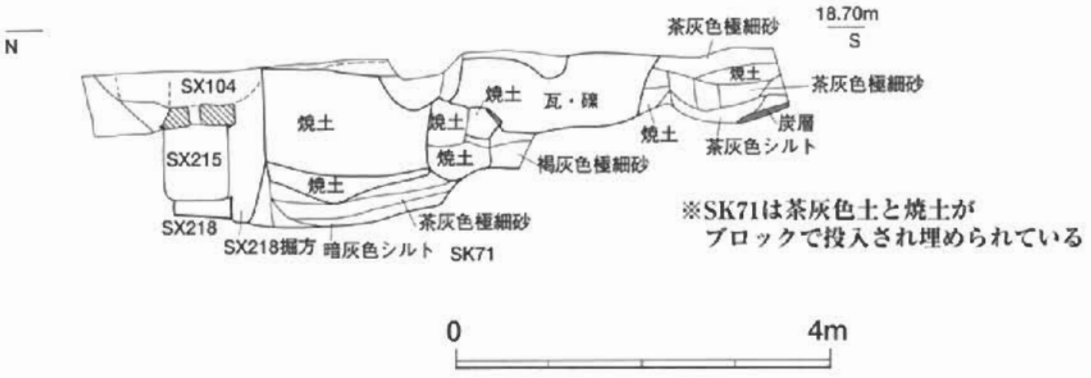

A
18.70m
A'
SX163
SX162


B
18.70m
B'
SX164
SX165
SX177
SX167
SX177U
0
50cm

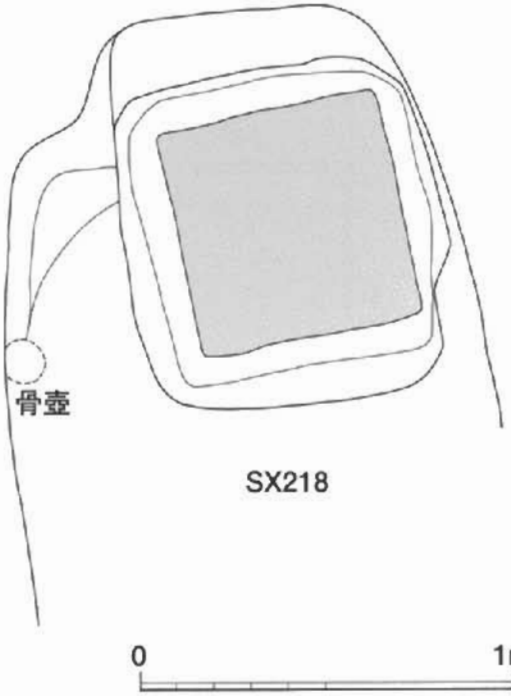

SX173-2
SX173-1
SX173-3
116
101
26
55
87
SX103
SX102
SX188
SX178
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
18.70m
0
1m
0
50cm


柱穴
SX224・下層柱穴
SX229
0
1m
18.20m
SK84（桶棺）
SK85（桶棺）
（SK94埋土）
SX229
0
50cm
18.50m
SX230
1. 濁茶灰色極細砂
2. 黄茶色細砂混りシルトⅠ
3. 黄茶色細砂混りシルトⅡ
4. 黄茶色シルト
5. 茶灰色細砂混りシルト
6. 濁灰色細砂混りシルト
7. 暗灰色シルト混り細砂
8. 木質
9. 淡茶灰色細砂（掘方埋土）
10. 蔵骨器片
SX230
SX226
棺底の縄掛け
SX225
人骨出土状況
0
1m

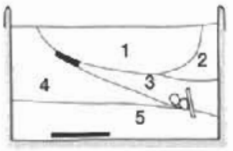

66
67
SX232
SX233
SX234
0
1m
SX235
575
199
577
0
20cm
203
204
206
205
207
208
209
210
211
212
214
224
225
226
227
213
215
220
228
216
218
229
221
230
222
231
217
219
223
232
233
234
235
189
SX250
191
36
SX239
SX243
SX242
156
157
158
159
160
187
0
1m
六道銭
F155
F156
SX223
238
236
239
240
241
242
243
237
244
245
SX222
SX221
579
582
0
1m
SX202
六道銭
F136
F137
F138
F139
F140
581
0
20cm
SX224
六道銭
F159
F160
F162
F163
587
0
50cm



SX218・SK71　土層推積状況

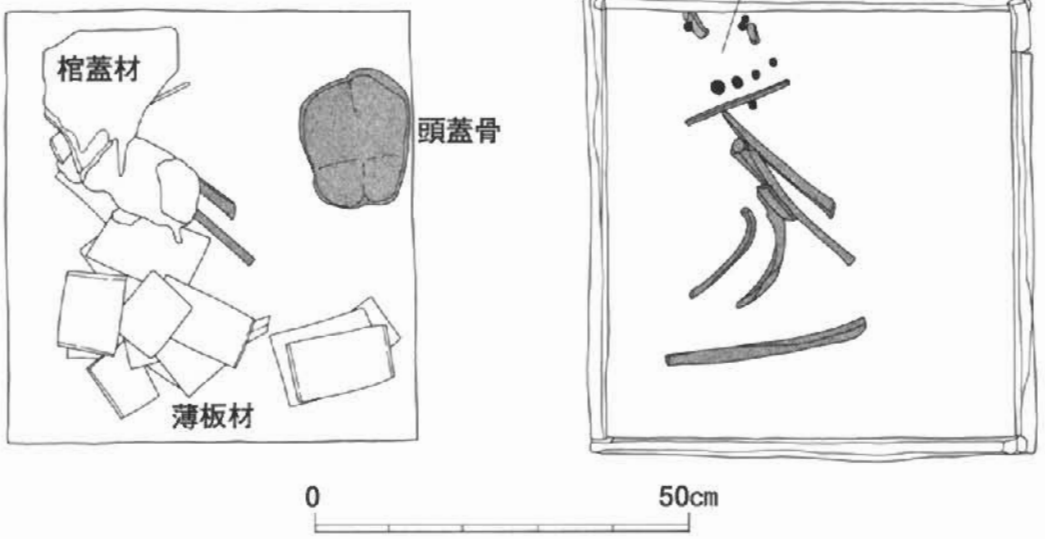


SX218

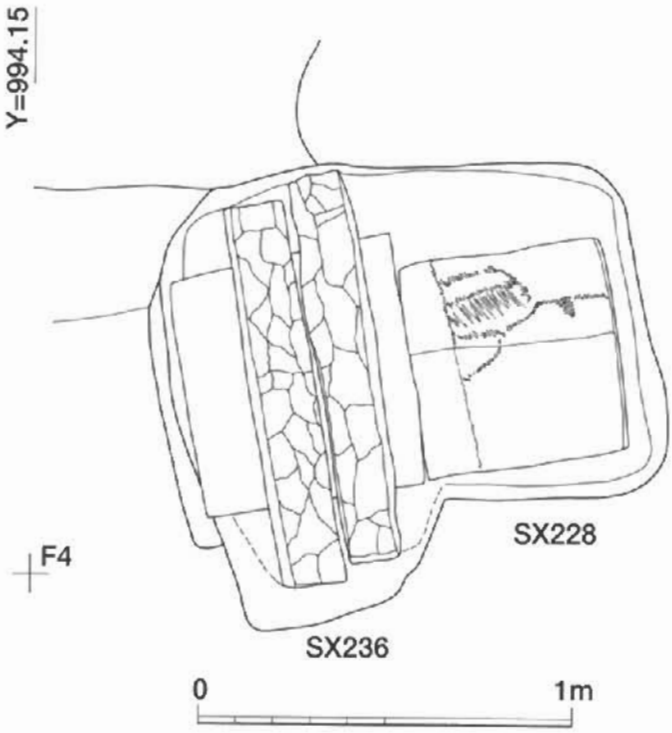


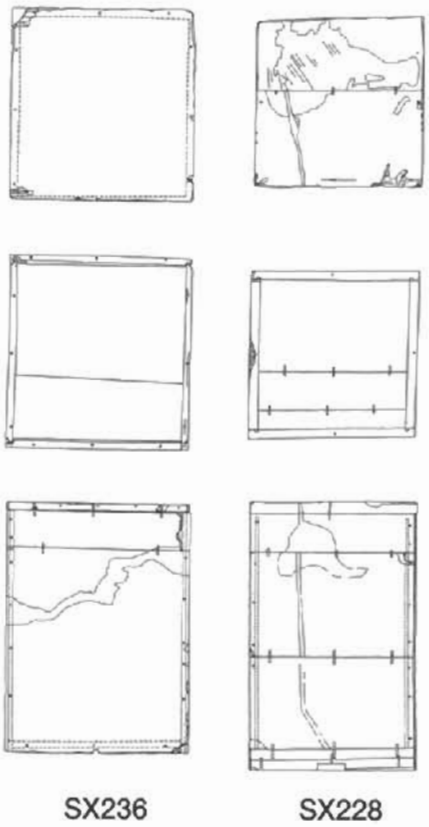
1. 濁灰黄色シルト混り細砂
2. 濁茶灰色シルト混り細砂
3. 灰色シルト混り細砂
4. 暗灰色シルト混り細砂
5. 濁灰茶色細砂混りシルト

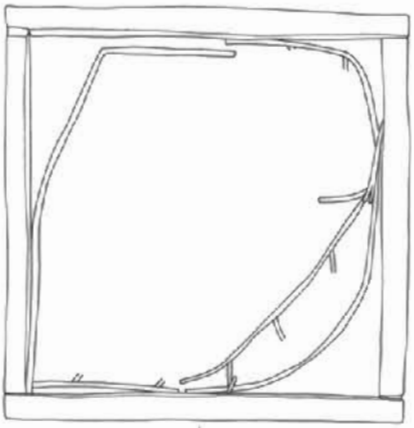
SX218棺内推積状況



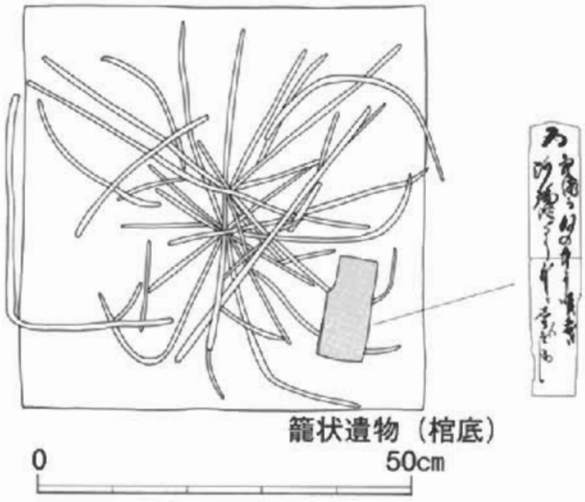
SX218遺物・人骨検出状況


Y=994.15
F4
SX228
SX236
0
1m


SX236
SX228

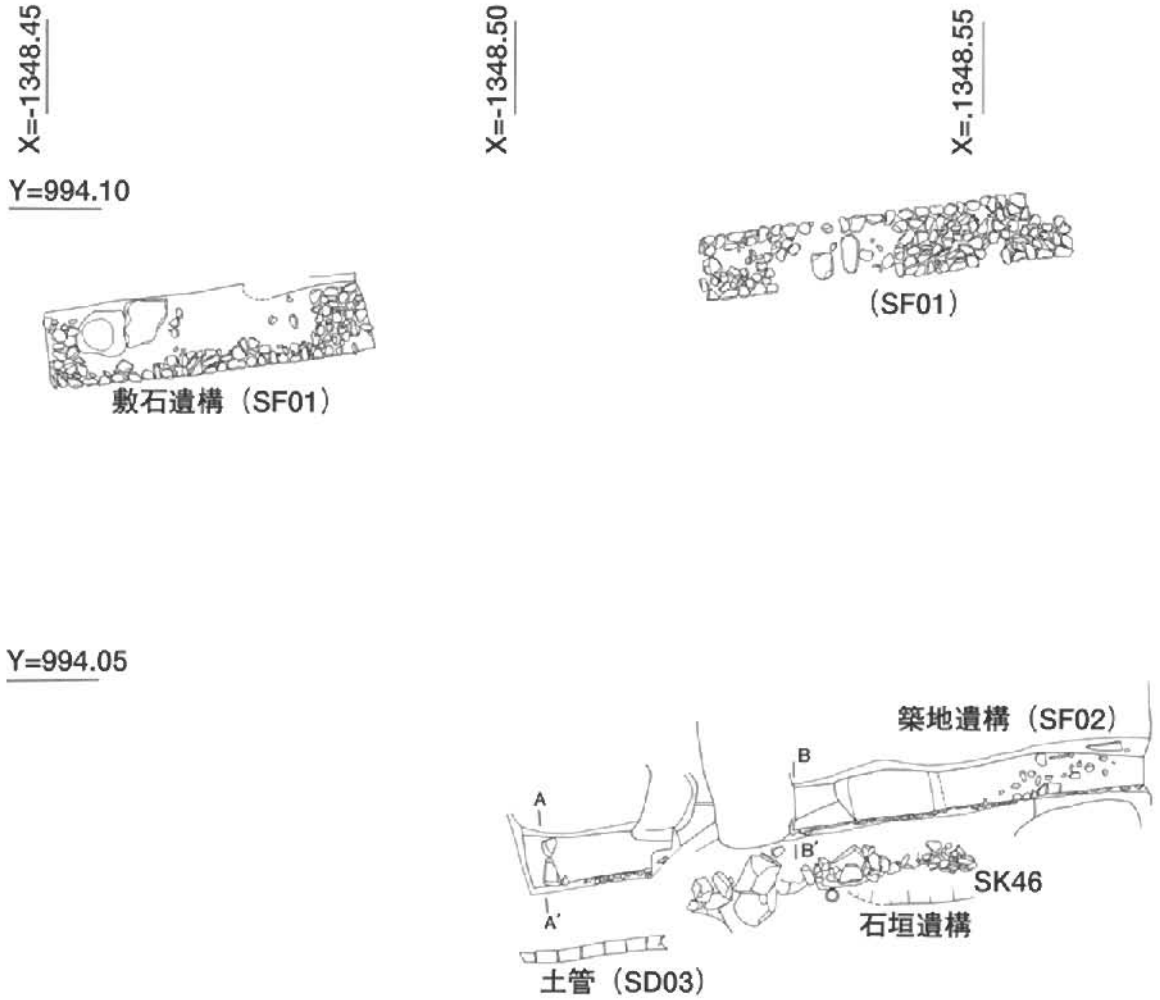

籠状遺物（上層）

SX228

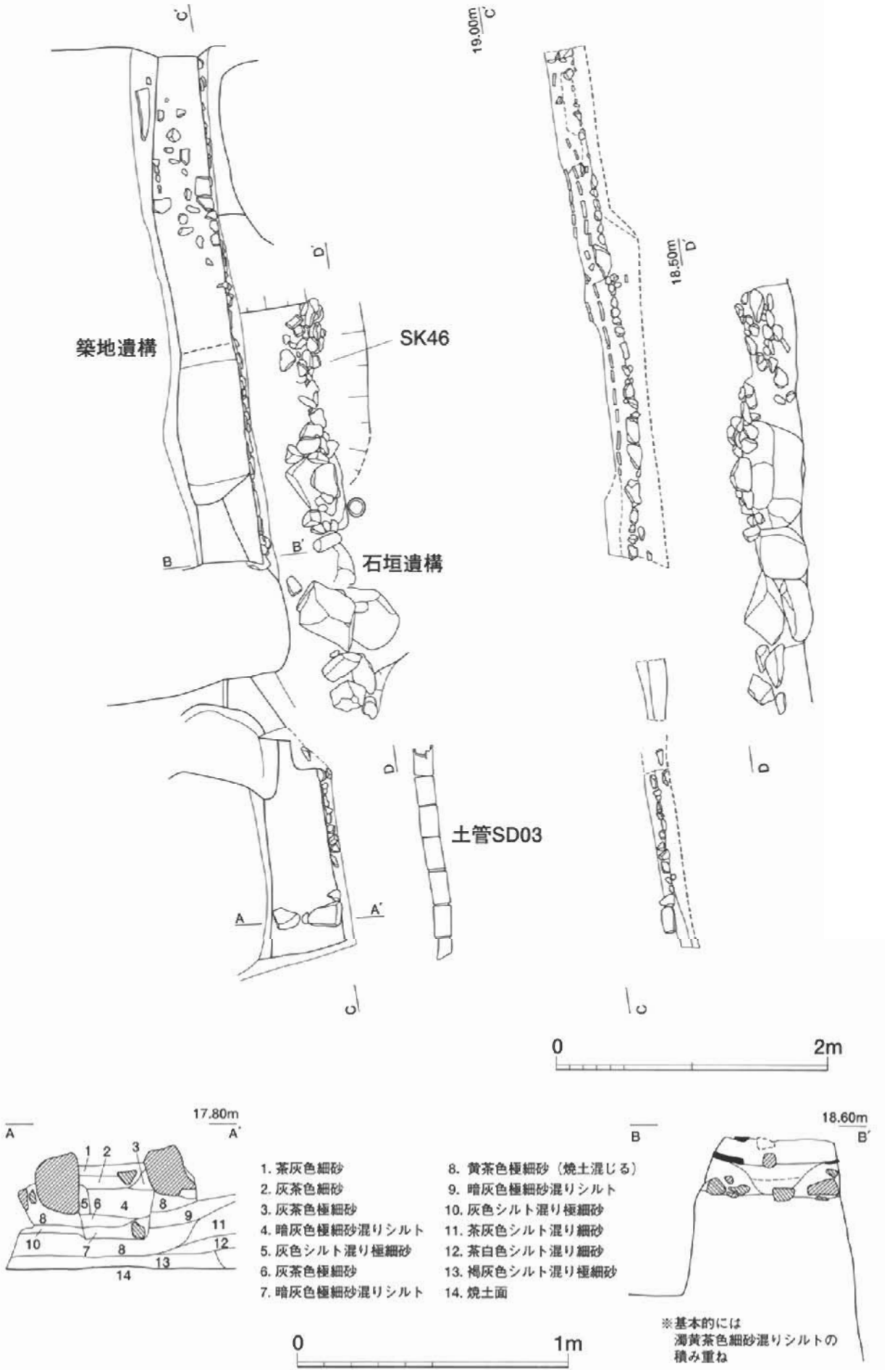

籠状遺物（棺底）
0
50cm

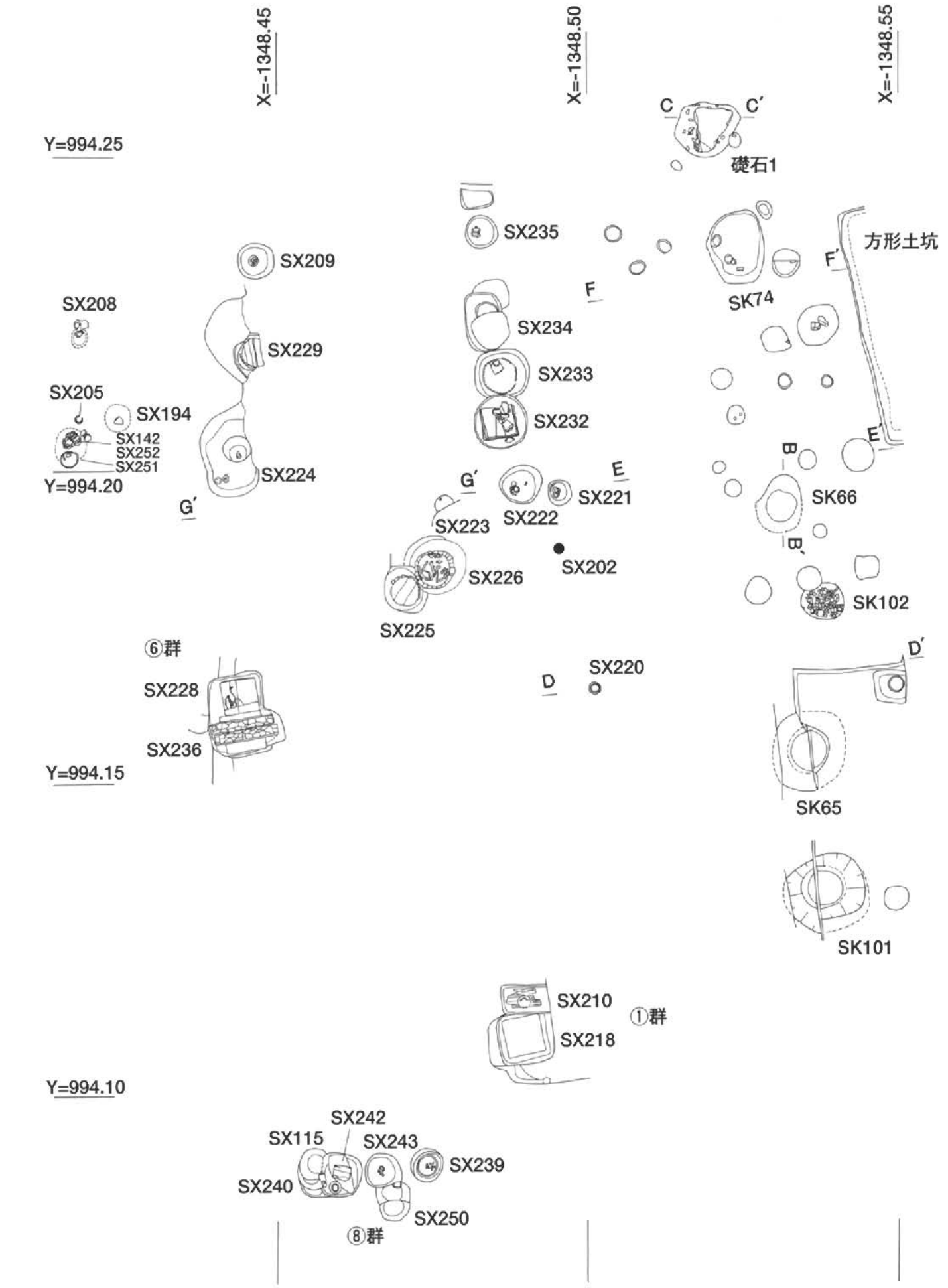
W103
W104
W106
W124
W105
W123
W163
W164
W166
W165

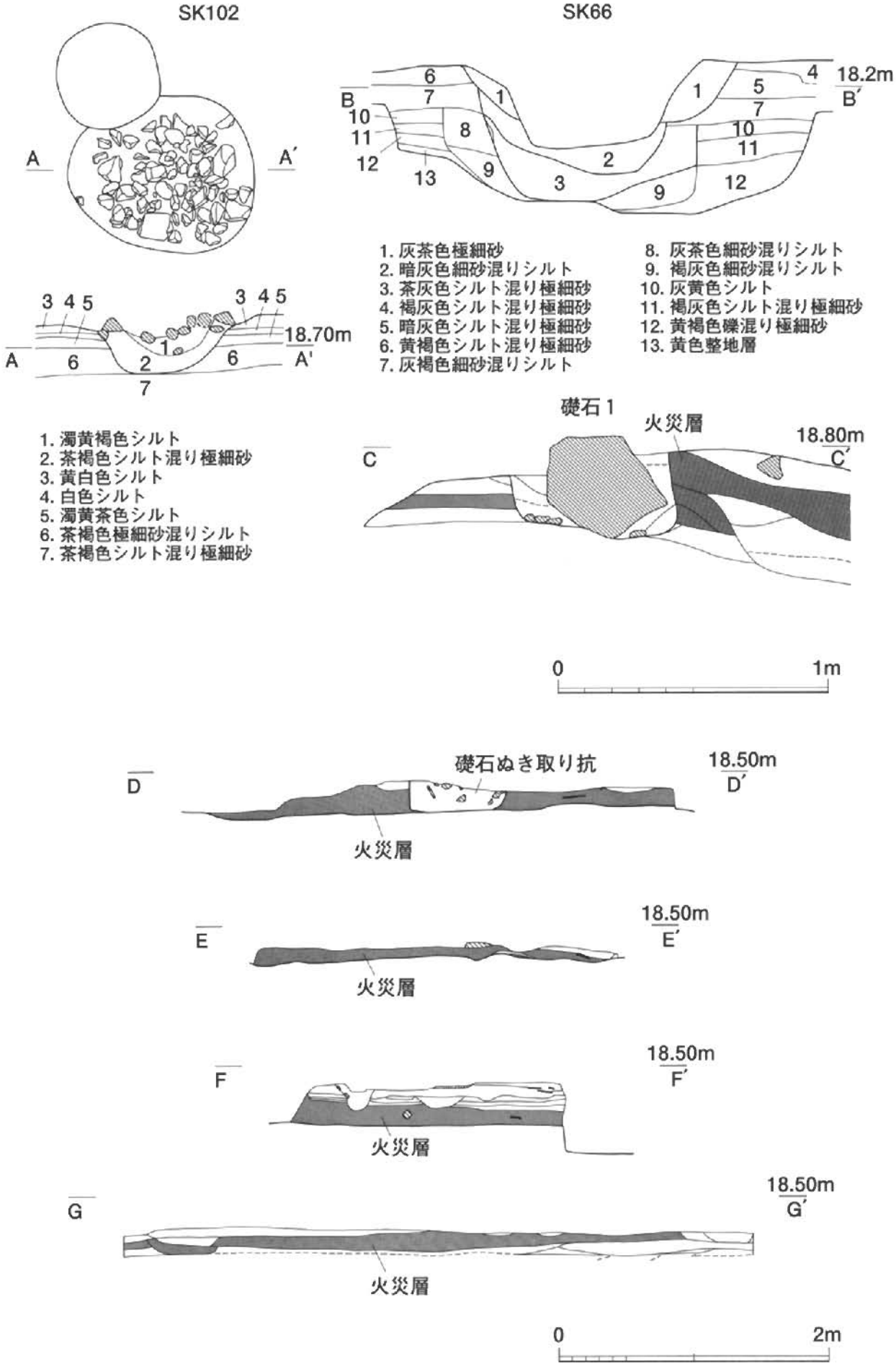
図版二三　第一一四次調査B地区遺構　石敷（SF01）と築地塀（SF02）



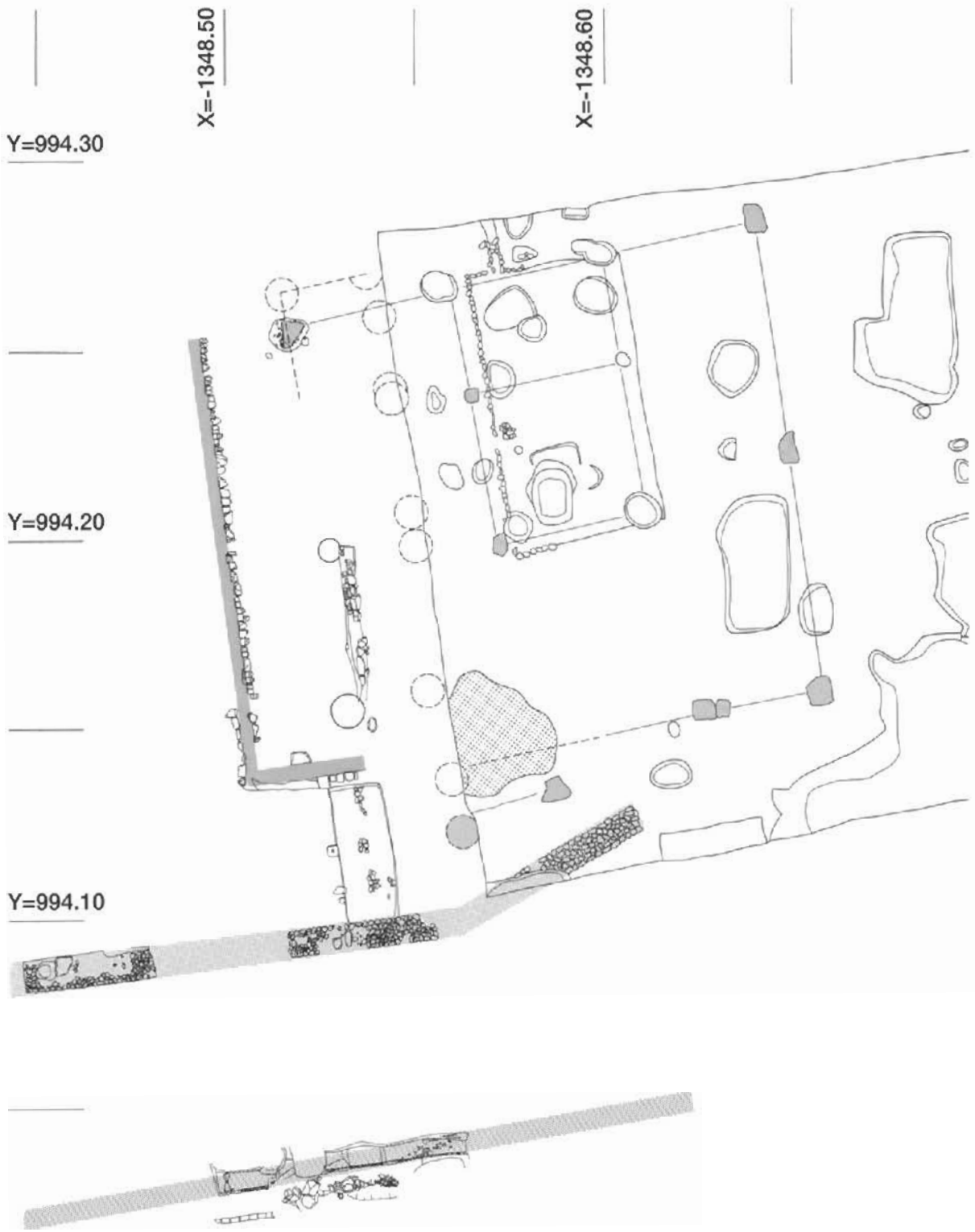
図版二四　第一二四次調査B地区遺構　石敷（SF01）・築地塀（SF02）と石垣



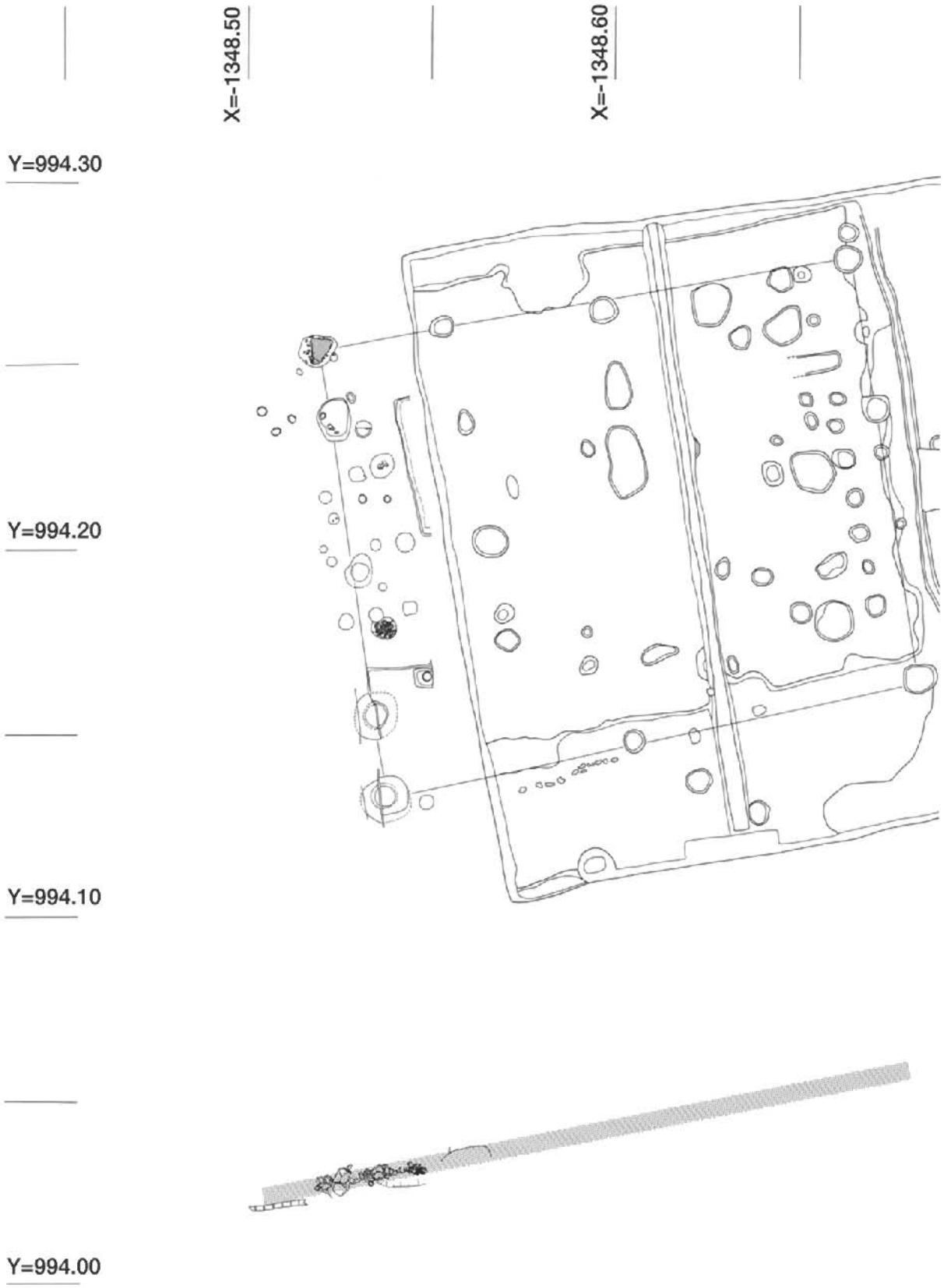

X=-1348.45
X=-1348.50
X=-1348.55
Y=994.25
Y=994.20
Y=994.15
Y=994.10
C
C′
礎石1
SX235
SX209
SX208
SX229
SX205
SX194
SX142
SX252
SX251
SX224
G′
F
SX234
SX233
SX232
SK74
方形土坑
F′
E′
B
SK66
B′
E
G′
SX221
SX222
SX223
SX226
SX202
SX225
SK102
⑥群
SX228
SX236
D
SX220
D′
SK65
SK101
SX210
①群
SX218
SX242
SX115
SX243
SX239
SX240
SX250
⑧群

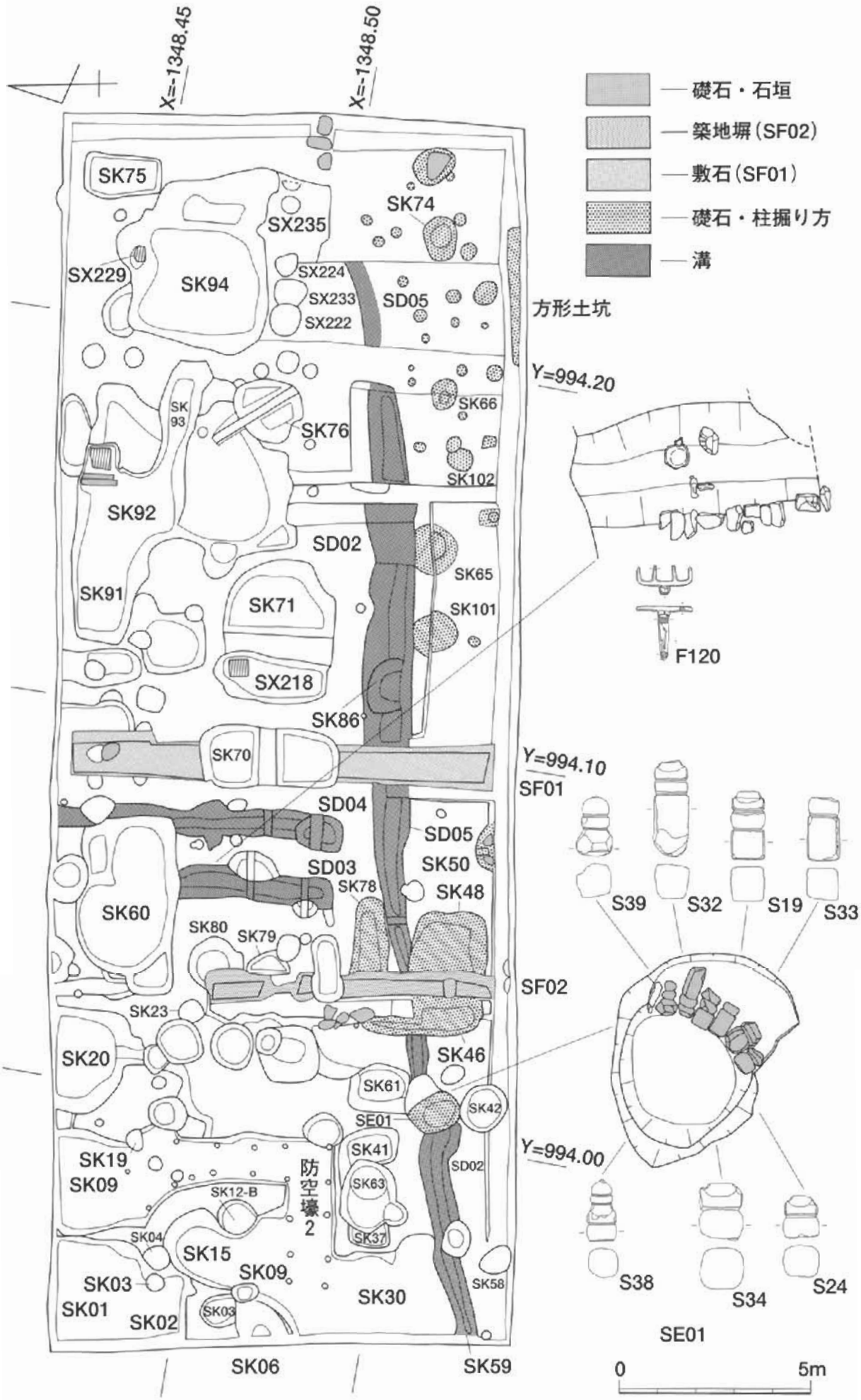

SK102
A
A′
3 4 5
3 4 5
18.70m
A
A'
6
1
2
6
7
1. 濁黄褐色シルト
2. 茶褐色シルト混り極細砂
3. 黄白色シルト
4. 白色シルト
5. 濁黄茶色シルト
6. 茶褐色極細砂混りシルト
7. 茶褐色シルト混り極細砂
SK66
B
B′
18.2m
1. 灰茶色極細砂
2. 暗灰色細砂混りシルト
3. 茶灰色シルト混り極細砂
4. 褐灰色シルト混り極細砂
5. 暗灰色シルト混り極細砂
6. 黄褐色シルト混り極細砂
7. 灰褐色細砂混りシルト
8. 灰茶色細砂混りシルト
9. 褐灰色細砂混りシルト
10. 灰黄色シルト
11. 褐灰色シルト混り極細砂
12. 黄褐色礫混り極細砂
13. 黄色整地層
礎石1
火災層
18.80m
C
C′
0
1m
礎石ぬき取り抗
18.50m
D
D′
火災層
18.50m
E
E′
火災層
18.50m
F
F′
火災層
18.50m
G
G′
火災層
0
2m

図版二七　第一一四次調査B地区遺構　光明寺本堂復元Ⅰ（第Ⅱ面）

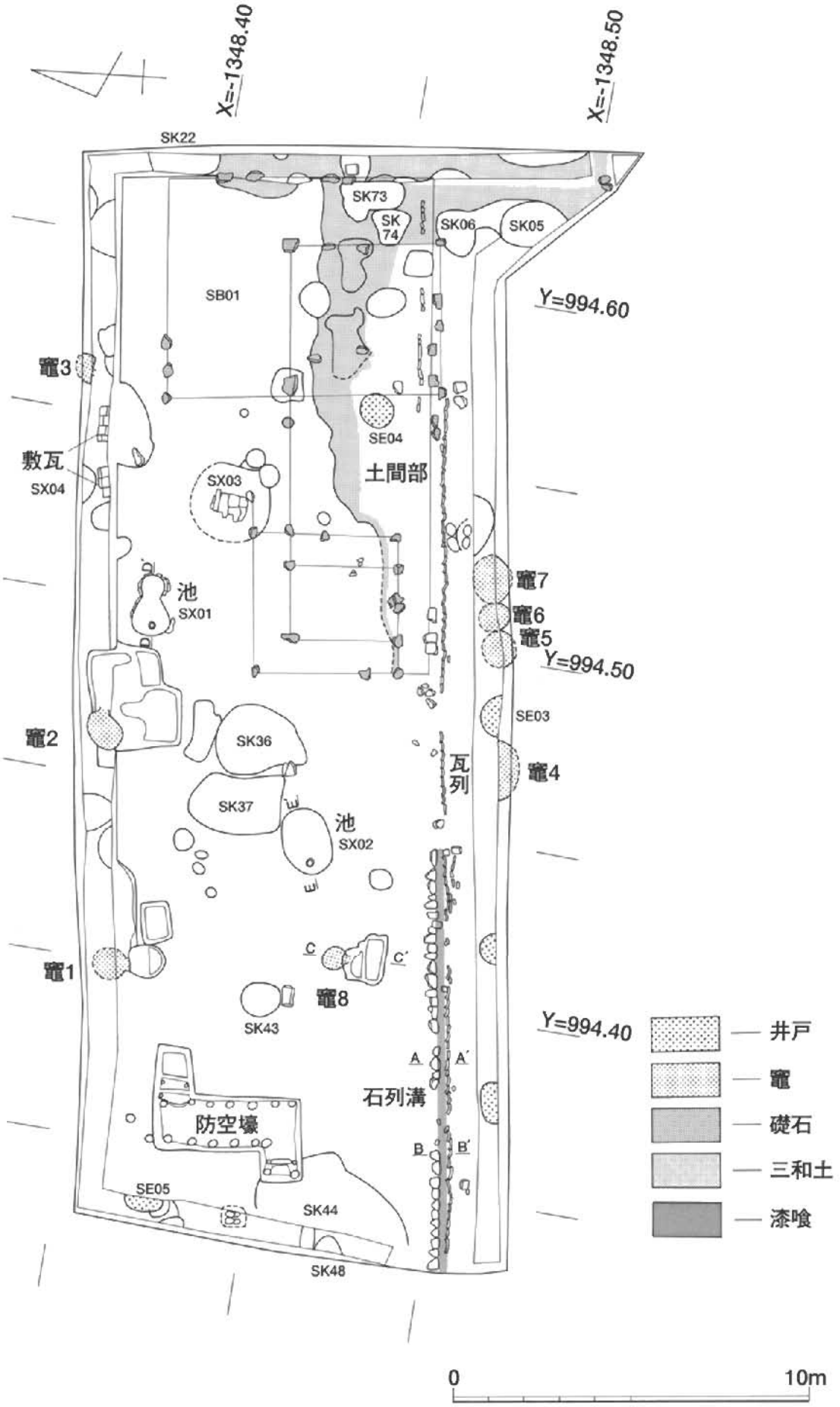


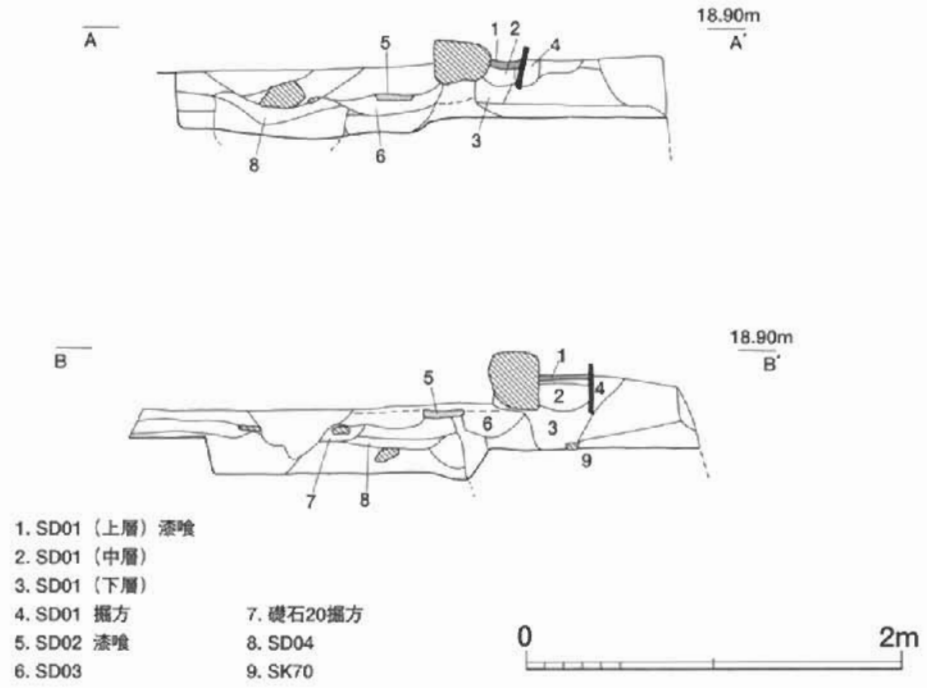
図版二八　第一一四次調査B地区遺構　光明寺本堂復元Ⅱ（第Ⅲ面）



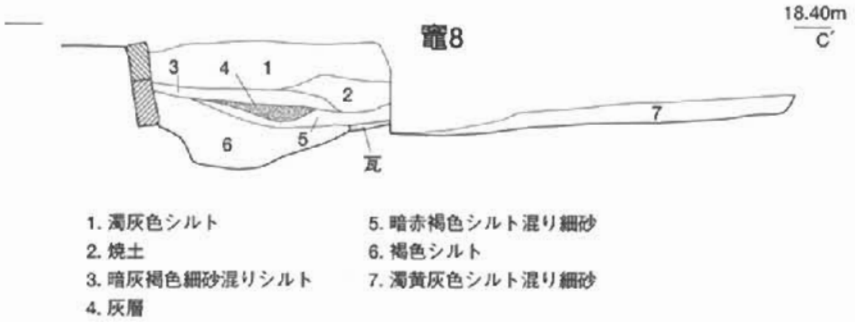

X=-1348.45
X=-1348.50
礎石・石垣
築地塀(SF02)
敷石(SF01)
礎石・柱掘り方
溝
SK75
SX235
SK74
SX229
SK94
SX224
SX233
SX222
SD05
方形土坑
Y=994.20
SK66
SK93
SK76
SK102
SK92
SD02
SK65
SK91
SK71
SK101
F120
SX218
SK86
SK70
Y=994.10
SF01
SD04
SD05
SD03
SK50
SK78
SK48
SK60
SK80
SK79
S39
S32
S19
S33
SF02
SK23
SK20
SK46
SK61
SK42
SE01
SK41
Y=994.00
SK19
SK09
防空壕2
SK63
SD02
SK12-B
SK37
SK04
SK15
SK09
SK03
SK30
SK58
S38
S34
S24
SK01
SK02
SK03
SE01
SK06
SK59
0
5m

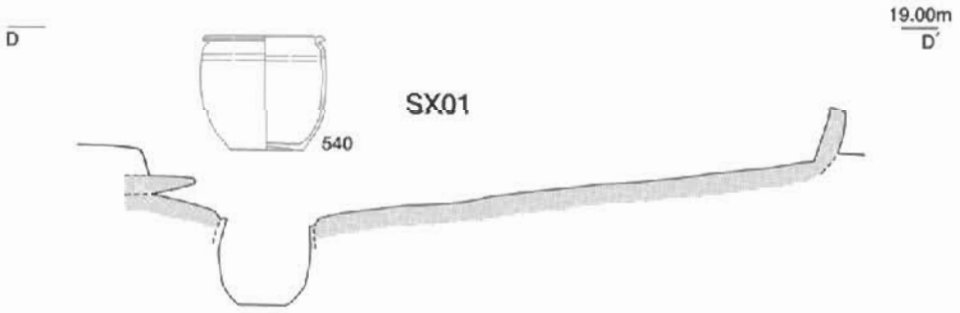
図版三〇　第一一四次調査C地区遺構　第I面遺構

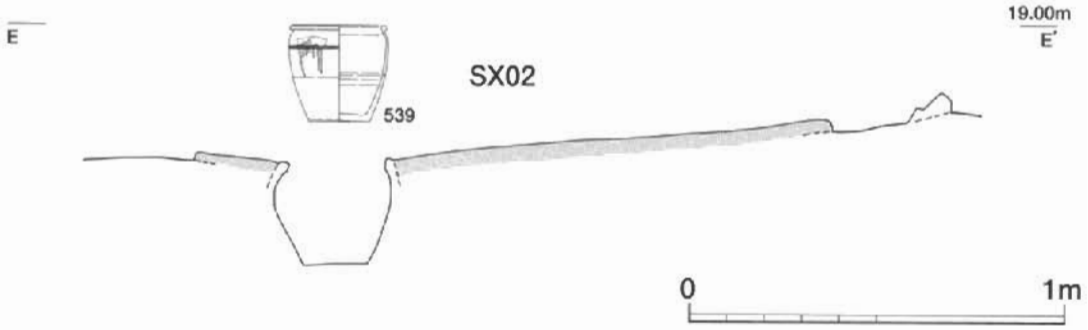



A
A'
18.90m
1
2
3
4
5
6
8
B
B'
18.90m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
1. SD01（上層）漆喰
2. SD01（中層）
3. SD01（下層）
4. SD01 掘方
5. SD02 漆喰
6. SD03
7. 礫石20掘方
8. SD04
9. SK70
0
2m

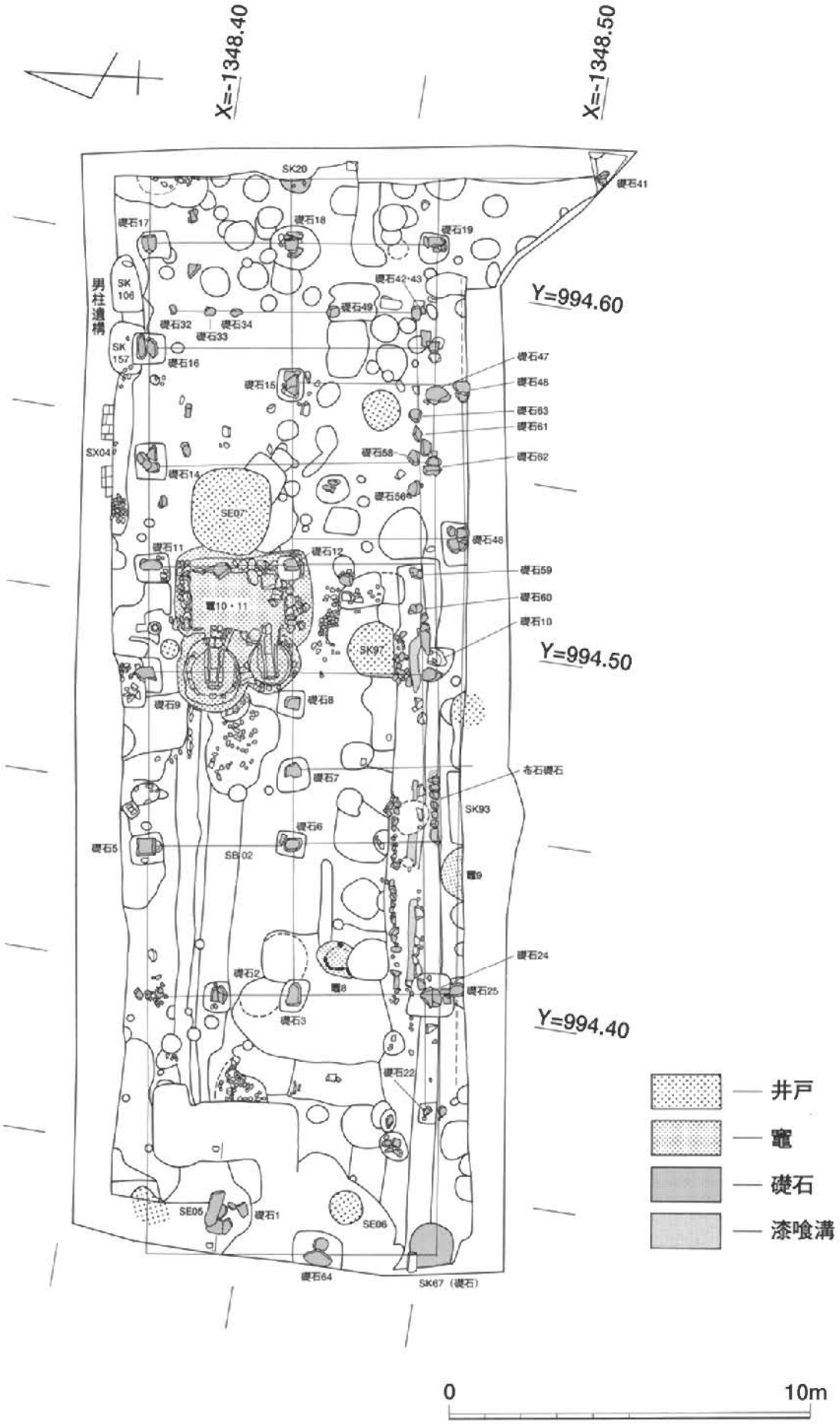
石列溝部分の土層

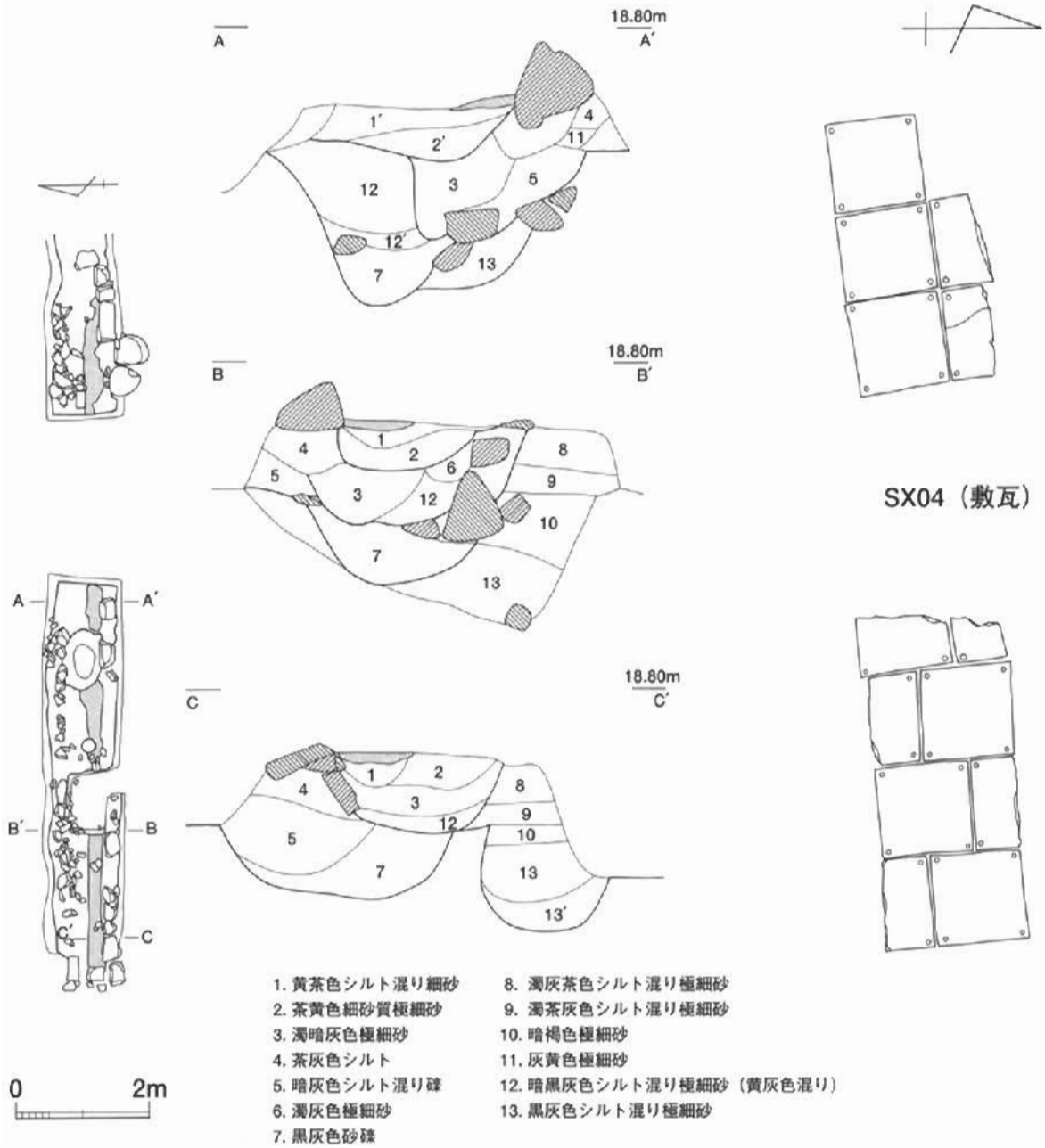

竈8
18.40m
C'
1
2
3
4
5
6
7
瓦
1. 濁灰色シルト
2. 焼土
3. 暗灰褐色細砂混りシルト
4. 灰層
5. 暗赤褐色シルト混り細砂
6. 褐色シルト
7. 濁黄灰色シルト混り細砂


D
D'
19.00m
SX01
540


E
E'
19.00m
SX02
539
0
1m

図版三一　第一一四次調査C地区遺構　第Ⅱ面遺構



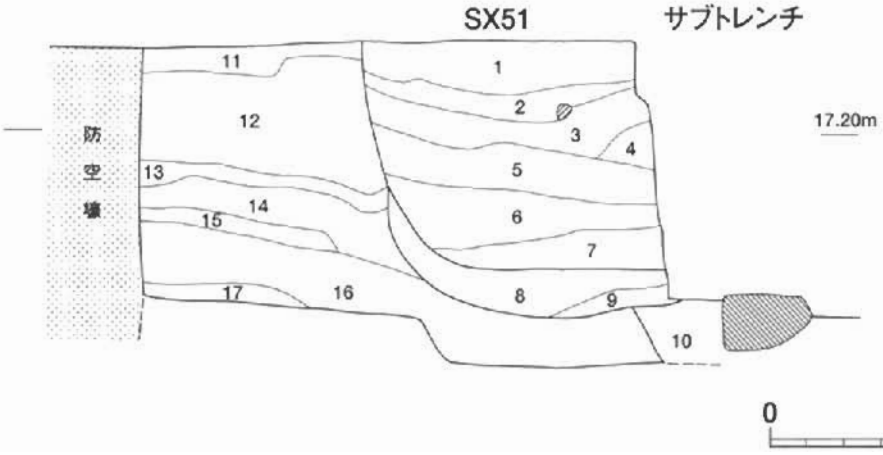


1. 黄茶色シルト混り細砂
2. 茶黄色細砂質極細砂
3. 濁暗灰色極細砂
4. 茶灰色シルト
5. 暗灰色シルト混り礫
6. 濁灰色極細砂
7. 黒灰色砂礫
8. 濁灰茶色シルト混り極細砂
9. 濁茶灰色シルト混り極細砂
10. 暗褐色極細砂
11. 灰黄色極細砂
12. 暗黒灰色シルト混り極細砂（黄灰色混り）
13. 黒灰色シルト混り極細砂

SX04（敷瓦）

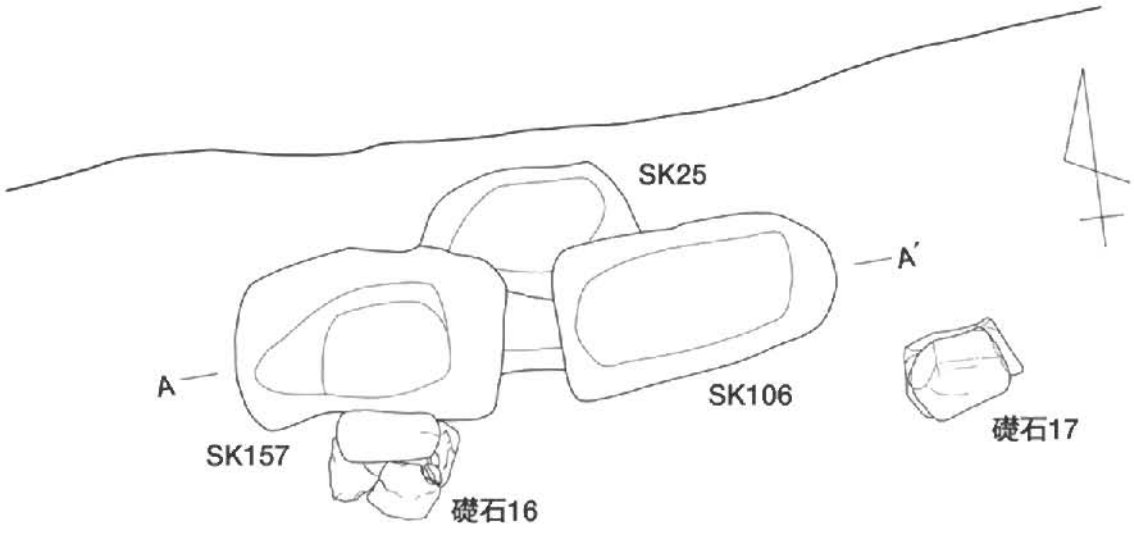
屋敷境溝（SD02）

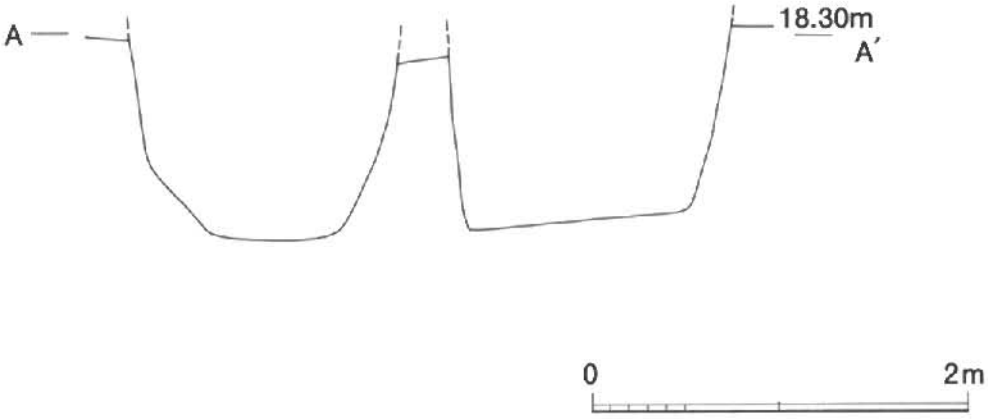
礎石1

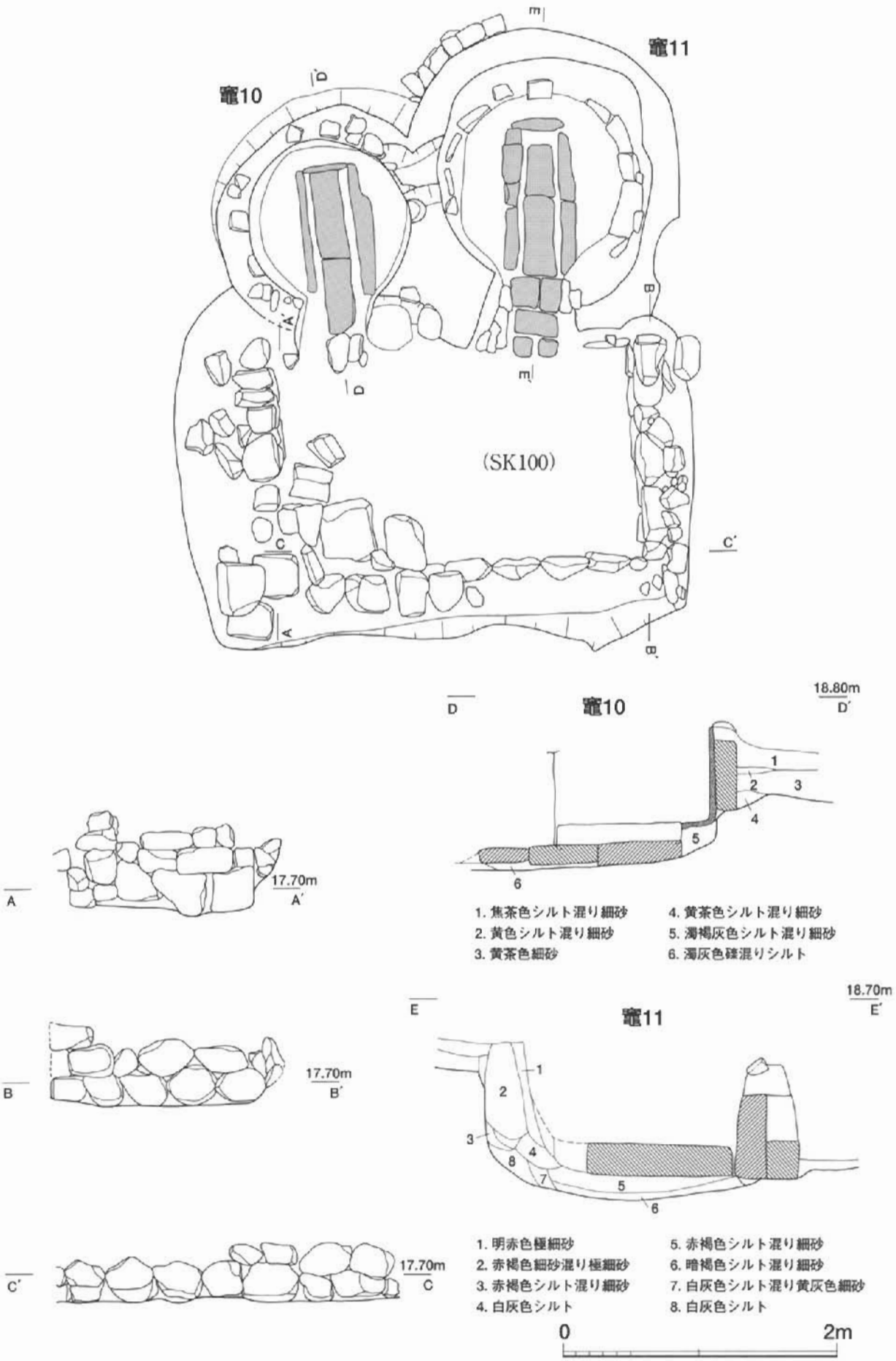


1. 灰白色極細砂質シルト（地山含む）
2. 灰茶色シルト混り極細砂
3. 灰白色極細砂質シルト（地山含む）
4. 焦茶色シルト混り細砂
5. 灰黒色礫混りシルト質極細砂
6. 濁灰白色シルト
7. 焦茶色シルト質極細砂
8. 灰白色シルト
9. 焦茶色シルト混り細砂
10. 濁茶黄色シルト混り細砂
11. 灰茶色細砂
12. 灰白色シルト
13. 淡茶灰色極細砂
14. 灰白色シルト
15. 濁灰茶色シルト（炭含む）
16. 灰白色シルト（塊状に入る）
17. 焦茶色極細砂・細砂混りシルト

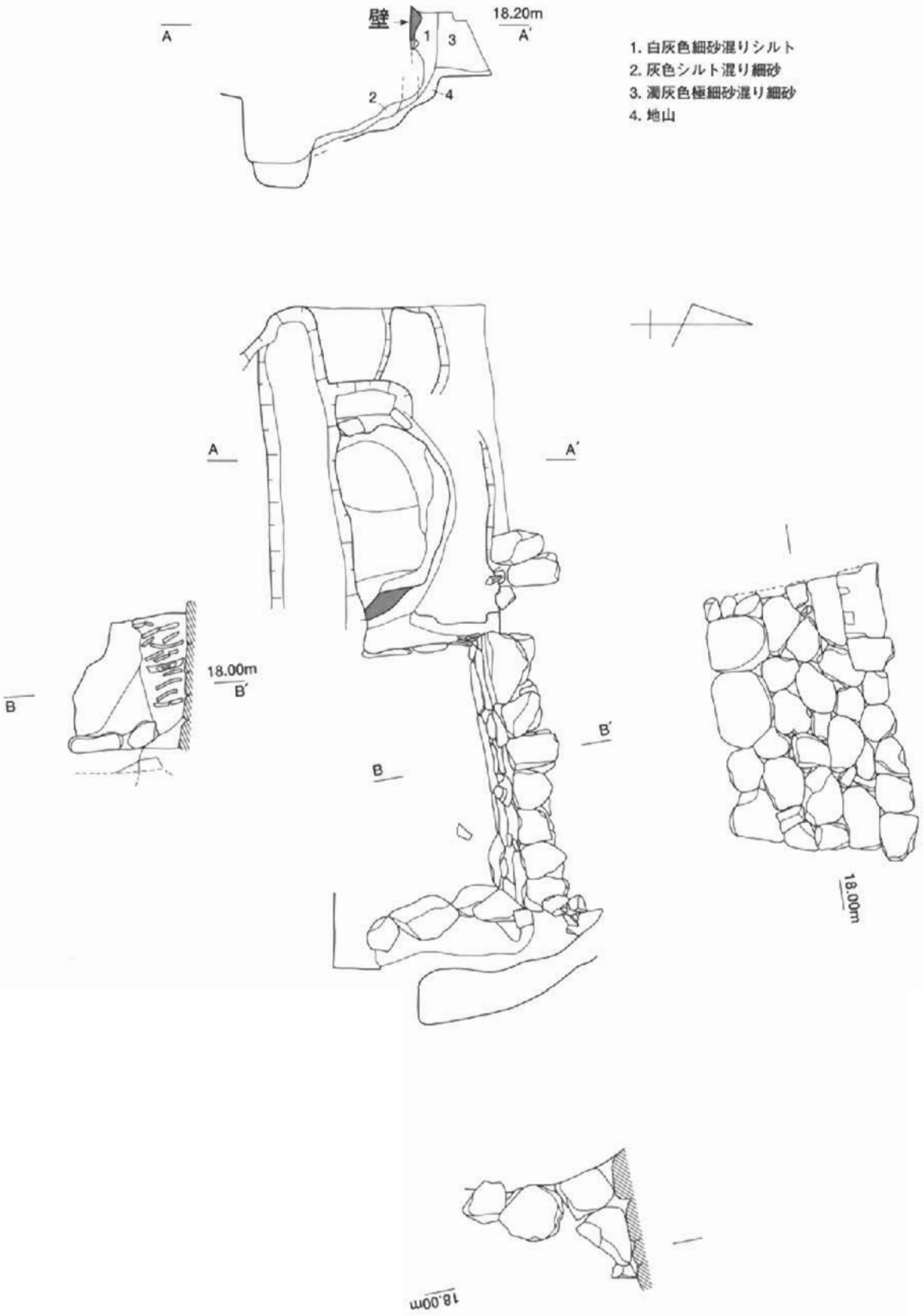
図版三四　第一一四次調査C地区遺構　男柱





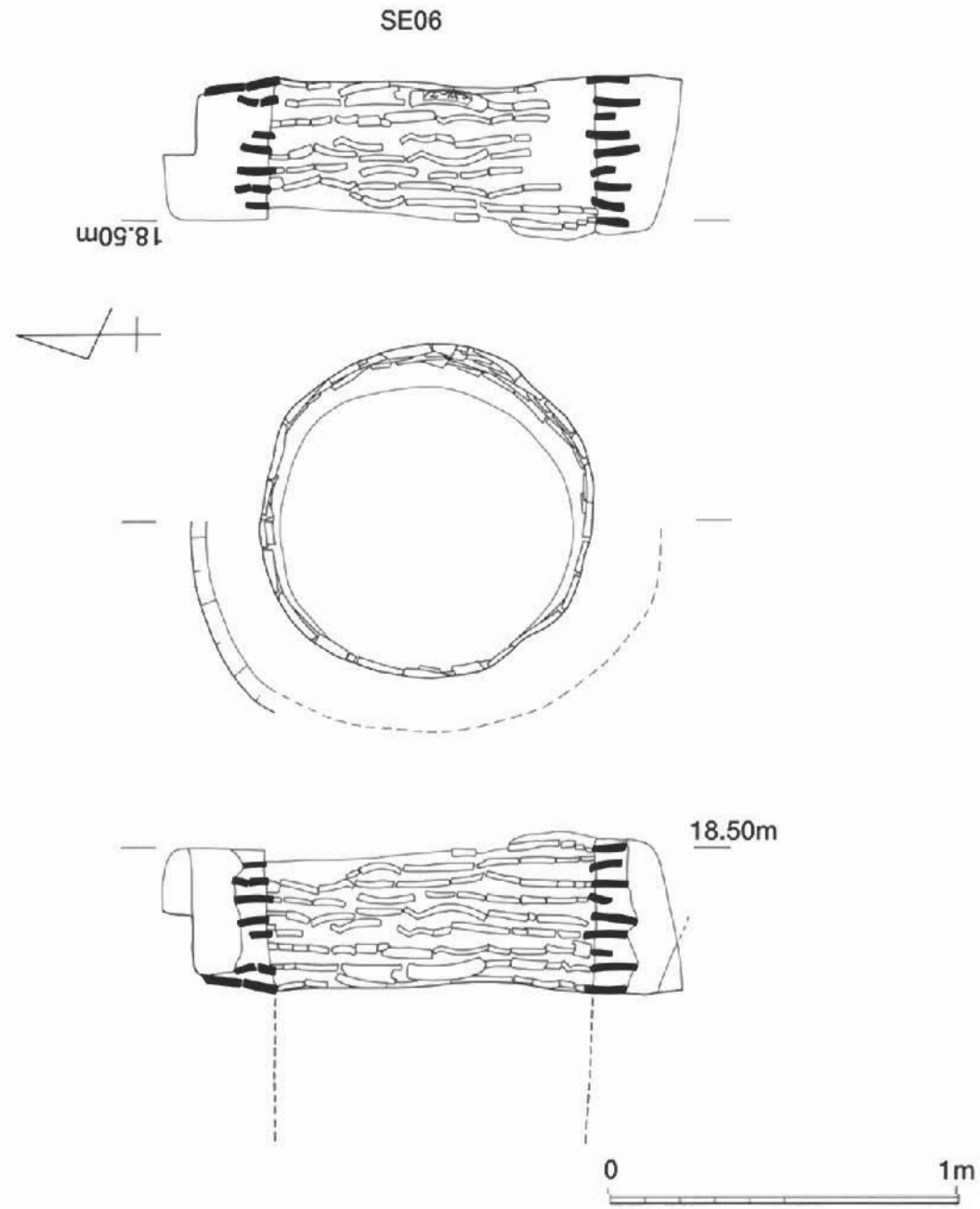


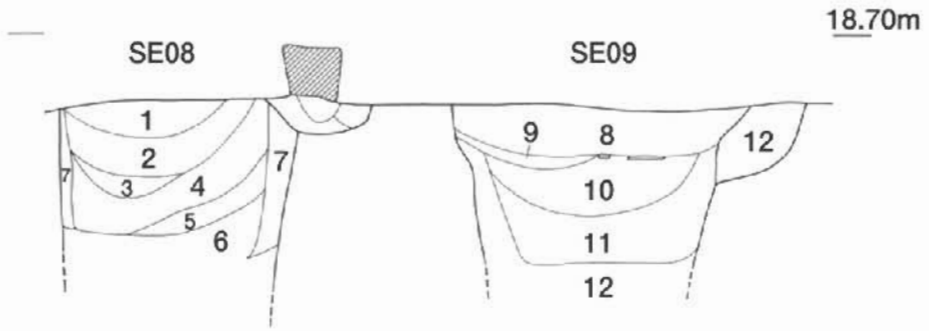
竈10・竈11・掘形SK100


壁
18.20m
A
A′
1
2
3
4
1. 白灰色細砂混りシルト
2. 灰色シルト混り細砂
3. 濁灰色極細砂混り細砂
4. 地山
18.00m
B
B′
18.00m
18.00m

竈9

0　2m

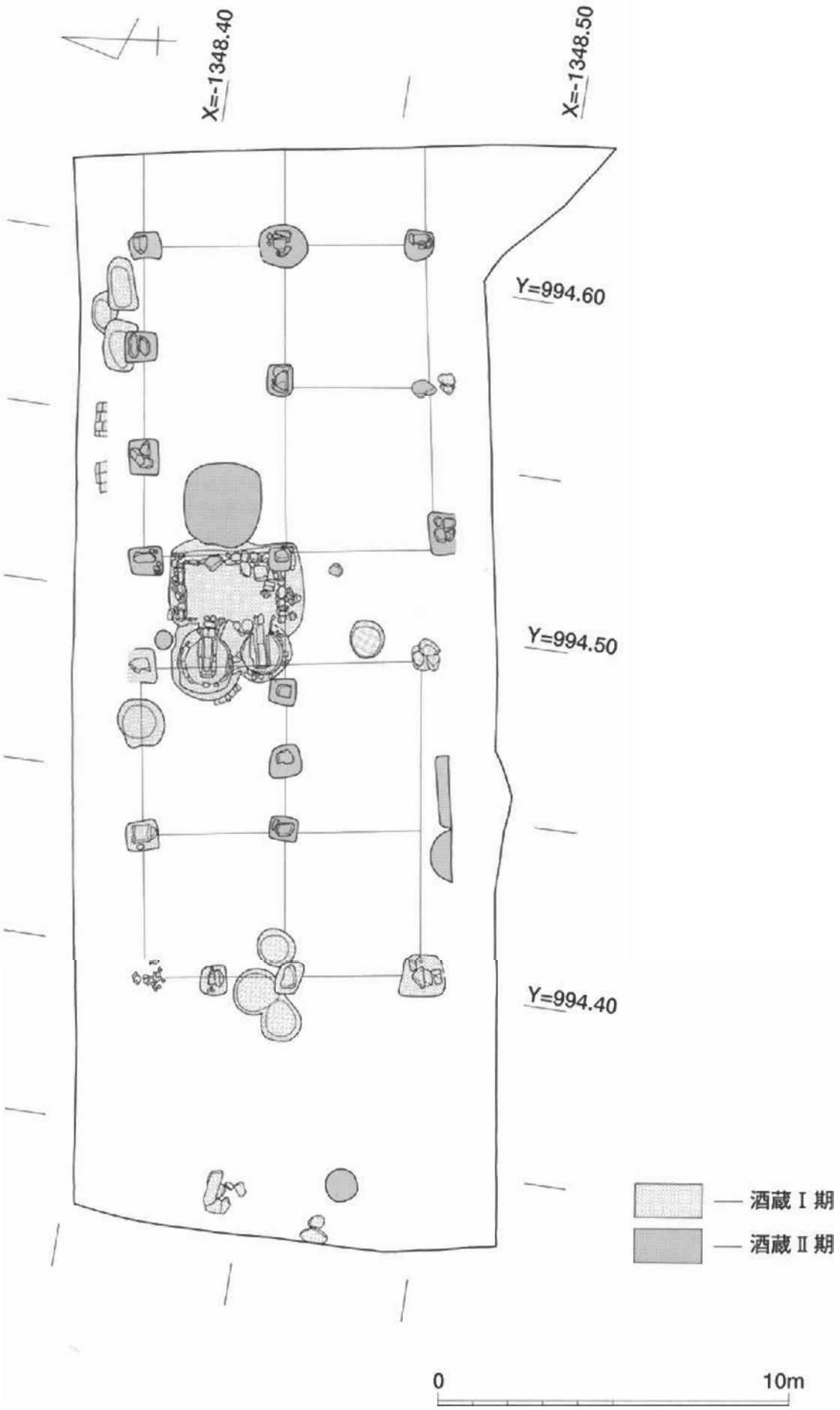


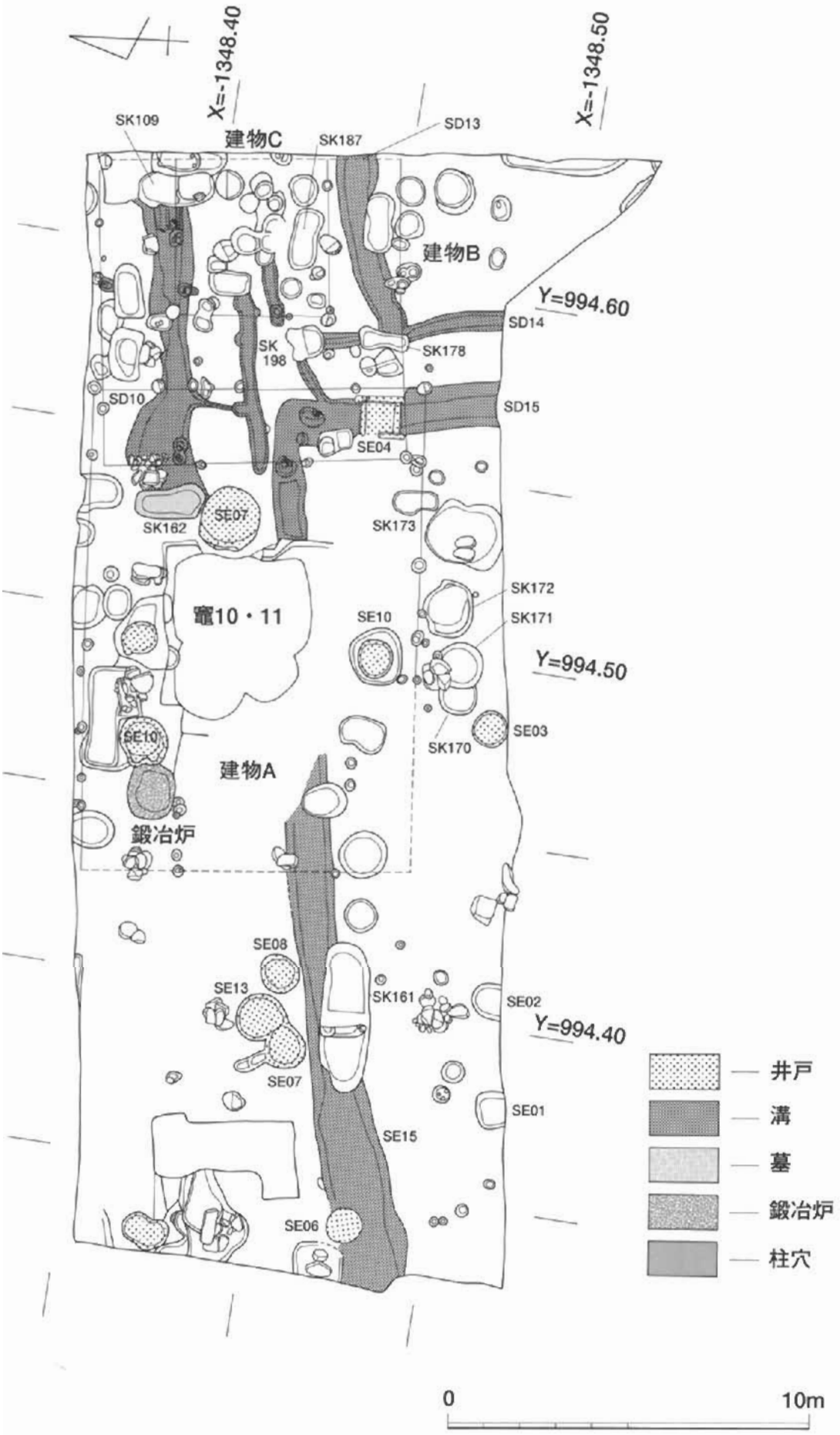


1. 濁黄灰色細砂質極細砂
2. 濁黄灰色極細砂
3. 黄褐色粗砂混り細砂
4. 濁黄灰色極細砂
5. 濁茶灰色細砂
6. 灰茶色細砂混りシルト（瓦含む）
7. 濁灰茶礫・細砂混り極細砂
8. 濁黄茶色シルト混り細砂
9. 黄茶色細砂
10. 濁茶灰色シルト混り細砂
11. 濁褐灰色シルト混り細砂
12. 濁茶灰色シルト混り細砂

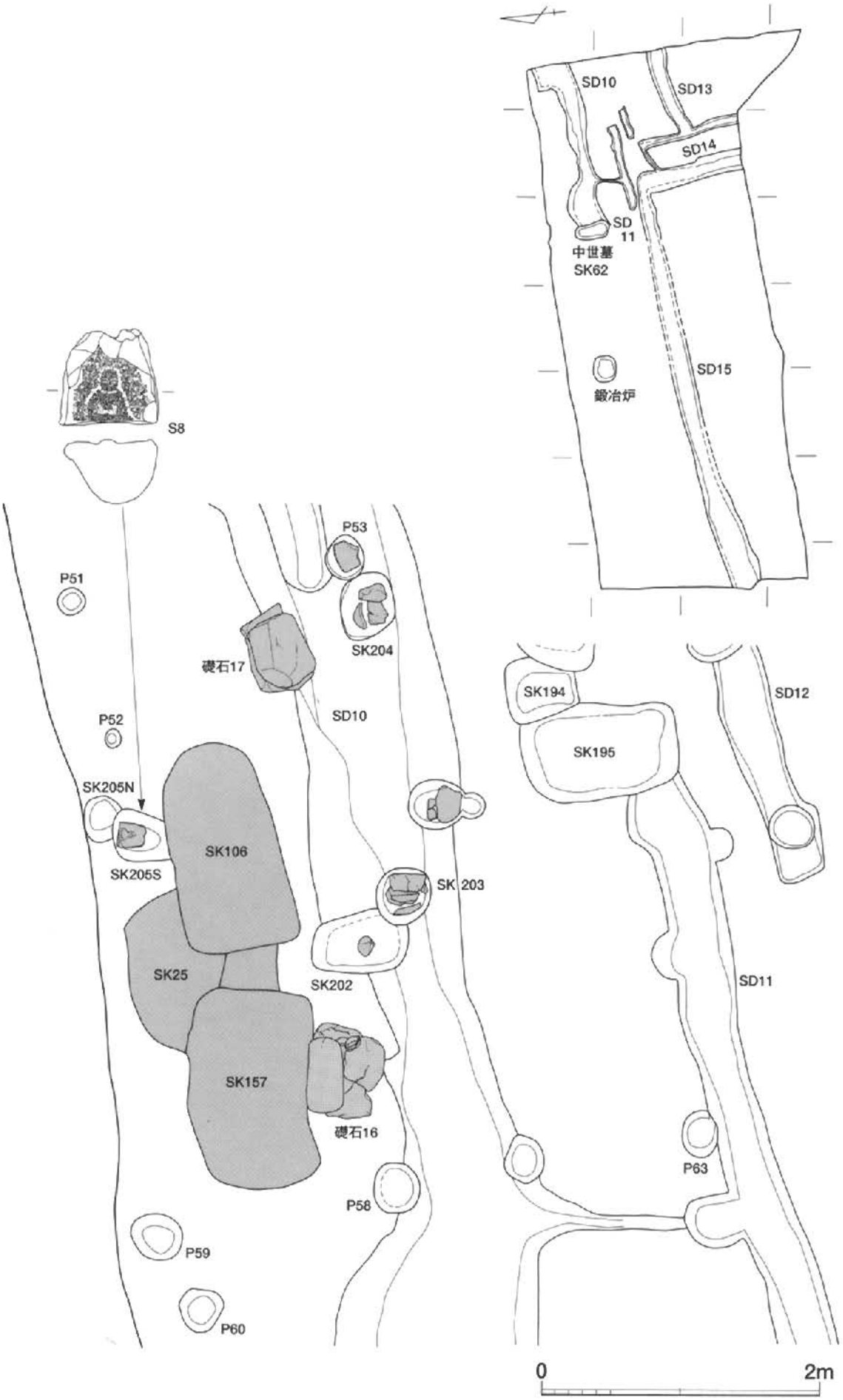
0　2m

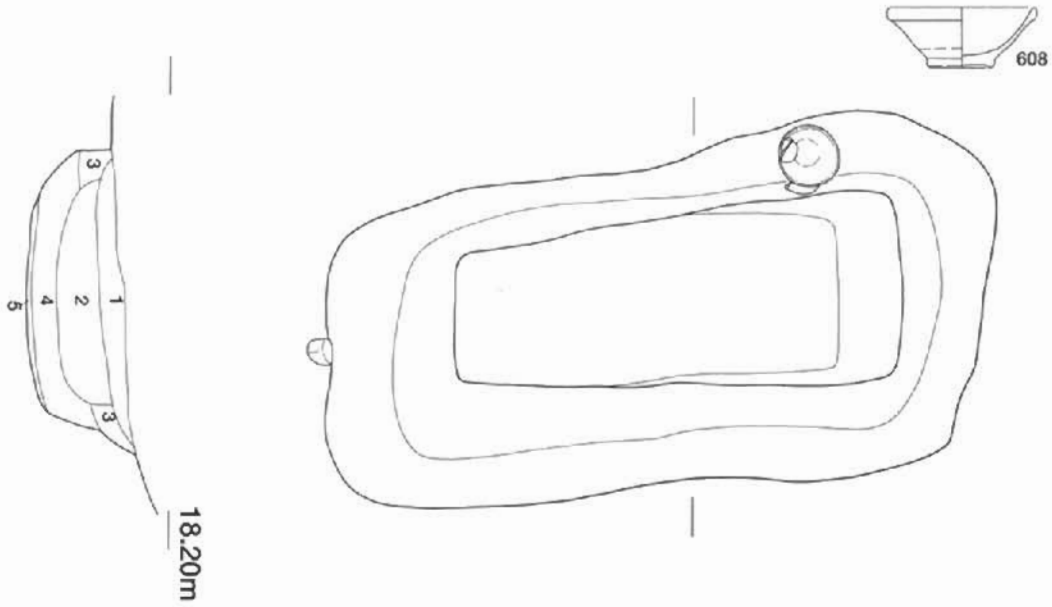
図版三八　第一一四次調査C地区遺構　酒蔵Ⅰ・Ⅱ期




X=-1348.40
X=-1348.50
Y=994.60
Y=994.50
Y=994.40
建物C
建物B
建物A
竈10・11
鍛冶炉
SK109
SK187
SD13
SD14
SK178
SK 198
SD10
SD15
SE04
SE07
SK162
SK173
SK172
SK171
SE10
SE03
SK170
SE08
SE13
SK161
SE02
SE01
SE15
SE06
井戸
溝
墓
鍛冶炉
柱穴
0
10m

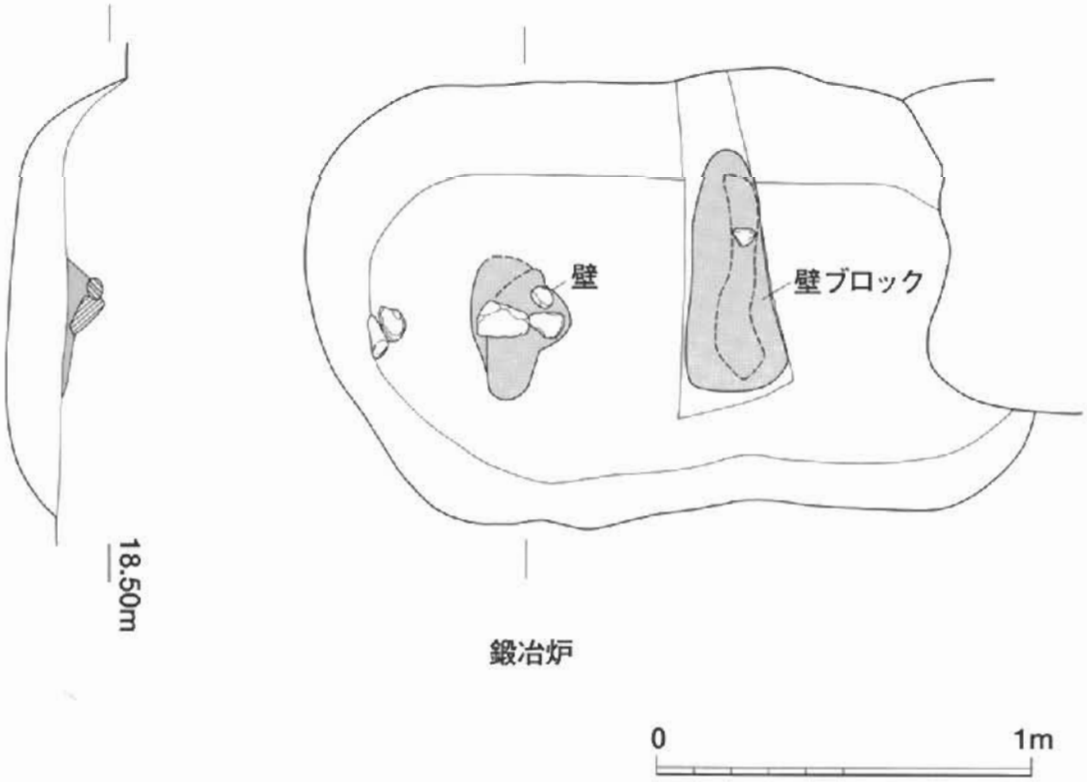
図版四〇　第一一四次調査C地区遺構　中世区画溝と掘立柱建物に伴う根石群



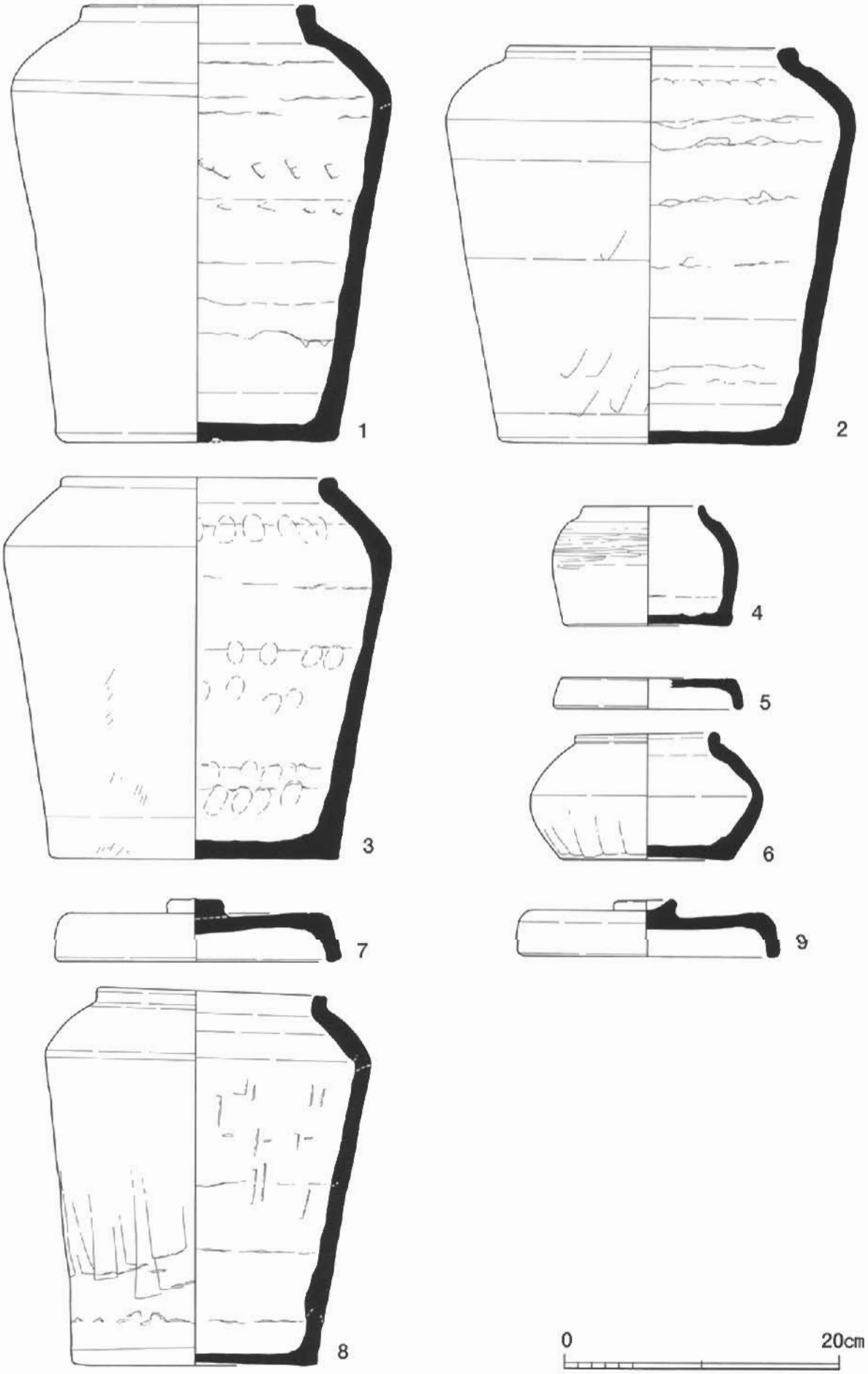


1. 淡赤茶褐色細砂混りシルト
2. 濁褐灰色細砂混りシルト
3. 淡黄灰色細砂混りシルト
4. 濁灰黄色極細砂混りシルト
5. 赤褐色細砂混りシルト

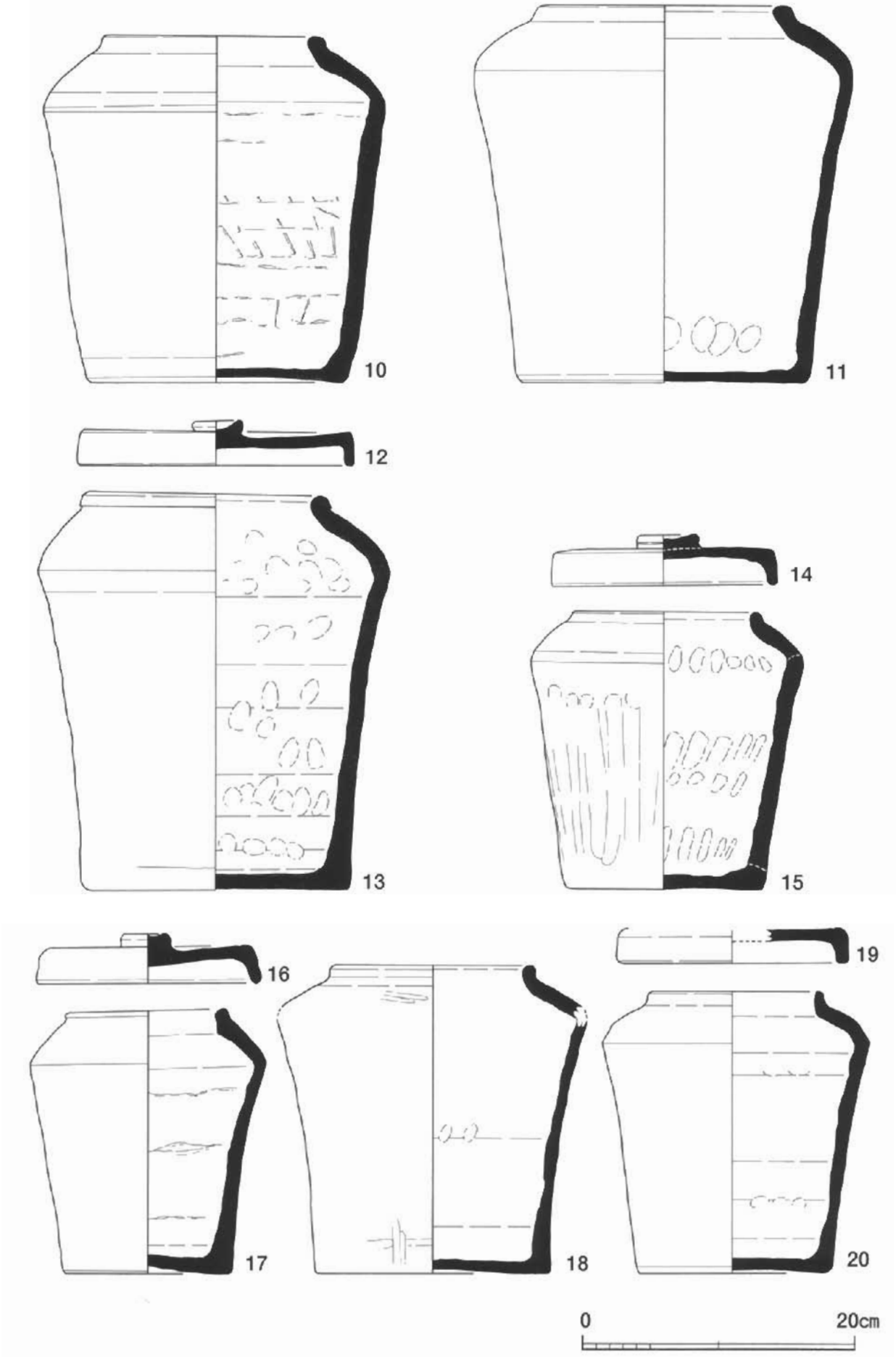
木棺墓（SK62）



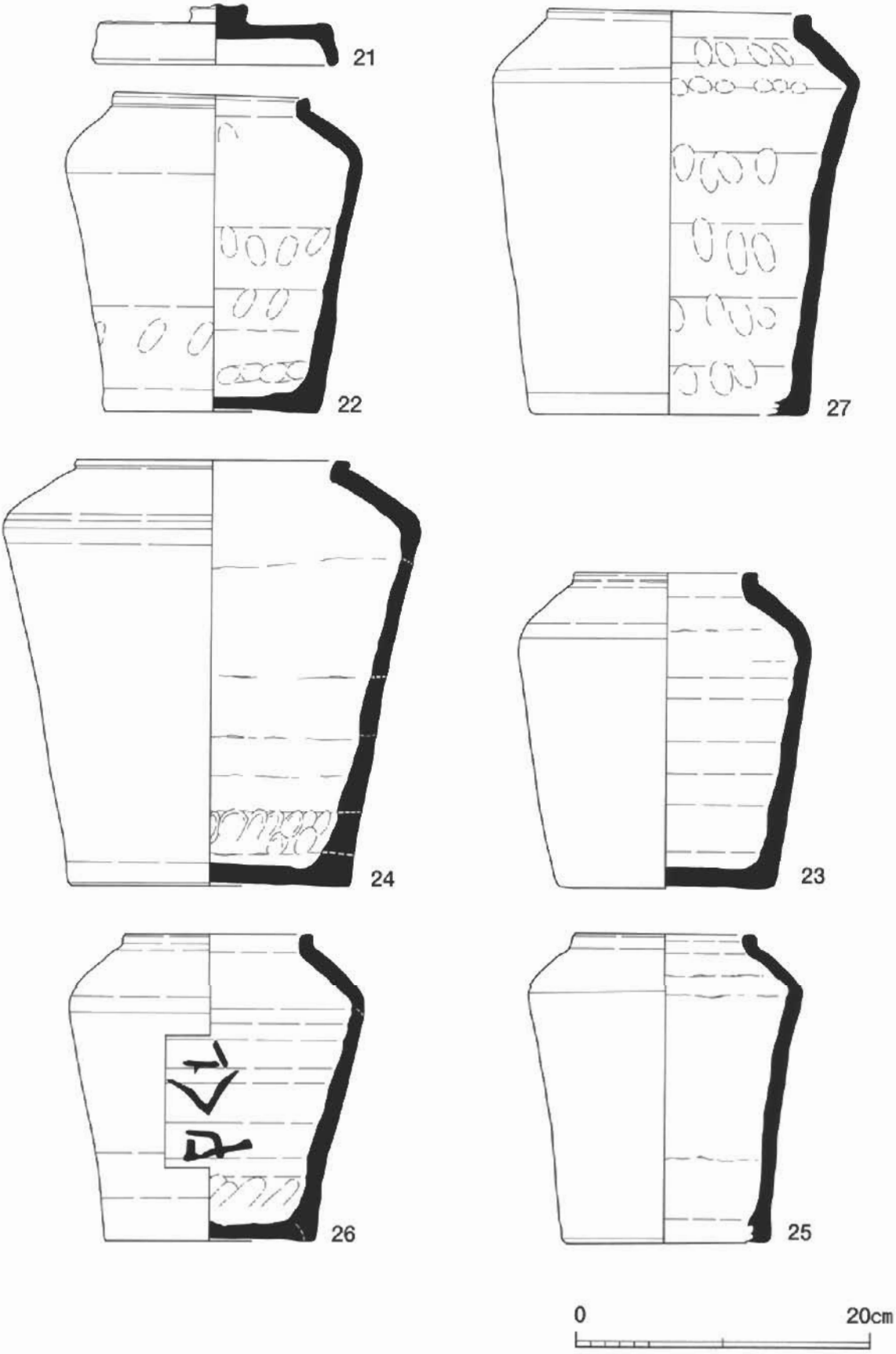
鍛冶炉



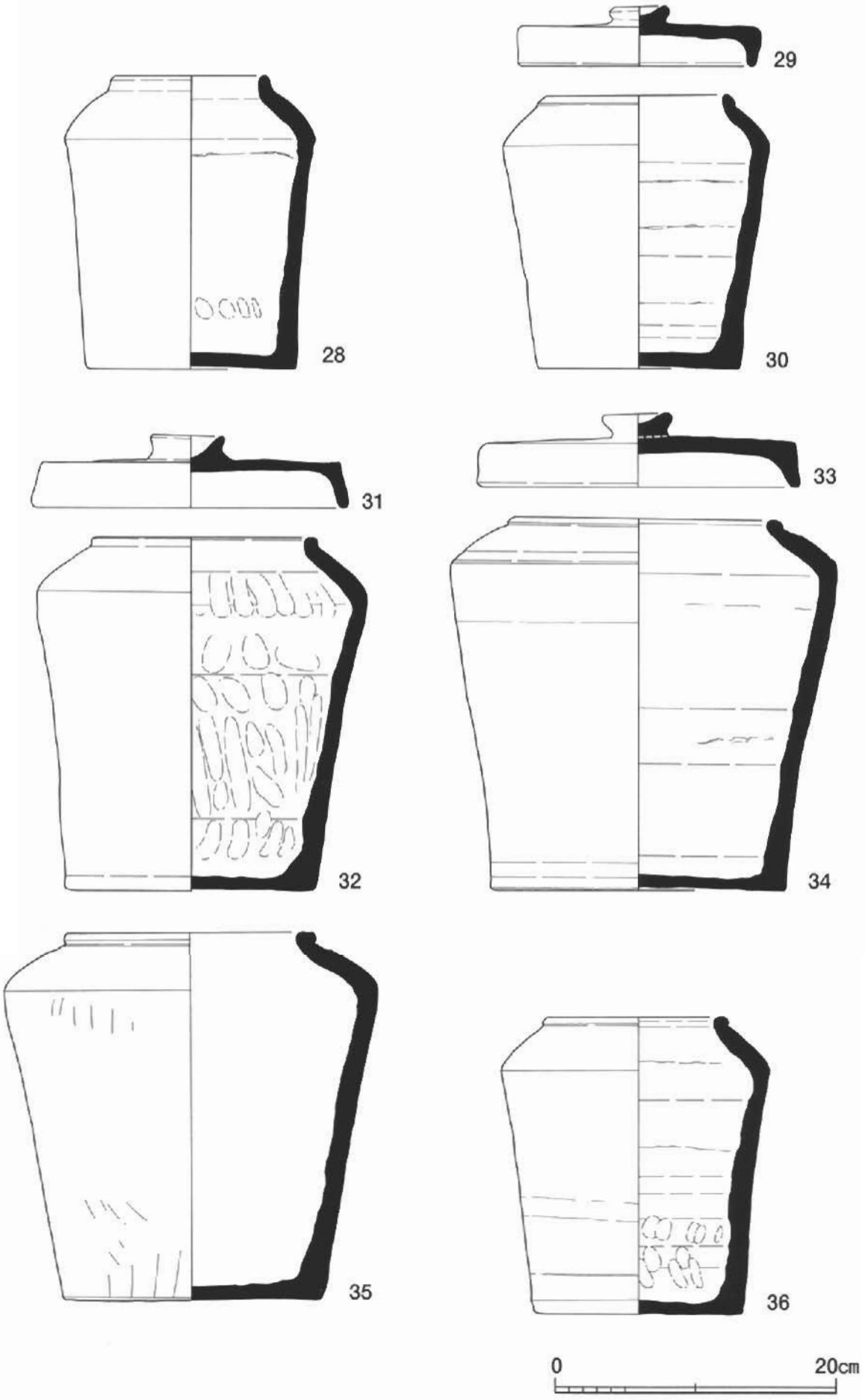
火消壷(1)



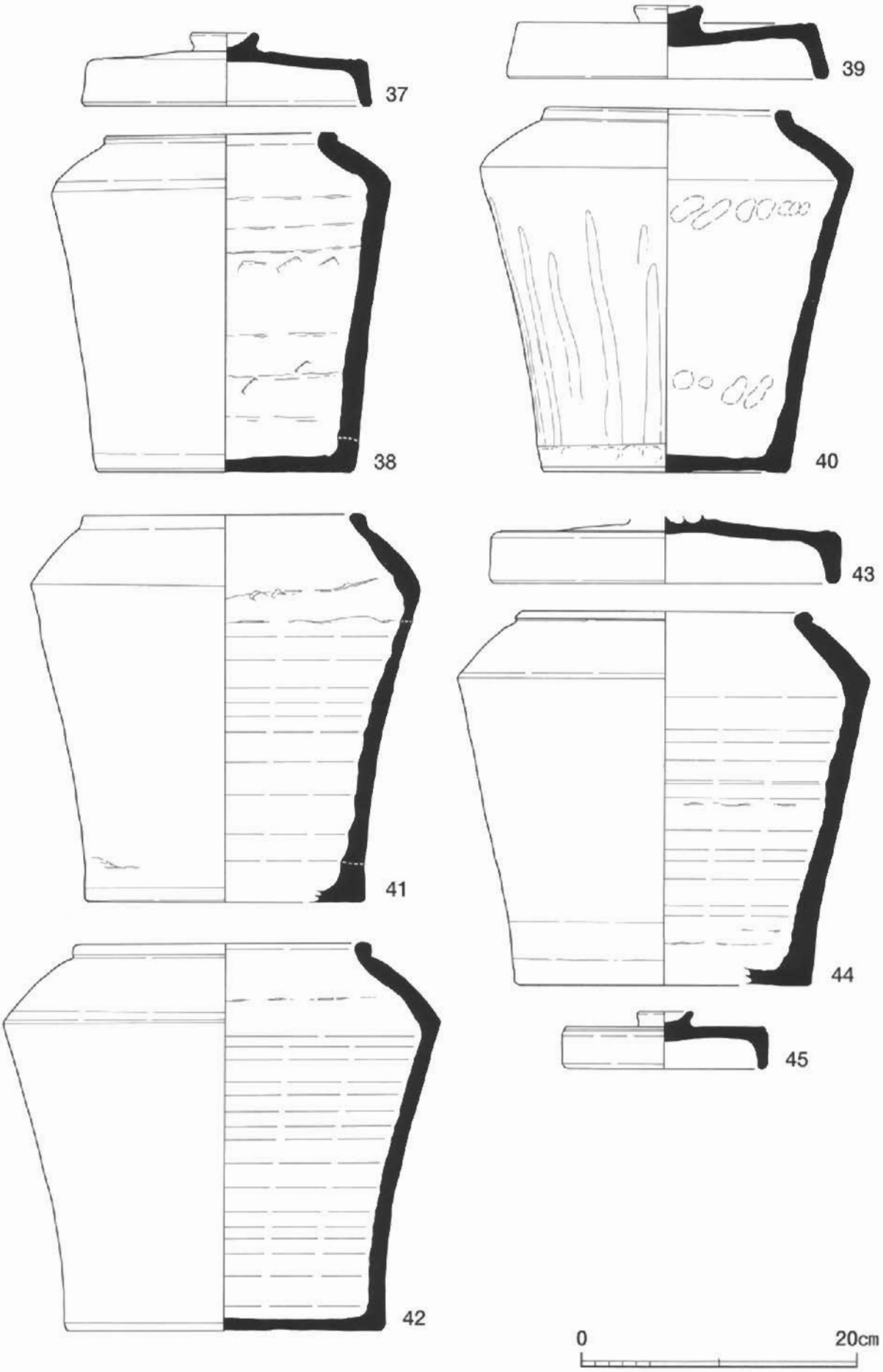
火消壷(2)



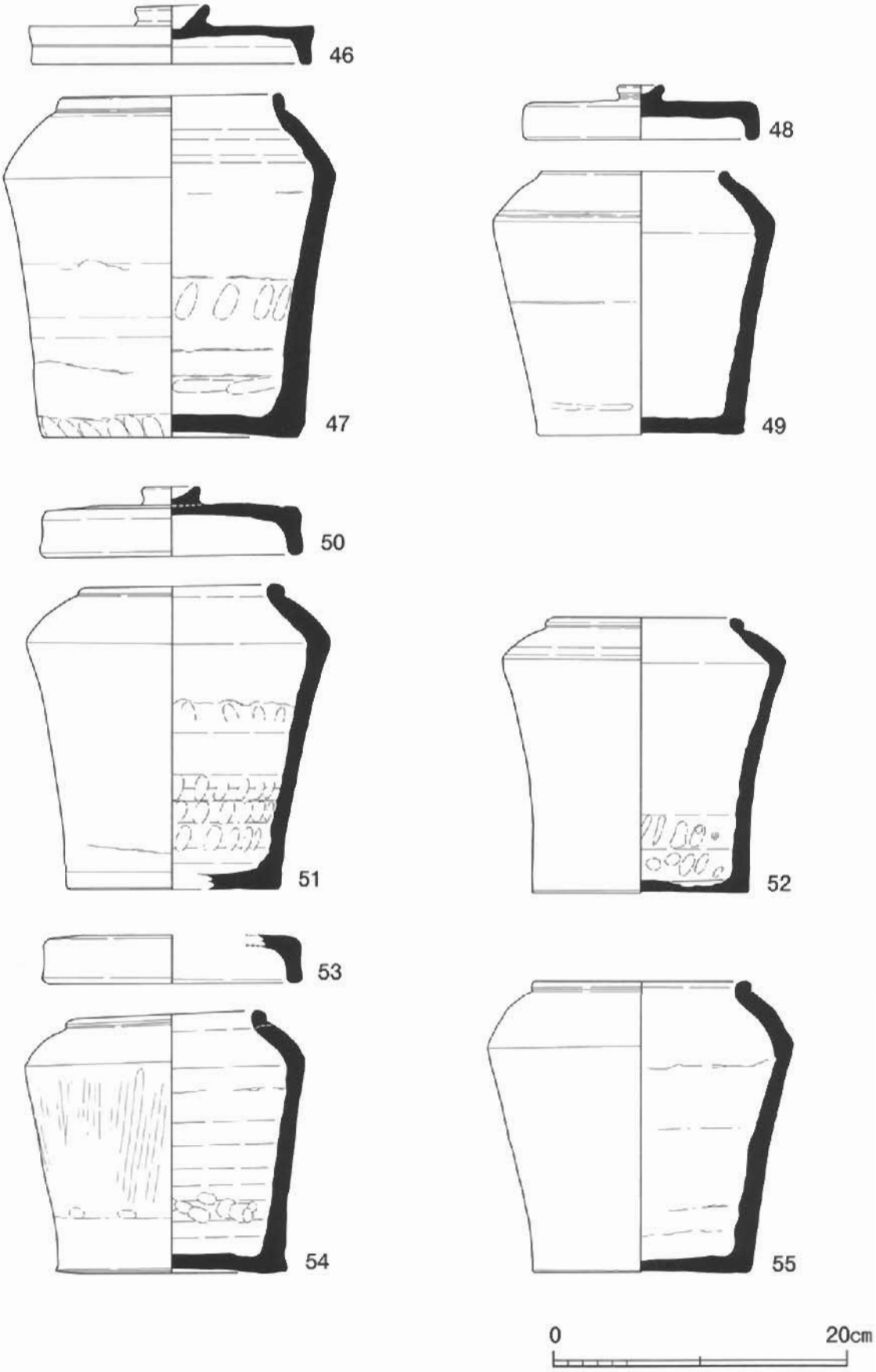
火消壷(3)



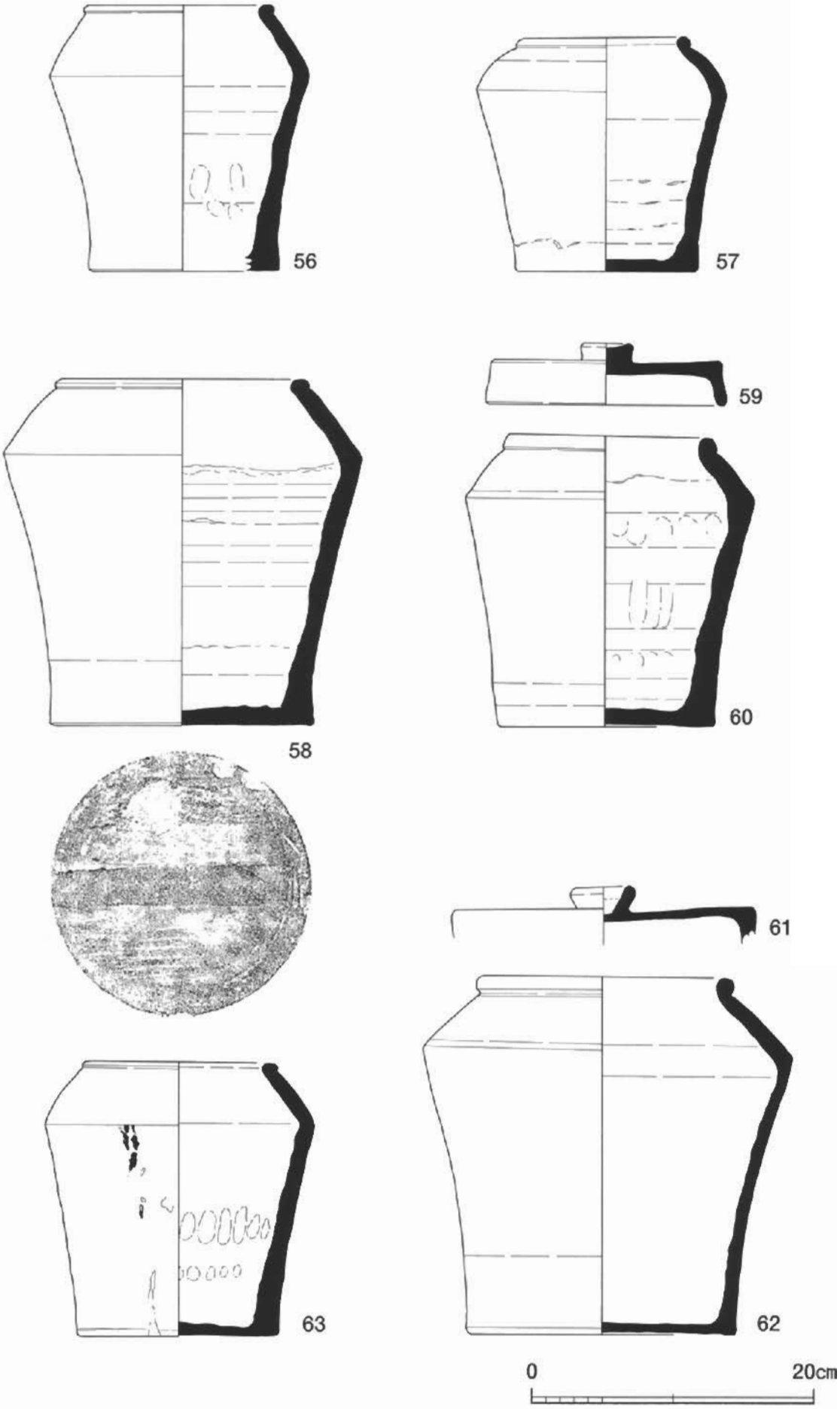
火消壷(4)



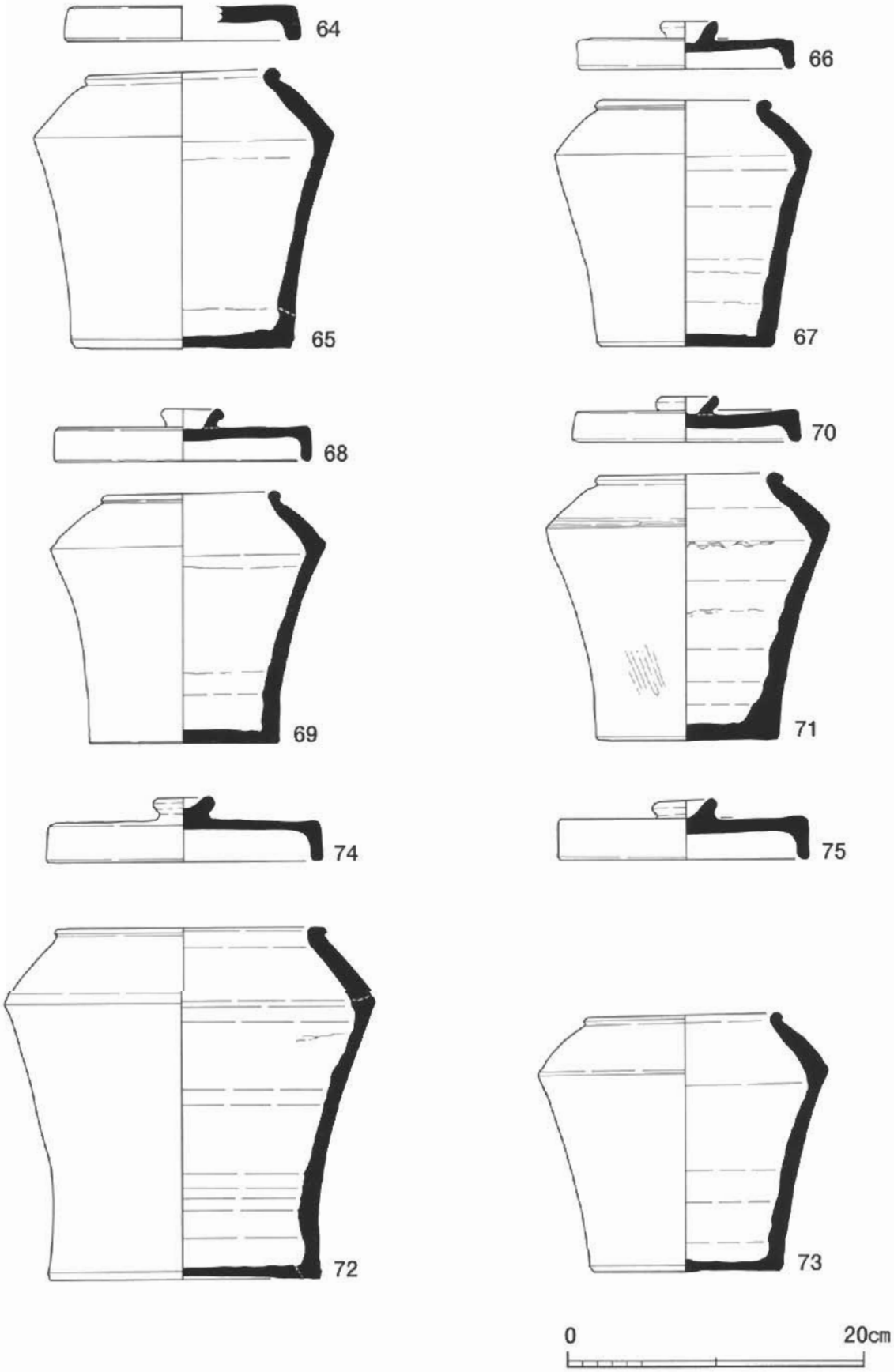
火消壷(5)



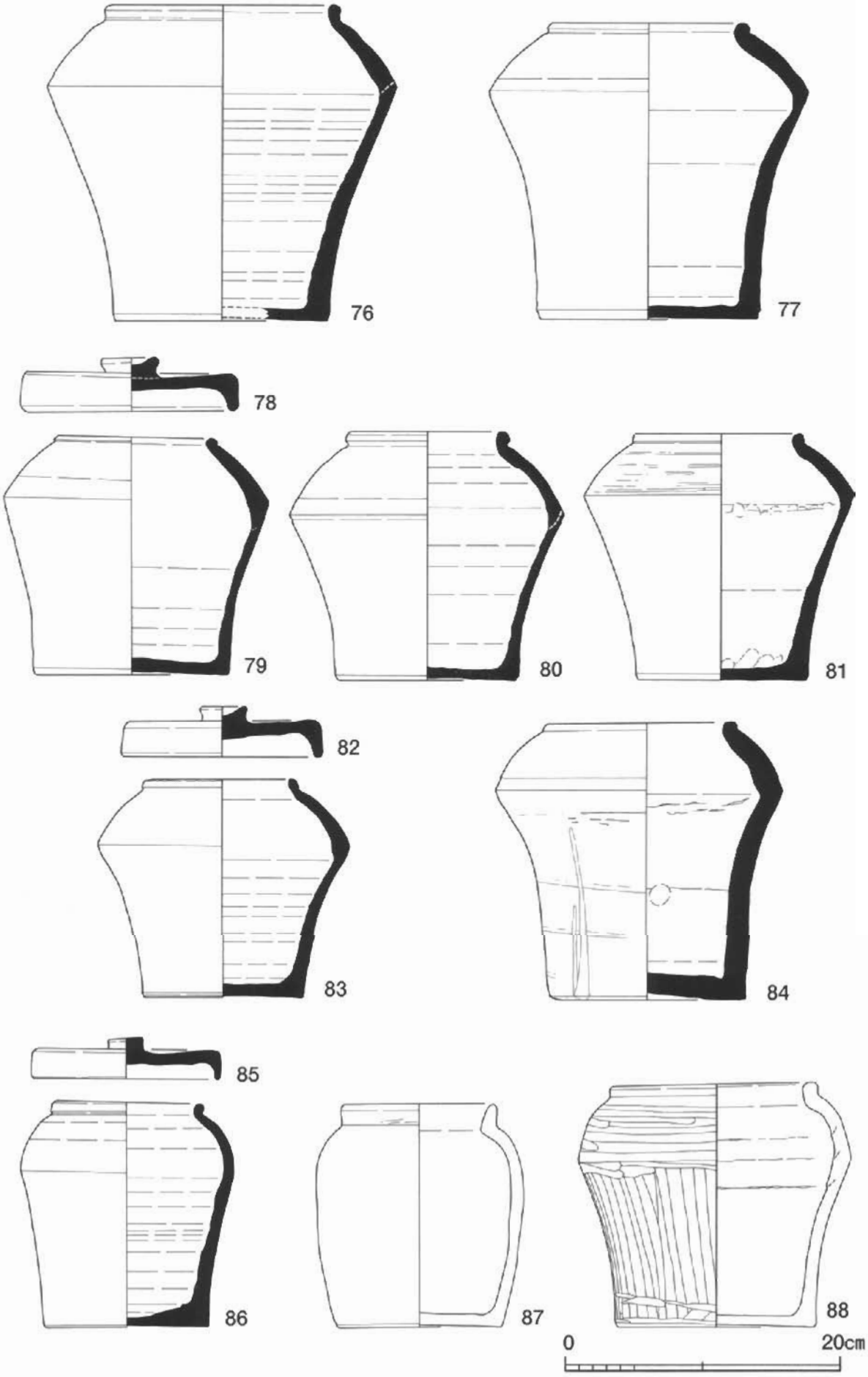
火消壷(6)



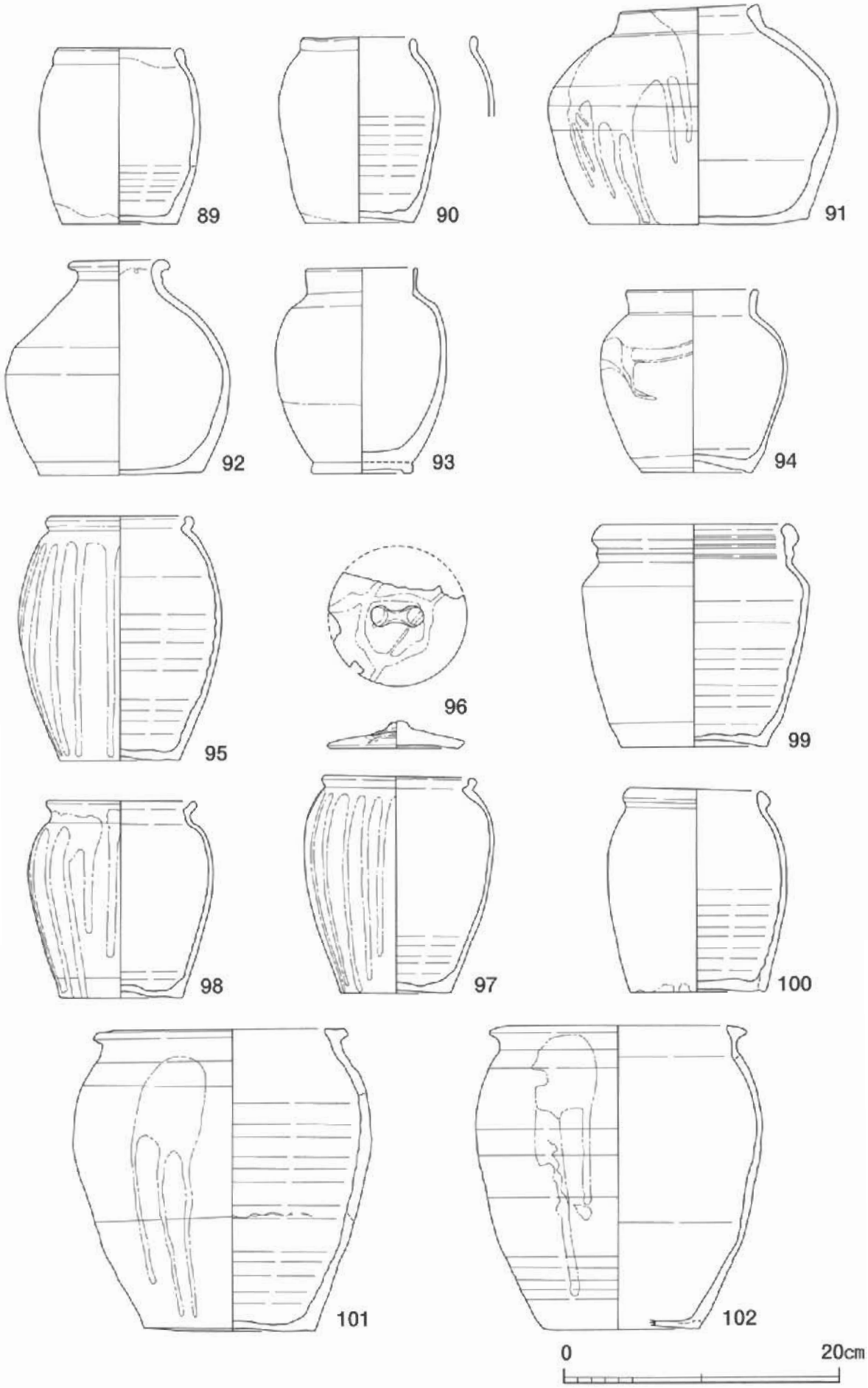
火消壷(7)



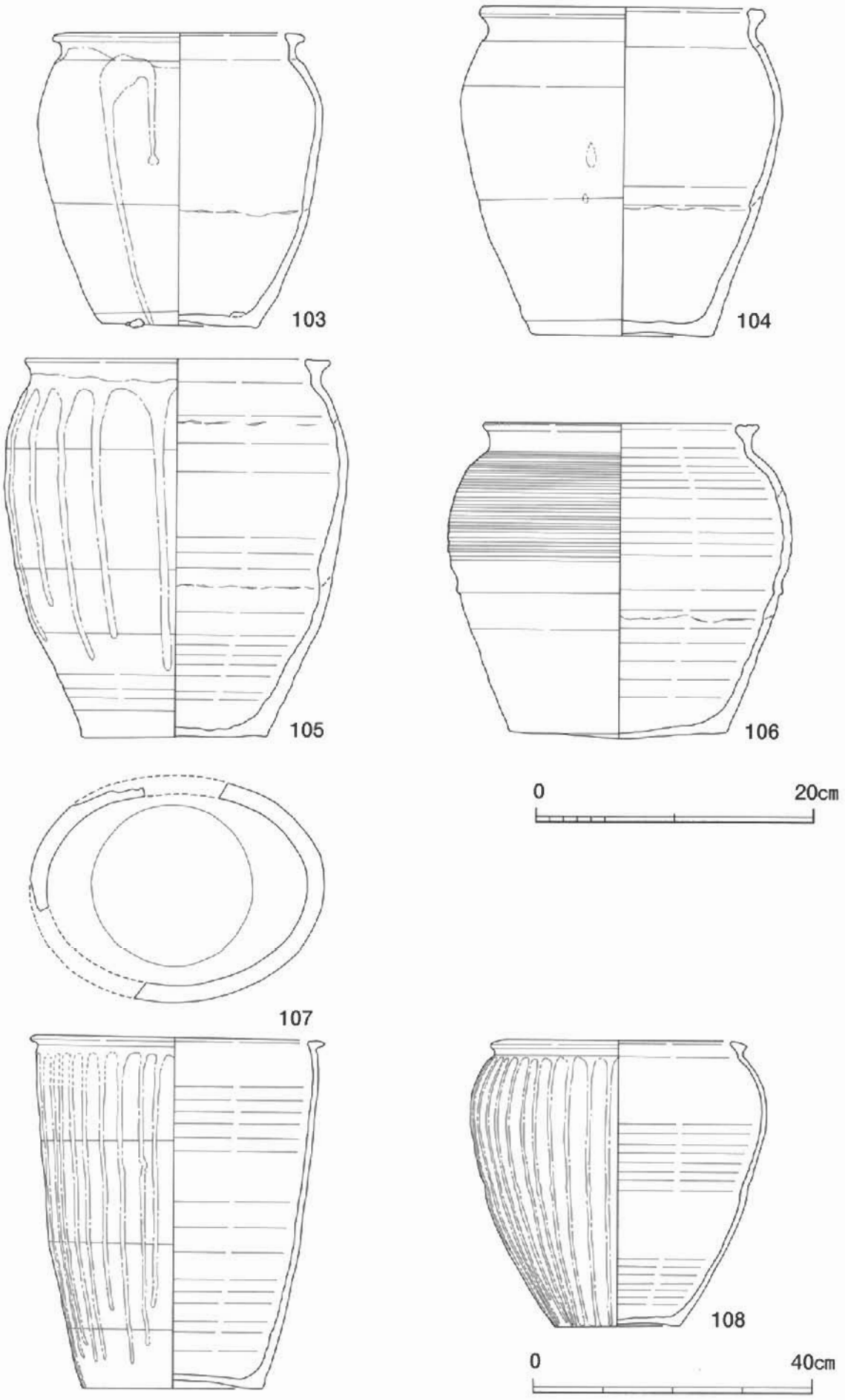
火消壷(8)



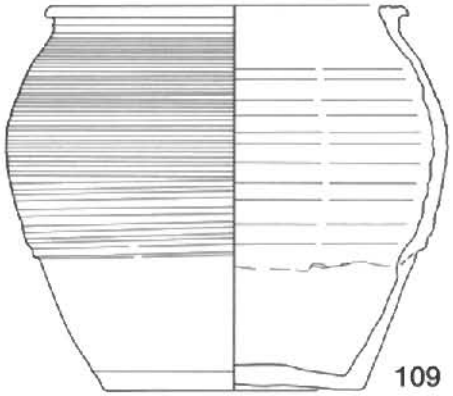
火消壷(9)

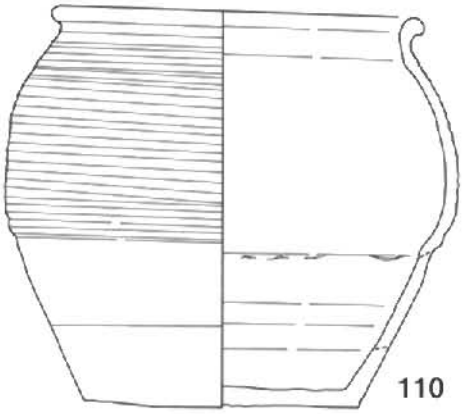


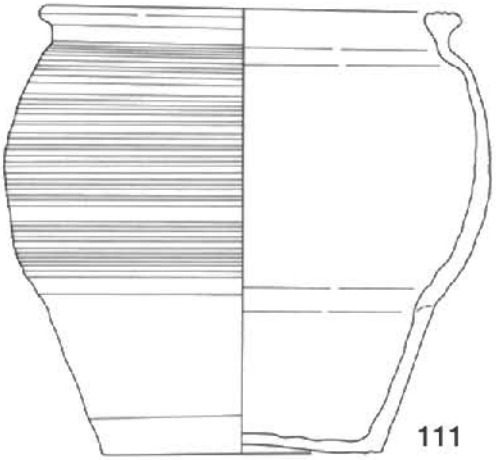
陶磁器(1)

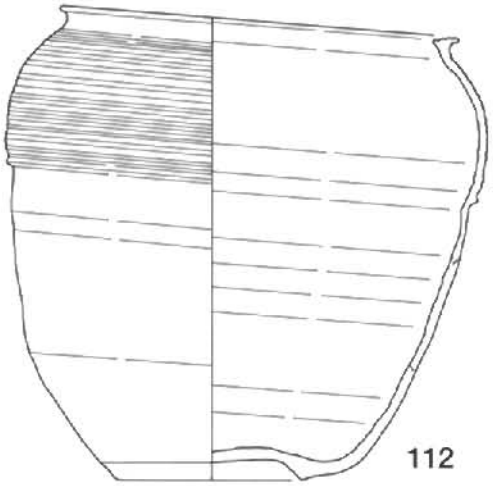


陶磁器(2)

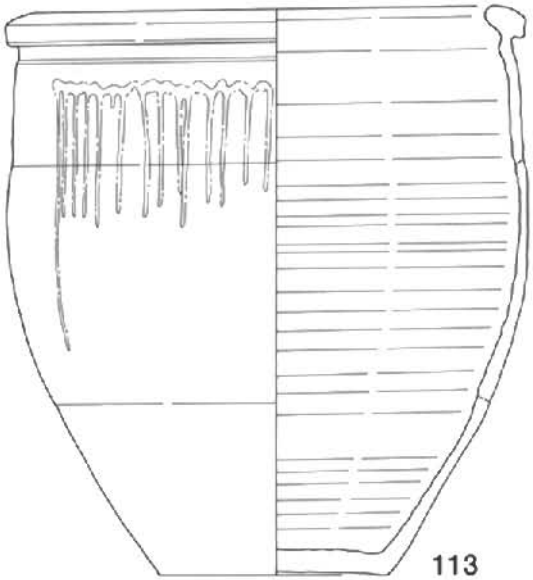


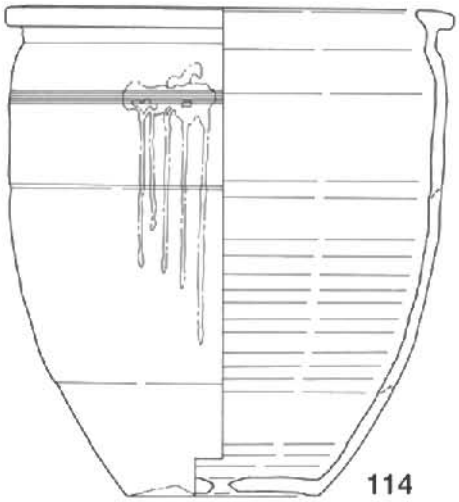




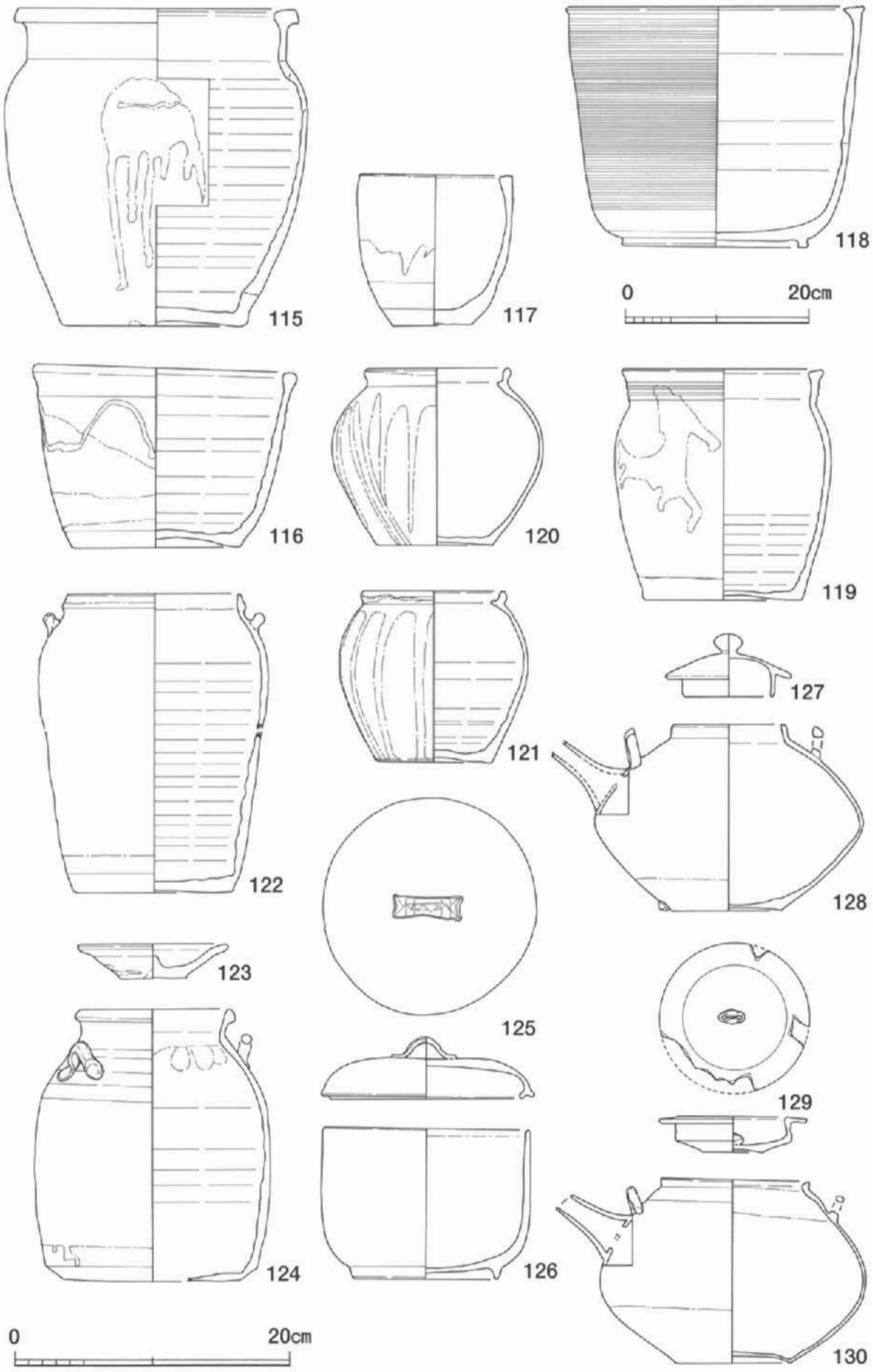


0　20cm

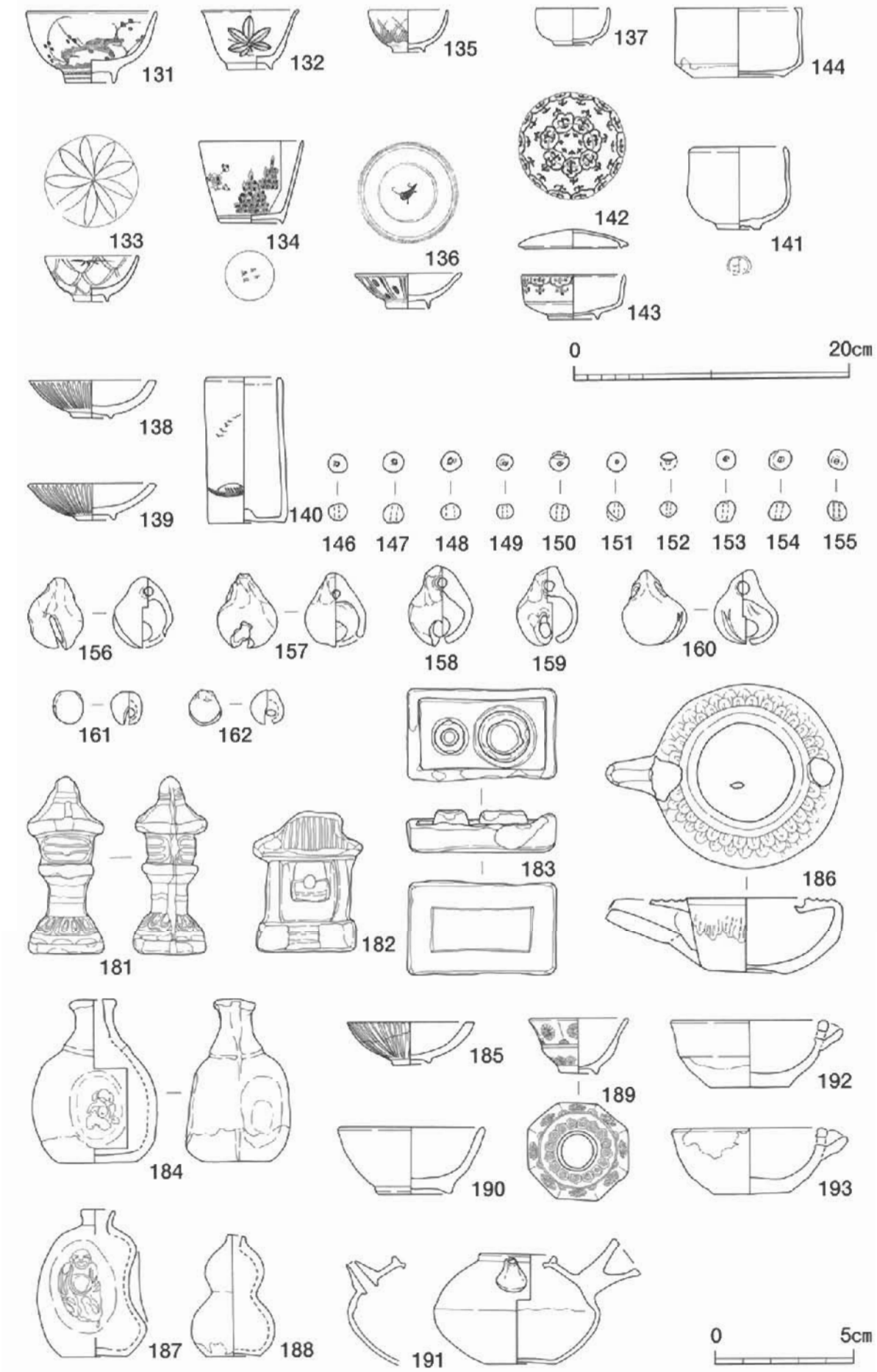




0　40cm

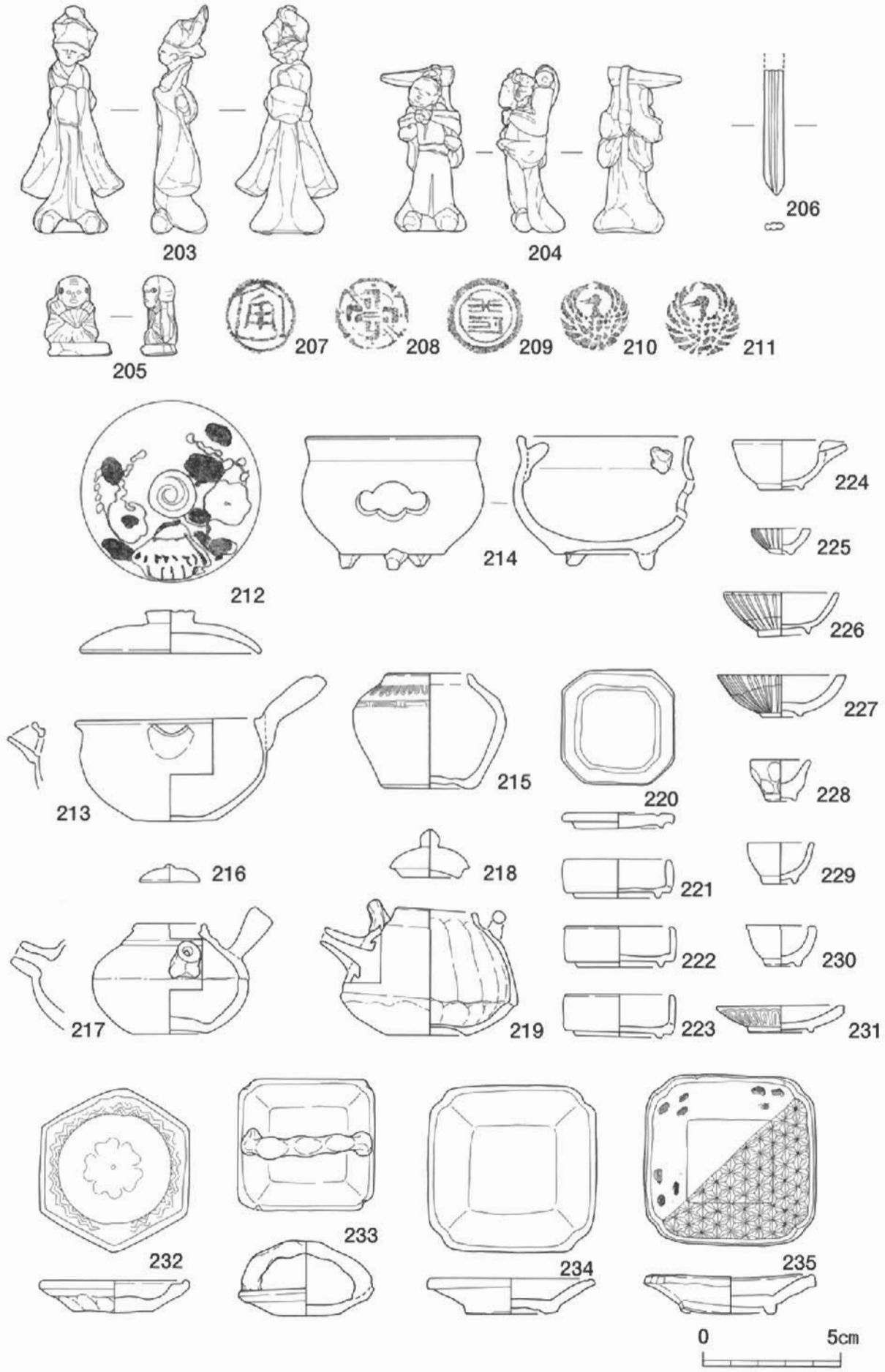

115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
0
20cm
0
20cm

陶磁器(4)

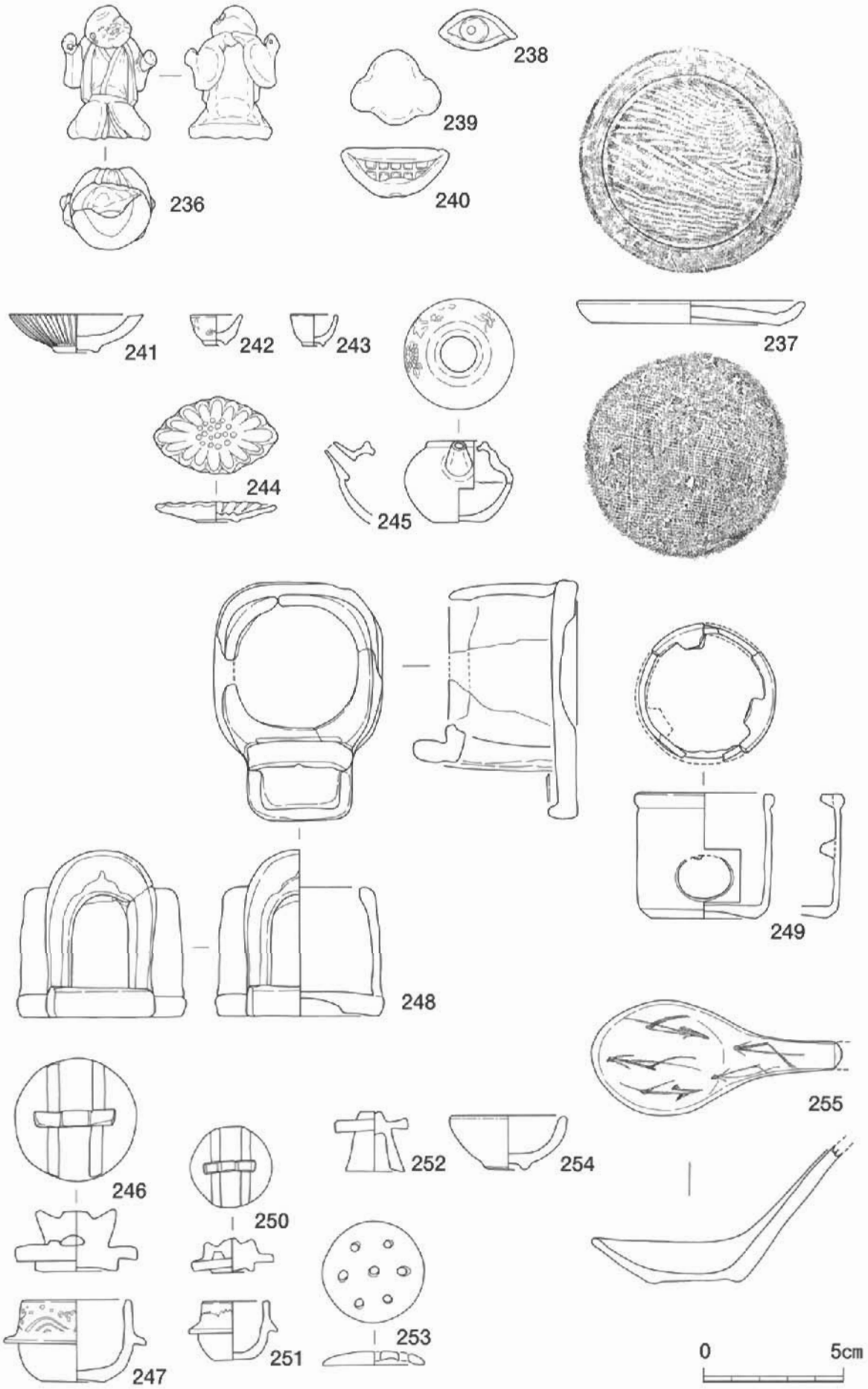

131
132
135
137
144
133
134
136
142
141
143
0
20cm
138
139
140
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
181
182
183
186
184
185
189
192
190
193
187
188
191
0
5cm

陶磁器(5)　・ミニチュア(1)

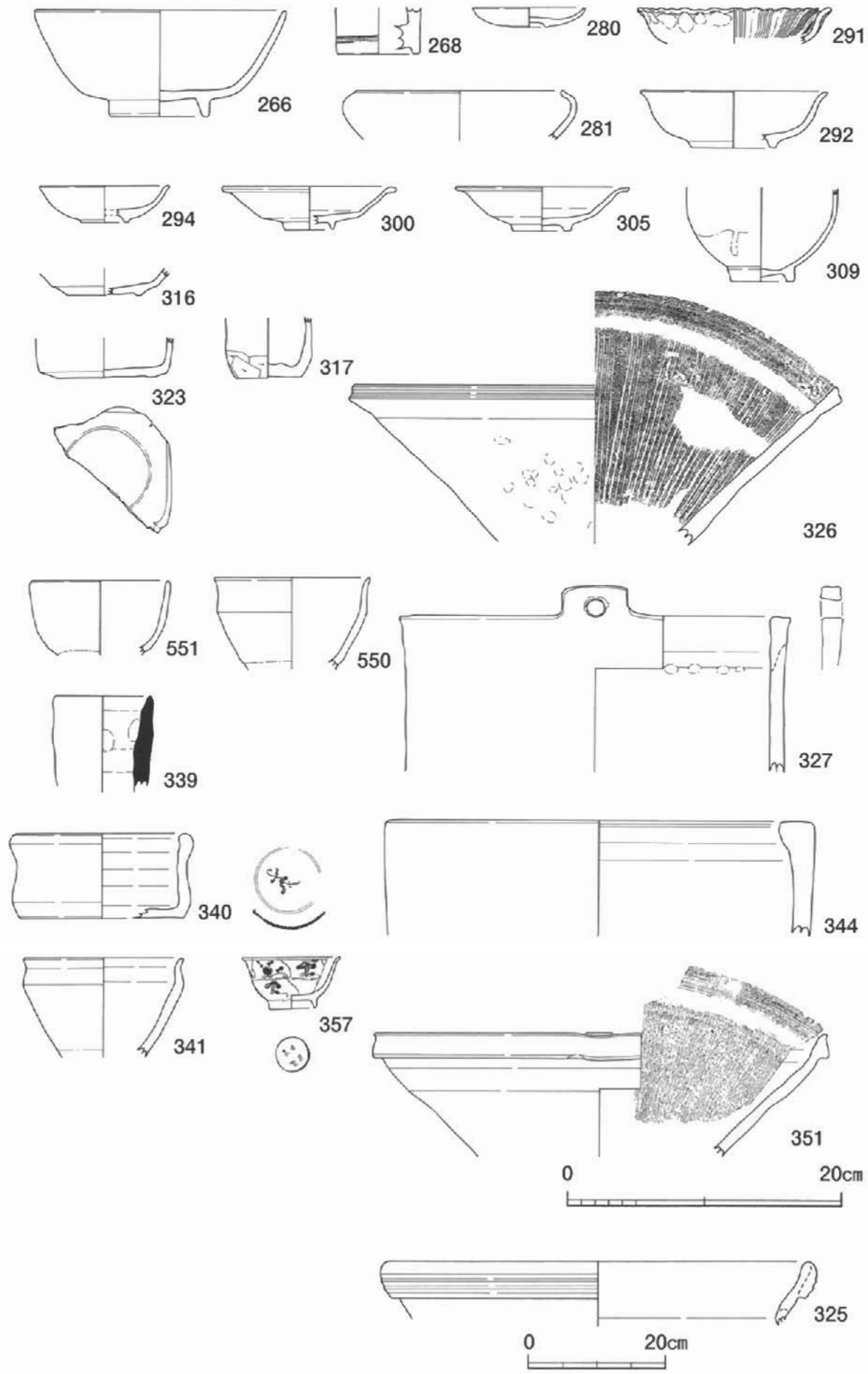
ミニチュア(2)


203
204
206
205
207
208
209
210
211
212
214
224
225
226
213
215
220
227
228
216
218
221
229
217
219
222
230
223
231
232
233
234
235
0
5cm

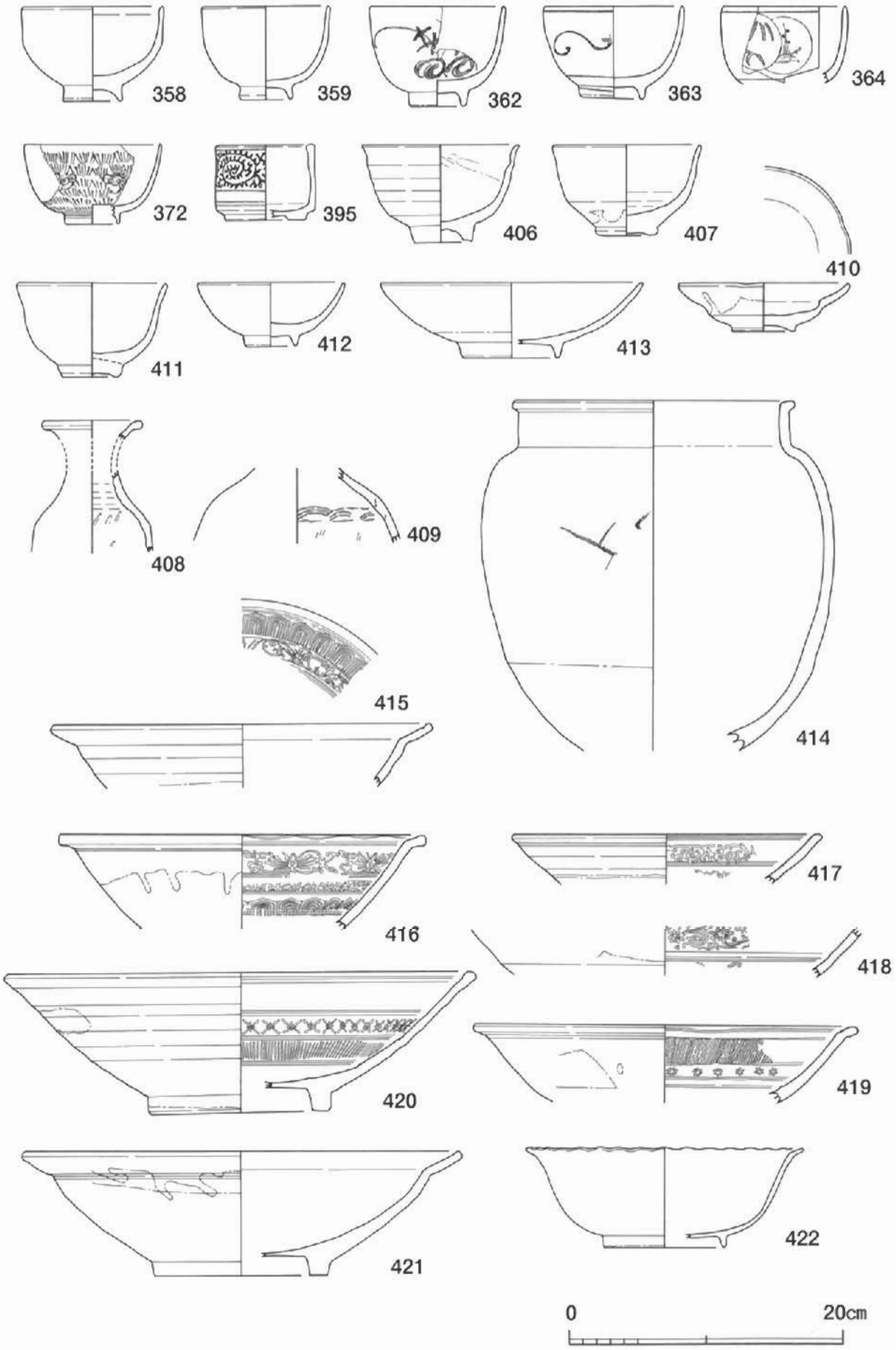
ミニチュア(3)


236
238
239
240
237
241
242
243
244
245
248
249
246
250
252
254
255
247
251
253
0
5cm

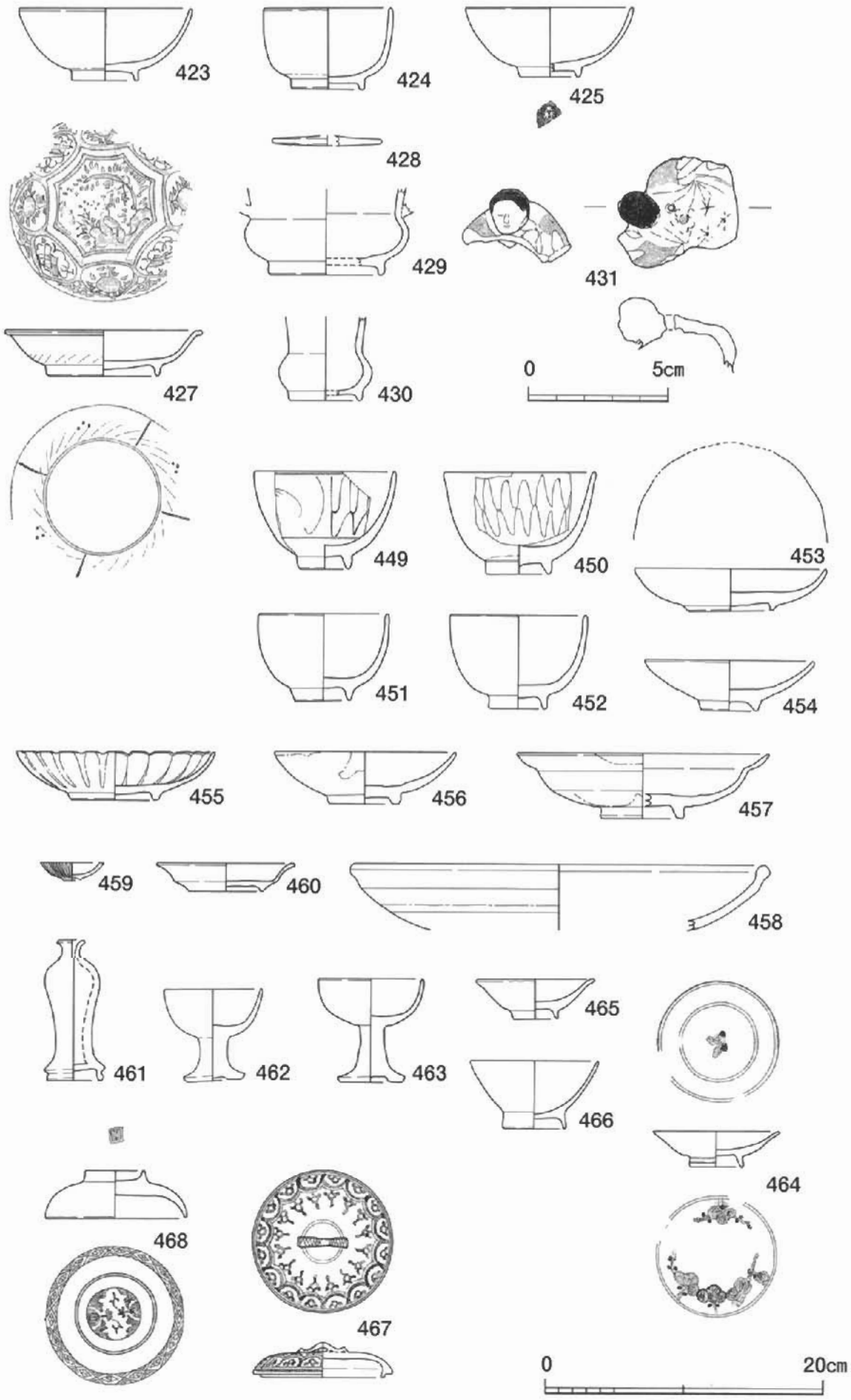
ミニチュア(4)　・陶磁器(6)


266
268
280
291
281
292
294
300
305
309
316
317
323
326
551
550
327
339
340
344
341
357
351
0
20cm
325
0
20cm

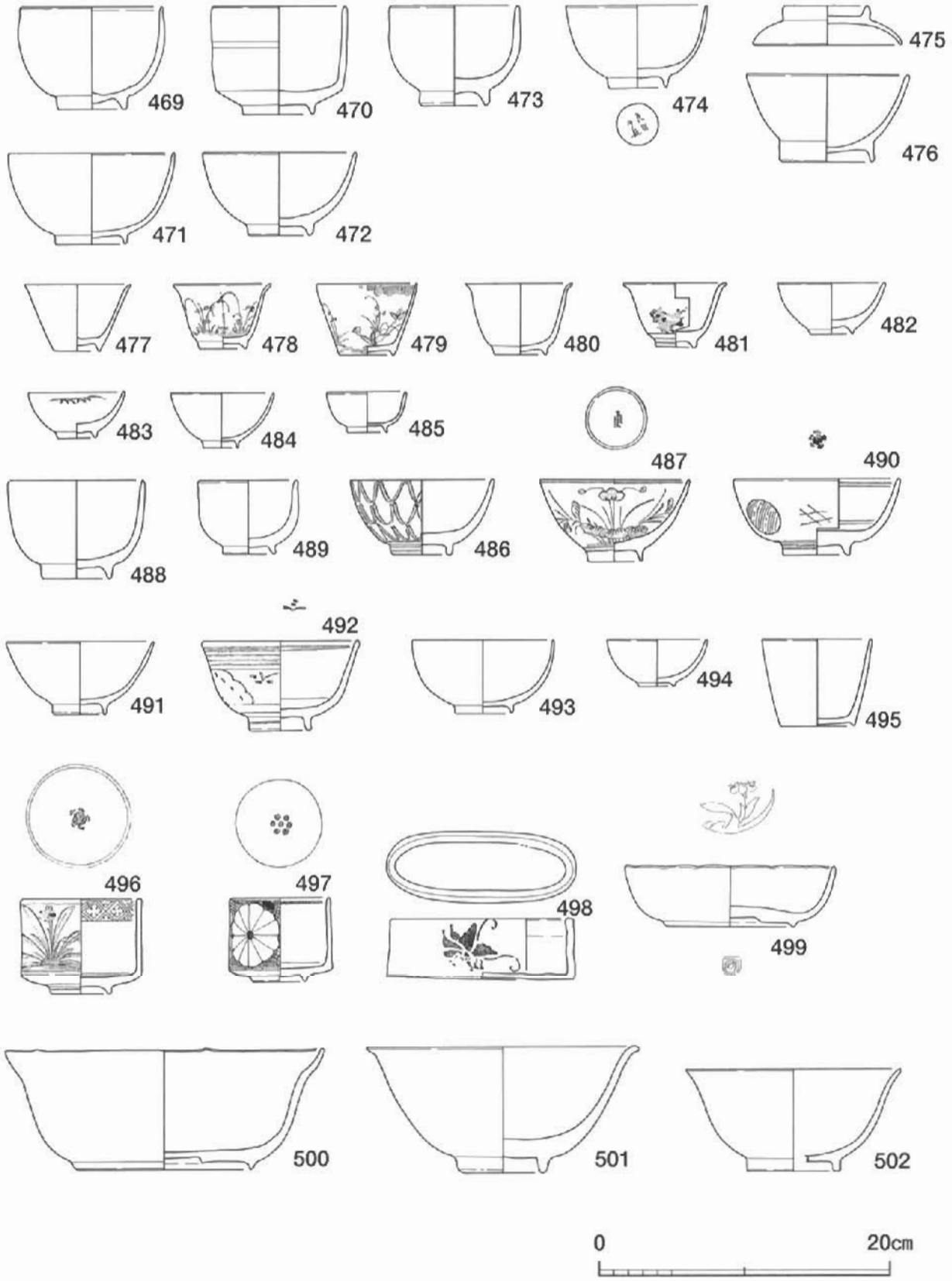
陶磁器(7)


358
359
362
363
364
372
395
406
407
410
411
412
413
408
409
415
414
416
417
418
420
419
421
422
0
20cm

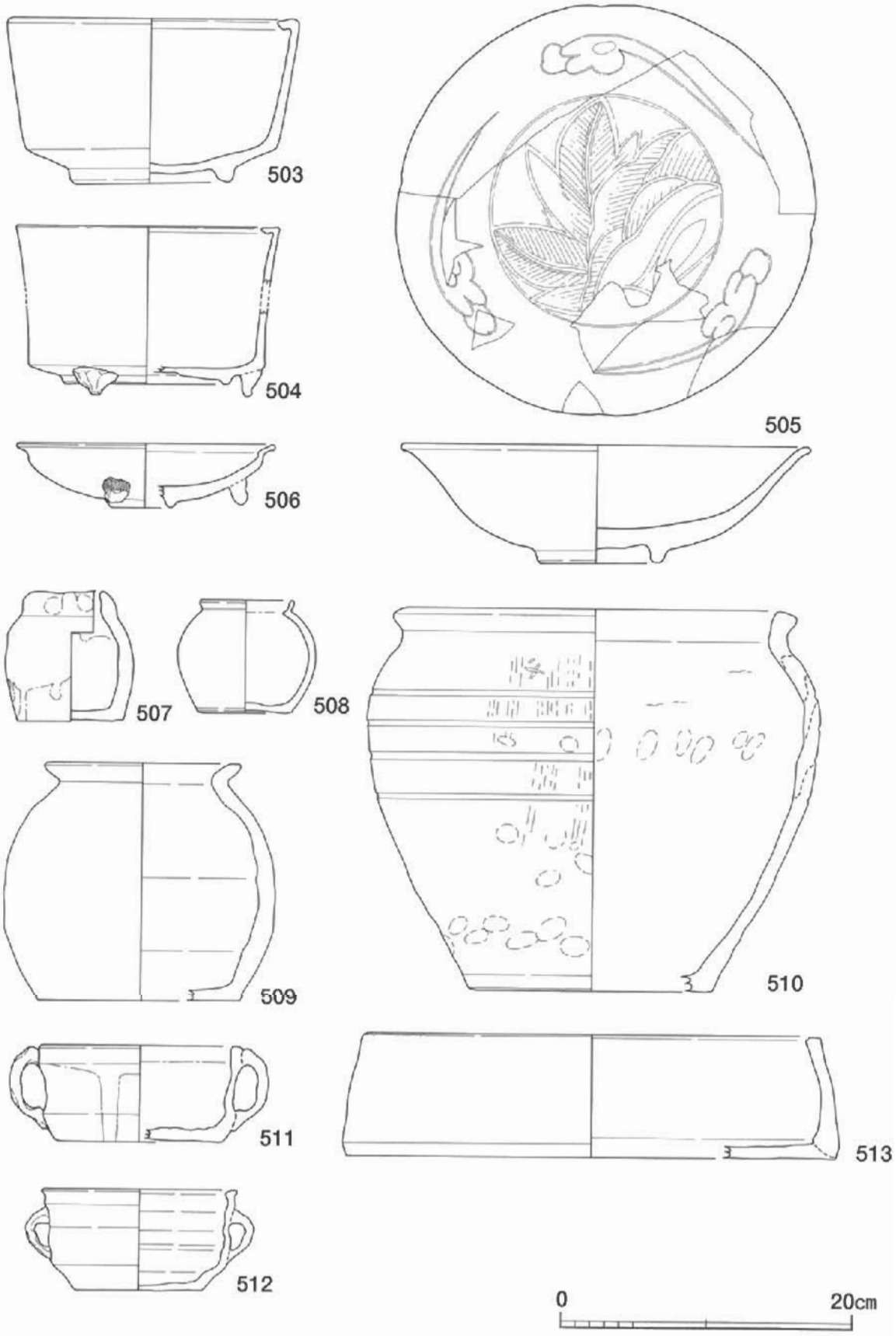
陶磁器(8)

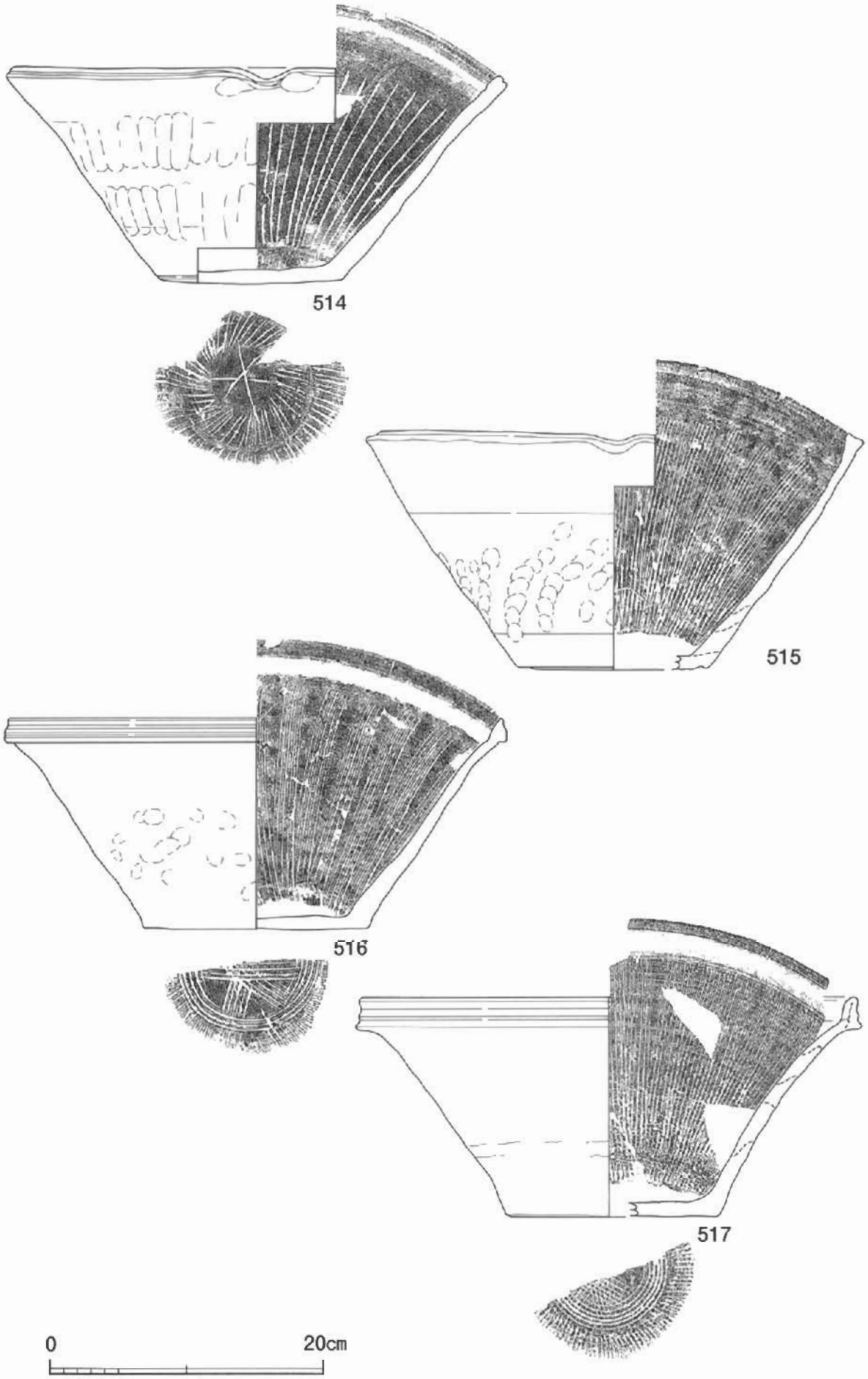

423
424
425
428
429
431
427
430
0
5cm
449
450
453
451
452
454
455
456
457
459
460
458
461
462
463
465
466
464
468
467
0
20cm

陶磁器(9)

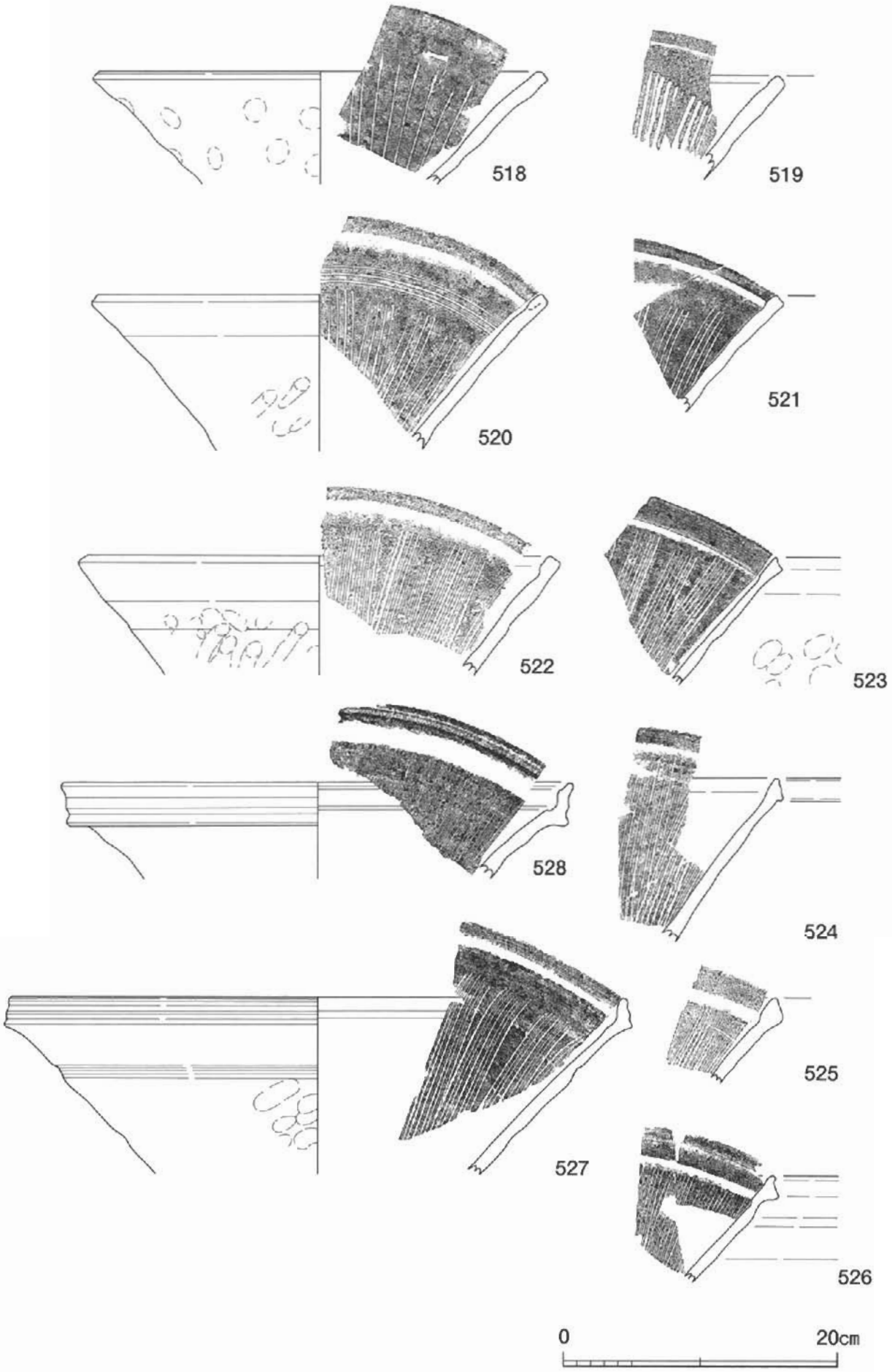

469
470
473
474
475
476
471
472
477
478
479
480
481
482
483
484
485
487
490
488
489
486
492
491
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
0
20cm

陶磁器(10)

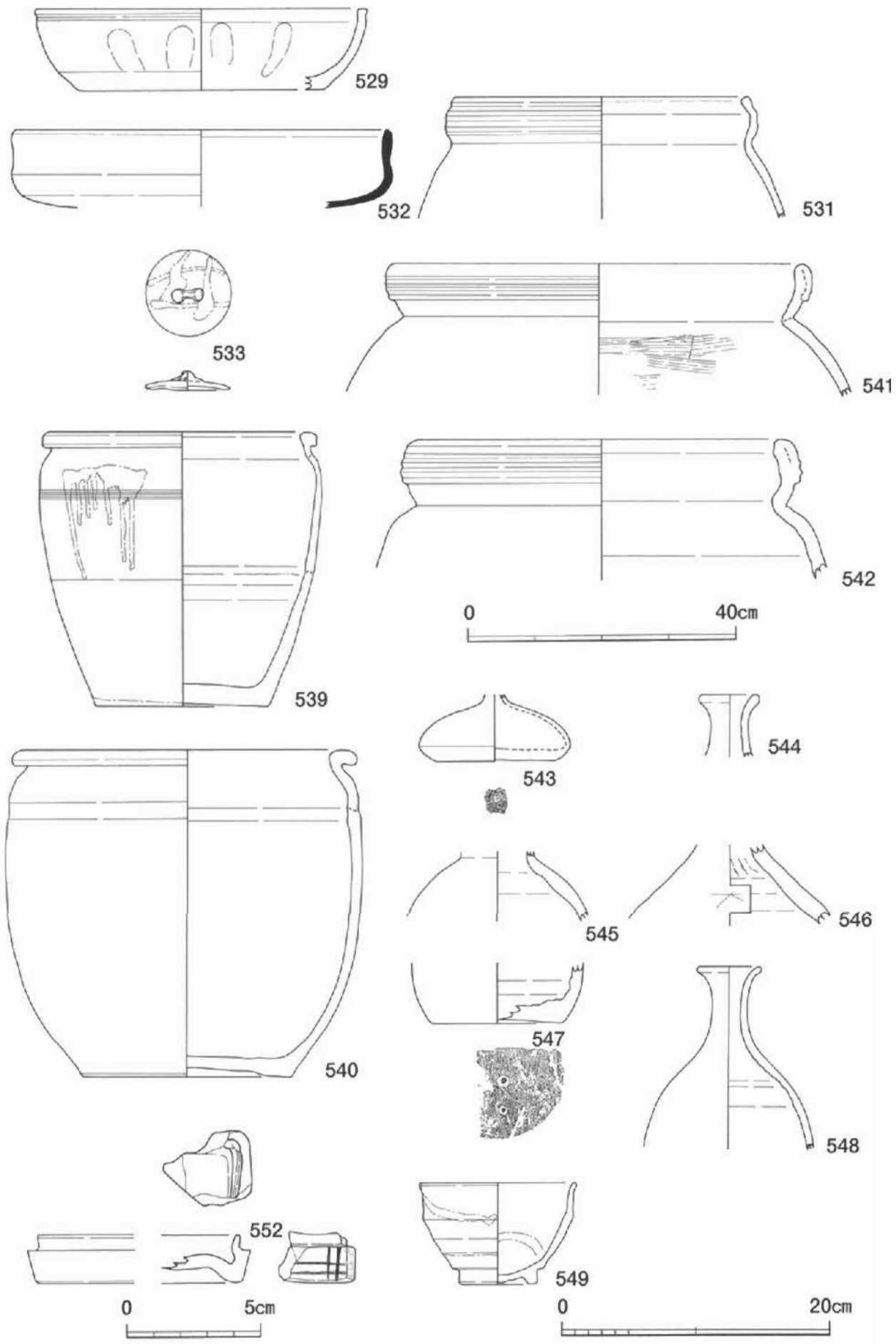

503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
0
20cm



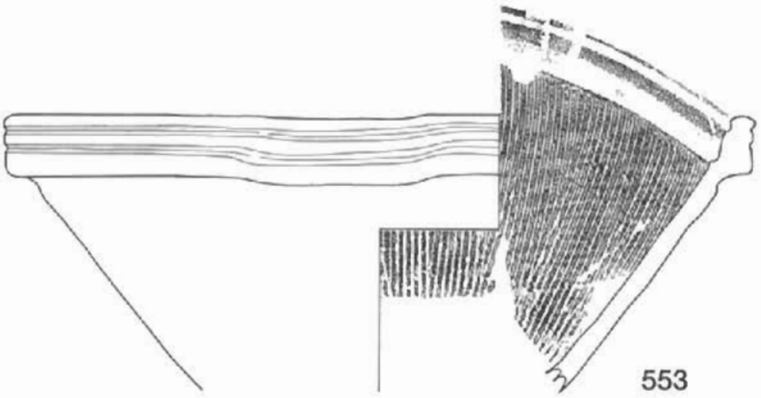
陶磁器(12)



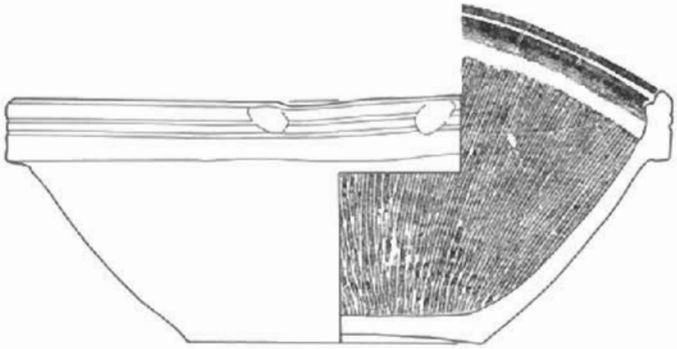
陶磁器(13)


529
532
531
533
541
539
542
0
40cm
543
544
540
545
546
547
548
552
549
0
5cm
0
20cm

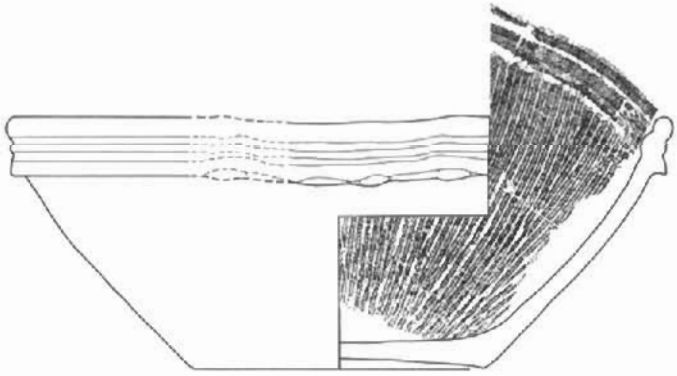
陶磁器(14)



553

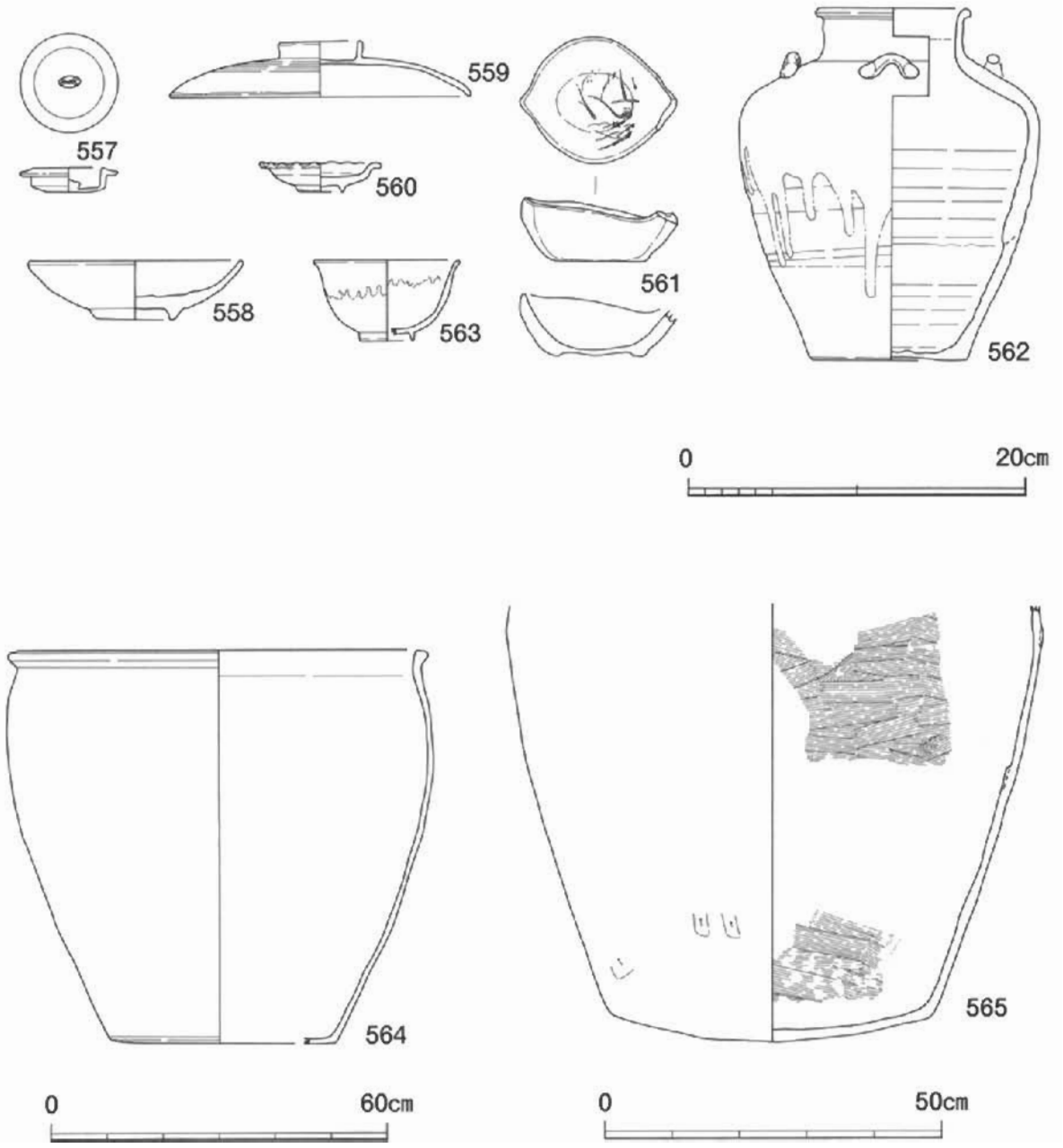


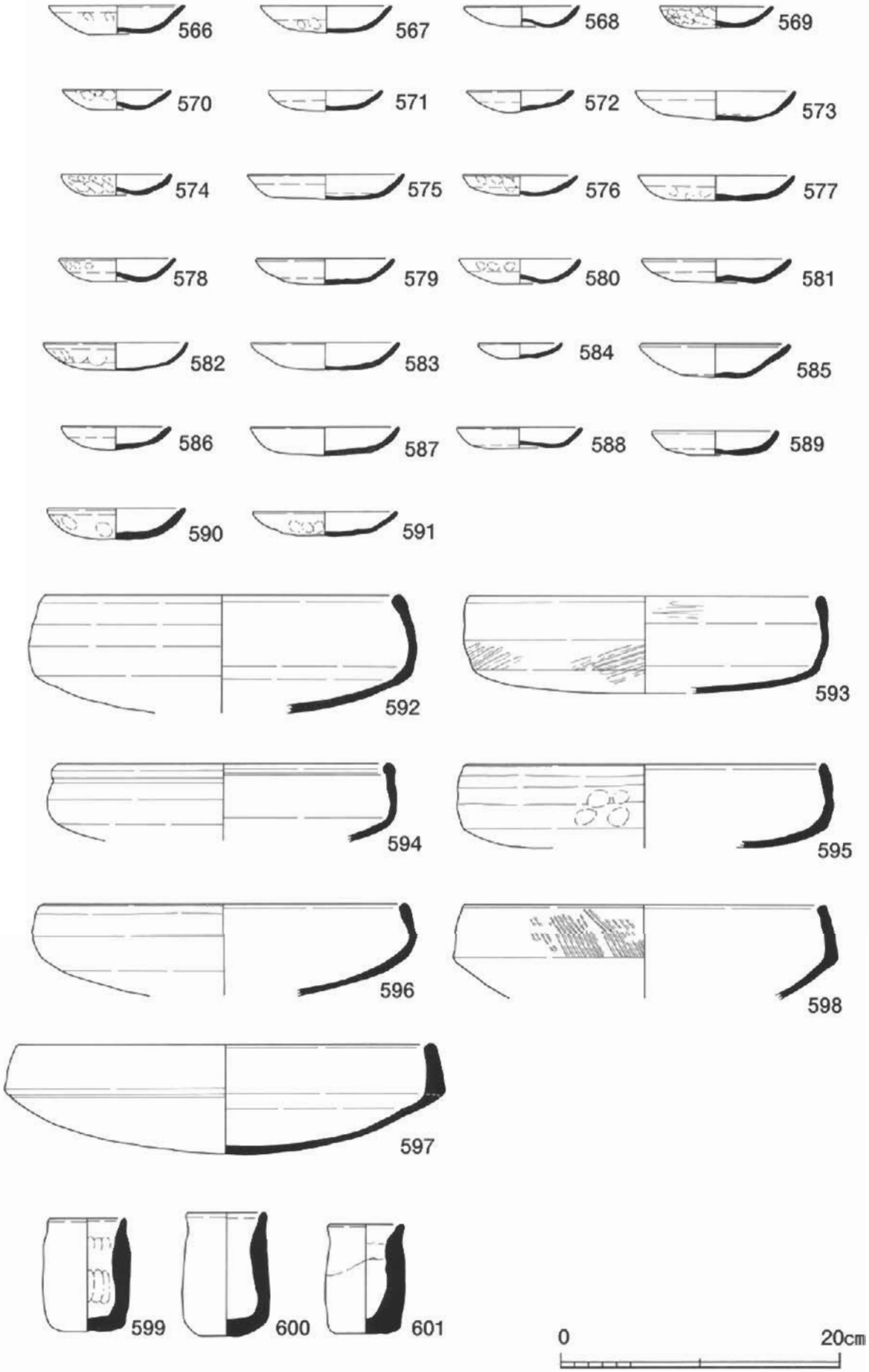
554



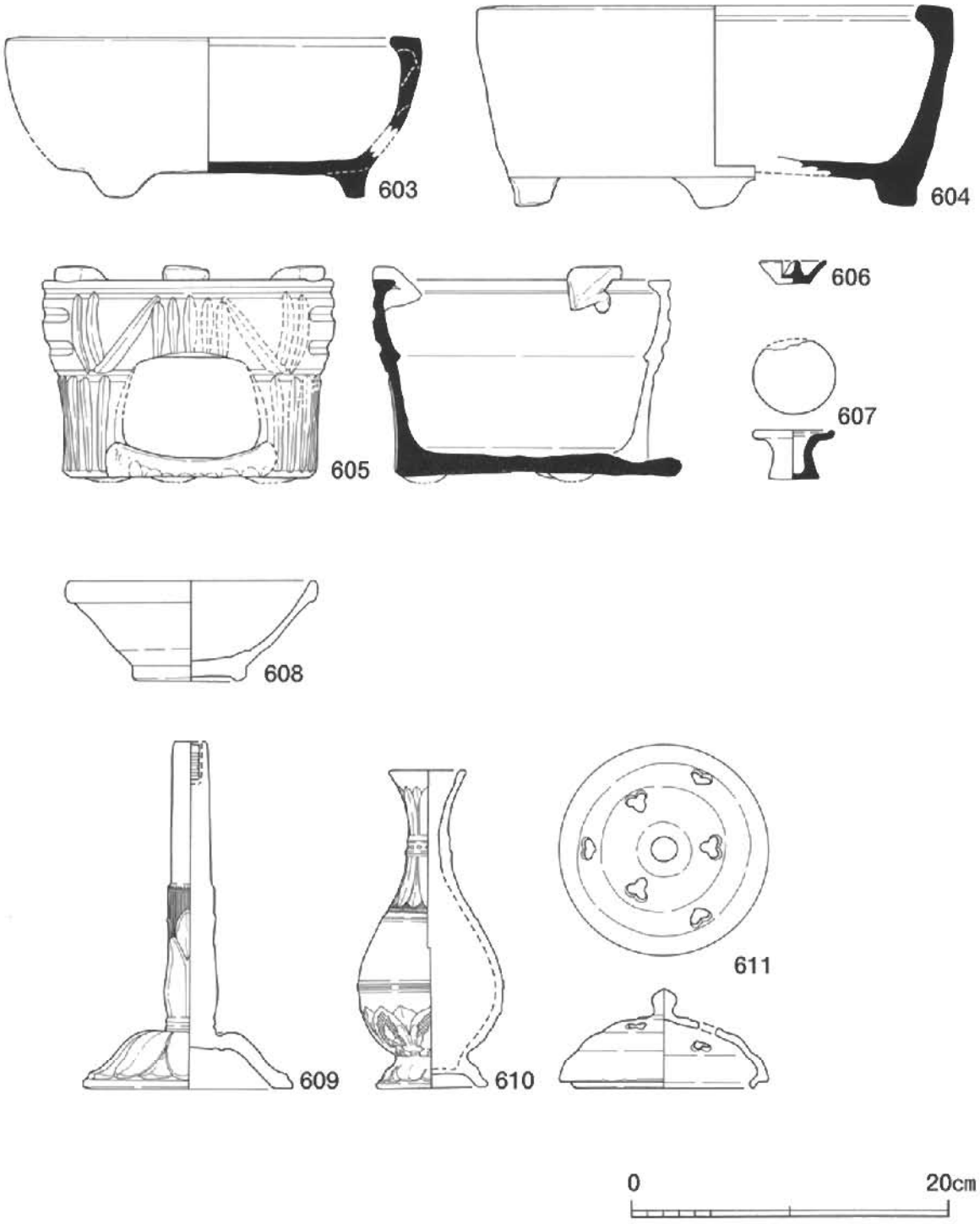
555

0　20cm

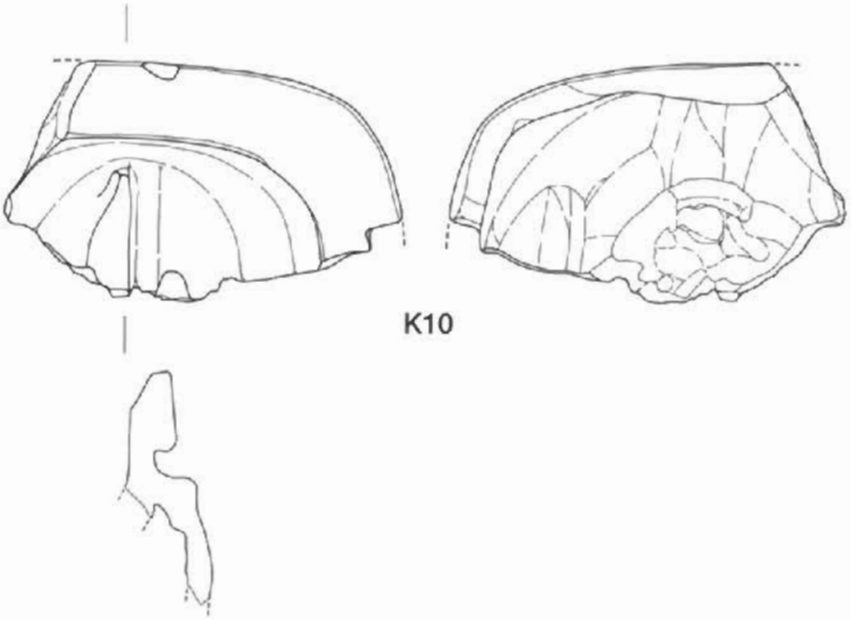

557
559
560
558
563
561
562
0
20cm
564
565
0
60cm
0
50cm


566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
598
597
599
600
601
0
20cm

土師器・焼塩壺



土師器・白磁・近現代陶磁器

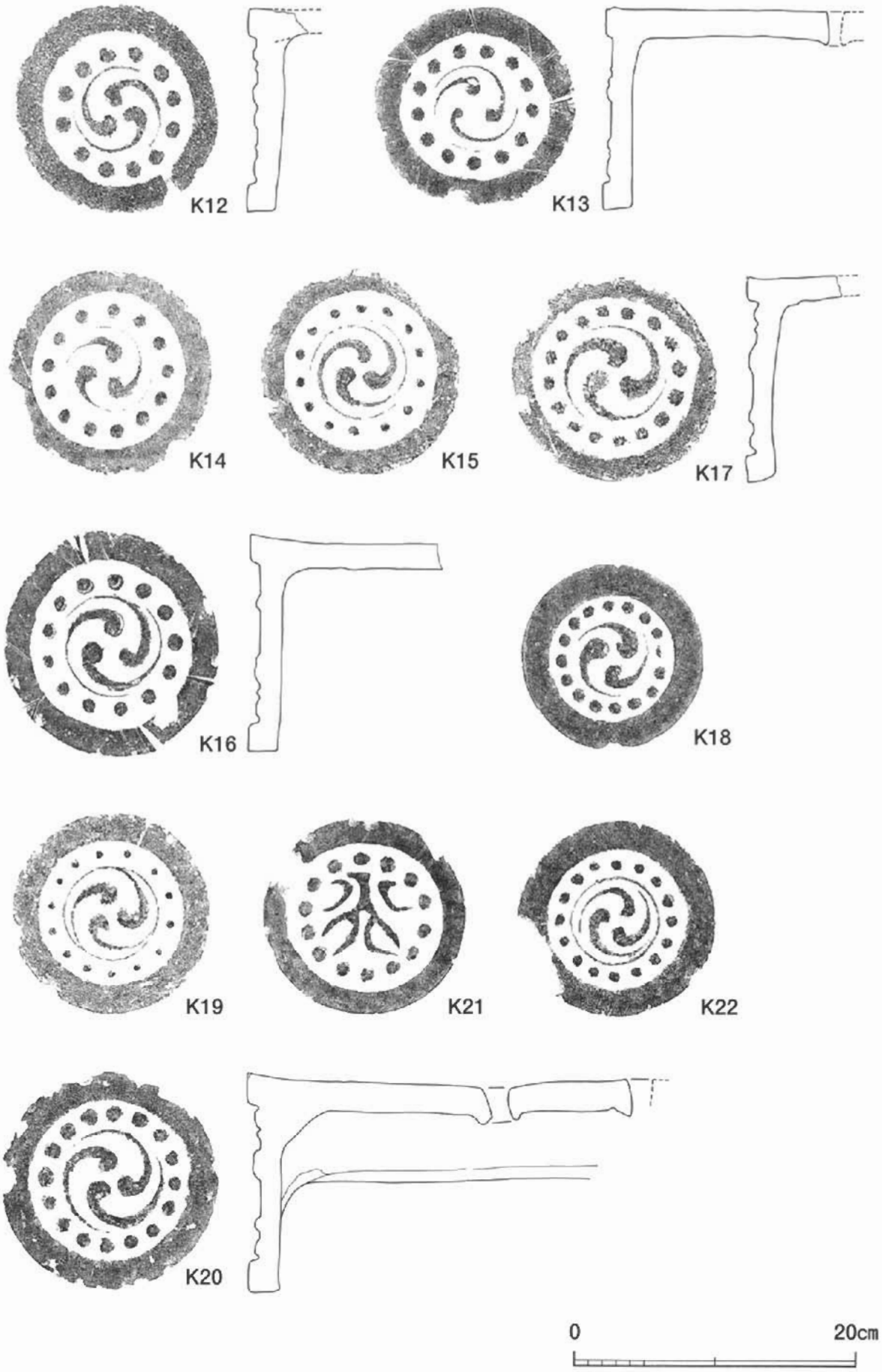


K10

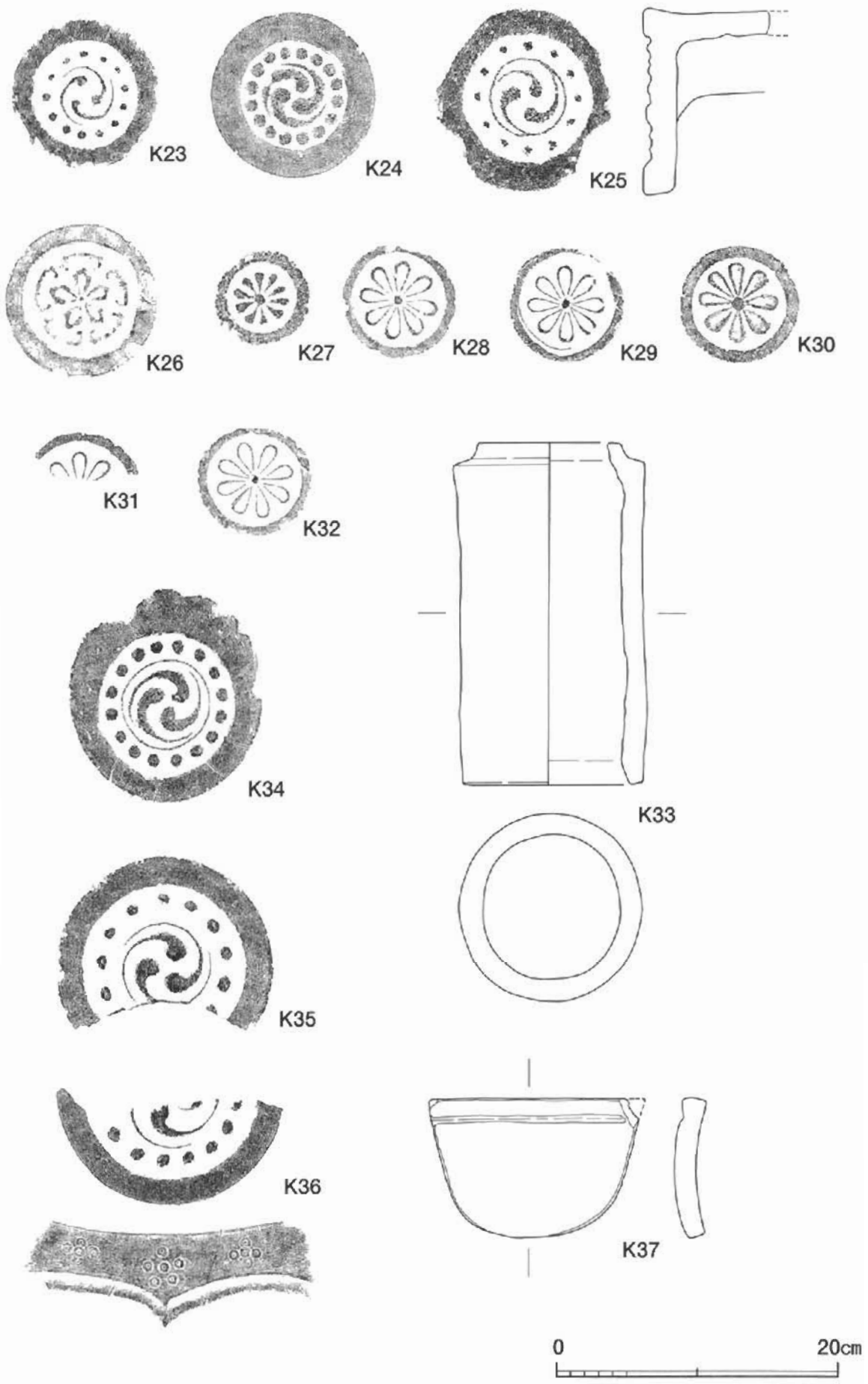
K11

0　20cm

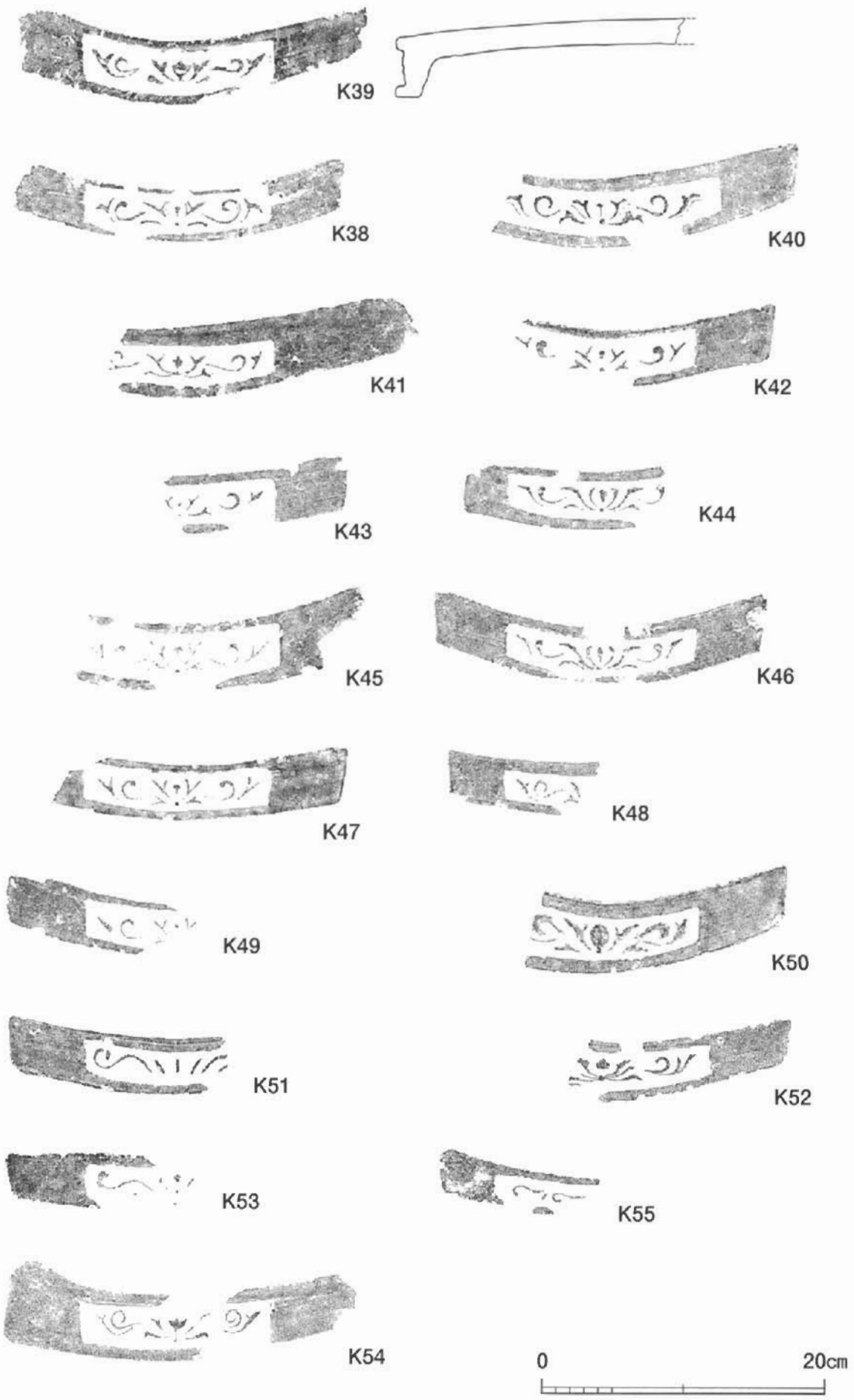
鬼瓦



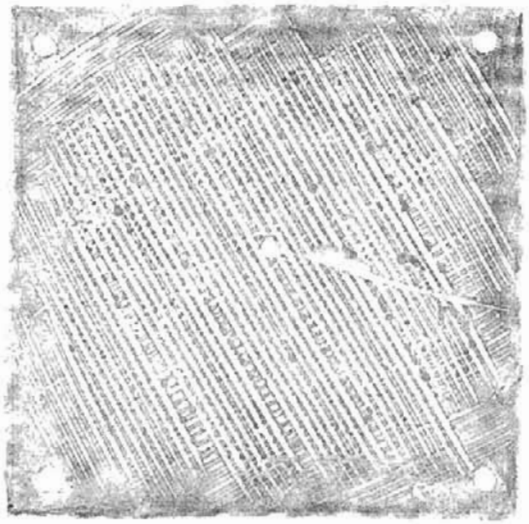
軒丸瓦(1)


K23
K24
K25
K26
K27
K28
K29
K30
K31
K32
K33
K34
K35
K36
K37
0
20cm

軒丸瓦(2)　・道具瓦・土管

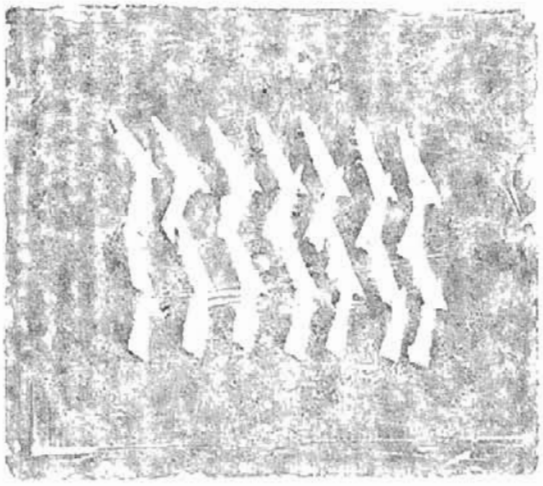

K39
K38
K40
K41
K42
K43
K44
K45
K46
K47
K48
K49
K50
K51
K52
K53
K55
K54
0
20cm

軒平瓦

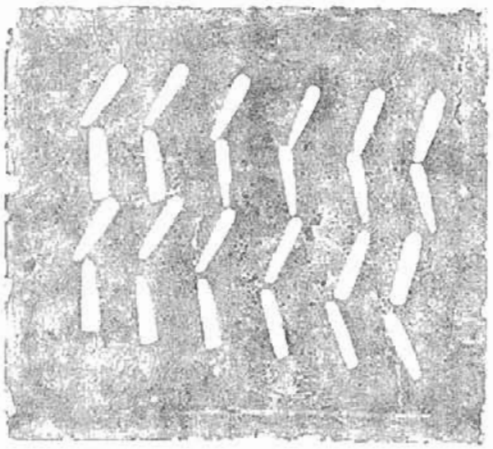


K72

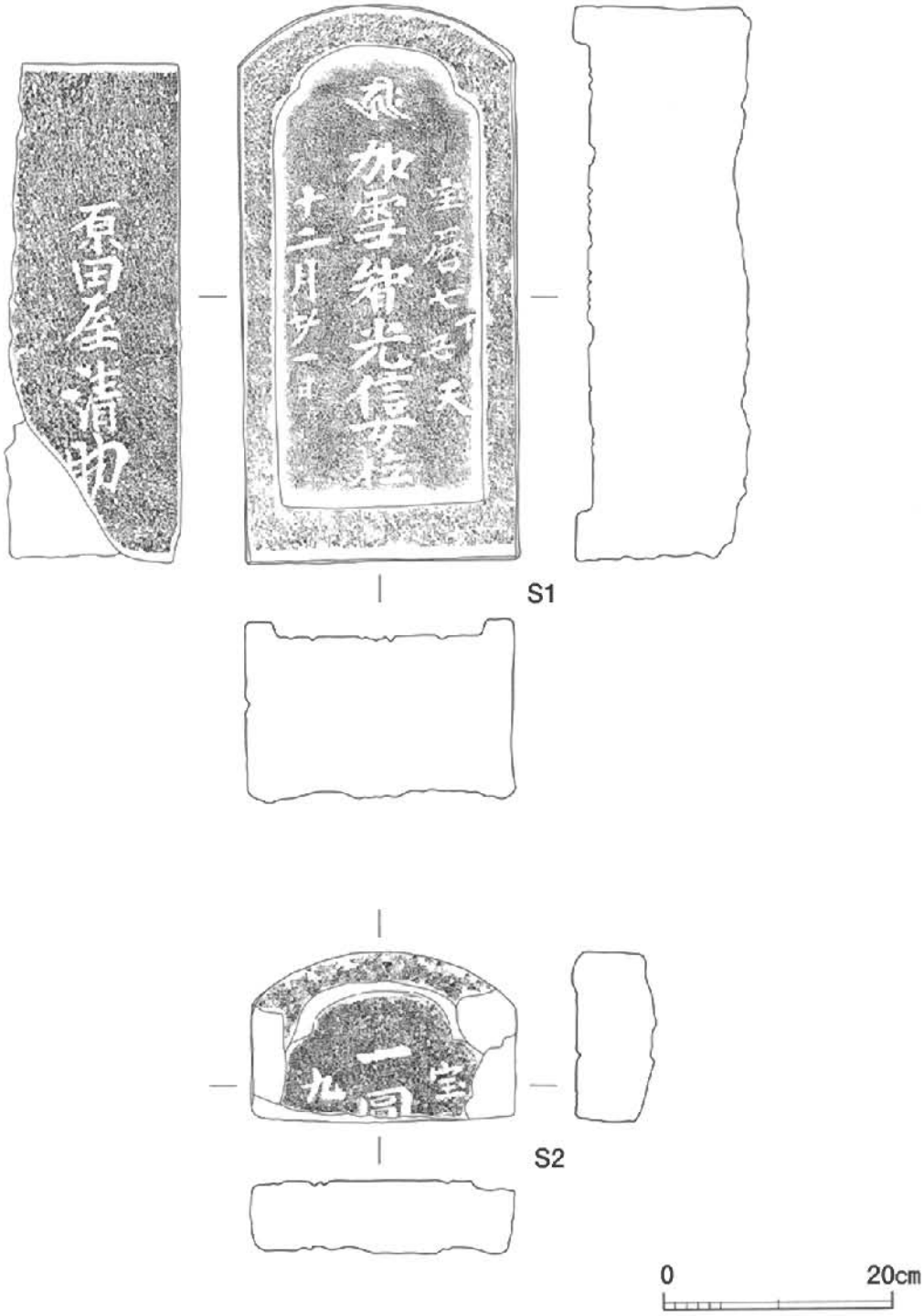
K73



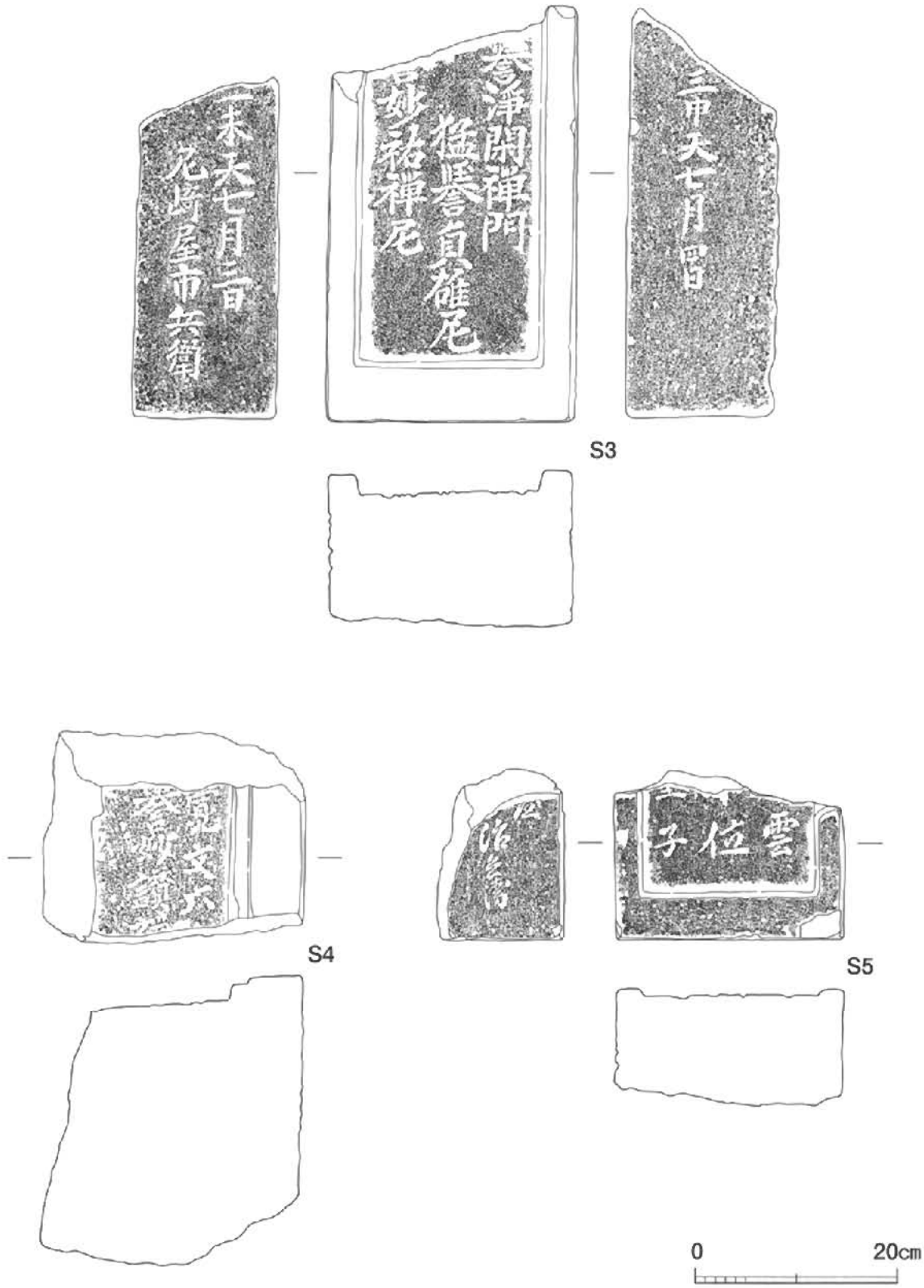
K74

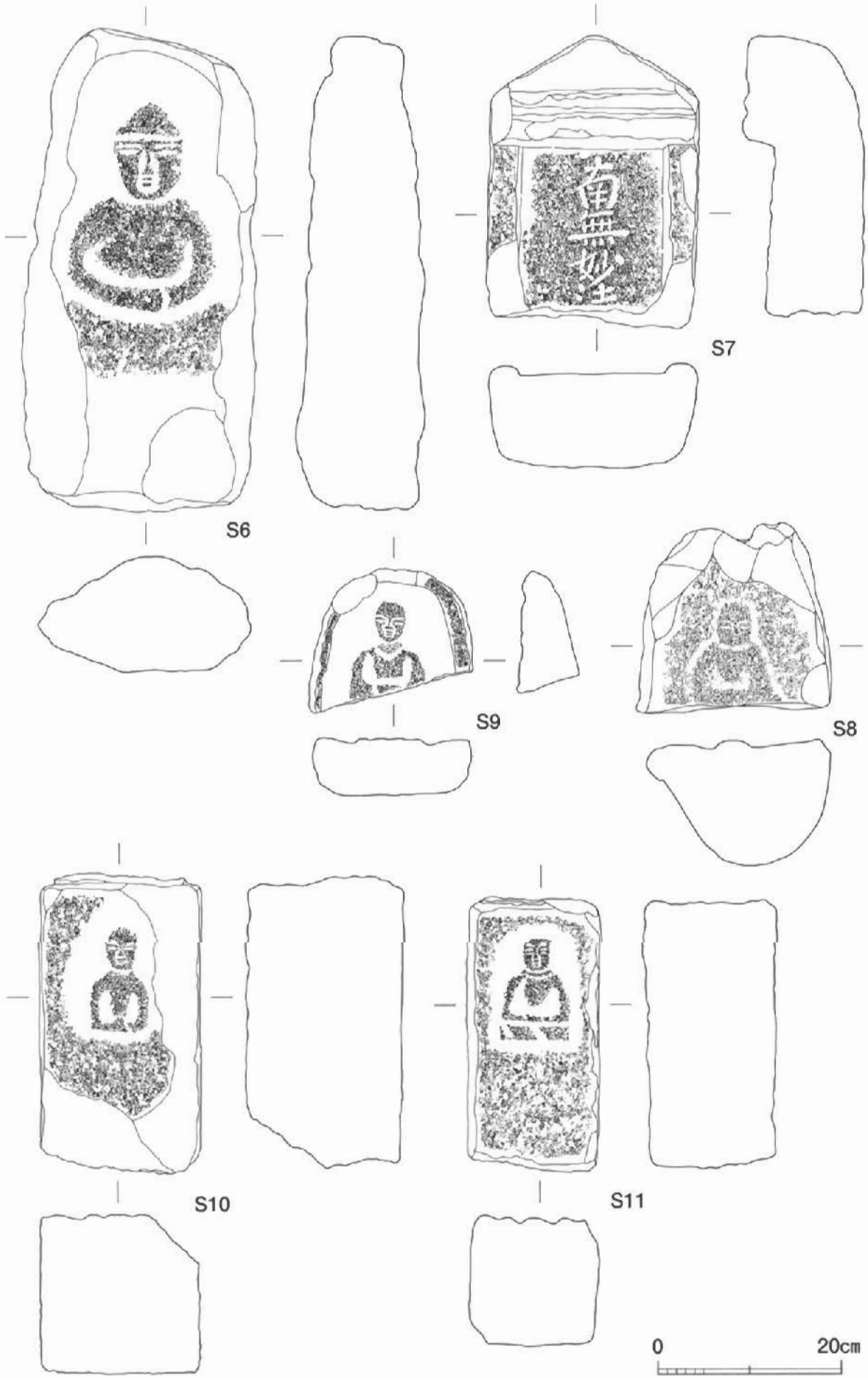


K75

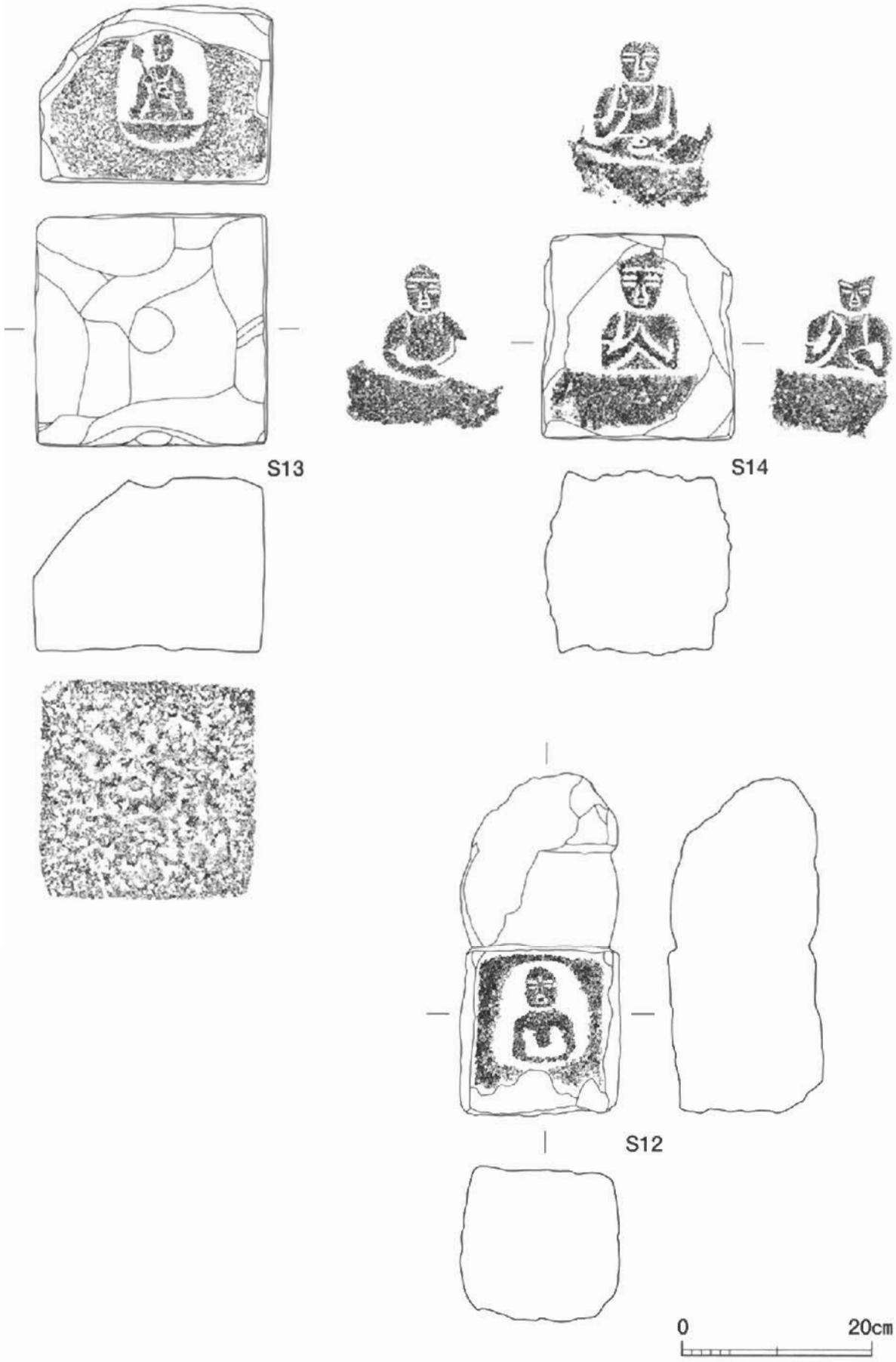


墓石(1)

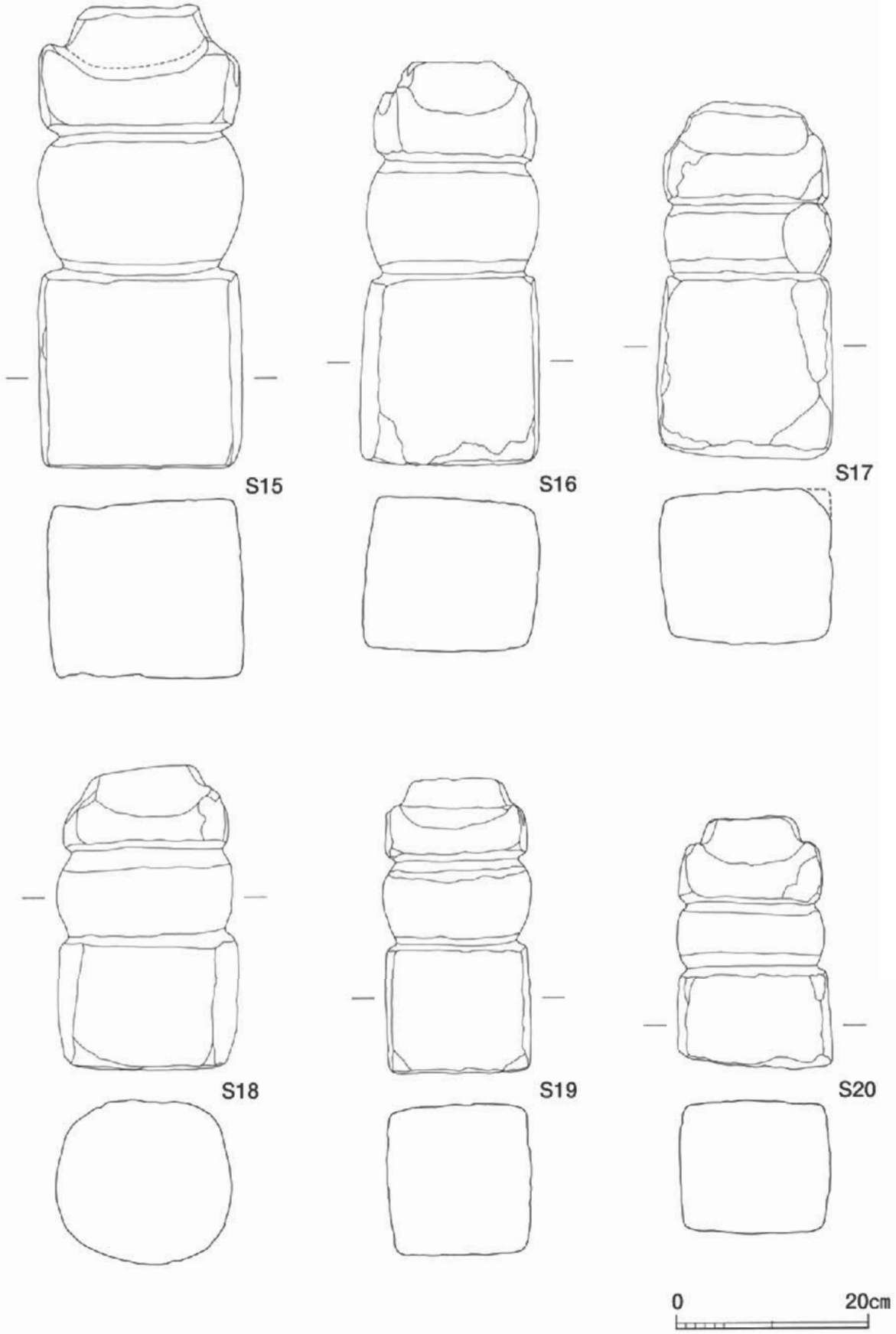

S3
S4
S5
0
20cm



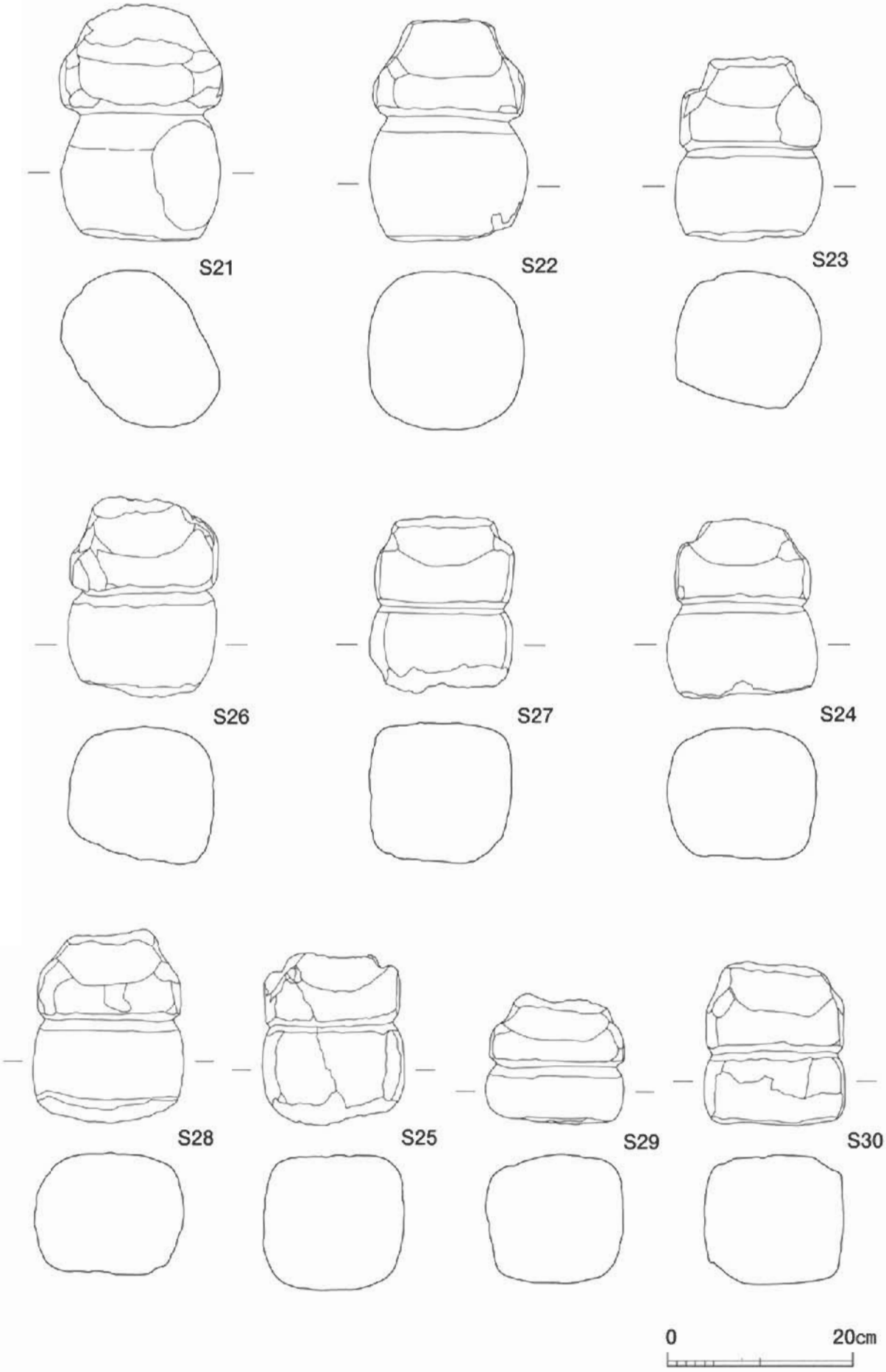
石仏(1)　・一石五輪塔(1)



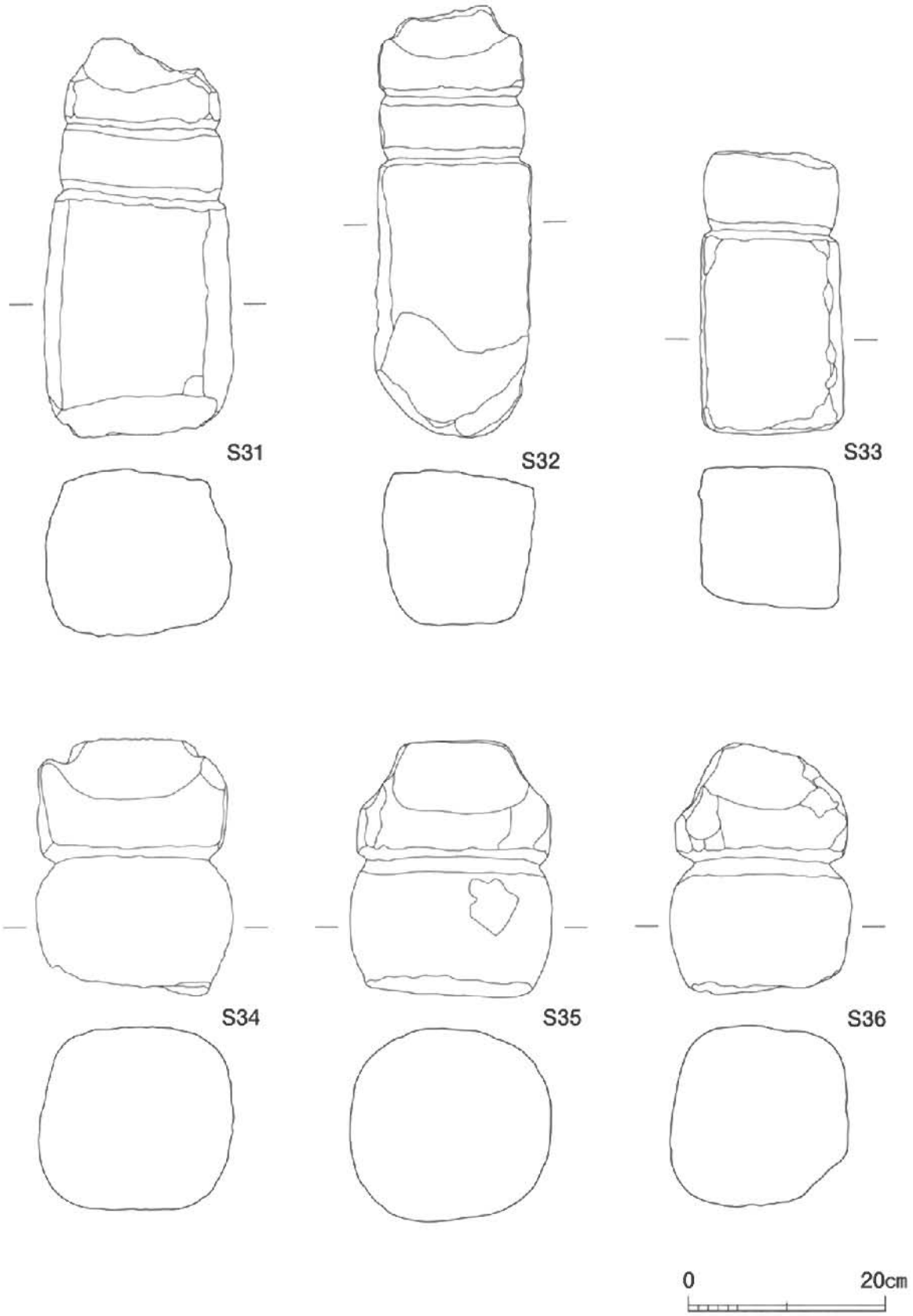
石仏(2)　・一石五輪塔(2)



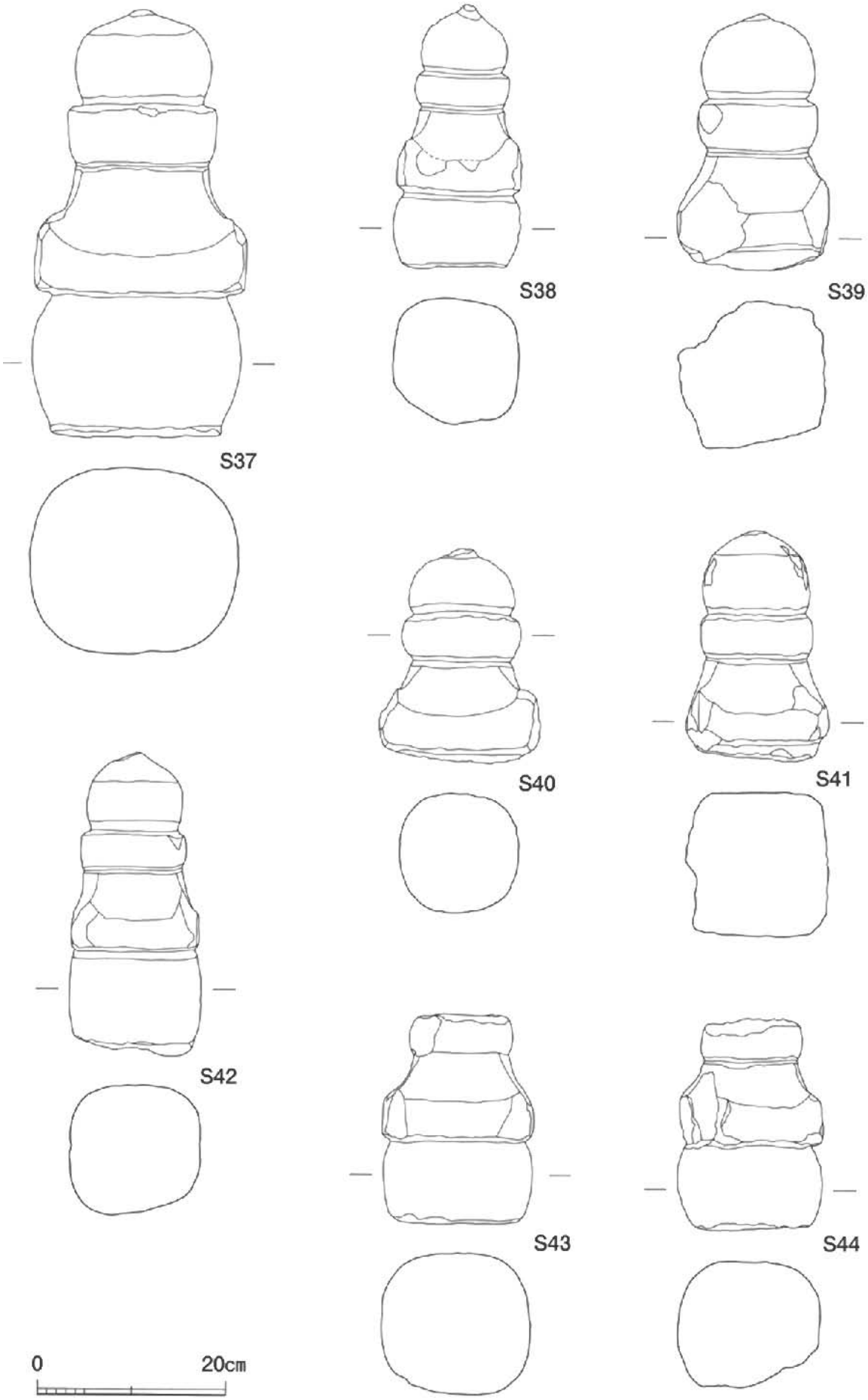
一石五輪塔(3)



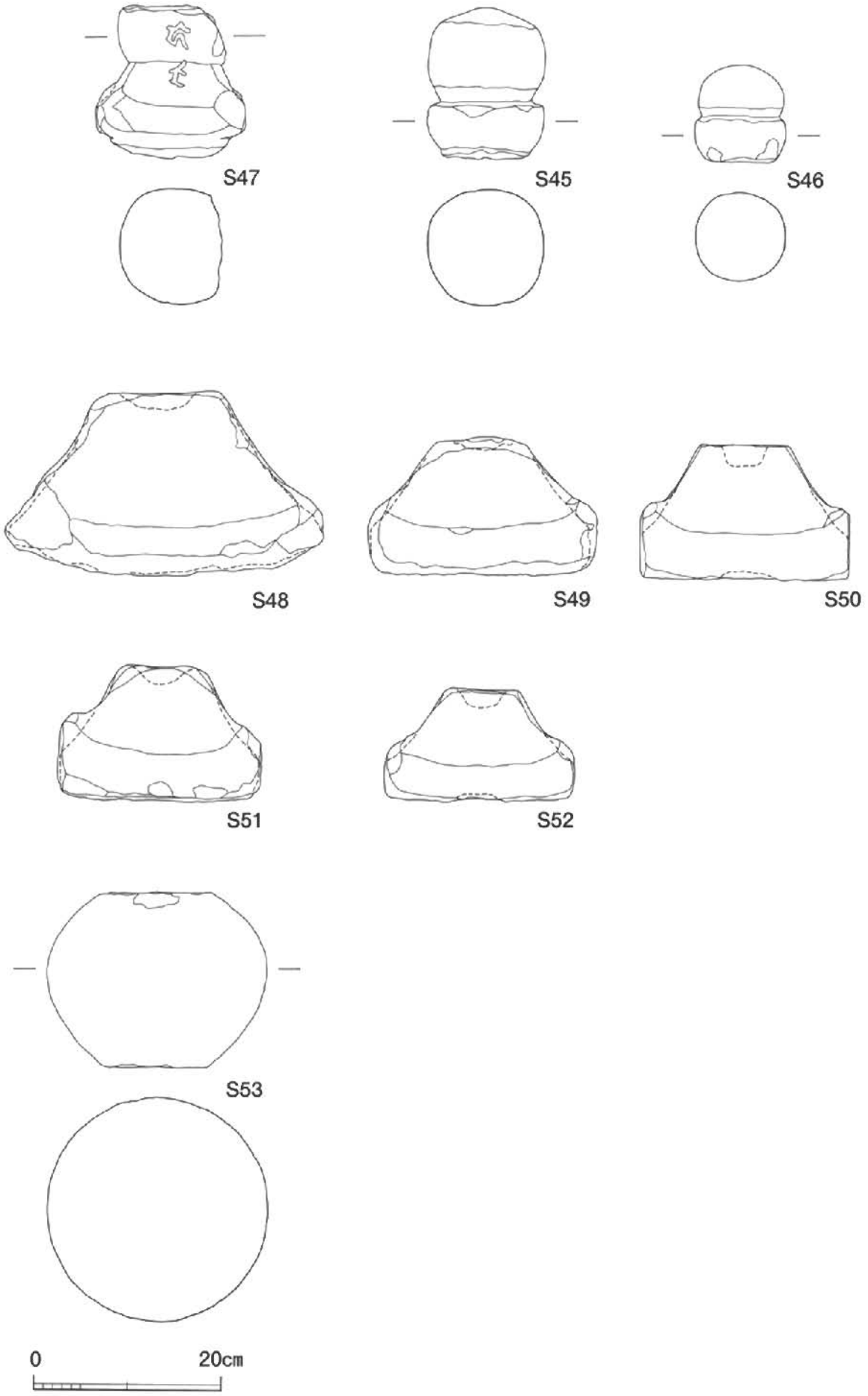
一石五輪塔(4)



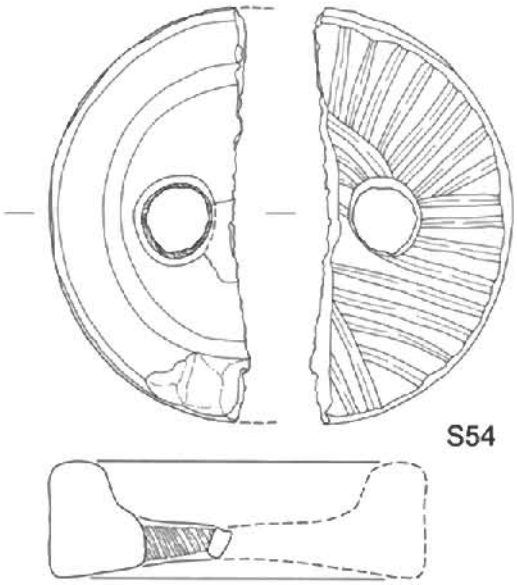
一石五輪塔(5)

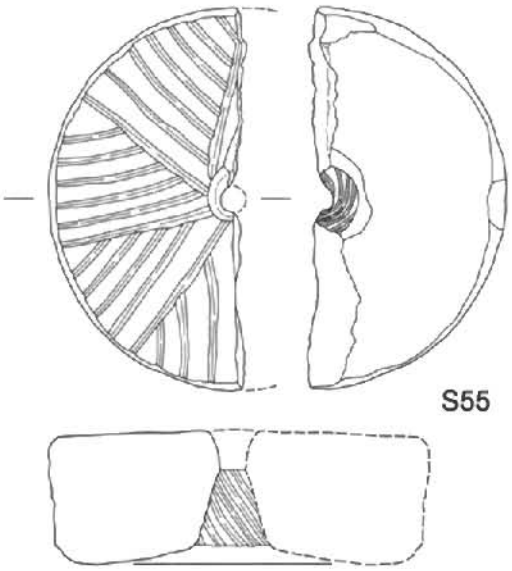


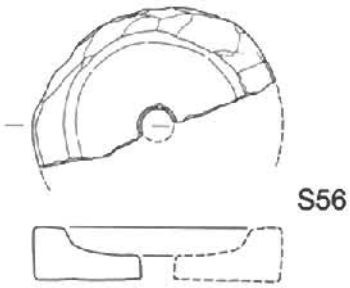
一石五輪塔(6)



一石五輪塔(7)　・五輪塔

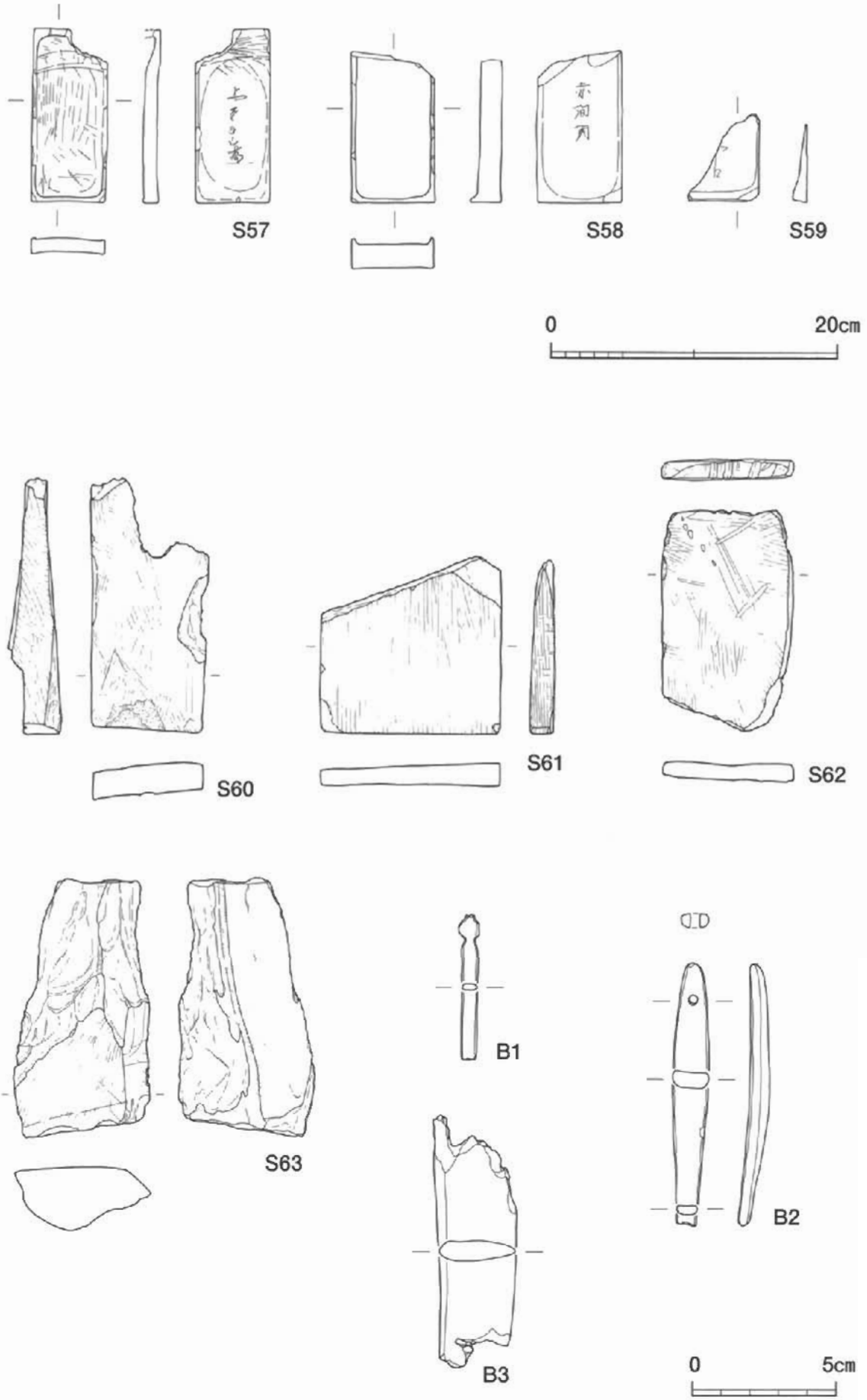

S54


S55

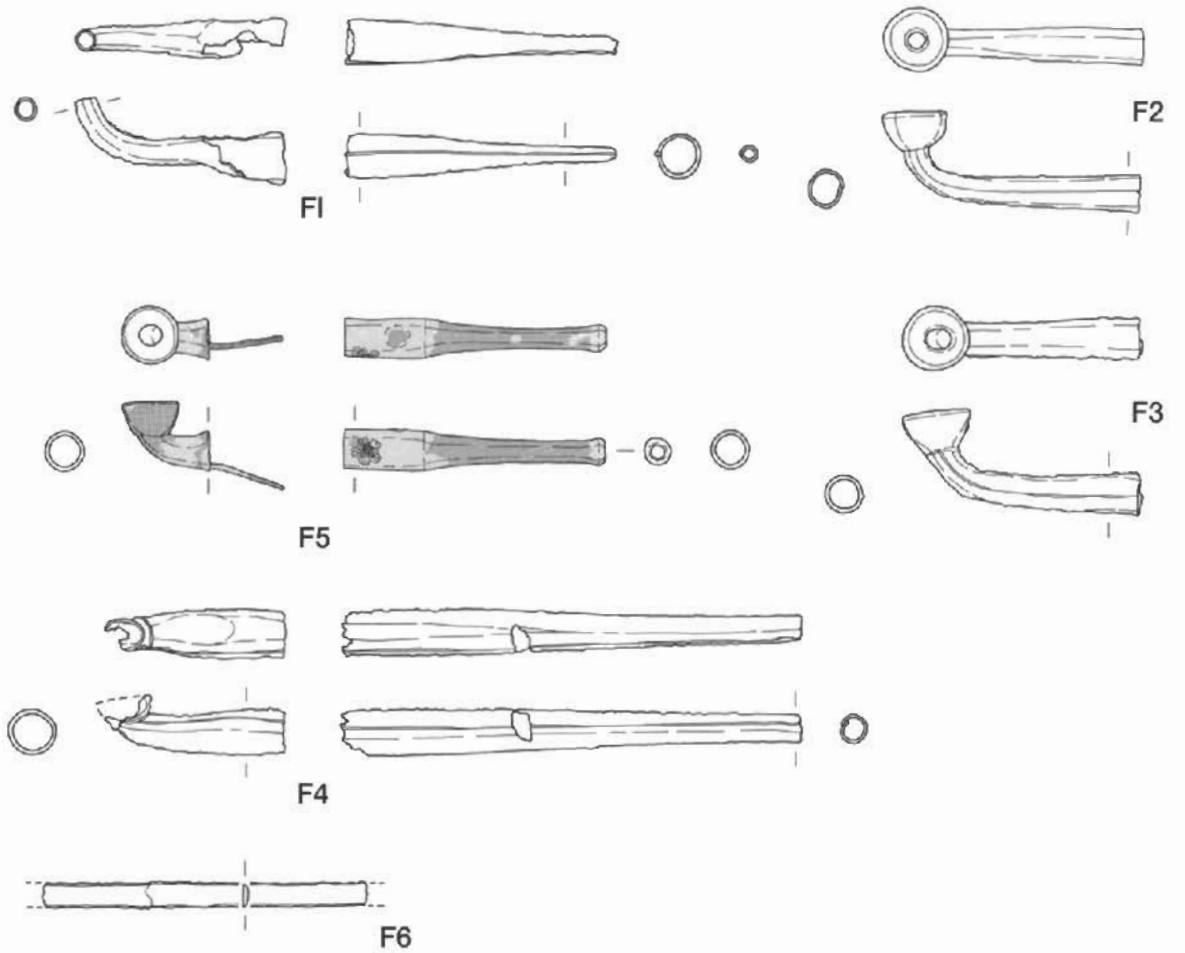

S56

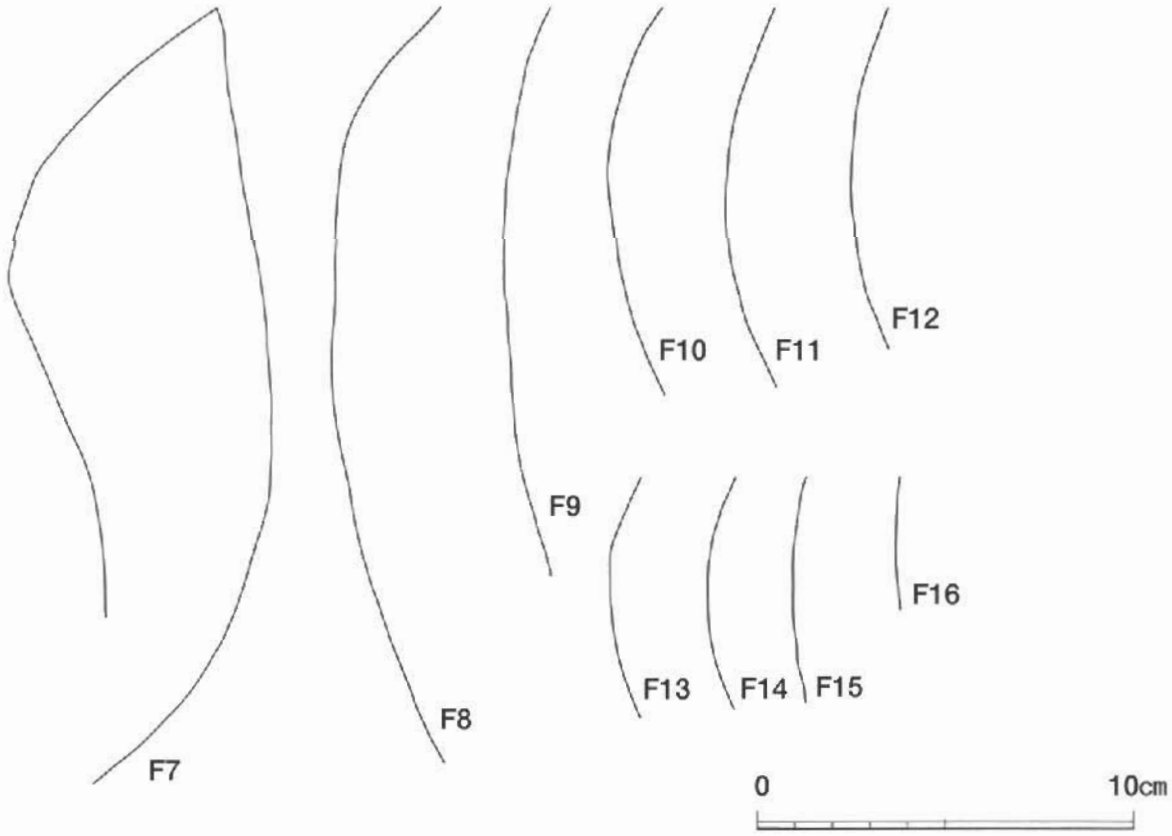
0
20cm

図版八六　第一一四次調査出土遺物（四五）　石製品（一一）・骨製品

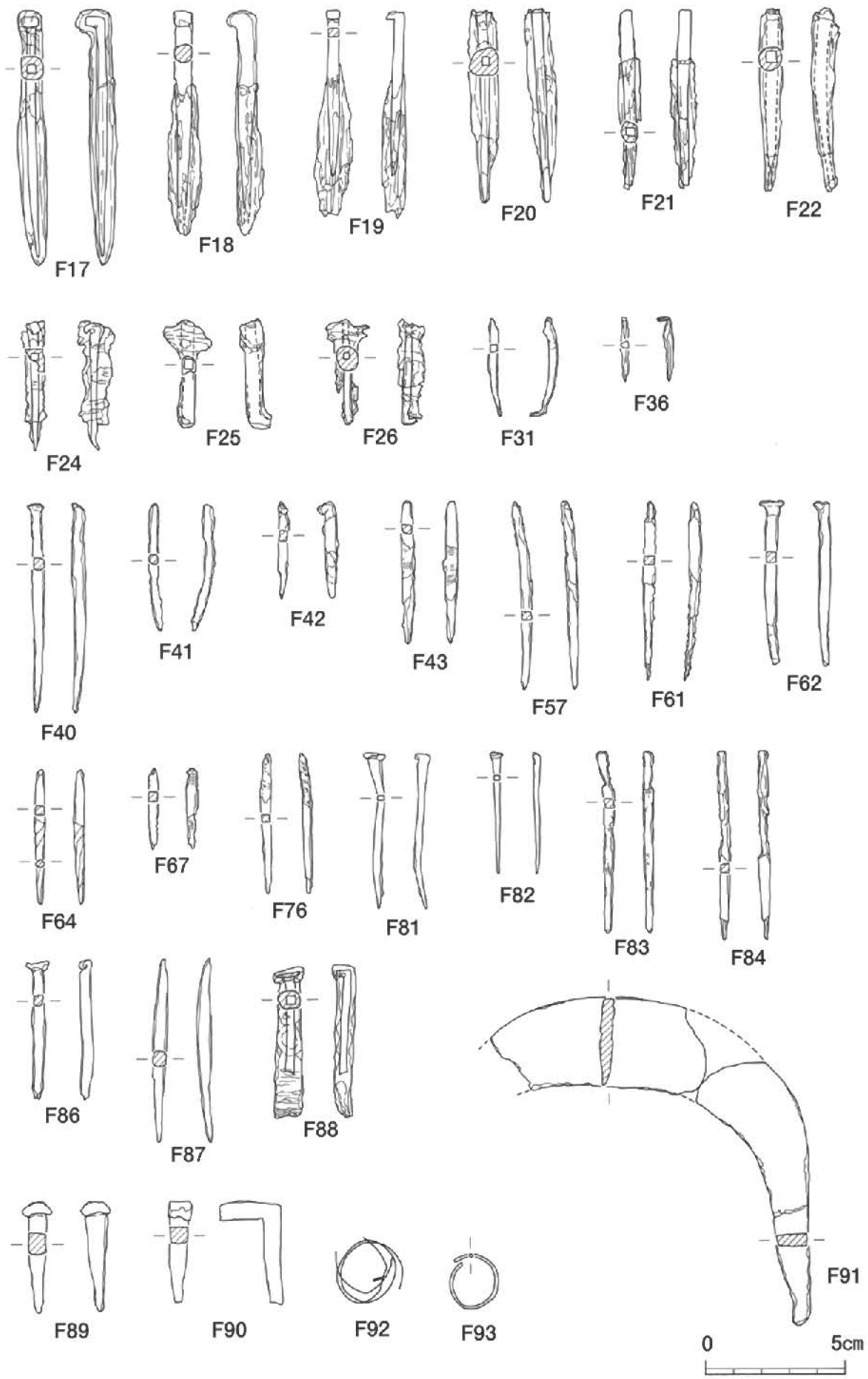


硯・砥石他

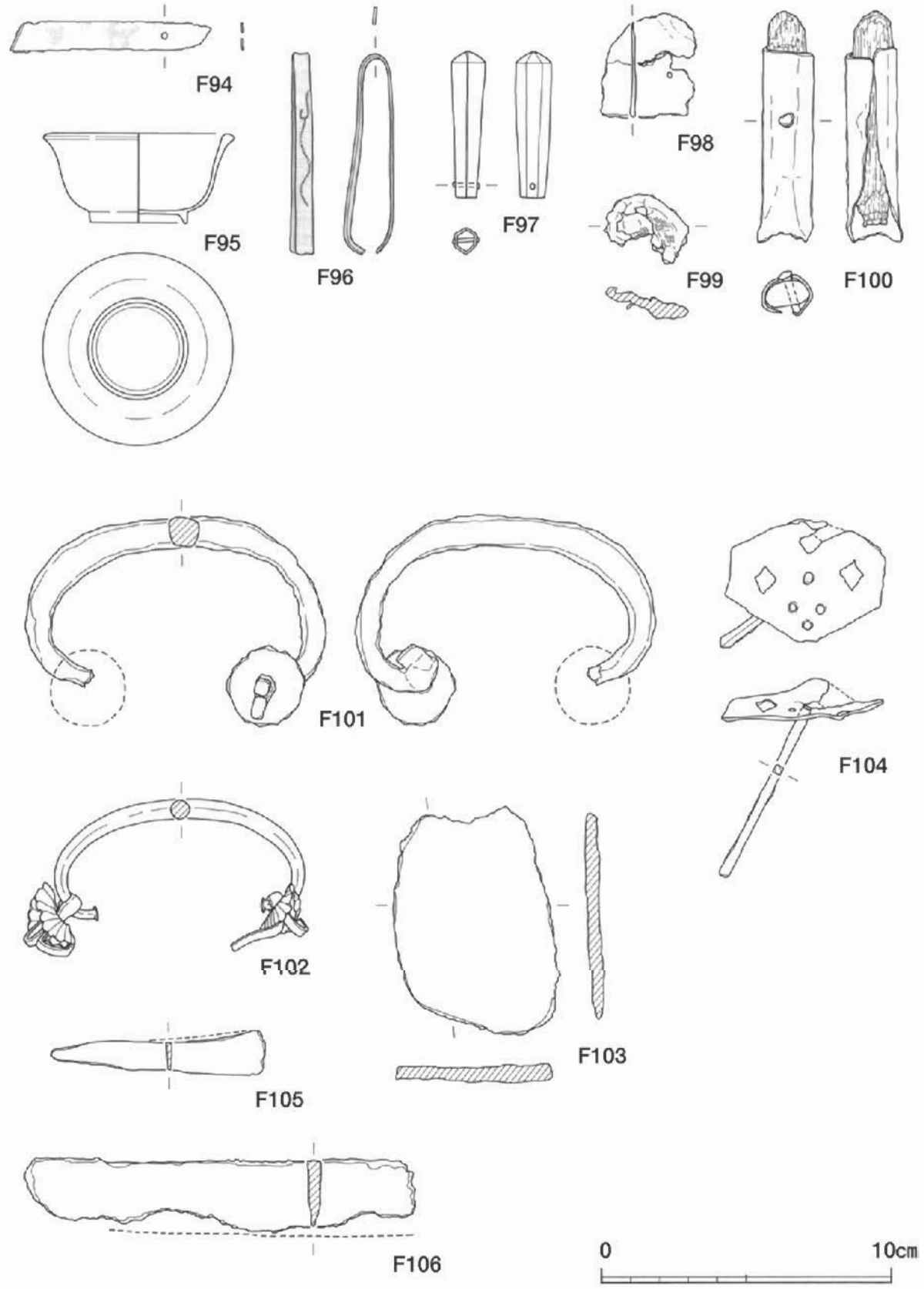




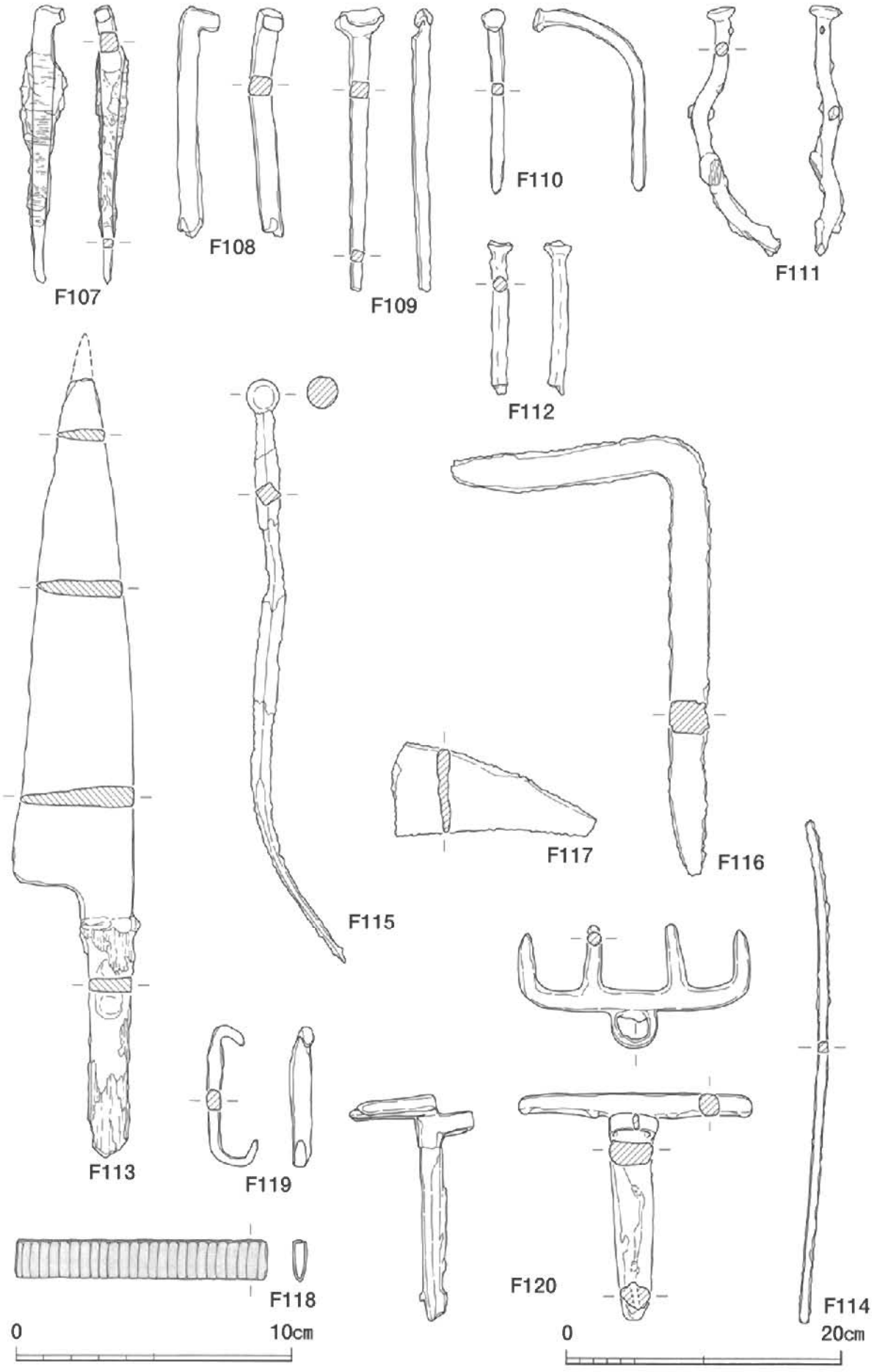
銅製品(1)


F17
F18
F19
F20
F21
F22
F24
F25
F26
F31
F36
F40
F41
F42
F43
F57
F61
F62
F64
F67
F76
F81
F82
F83
F84
F86
F87
F88
F89
F90
F92
F93
F91
0
5cm

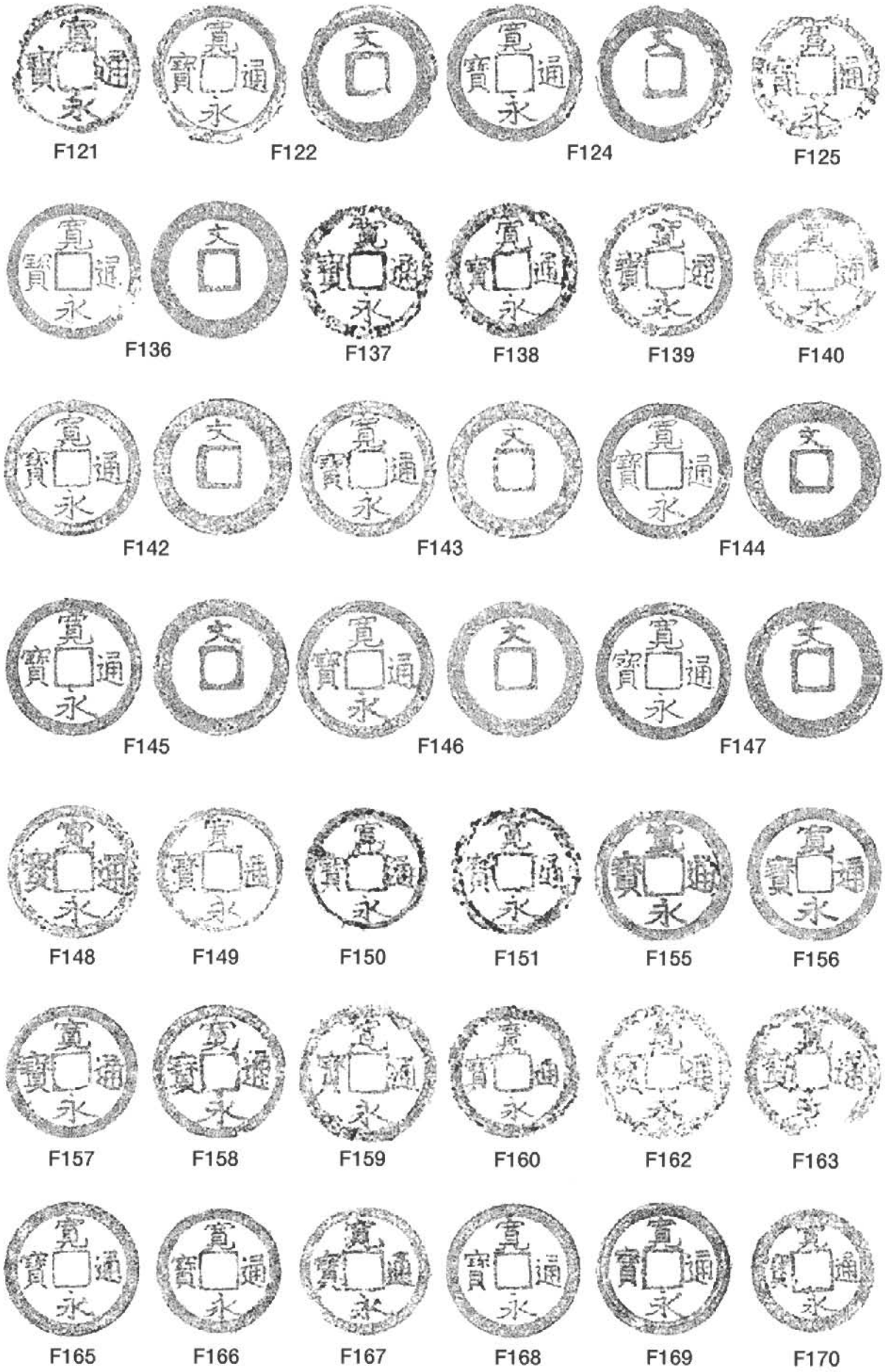
鉄製品(1)　・銅製品(2)

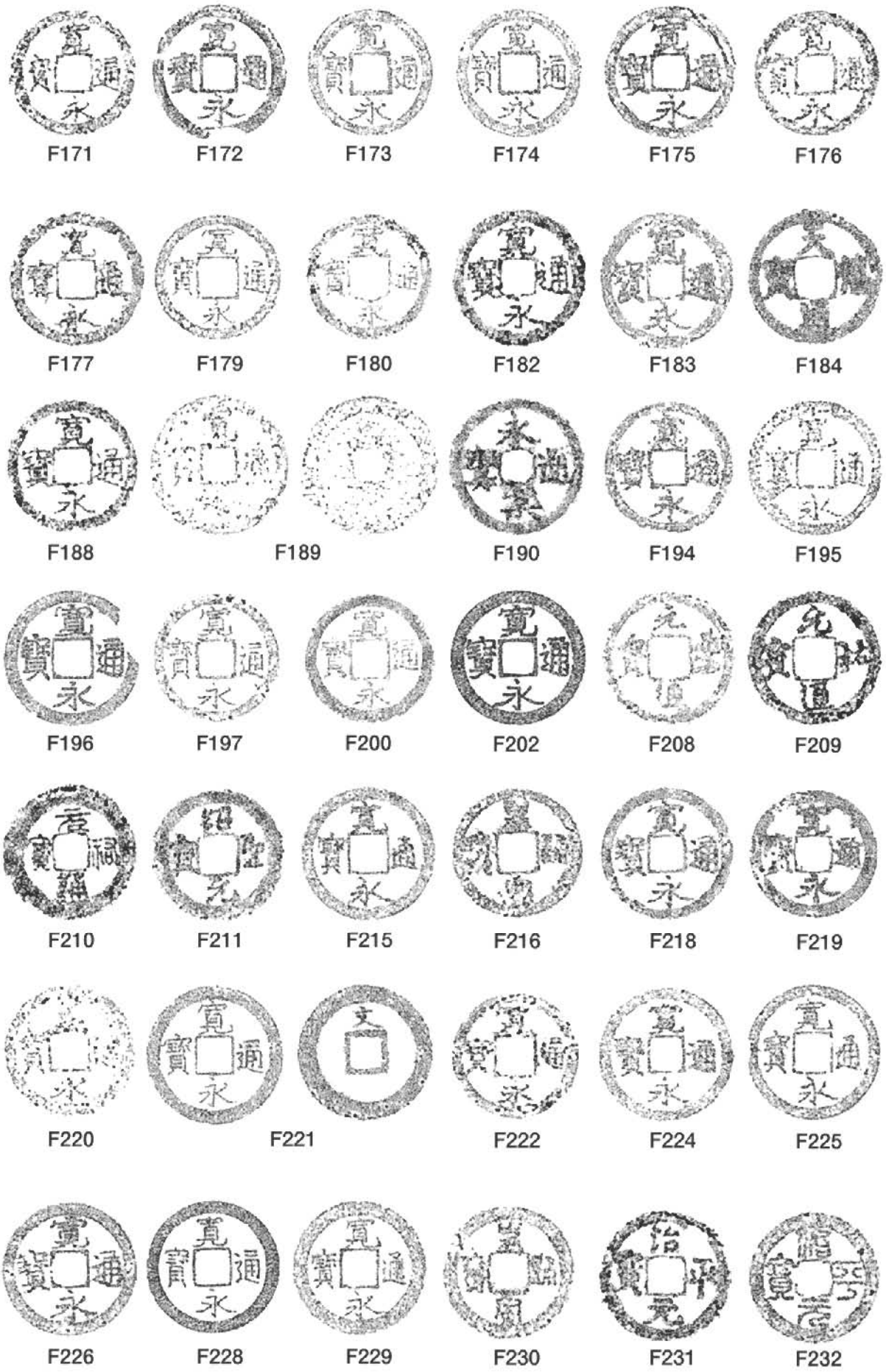

F94
F95
F96
F97
F98
F99
F100
F101
F102
F103
F104
F105
F106
0
10cm

鉄製品(2)　・銅製品(3)


F107
F108
F109
F110
F111
F112
F113
F114
F115
F116
F117
F118
F119
F120
0
10cm
0
20cm

鉄製品(3)　・銅製品(4)


F121
F122
F124
F125
F136
F137
F138
F139
F140
F142
F143
F144
F145
F146
F147
F148
F149
F150
F151
F155
F156
F157
F158
F159
F160
F162
F163
F165
F166
F167
F168
F169
F170


F171
F172
F173
F174
F175
F176
F177
F179
F180
F182
F183
F184
F188
F189
F190
F194
F195
F196
F197
F200
F202
F208
F209
F210
F211
F215
F216
F218
F219
F220
F221
F222
F224
F225
F226
F228
F229
F230
F231
F232

F234

F235

F236

F237

F238

F239

F240

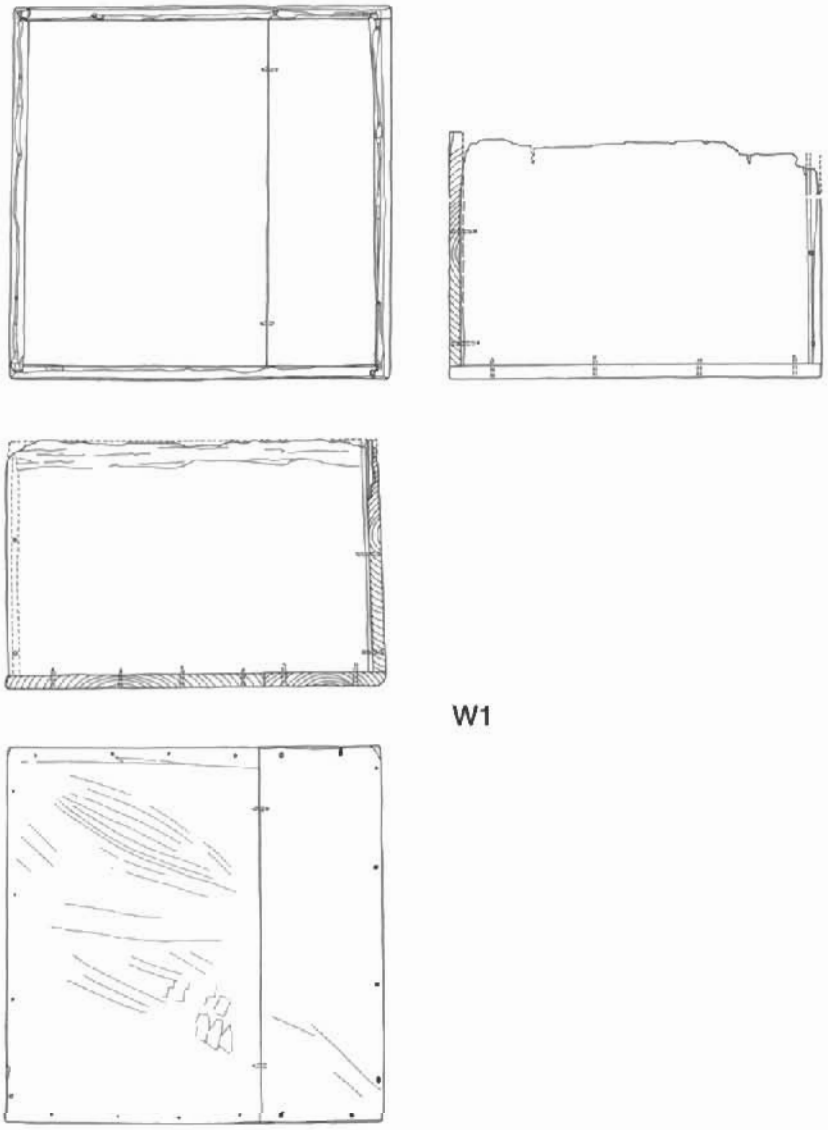
F241

F242

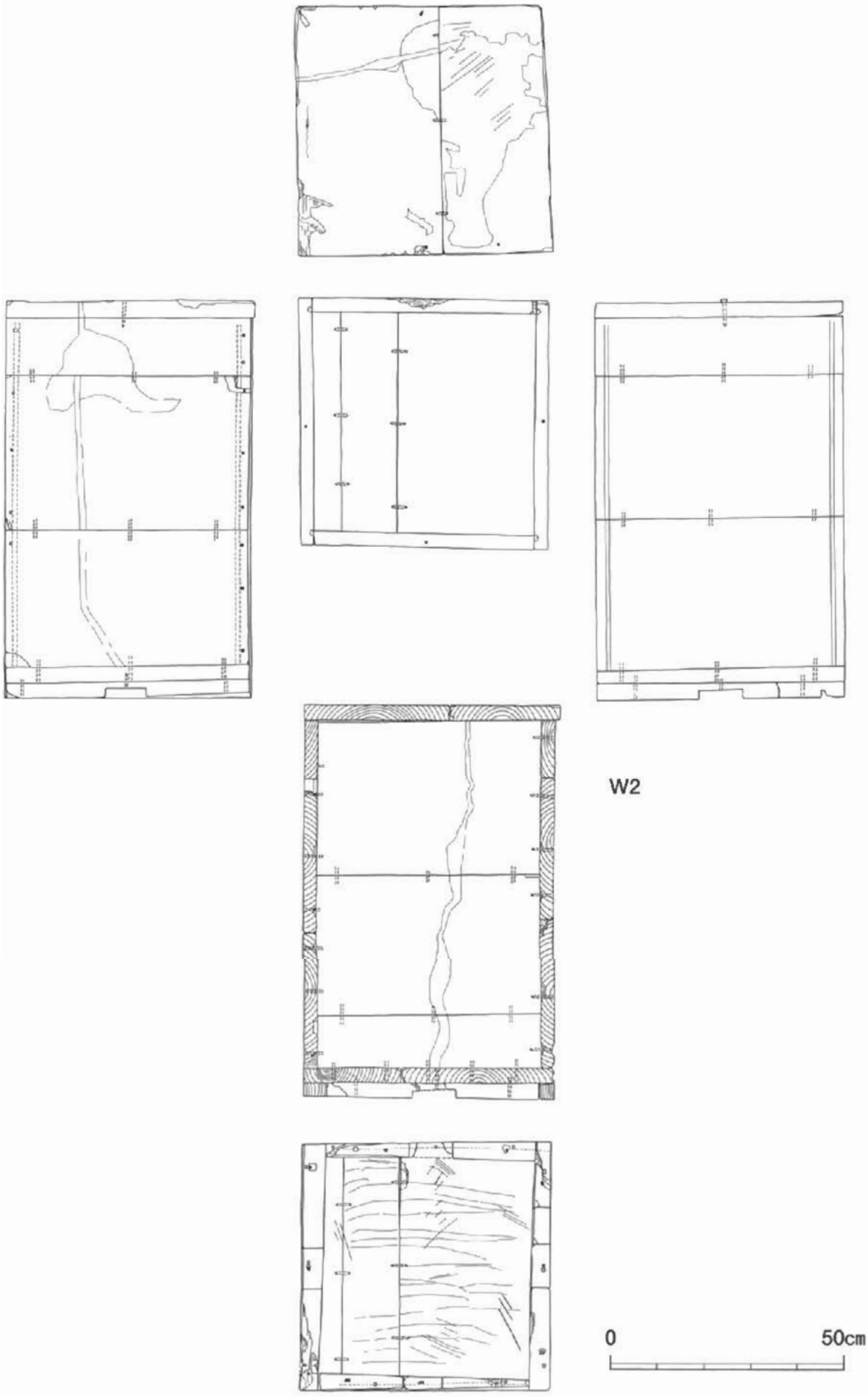
F243

F244

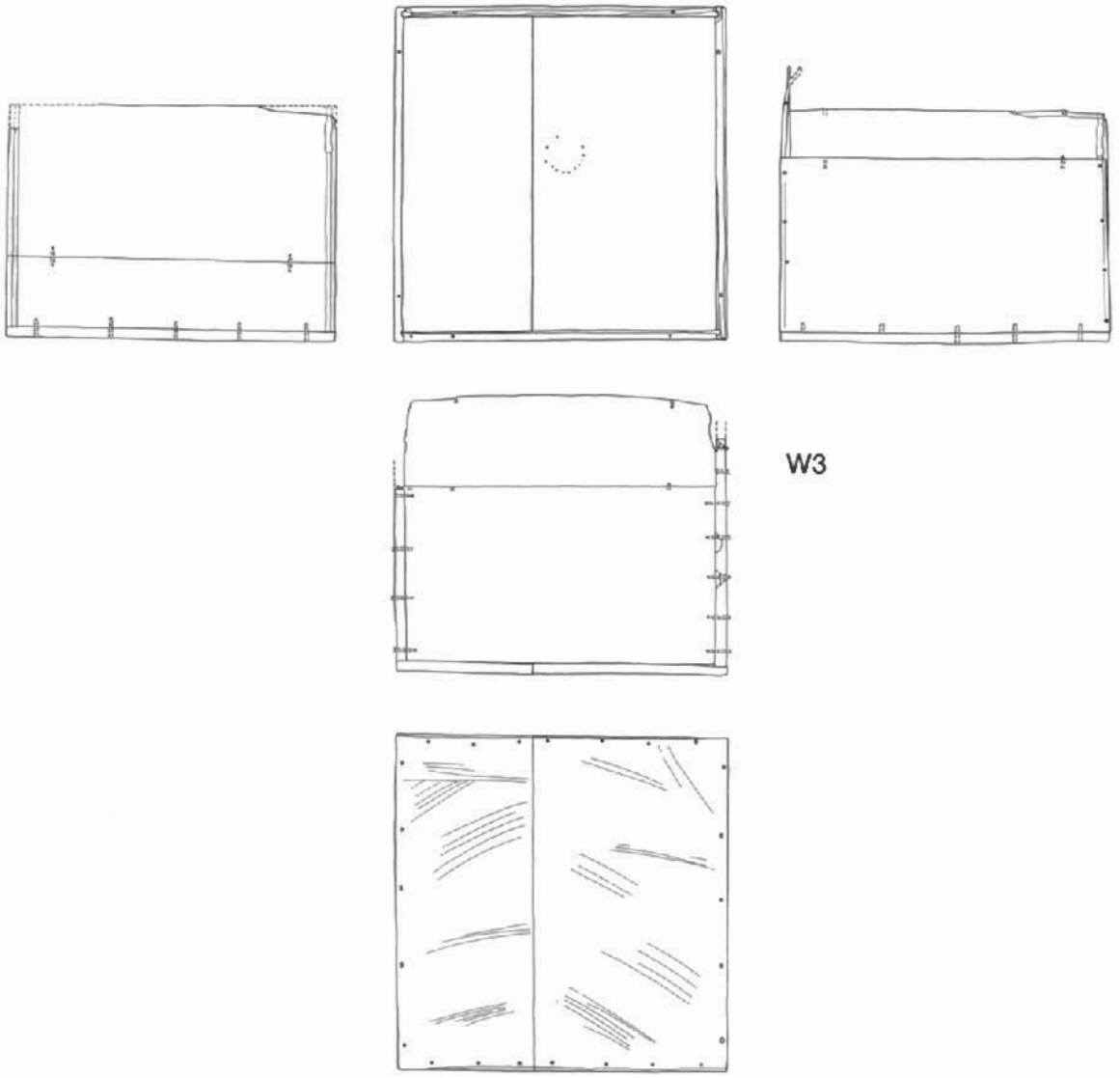
F245



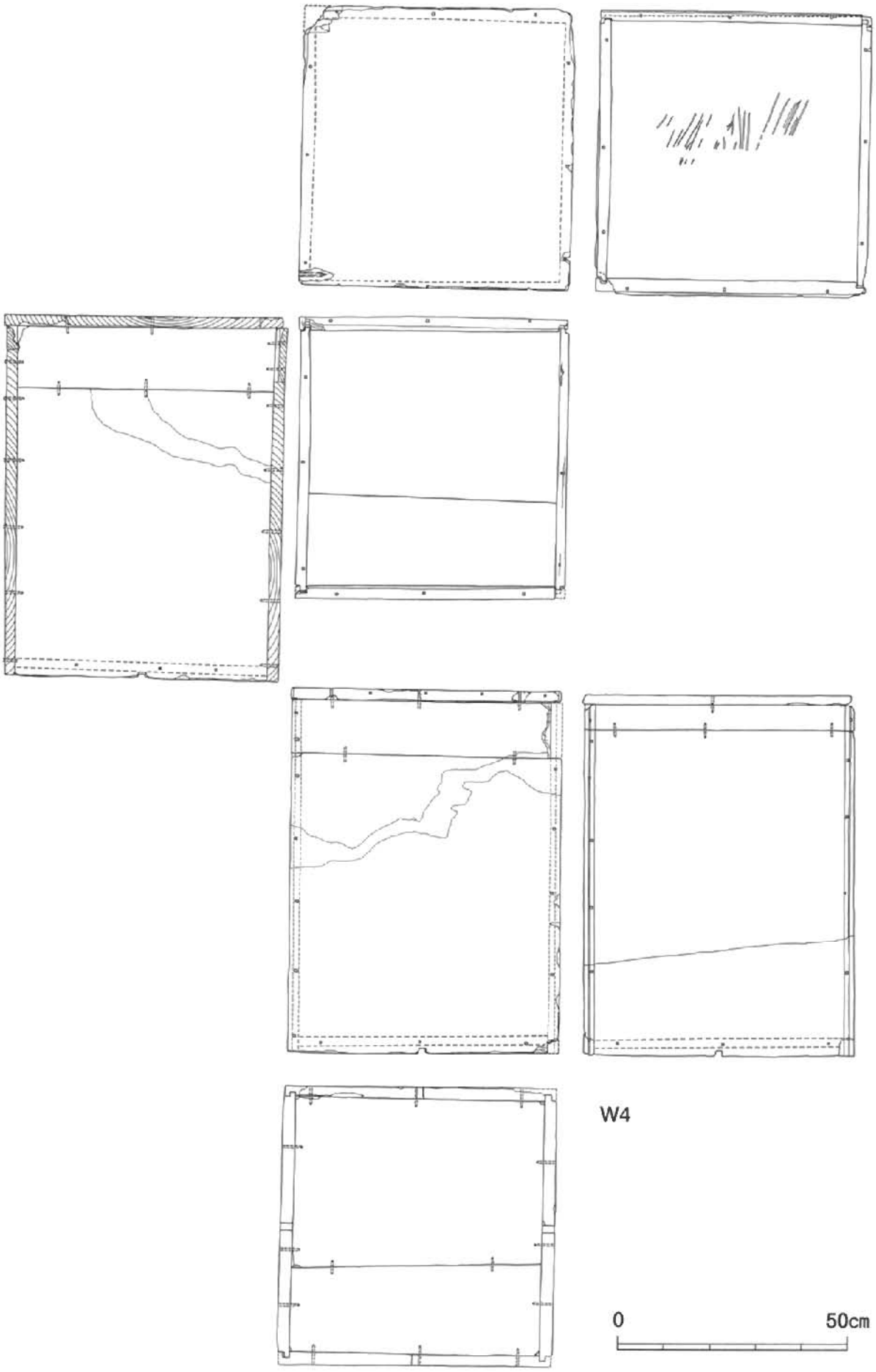
箱棺(1)



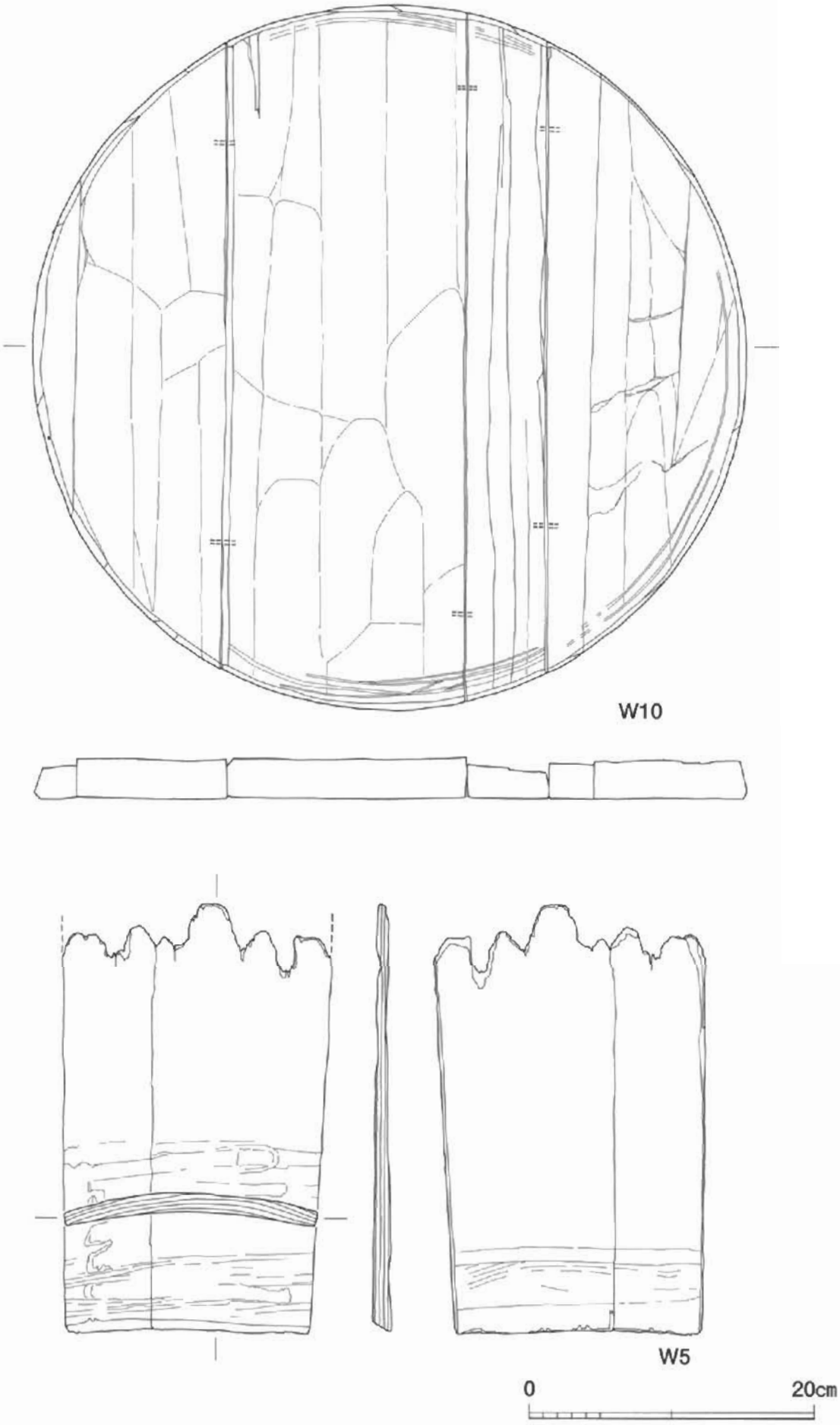
箱棺(2)



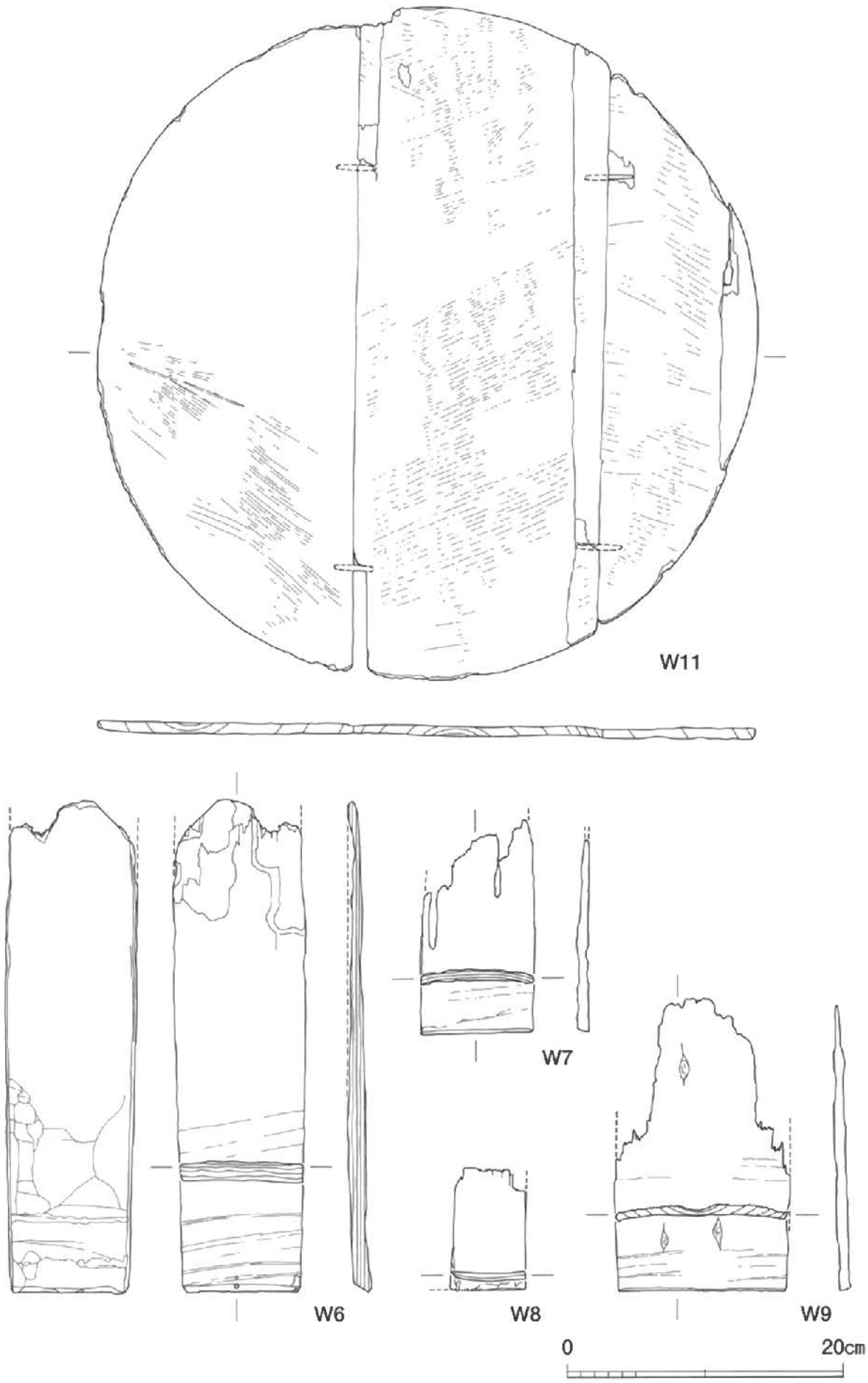
箱棺(3)



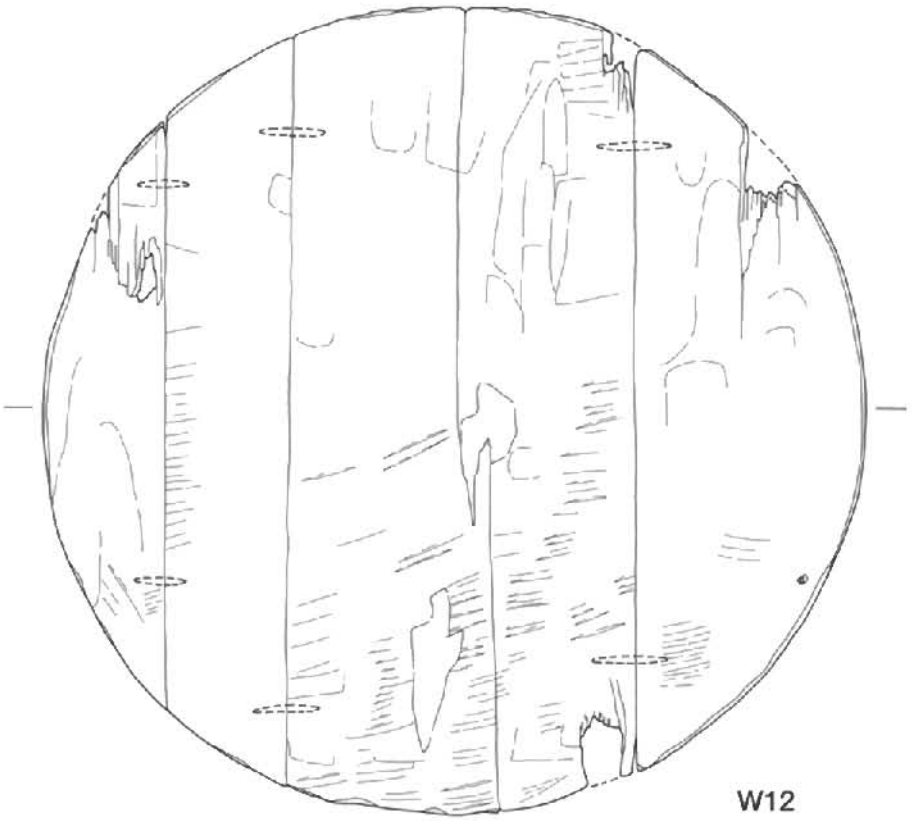
箱棺(4)

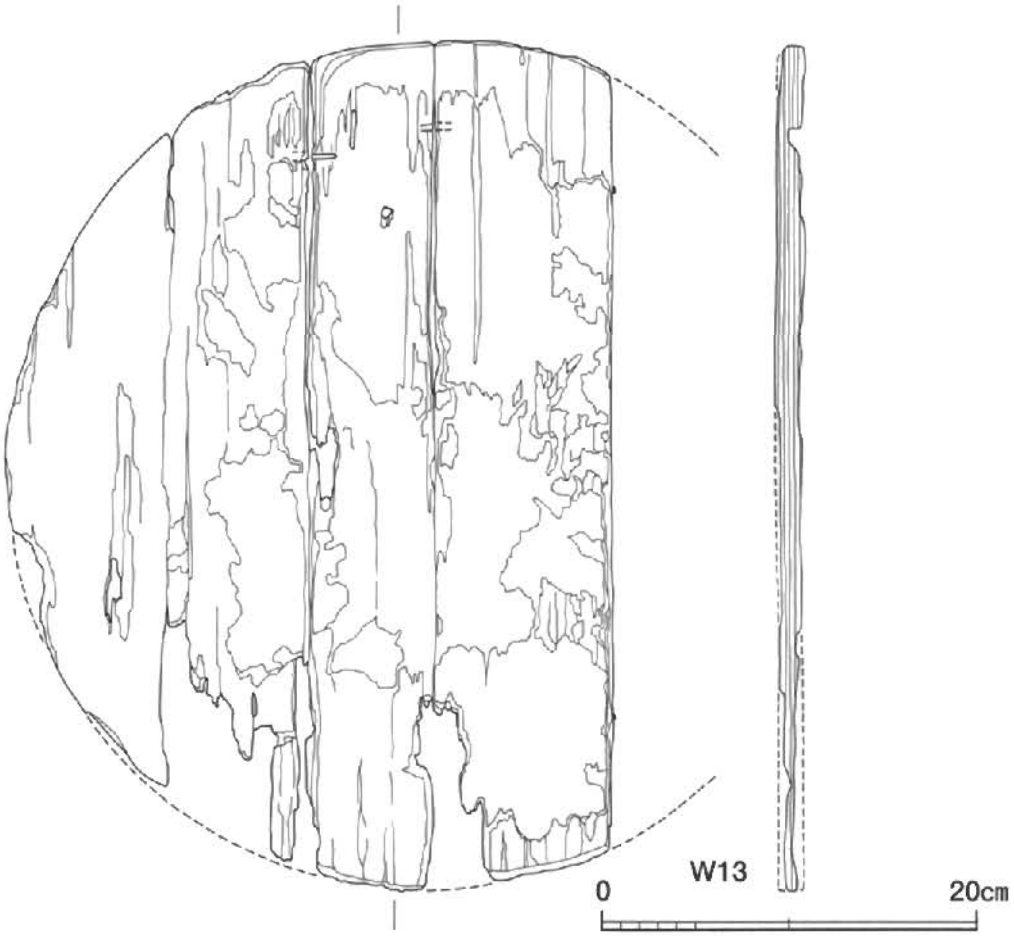


桶棺(1)

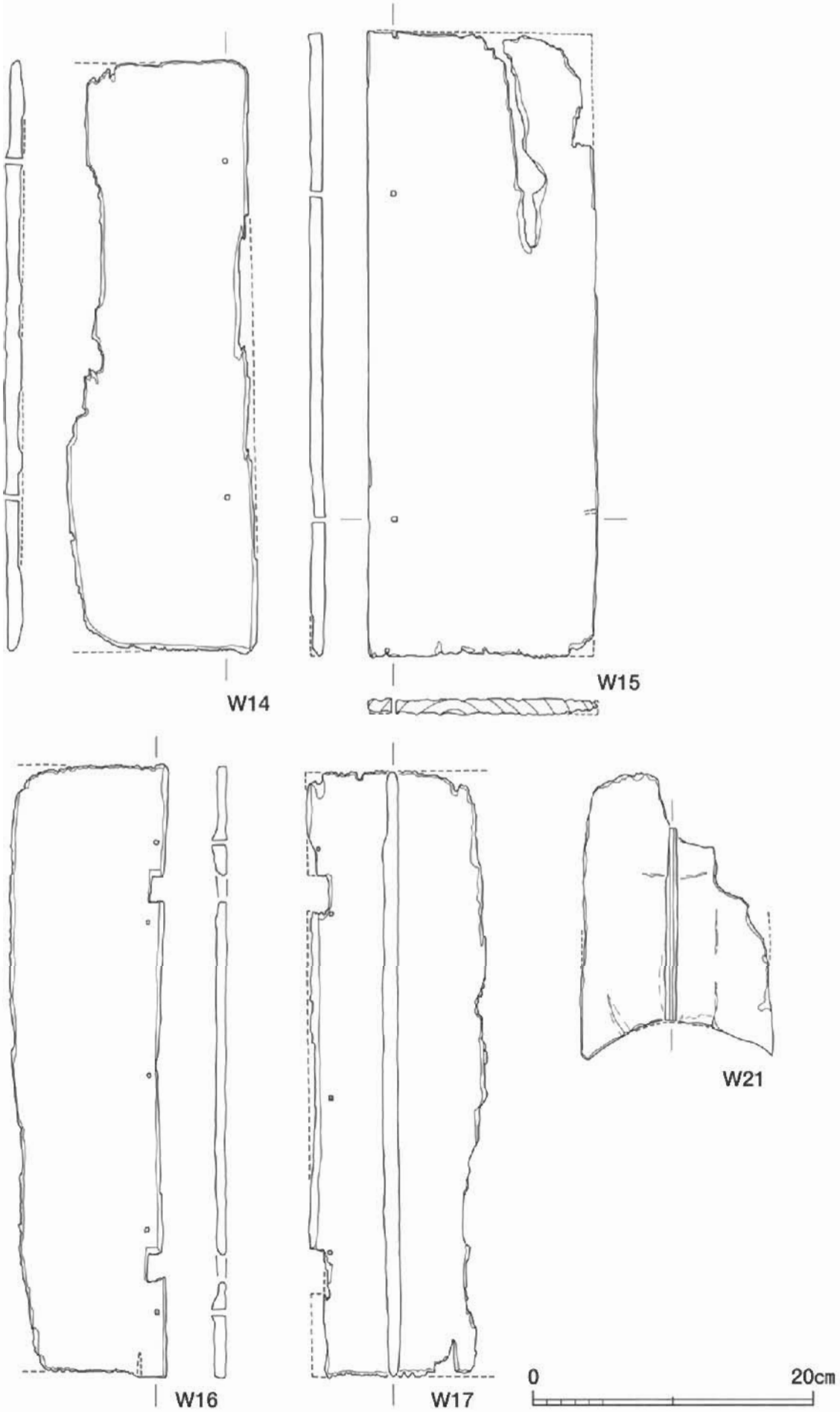


桶棺(2)

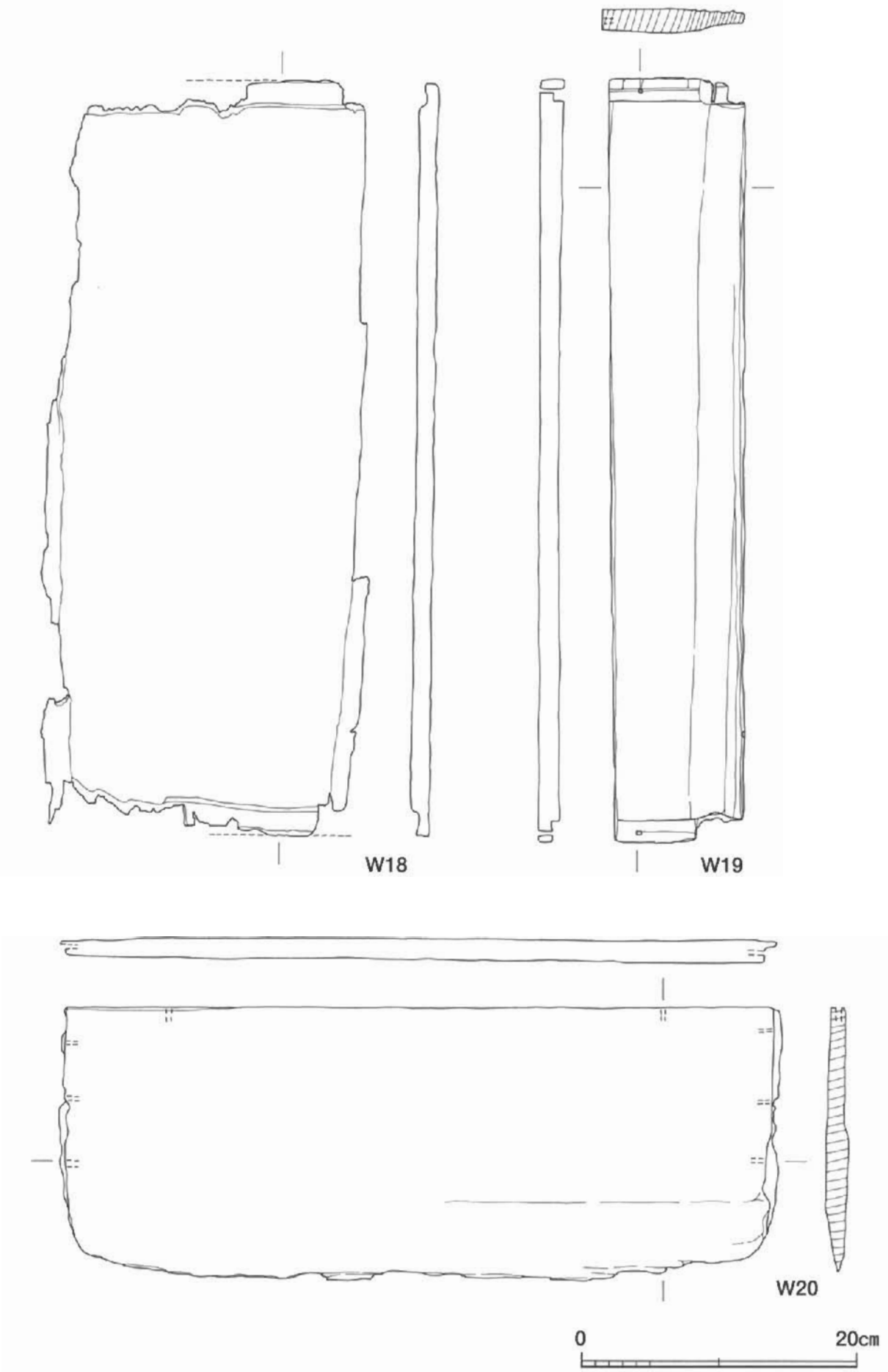




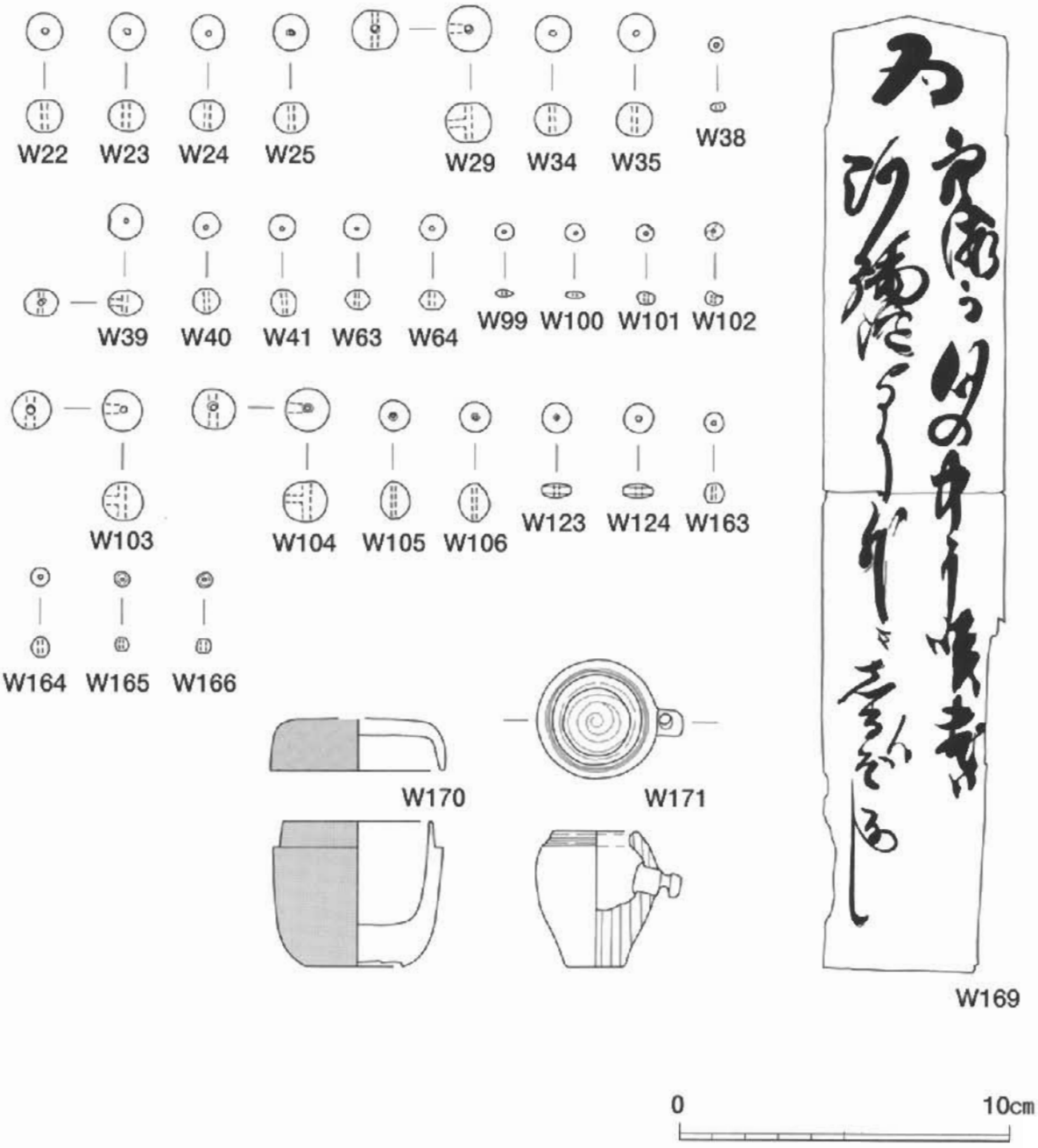
桶棺(3)

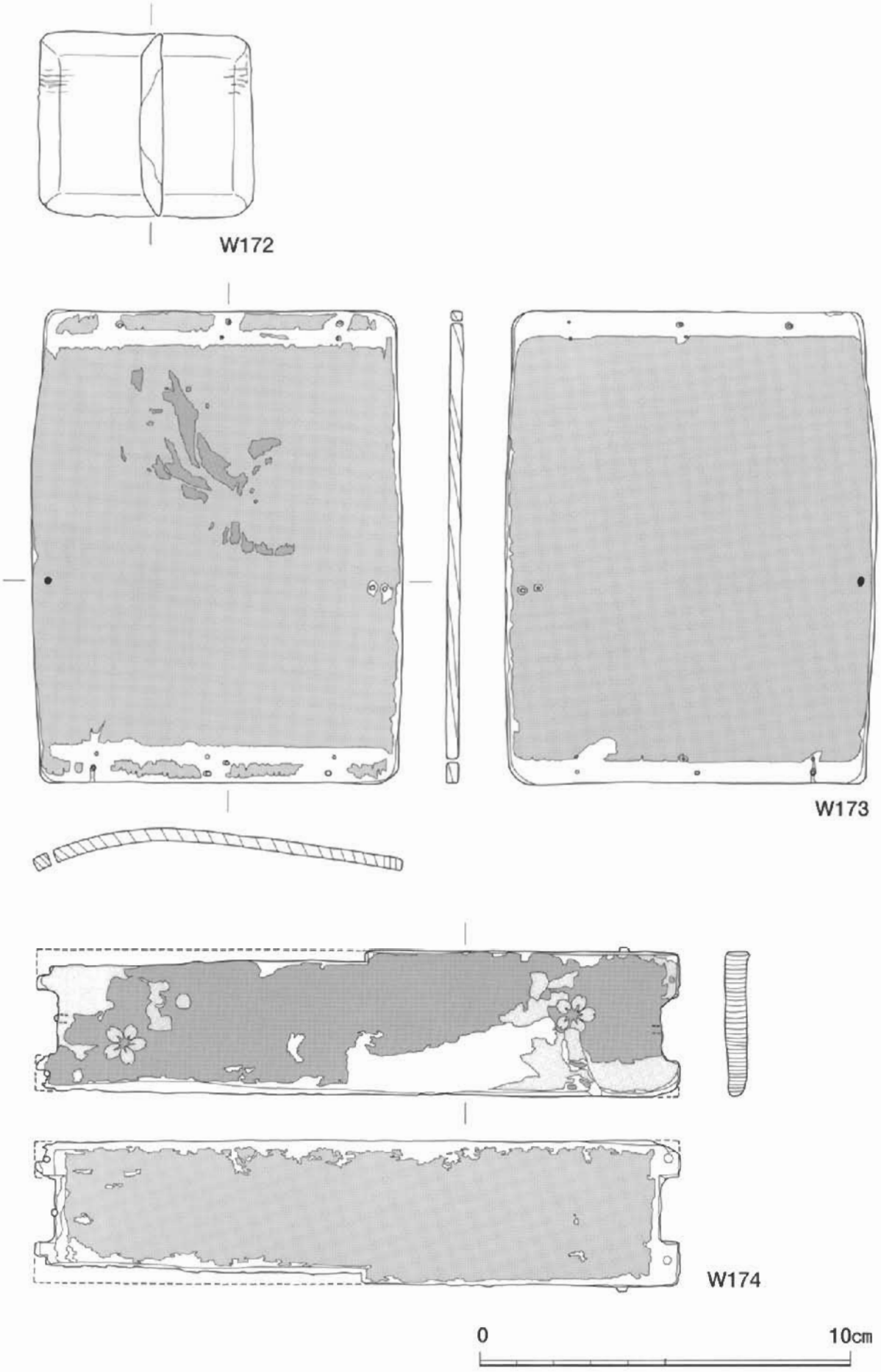


箱棺(5) 他

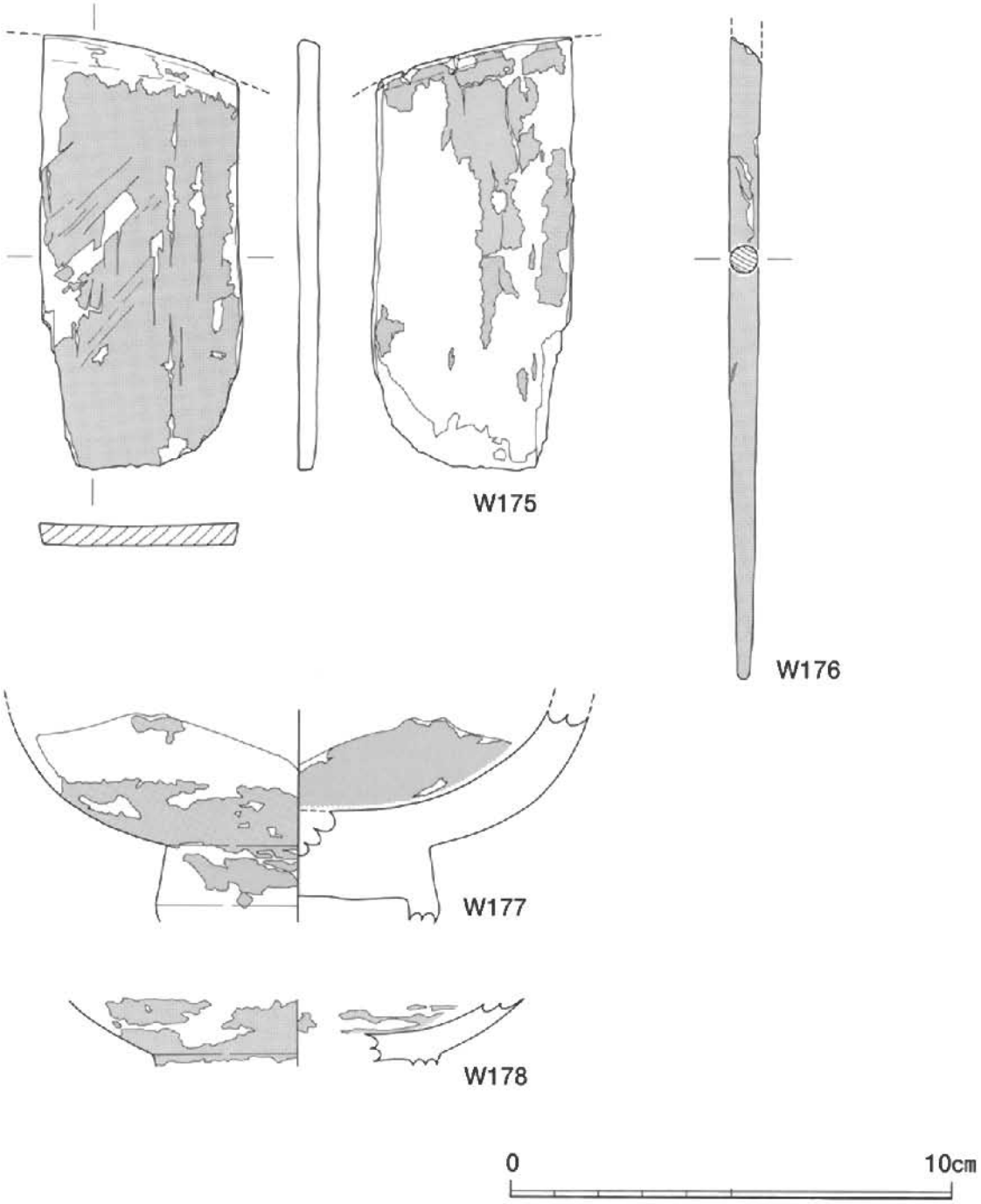


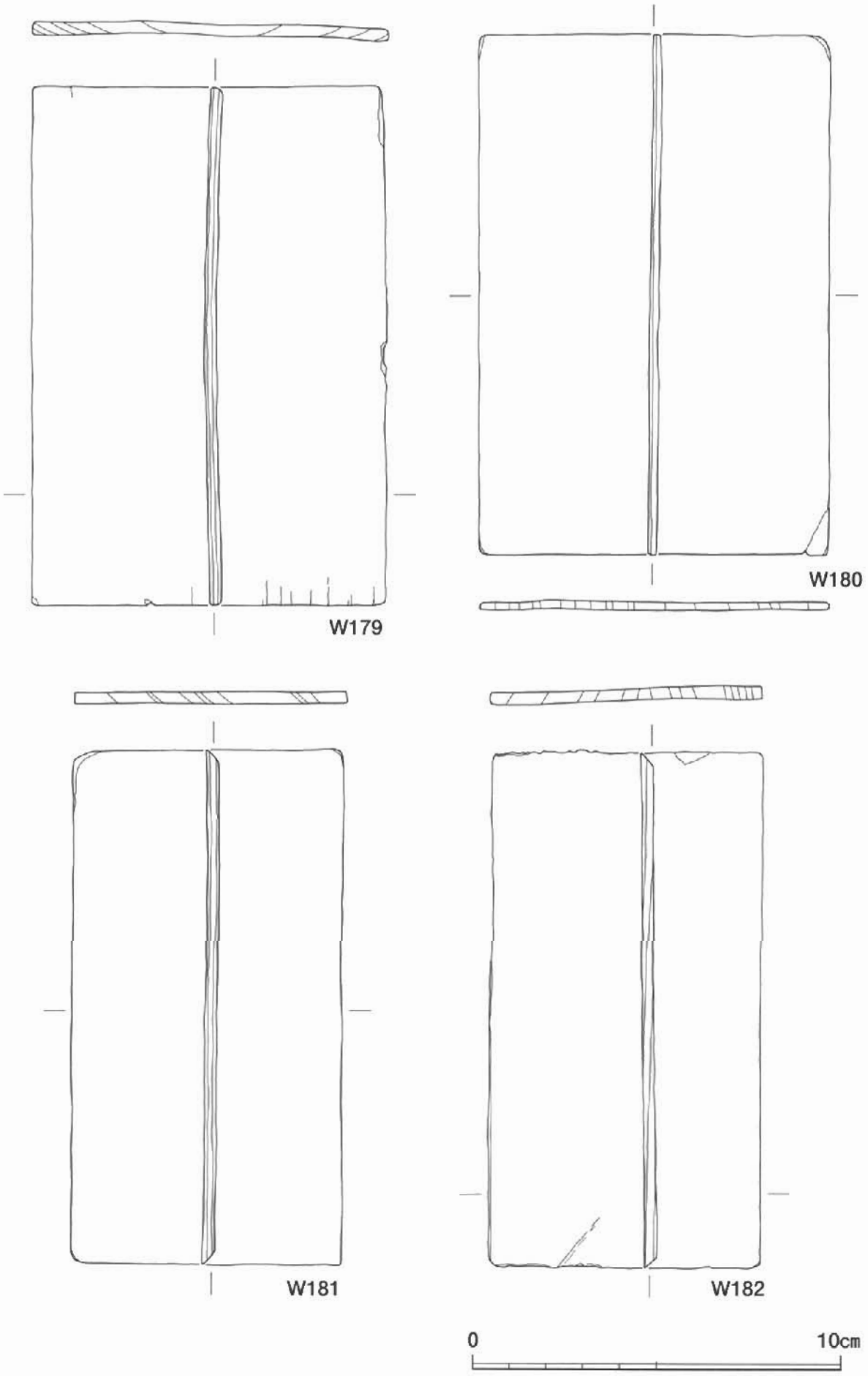
箱棺(6)


W22
W23
W24
W25
W29
W34
W35
W38
W39
W40
W41
W63
W64
W99
W100
W101
W102
W103
W104
W105
W106
W123
W124
W163
W164
W165
W166
W170
W171
W169
0
10cm

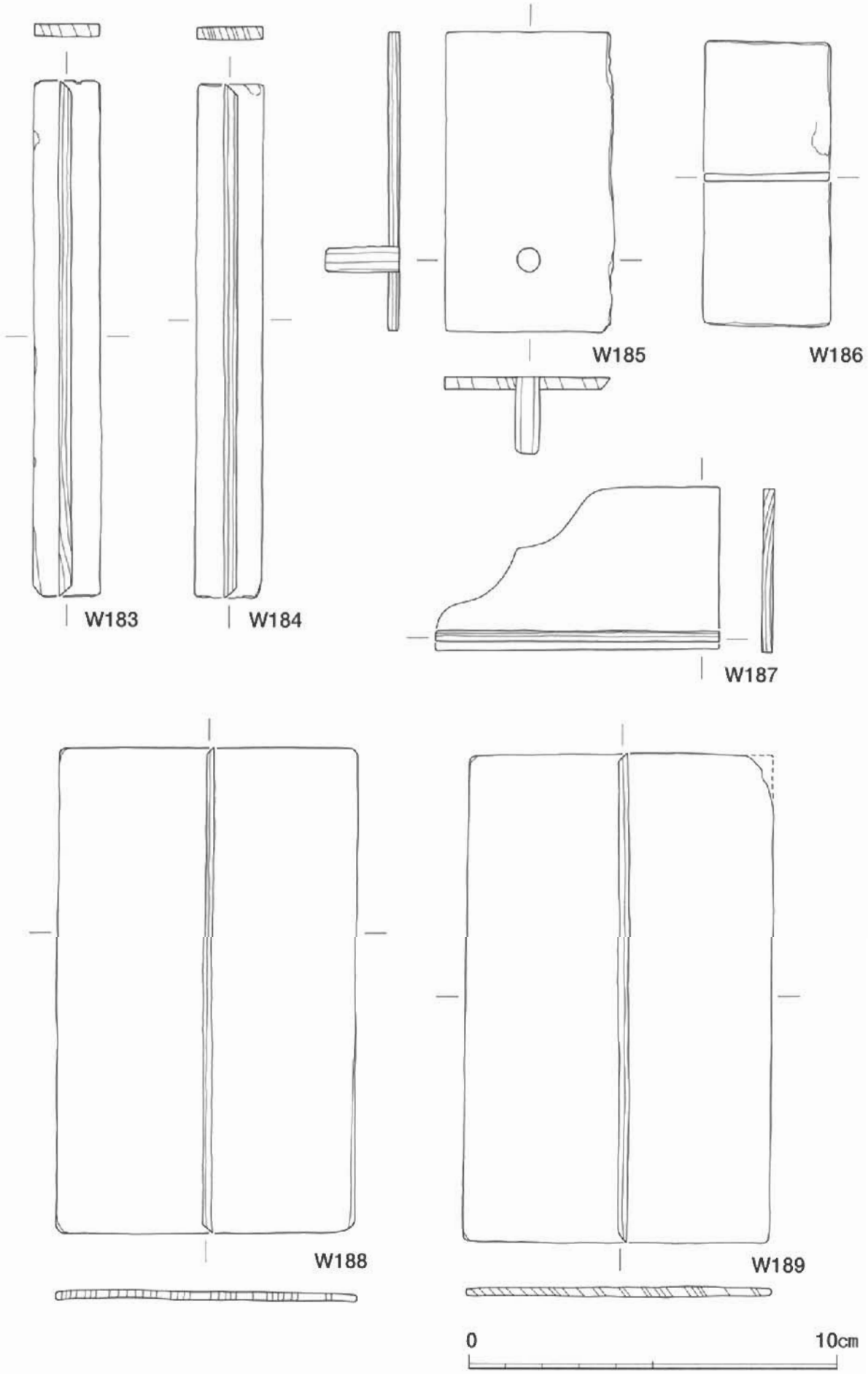


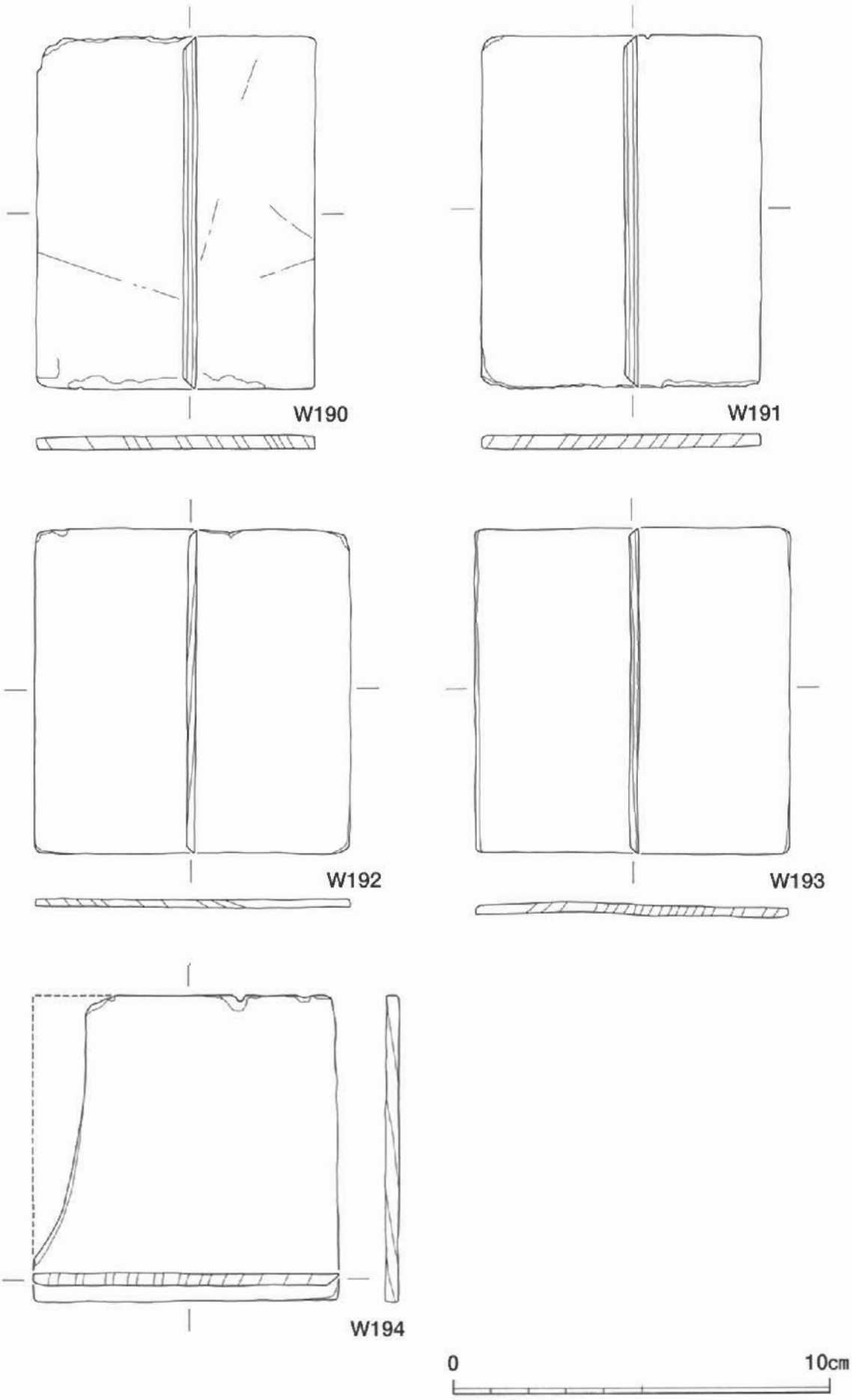
容器・漆製品(1) 箱


W175
W176
W177
W178
0
10cm

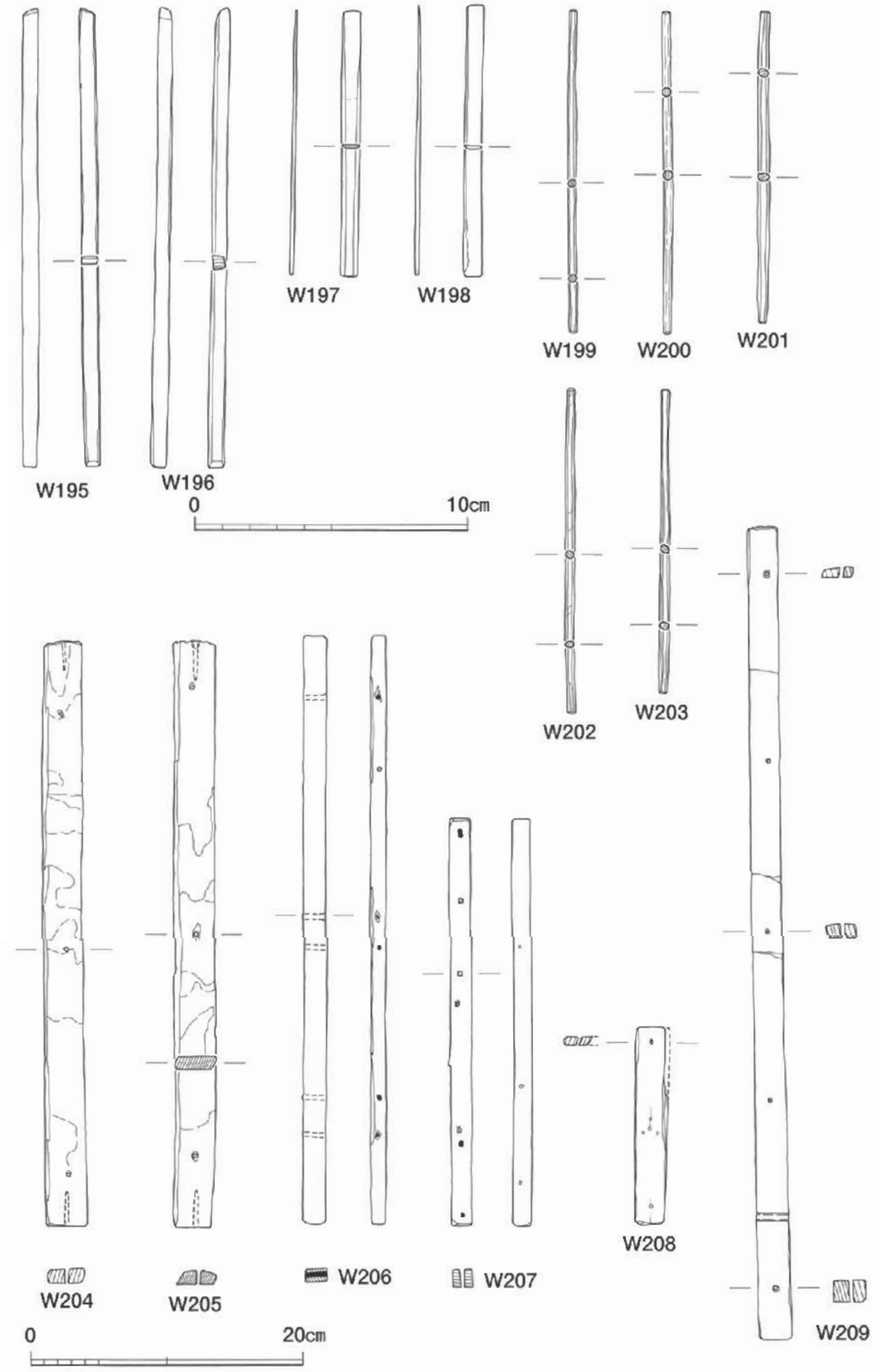


箱(1)

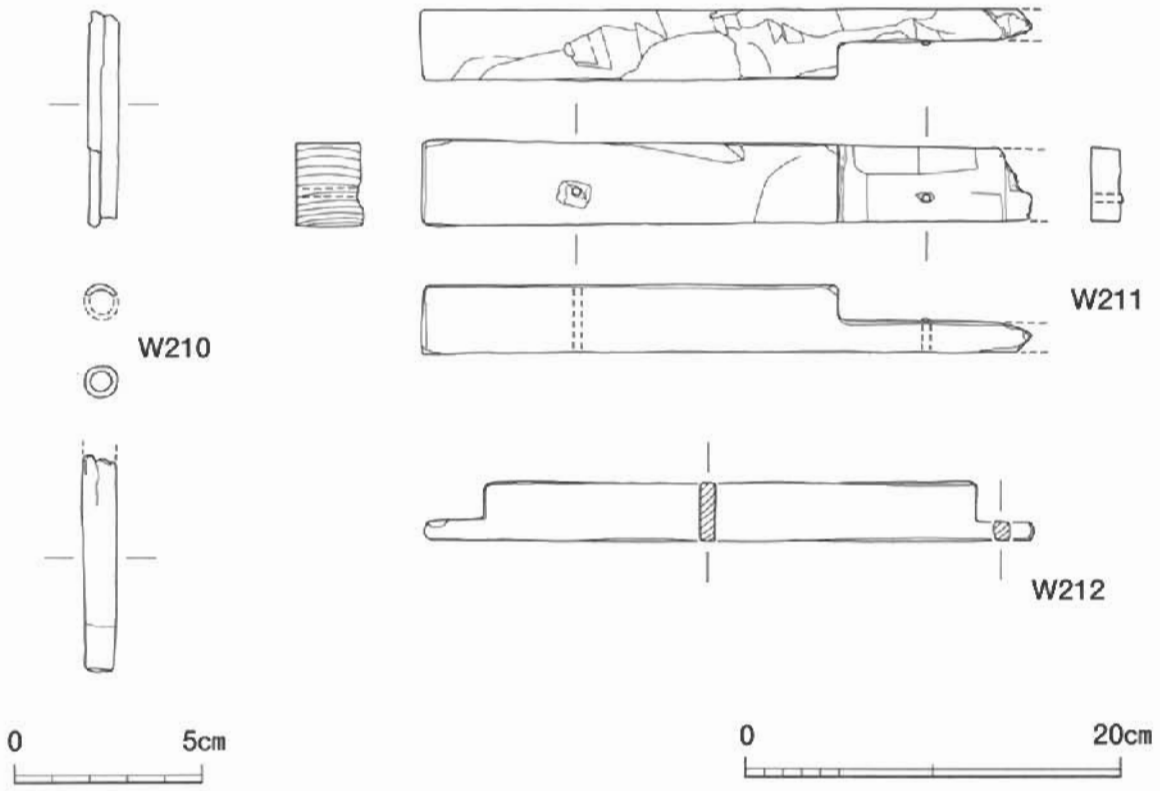

W183
W184
W185
W186
W187
W188
W189
0
10cm

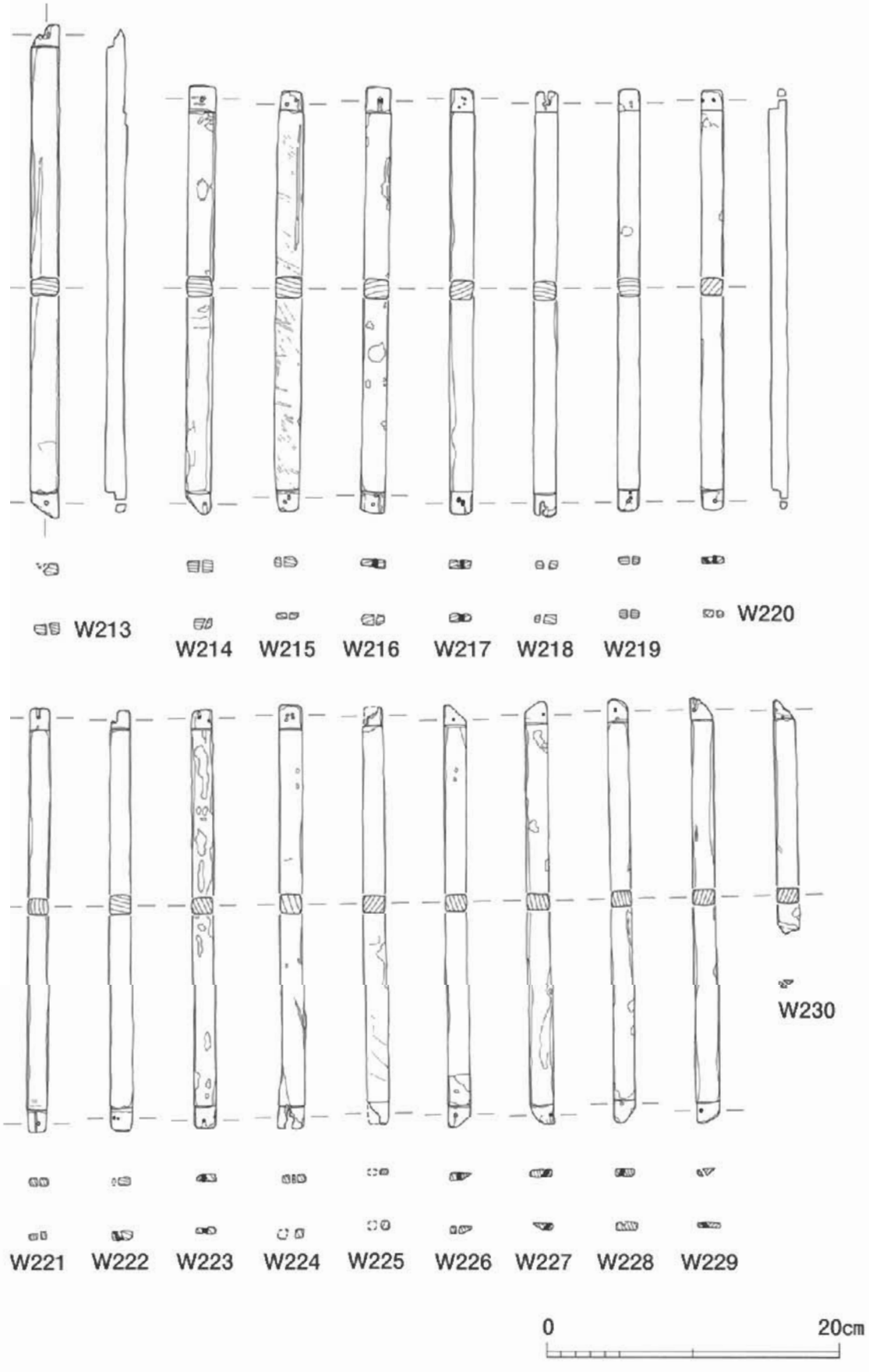


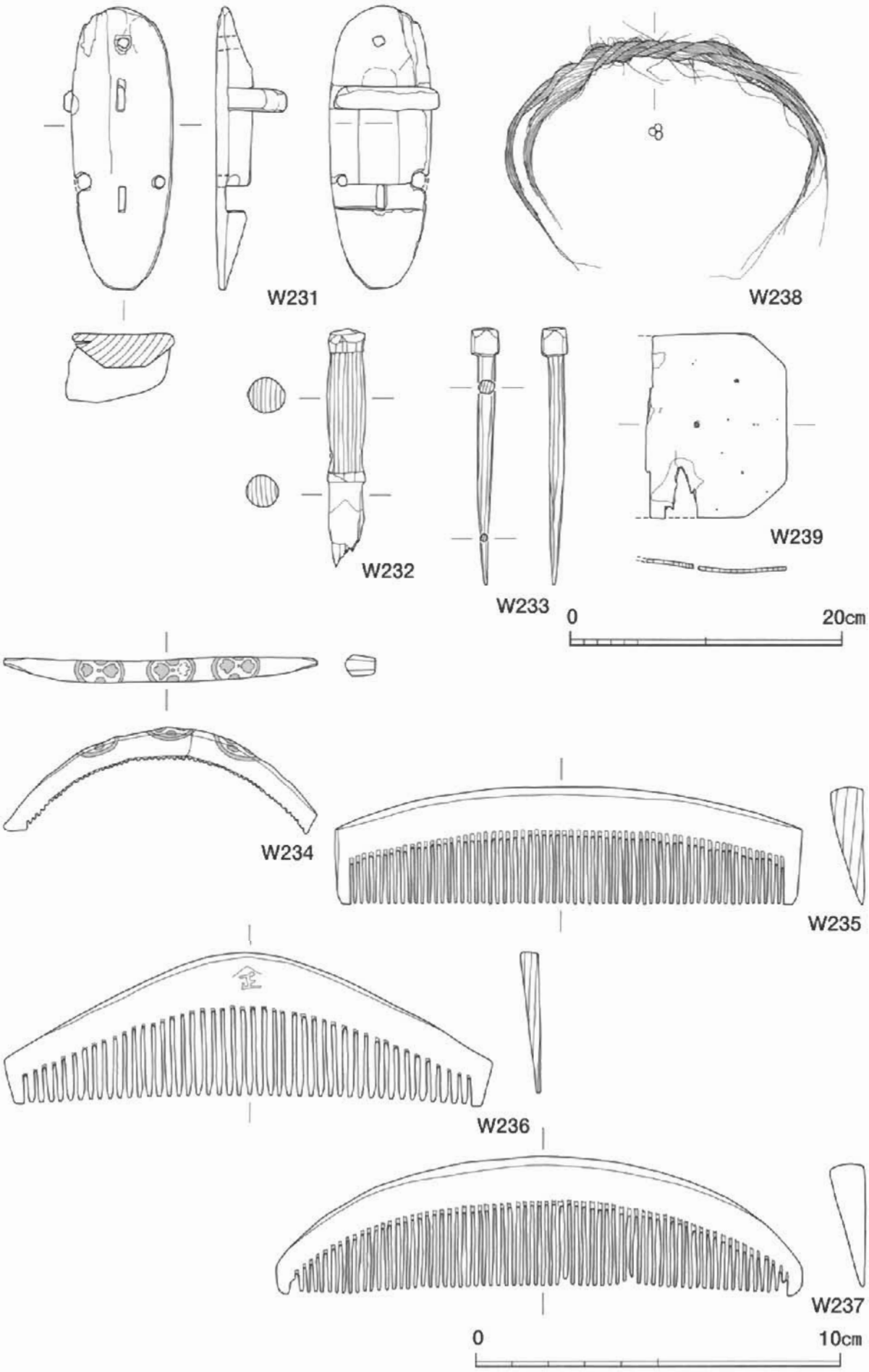
箱(3)


W195
W196
W197
W198
W199
W200
W201
0
10cm
W202
W203
W204
W205
W206
W207
W208
W209
0
20cm

箸他

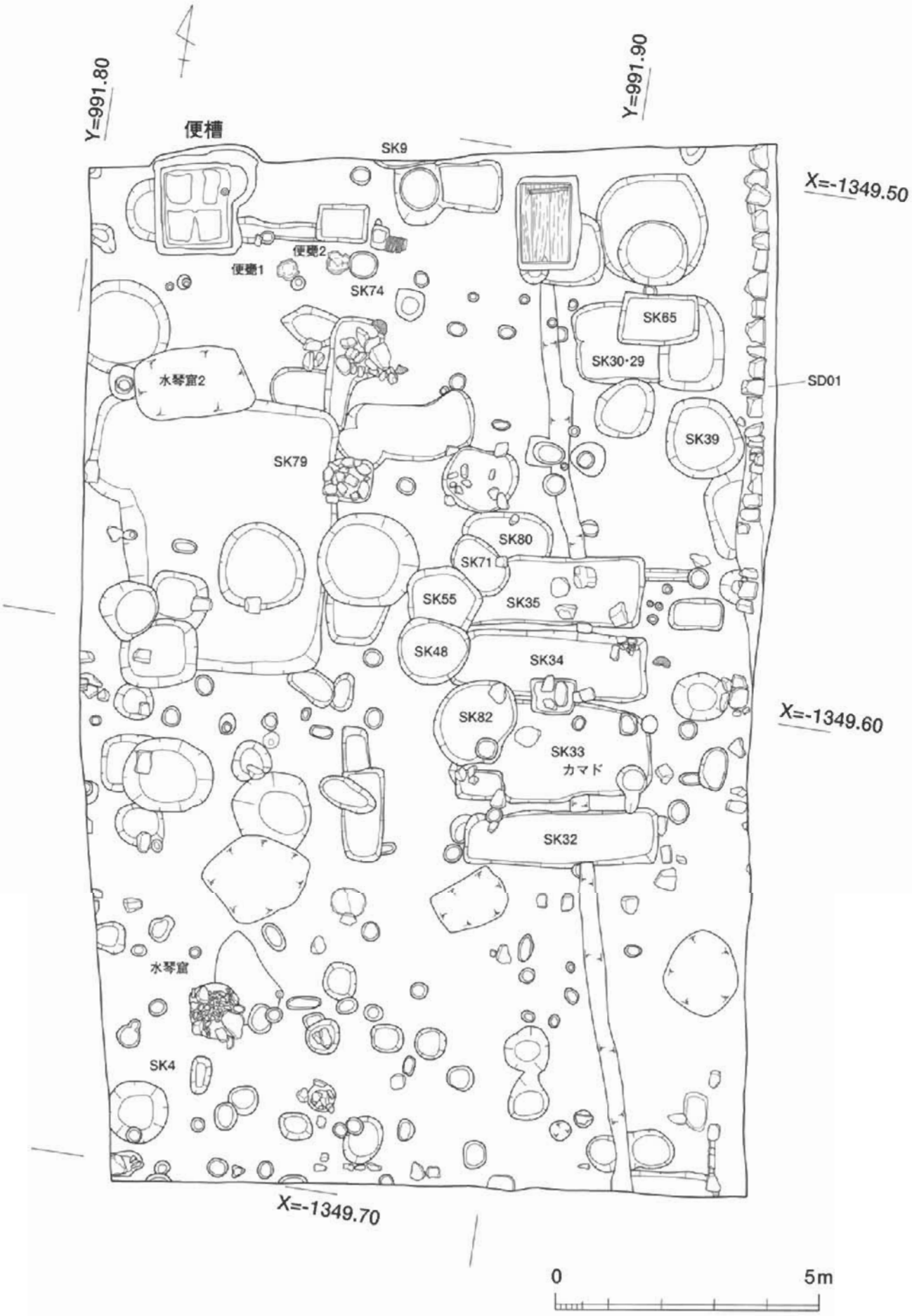

W210
W211
W212
0
5cm
0
20cm

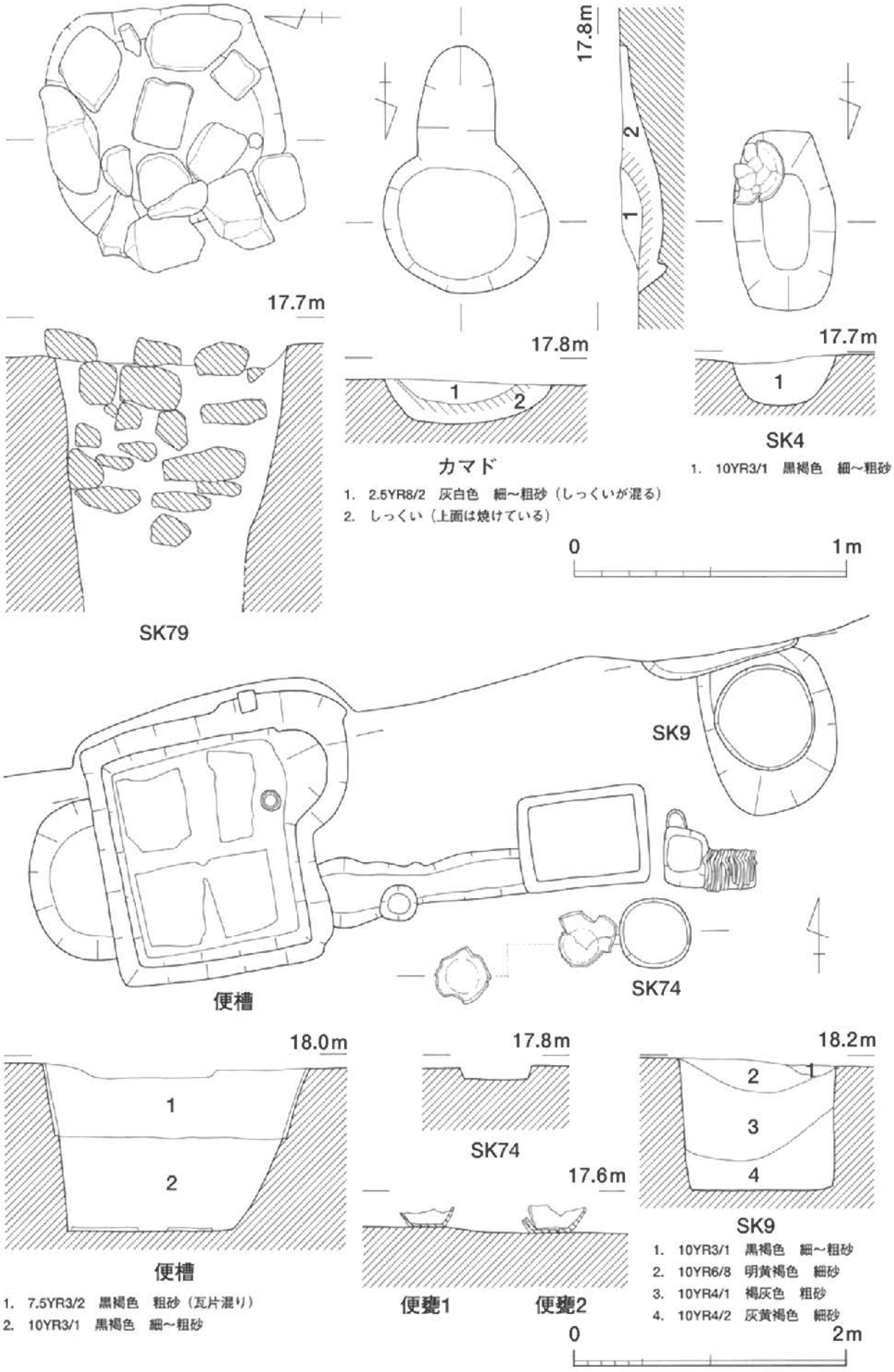

W213
W214
W215
W216
W217
W218
W219
W220
W221
W222
W223
W224
W225
W226
W227
W228
W229
W230
0
20cm

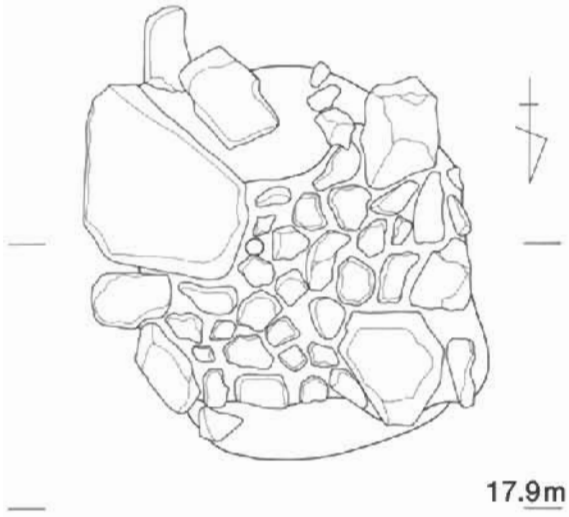


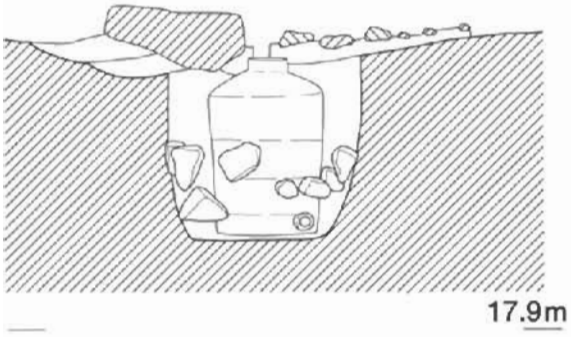
下駄・櫛・縄他

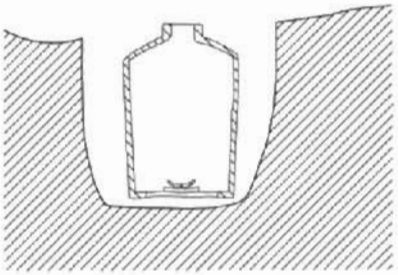
図版一一三　第一五〇次調査遺構配置図



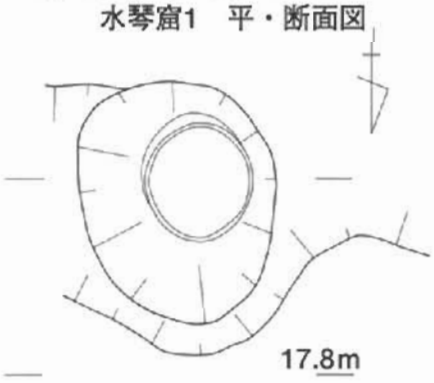

17.7m
SK79
17.8m
17.8m
1
2
カマド
1. 2.5YR8/2　灰白色　細～粗砂（しっくいが混る）
2. しっくい（上面は焼けている）
17.7m
1
SK4
1. 10YR3/1　黒褐色　細～粗砂
0
1m
SK9
SK74
便槽
18.0m
1
2
便槽
1. 7.5YR3/2　黒褐色　粗砂（瓦片混り）
2. 10YR3/1　黒褐色　細～粗砂
17.8m
SK74
17.6m
便甕1
便甕2
18.2m
2
1
3
4
SK9
1. 10YR3/1　黒褐色　細～粗砂
2. 10YR6/8　明黄褐色　細砂
3. 10YR4/1　褐灰色　粗砂
4. 10YR4/2　灰黄褐色　細砂
0
2m

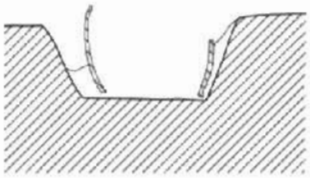




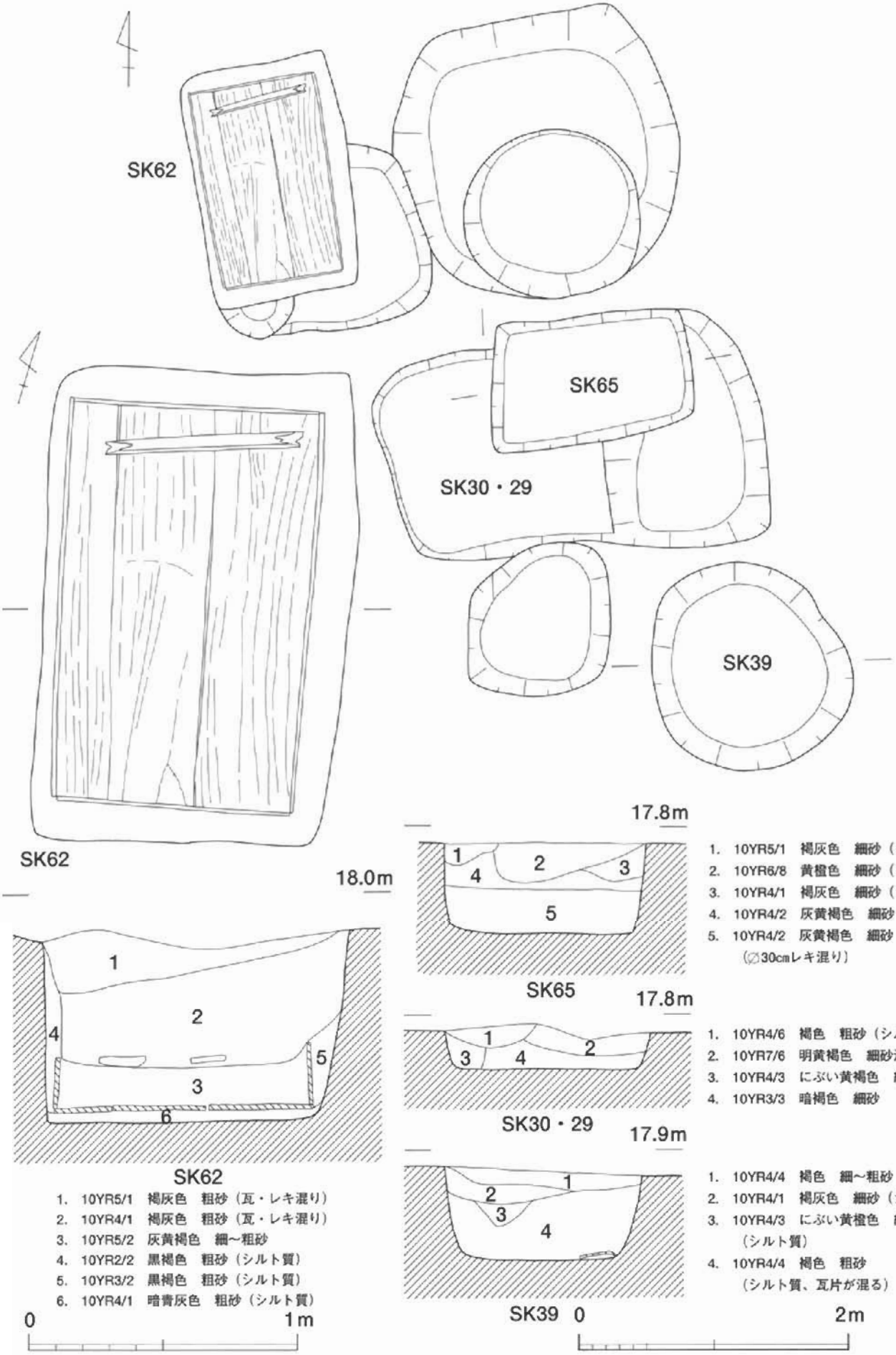


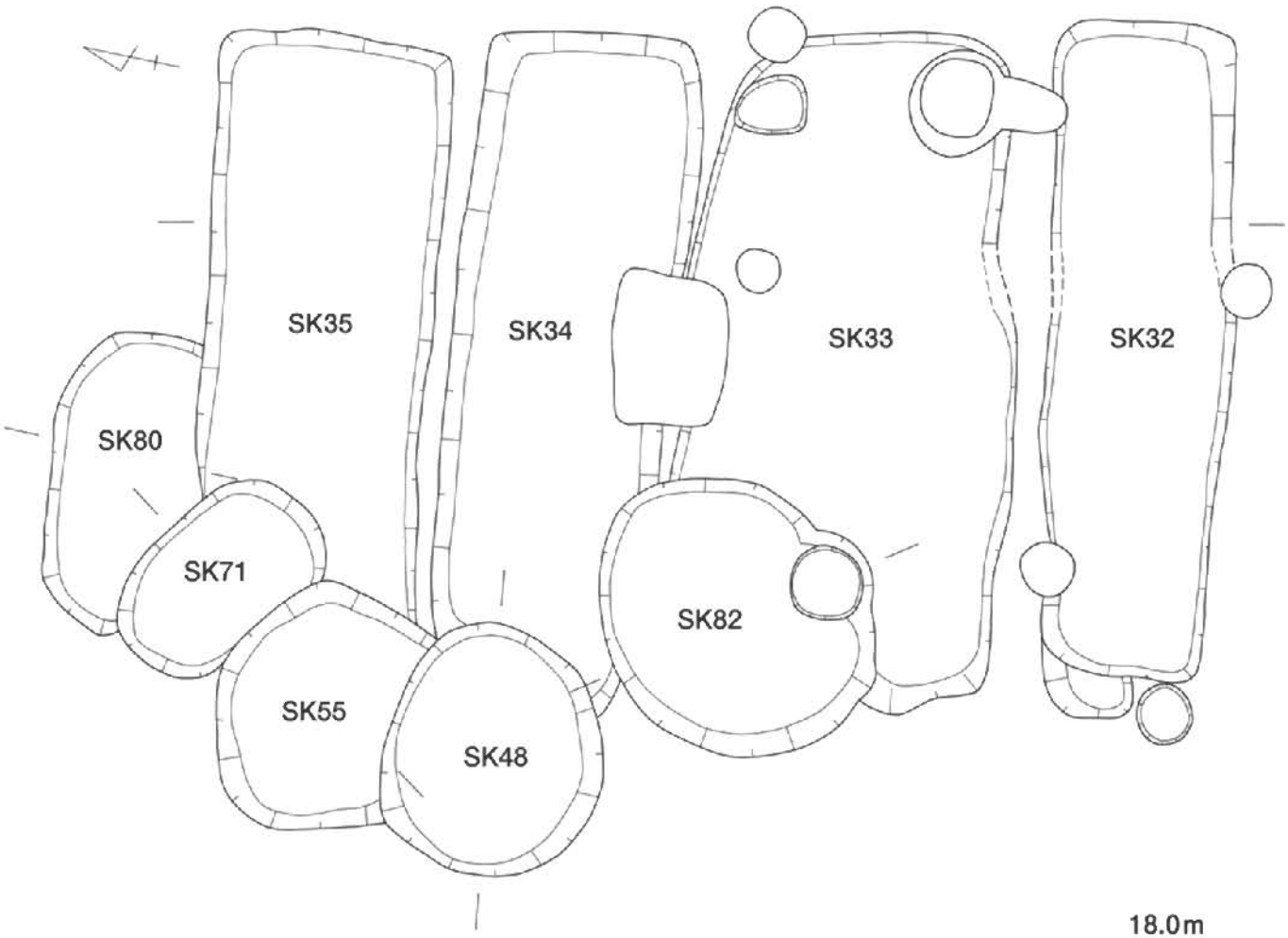
水琴窟1　平・断面図

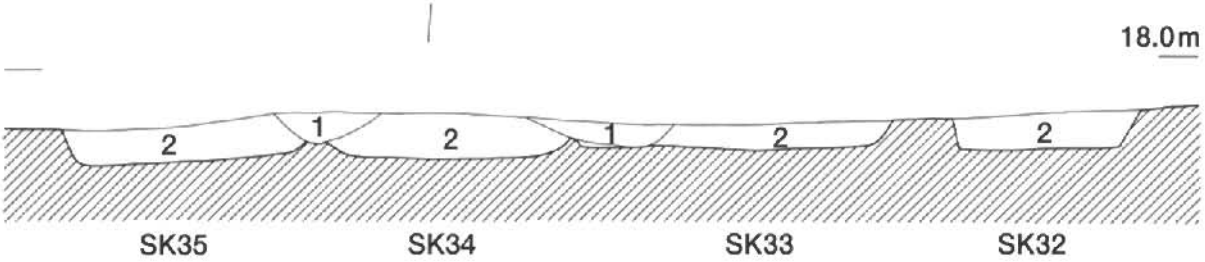




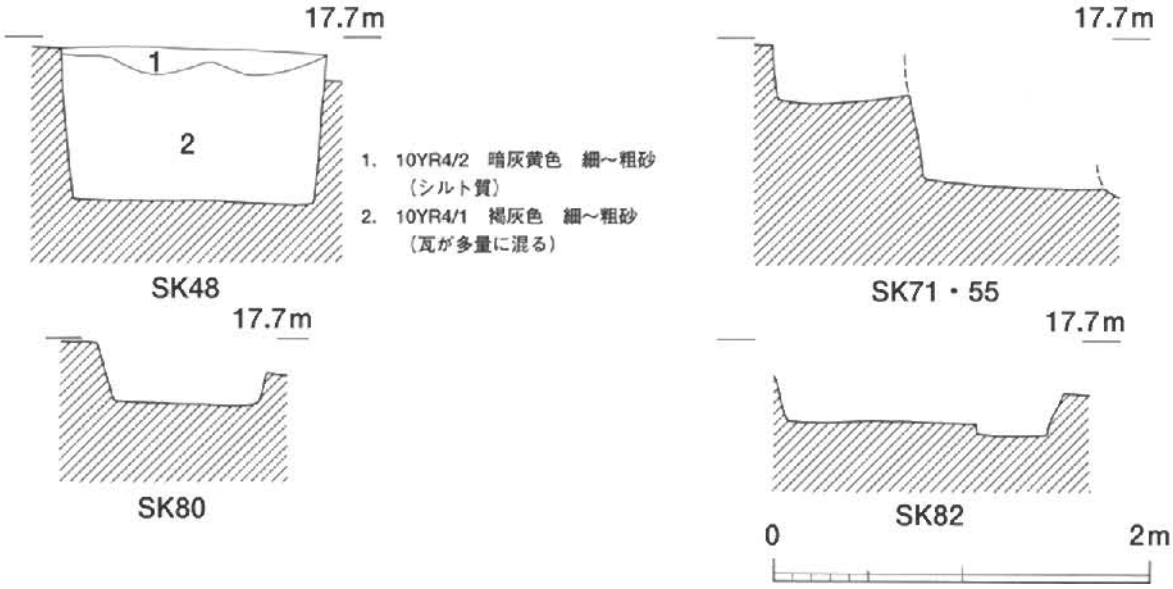
水琴窟2　平・断面図


SK62
SK65
SK30・29
SK39
SK62
18.0m
1
2
3
4
5
6
SK62
1. 10YR5/1　褐灰色　粗砂（瓦・レキ混り）
2. 10YR4/1　褐灰色　粗砂（瓦・レキ混り）
3. 10YR5/2　灰黄褐色　細～粗砂
4. 10YR2/2　黒褐色　粗砂（シルト質）
5. 10YR3/2　黒褐色　粗砂（シルト質）
6. 10YR4/1　暗青灰色　粗砂（シルト質）
0　1m
17.8m
1
2
3
4
5
SK65
1. 10YR5/1　褐灰色　細砂（シルト質）
2. 10YR6/8　黄橙色　細砂（シルト質）
3. 10YR4/1　褐灰色　細砂（シルト質）
4. 10YR4/2　灰黄褐色　細砂（シルト質）
5. 10YR4/2　灰黄褐色　細砂
（∅30cmレキ混り）
17.8m
1
2
3
4
SK30・29
1. 10YR4/6　褐色　粗砂（シルト質）
2. 10YR7/6　明黄褐色　細砂混シルト
3. 10YR4/3　にぶい黄褐色　細砂　シルト
4. 10YR3/3　暗褐色　細砂
17.9m
1
2
3
4
SK39
1. 10YR4/4　褐色　細～粗砂
2. 10YR4/1　褐灰色　細砂（シルト質）
3. 10YR4/3　にぶい黄橙色　細～粗砂
（シルト質）
4. 10YR4/4　褐色　粗砂
（シルト質、瓦片が混る）
0　2m

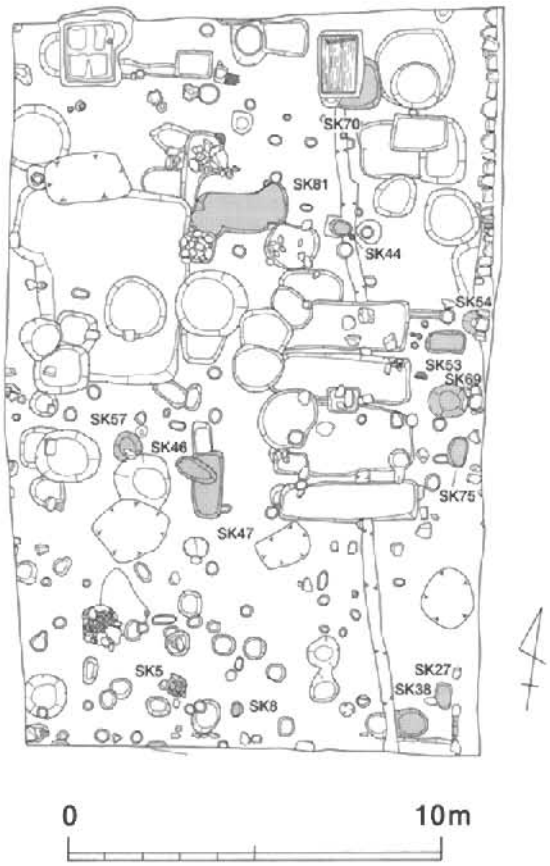


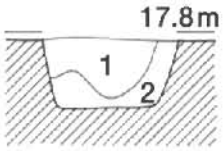


1. 7.5YR5/1　褐灰色　極細～細砂
2. 2.5YR3/2　暗赤褐色　極細～細砂（炭・焼土が多量に混る）



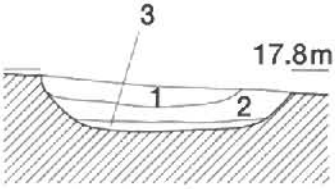
1. 10YR4/2　暗灰黄色　細～粗砂（シルト質）
2. 10YR4/1　褐灰色　細～粗砂（瓦が多量に混る）





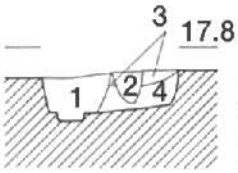
1. 7.5YR5/6　明褐色　極細～細砂
2. 7.5YR4/1　褐灰色　極細～細砂

SK5



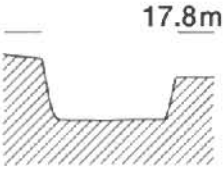
1. 7.5YR3/1　黒褐色　極細～細砂
2. 7.5YR6/1　褐灰色　極細～細砂
3. 7.5YR4/6　褐色　極細砂

SK8



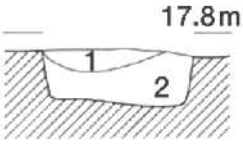
1. 7.5YR7/1　明褐灰色　極細砂
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
3. 10YR3/2　黒褐色　細砂（シルト質）
4. 10YR3/3　暗褐色　細～粗砂（シルト質）

SK27



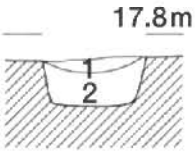
SK38

SK44



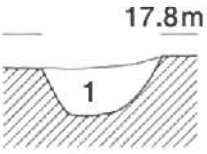
1. 10YR5/4　にぶい黄褐色　細～粗砂
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色　極細～細砂（シルト質）

SK46・47



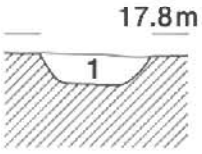
SK53

1. 10YR4/3　にぶい黄褐色　細～粗砂
2. 10YR4/1　褐灰色　極細～細砂
（シルト質、瓦片が多量に混る）



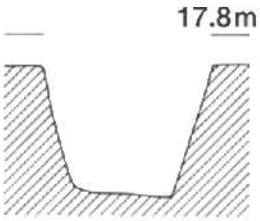
SK54

1. 10YR3/1　黒褐色　シルト
（瓦が多量に混る）

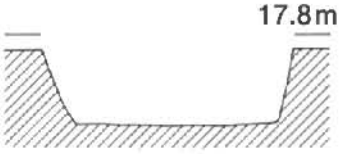


SK57

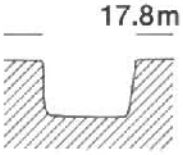
1. 10YR3/3　暗褐色　シルト



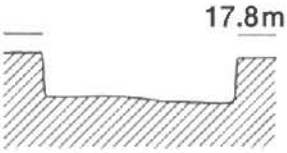
SK69



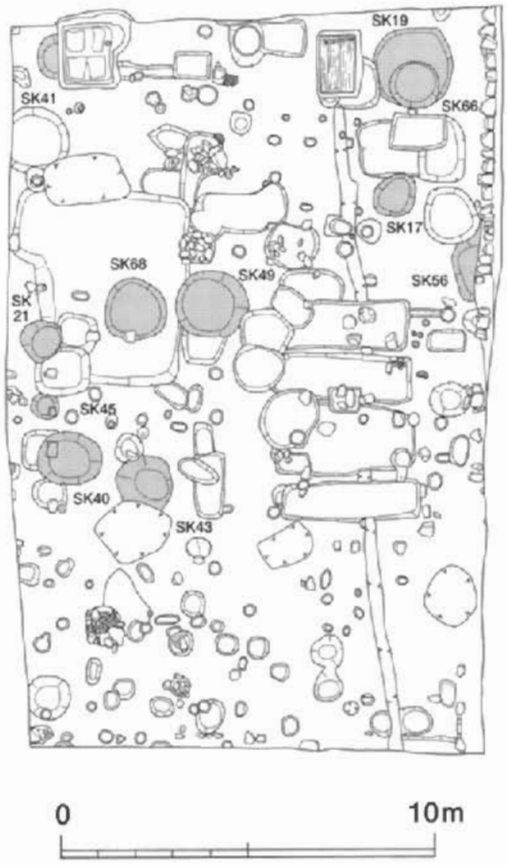
SK70

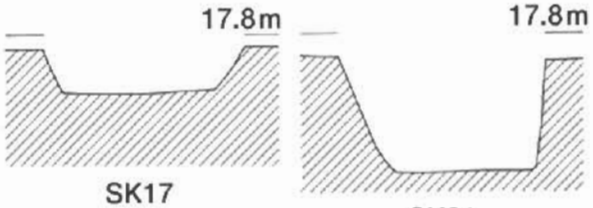


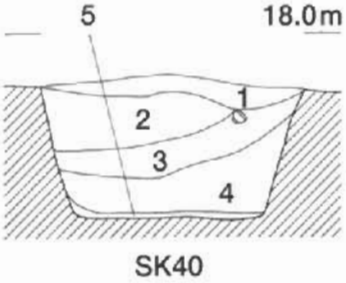
SK75



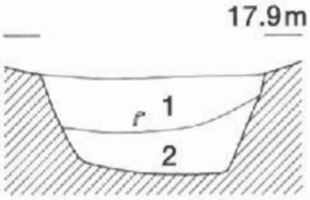
SK81



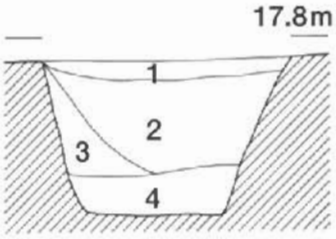




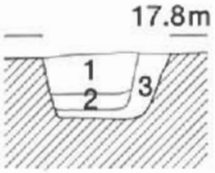
1. 10YR5/4　にぶい黄褐色　極細～細砂
2. 10YR3/2　黒褐色　極細～細砂（シルト質）
3. 10YR4/4　褐色　極細～細砂（シルト質）
4. 10YR2/3　黒褐色　極細～細砂
（シルト質、炭・焼土が混る）
5. 10YR5/8　黄褐色　極細～細砂



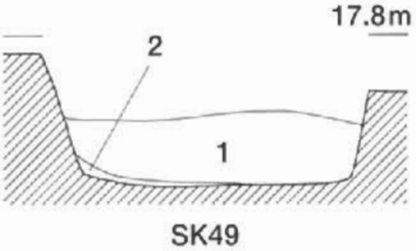
1. 10YR4/2　灰黄褐色　細砂（シルト質）
2. 10YR4/4　褐色　シルト



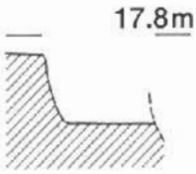
1. 10YR4/3　にぶい黄褐色　細～粗砂（シルト質）
2. 10YR5/6　黄褐色　細～粗砂（シルト質）
3. 10YR5/2　灰黄褐色　細～粗砂
4. 10YR4/1　褐灰色　細～粗砂（シルト質）

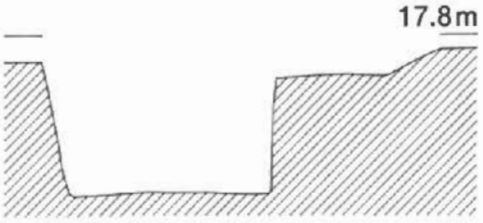


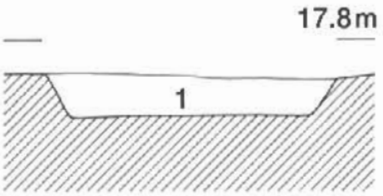
1. 10YR3/1　黒褐色　極細～細砂
2. 10YR4/1　褐灰色　極細～細砂
3. 10YR5/8　黄褐色　極細～細砂



1. 10YR4/1　褐灰色　極細～細砂（シルト質）
2. 10YR5/6　黄褐色　極細～細砂（シルト質）

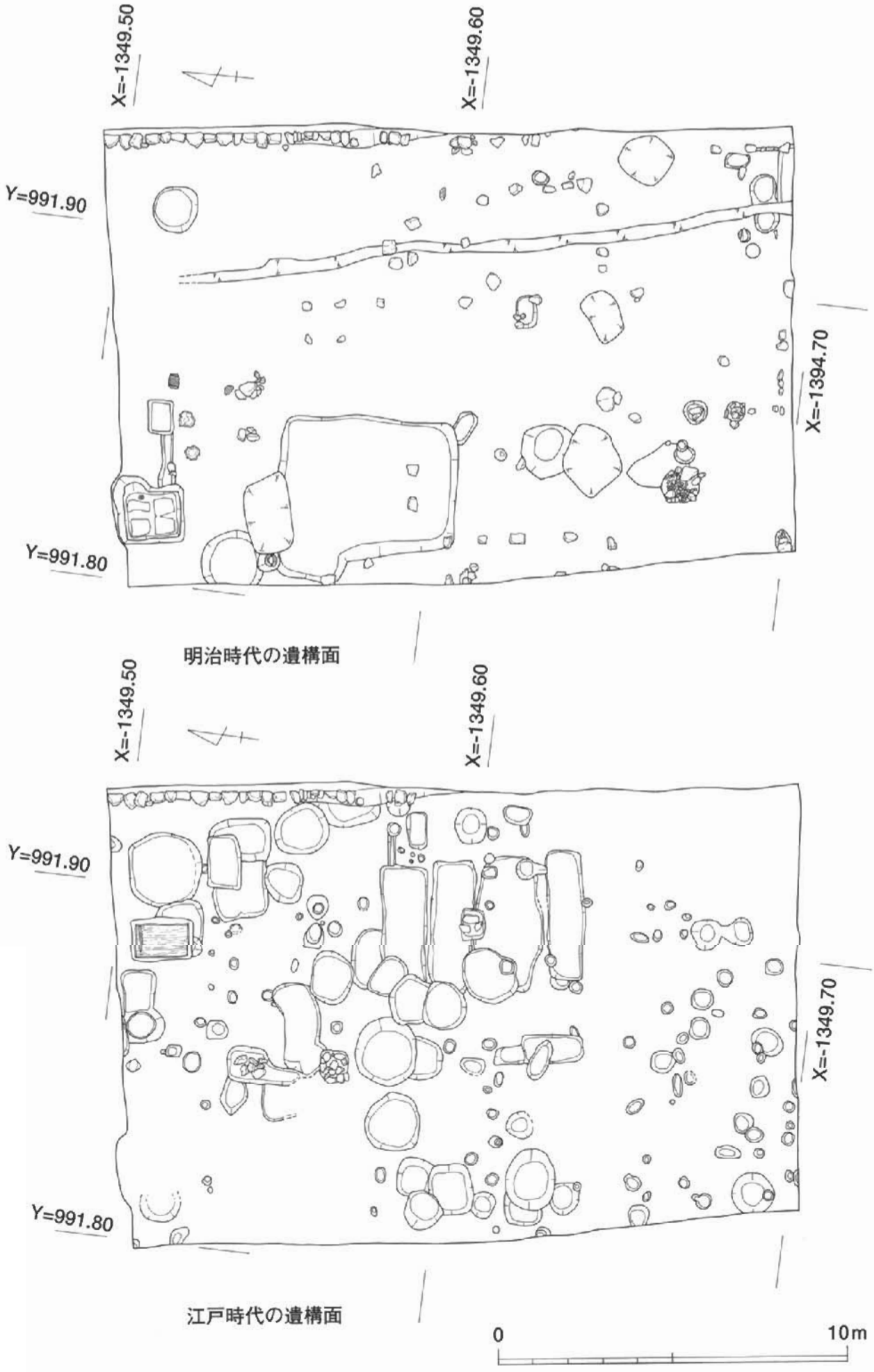




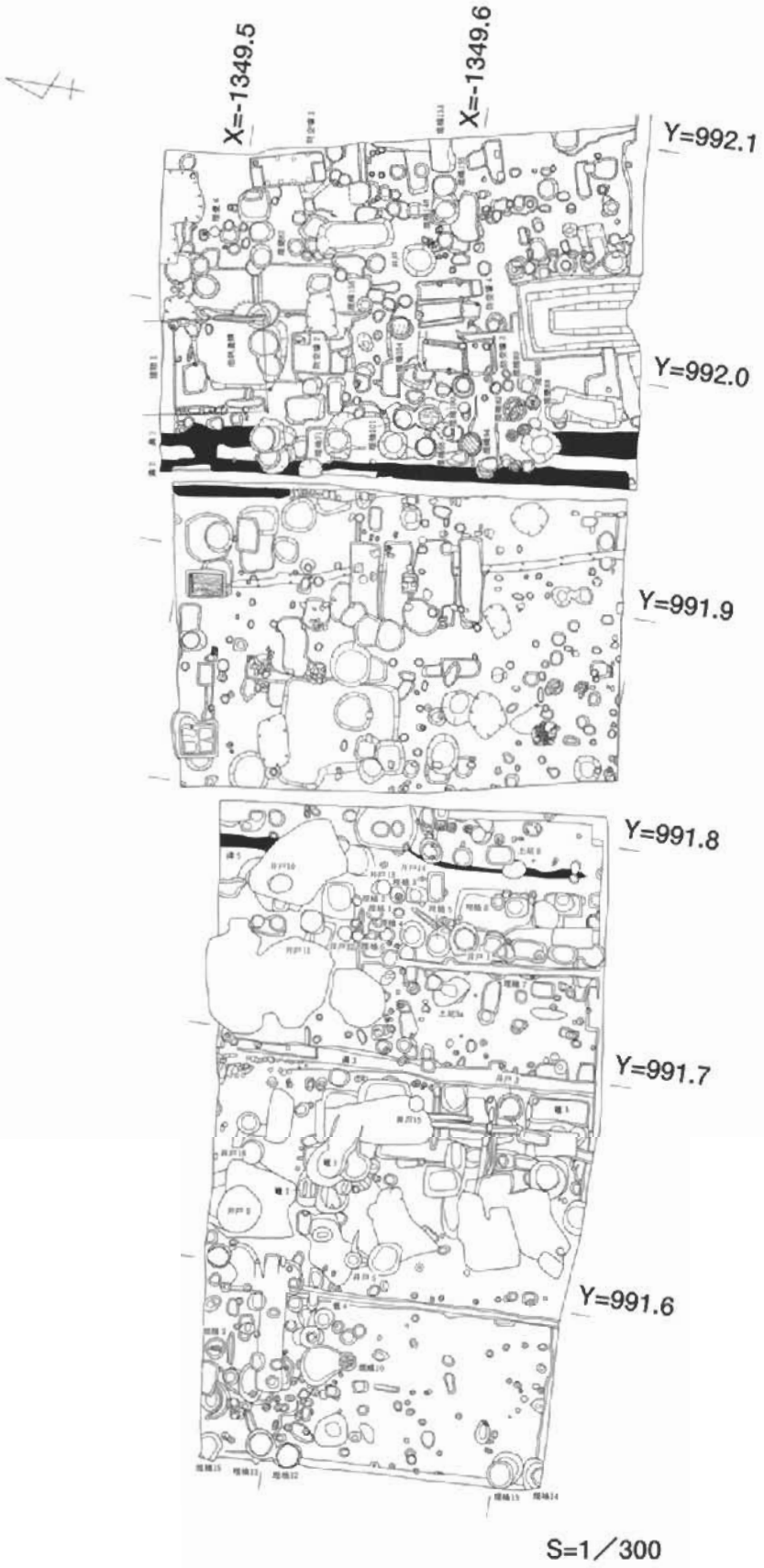


1. 10YR4/6　褐色　極細～細砂（シルト質）

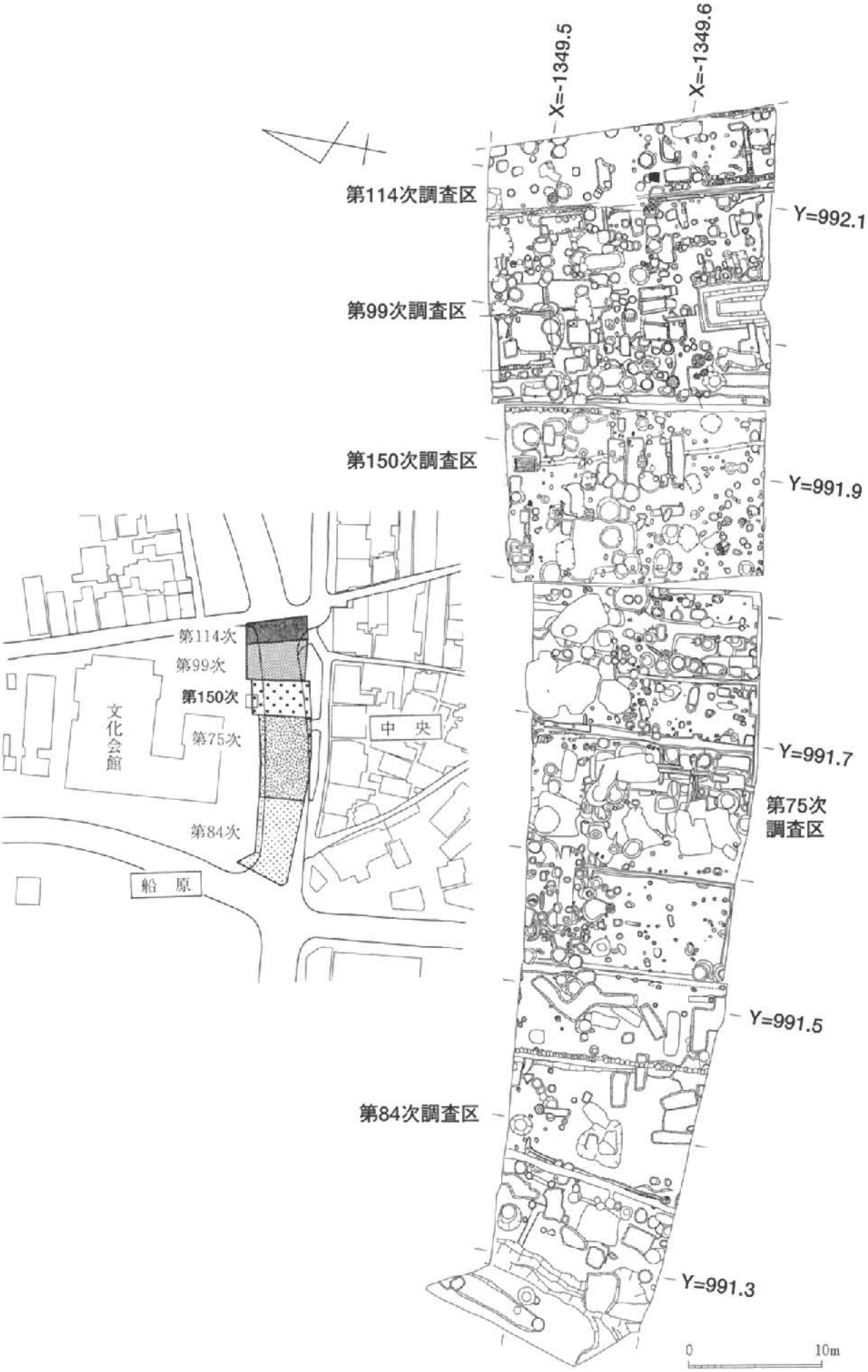
図版一一〇　第一五〇次調査時期毎の遺構変遷図

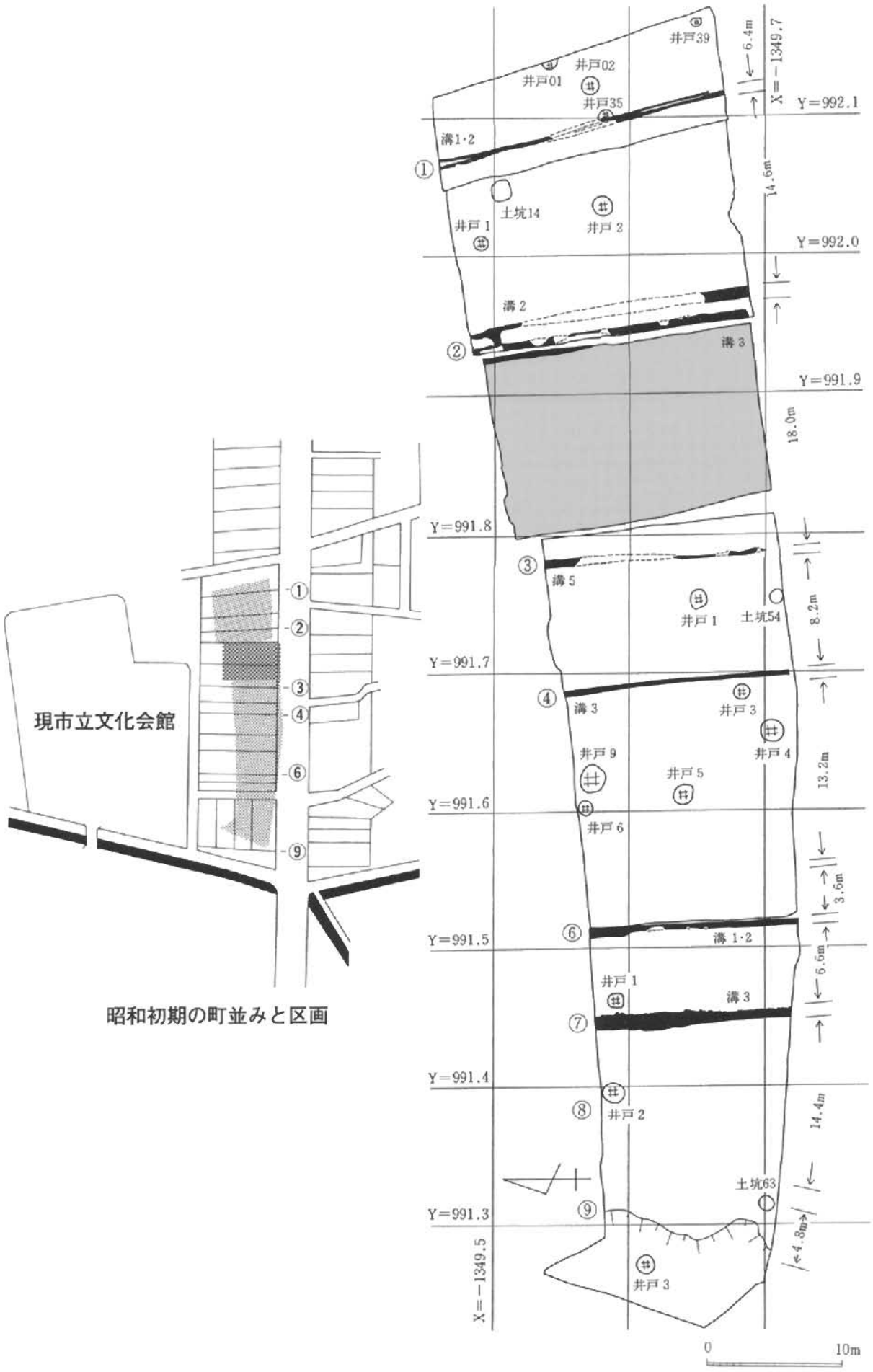


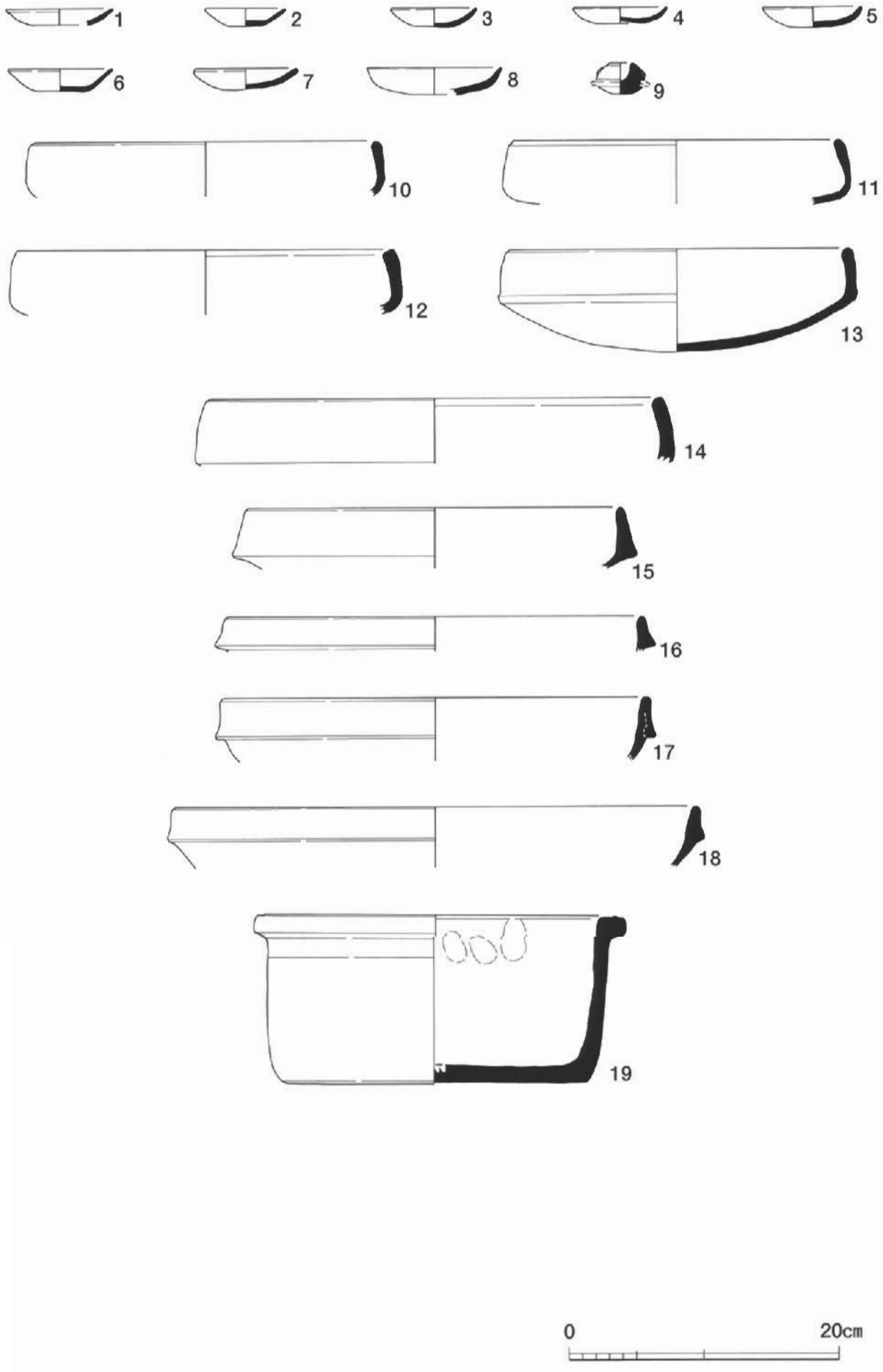
図版一二一　第一五〇次調査周辺調査地区全体図



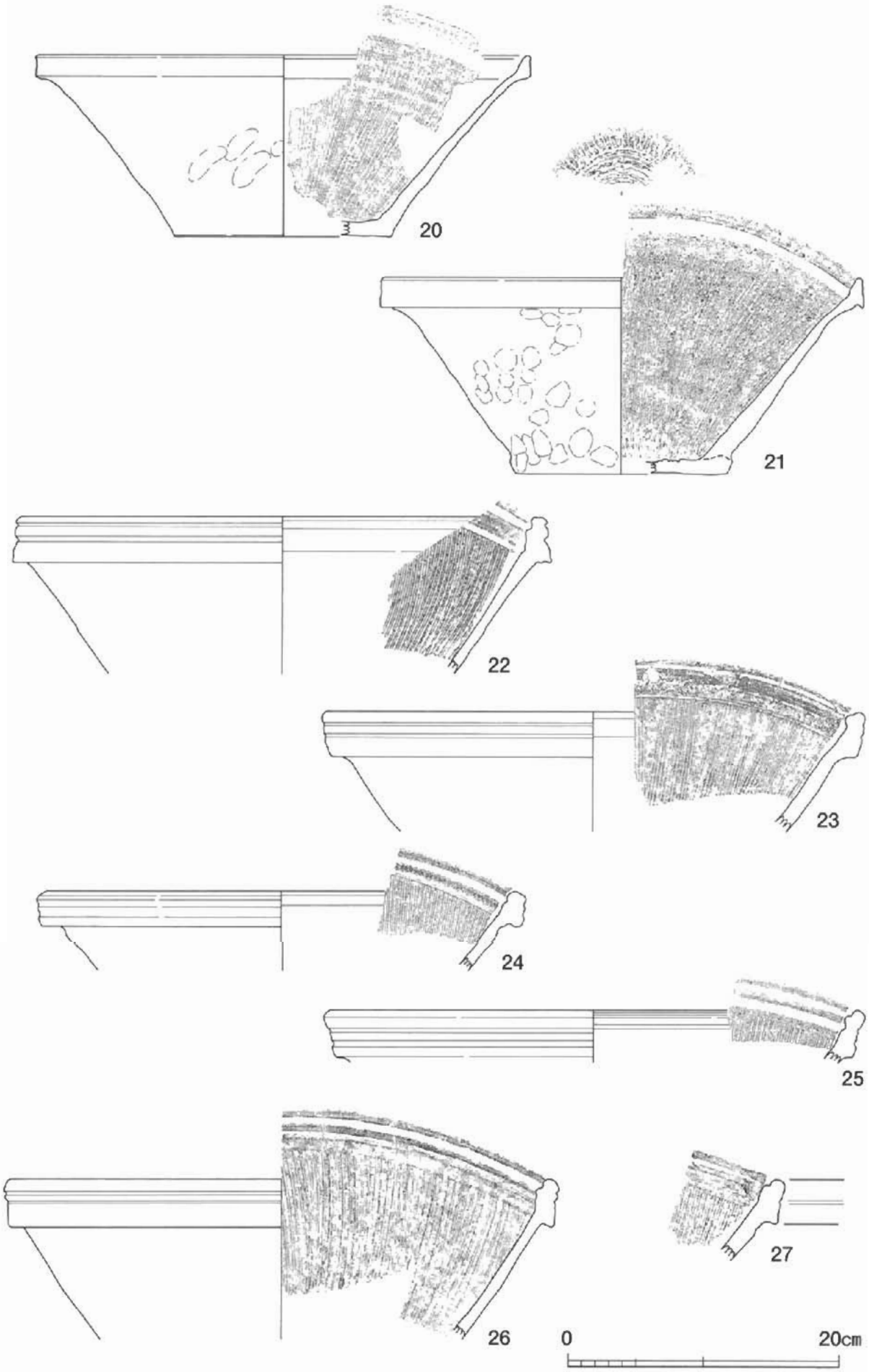
図版一二二　第一五〇次調査屋敷境の遺構平面図



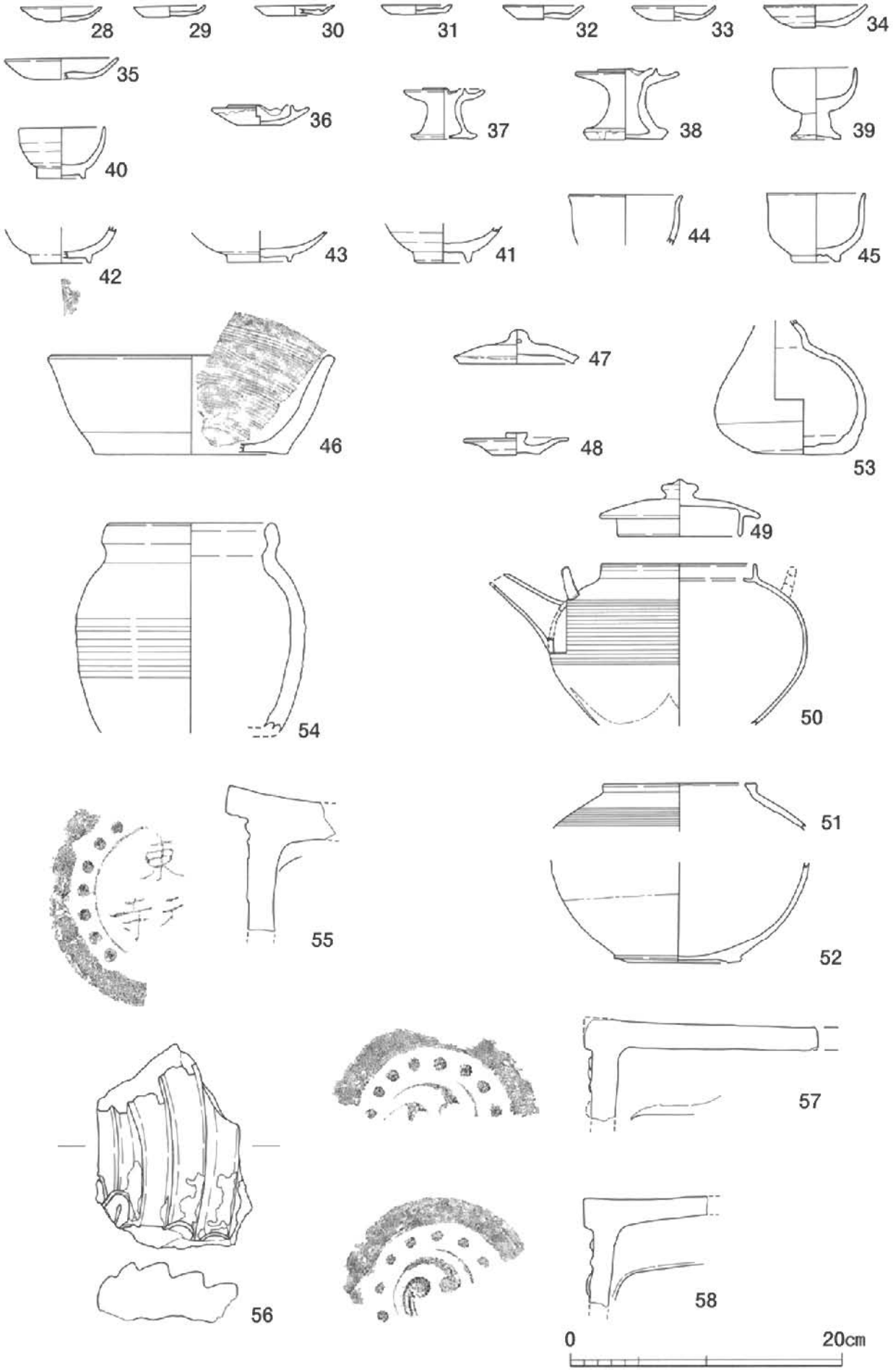

井戸39
井戸02
井戸01
井戸35
溝1・2
土坑14
井戸1
井戸2
溝2
溝3
溝5
井戸1
土坑54
溝3
井戸3
井戸4
井戸9
井戸5
井戸6
溝1・2
井戸1
溝3
井戸2
土坑63
井戸3
X=−1349.7
X=−1349.5
Y=992.1
Y=992.0
Y=991.9
Y=991.8
Y=991.7
Y=991.6
Y=991.5
Y=991.4
Y=991.3
6.4m
14.6m
18.0m
8.2m
13.2m
3.6m
6.6m
14.4m
4.8m
0
10m
現市立文化会館
昭和初期の町並みと区画



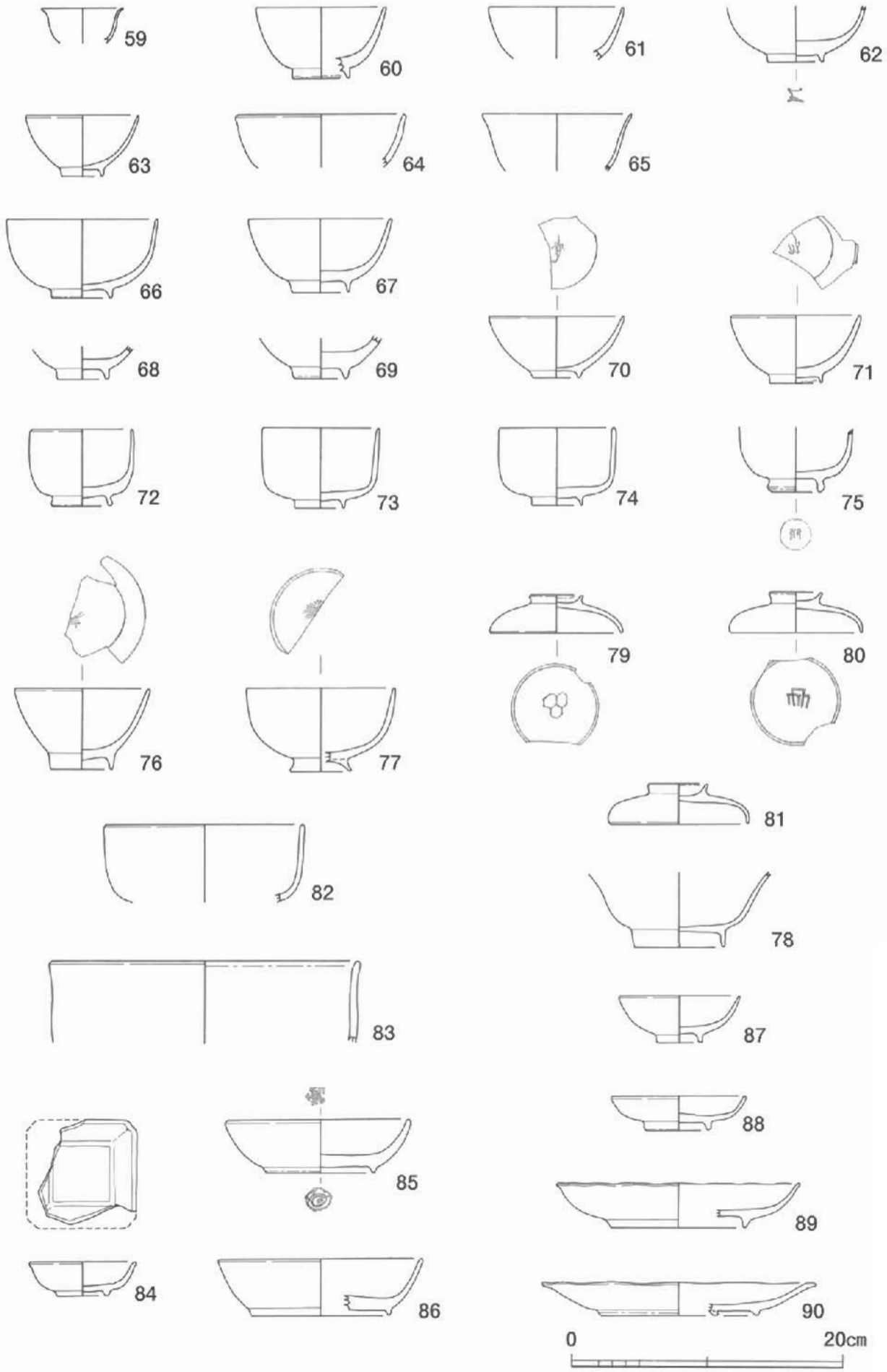
土師質土器



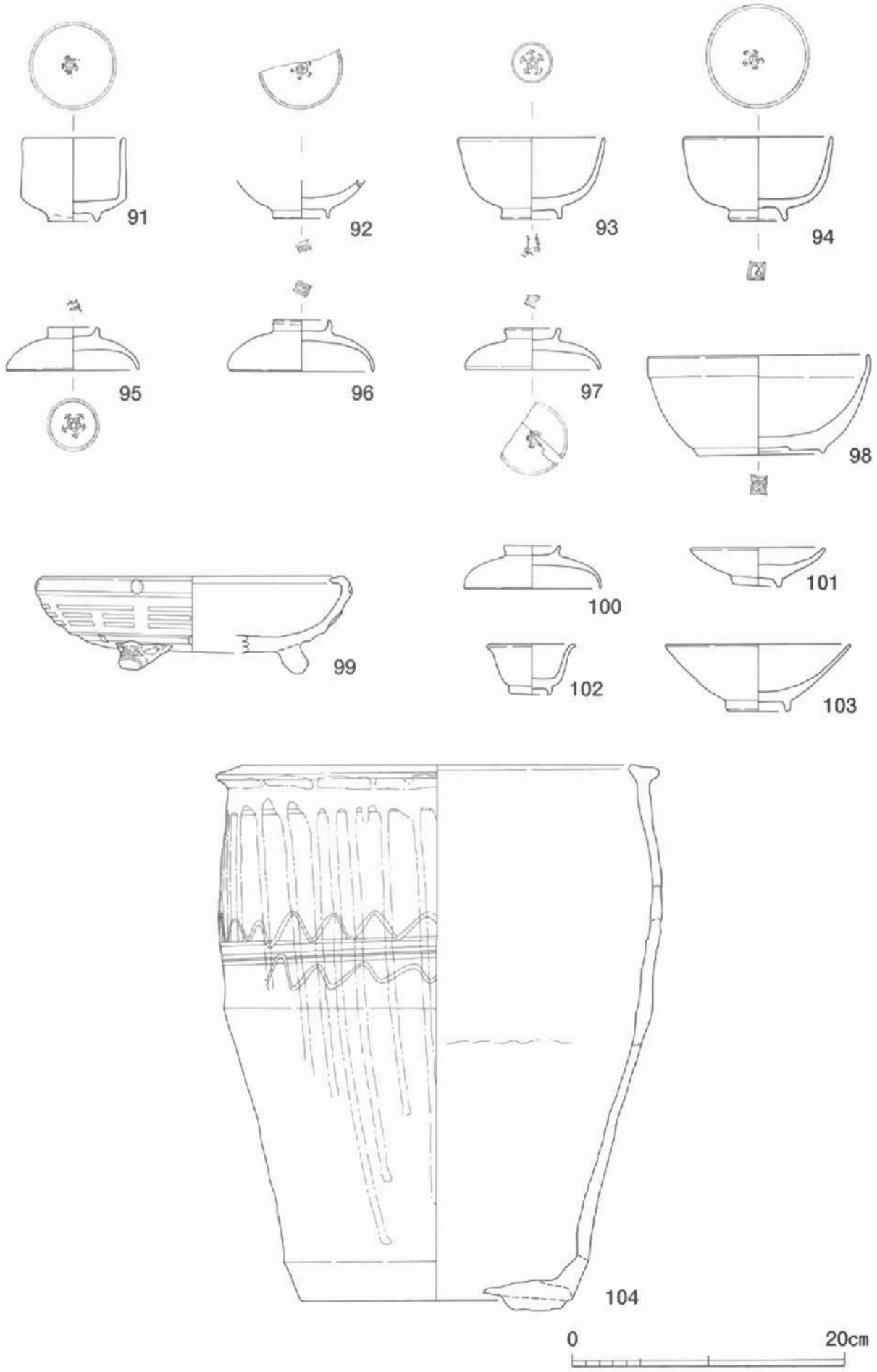
陶器擂鉢


28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
42
43
41
44
45
46
47
48
53
49
54
50
東寺テ
55
51
52
56
57
58
0
20cm

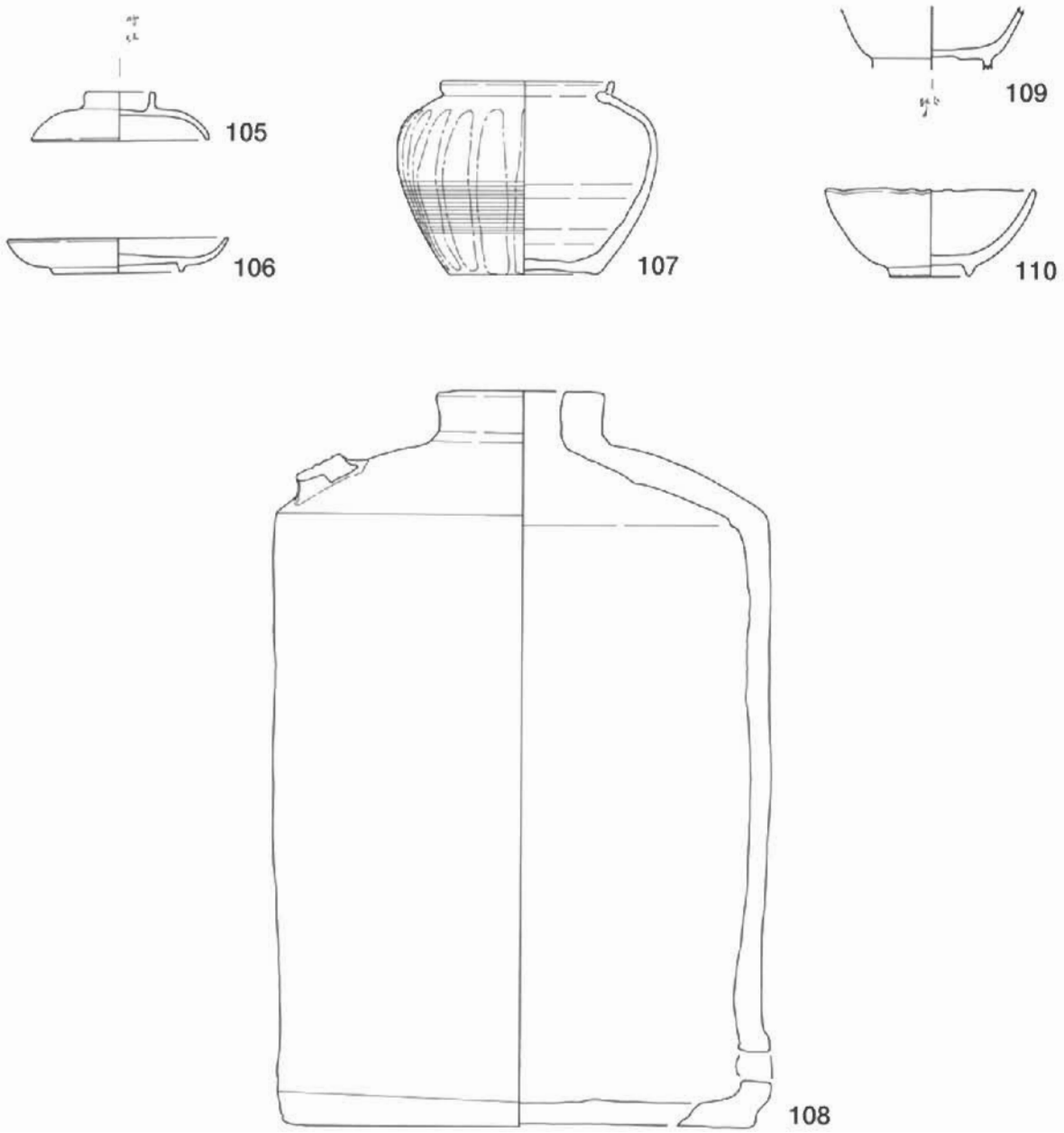
陶器・瓦


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
0
20cm

染付磁器



青磁染付・青磁・白磁・陶器甕



0　20cm

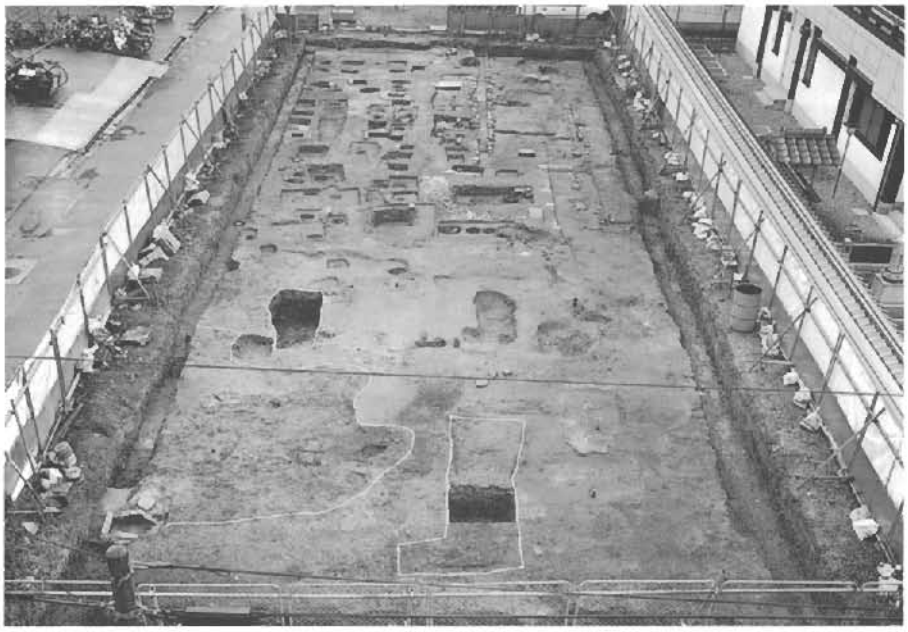
近代遺物

写真図版

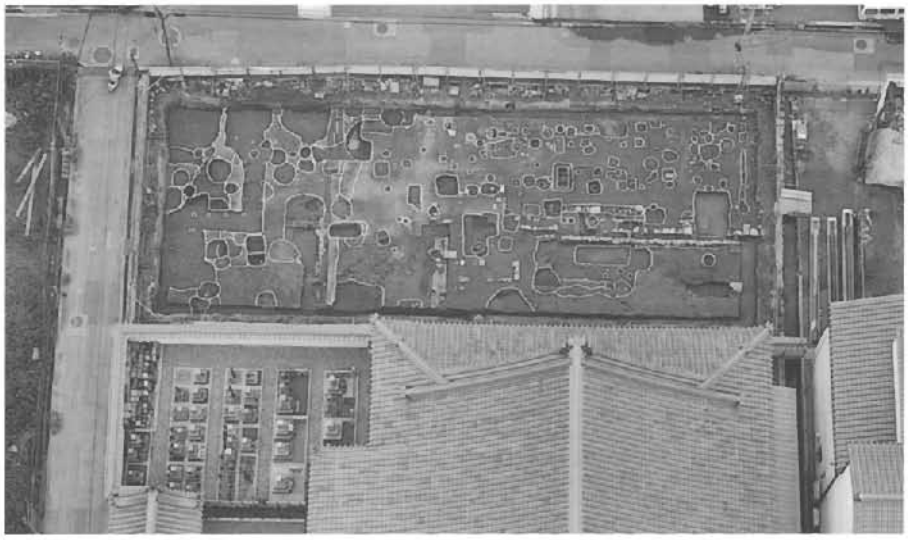
1. 西上空から遠景

2. 真上から

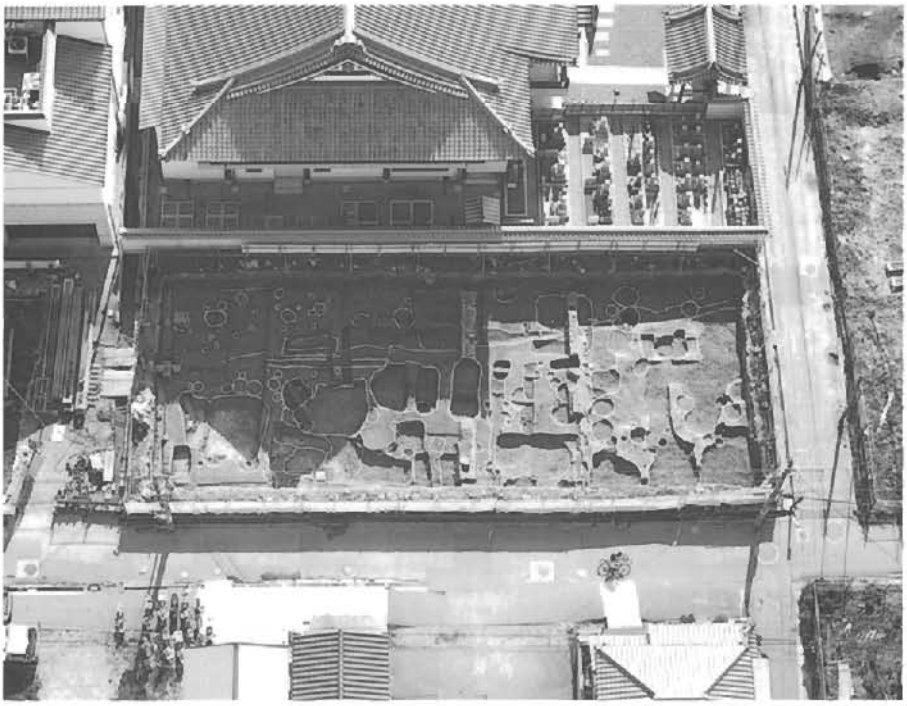
3. 調査地点と光明寺



1. 第Ⅰ面



2. 第Ⅱ面

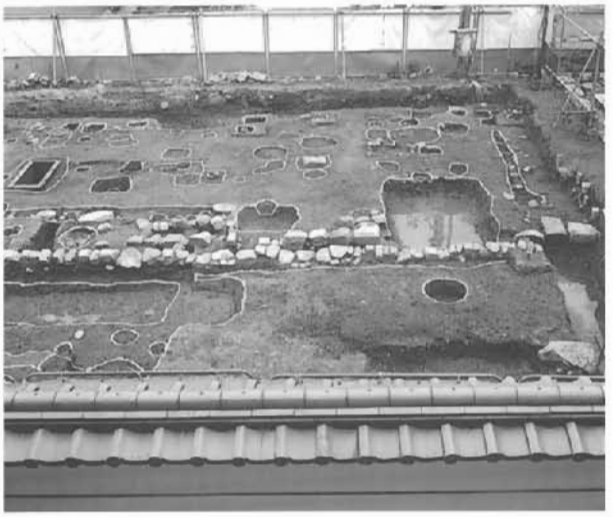


3. 第Ⅲ面

光明寺墓地（1.東から　2.南から）

1. 第Ⅱ面（西から）

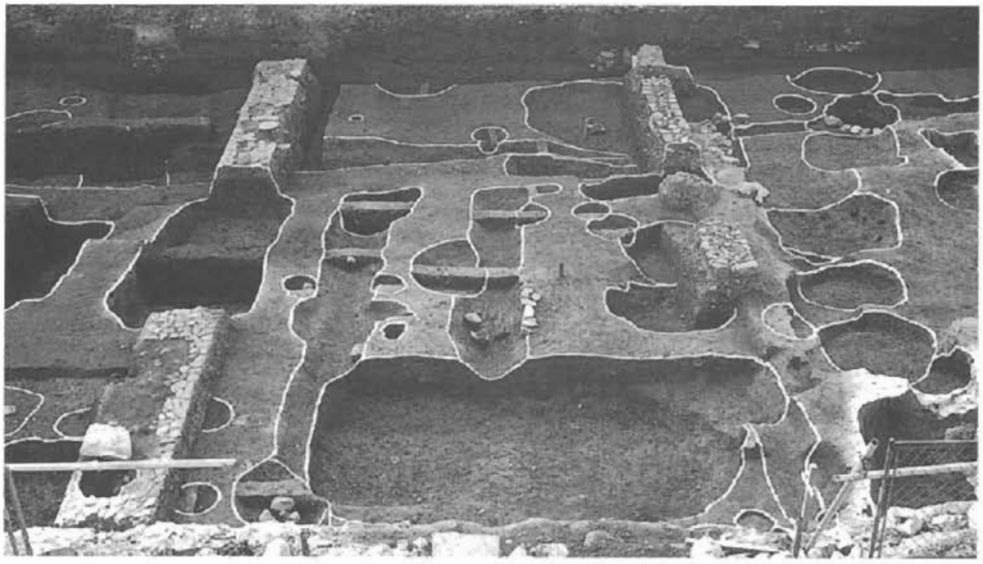
2. 第Ⅲ面（西から）



第Ⅱ面（南から連続と石敷SF01）

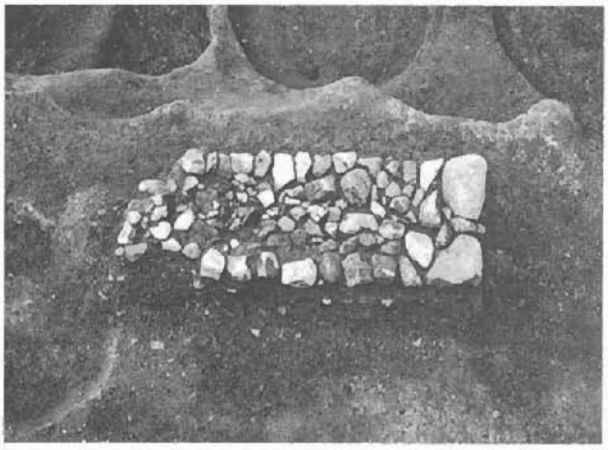
石敷SF01

石敷SF01（南から）

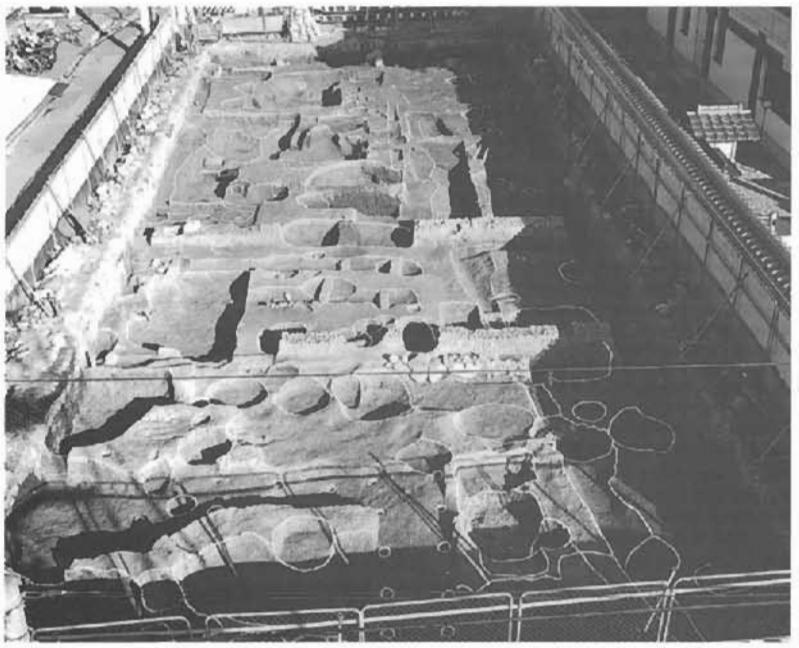


北から

築地塀SF02



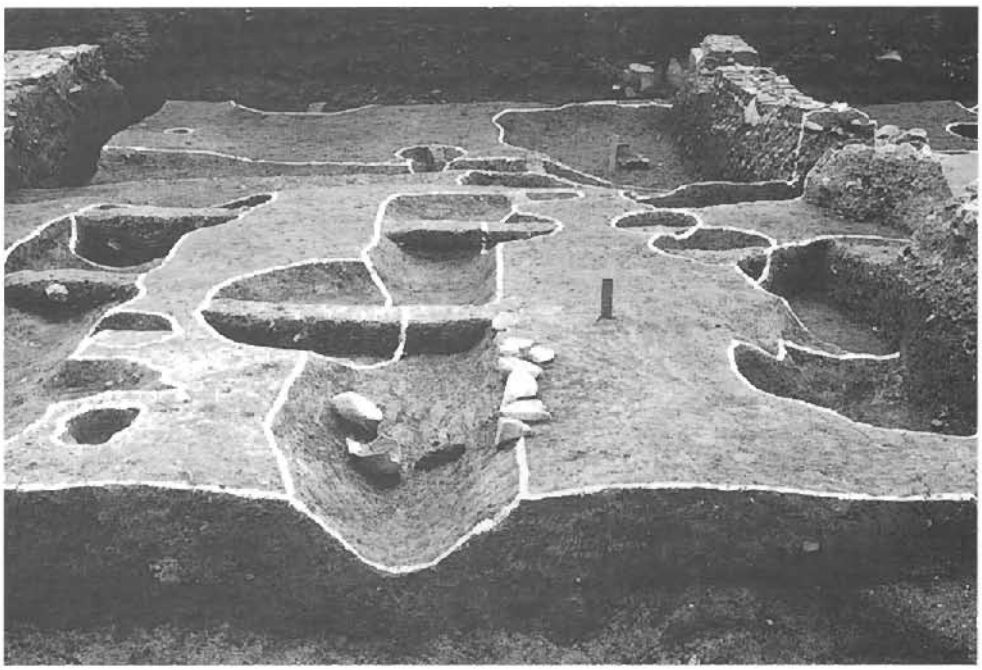
第Ⅲ面（石敷SF01と築地塀SF02）



西から

石垣と築地塀SF02

第Ⅲ面（石垣と本堂火災状況）

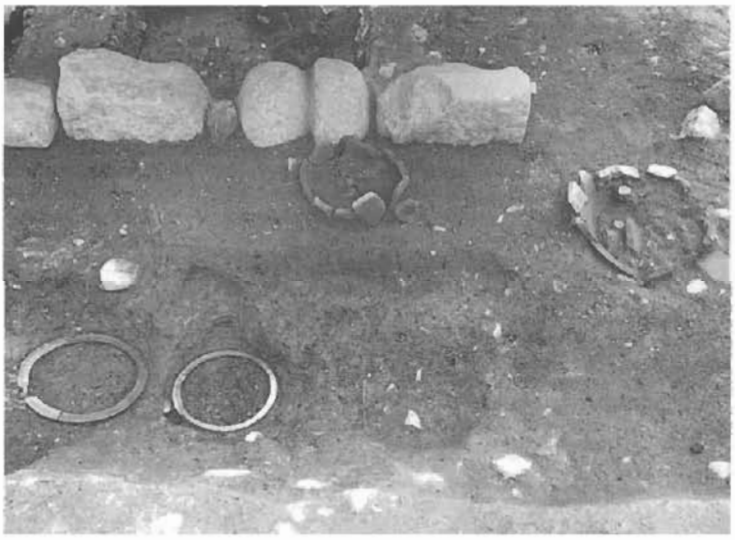


SD03

SE01

下層の遺構（溝SD03と井戸SE01）

SX146～148



SX168～191

SX168～169

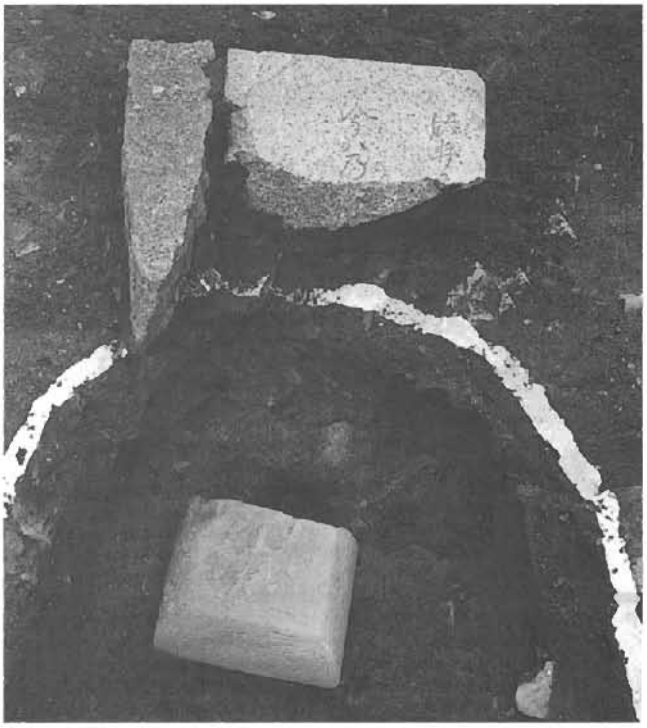
光明寺墓地　蔵骨器(1)

SX136～139

SX120～125

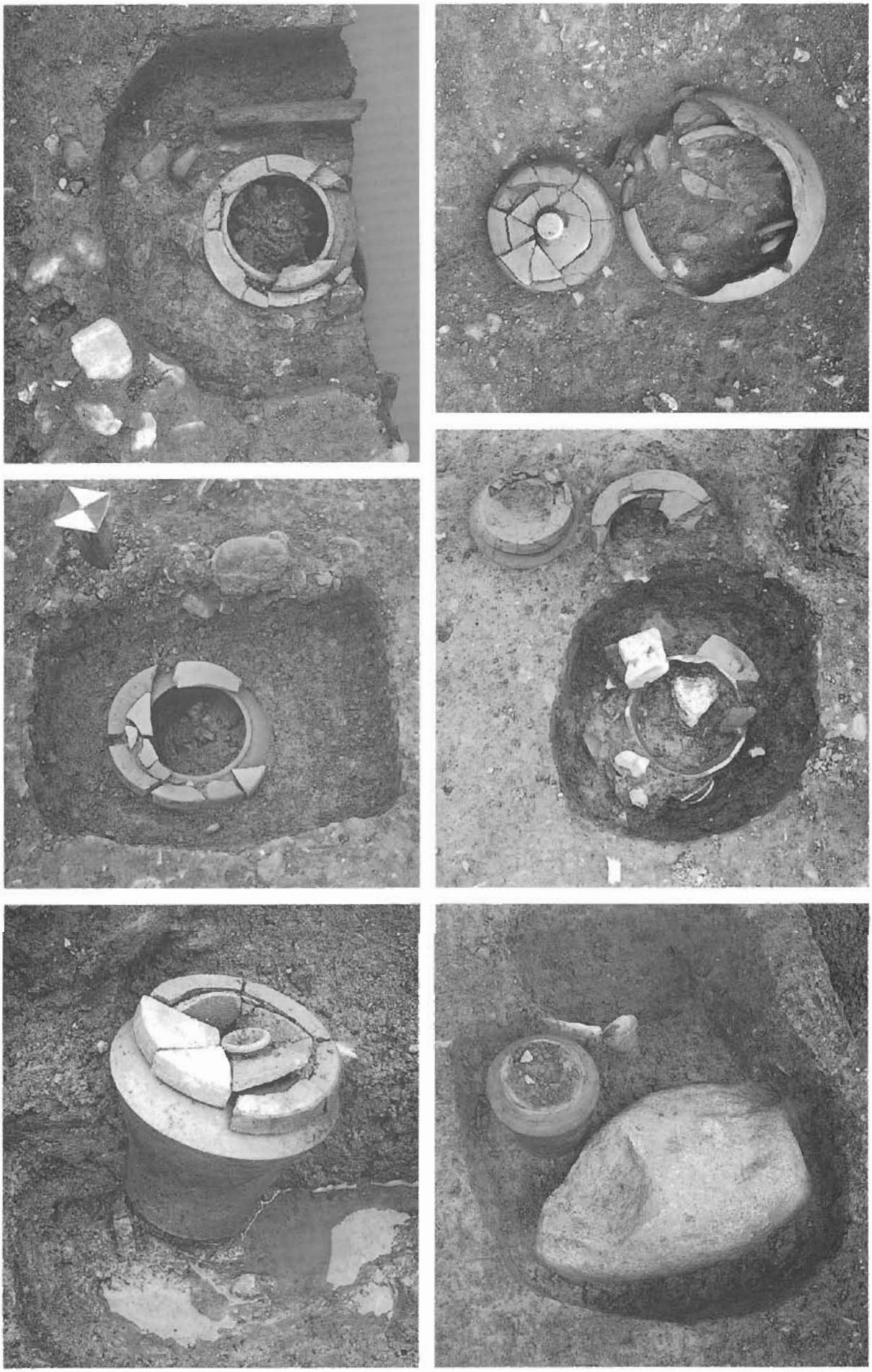
光明寺墓地　蔵骨器(2)

SX149

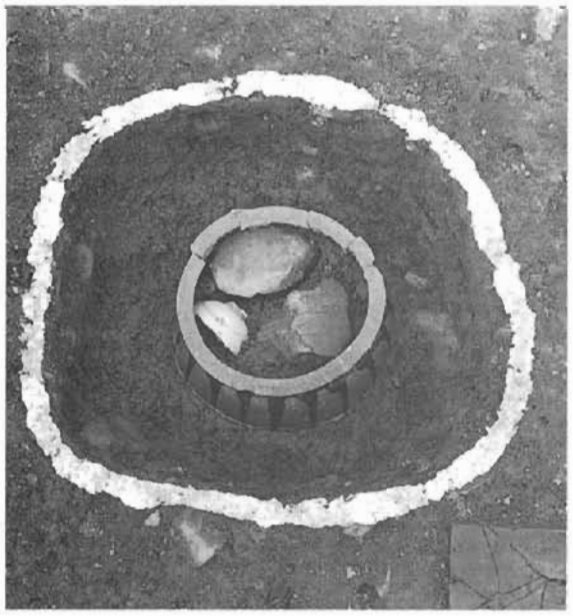


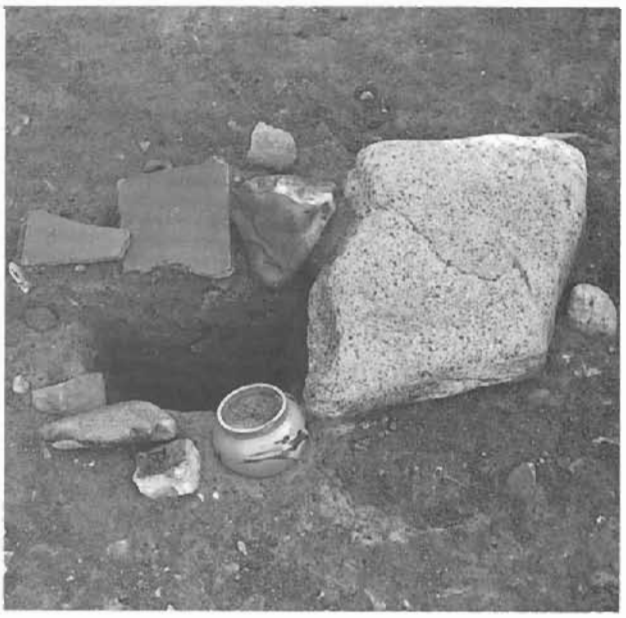
SX104・178

光明寺墓地　蔵骨器(3)　・墓石



SX144・139他
光明寺墓地　蔵骨器(4)





SX142・167・188
光明寺墓地　蔵骨器(5)　・土器棺

SX210・墓No28下層・SX115

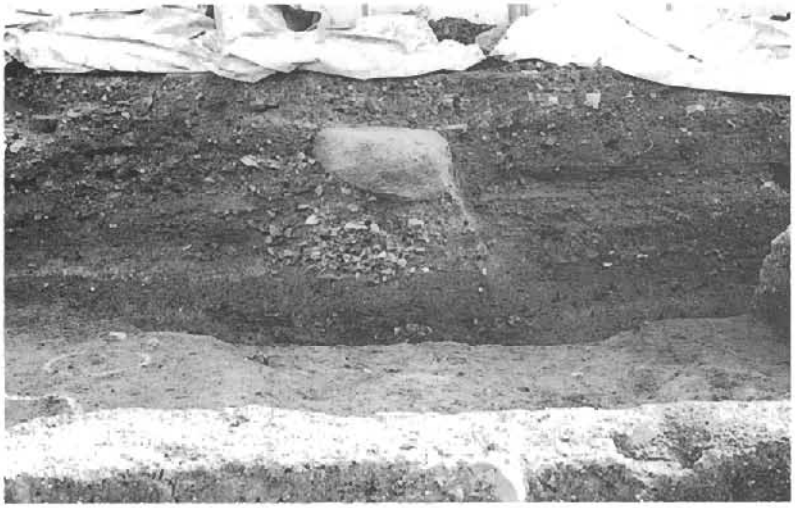
SX103・102

SK164・177

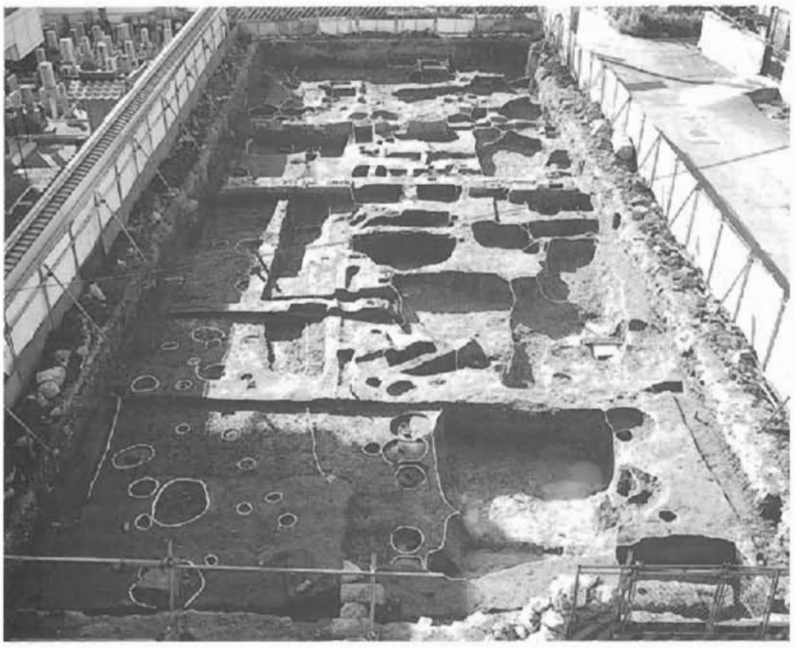
SX144・145

光明寺墓地　蔵骨器(6)

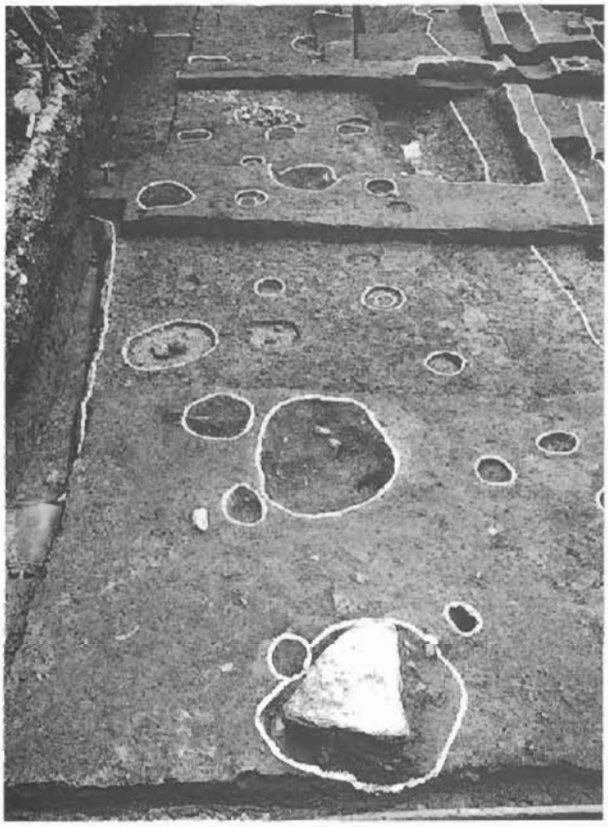
南壁

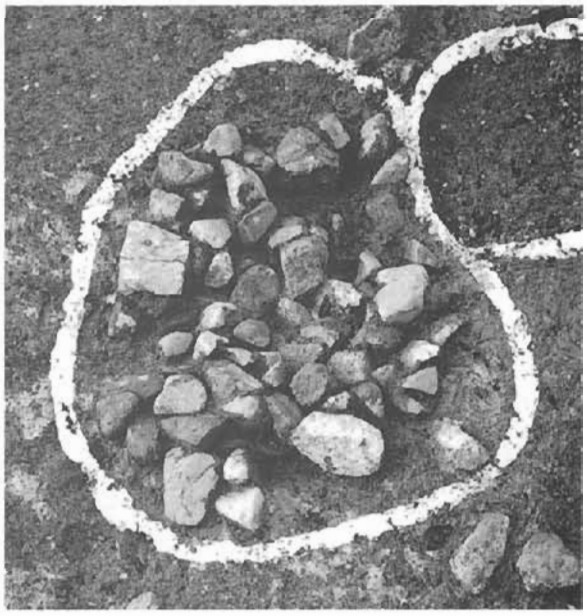


光明寺墓地　火災層と土器



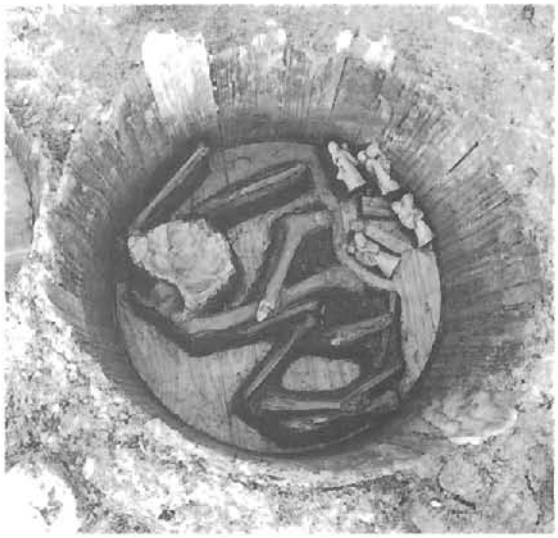
東から　SX244



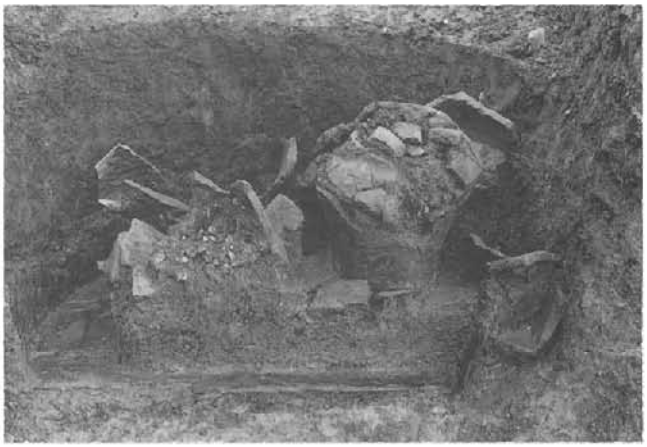


SK102

光明寺創建期本堂と墓地



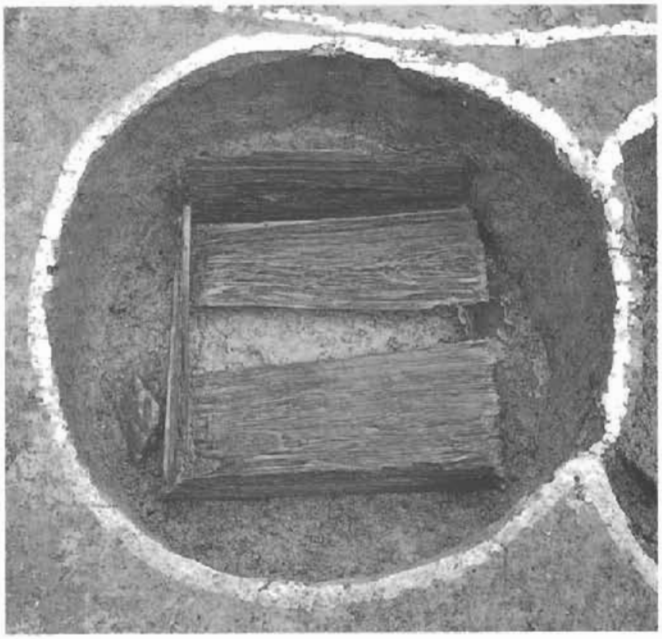
SX225・226・233・229・230



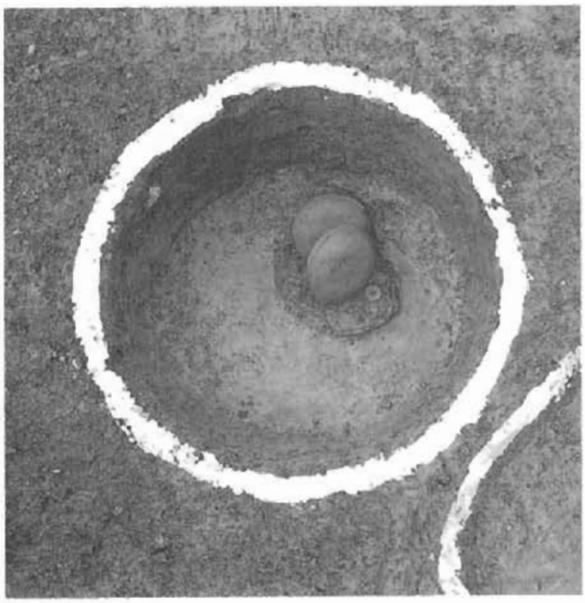
SX226上層

光明寺墓地　桶棺(1) と蔵骨器(7)

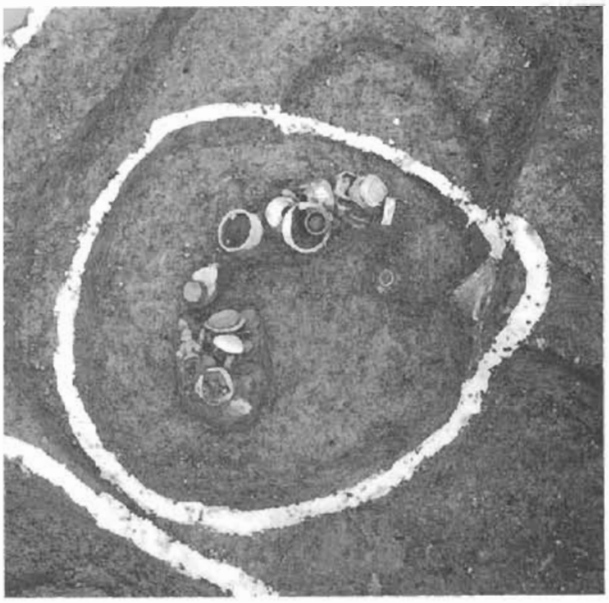
SX232～235



SX232

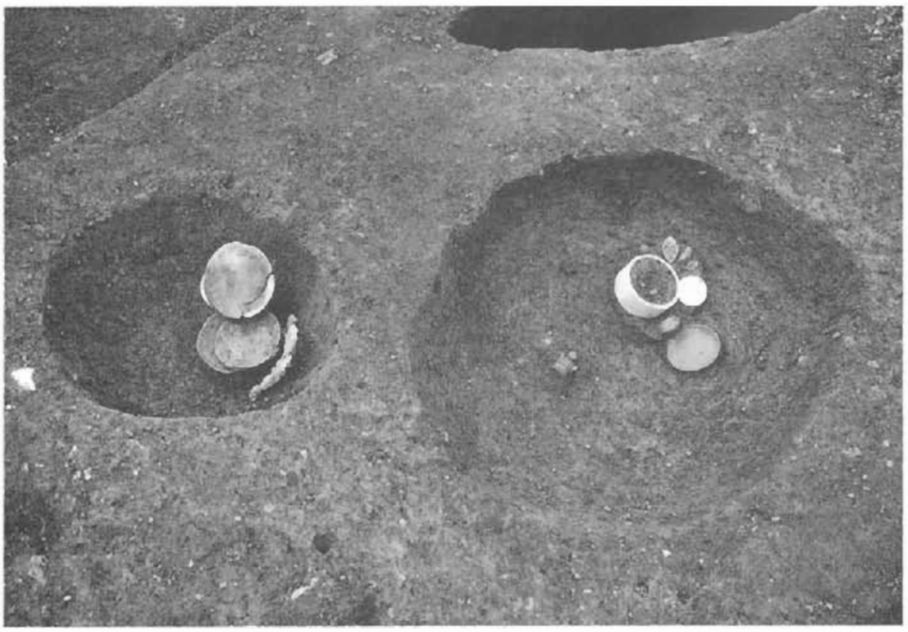


SX235



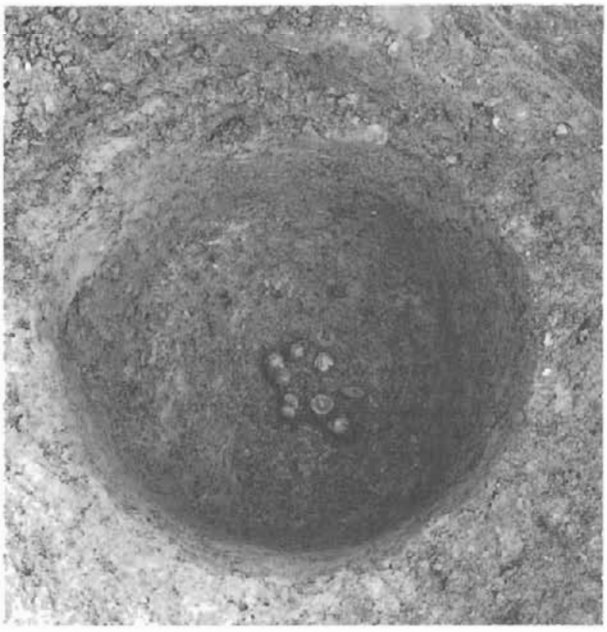
SX234

光明寺墓地　桶棺(2) と箱棺(1)

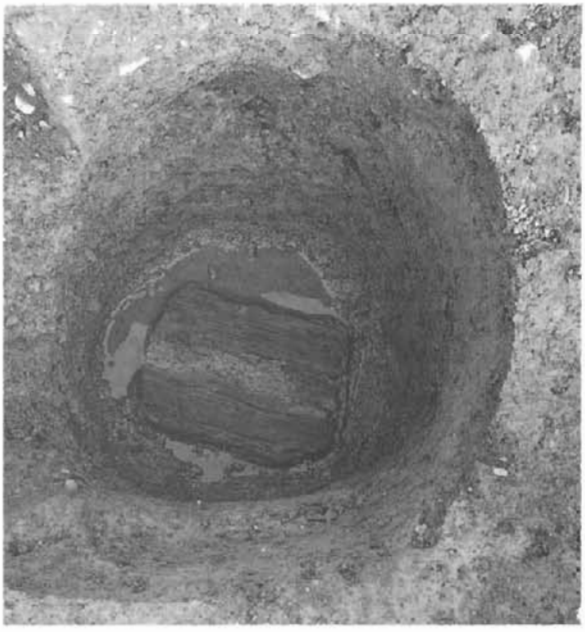


SX220・221

SX243・202

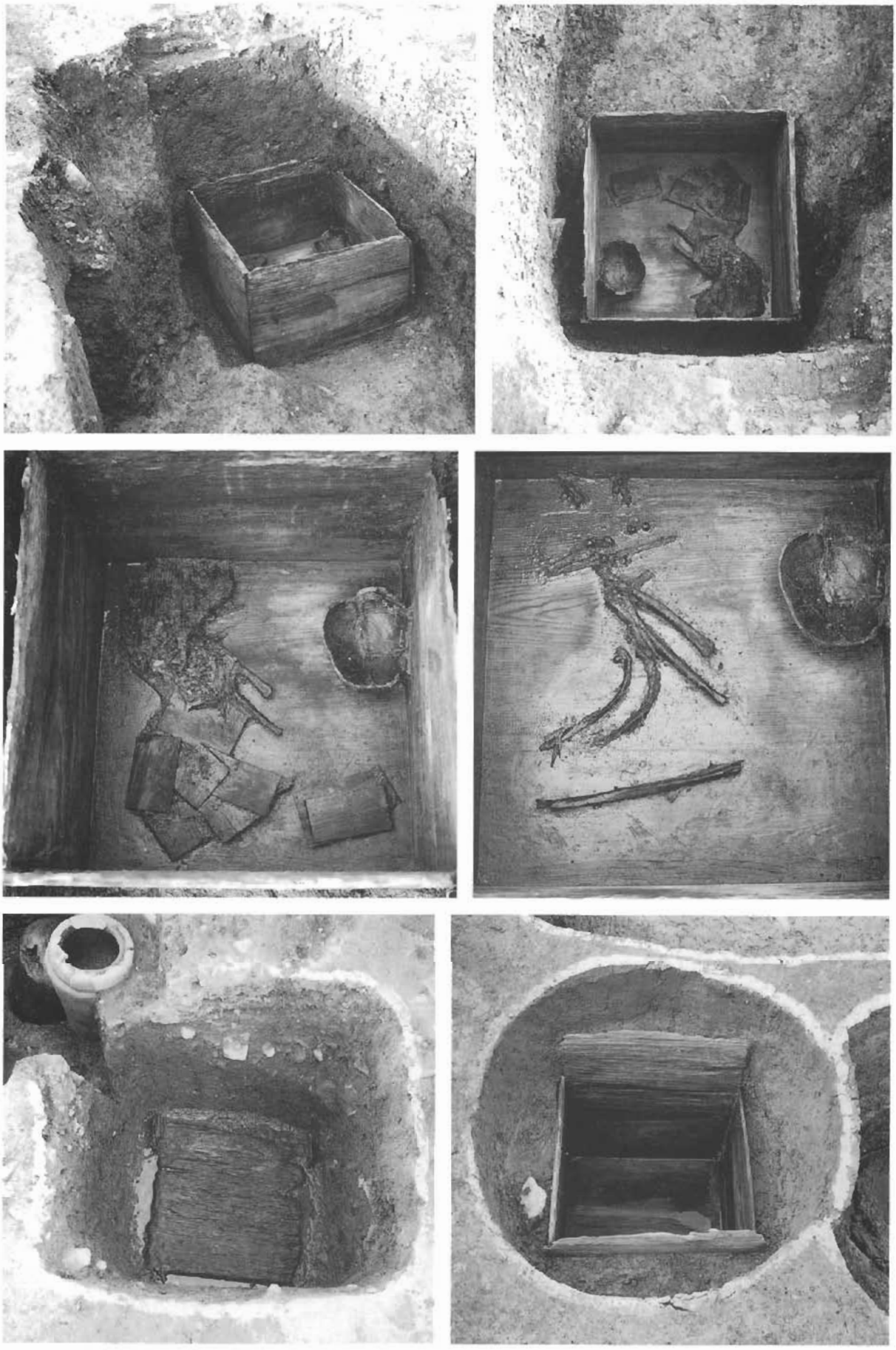


SX239



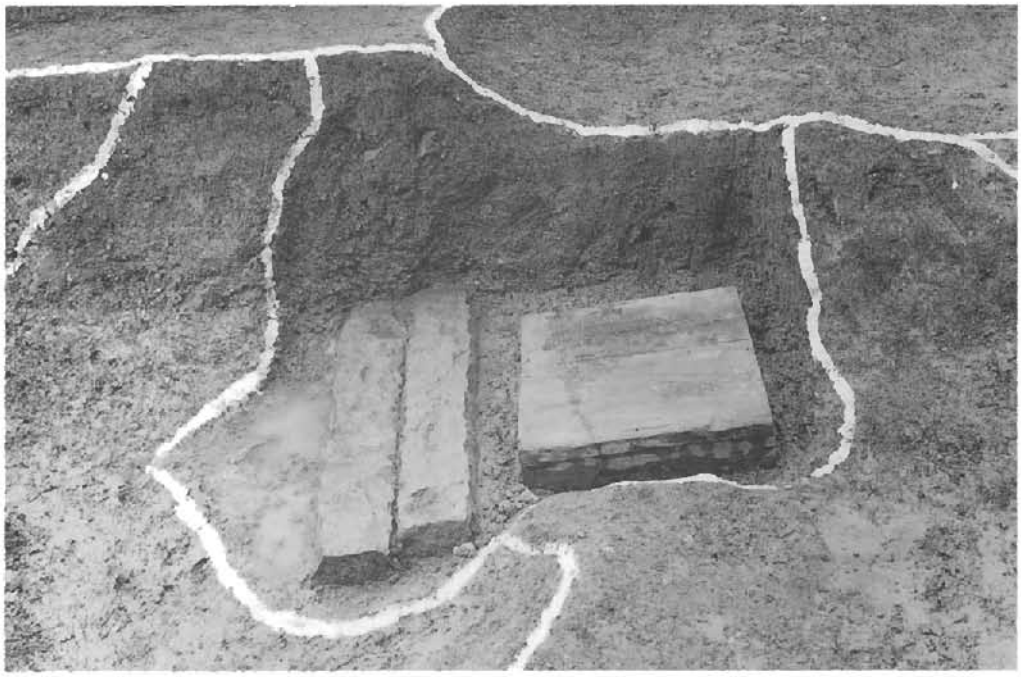
SX242

光明寺墓地　桶棺(3)



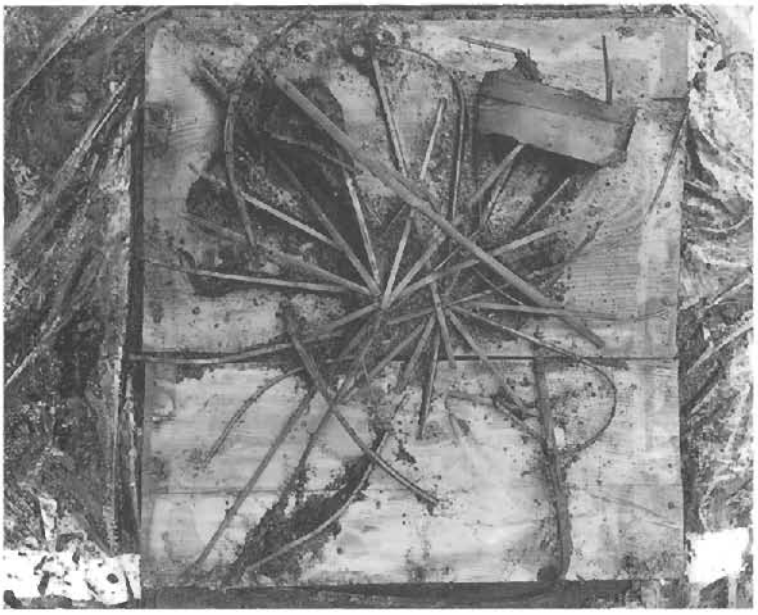
SX218・167・232

光明寺墓地　箱棺(2)



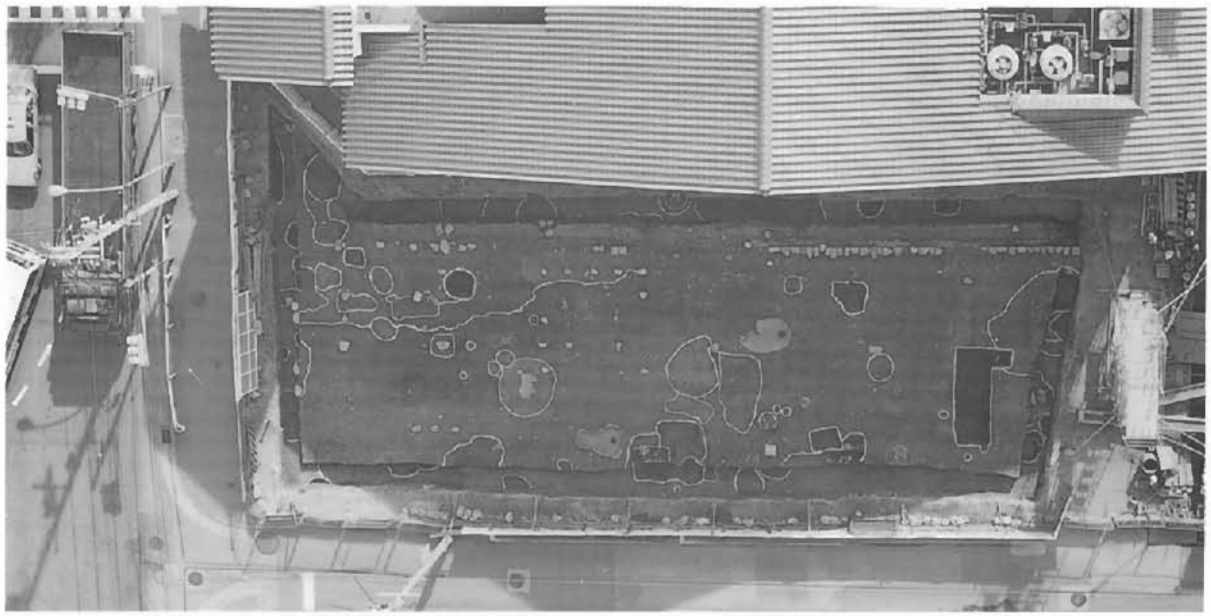
SX236・228

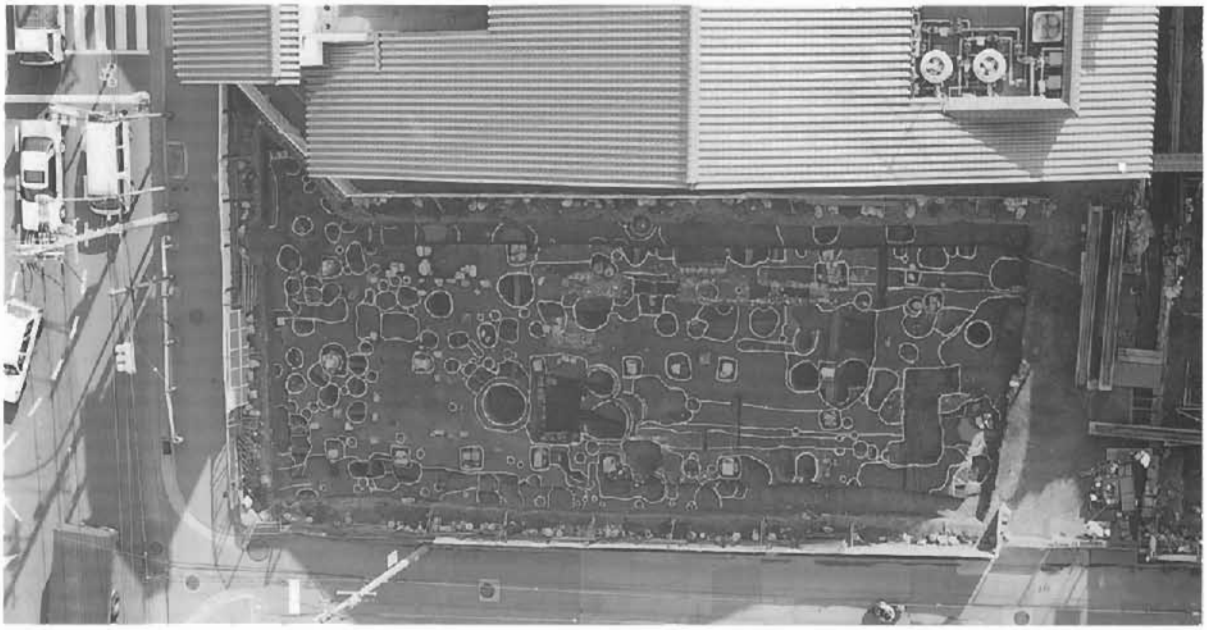
SX228・236

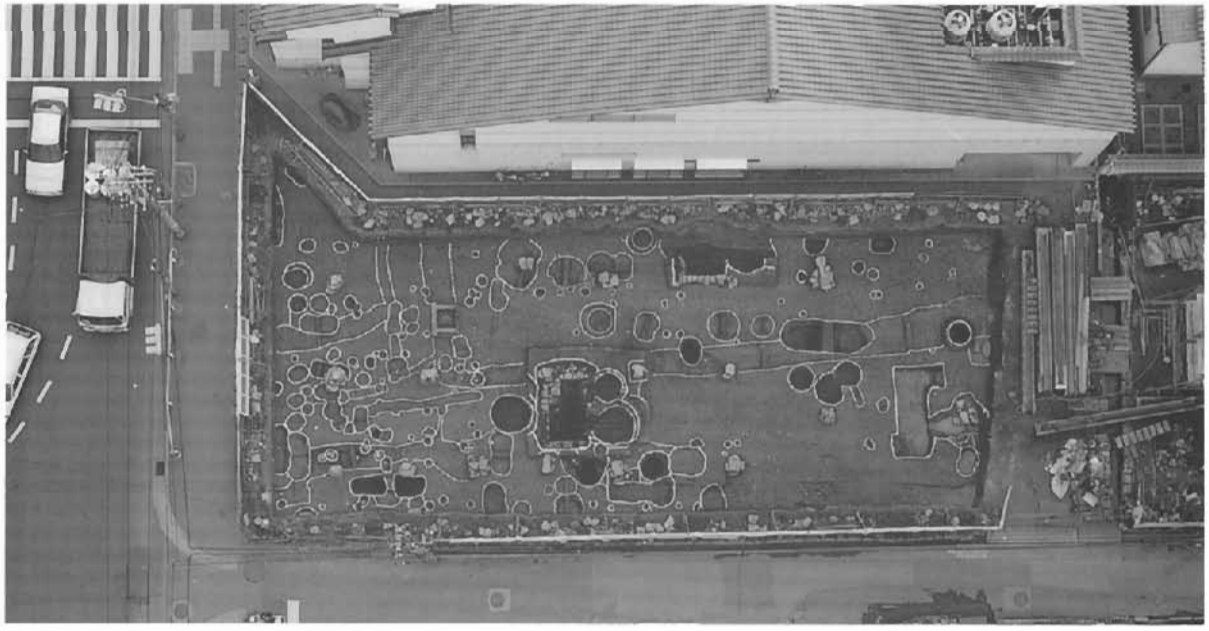


SX228

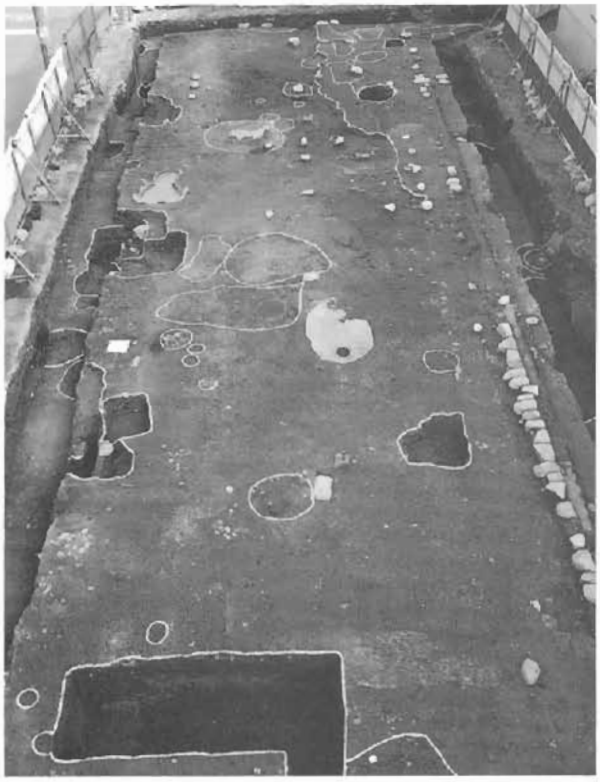
光明寺墓地　箱棺(3)

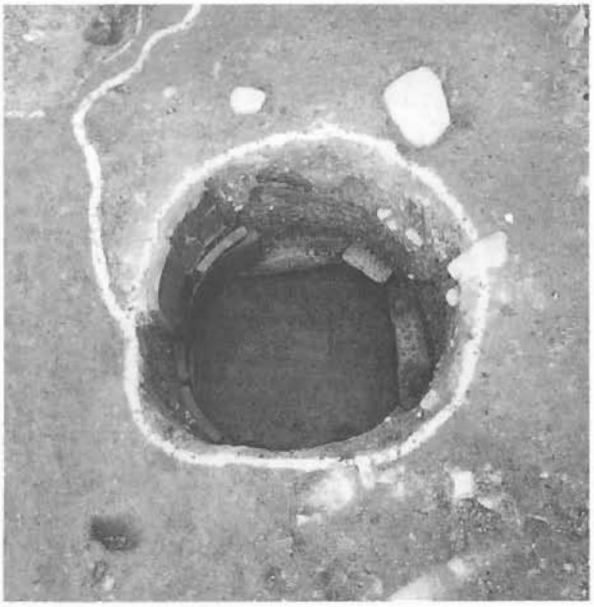


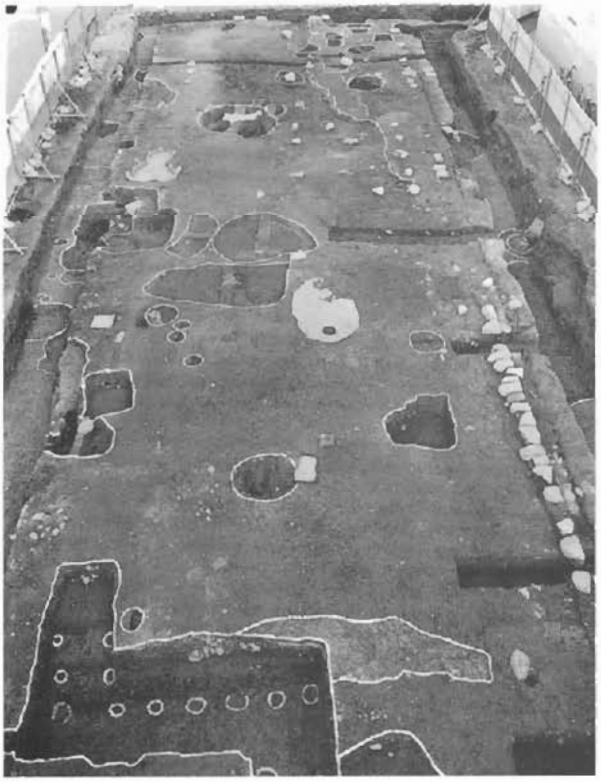


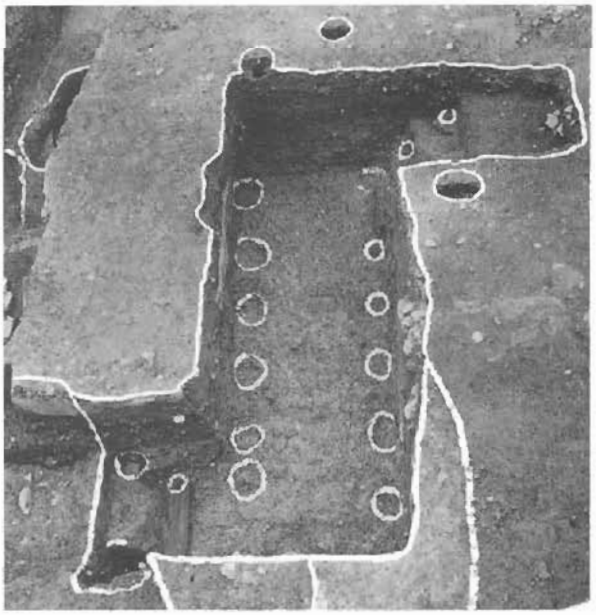


空中写真（第Ⅰ面・第Ⅱ面・第Ⅲ面）

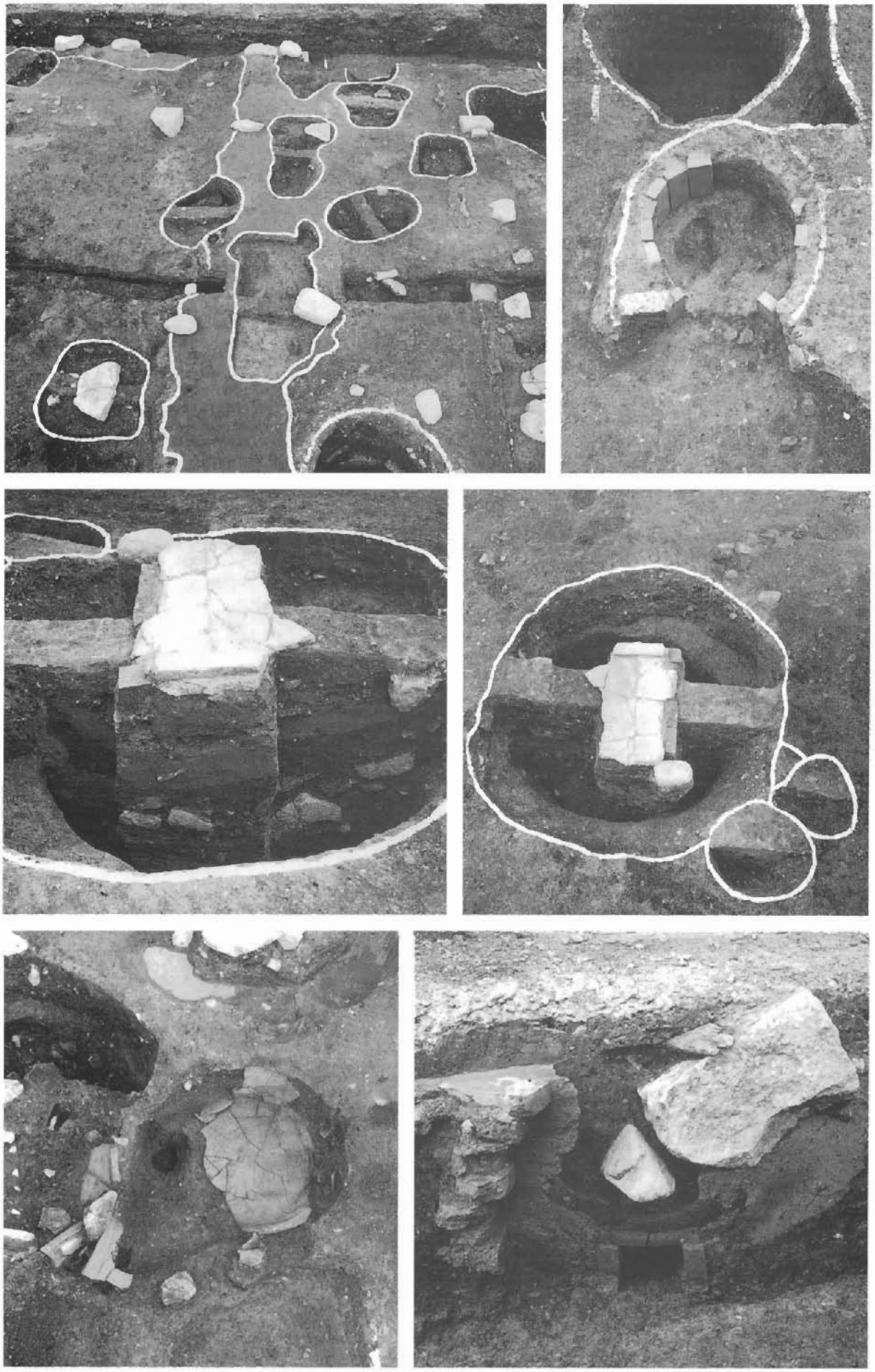




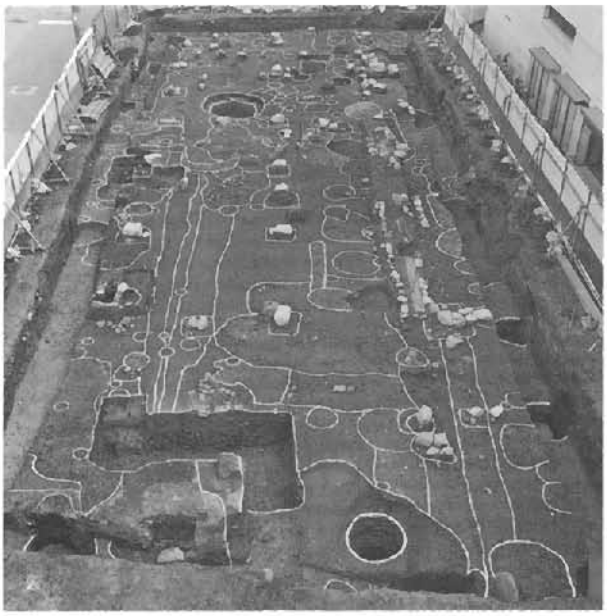


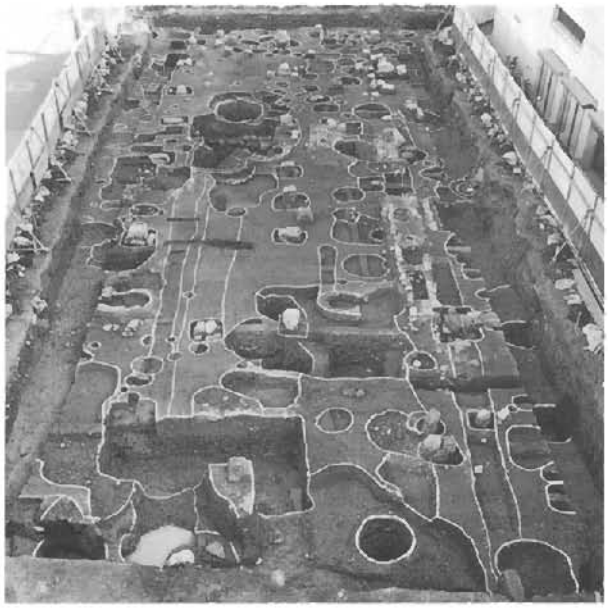


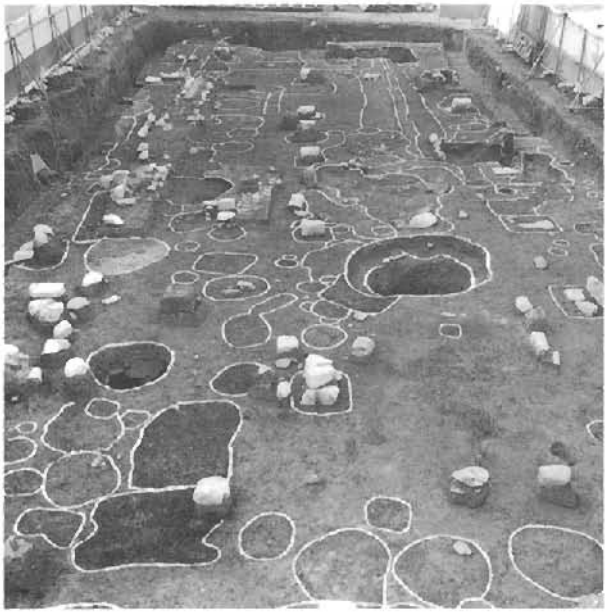
第Ⅰ面（屋敷・井戸・池・防空壕）



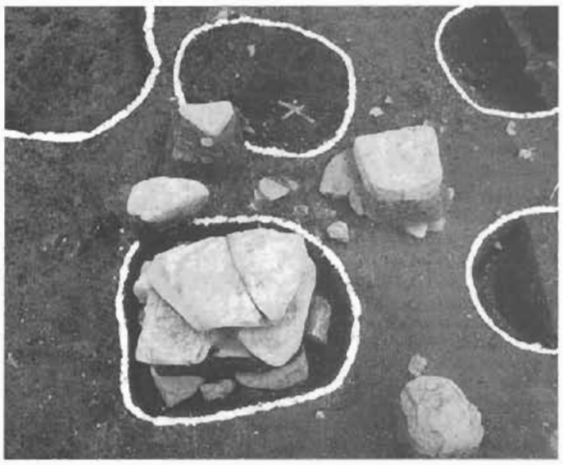
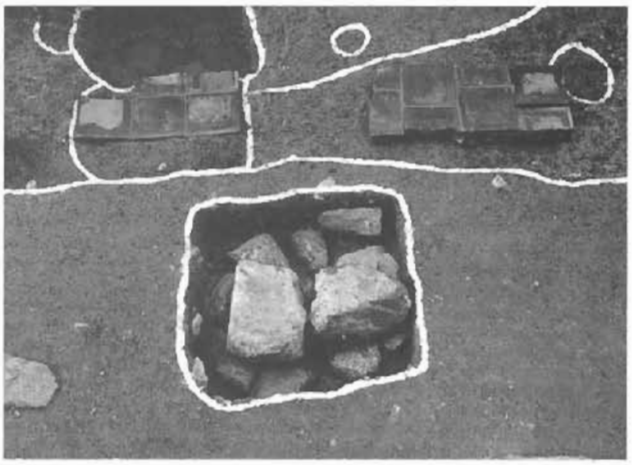
第Ⅰ面（建物・竈・井戸）

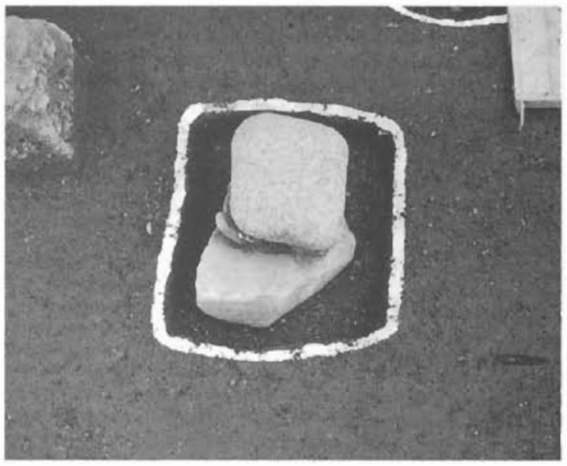
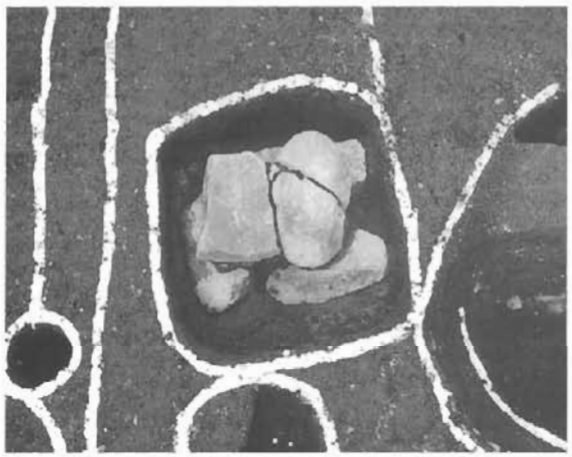
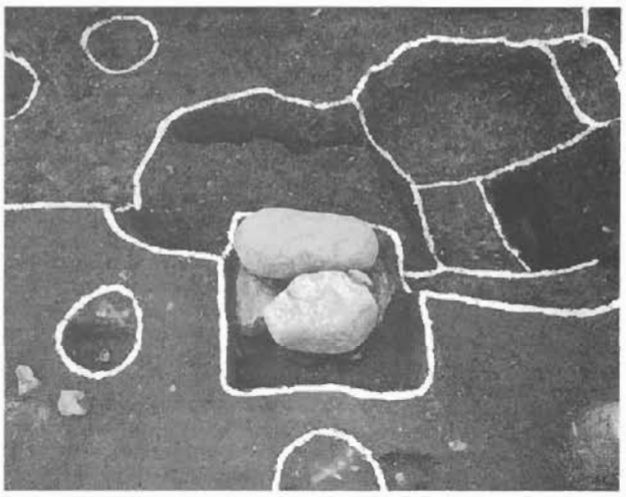
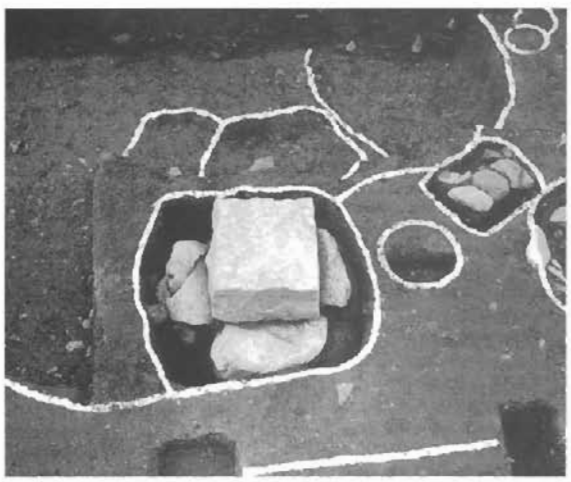




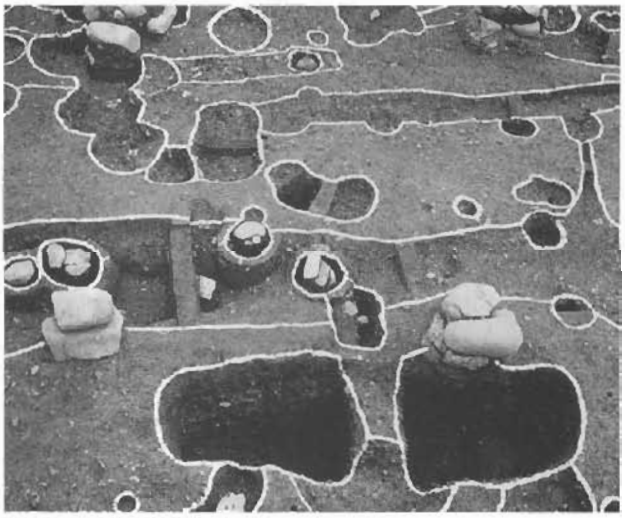


第Ⅱ面（酒蔵・井戸・区画溝）

第Ⅱ面（酒蔵礎石）

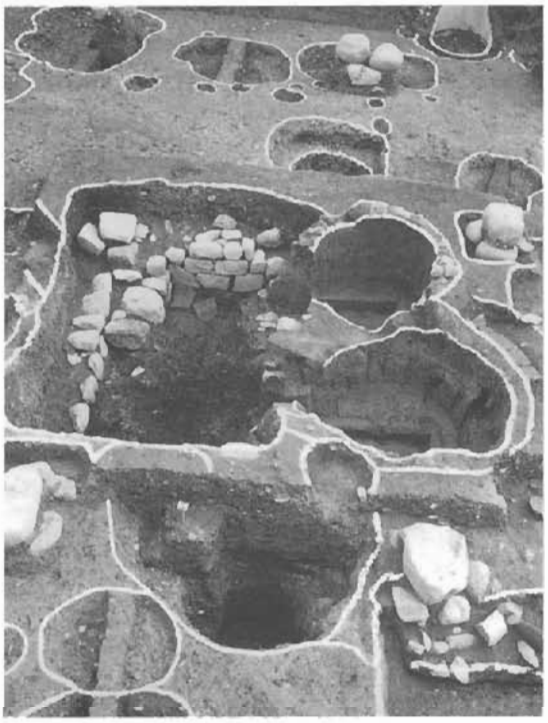


SE06・竈9掘形・竈9燃焼室

SE06断面・竈9焚口・男柱SK106・157

第Ⅱ面（井戸・竈・酒搾り場男柱）

竈10・11



竈10・11

掘形SK100

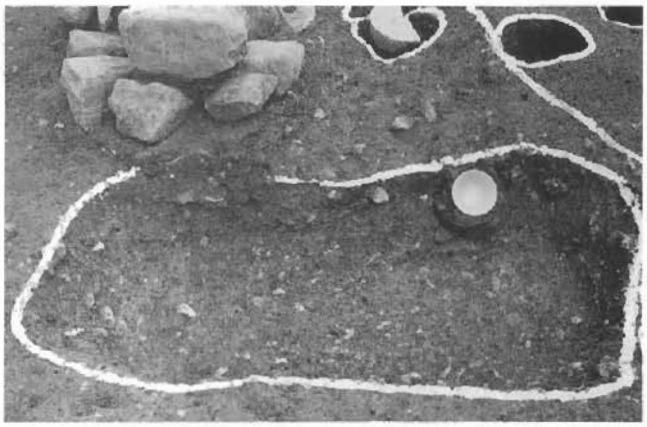
SE07・掘形SK100

第２面（竈1-1）

竈10・11燃焼室

竈11（西から）

第Ⅱ面（竈1-2）



墓SK62

第Ⅲ面（溝・土坑・井戸・墓）

酒蔵火災層と竈

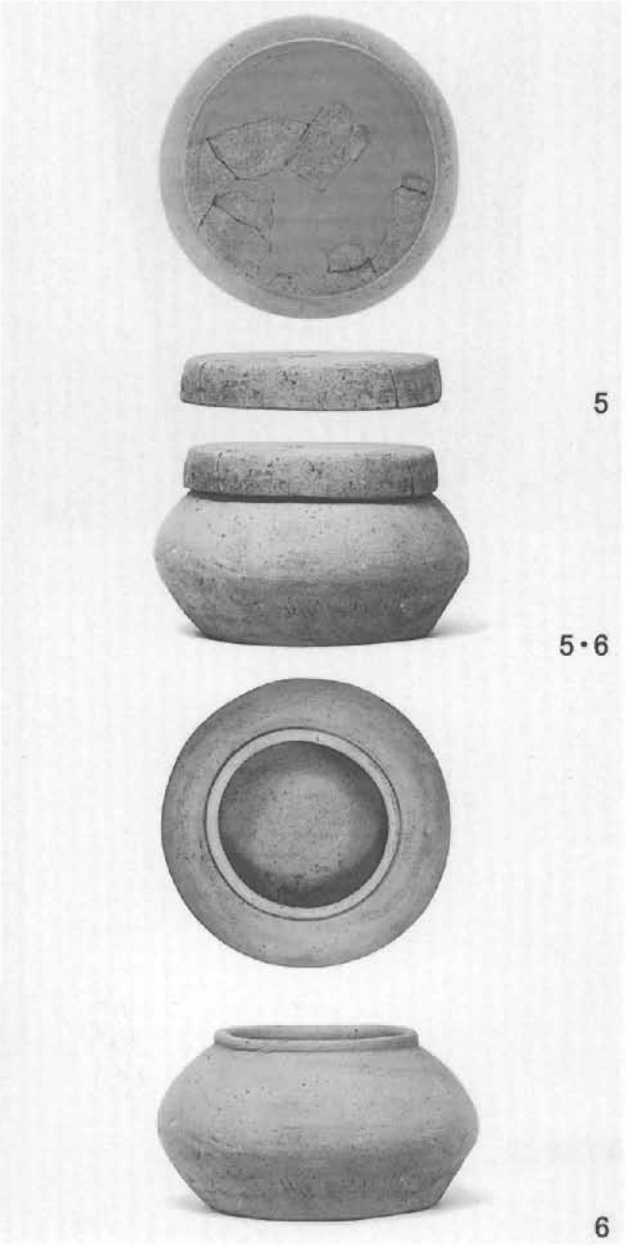
写真図版三一　第一一四次調査発掘調査風景

1

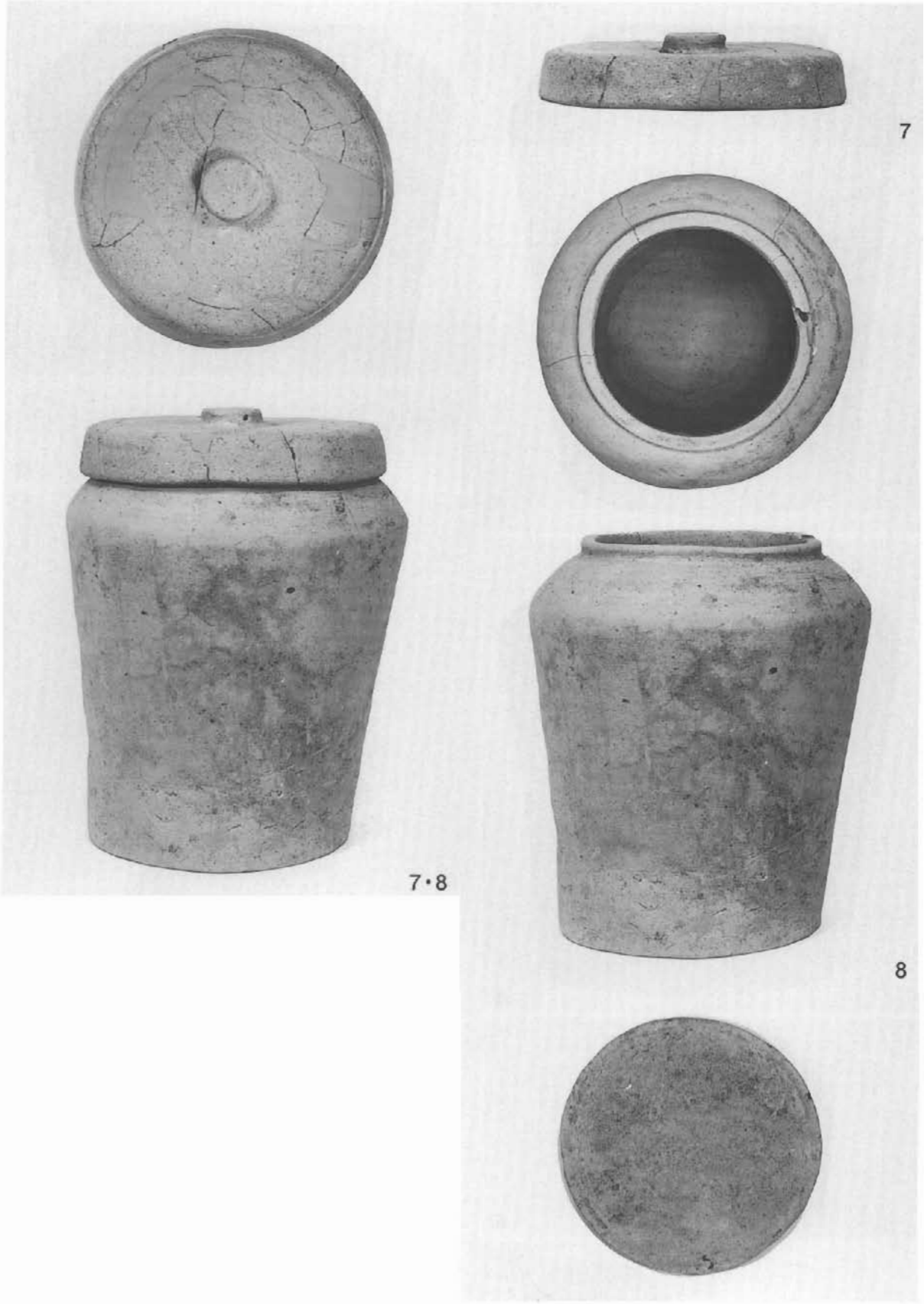
2

3

4



蔵骨器(1)　火消壷(1)



蔵骨器(2)　火消壷(2)

10

11

12・13

12

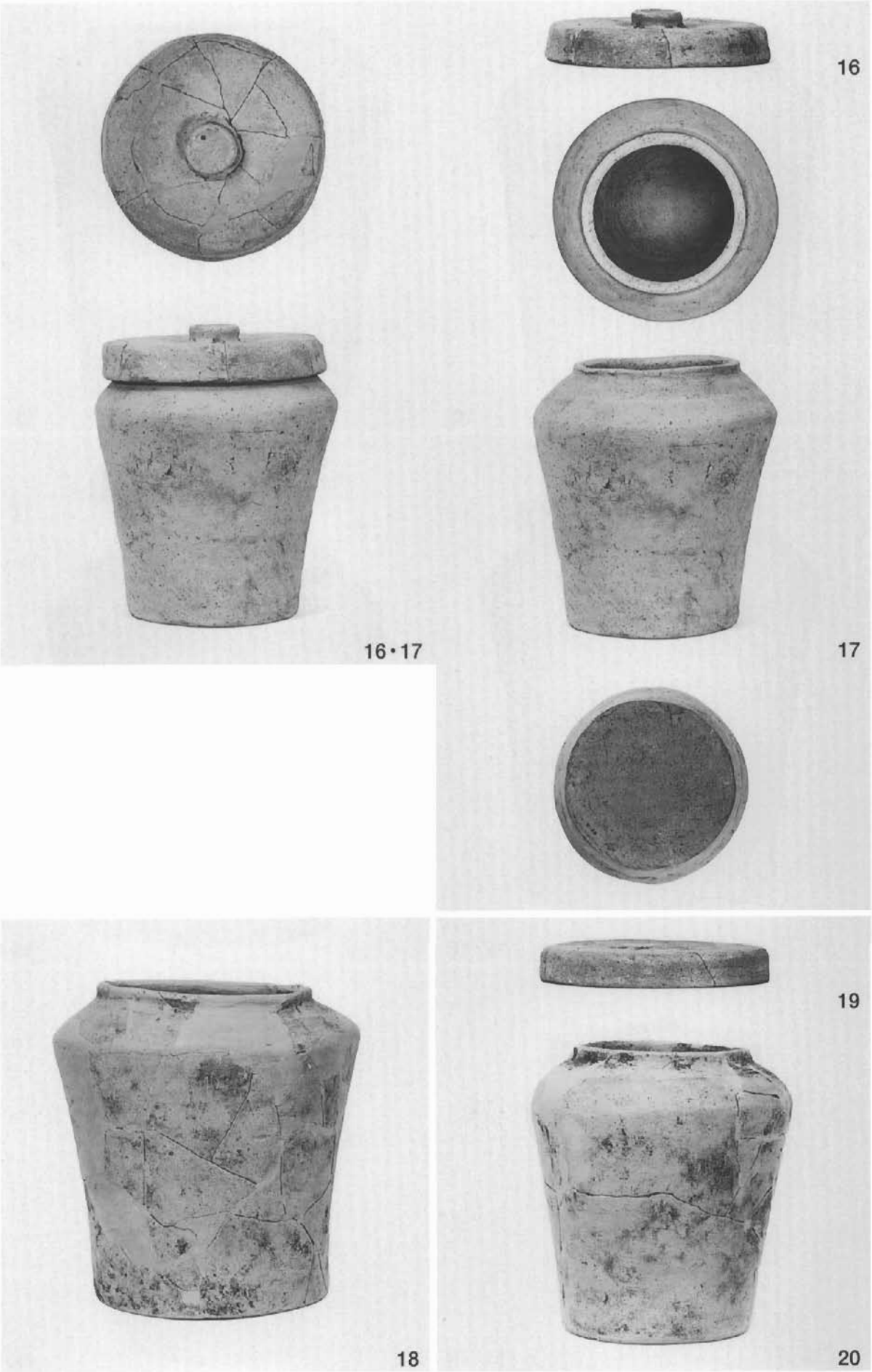
13

14・15

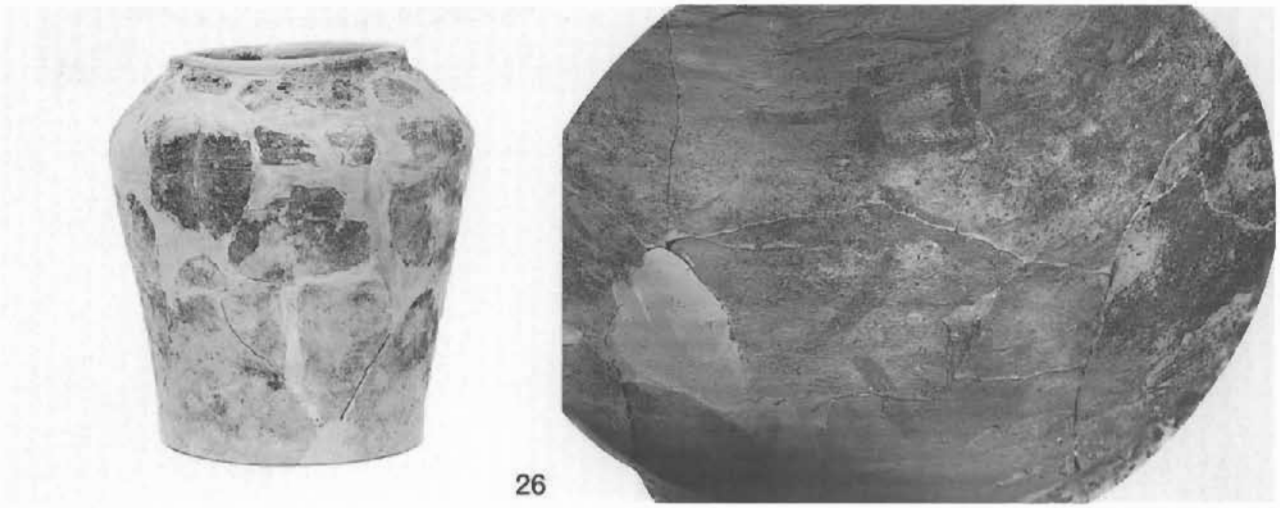
14

15

藏骨器(3)　火消壷(3)

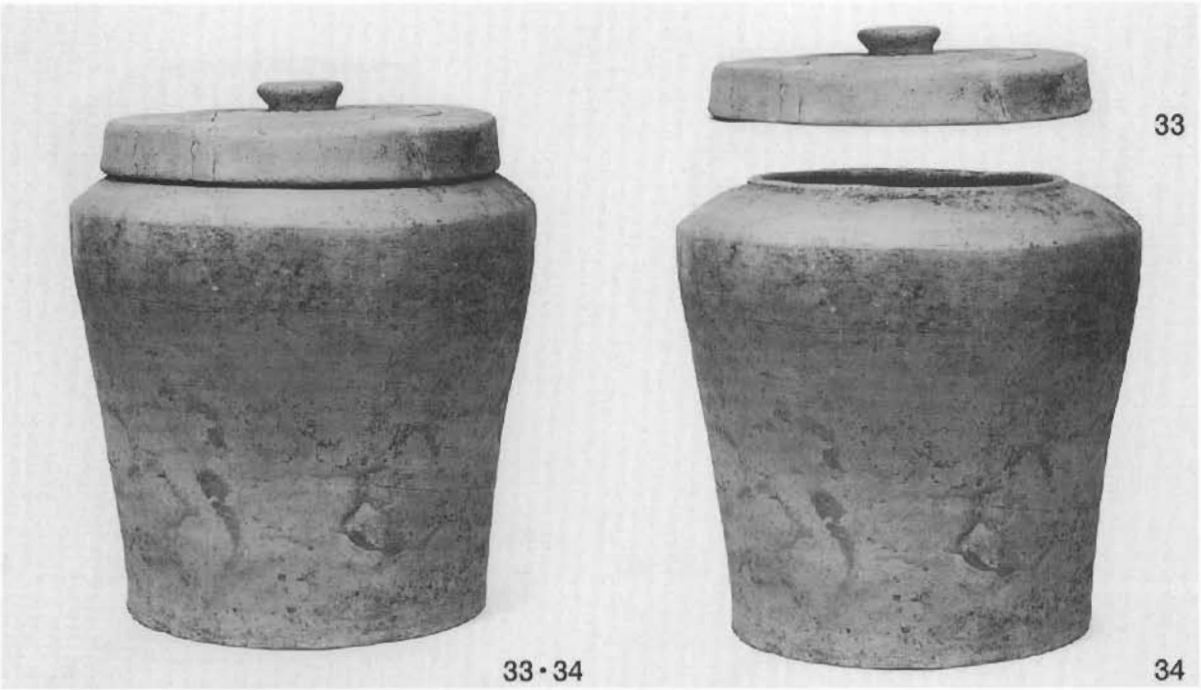


蔵骨器(4)　火消壷(4)



蔵骨器(5)　火消壷(5)

蔵骨器(6)　火消壷(6)


33
33・34
34

35

36

37
37・38
38

39・40

41

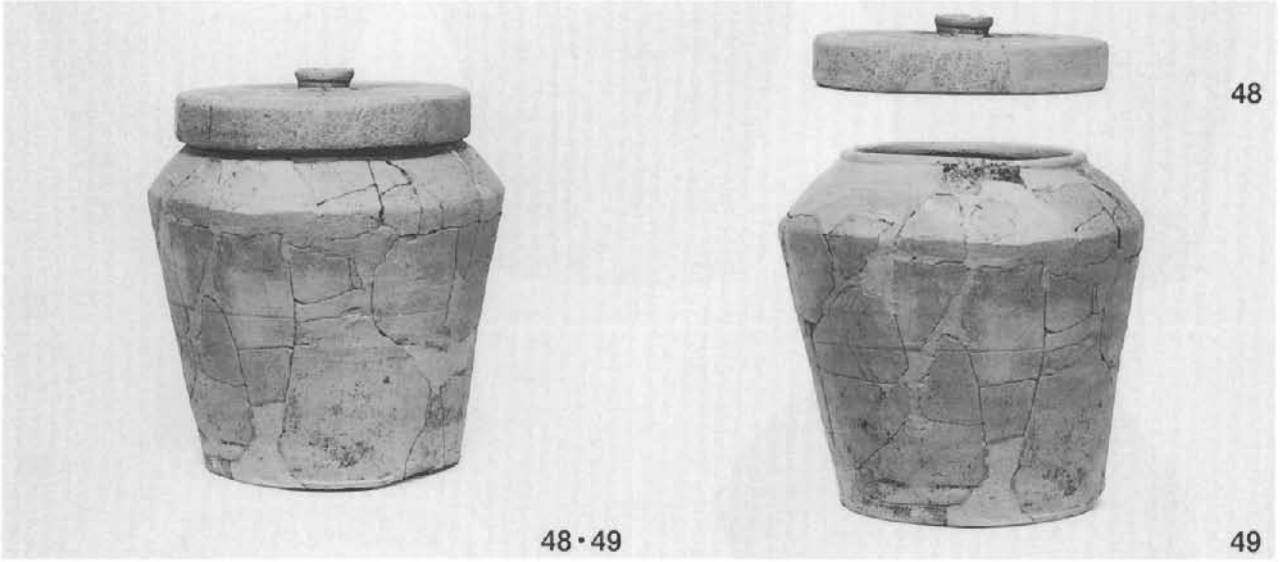
42

43・44

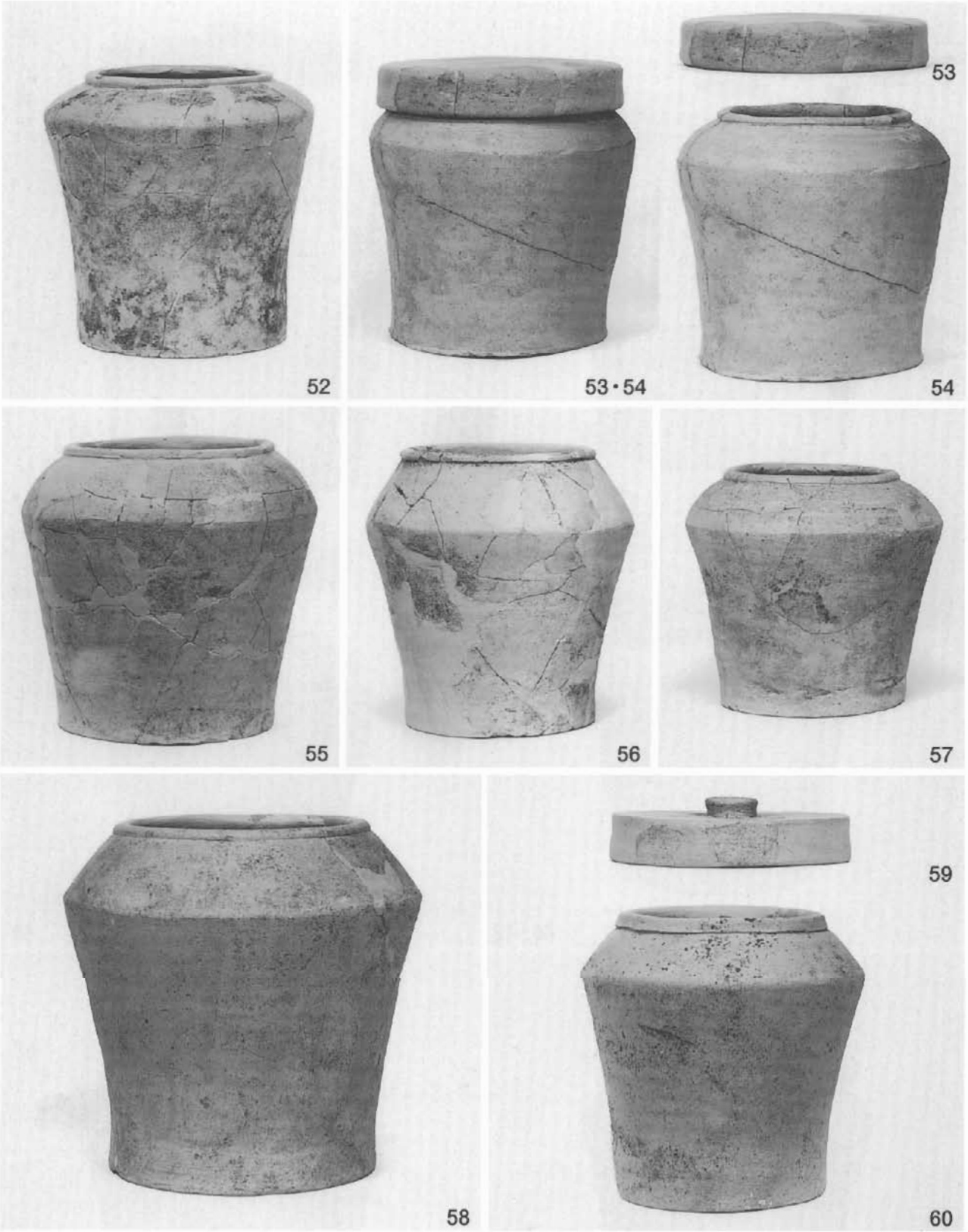
43

44

蔵骨器(8)　火消壷(8)



蔵骨器(9)　火消壷(9)



蔵骨器(10)　火消壷(10)

61

61・62

63

64・65

64

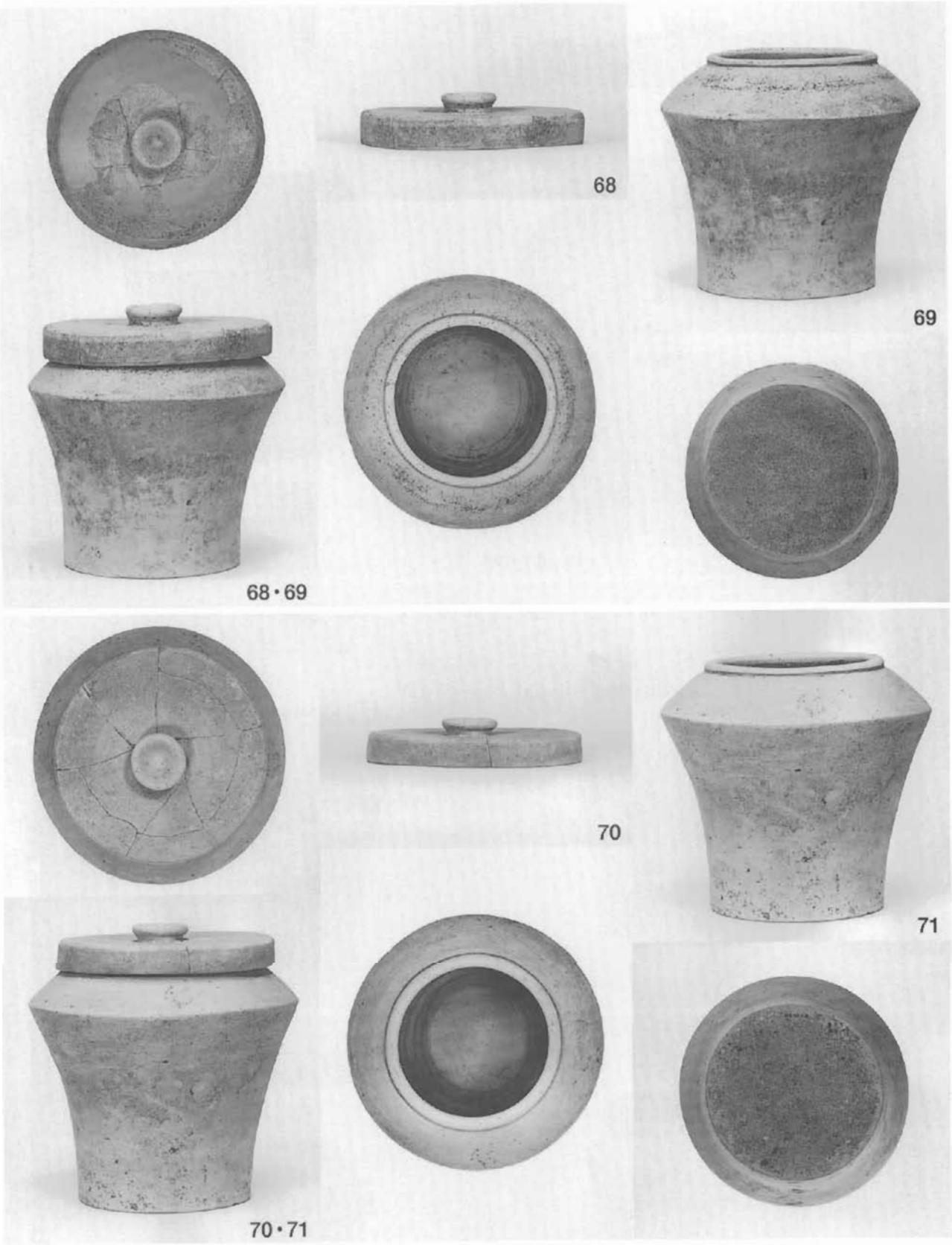
65

66・67

66

67

蔵骨器(11)　火消壺(11)



蔵骨器(12)　火消壺(12)

72

73

76

77

78・79

78

79

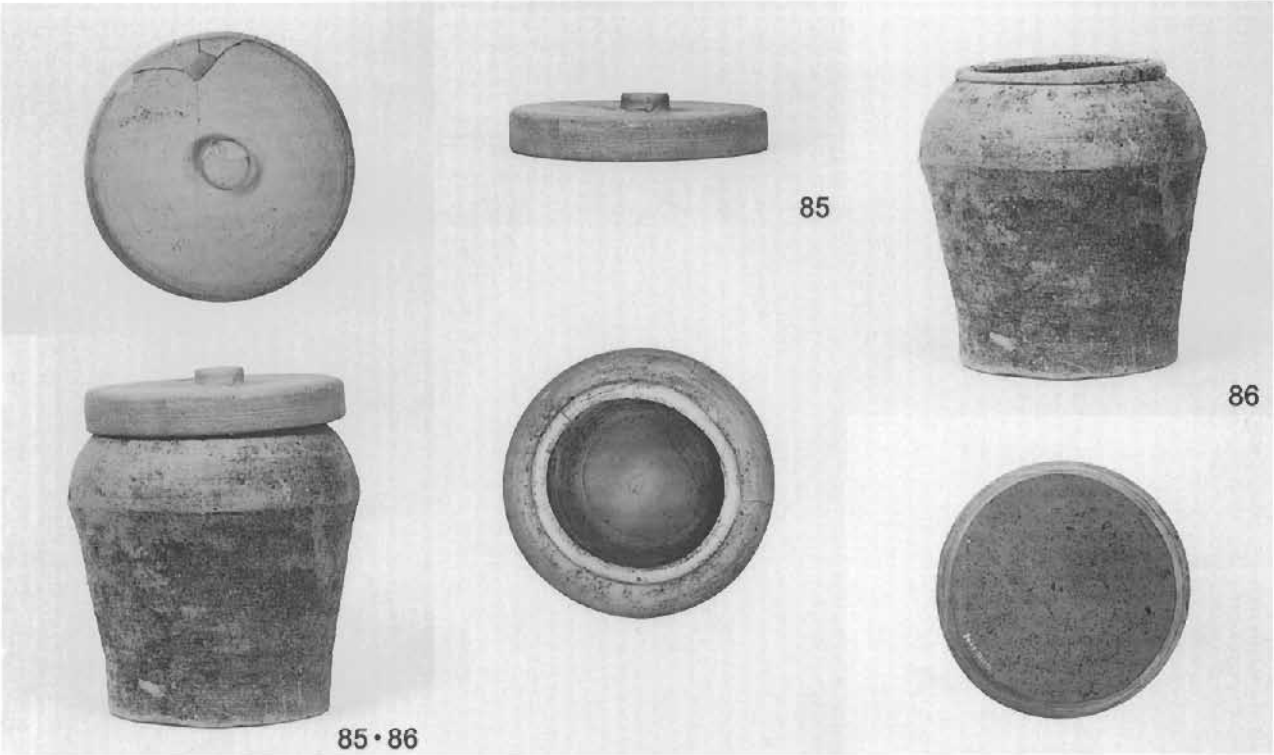
蔵骨器(13)　火消壷(13)

81

82

82・83

84


85

86

85・86

87

88

蔵骨器(14)　火消壷(14)

89

90

91

92

93

94

蔵骨器(15)　陶磁器(1)

95

96・97

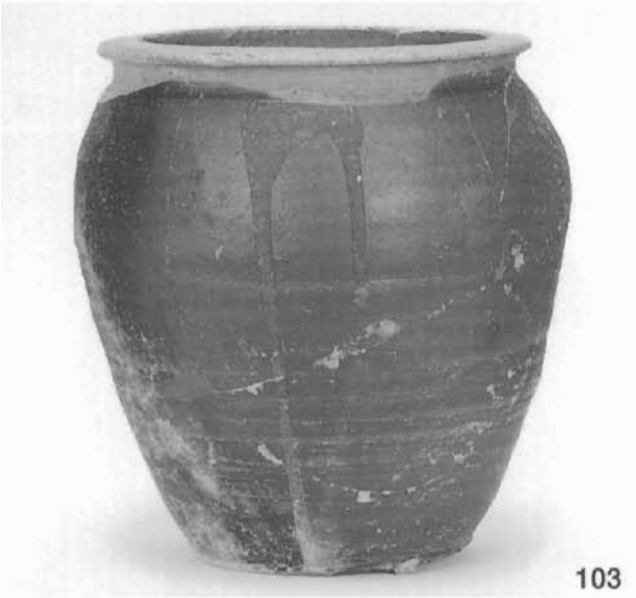
98

99

100

101

102


103

104

105

106

107

108

109

110

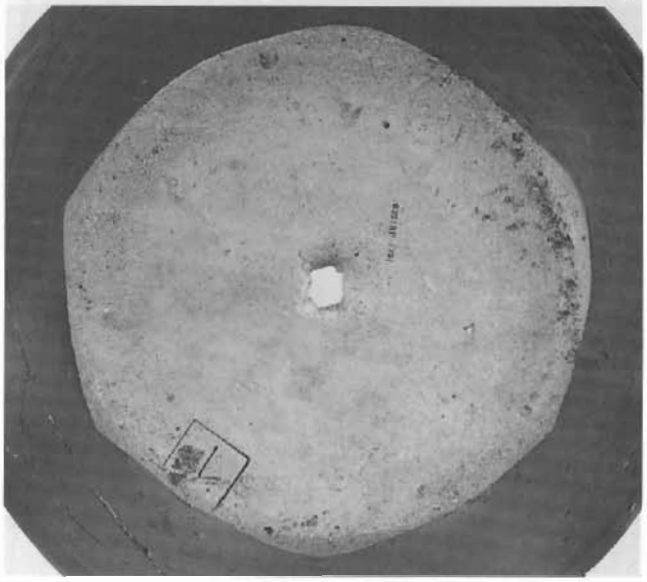
111

112

蔵骨器(18)・土器棺(1)　陶磁器(4)

113

114



115

土器棺(2)　陶磁器(5)

116

117

118

119

120

121

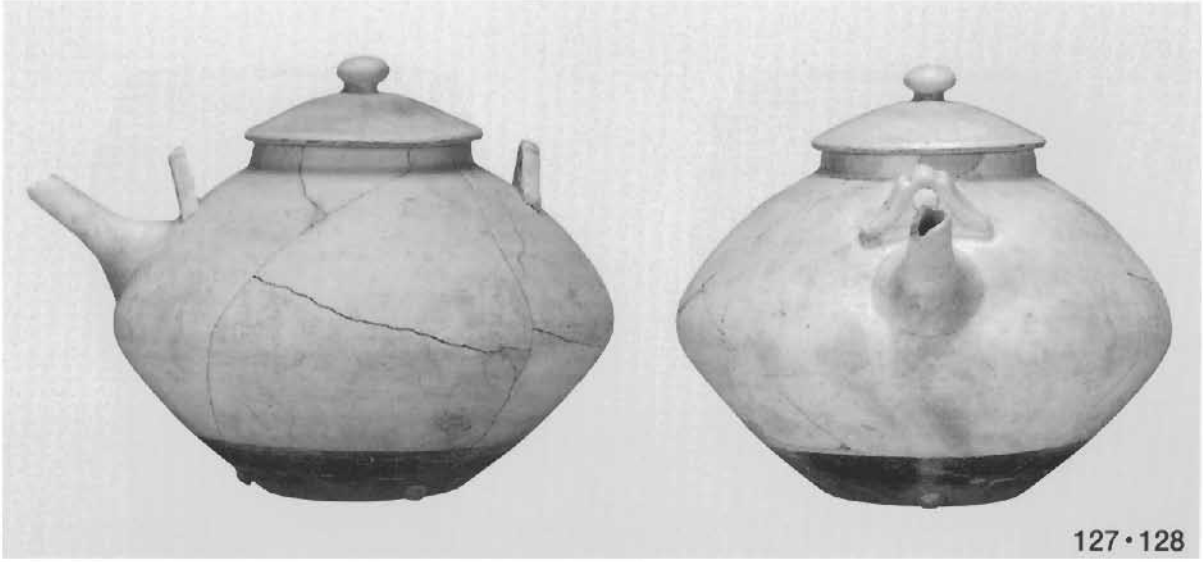
122

123

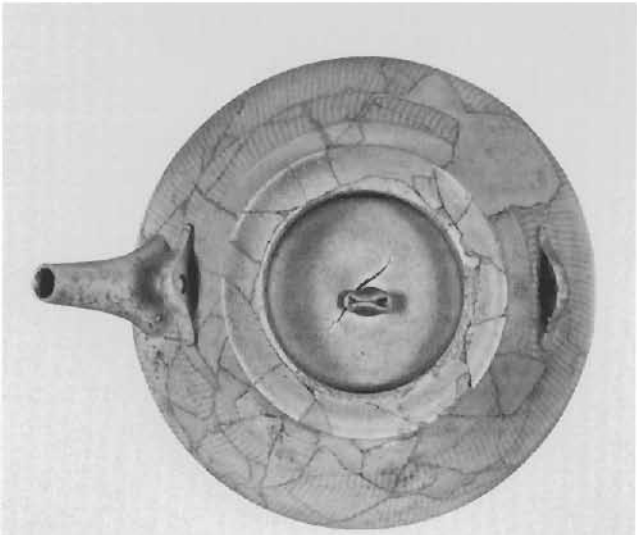
124

125

125・126



127・128

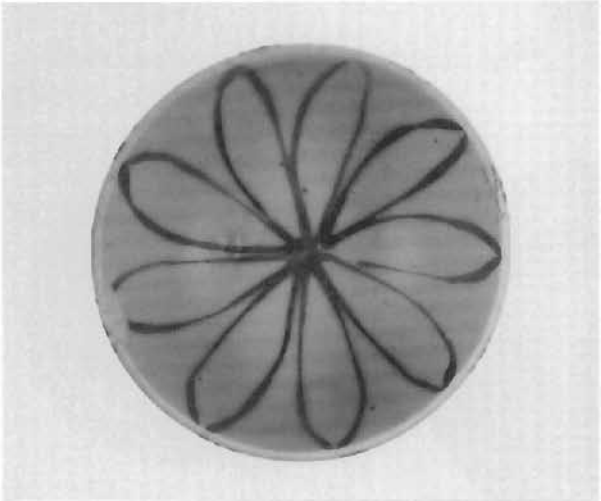


129・130

蔵骨器(21)　陶磁器(8)

131

132

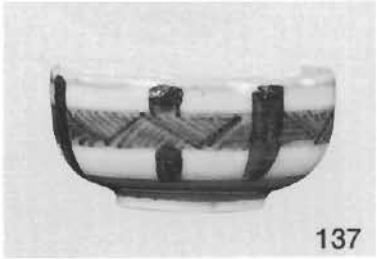


134

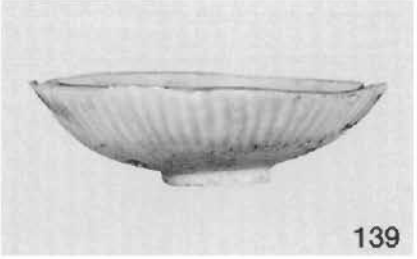
133

136

135

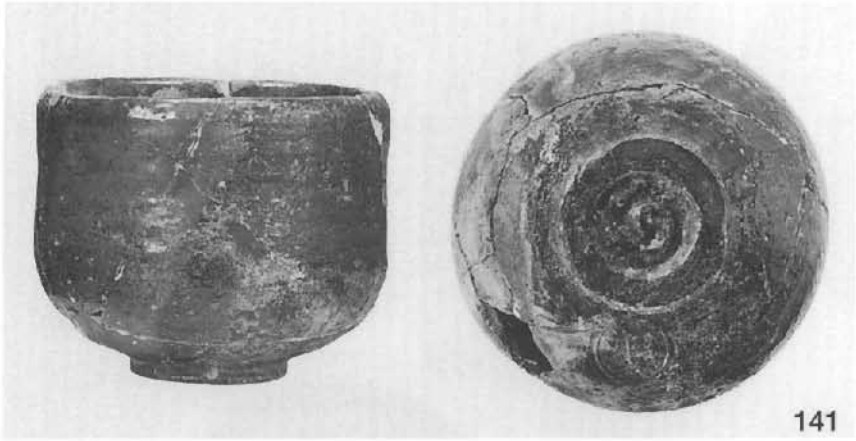

137

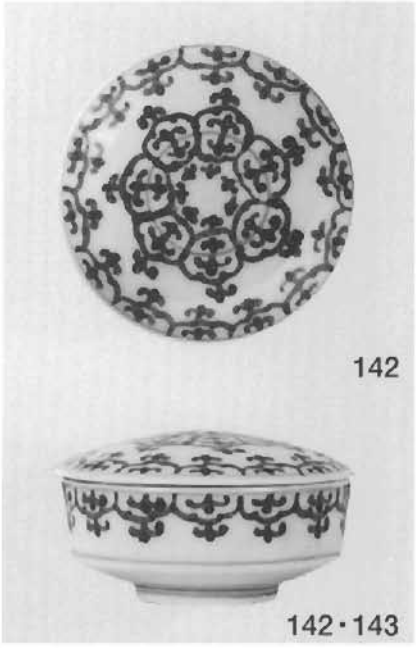
138


139

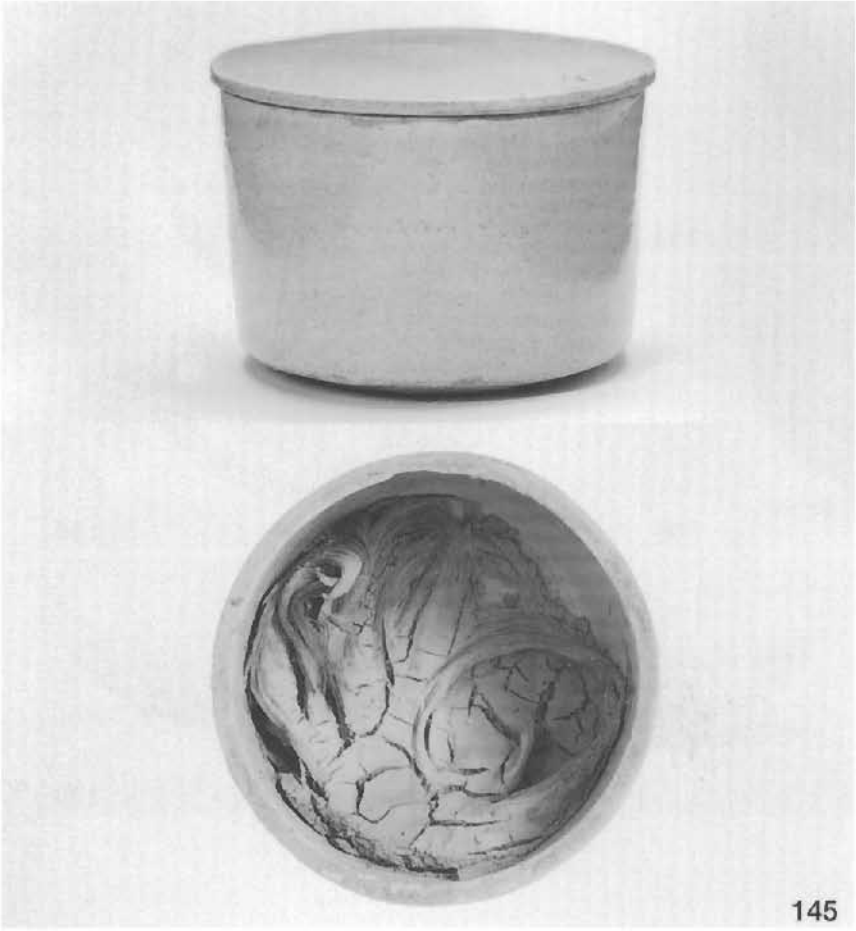
副葬品(1)　陶磁器(9)

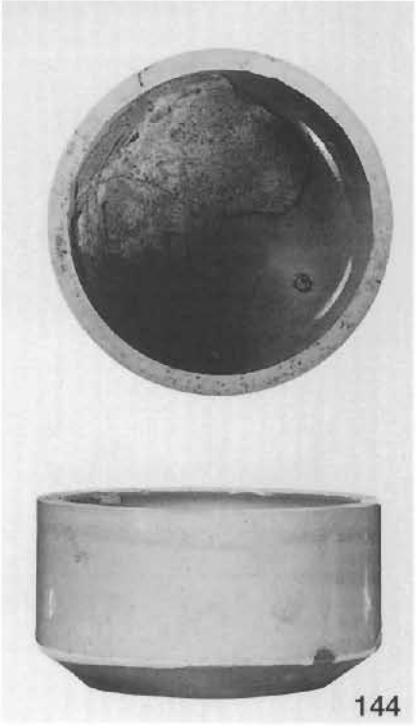
140


141

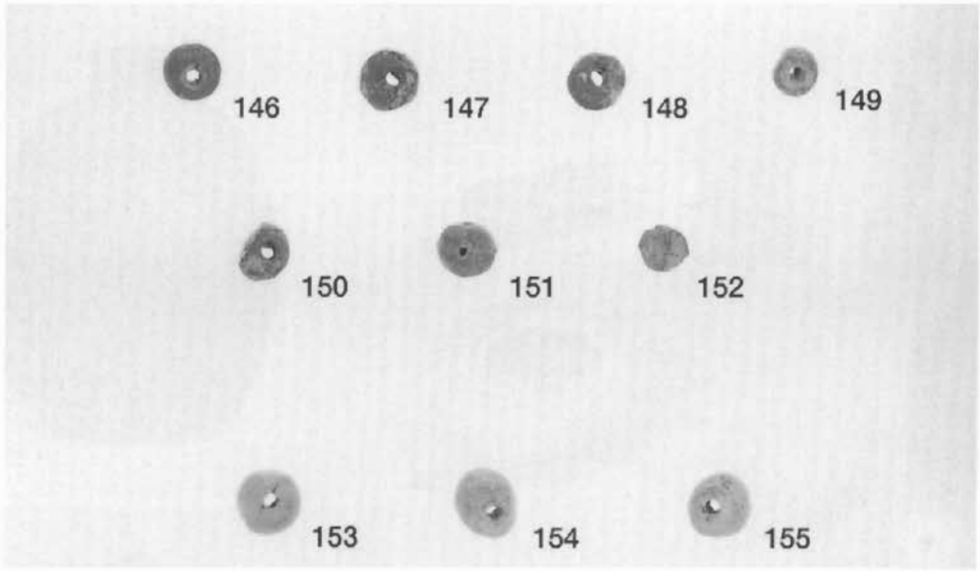

142

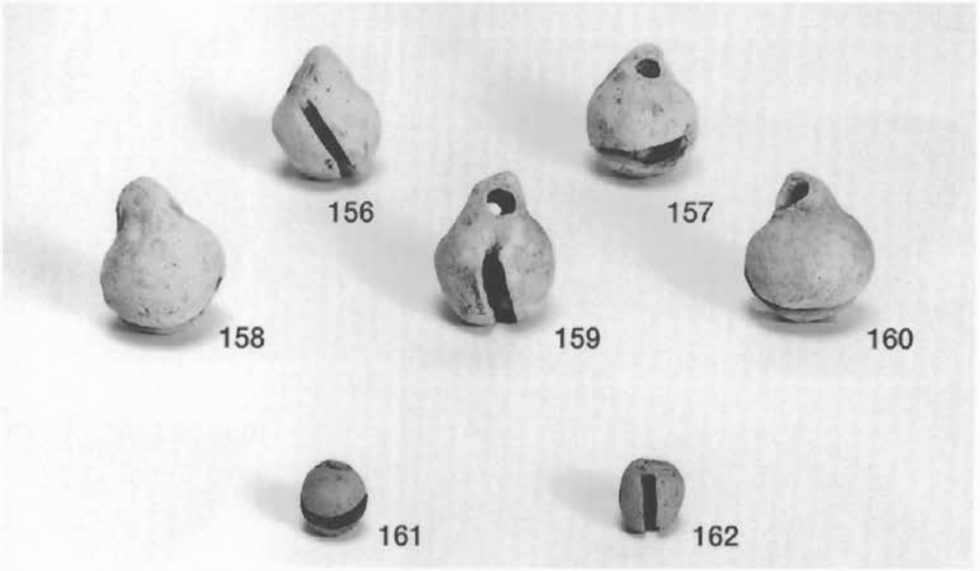
142・143

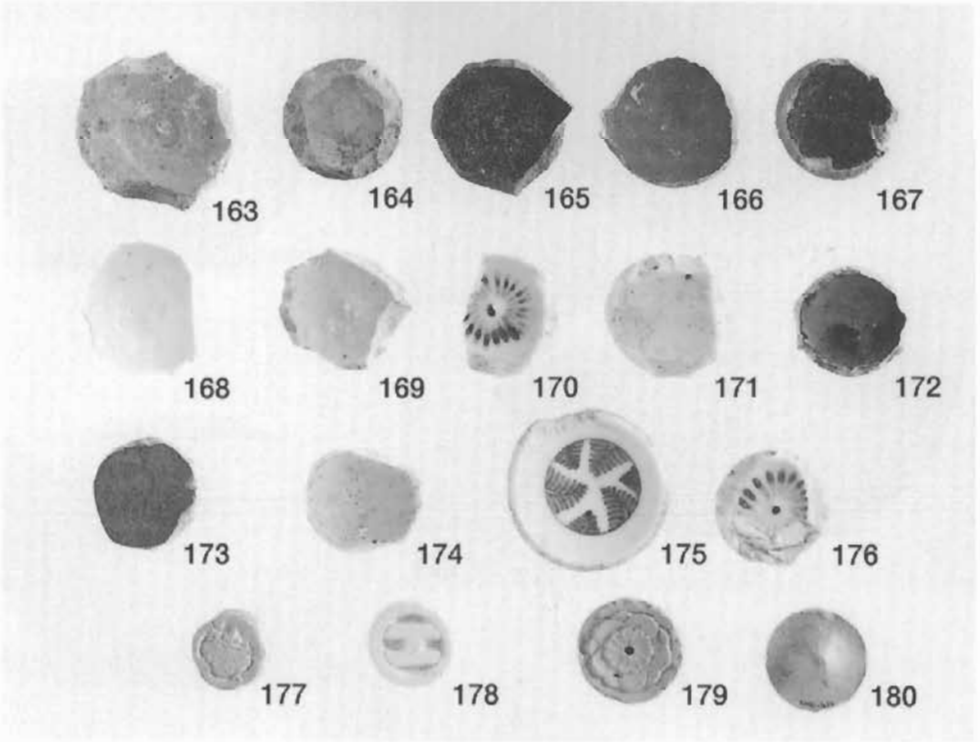

145


144

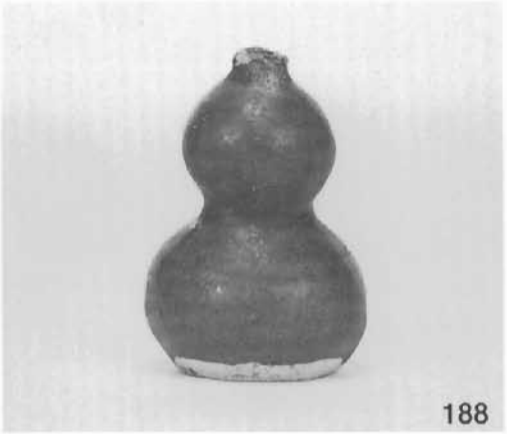
副葬品(2)　陶磁器(10)





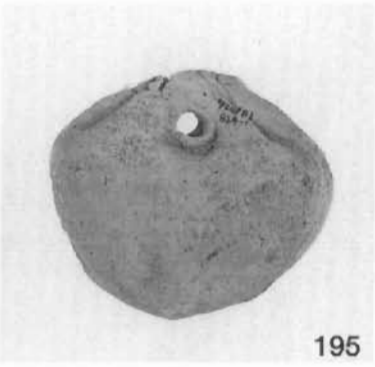


副葬品(3)　数珠玉・土鈴・面子



副葬品(4)　ミニチュア(1)

194

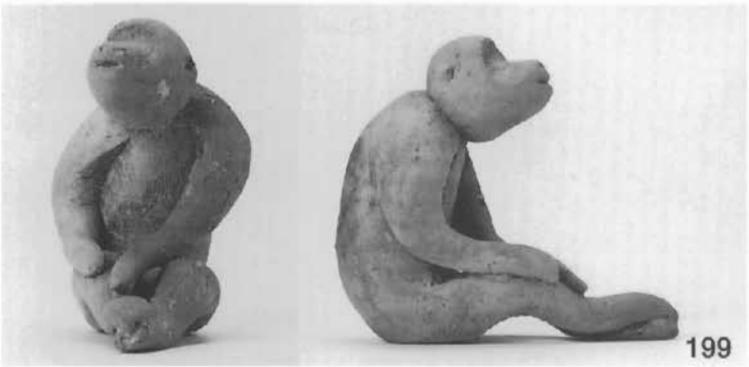

195

196

197

198

200

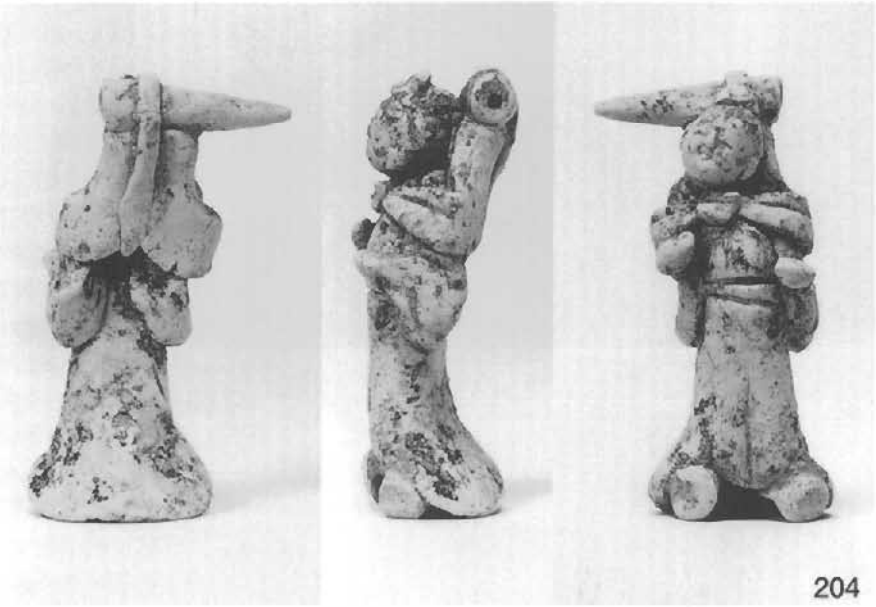

199

副葬品(5)　ミニチュア(2)

201

202

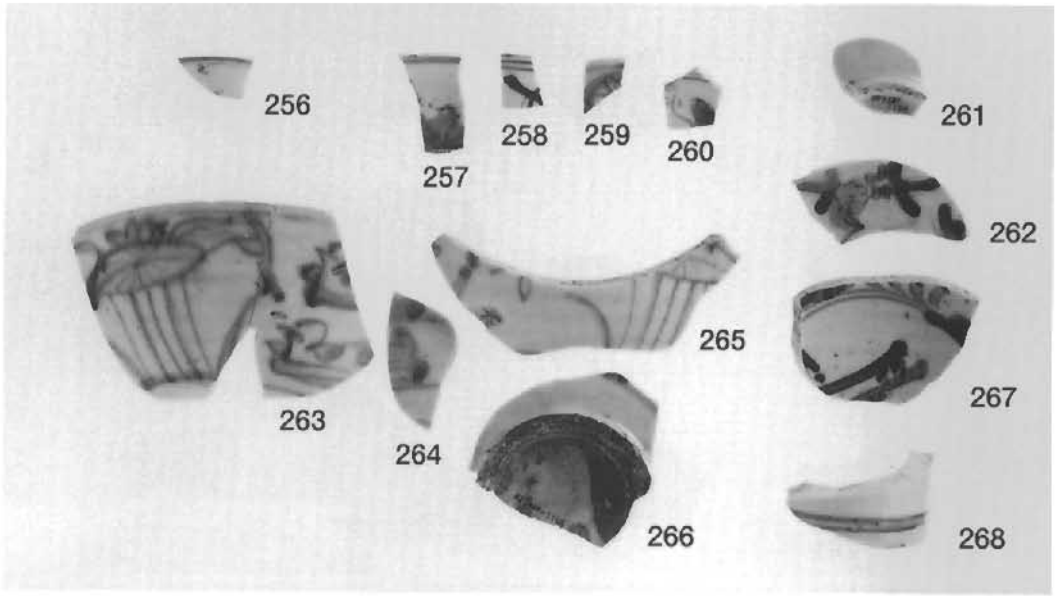
203

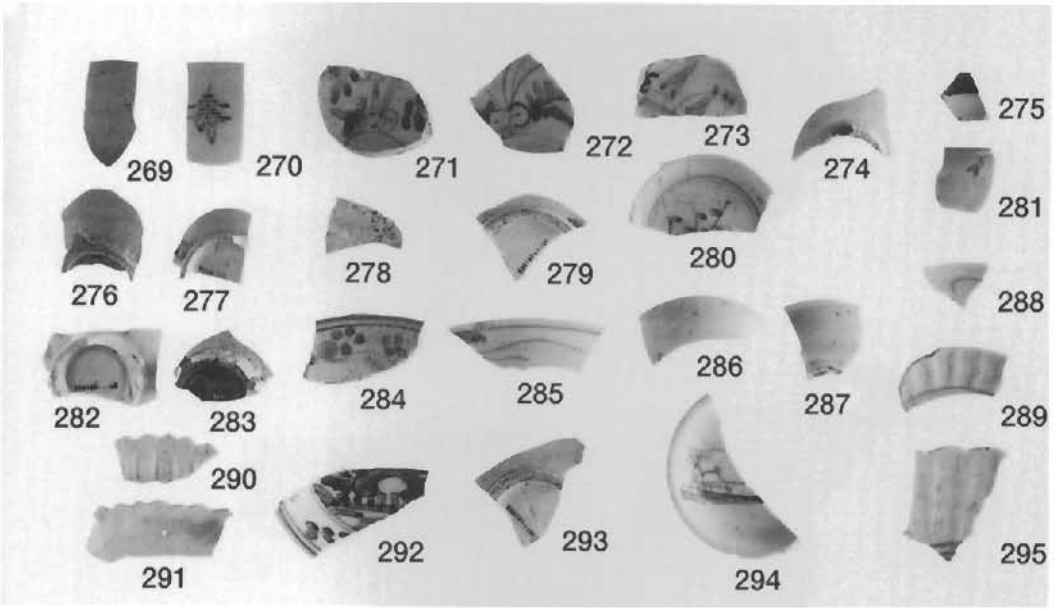

204

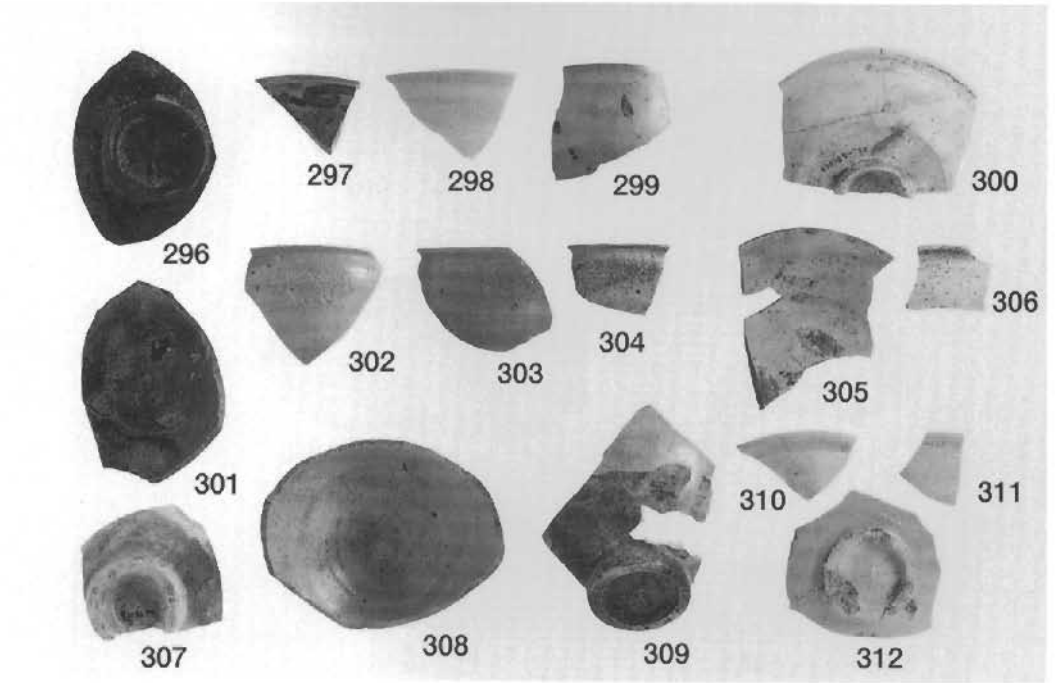
236

205

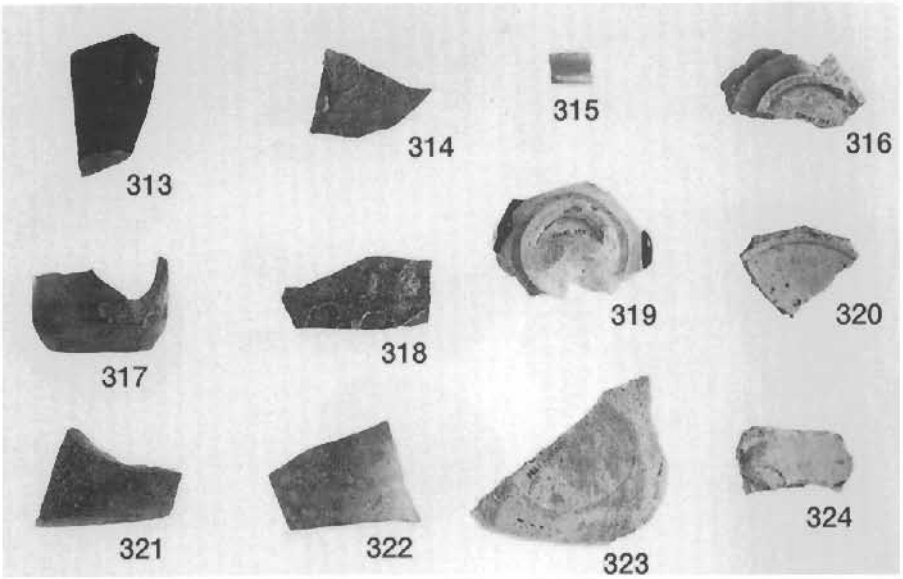
副葬品(6)　ミニチュア(3)

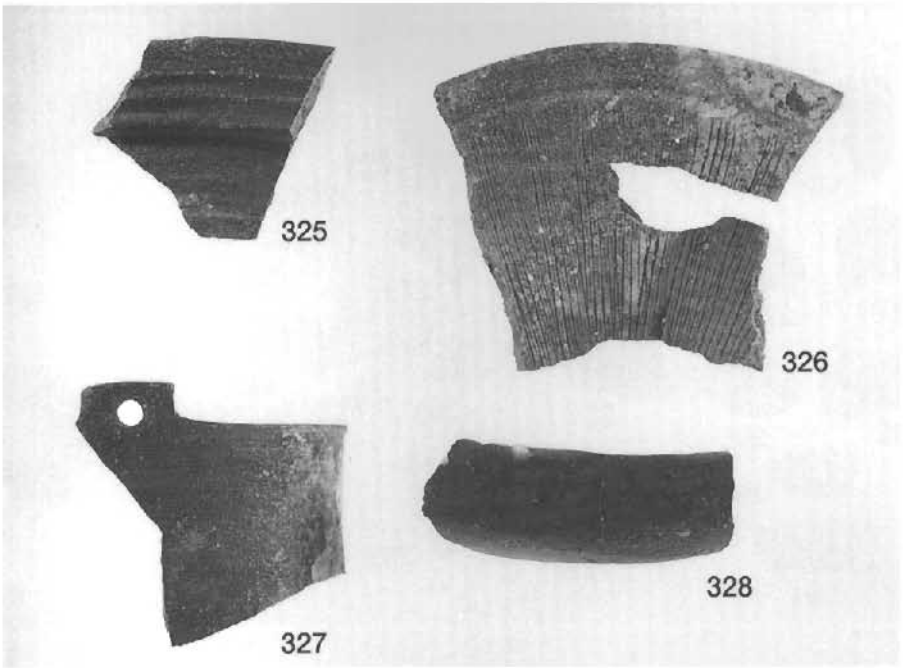


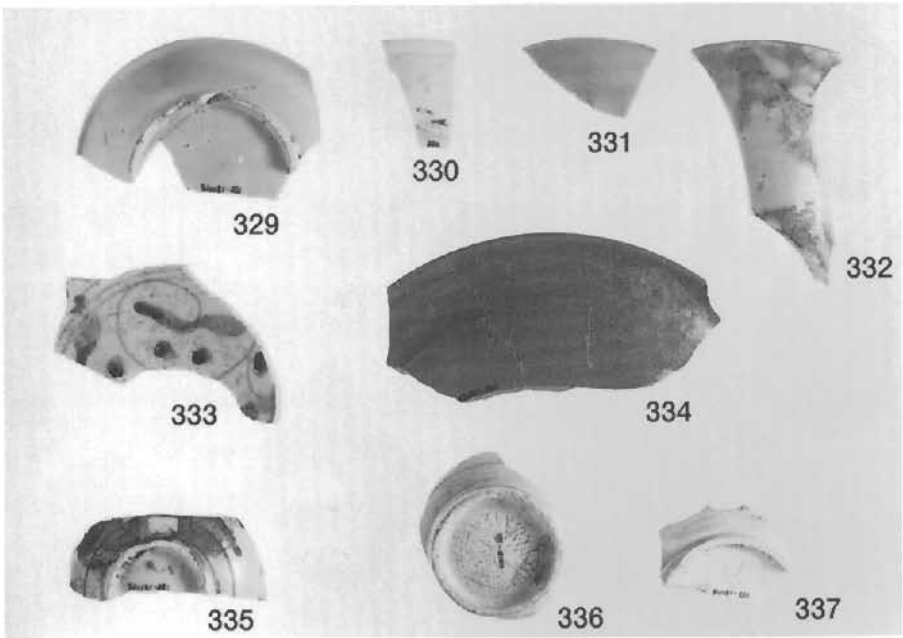




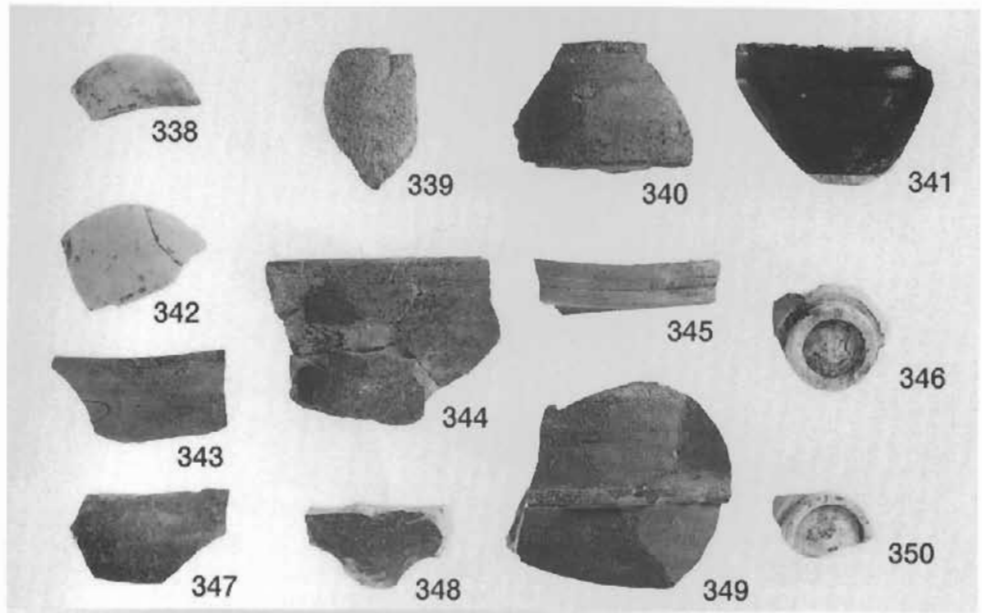
陶磁器(11)　漳州窯・肥前他



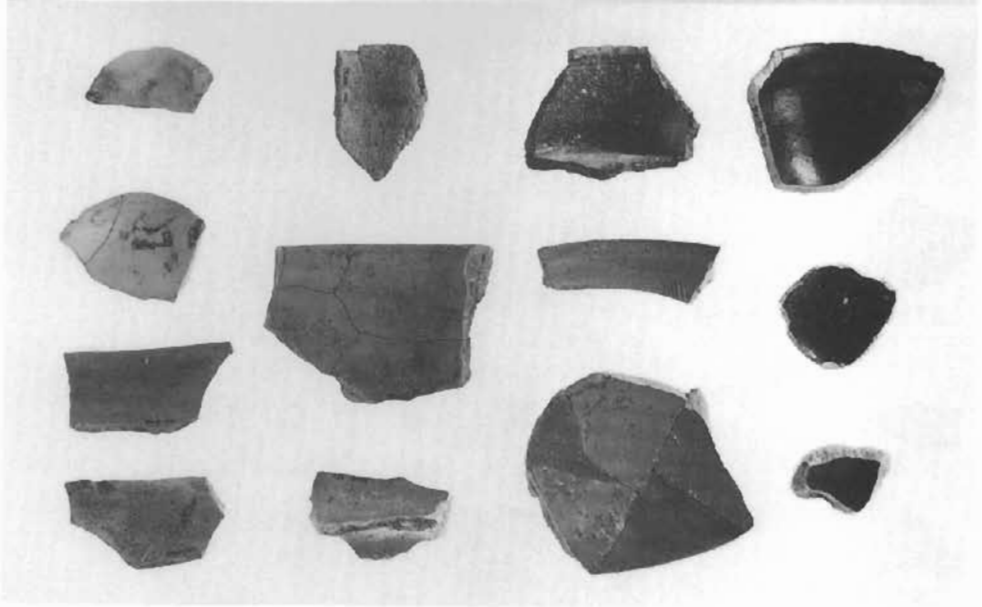




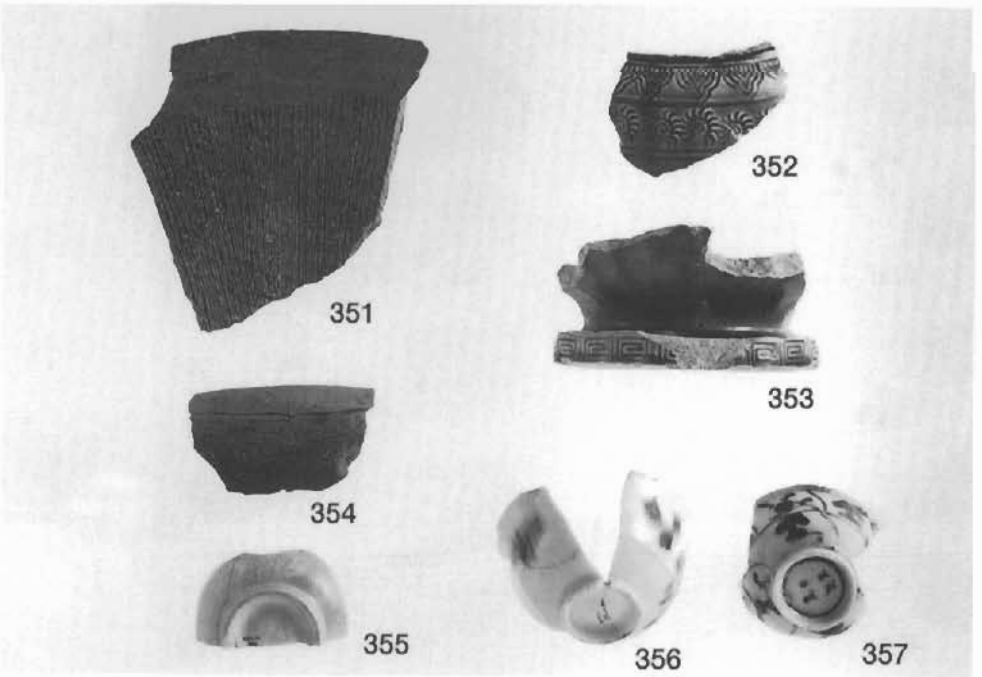
陶磁器(12)　備前・瀬戸美濃・丹波他



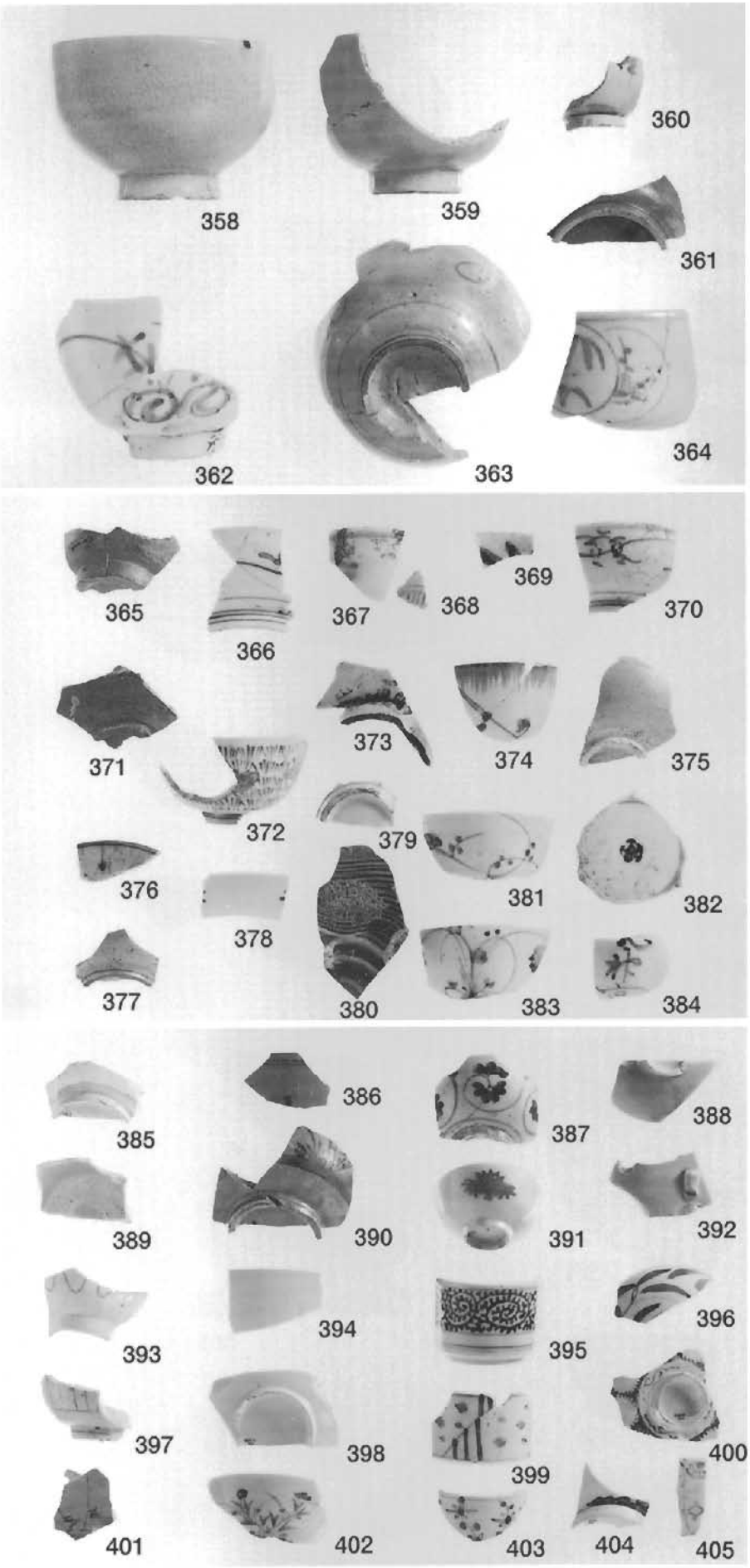
（表）



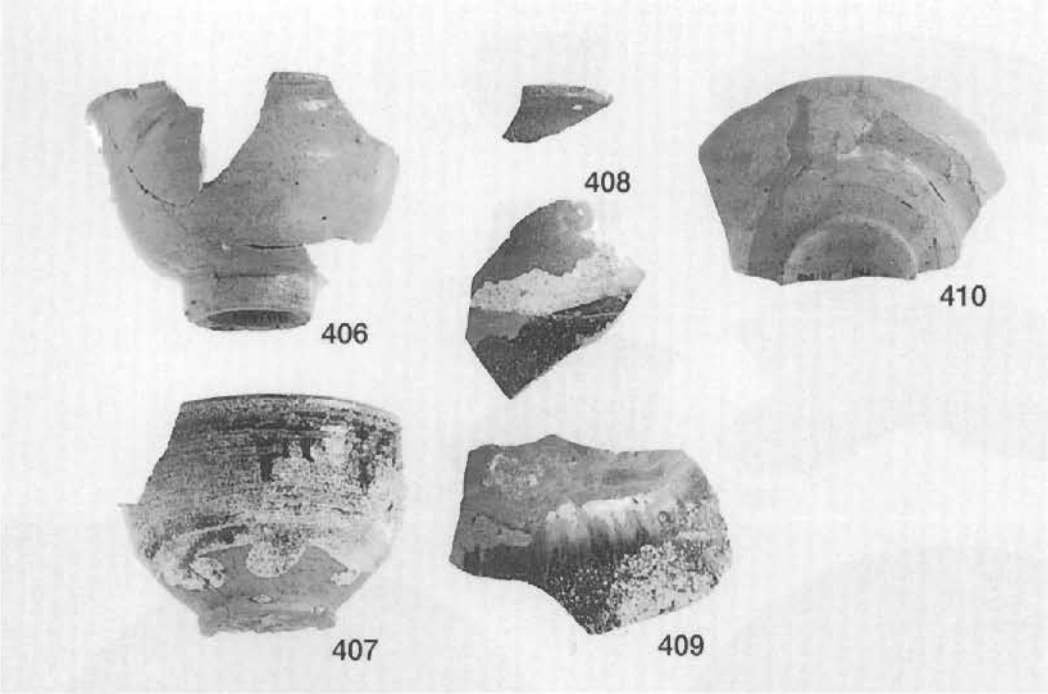
（裏）



陶磁器(13)・土師器他


358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405

陶磁器(14)　肥前Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

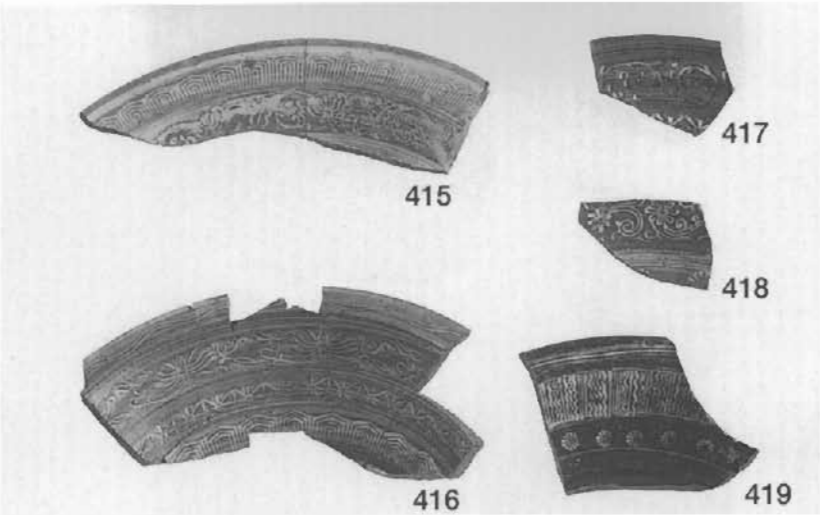

406
408
410
407
409

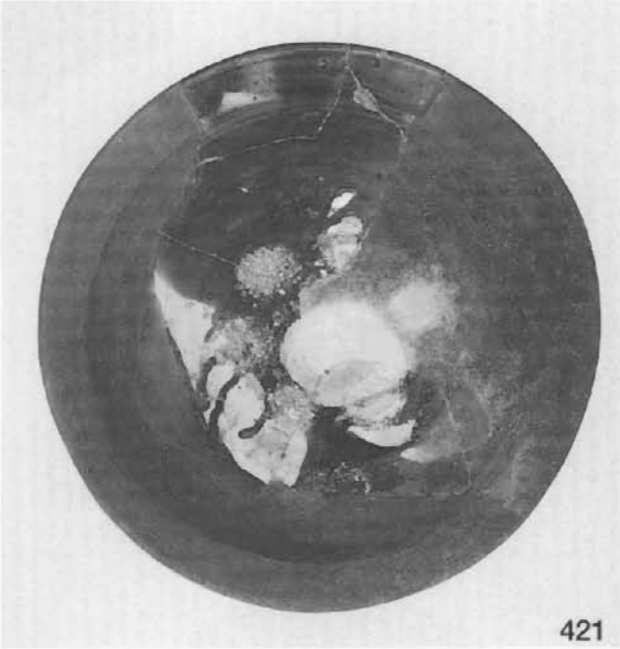
411

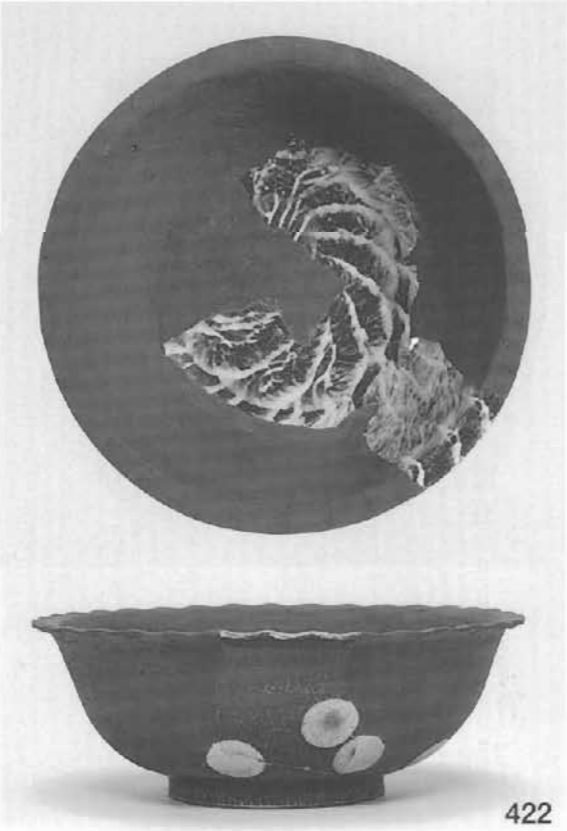
412

413

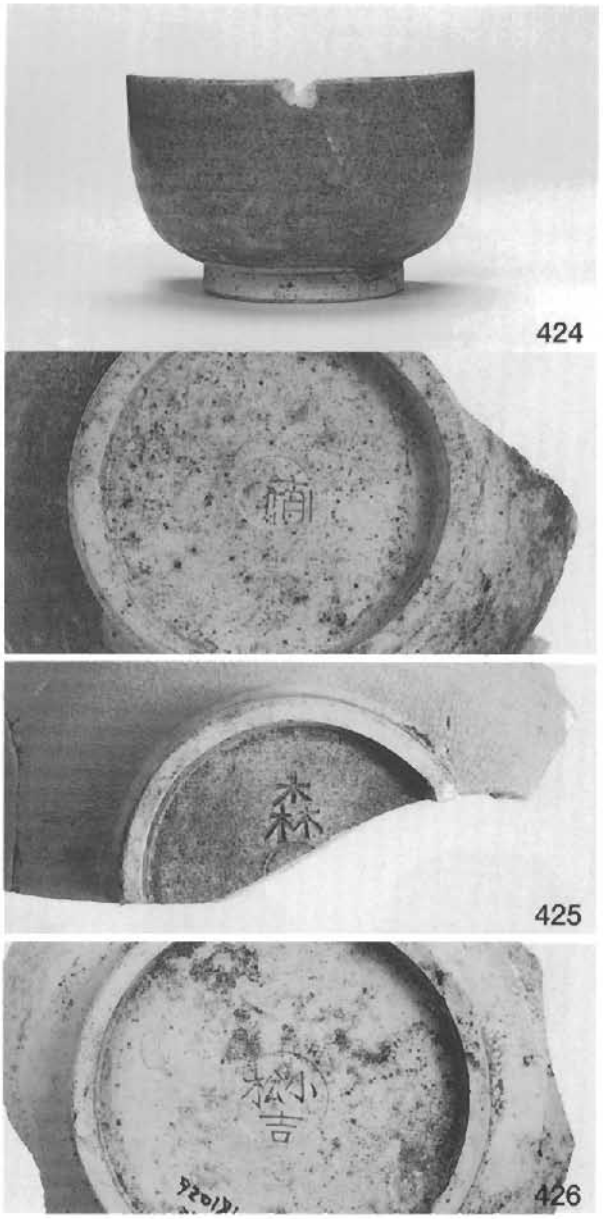
414



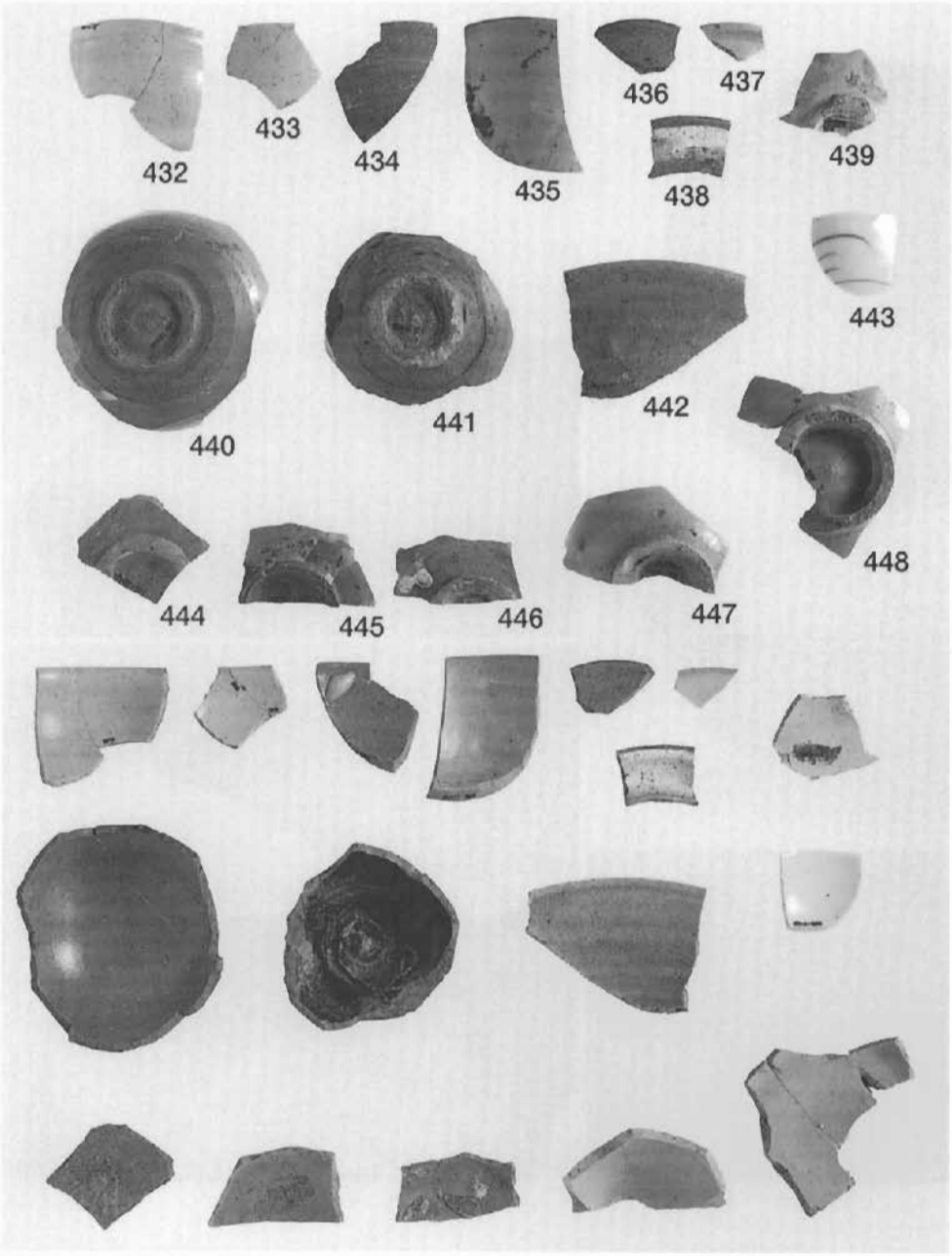




陶磁器(16)　唐津(2)・現川

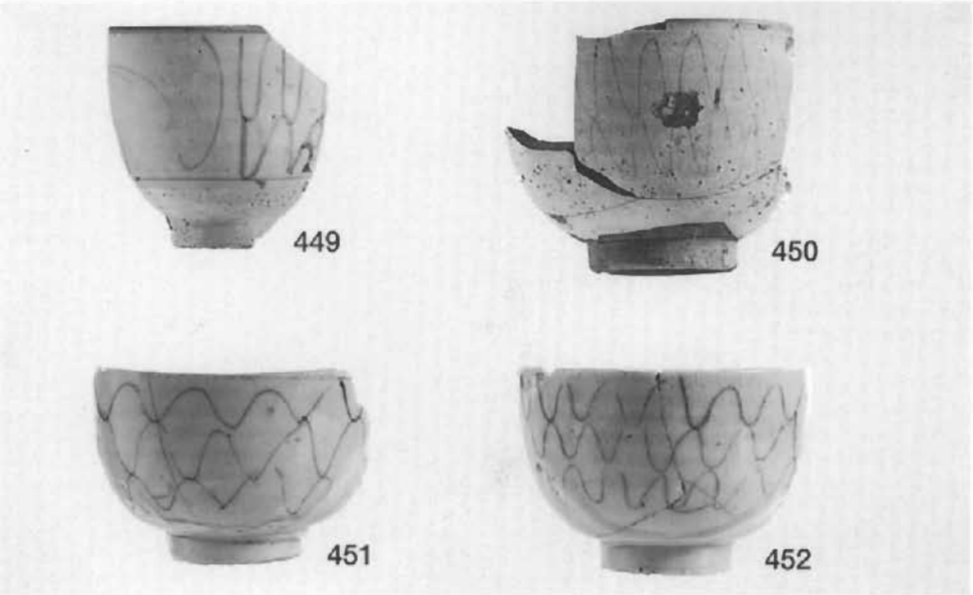


陶磁器(17)　京焼風

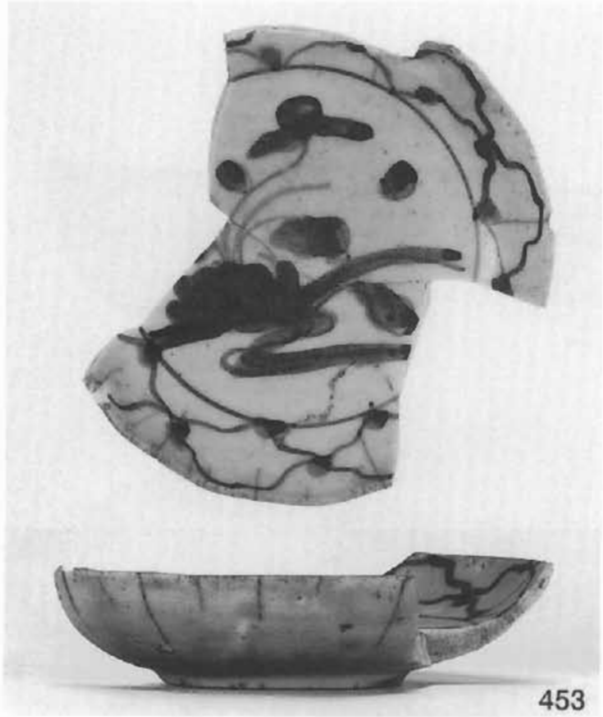


（表）

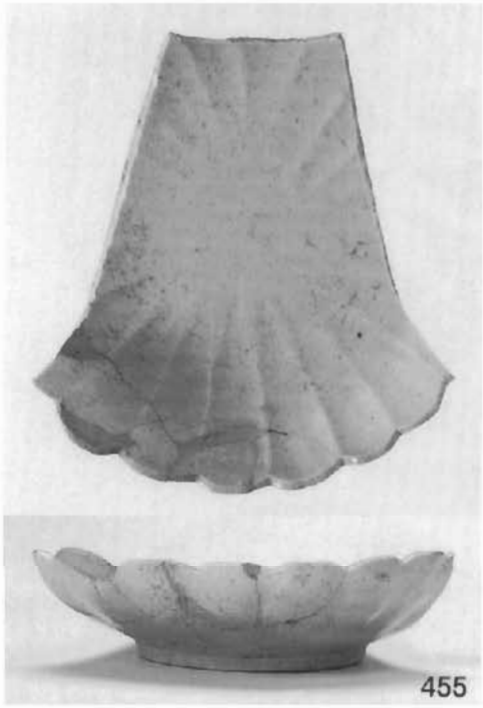
（裏）

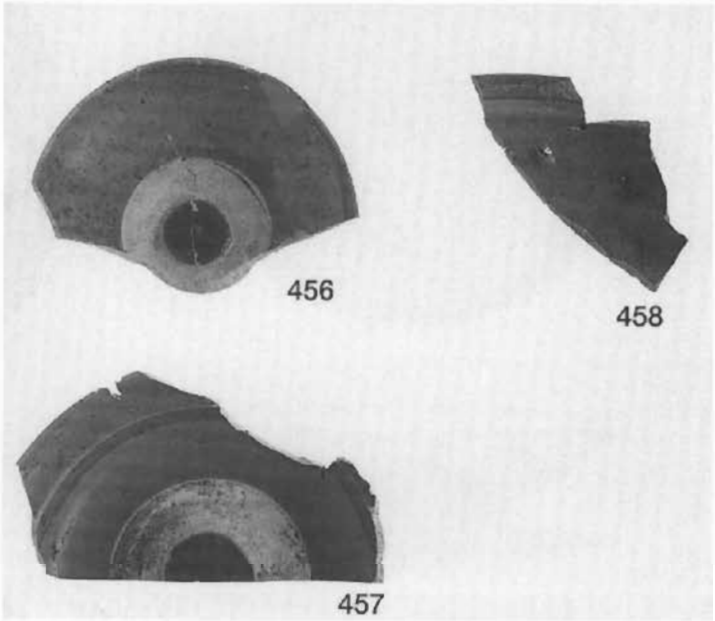


陶磁器(18)　唐津・肥前Ⅰ・Ⅱ


453

454


455


456 457 458

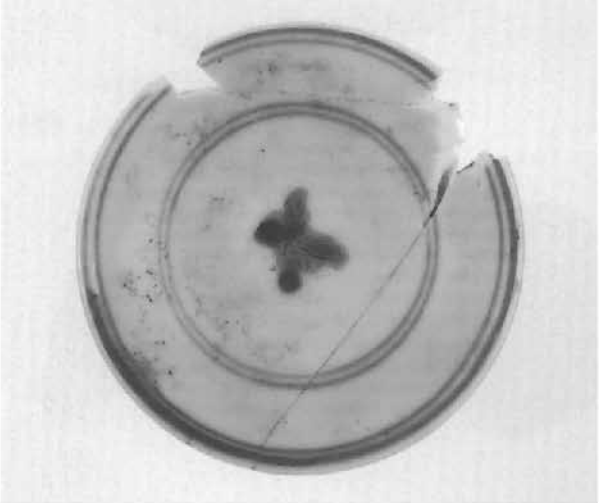
459

460

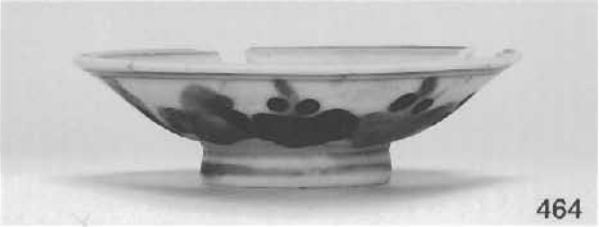
461

462

463



467


464

465

468

466

陶磁器(20)　肥前Ⅳ・Ⅴ・美濃

469

473

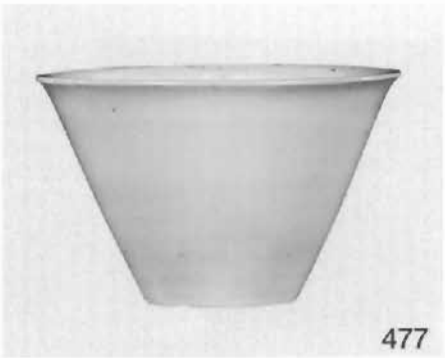
470

474

471

472

475・476


477

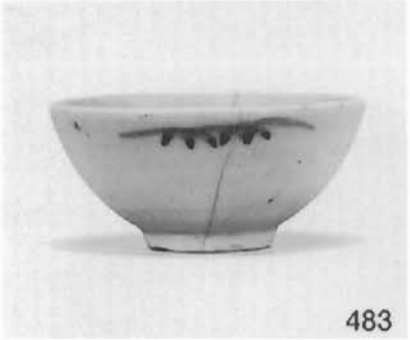
478

479

480

481

482


483

484

485

486

487

488

489

陶磁器(22)　肥前小杯・猪口・碗

490

491

492

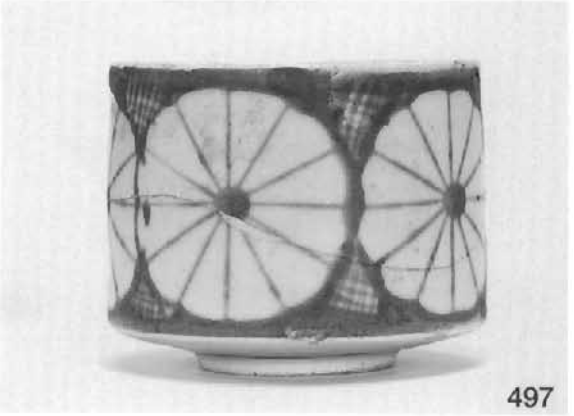
493

495

494

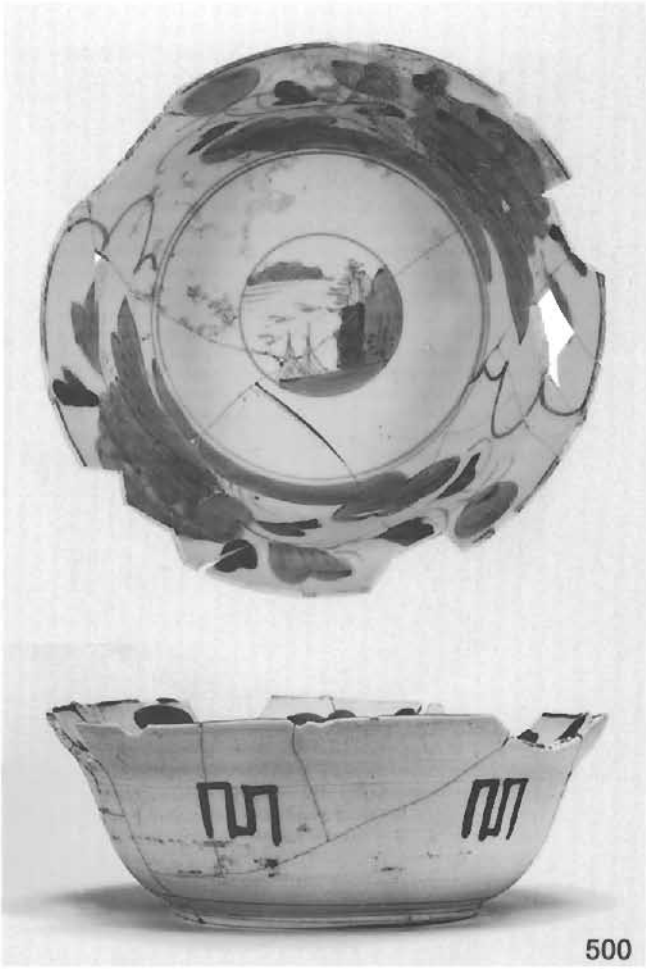
498

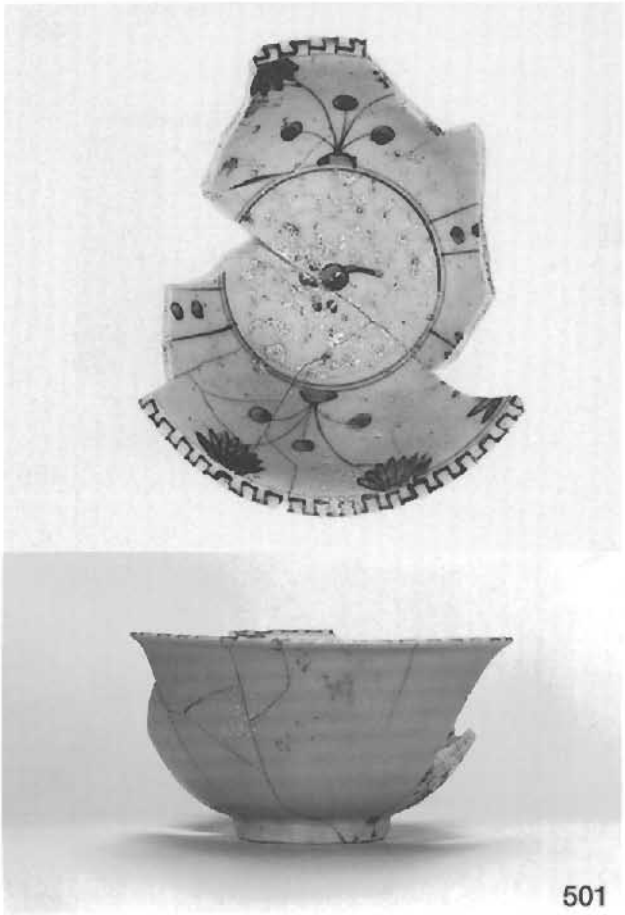
496

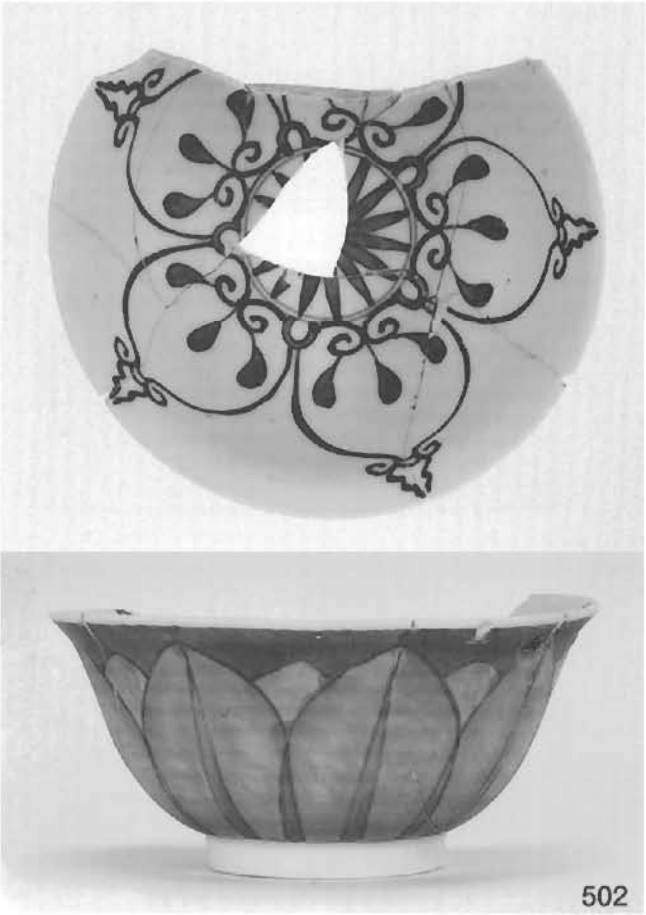

497

陶磁器(23)　肥前碗・猪口・鬢盥

499


500

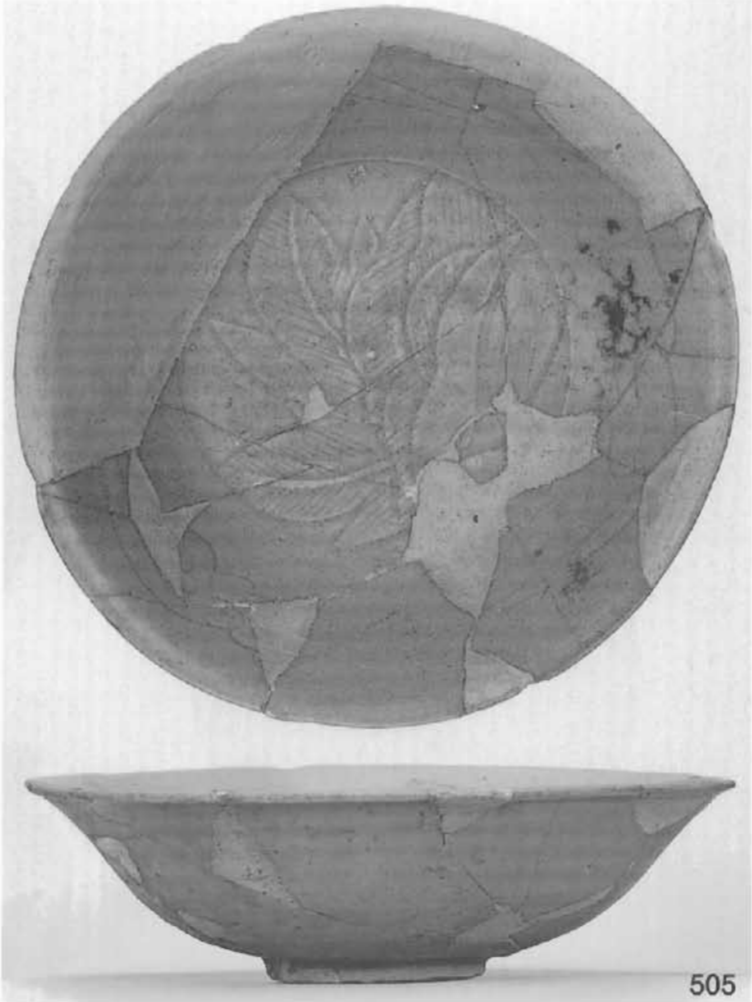

501


502

陶磁器(24)　肥前鉢

503

504

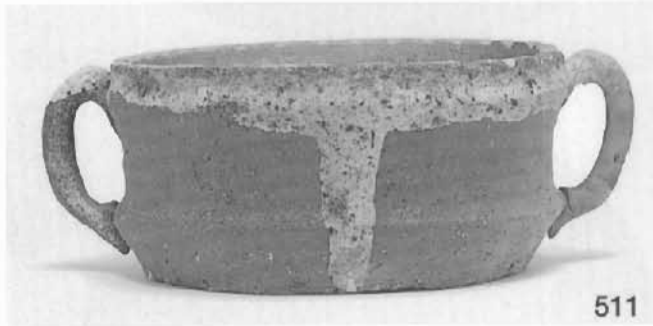

505

506

陶磁器(25)　肥前香炉・鉢

507

508


511

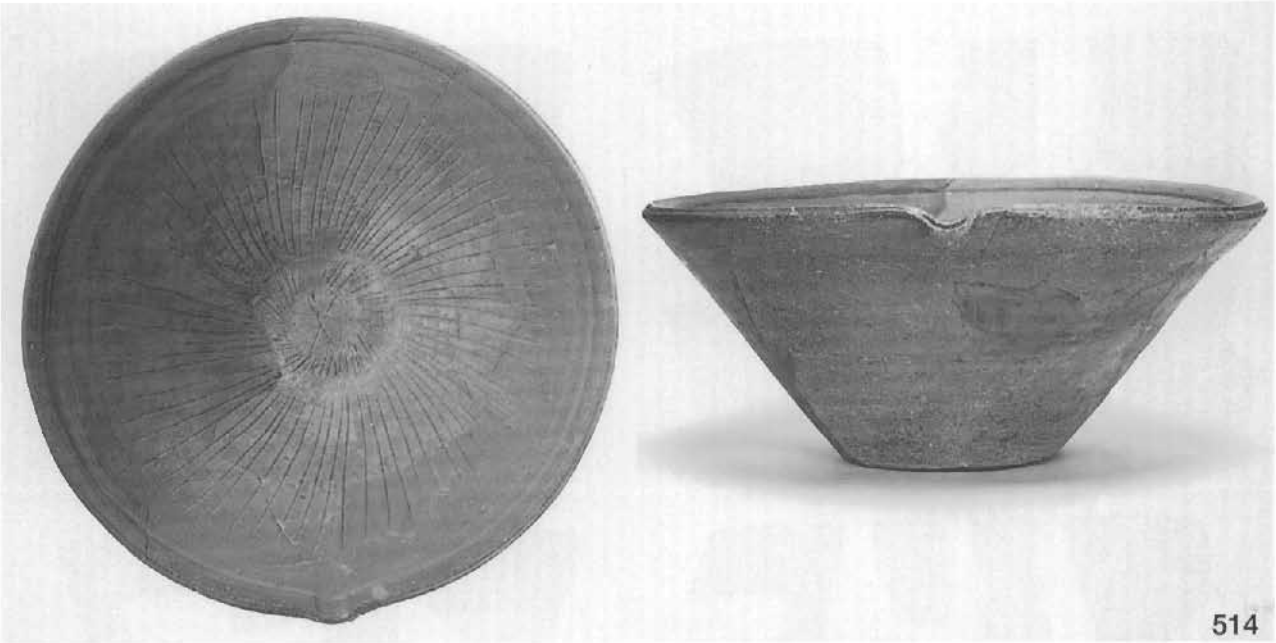
512

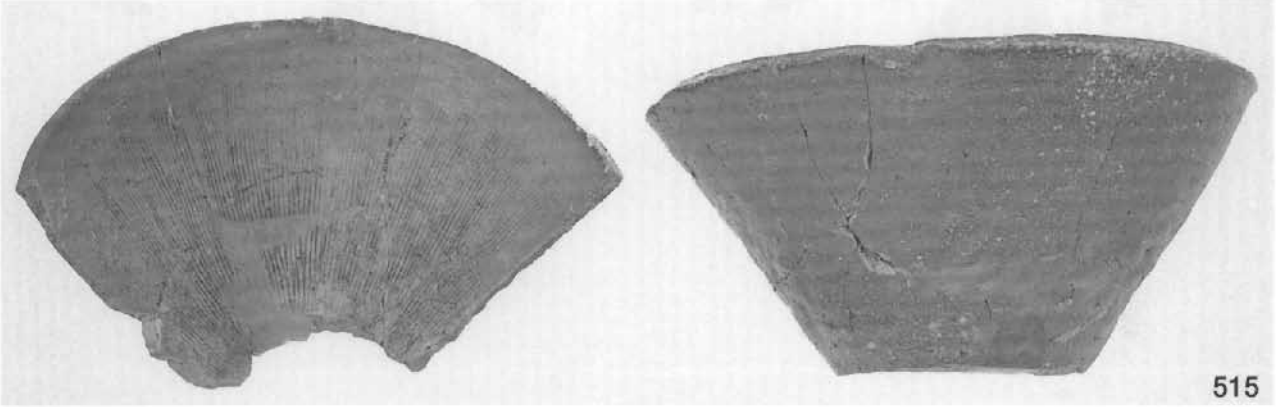
513

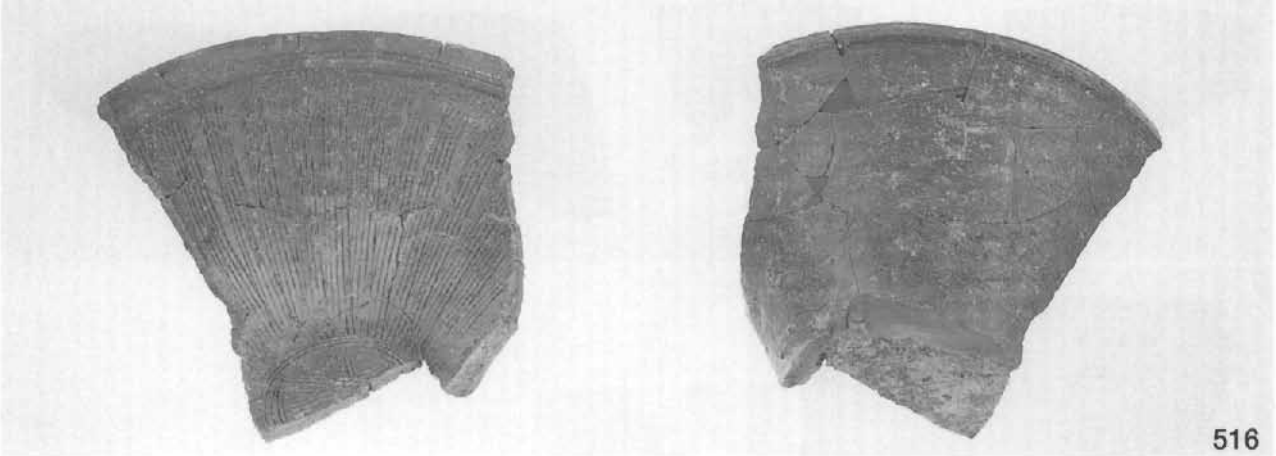
509

510

陶磁器(26)　丹波壷・甕・灰器・水盤

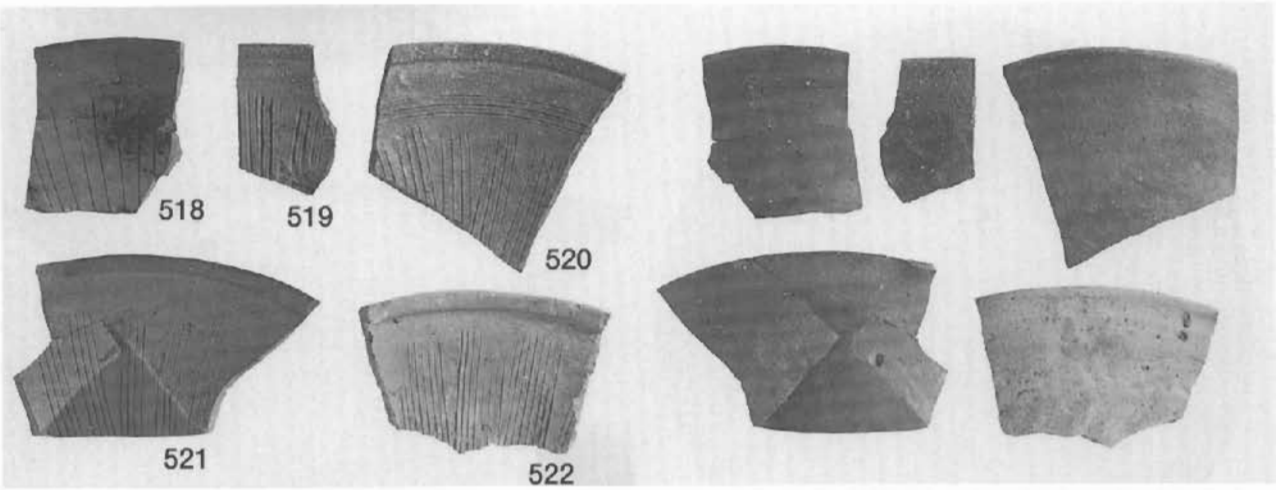

514

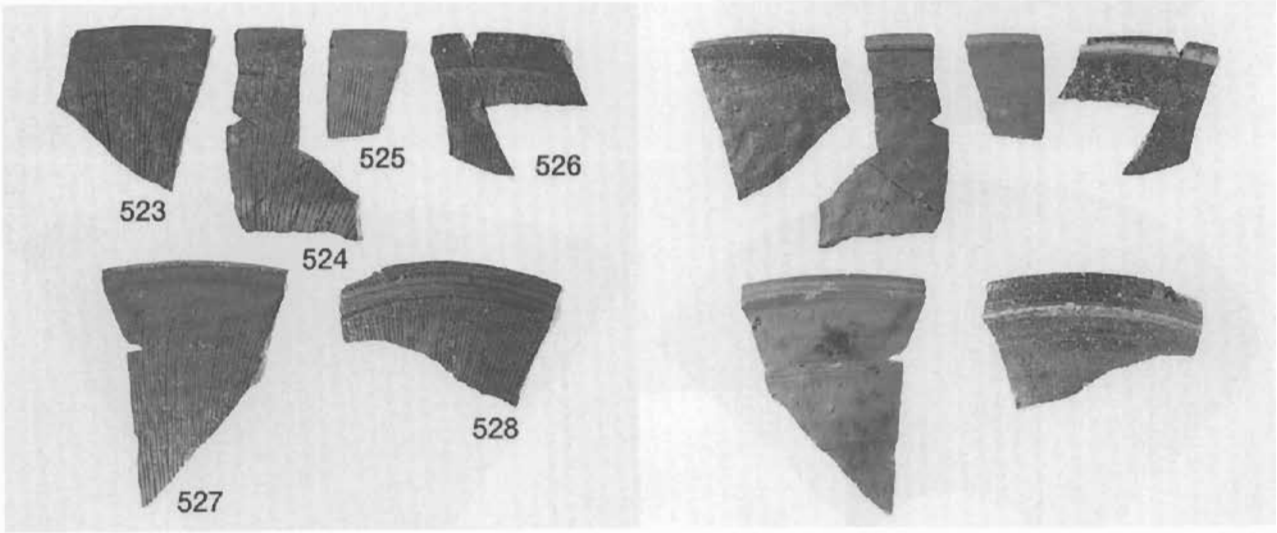

515

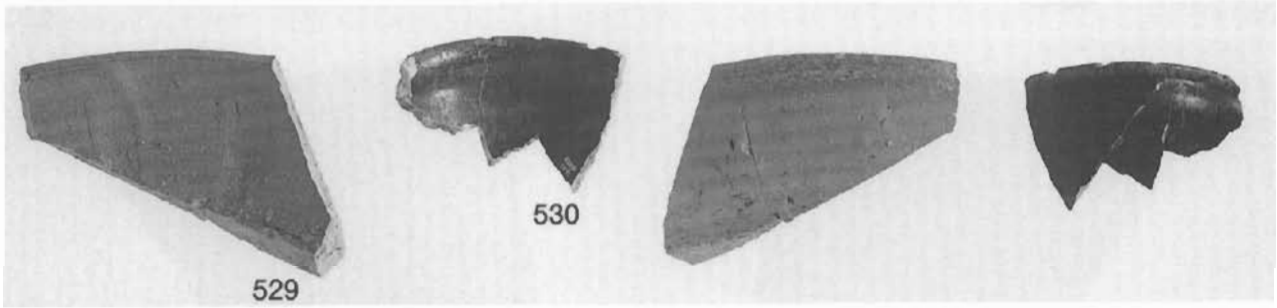

516

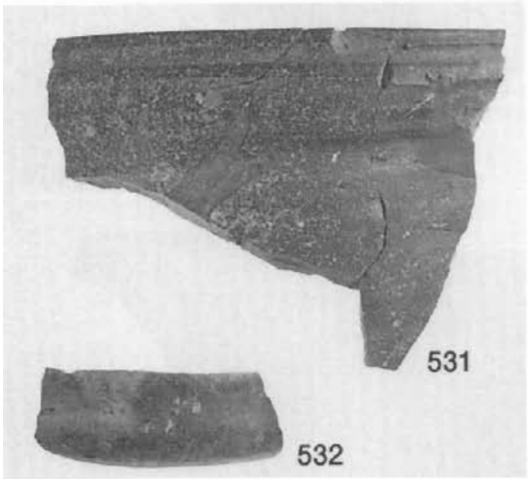
517

陶磁器(27)　丹波擂鉢



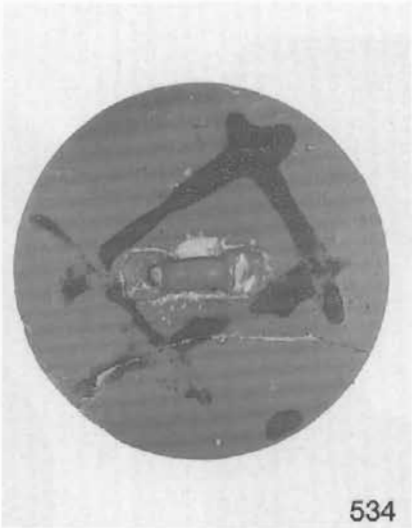


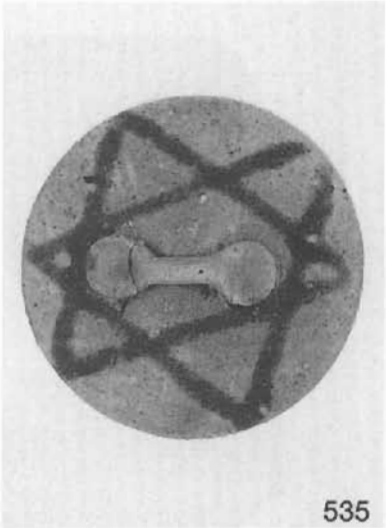




陶磁器(28)　丹波擂鉢・甕・瀬戸美濃碗

533


534


535

536

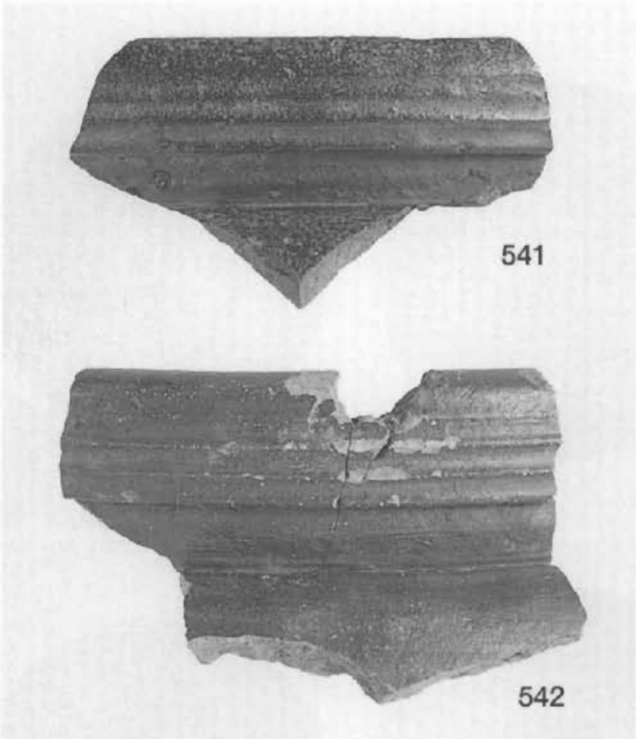
537

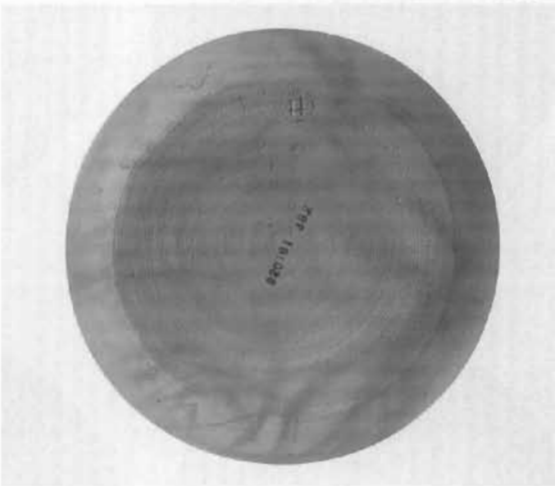
538

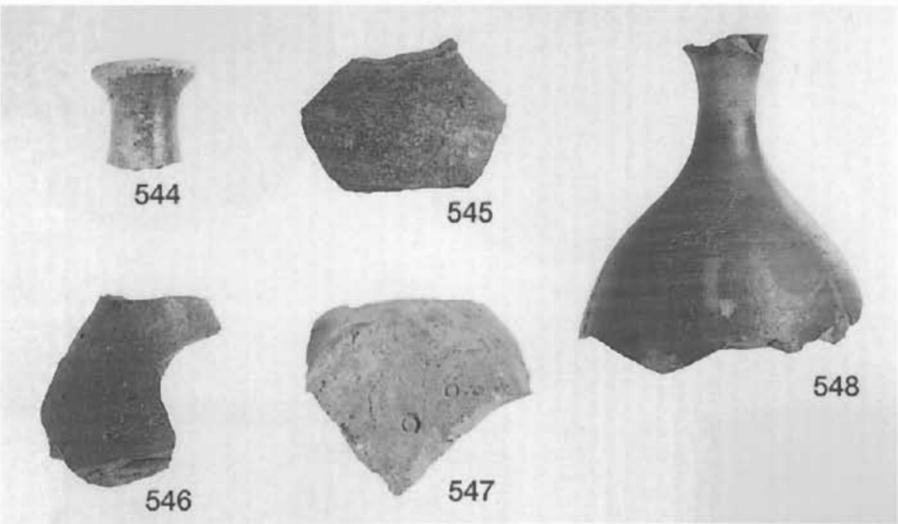
539

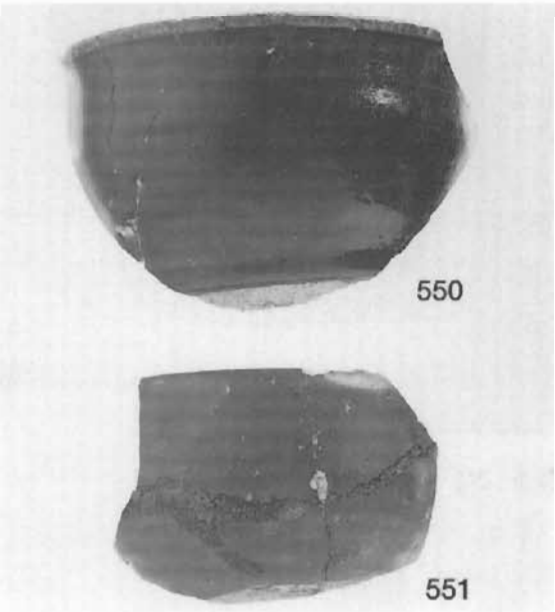
540

陶磁器(29)　丹波蓋・甕



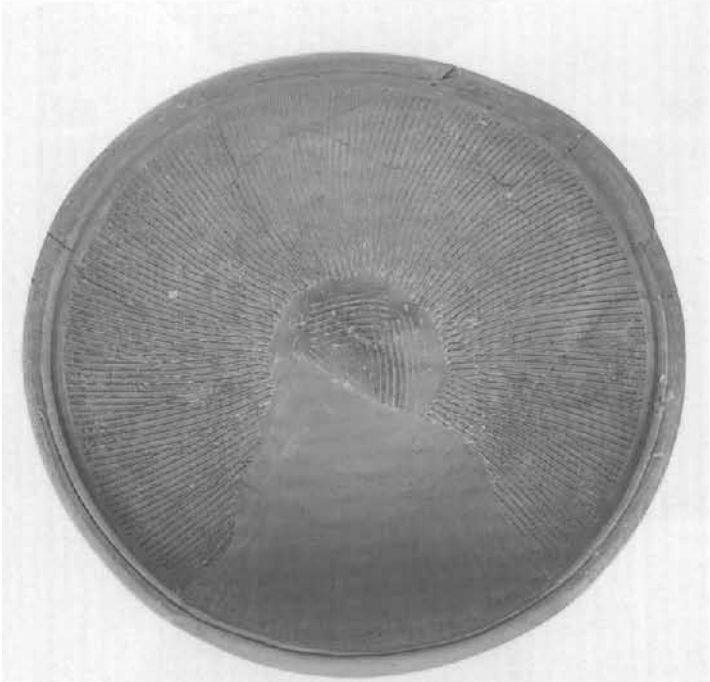


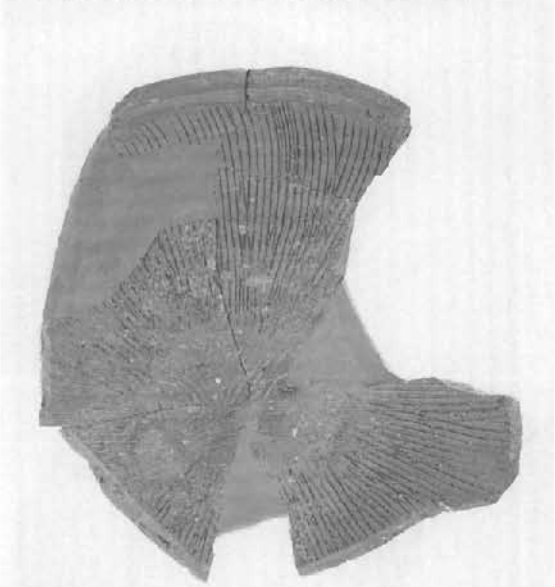




陶磁器(30)　備前甕・徳利他・瀬戸美濃碗

553

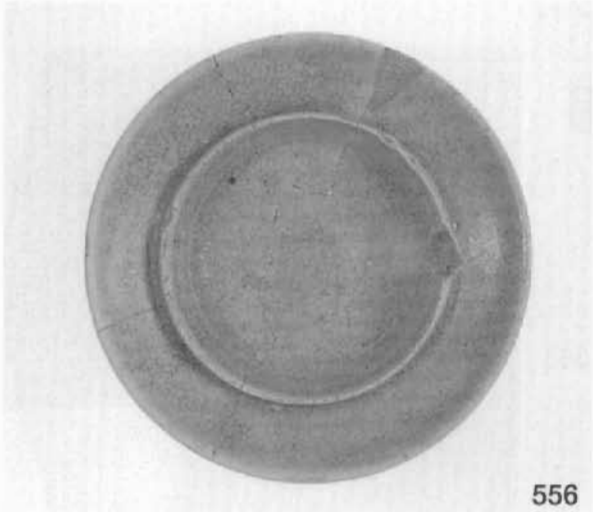


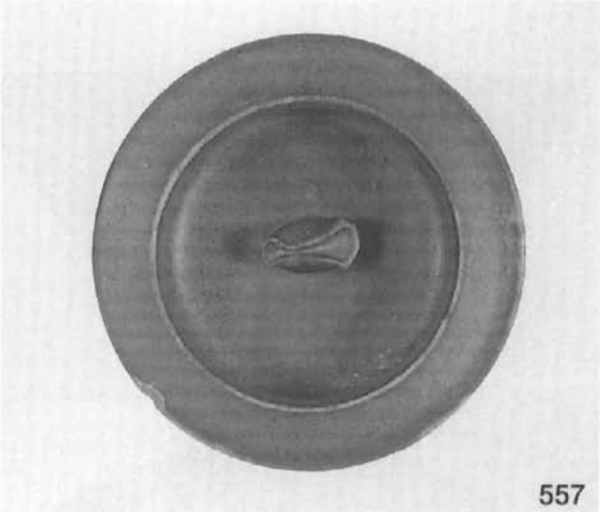


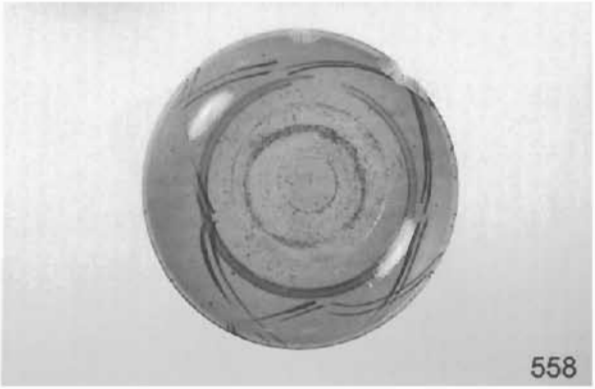
554

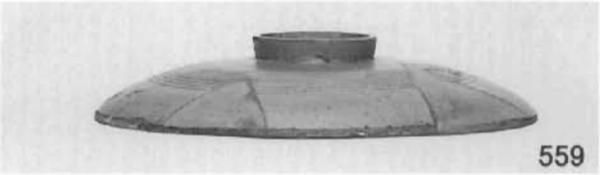
555

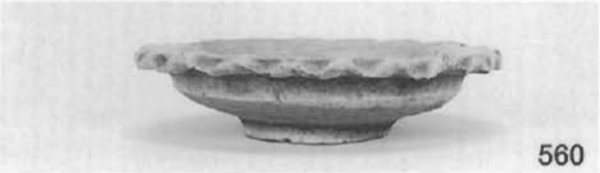
陶磁器(31)　擂鉢

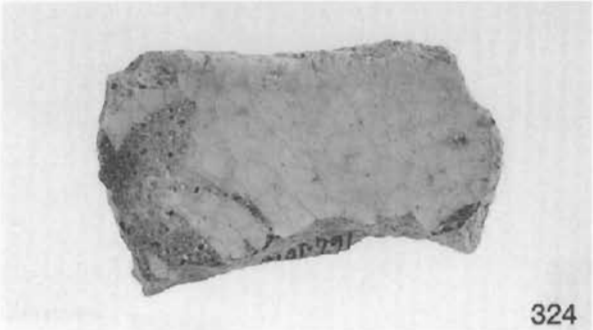

556

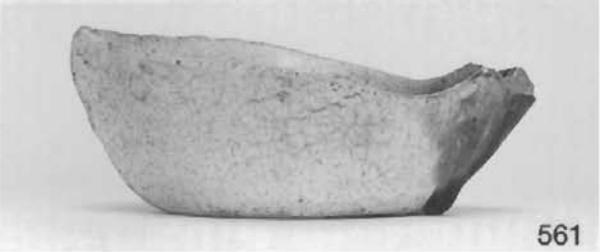

557


558


559


560


324


561

562

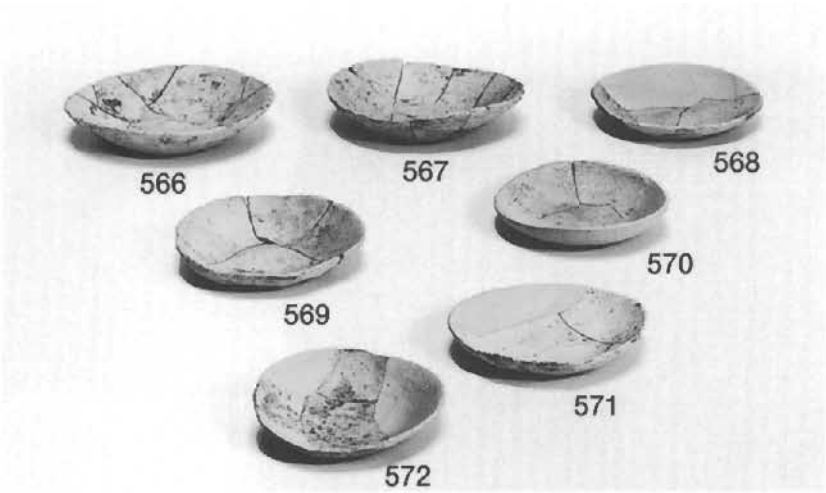
563

陶磁器(32)　瀬戸美濃・志野他

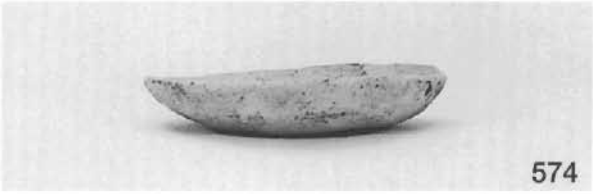
564

565

陶磁器(33)　甕

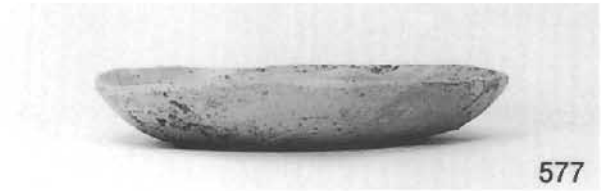

566
567
568
569
570
571
572

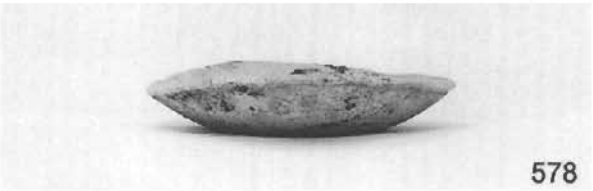
573


574

575

576


577


578

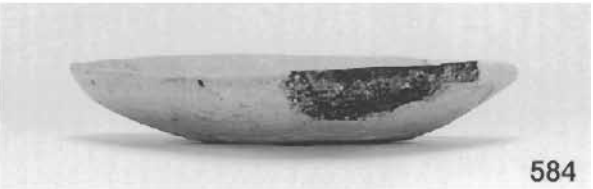
579

580

581

582

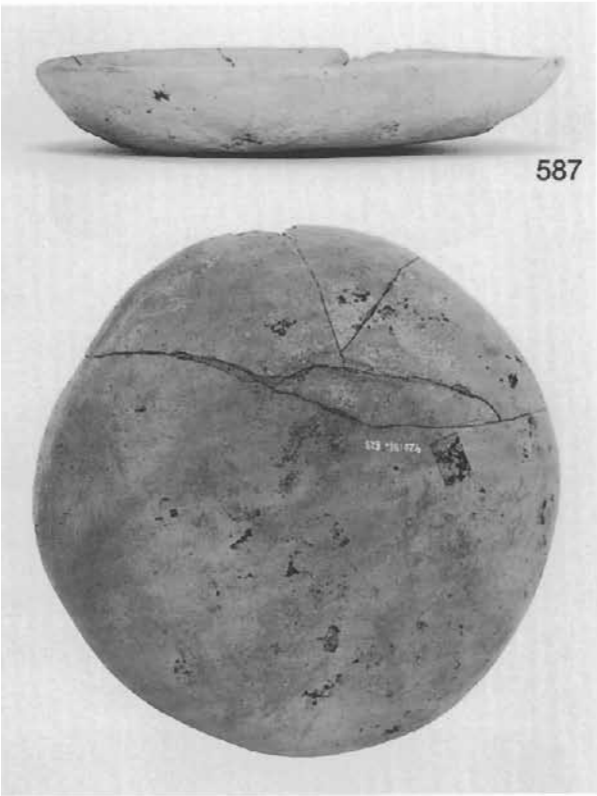
583

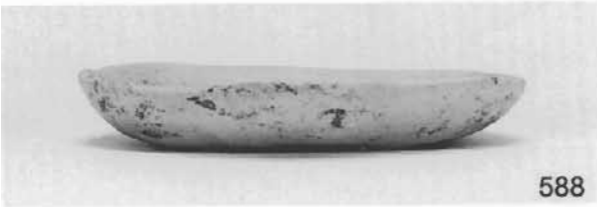

584

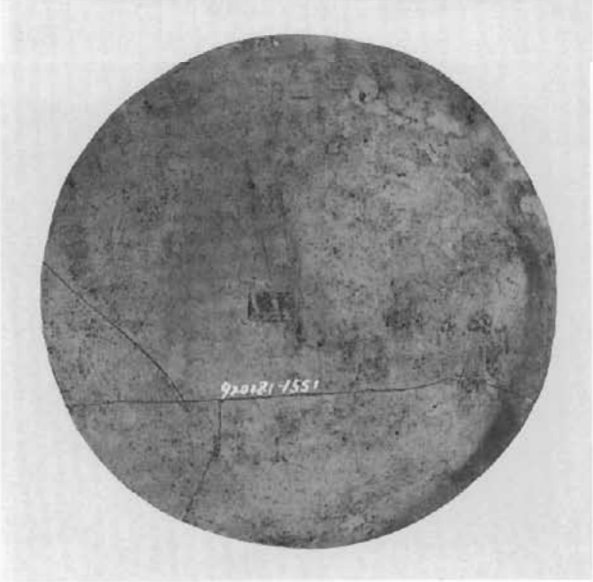
585

586

土師器皿（1）





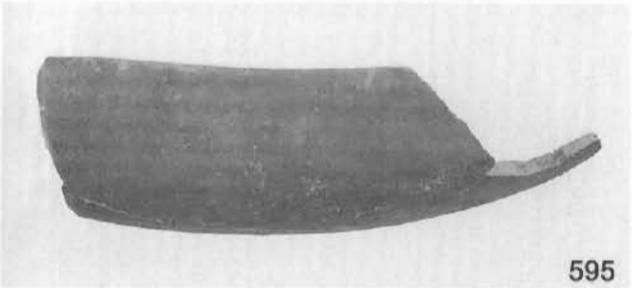


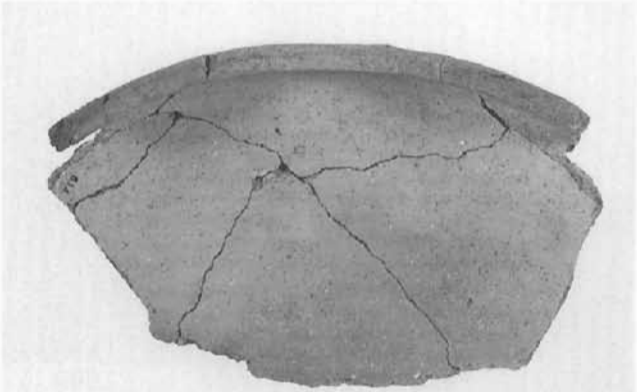
土師器皿(2)

592

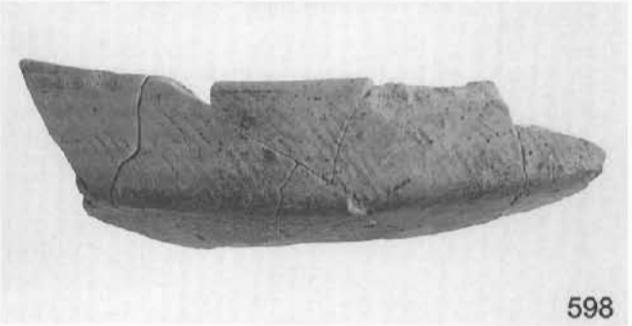
593

594


595


596

597

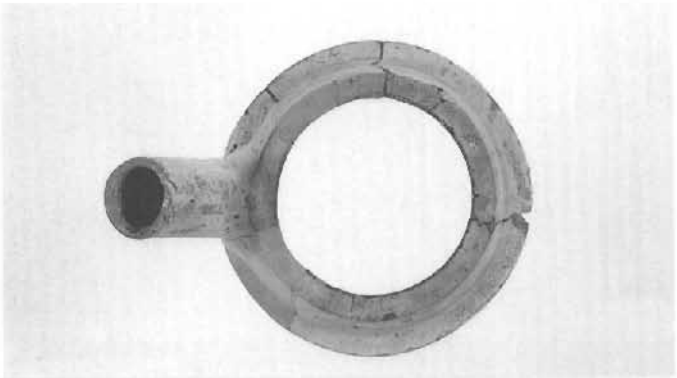

598

599

600

601

土師器鍋・焙烙・焼塩壷



602

605

603

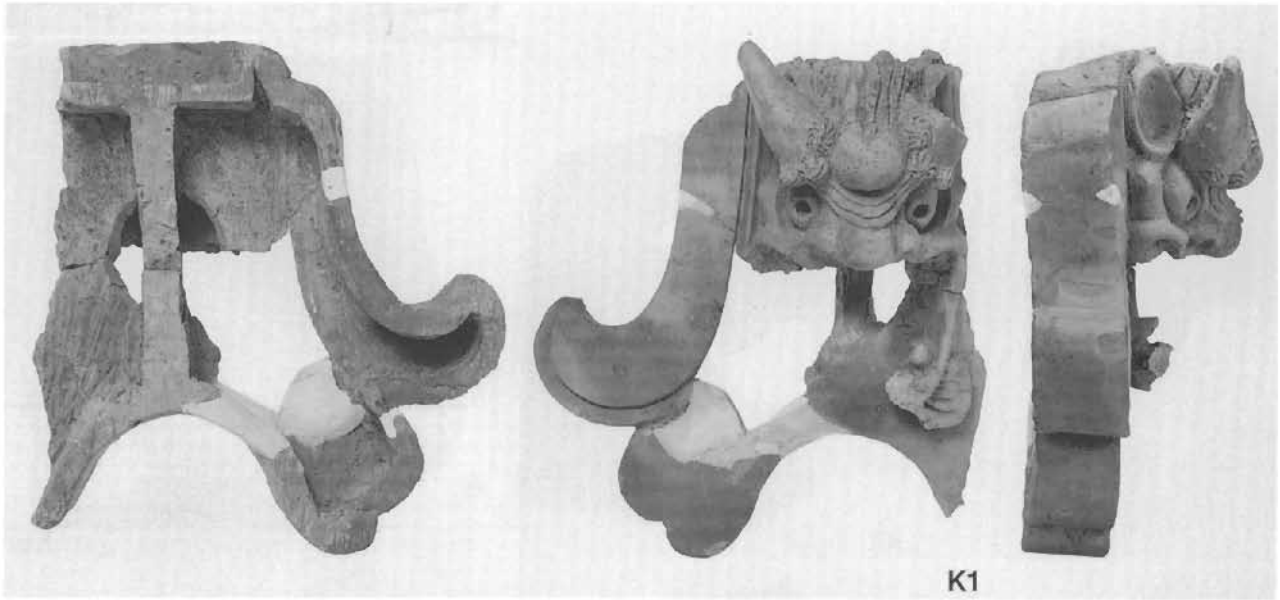
604

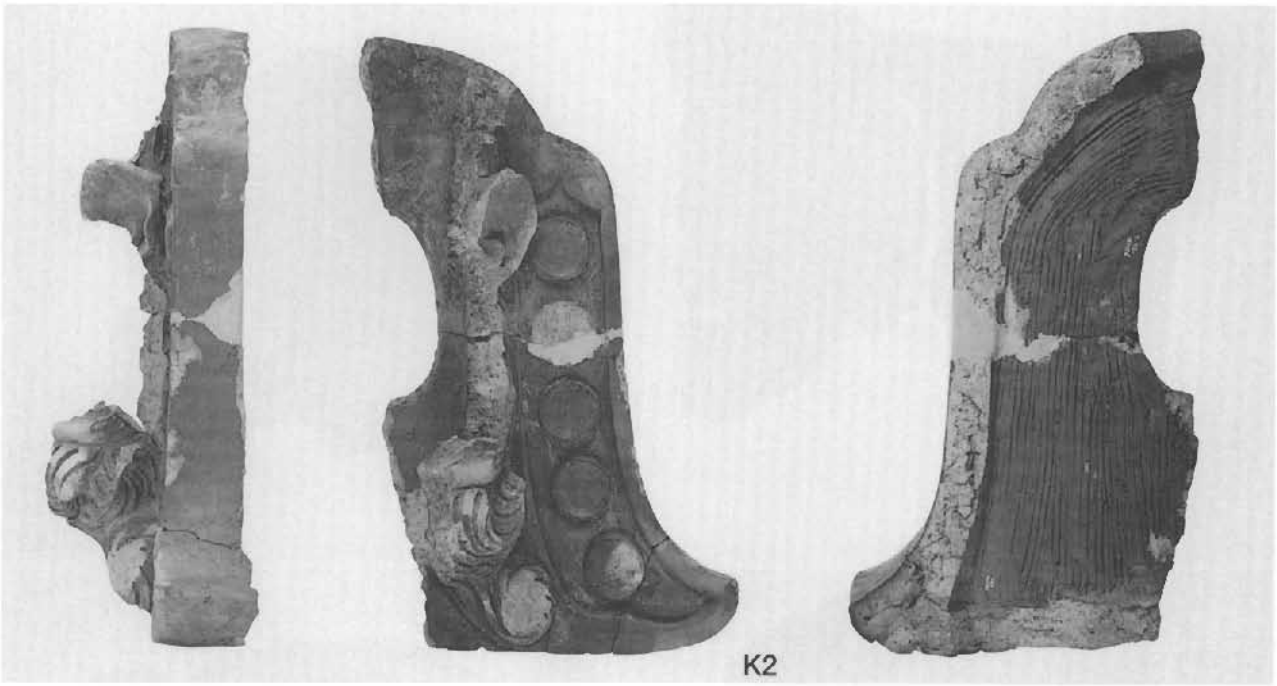
606

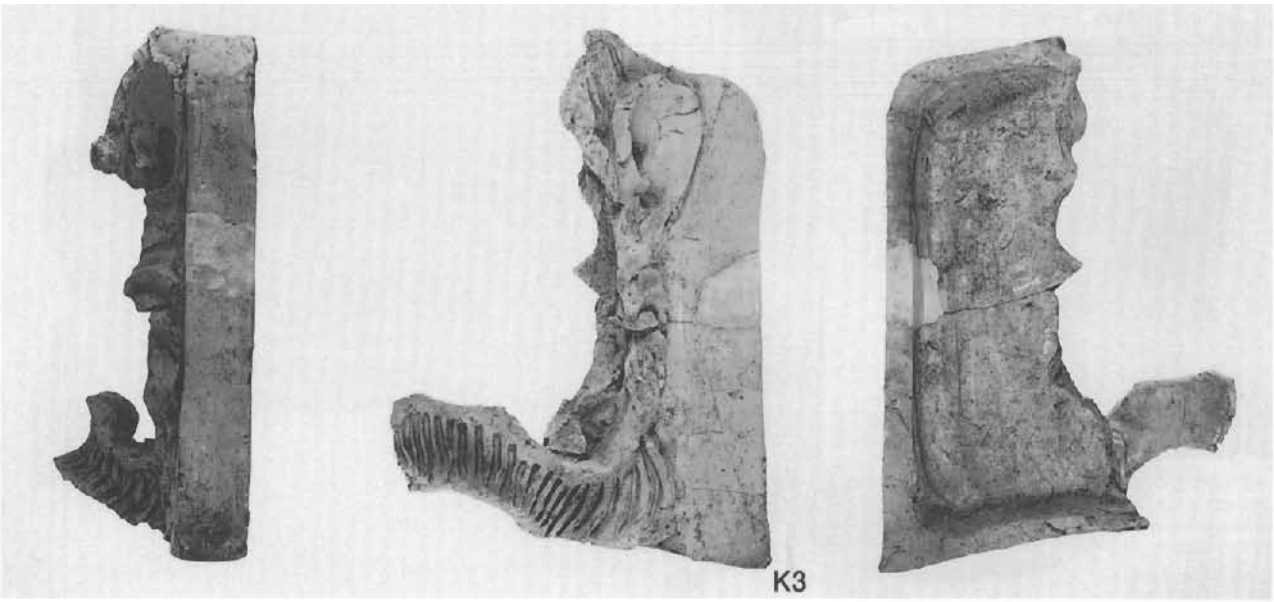
607

土師器火鉢・灯明皿・灯明台・こんろ他

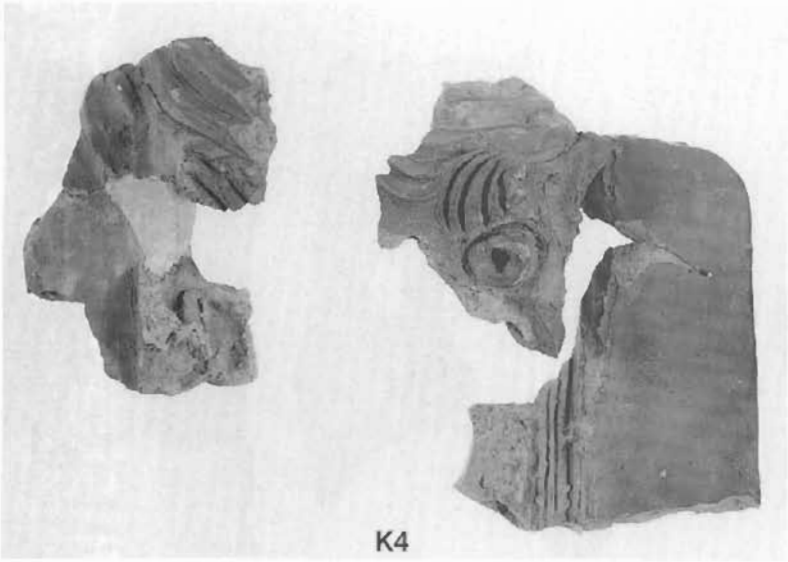
陶磁器(34)　白磁碗・近現代燭台・香炉・花瓶

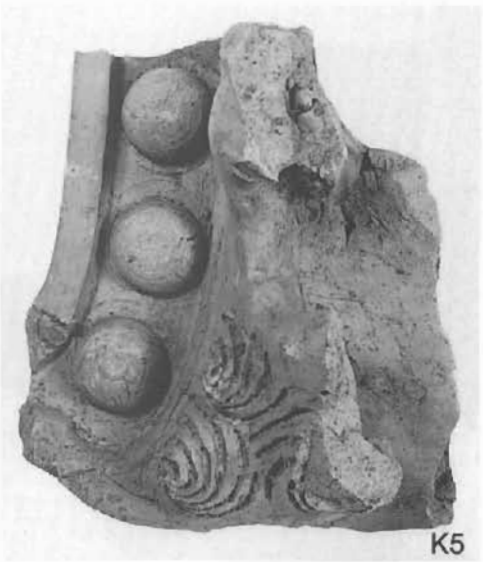






鬼瓦(1)


K4

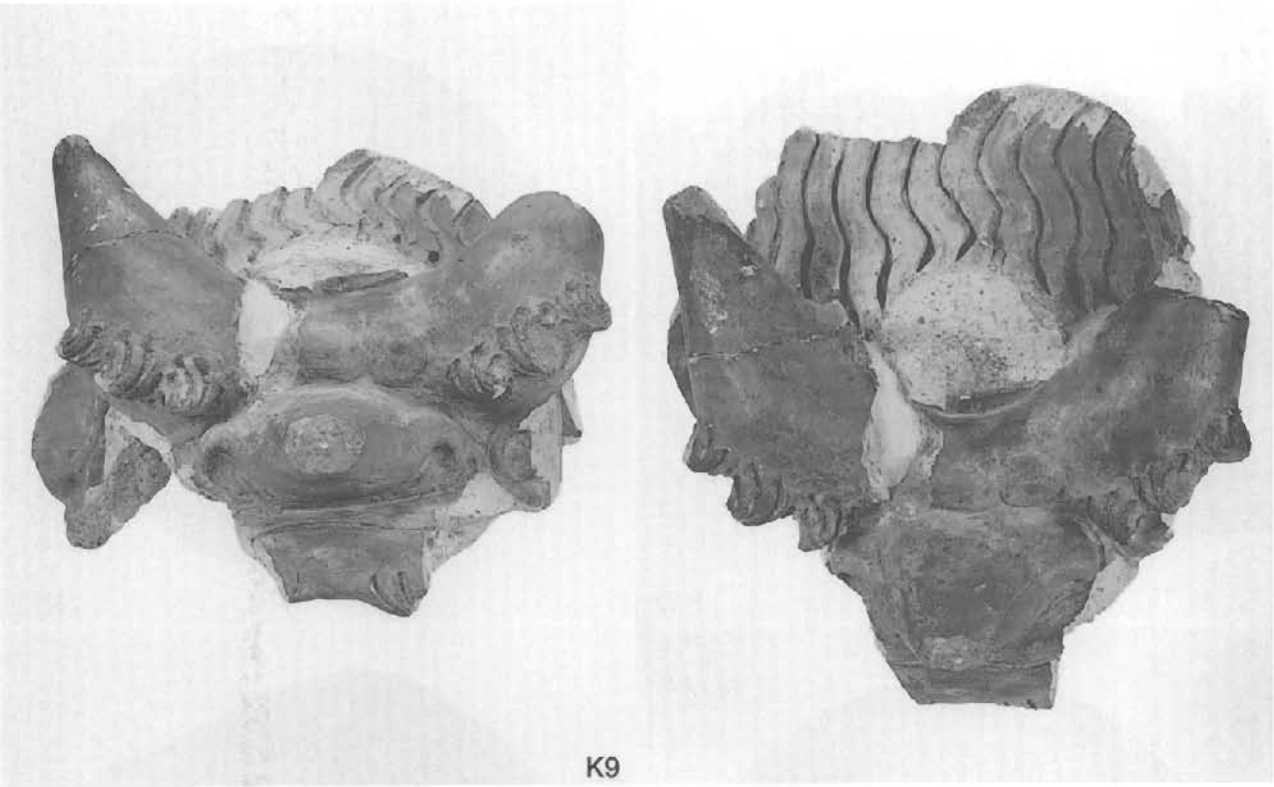

K5

K6

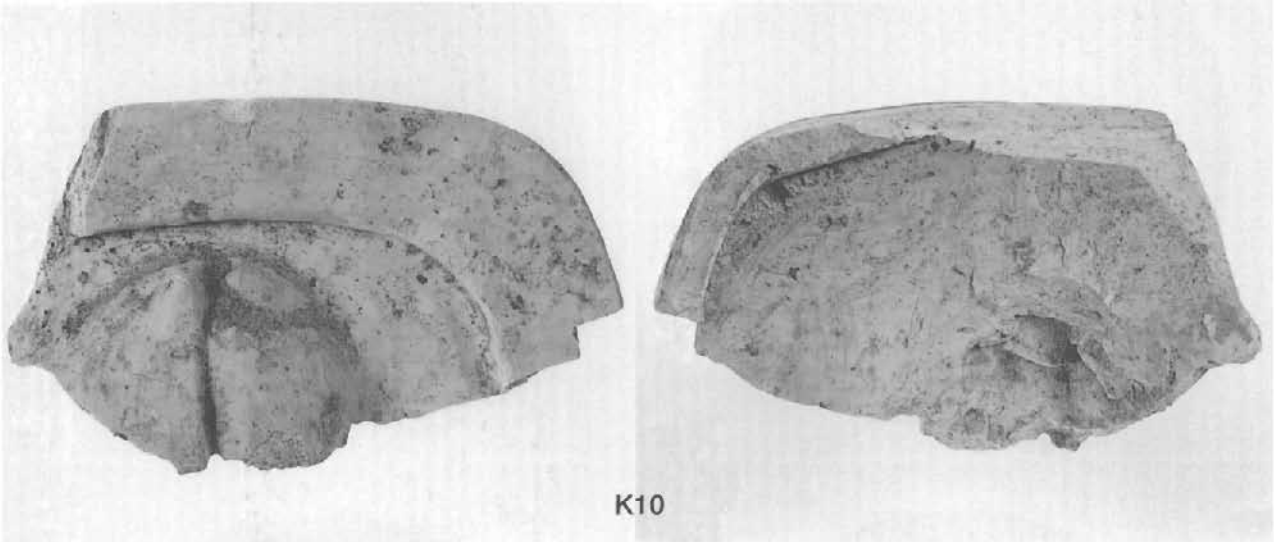
K7

K8

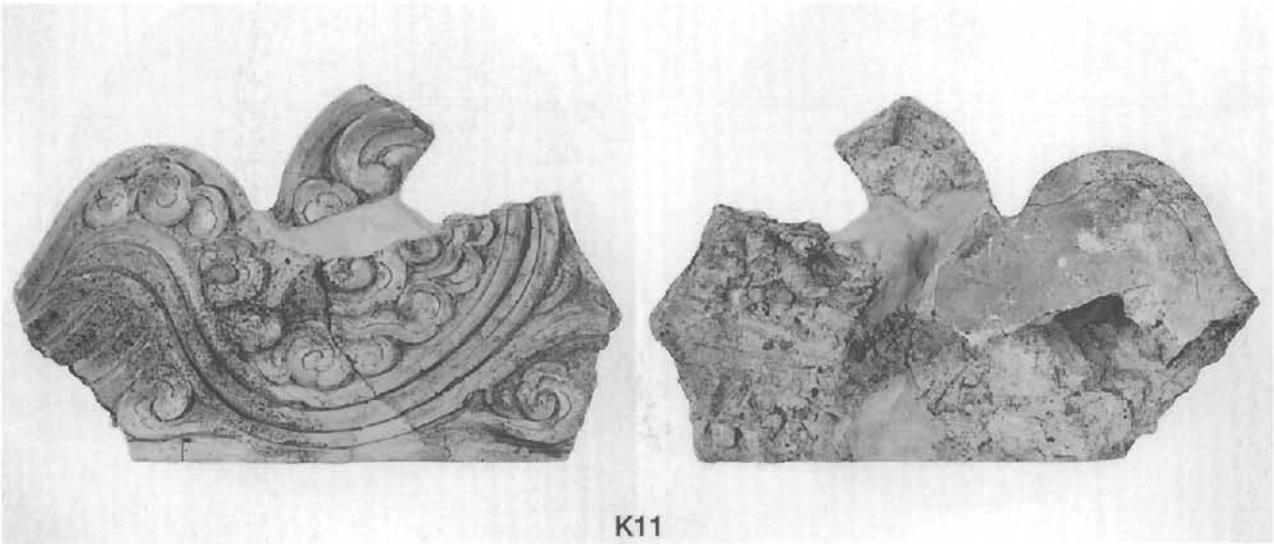
鬼瓦(2)



K9



K10



K11

鬼瓦(3) 他

K12

K13

K14

K15

K16

K17

軒丸瓦(1)

K18

K19

K20

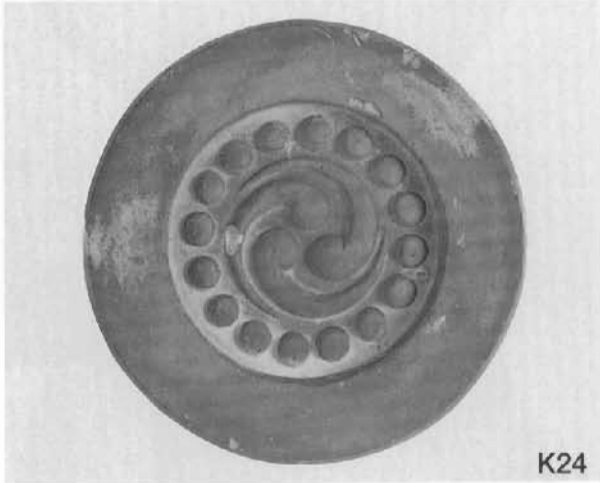
K21

K22

軒丸瓦(2)

K23

K27


K24

K28

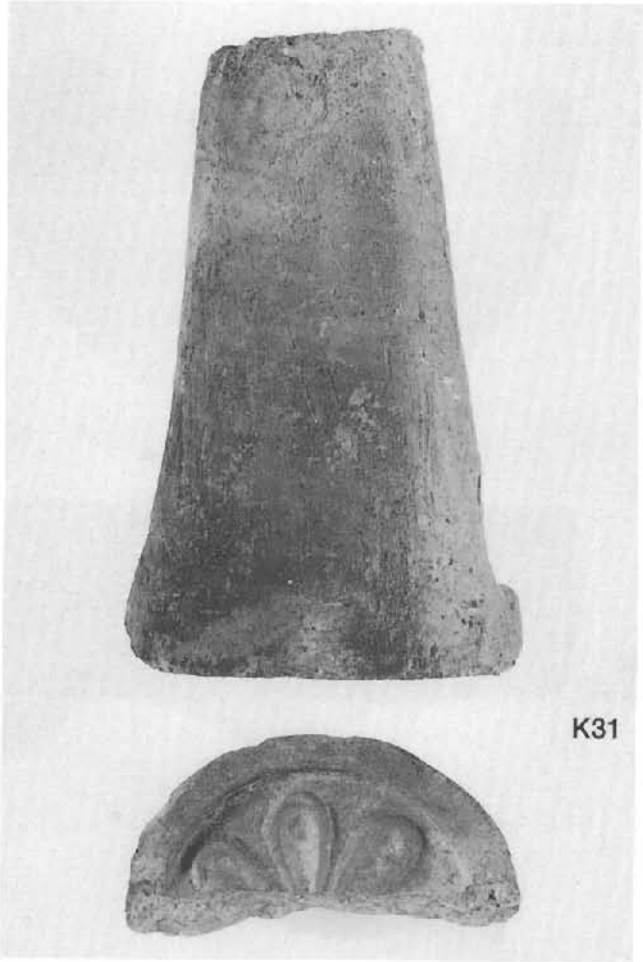
K25

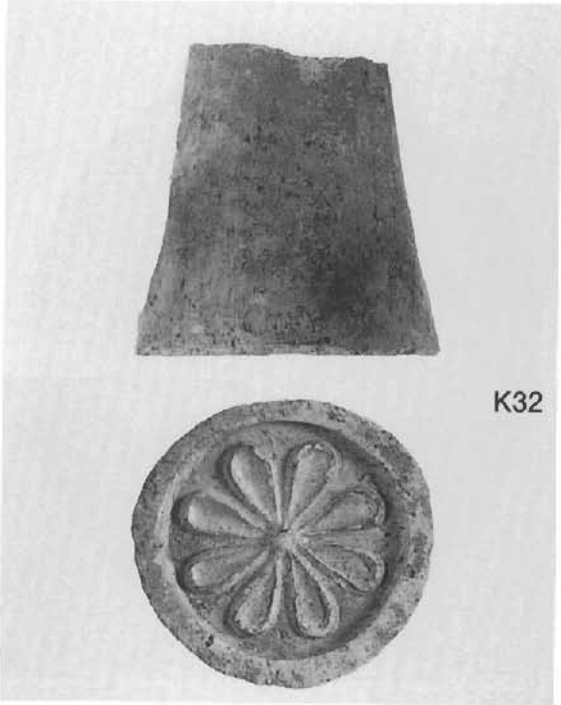
K29

K26

K30

軒丸瓦(3)

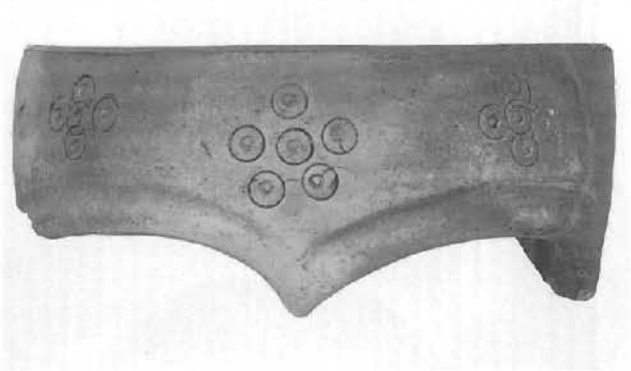




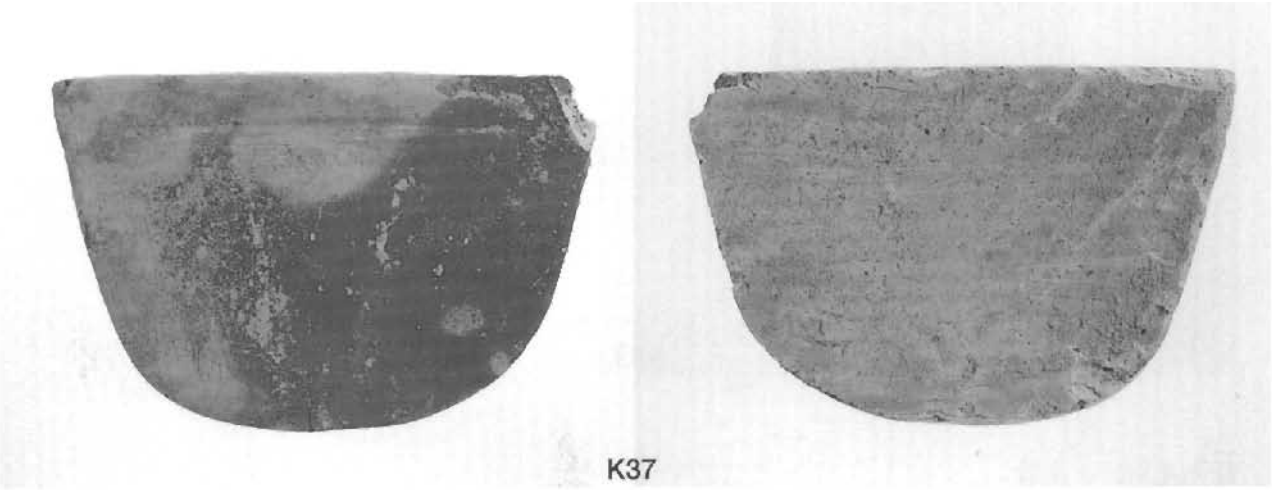
軒丸瓦(4)　・土管

K34

K36



K35


K37

K38

K39

K40

K41

K42

K43

K44

K45

K46

K47

K48

K49

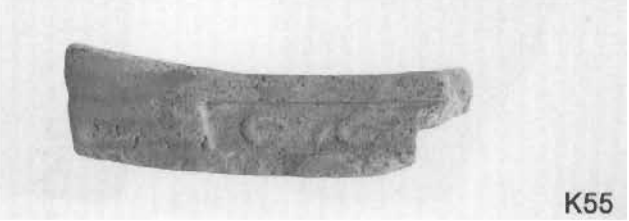
K50

K51

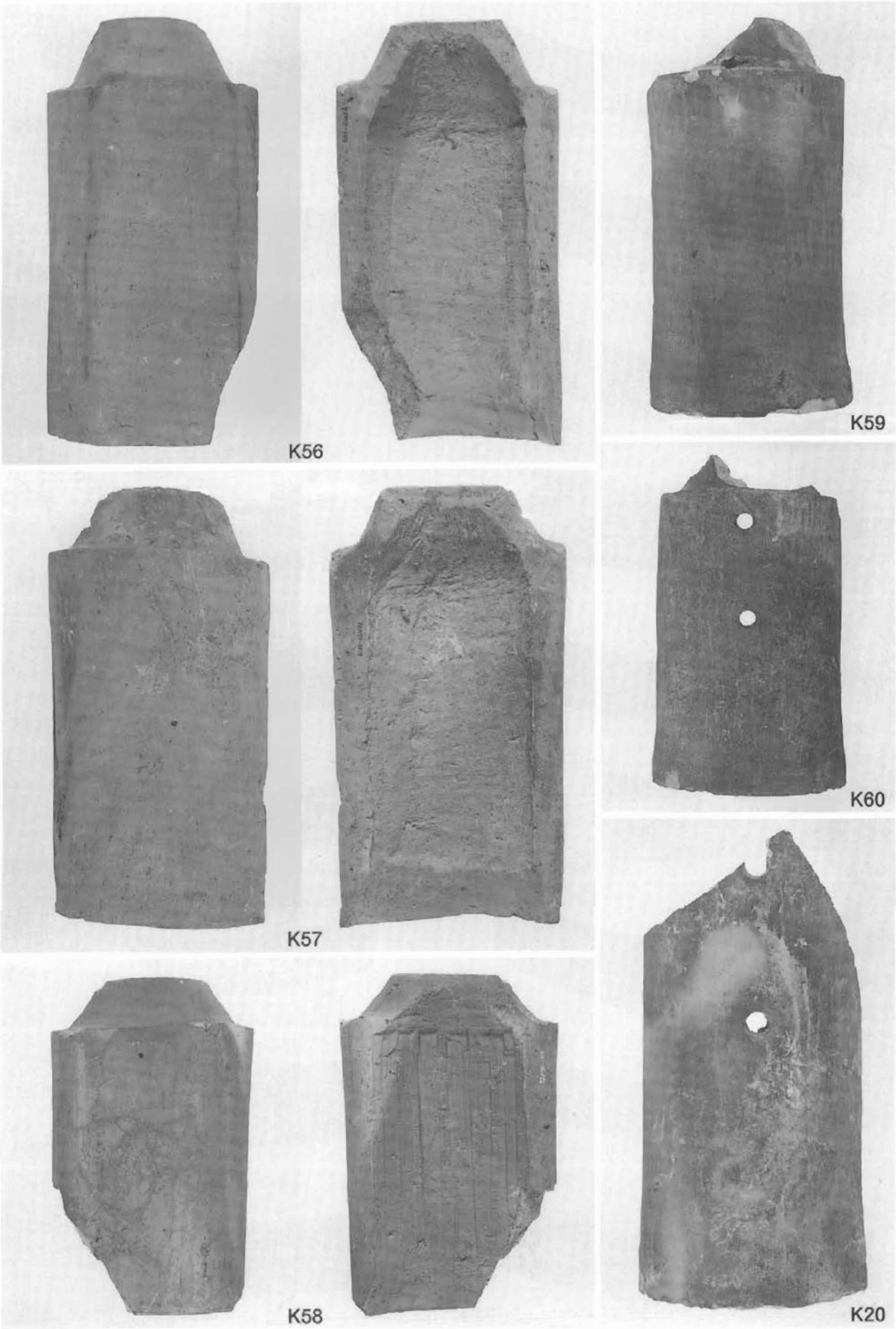
K52

K53

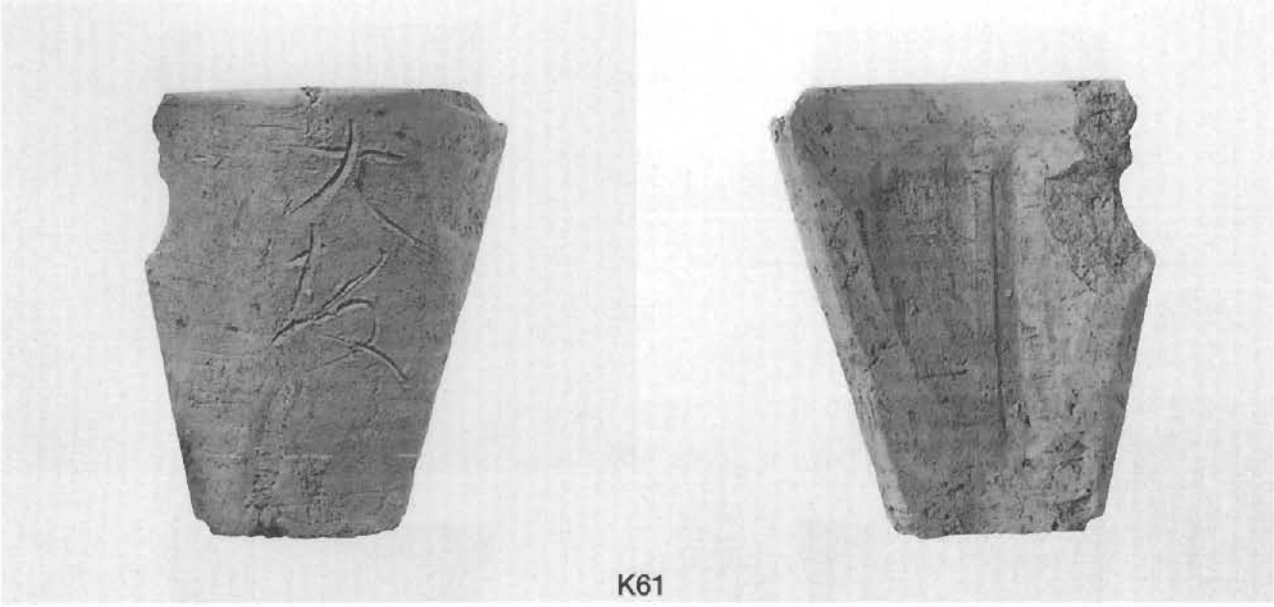
K54


K55

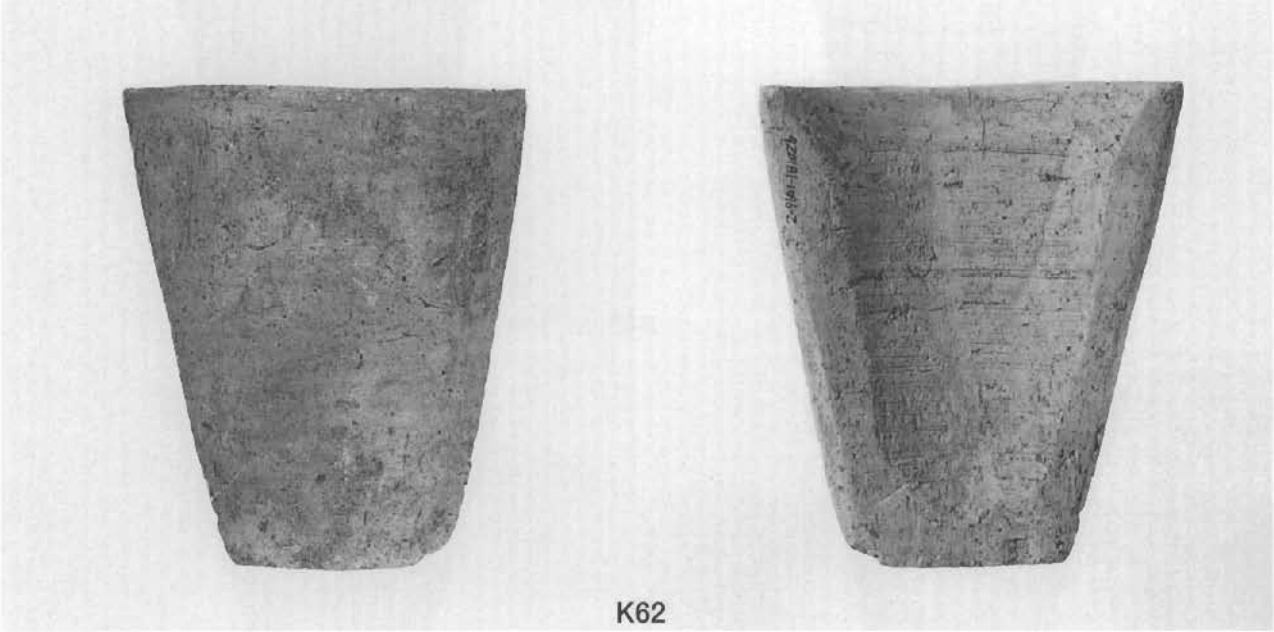
軒平瓦



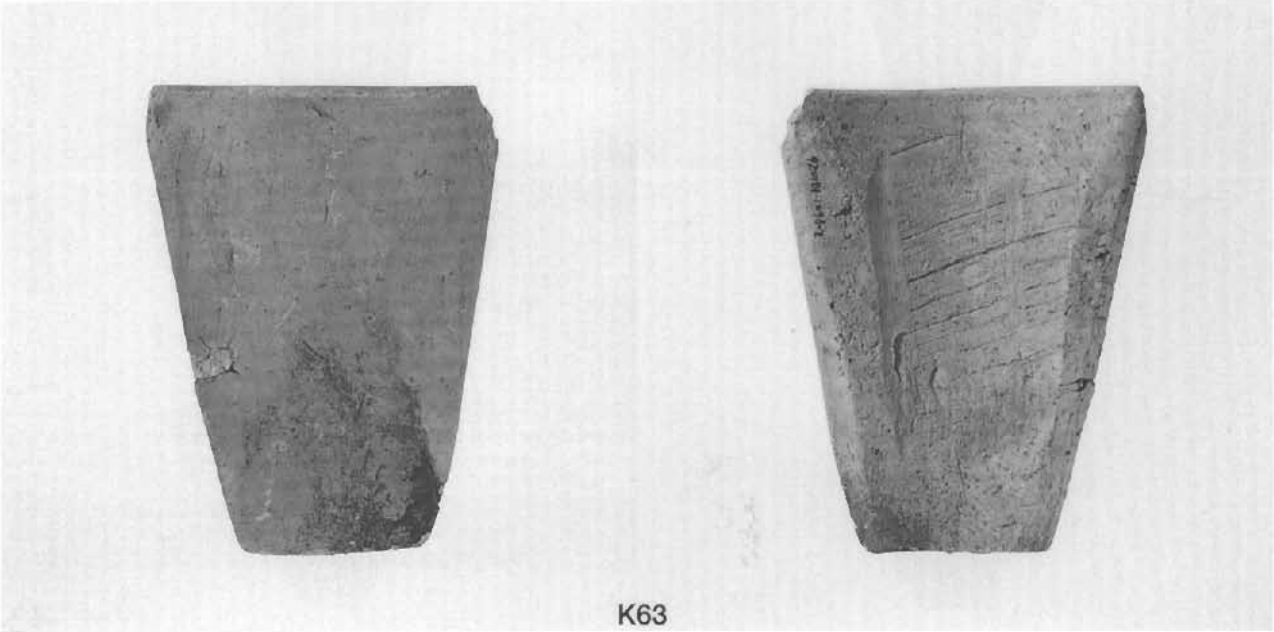
丸瓦(1)



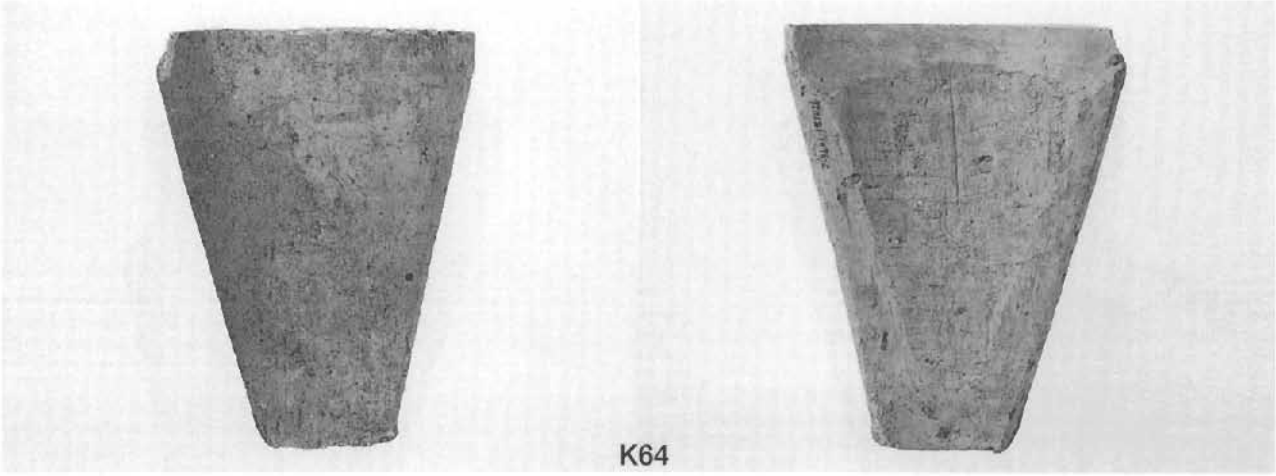
K61



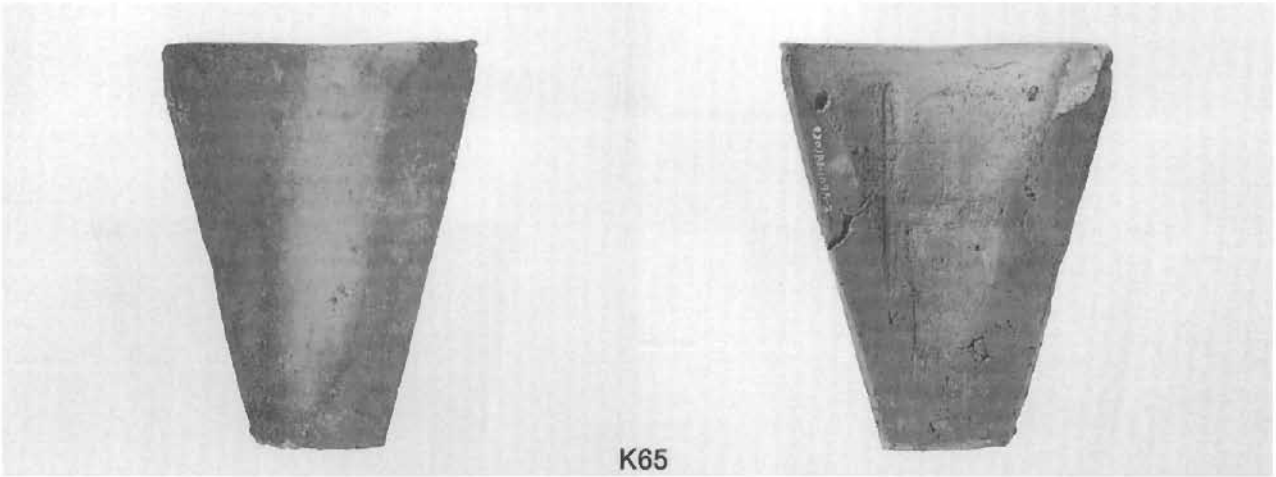
K62



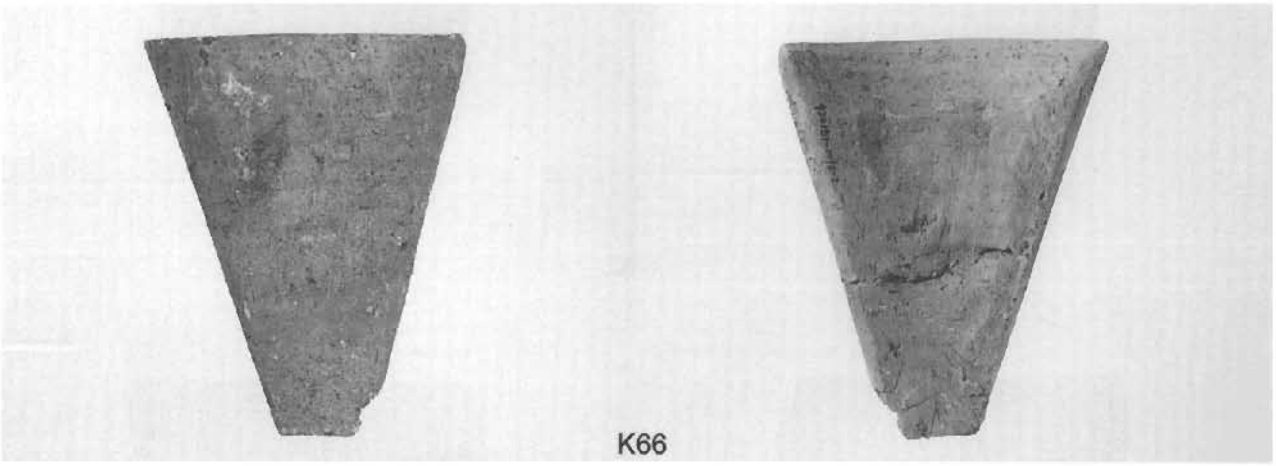
K63



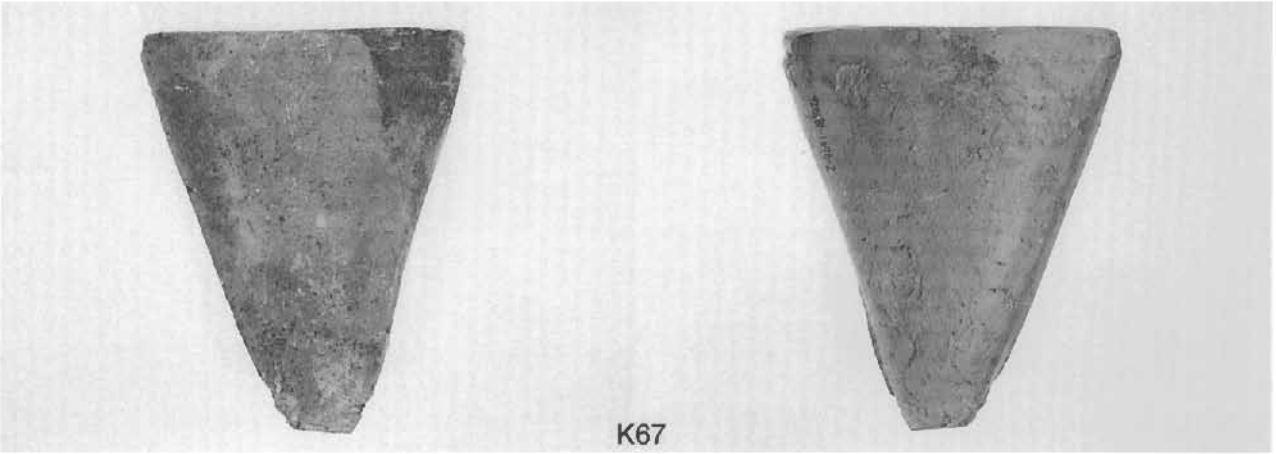
K64



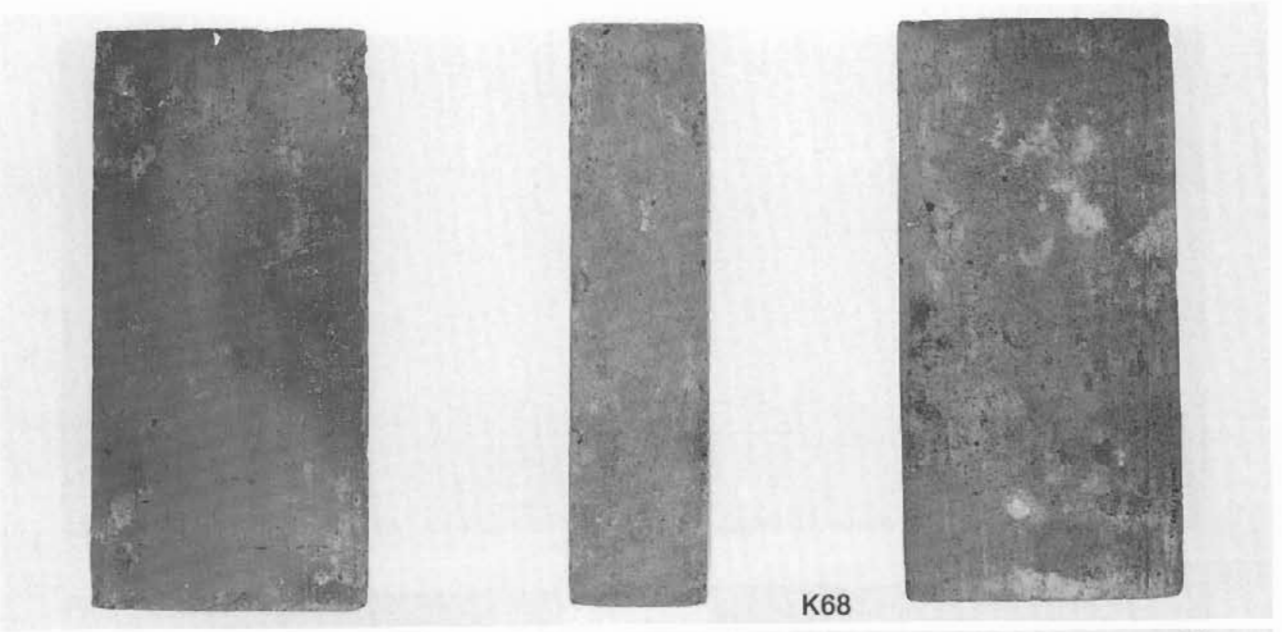
K65



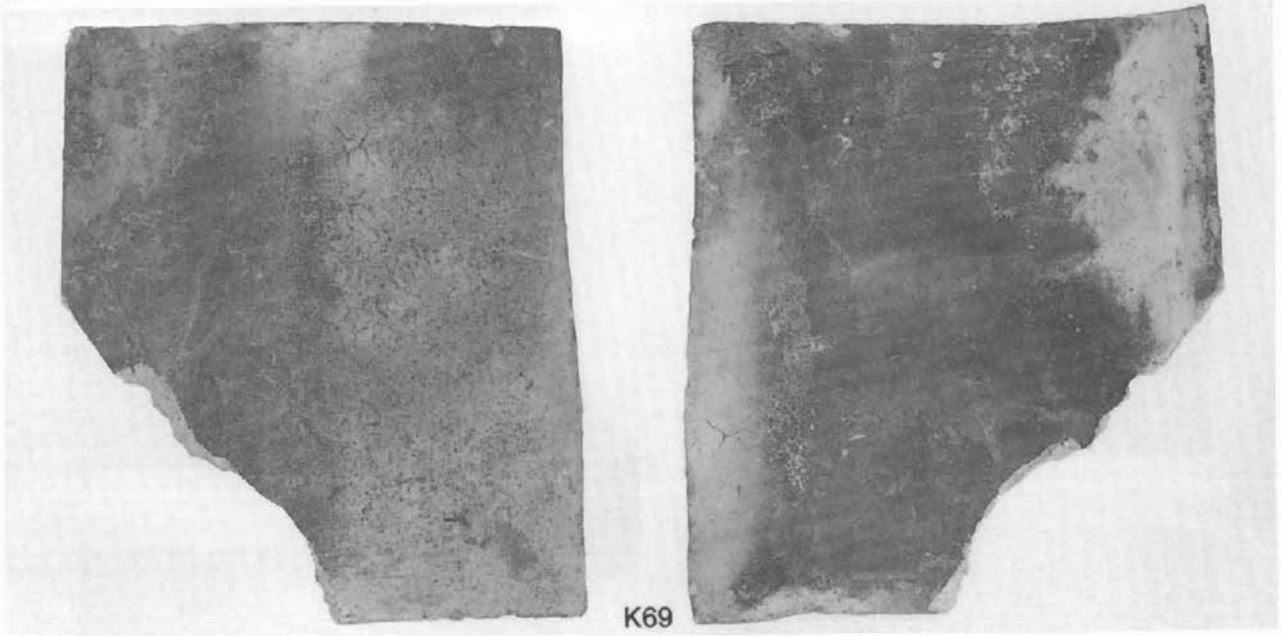
K66



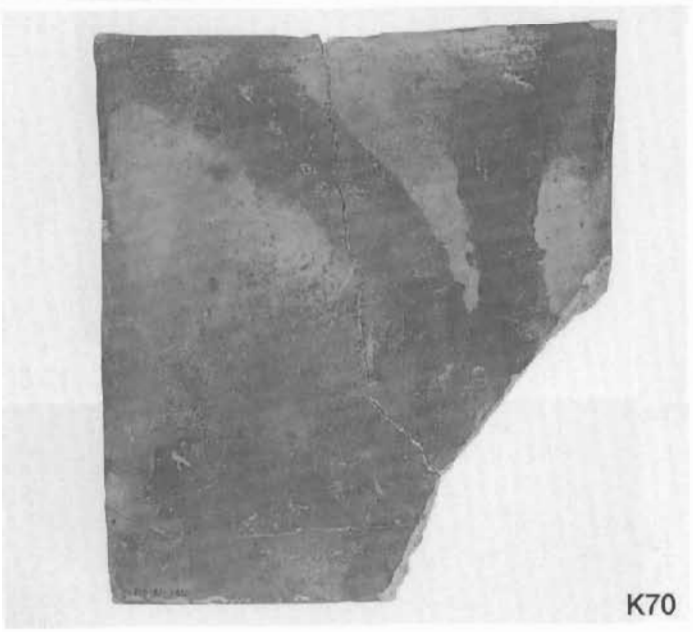
K67



K68

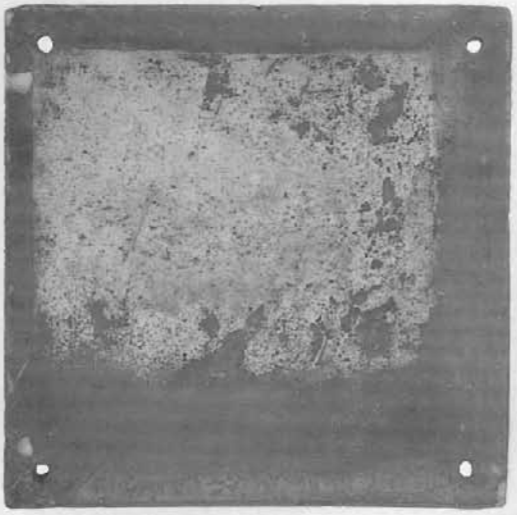
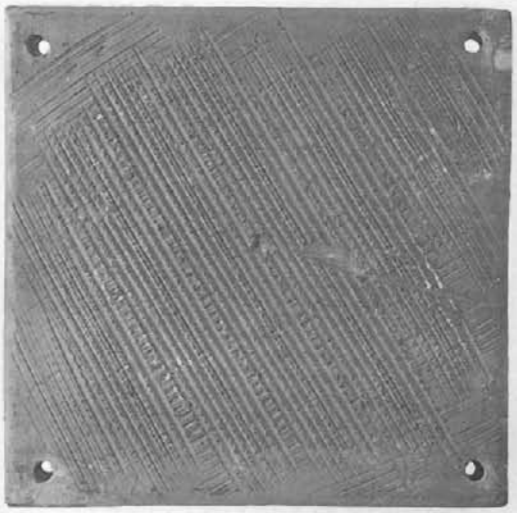


K69

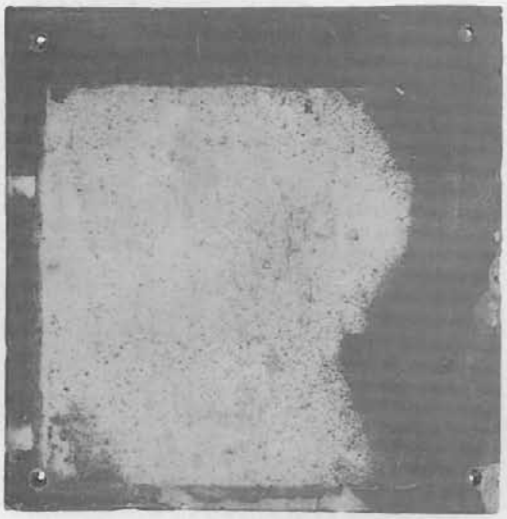
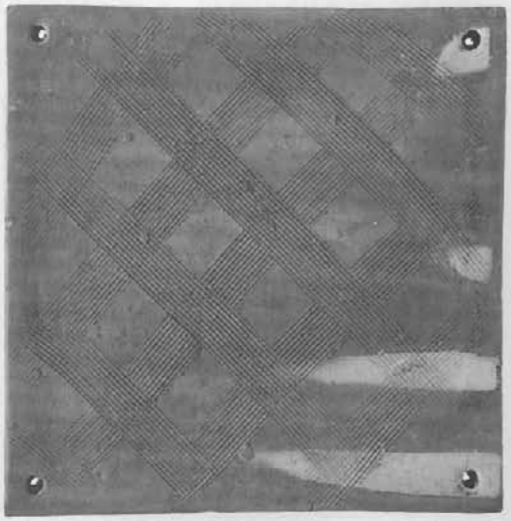


K70

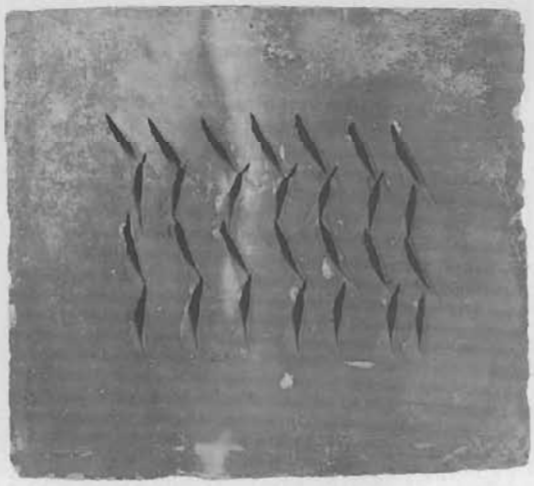
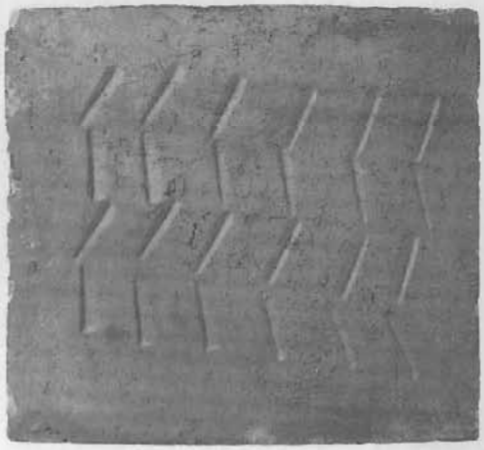
K71

K72

K73

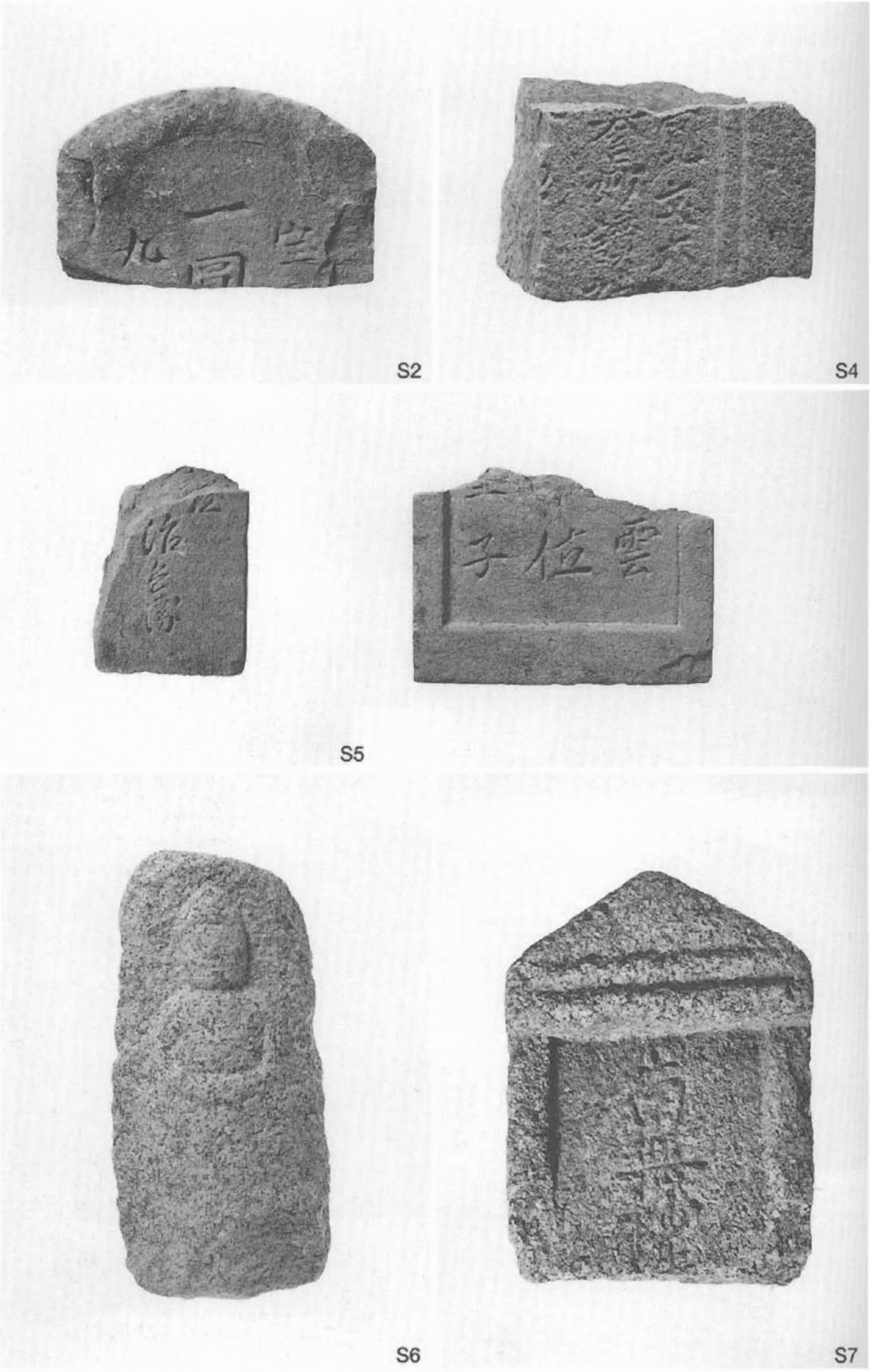
K75

K74

敷瓦・井戸瓦

S1

S3



墓石(2)　・石仏(1)　他

S8

S10

S11

S12

S9

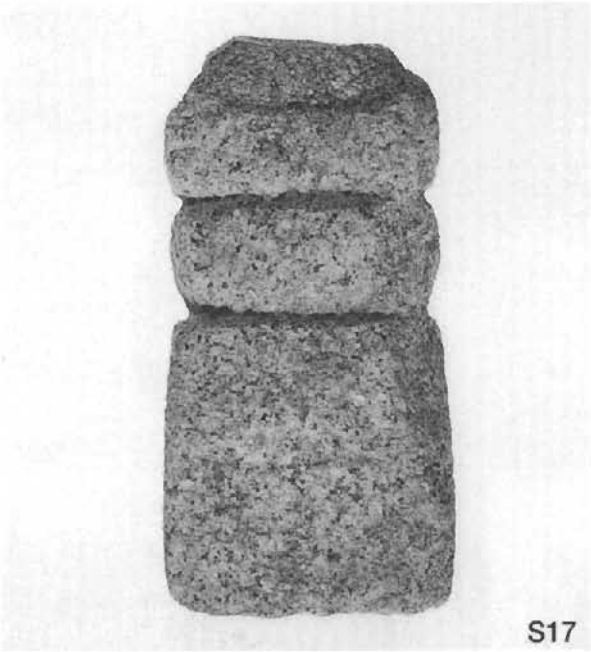
S13

S14

S15

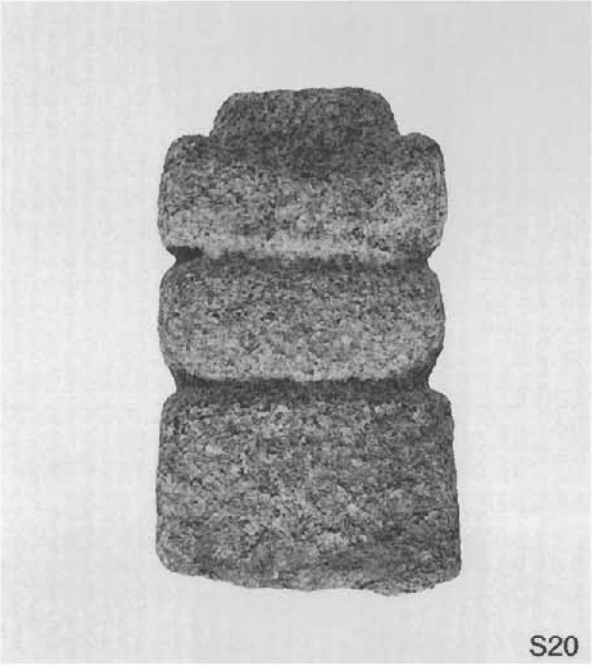
S16

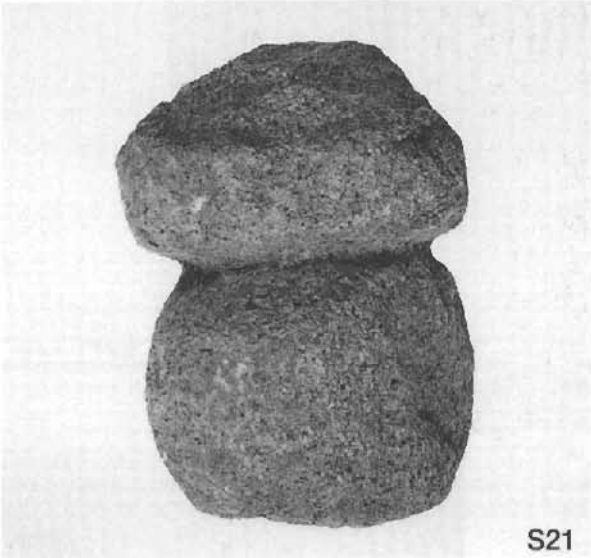
石仏(3)　・一石五輪塔(1)

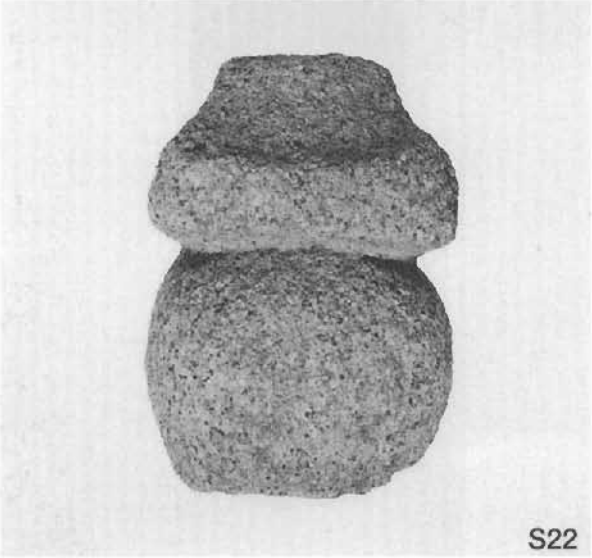

S17

S18

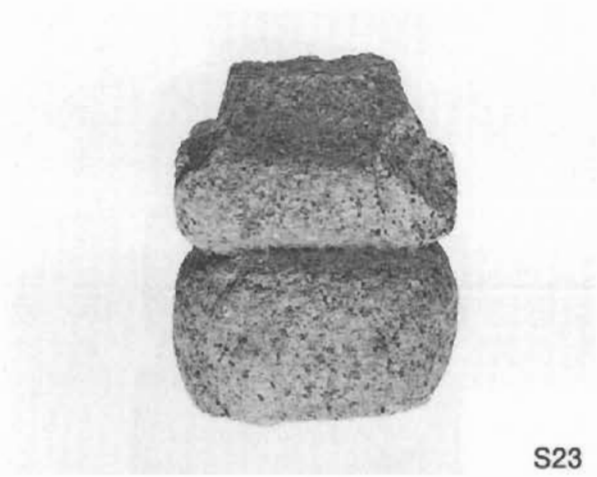
S19

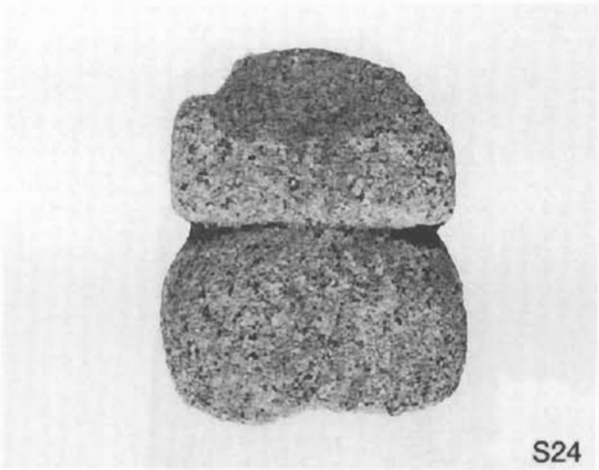

S20

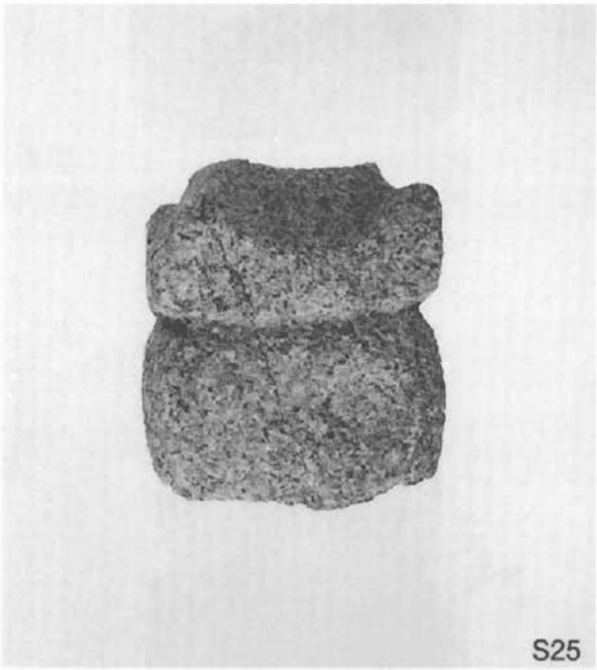

S21


S22

一石五輪塔(2)


S23


S24

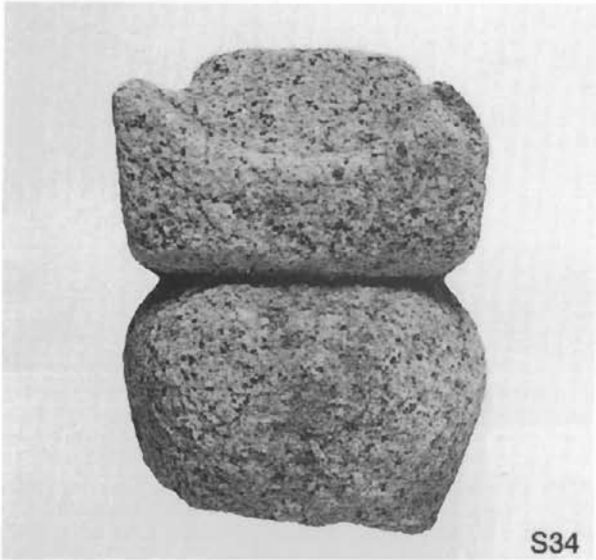

S25

S31

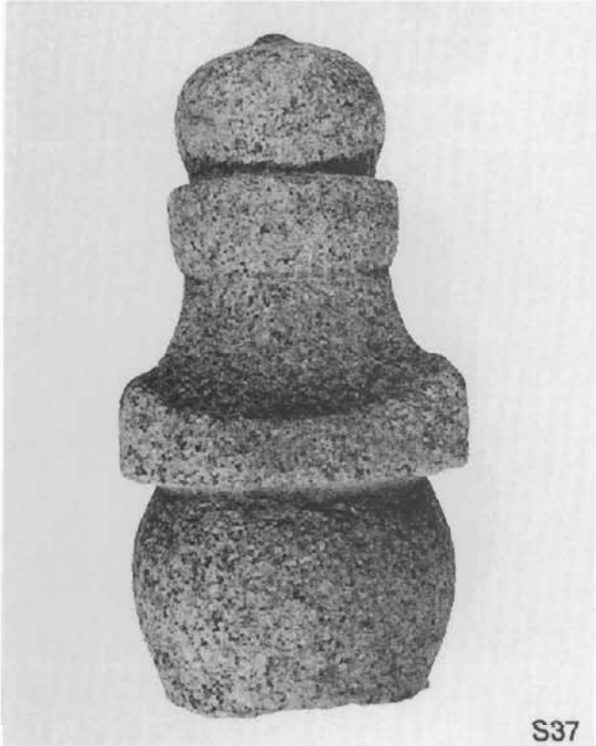
S32

S33

一石五輪塔(3)


S34

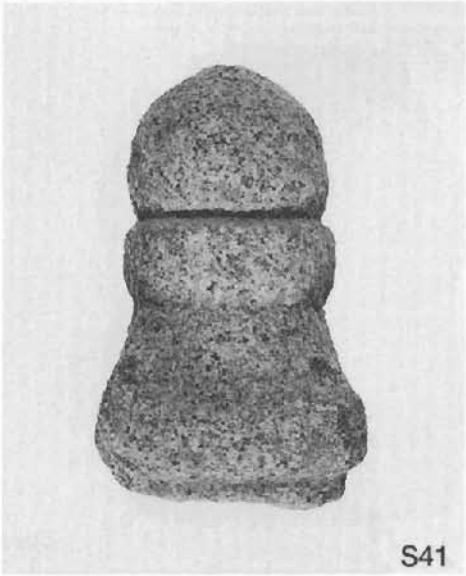
S35


S37

S38

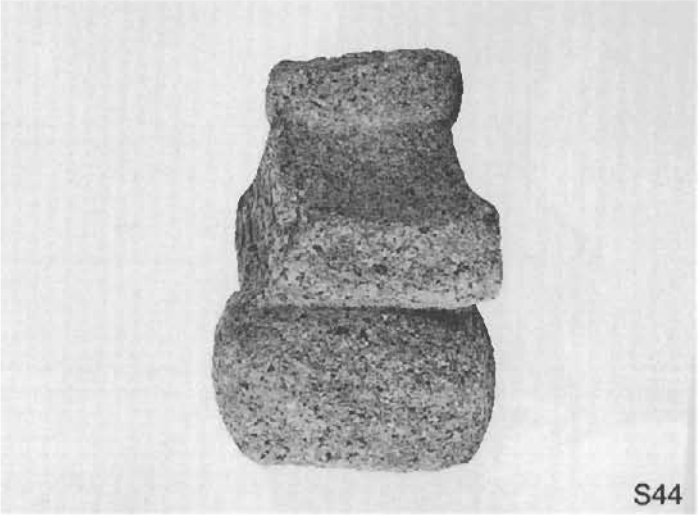
S39

S40

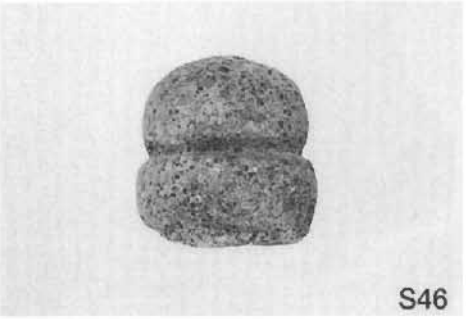

S41

S42

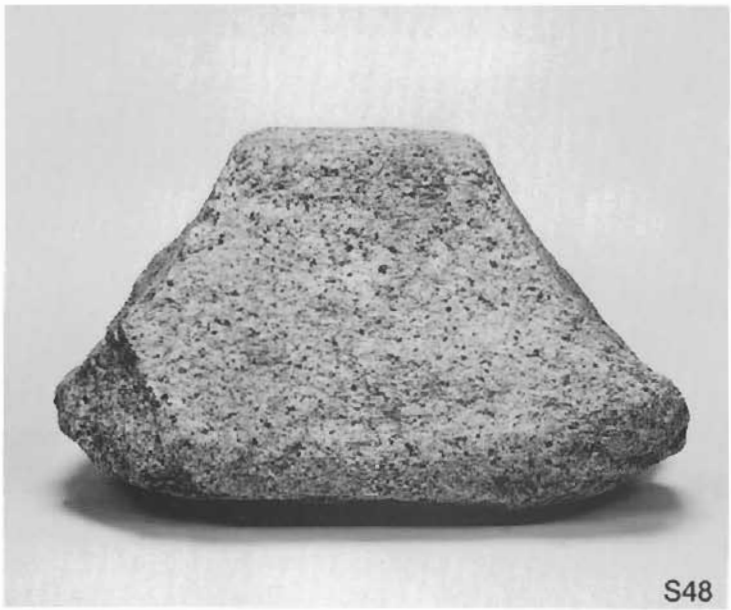
S43


S44

S45


S46

S47

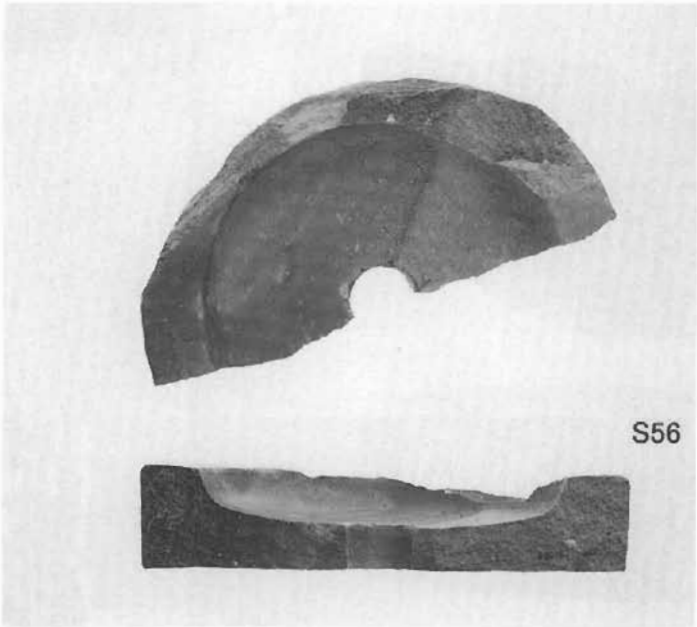

S48

S49

S50

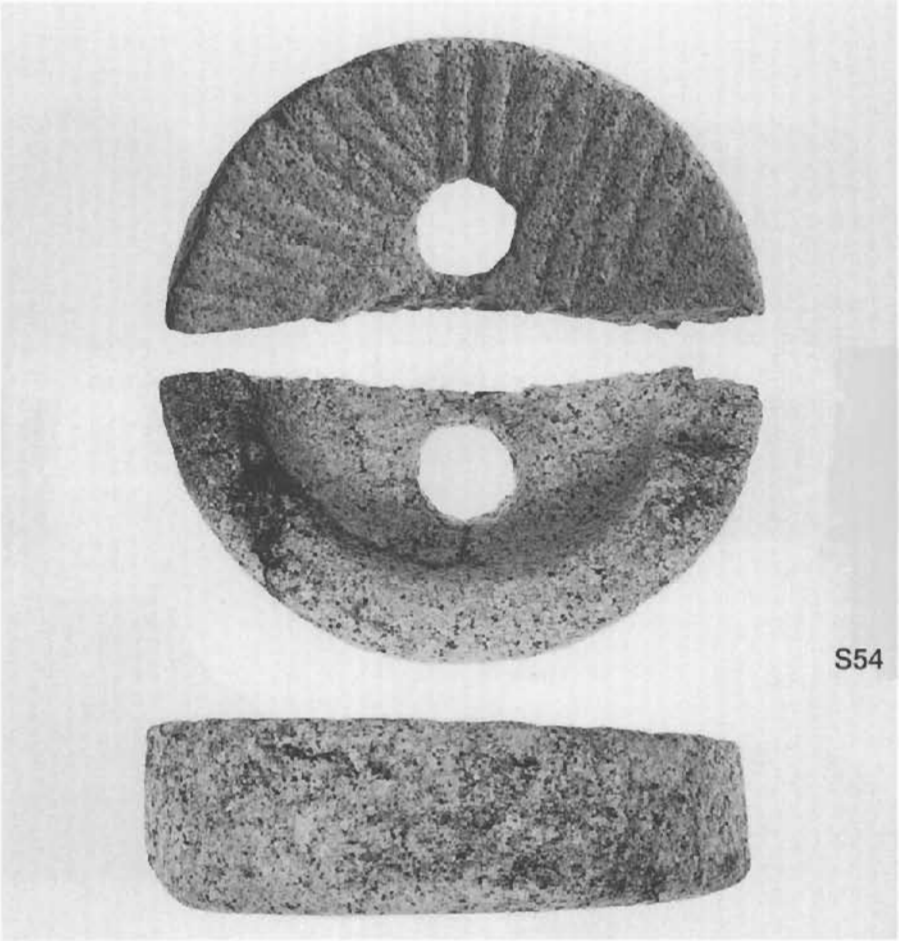
S53

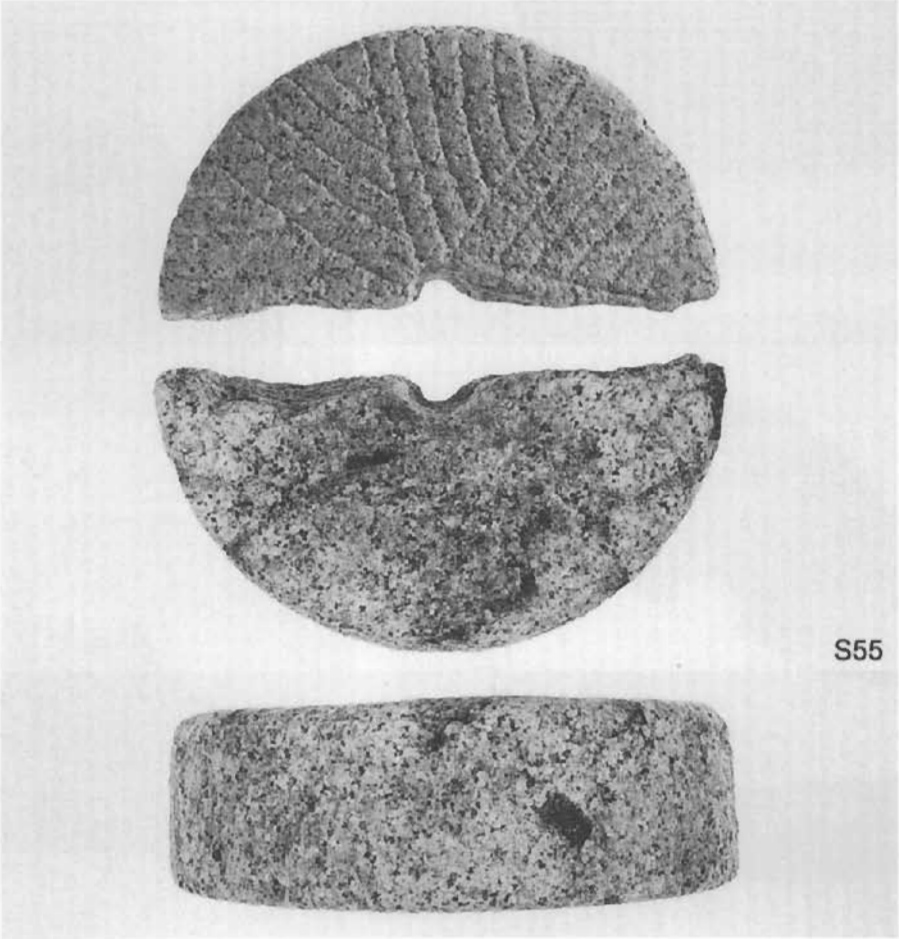
S51

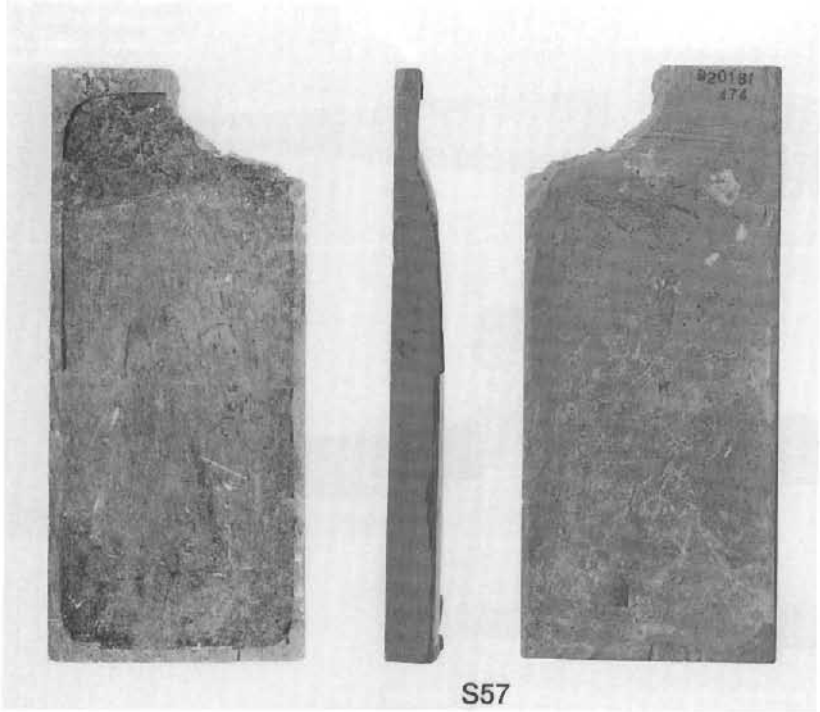

S56

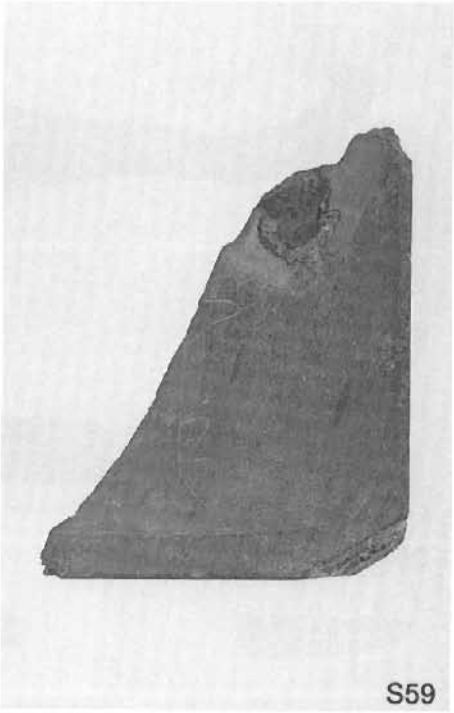
S52

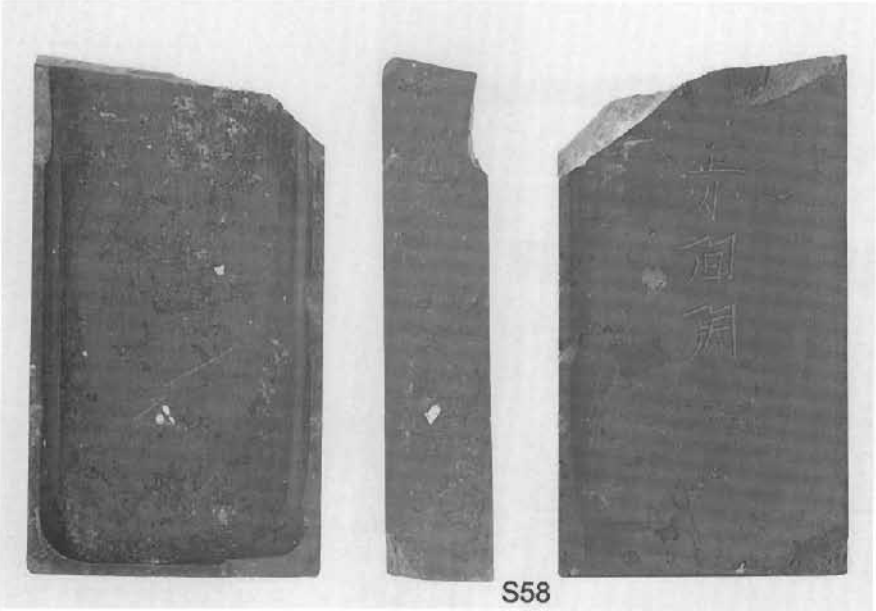
五輪塔(1)　・石臼(1)

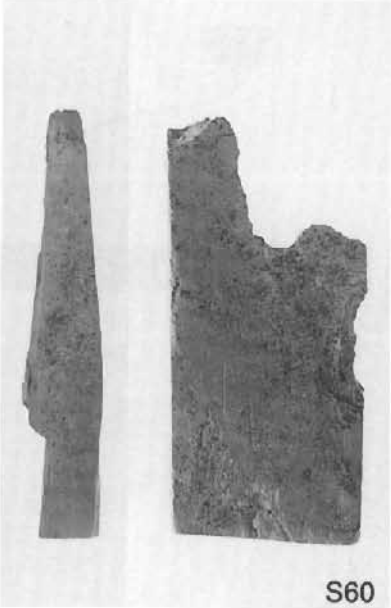

S54

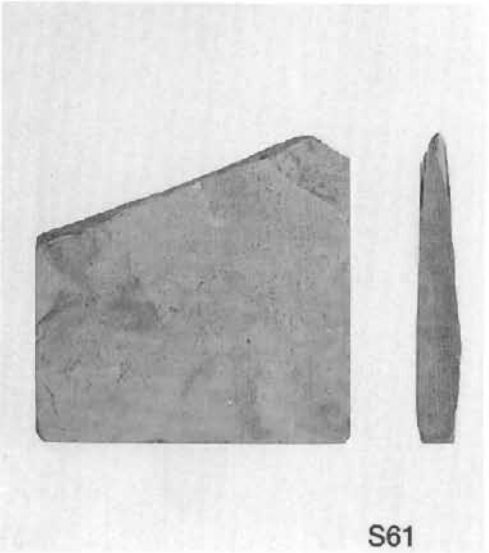

S55

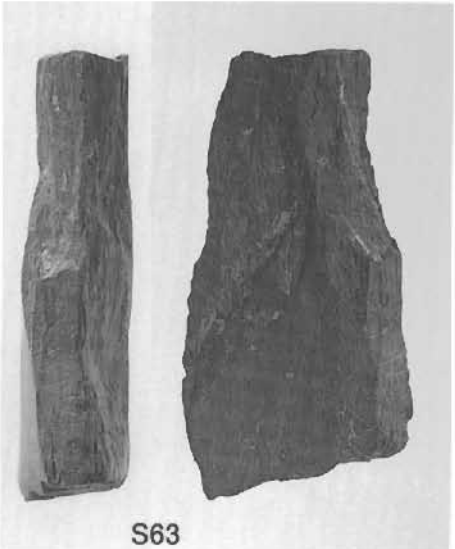




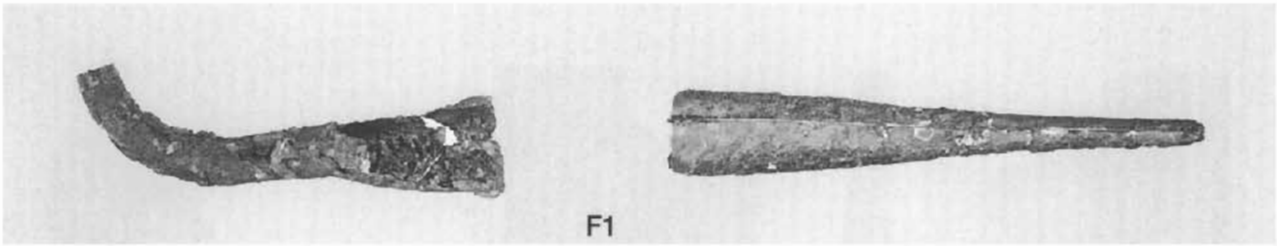


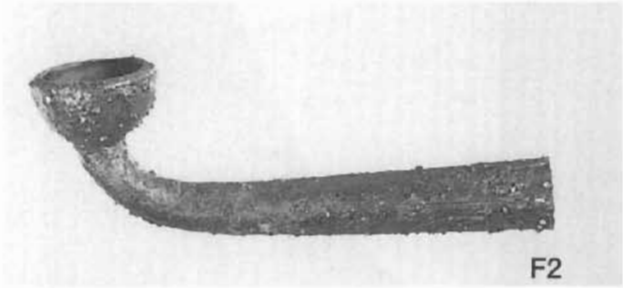


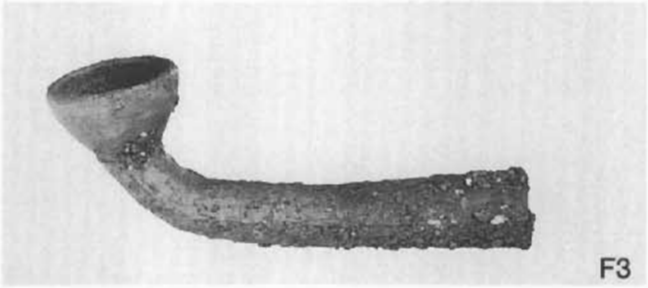


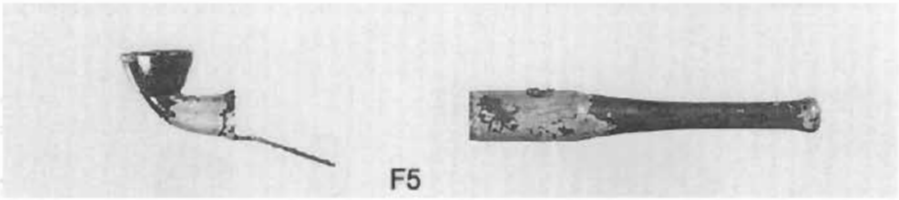


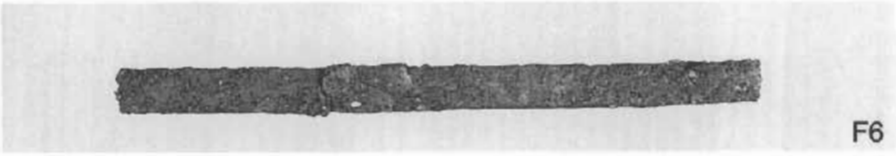
硯・砥石

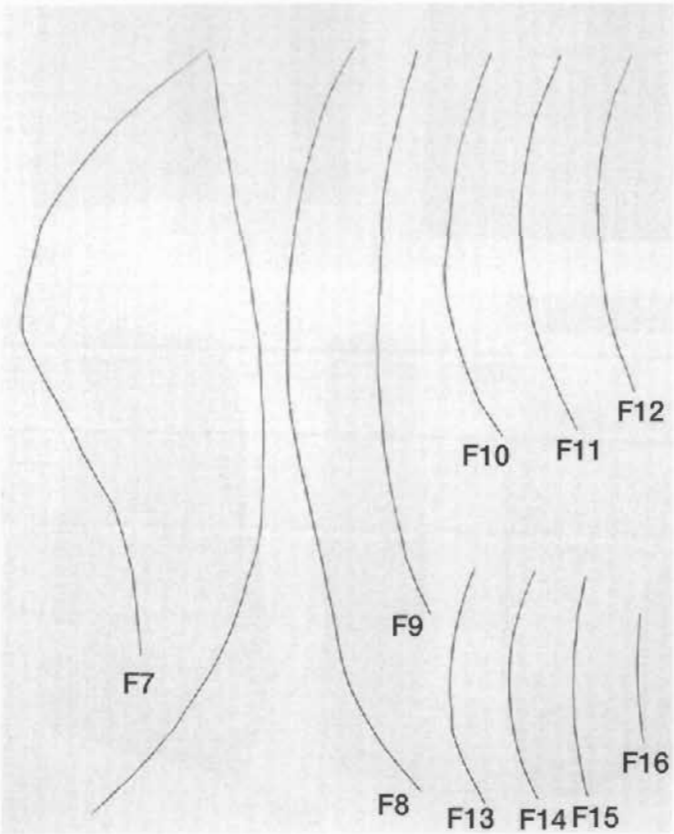




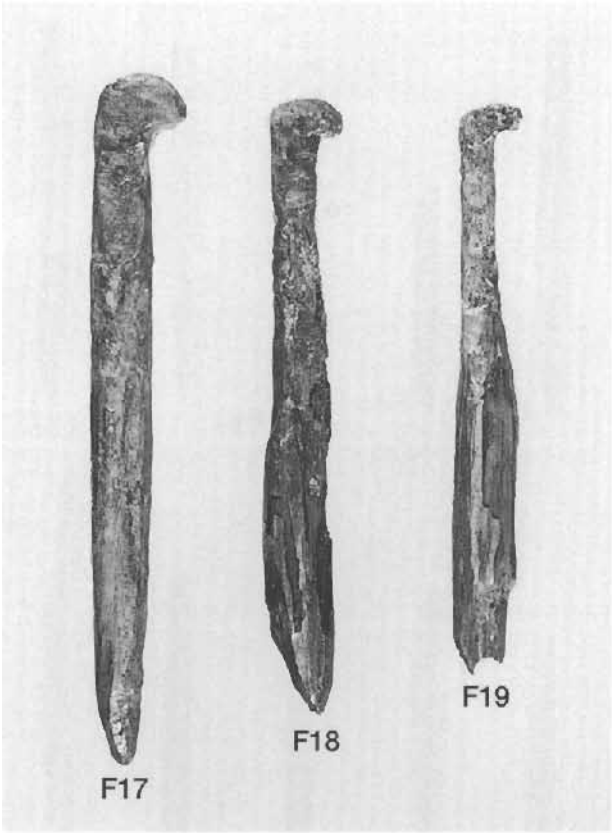


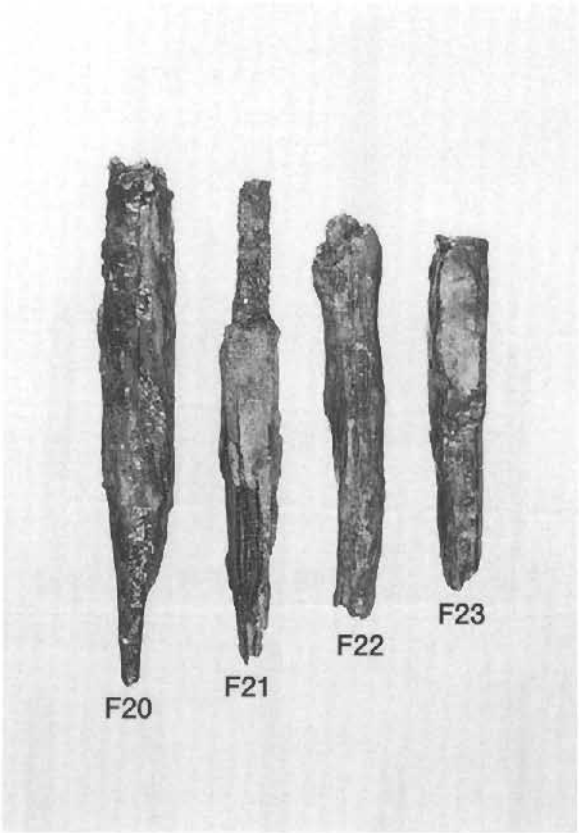


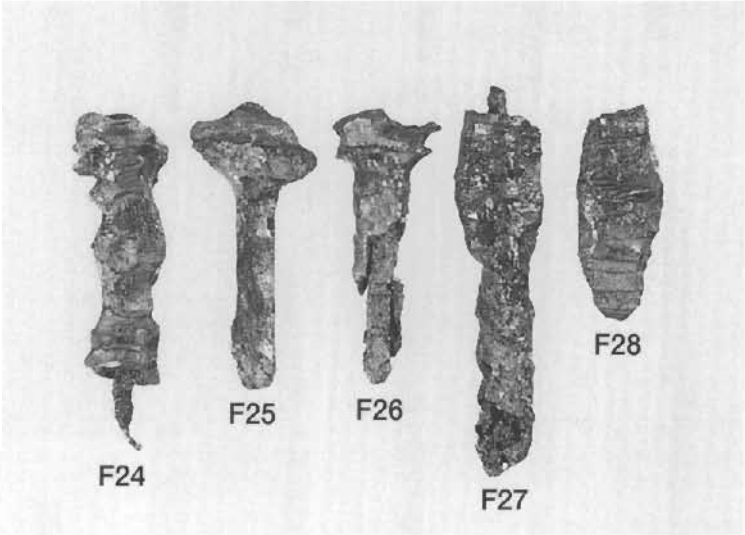


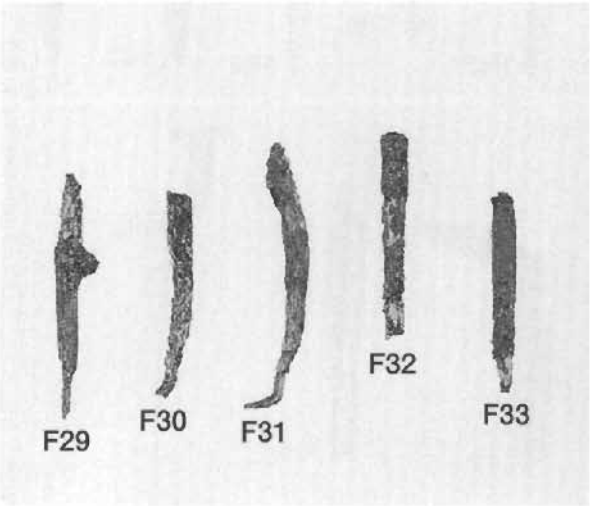


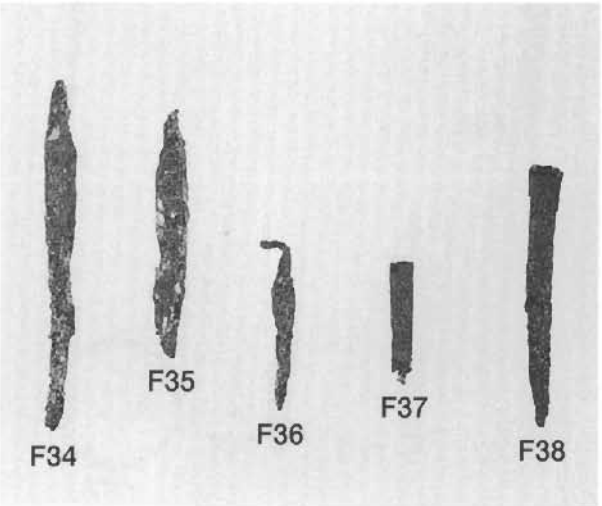
煙管・銅線・骨製品

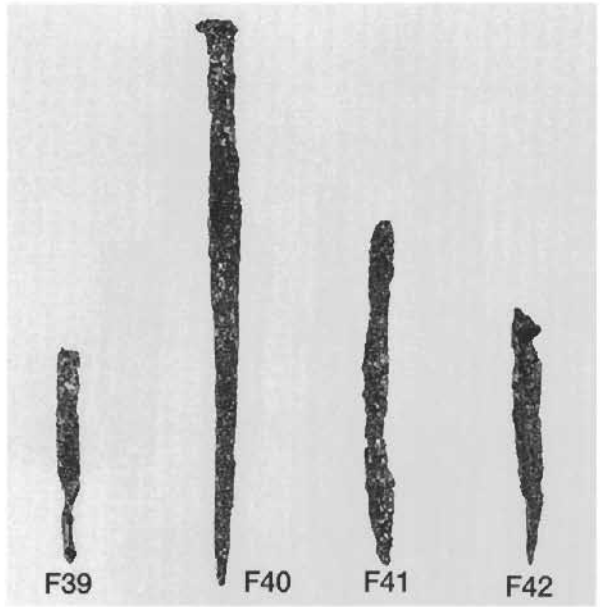

F17
F18
F19

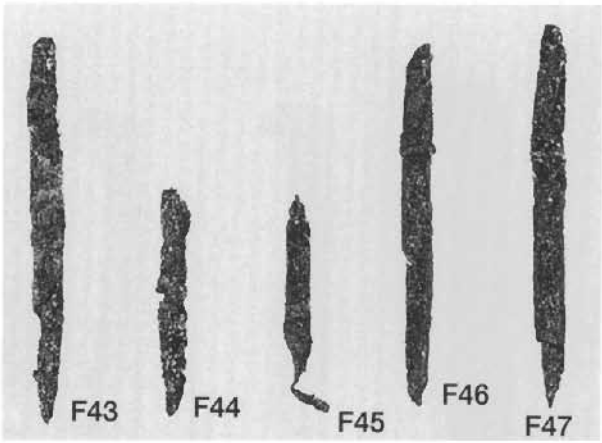

F20
F21
F22
F23

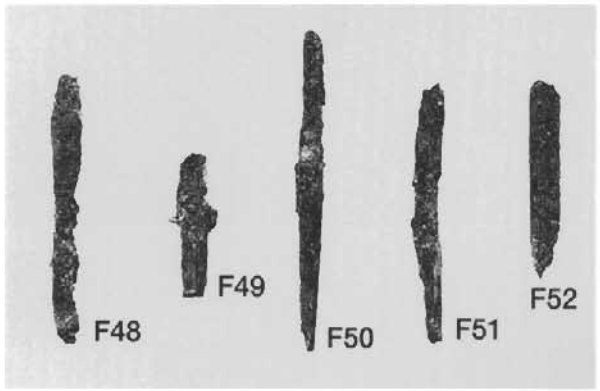

F24
F25
F26
F27
F28

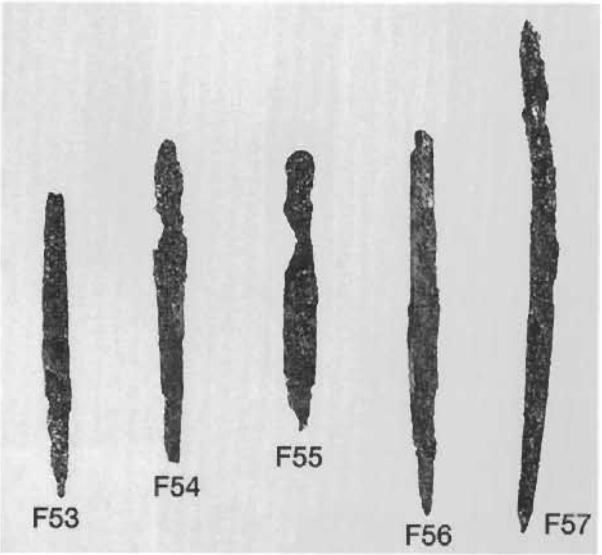

F29
F30
F31
F32
F33

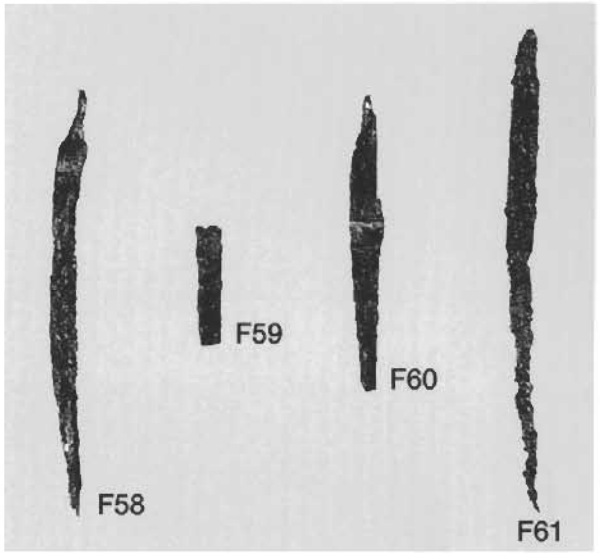

F34
F35
F36
F37
F38

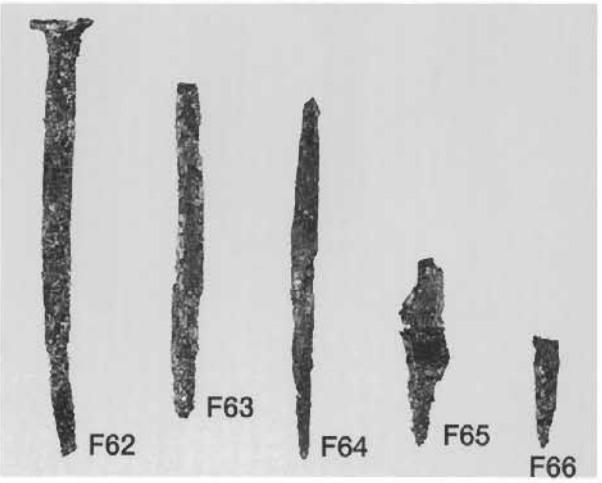

F39
F40
F41
F42

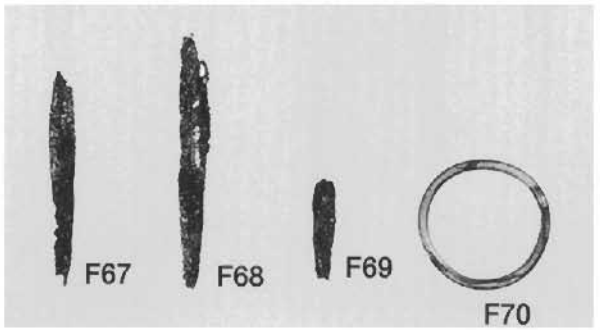

F43
F44
F45
F46
F47

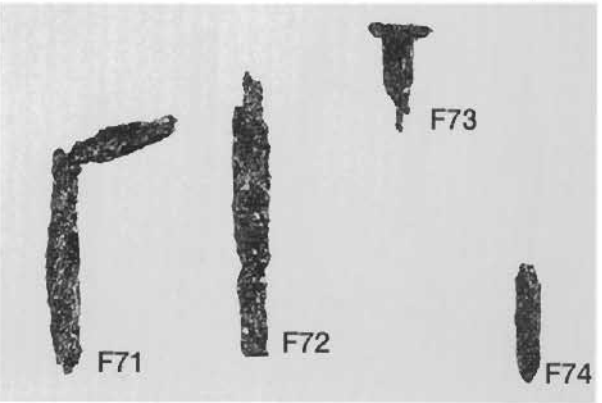

F48
F49
F50
F51
F52


F53
F54
F55
F56
F57

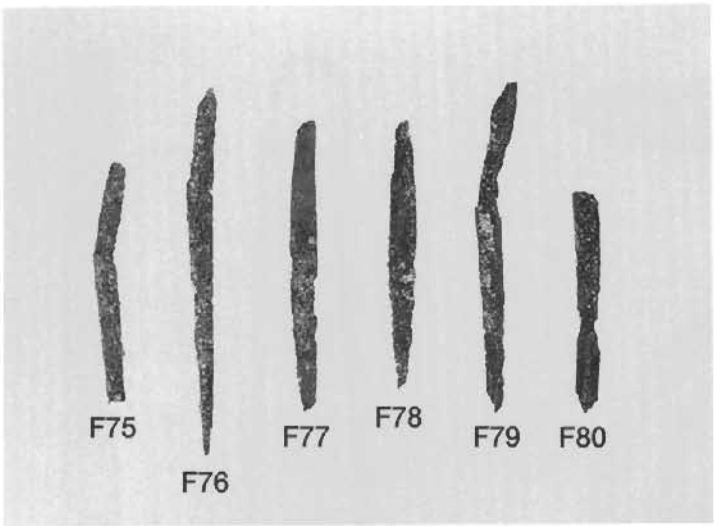

F58
F59
F60
F61

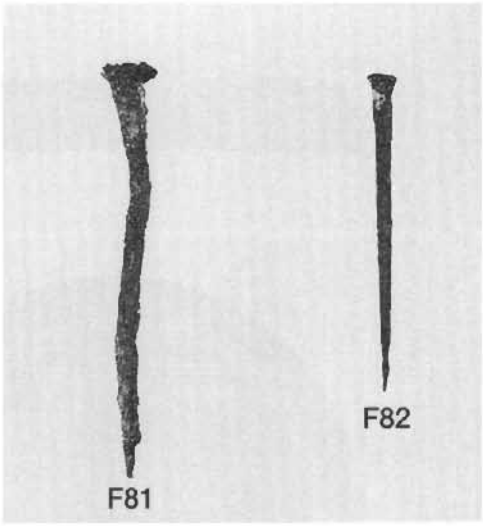

F62
F63
F64
F65
F66

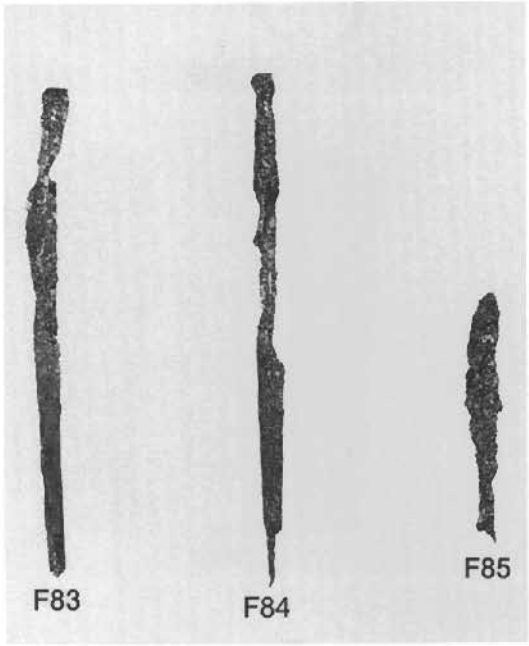

F67
F68
F69
F70

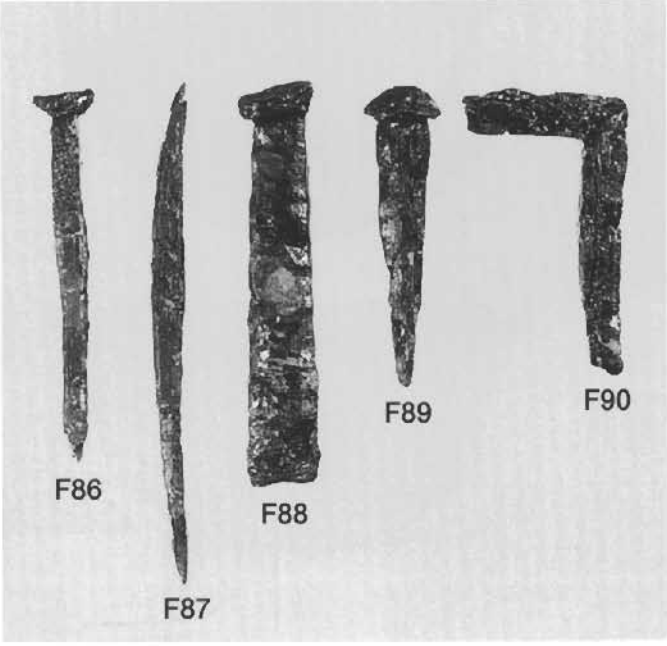

F71
F72
F73
F74

釘(2)　他

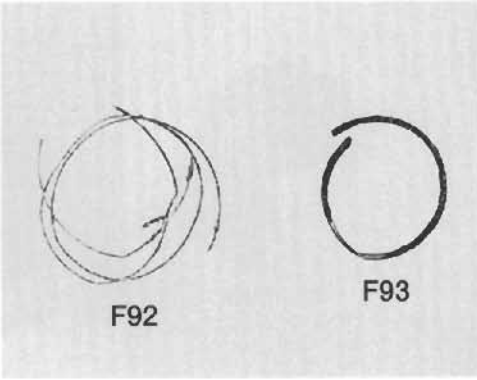

F75
F76
F77
F78
F79
F80


F81
F82

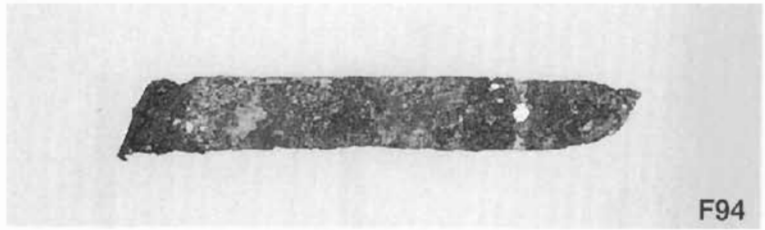

F83
F84
F85


F86
F87
F88
F89
F90

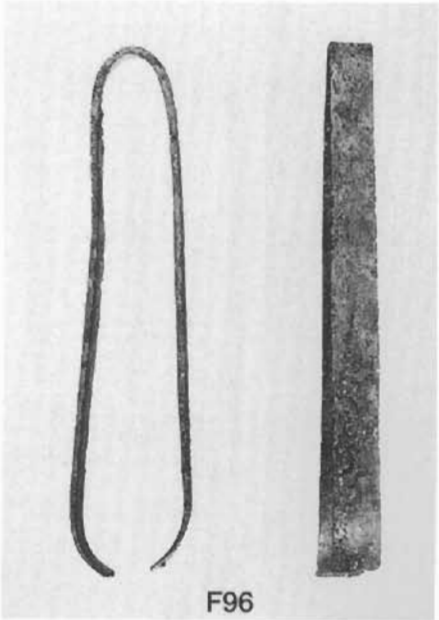
F91

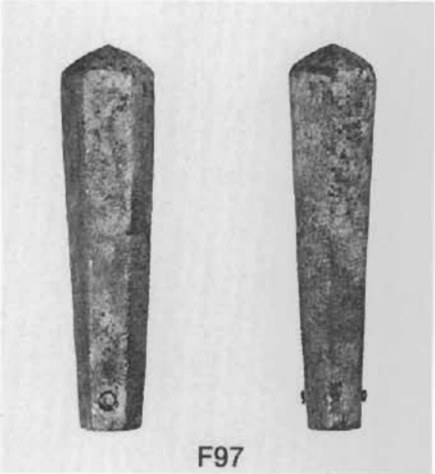

F92
F93

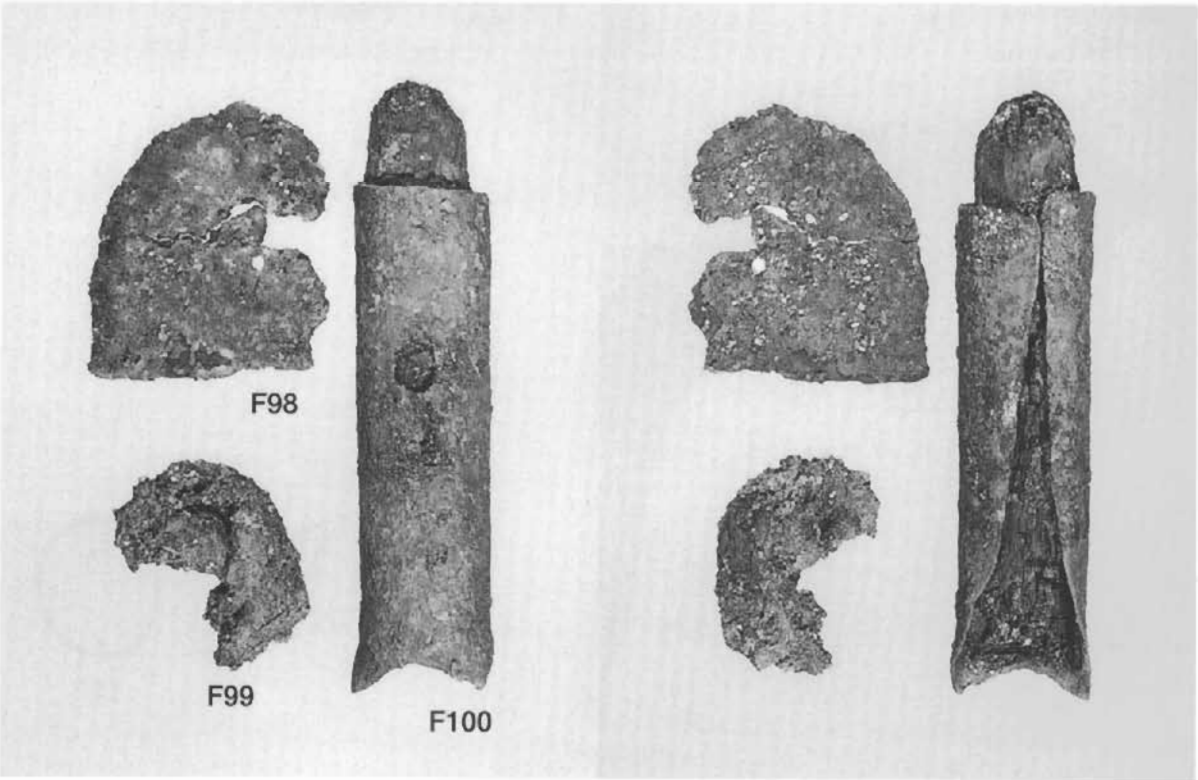
釘(3)　・鎌他


F94

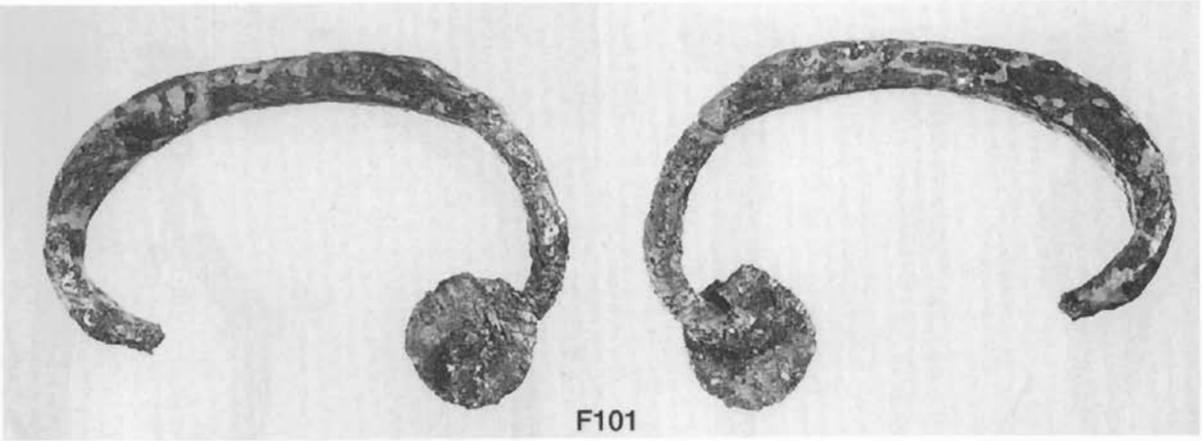
F95

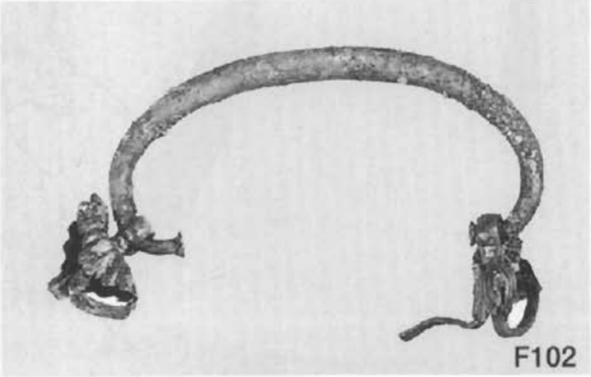

F96

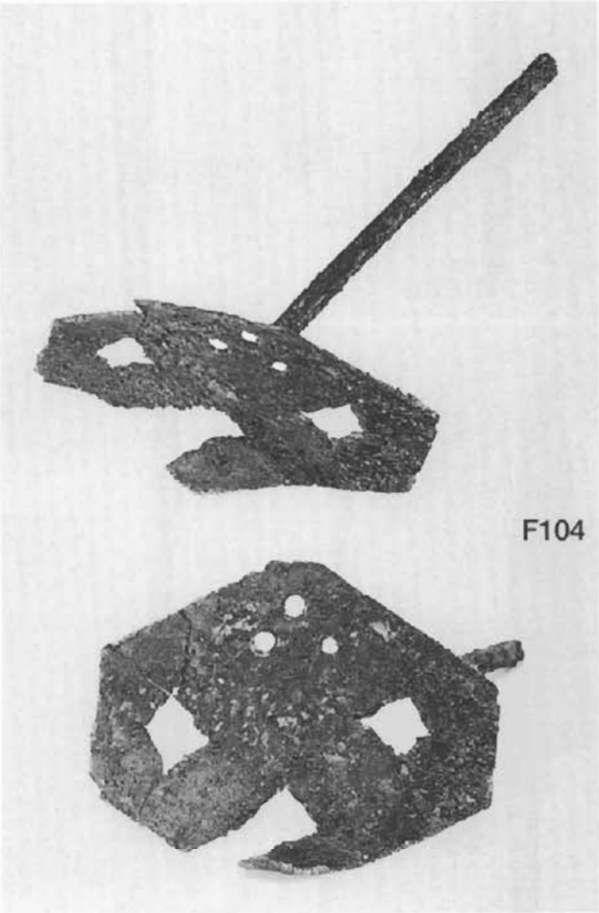

F97



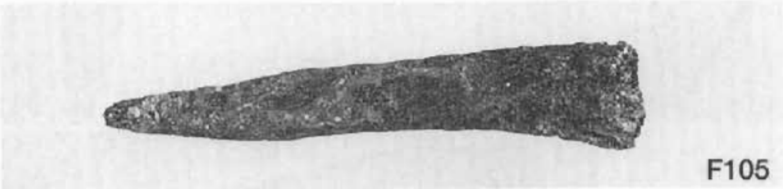
毛抜き他


F101


F102

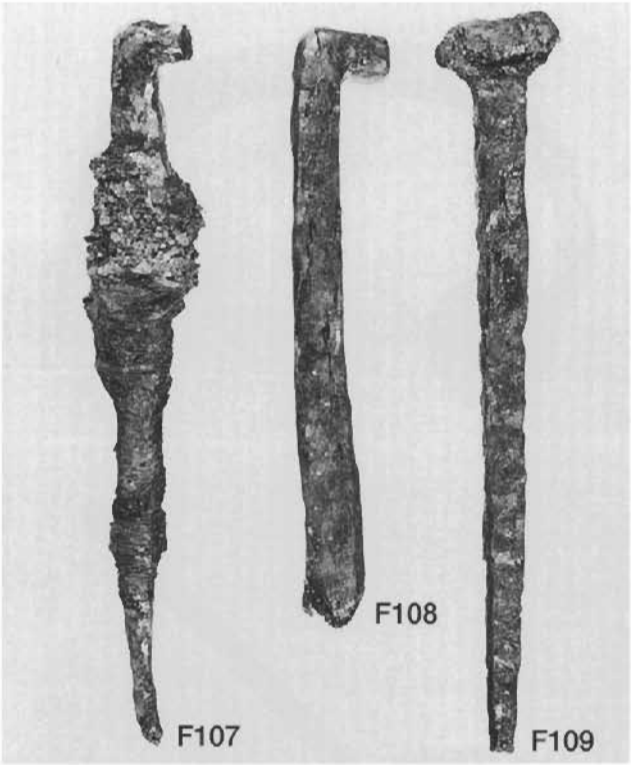

F104

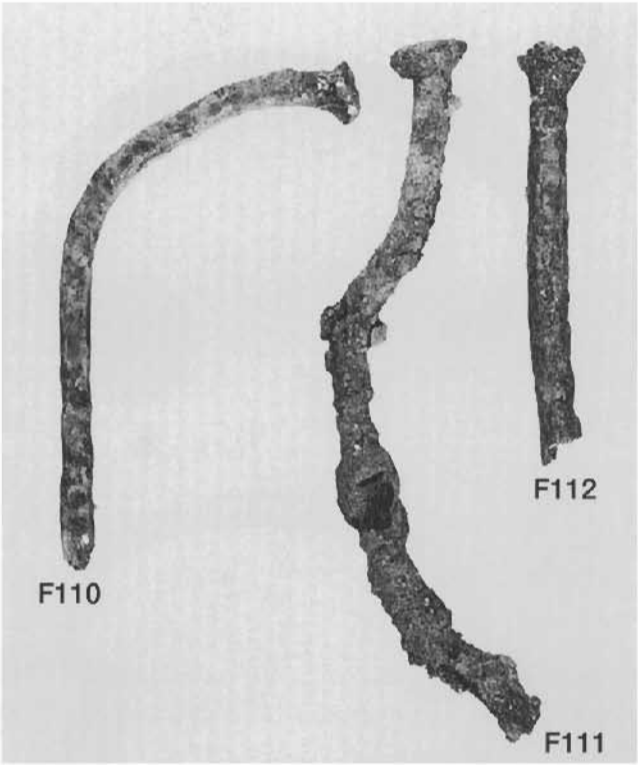
F103

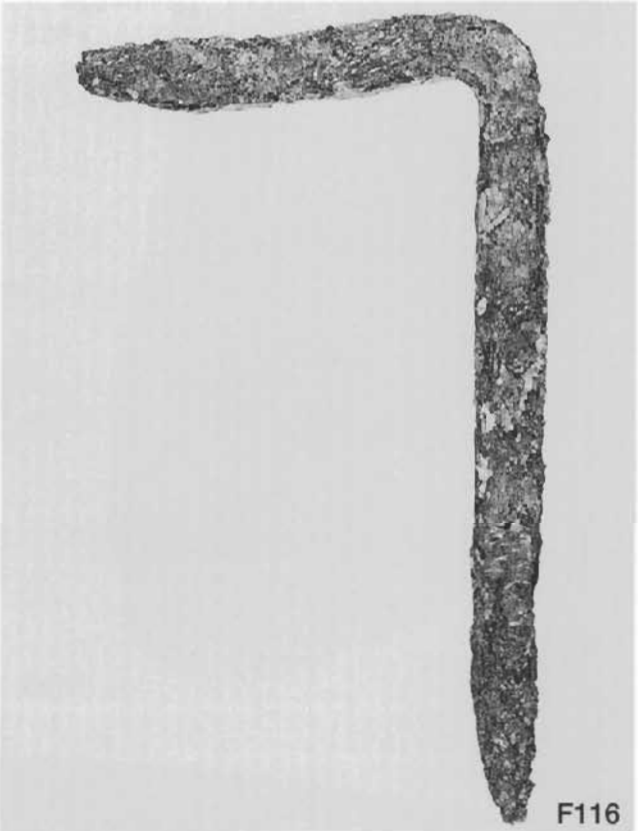

F105

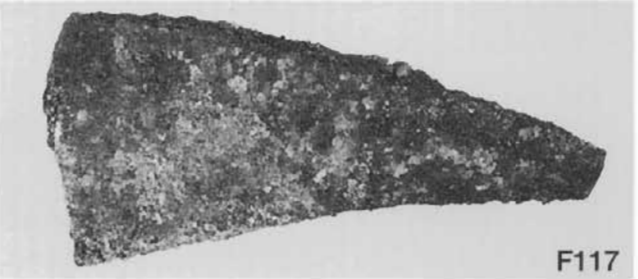
F106

把手・刀子他

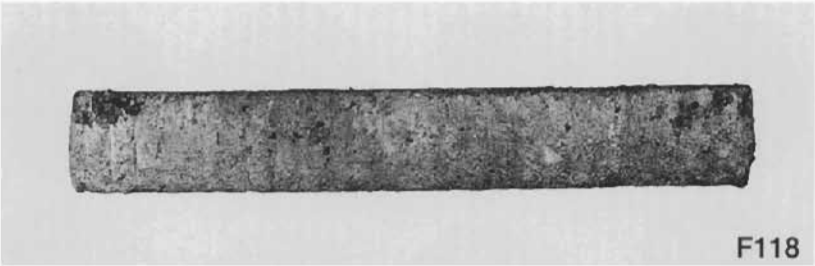






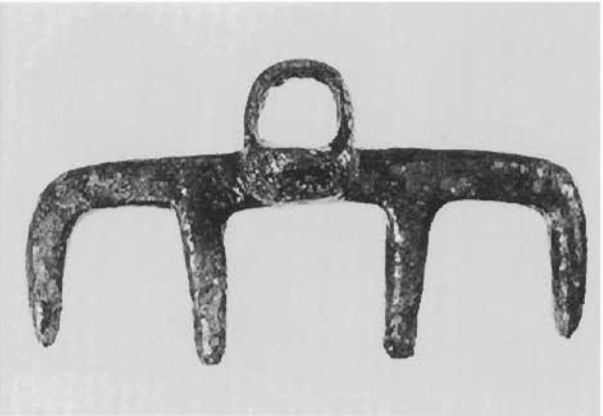


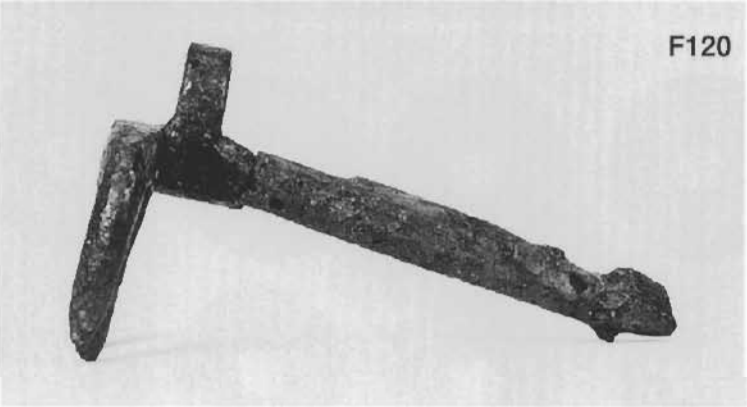
釘(4)・包丁他



F118

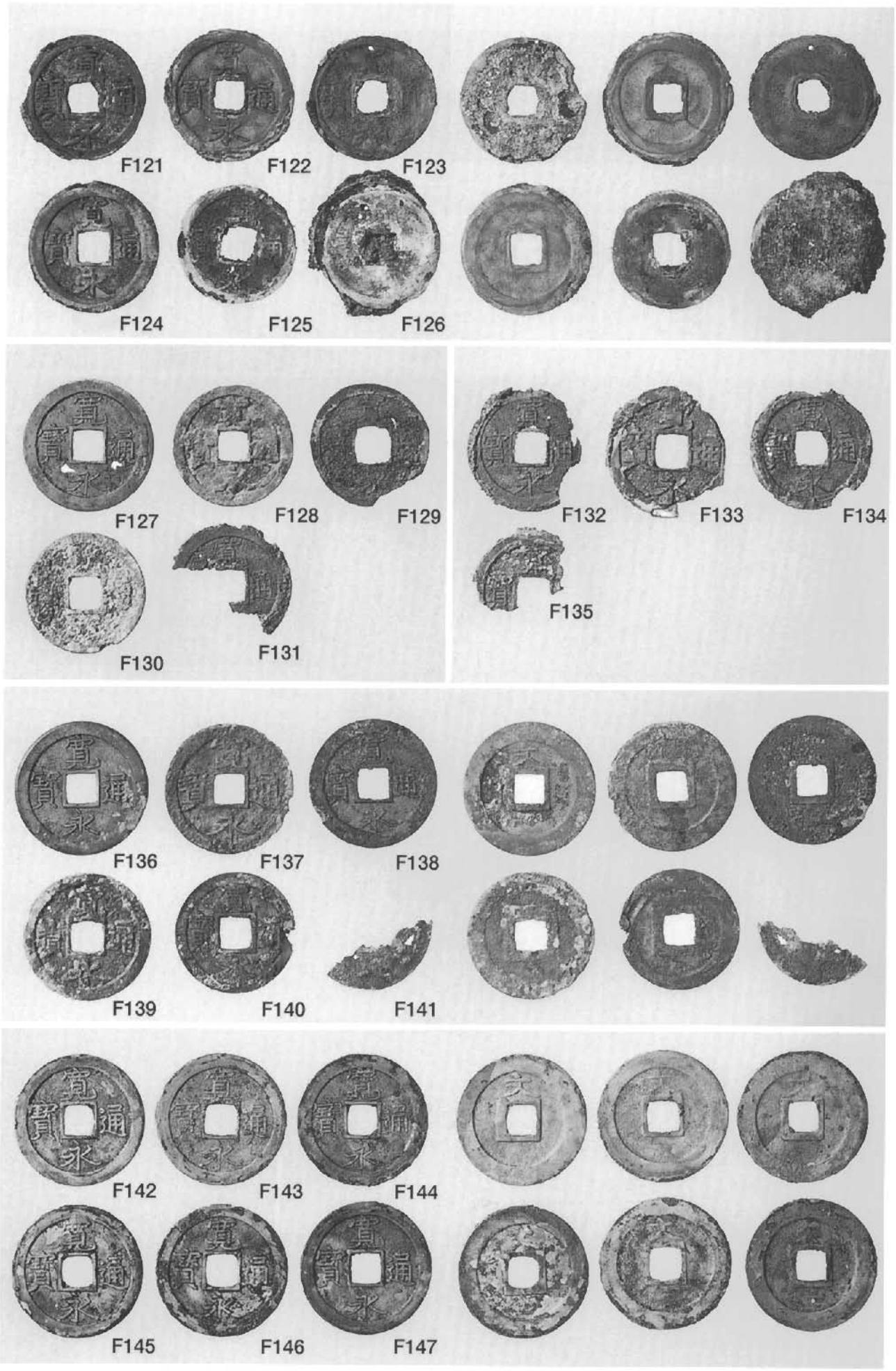
F119

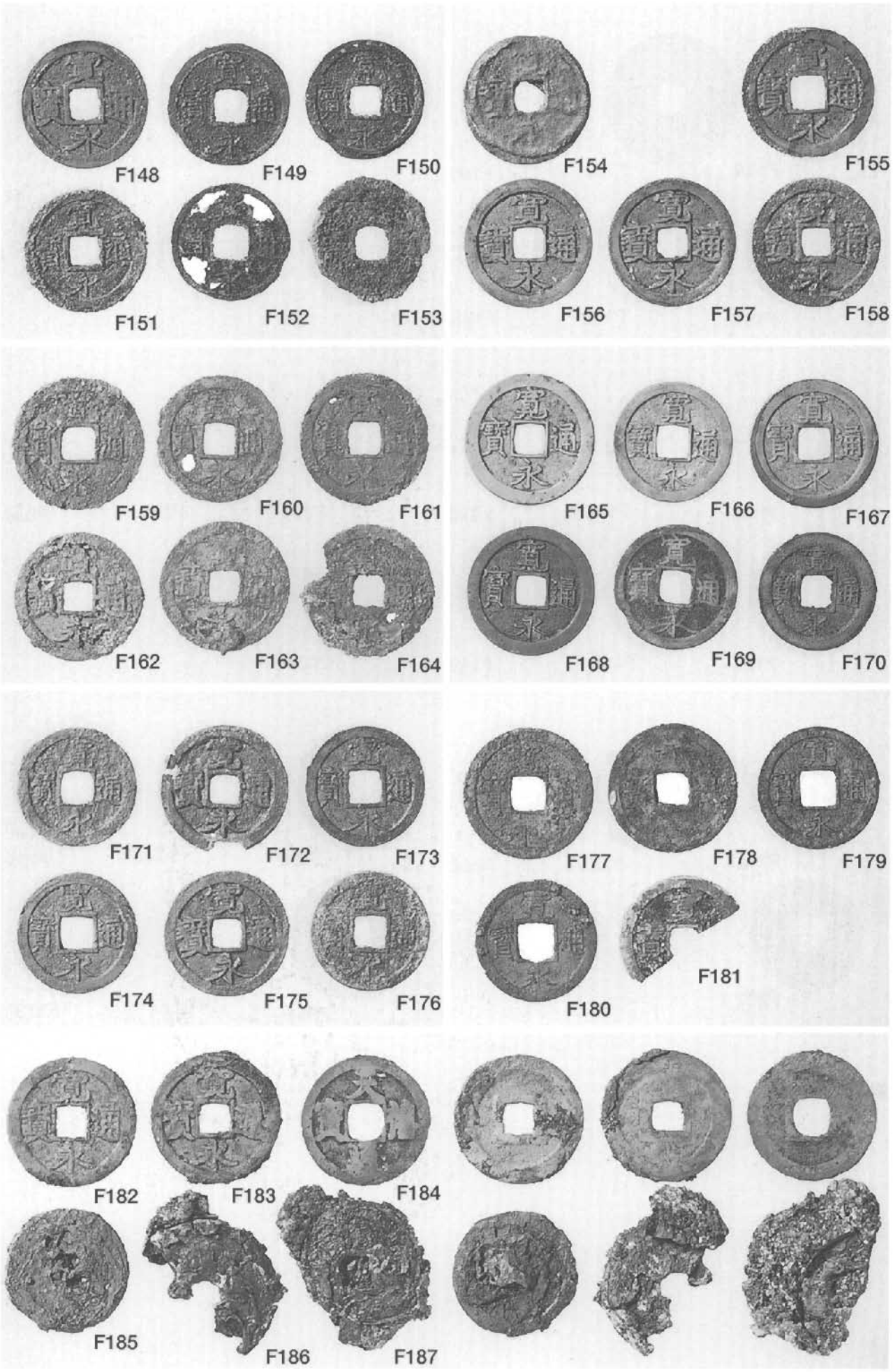


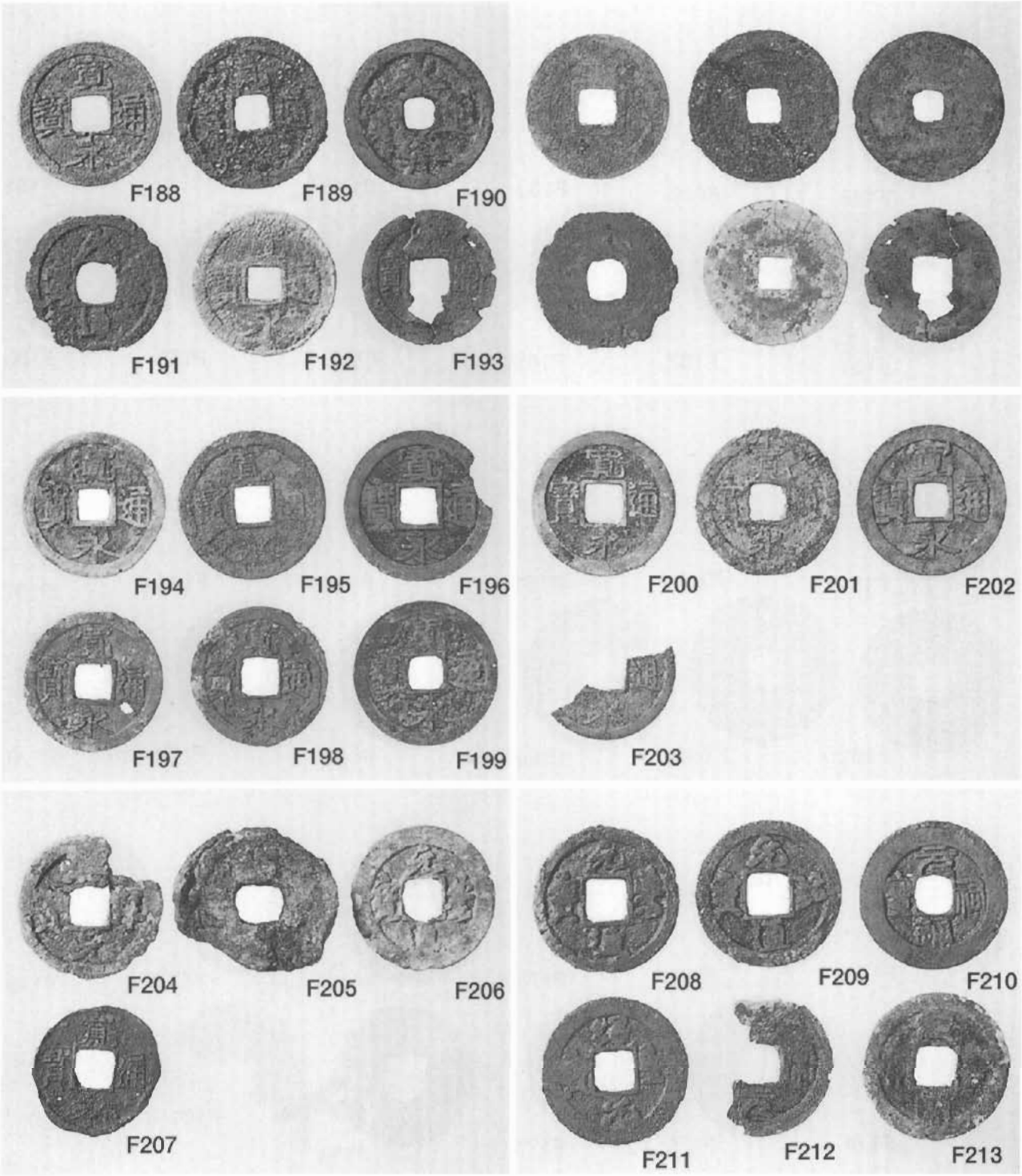


F120

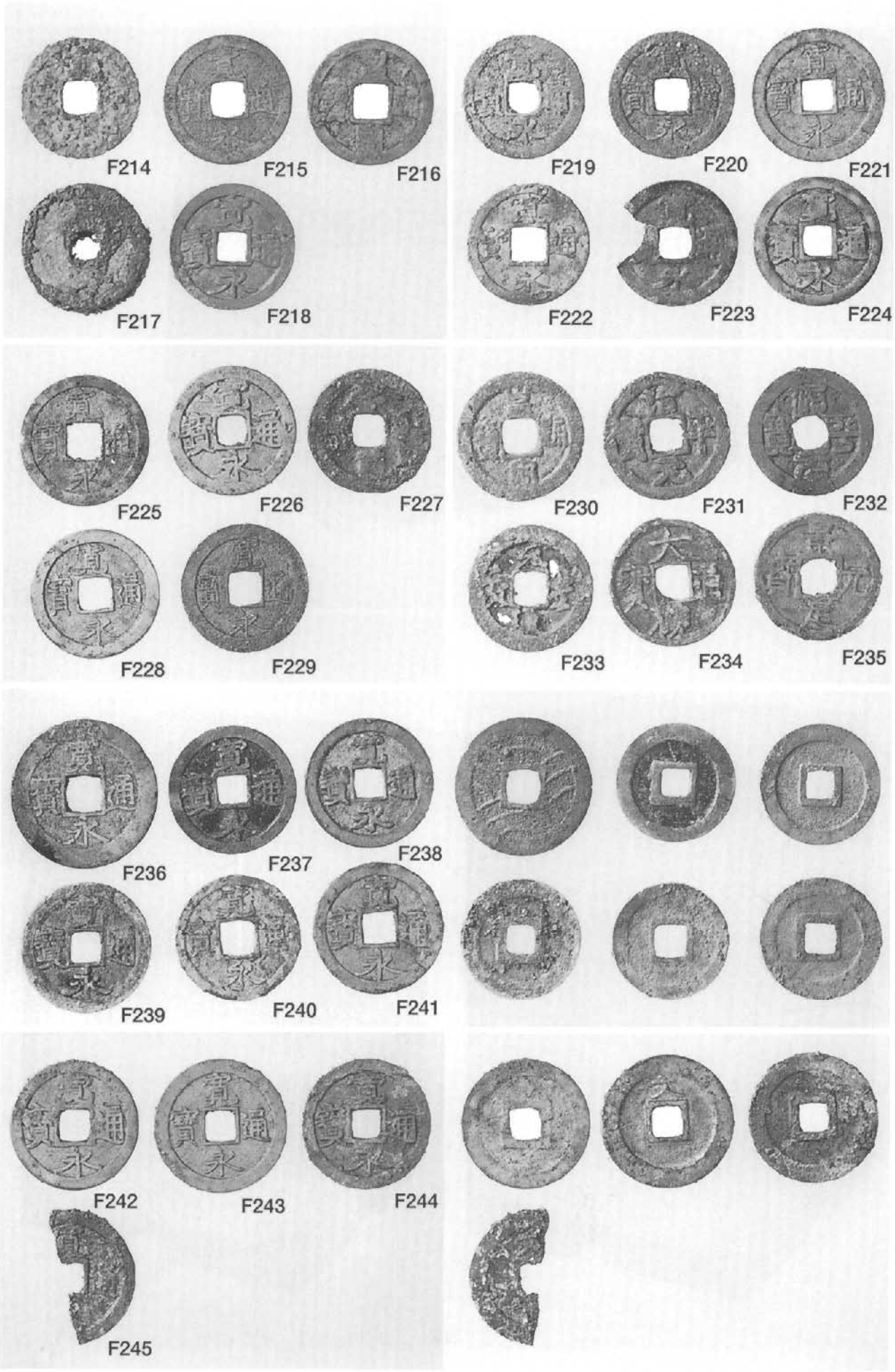
小柄他

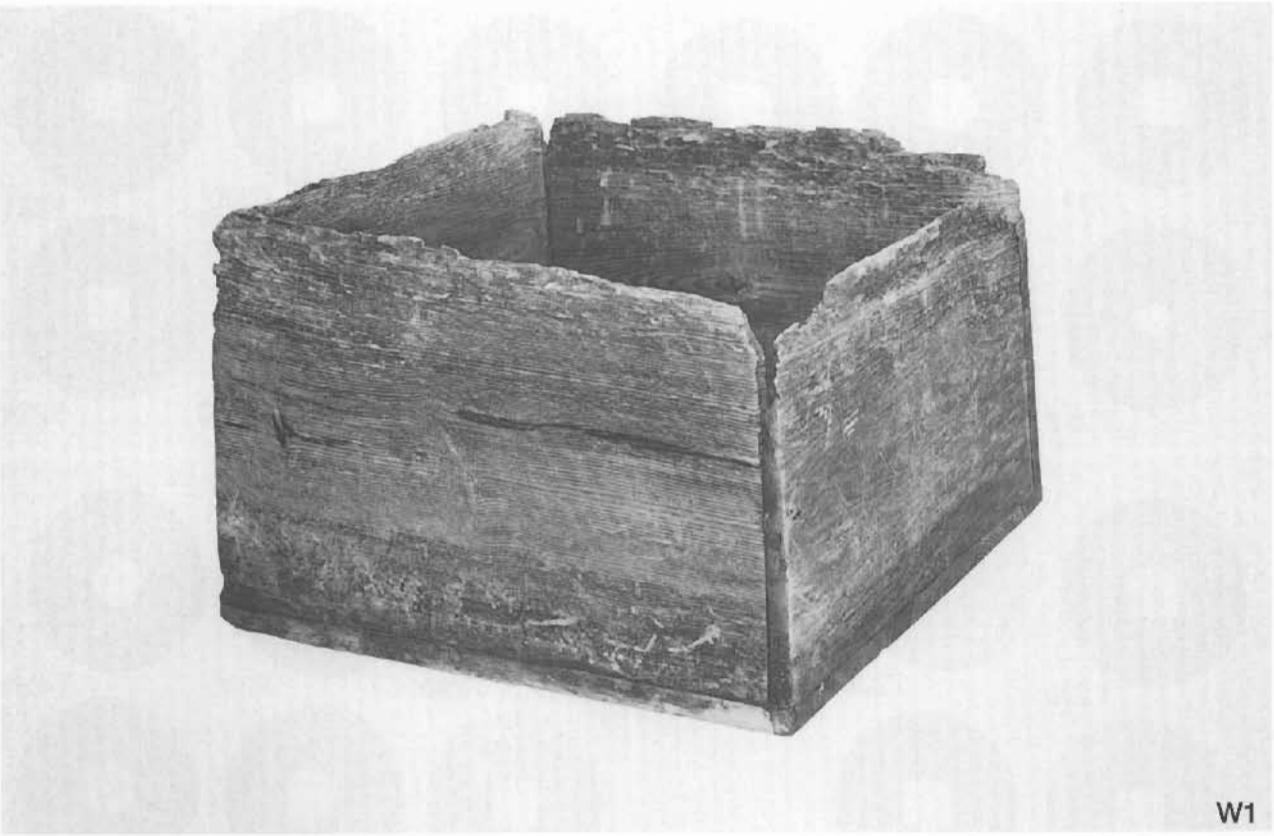

F121
F122
F123
F124
F125
F126
F127
F128
F129
F130
F131
F132
F133
F134
F135
F136
F137
F138
F139
F140
F141
F142
F143
F144
F145
F146
F147


F148
F149
F150
F151
F152
F153
F154
F155
F156
F157
F158
F159
F160
F161
F162
F163
F164
F165
F166
F167
F168
F169
F170
F171
F172
F173
F174
F175
F176
F177
F178
F179
F180
F181
F182
F183
F184
F185
F186
F187

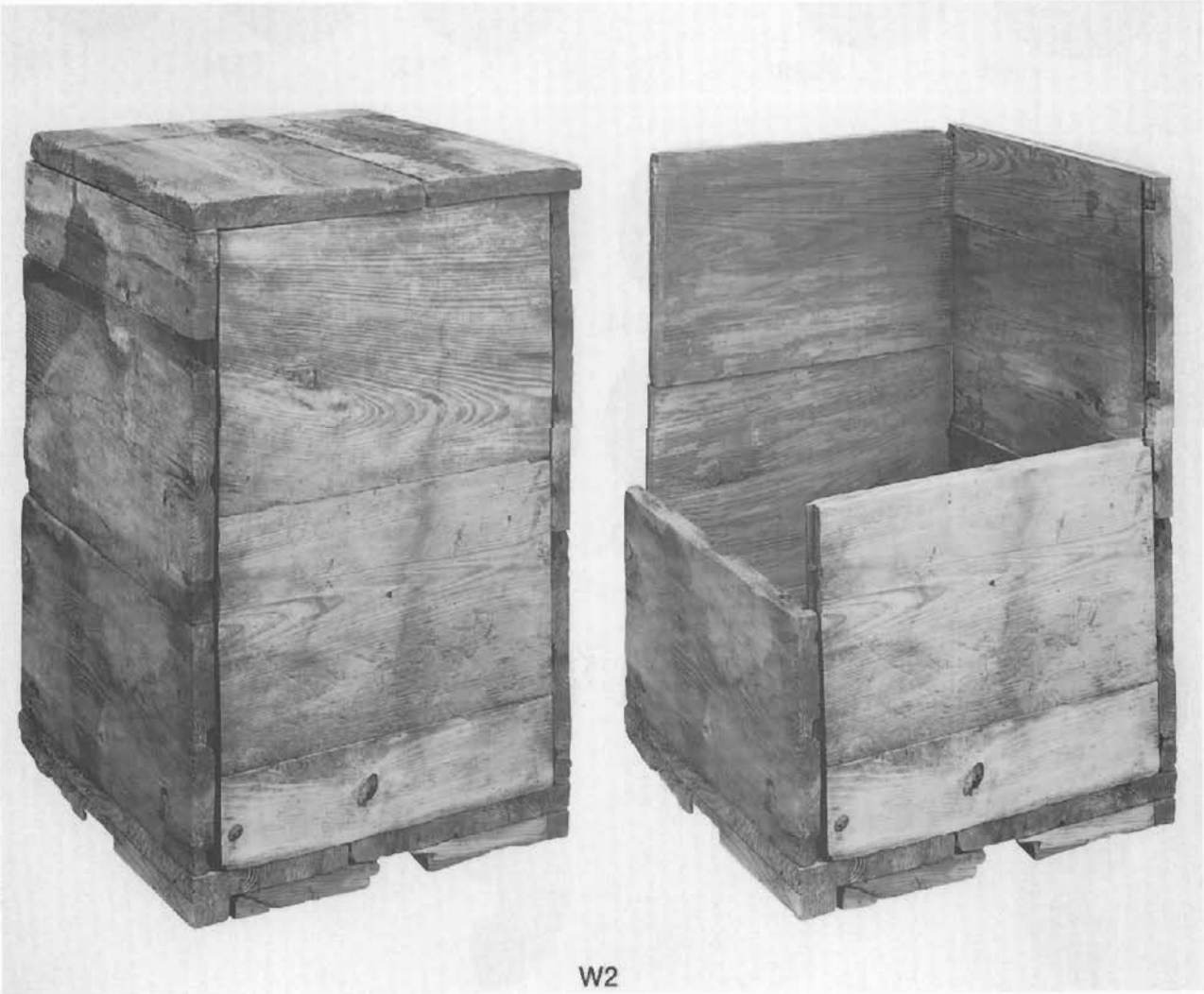

F188
F189
F190
F191
F192
F193
F194
F195
F196
F197
F198
F199
F200
F201
F202
F203
F204
F205
F206
F207
F208
F209
F210
F211
F212
F213

銅銭(3)


F214
F215
F216
F217
F218
F219
F220
F221
F222
F223
F224
F225
F226
F227
F228
F229
F230
F231
F232
F233
F234
F235
F236
F237
F238
F239
F240
F241
F242
F243
F244
F245

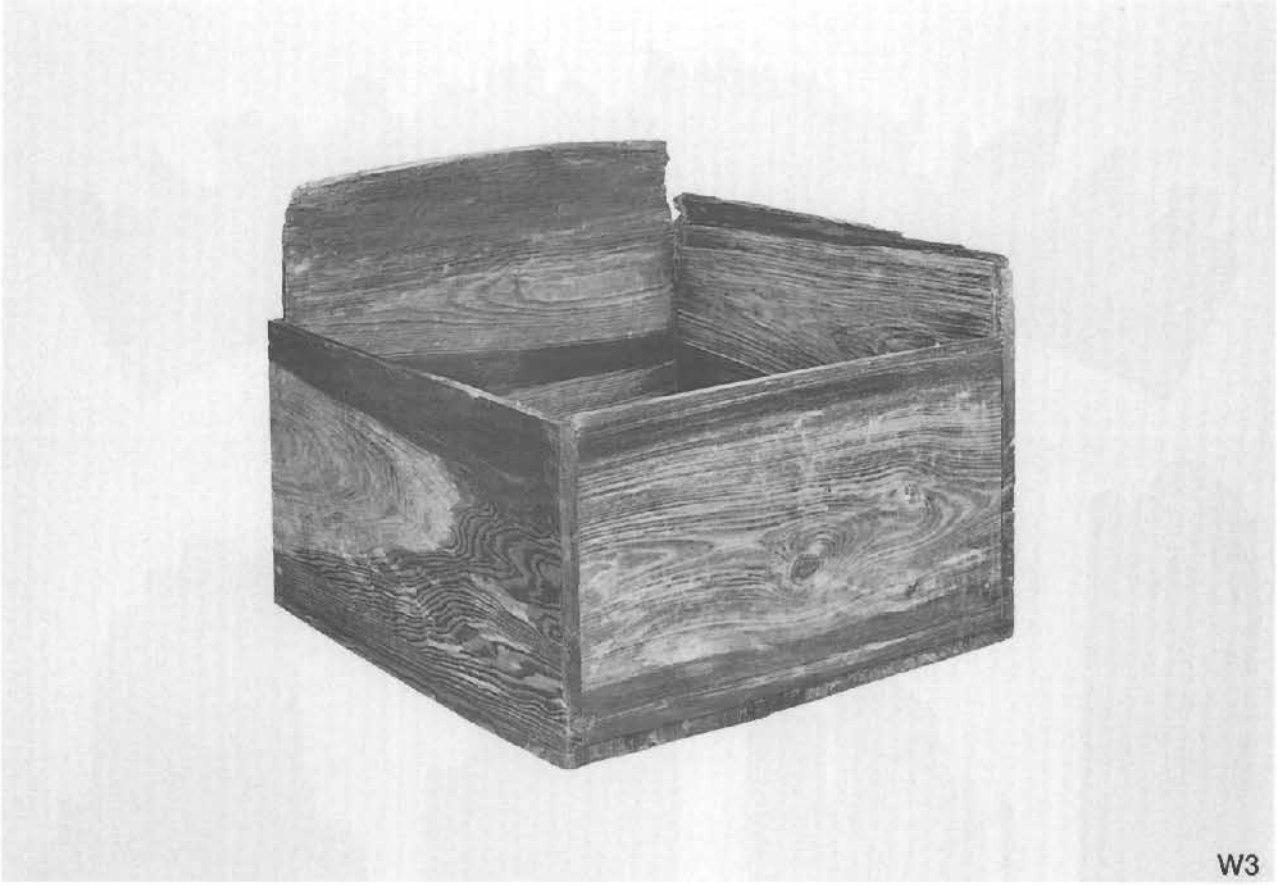


W1

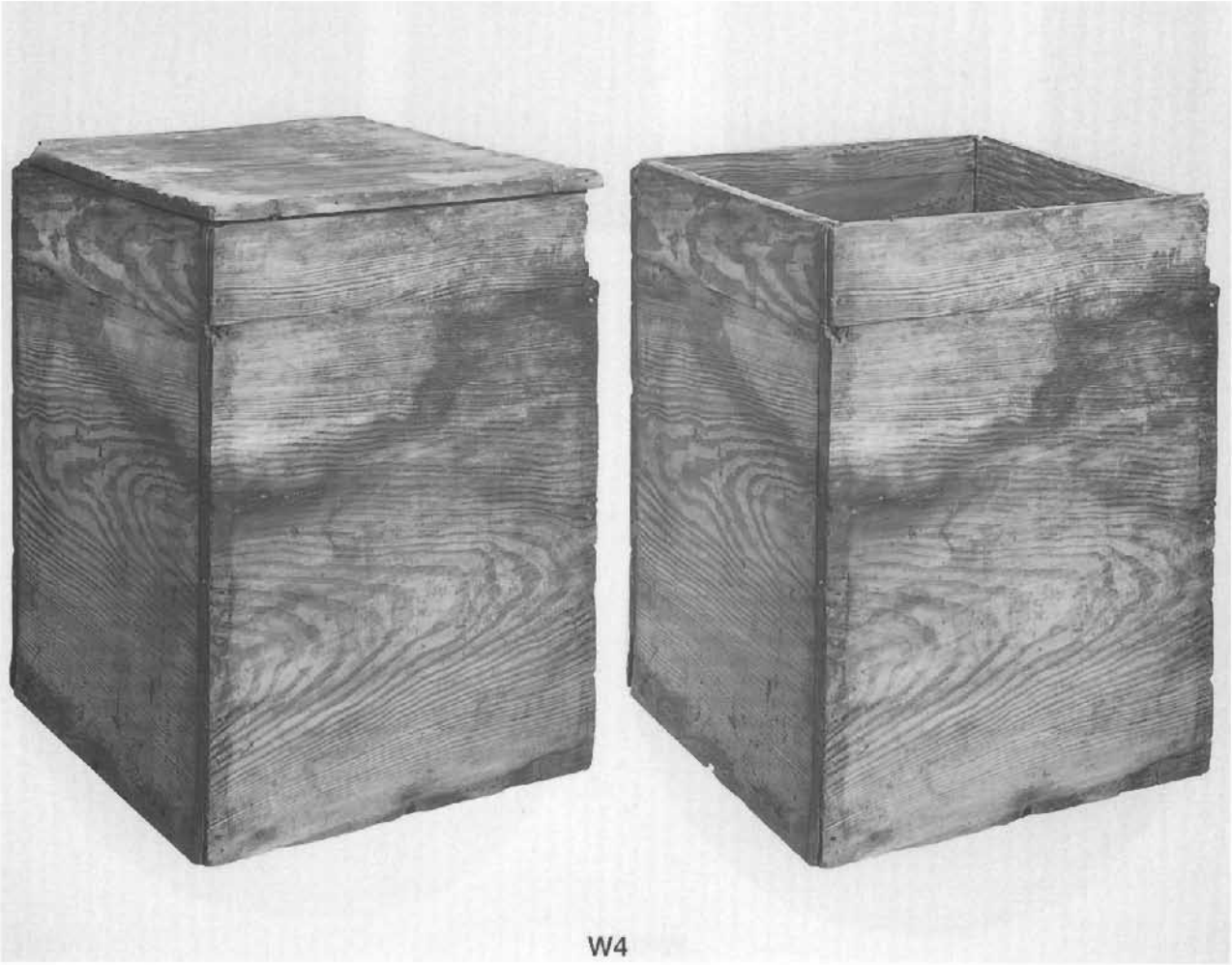


W2

箱棺(1)（SX218・228）

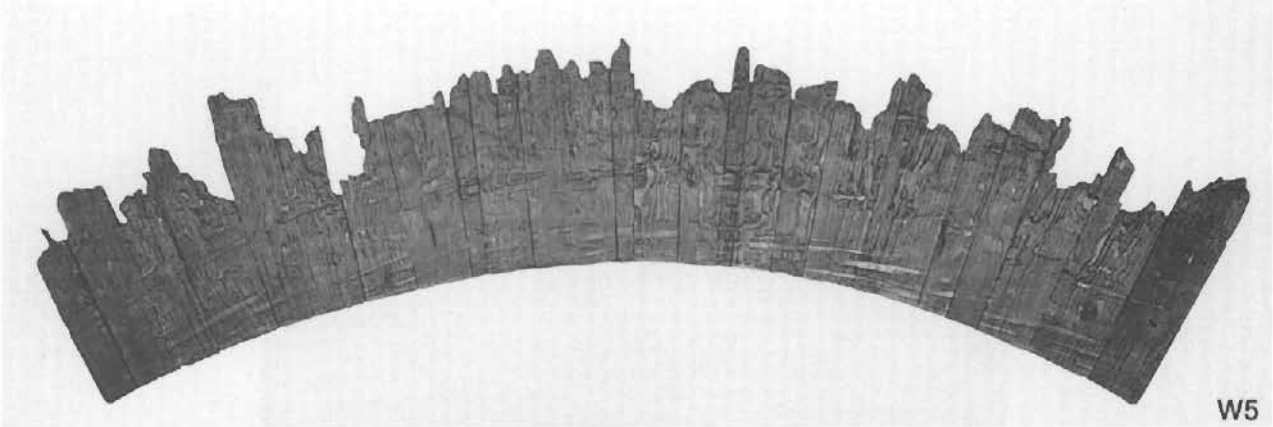


W3

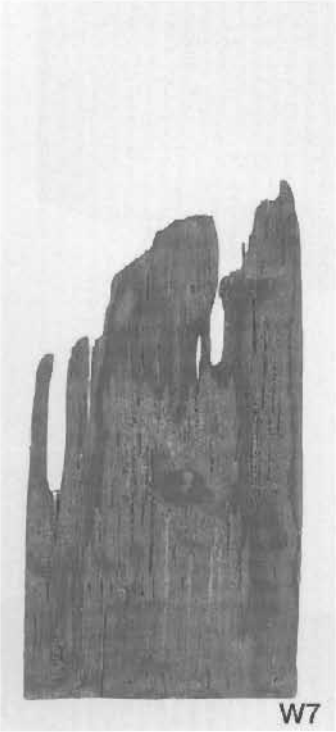


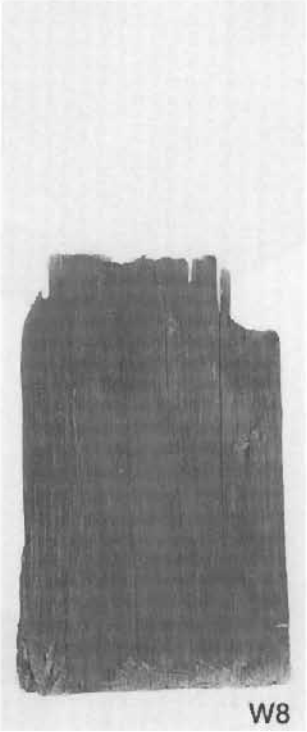
W4

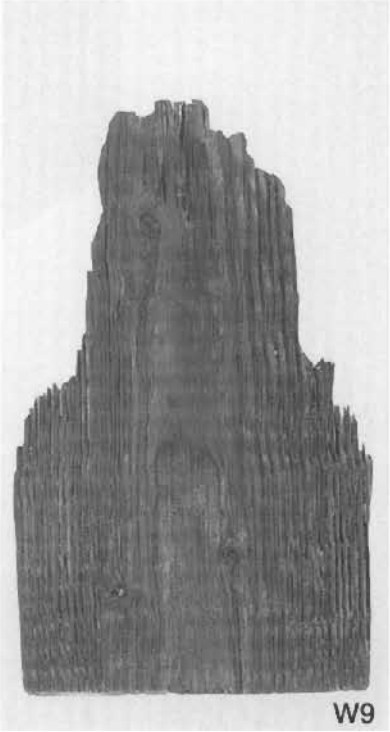
箱棺(2)（SX232・236）

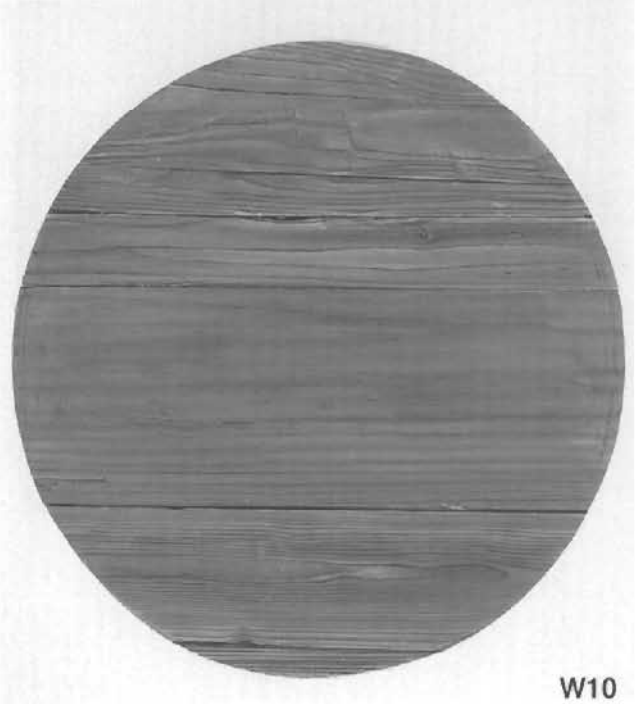

W5

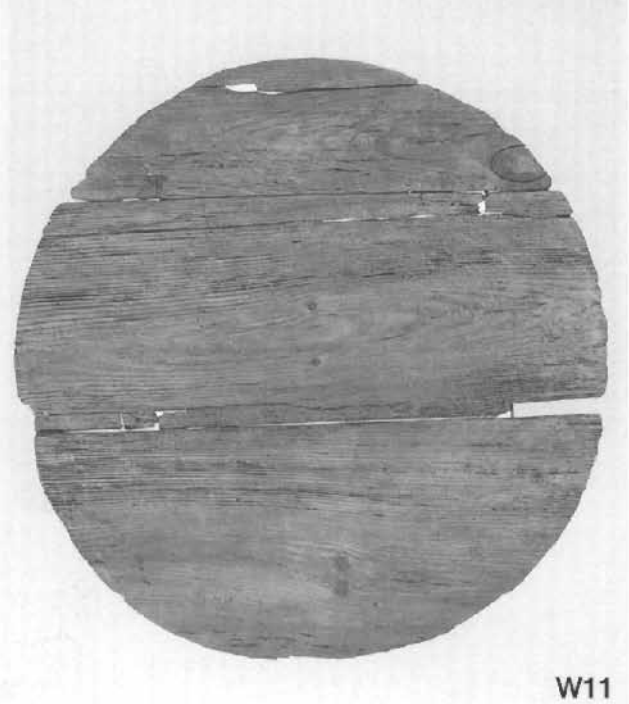
W6

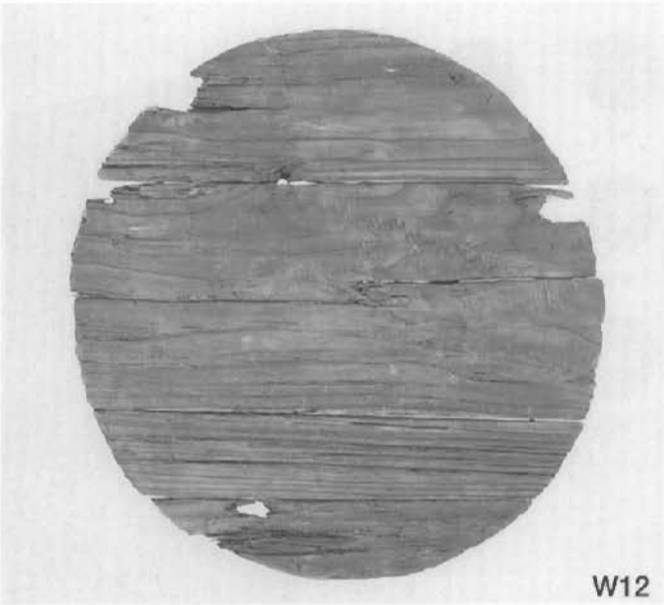

W7


W8

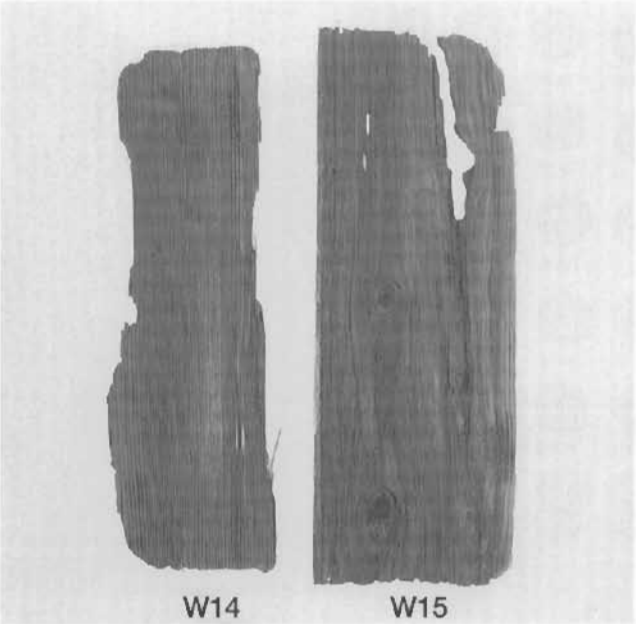

W9

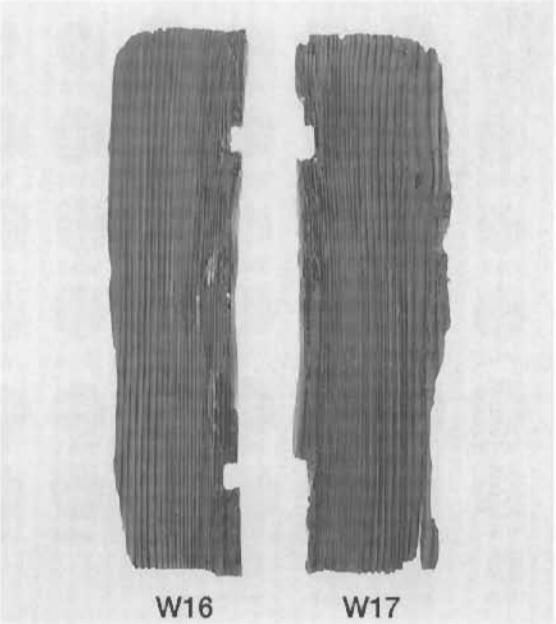

W10

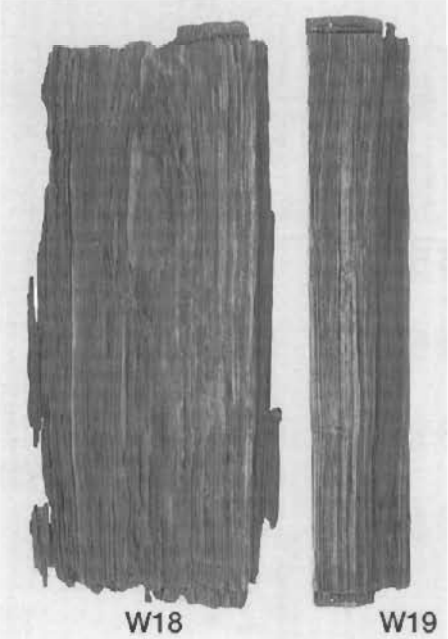

W11

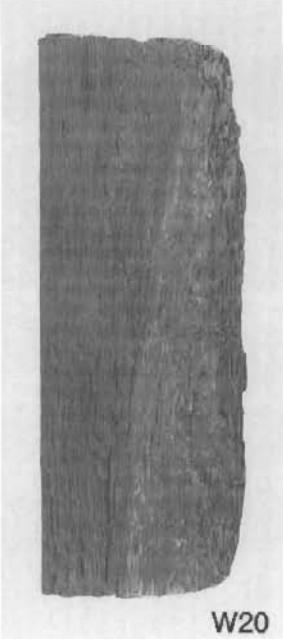

W12

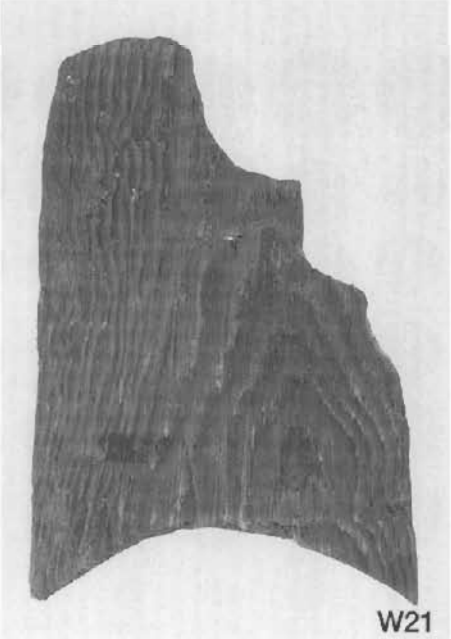
W13


W14 W15

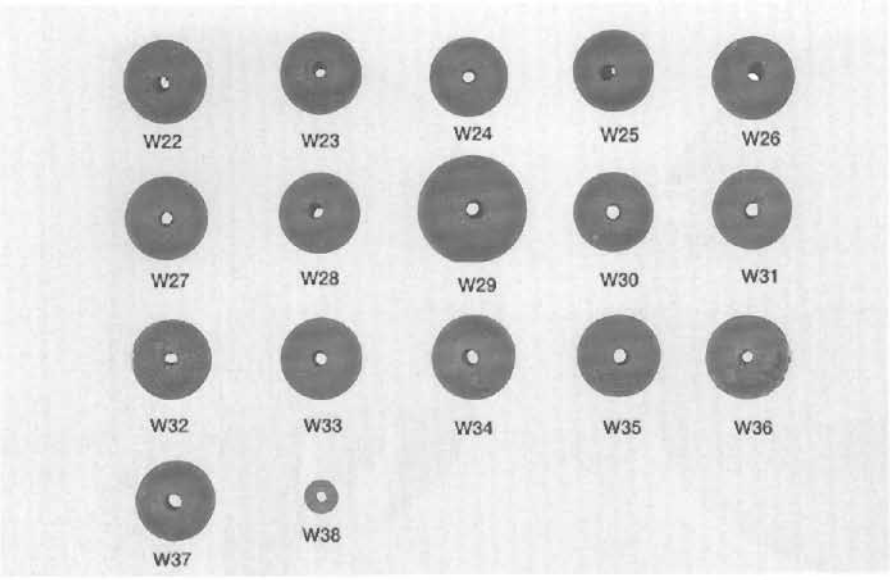

W16 W17

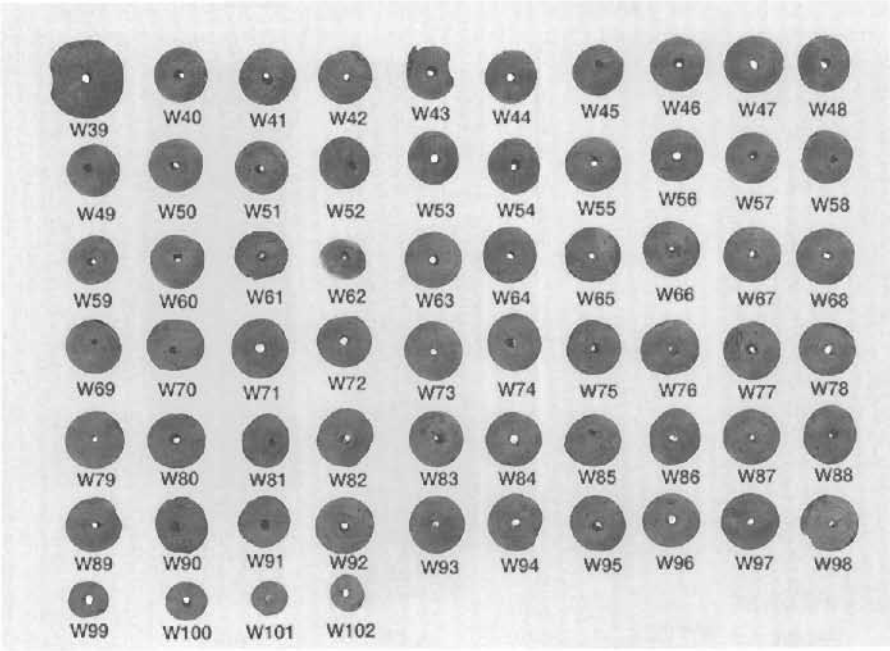

W18 W19

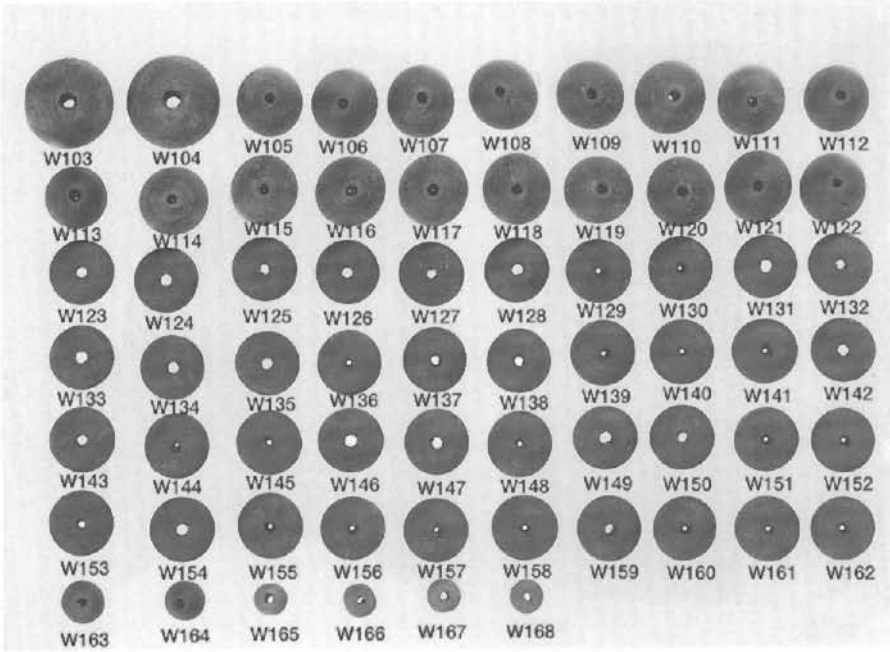

W20


W21

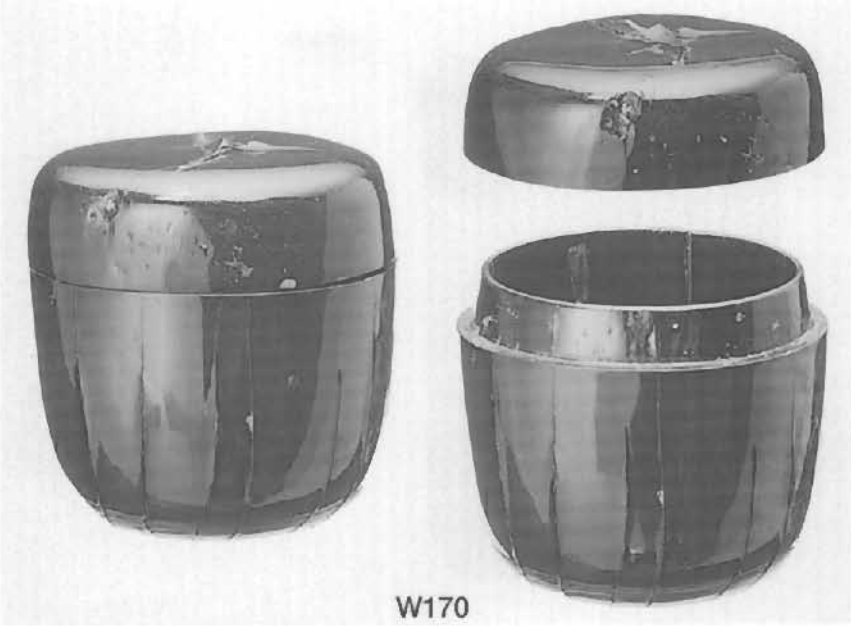
桶棺(2)　・箱棺(3)


W22
W23
W24
W25
W26
W27
W28
W29
W30
W31
W32
W33
W34
W35
W36
W37
W38


W39
W40
W41
W42
W43
W44
W45
W46
W47
W48
W49
W50
W51
W52
W53
W54
W55
W56
W57
W58
W59
W60
W61
W62
W63
W64
W65
W66
W67
W68
W69
W70
W71
W72
W73
W74
W75
W76
W77
W78
W79
W80
W81
W82
W83
W84
W85
W86
W87
W88
W89
W90
W91
W92
W93
W94
W95
W96
W97
W98
W99
W100
W101
W102

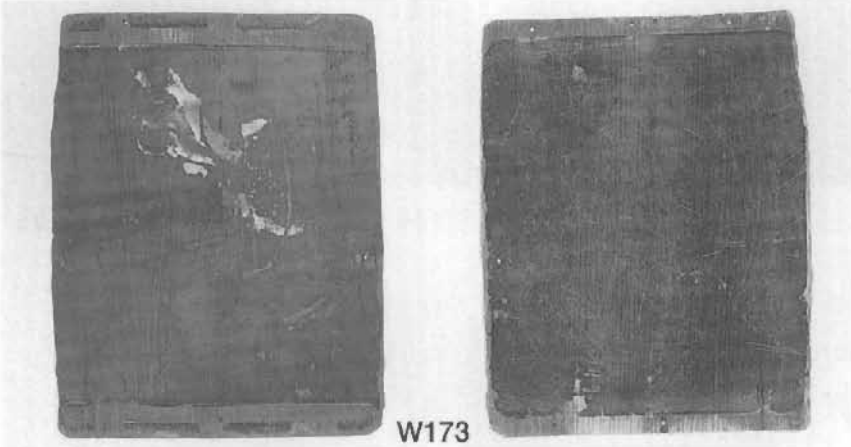

W103
W104
W105
W106
W107
W108
W109
W110
W111
W112
W113
W114
W115
W116
W117
W118
W119
W120
W121
W122
W123
W124
W125
W126
W127
W128
W129
W130
W131
W132
W133
W134
W135
W136
W137
W138
W139
W140
W141
W142
W143
W144
W145
W146
W147
W148
W149
W150
W151
W152
W153
W154
W155
W156
W157
W158
W159
W160
W161
W162
W163
W164
W165
W166
W167
W168

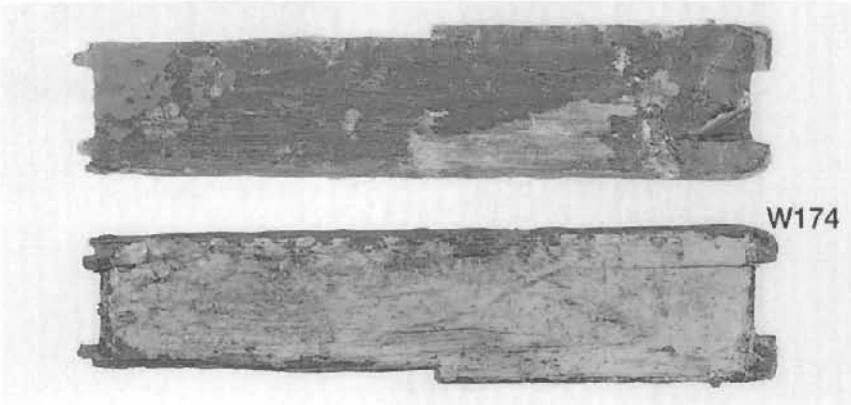
W169


W170

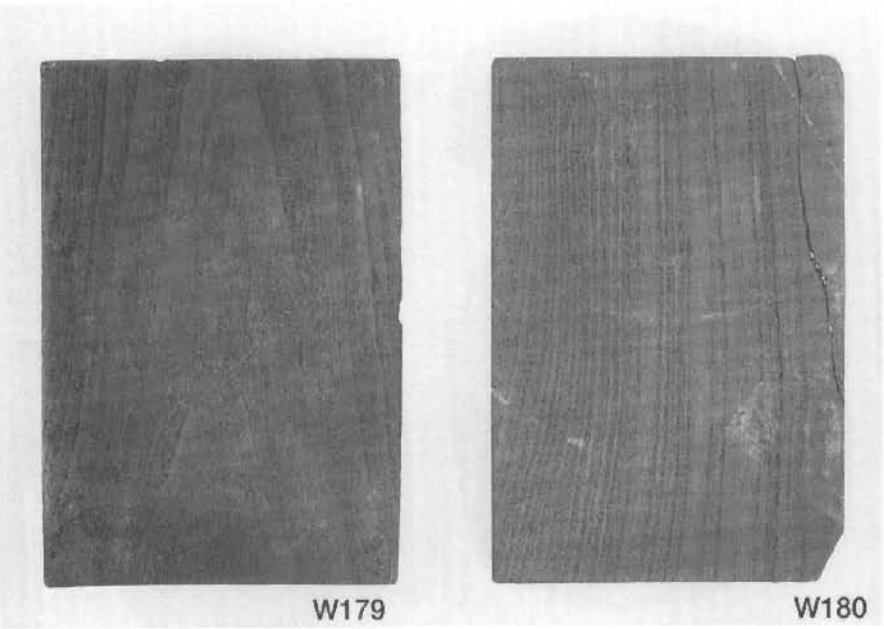
W171

W172

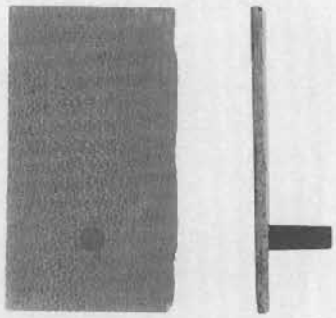

W173

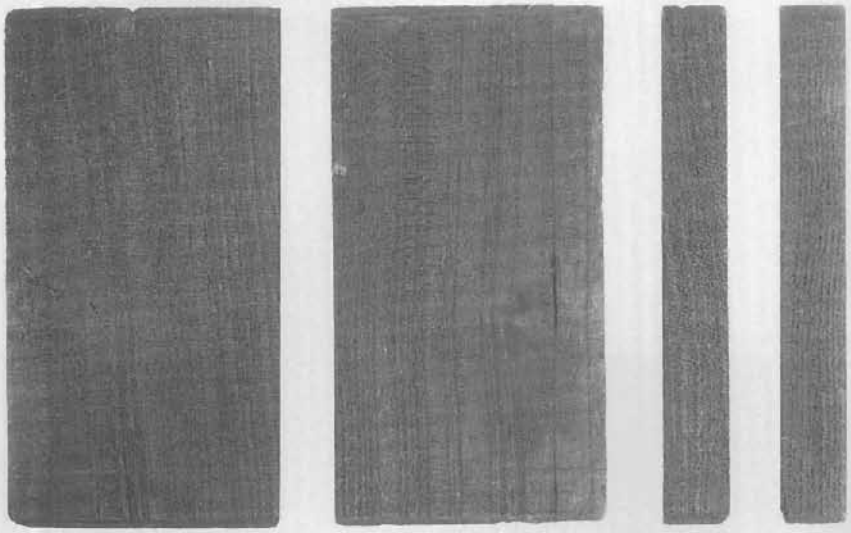

W174

漆製品　棗・容器・箱


W179

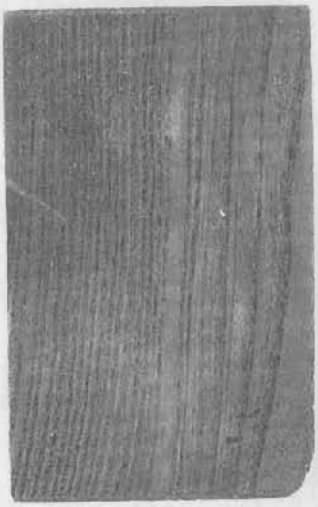
W180


W185

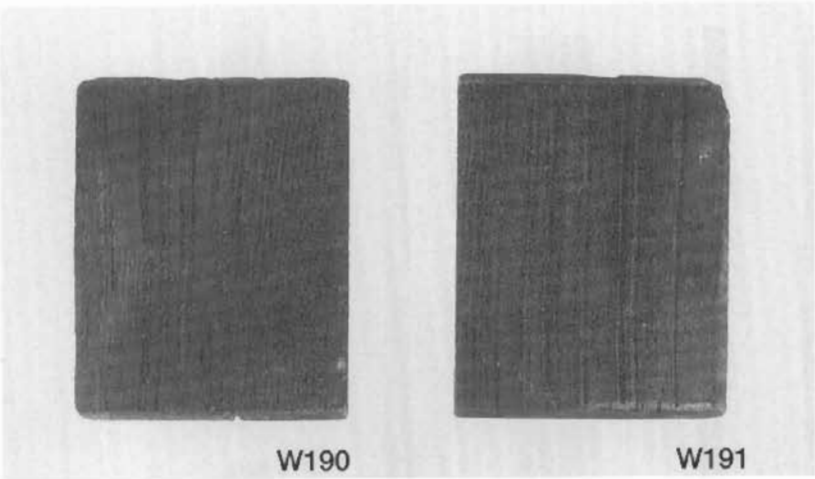

W181　W182　W183　W184

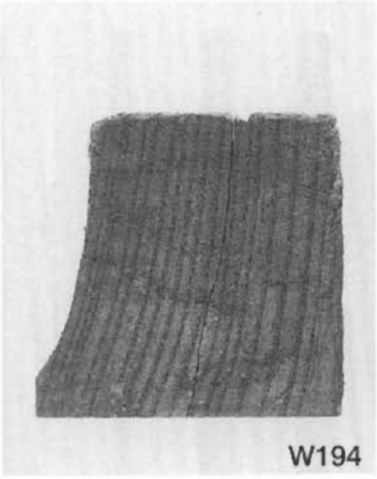
W186

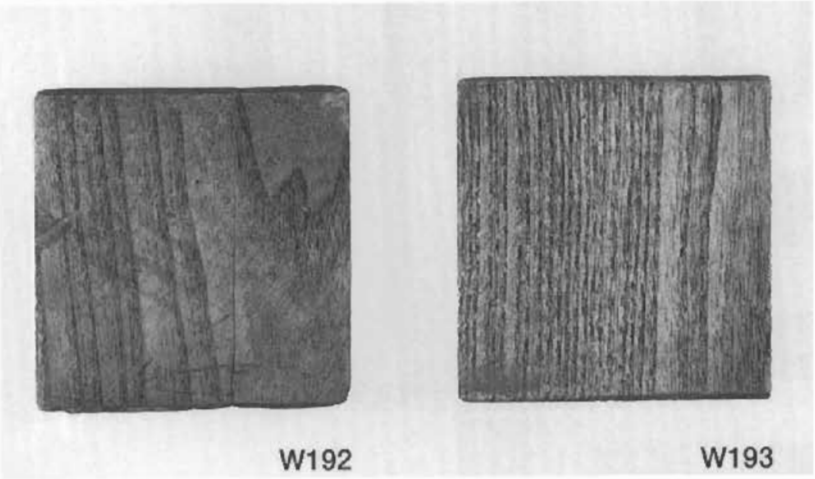
W188

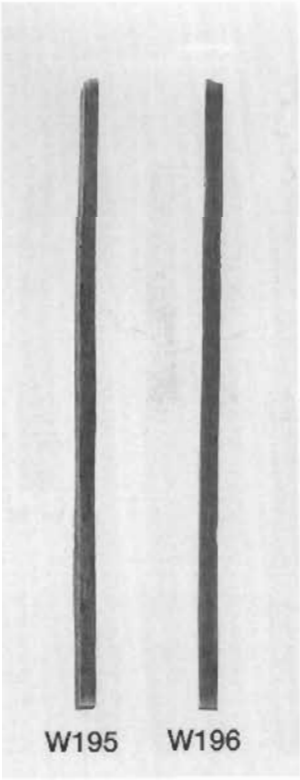

W189

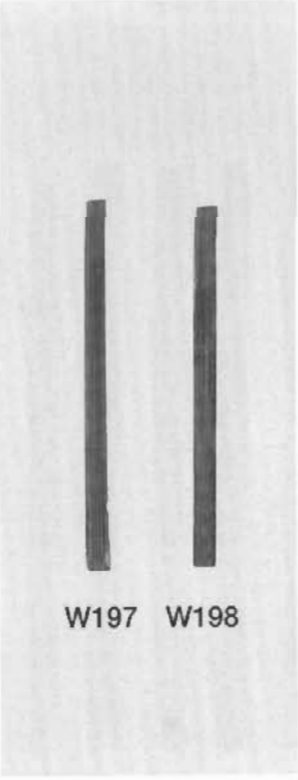
W187

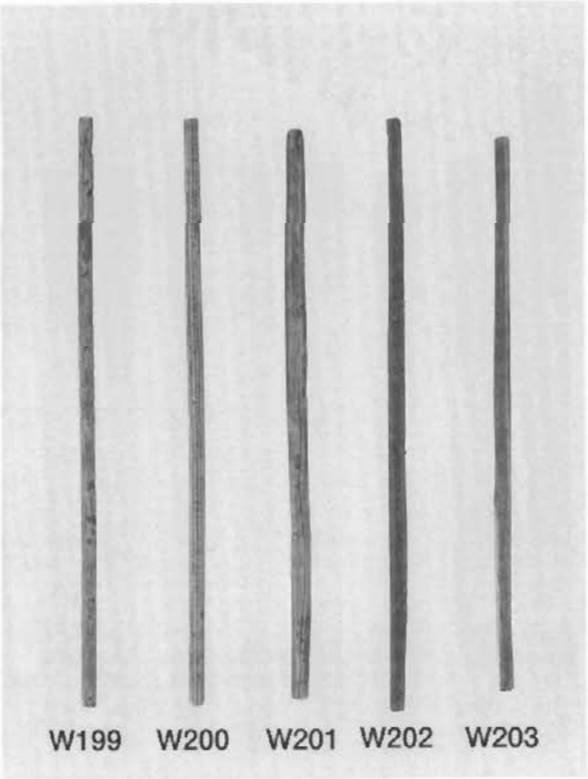

W190
W191


W194

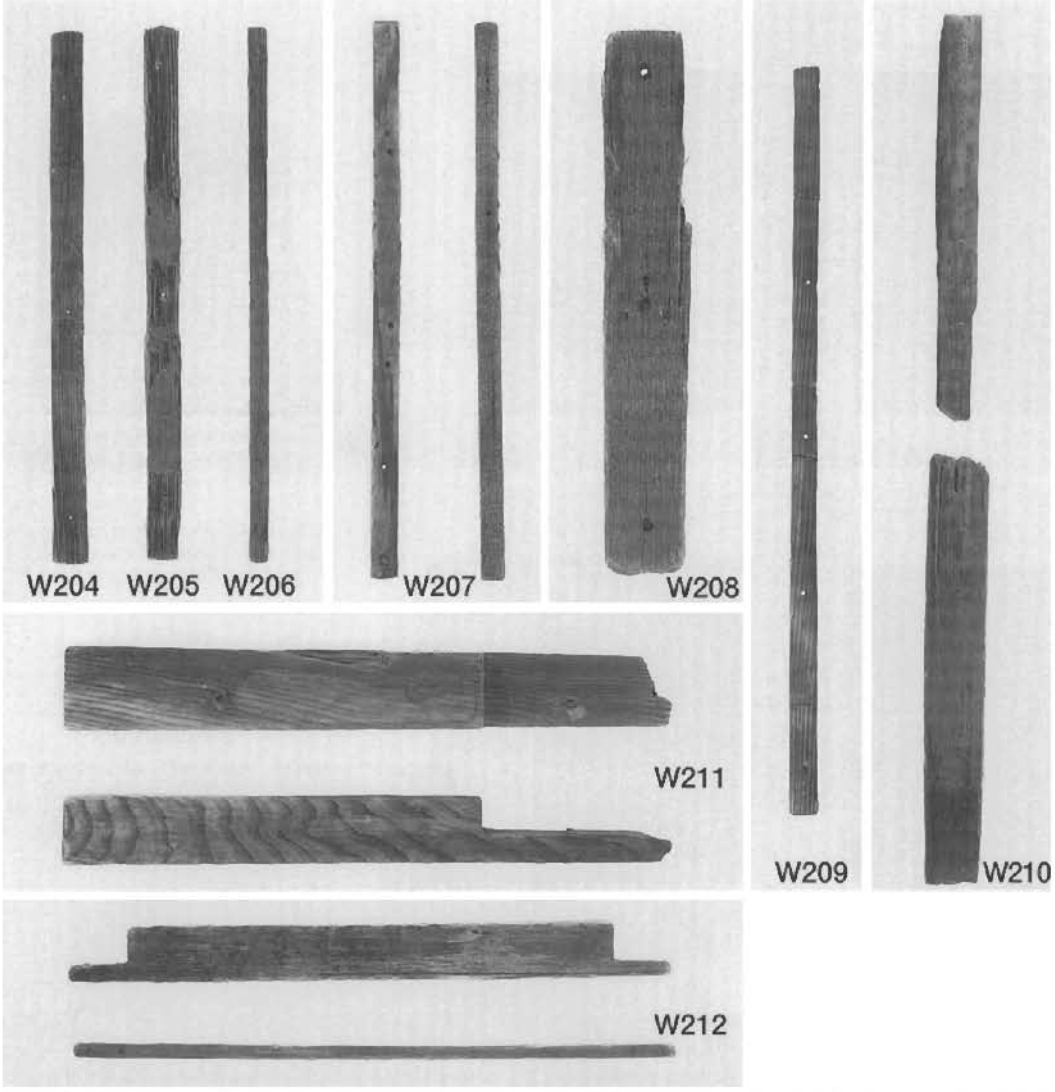

W192
W193

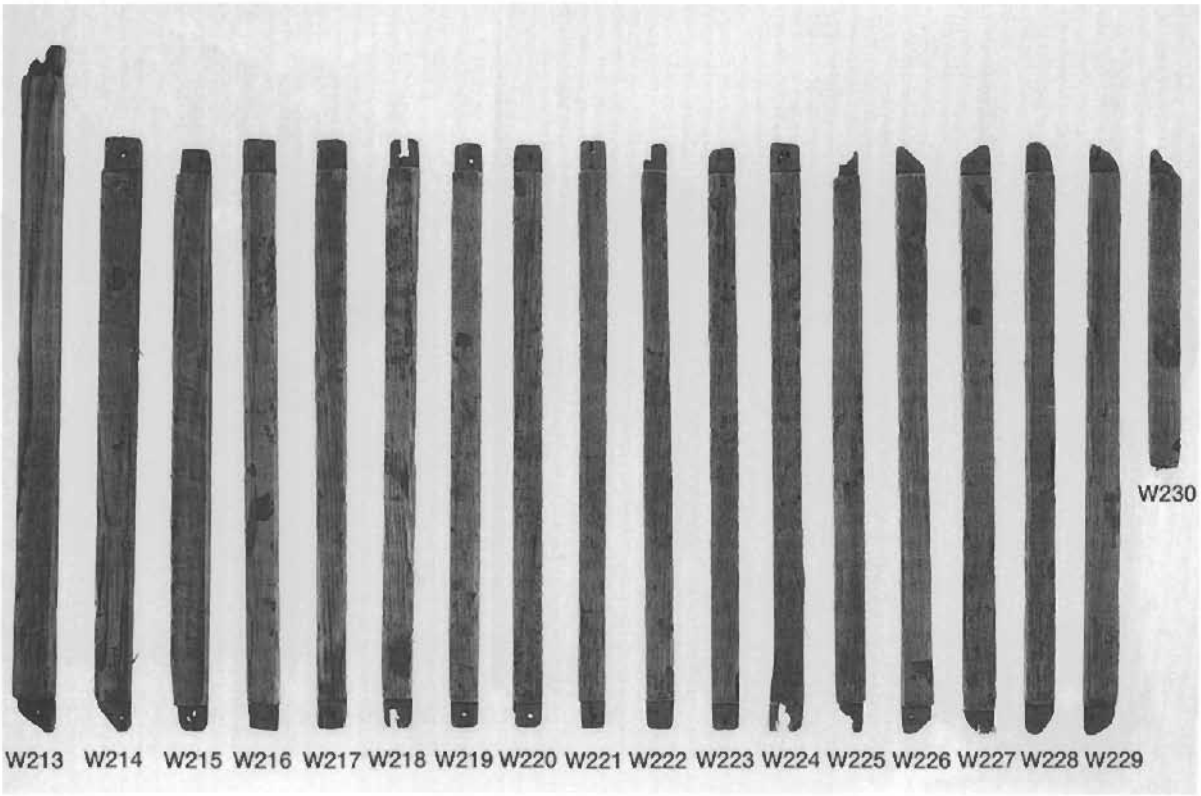

W195
W196


W197
W198

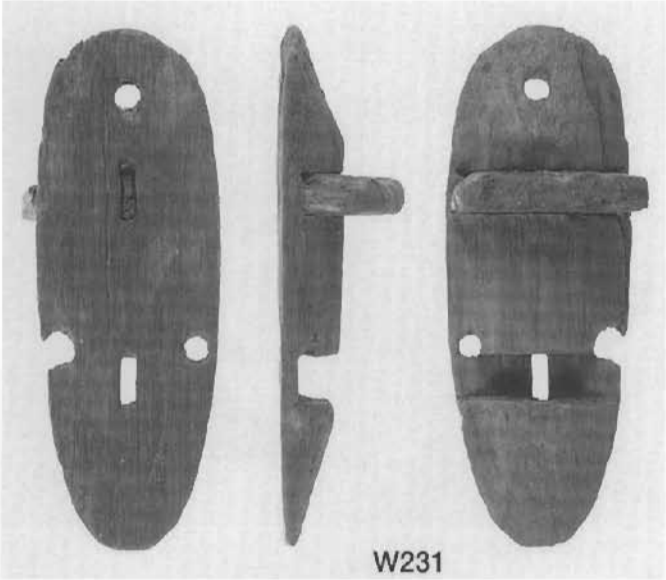

W199
W200
W201
W202
W203

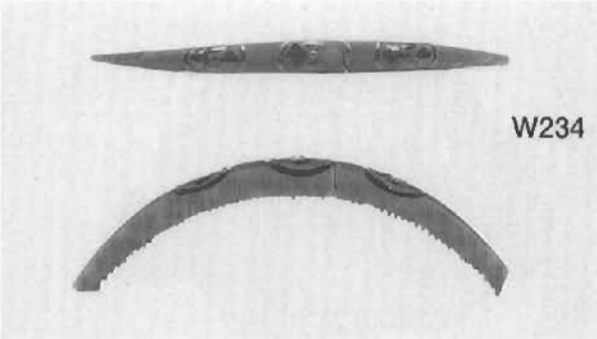
箱(2)　・箸

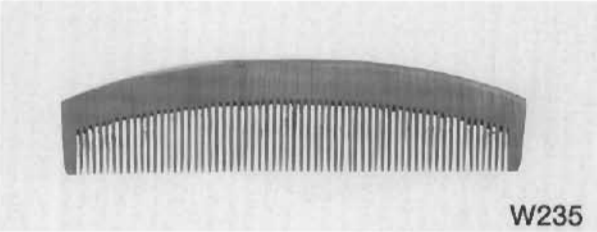

W204
W205
W206
W207
W208
W209
W210
W211
W212


W213
W214
W215
W216
W217
W218
W219
W220
W221
W222
W223
W224
W225
W226
W227
W228
W229
W230

棺台他

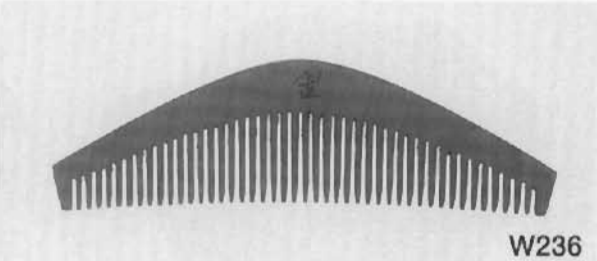

W231

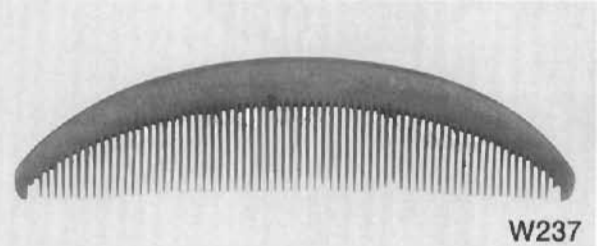

W234


W235

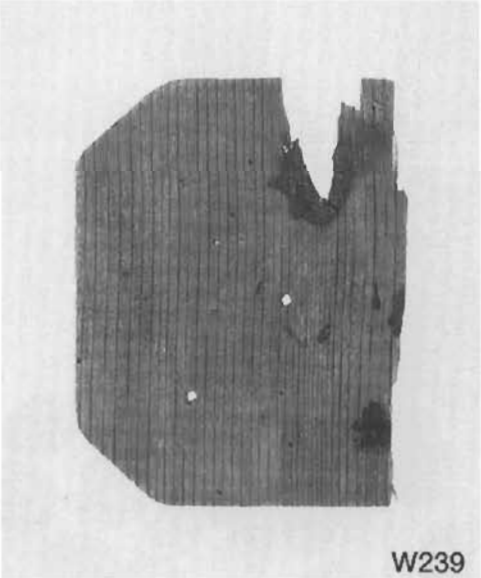
W232

W233

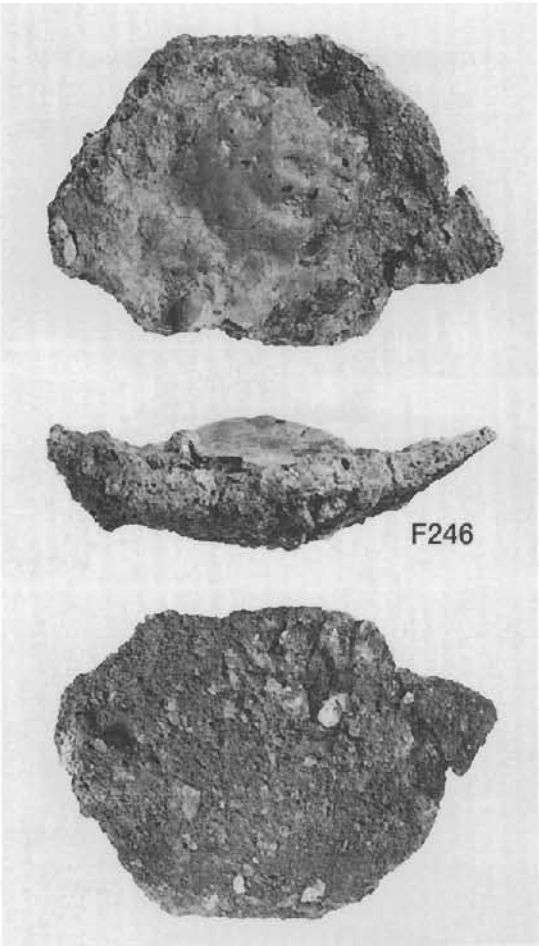

W236

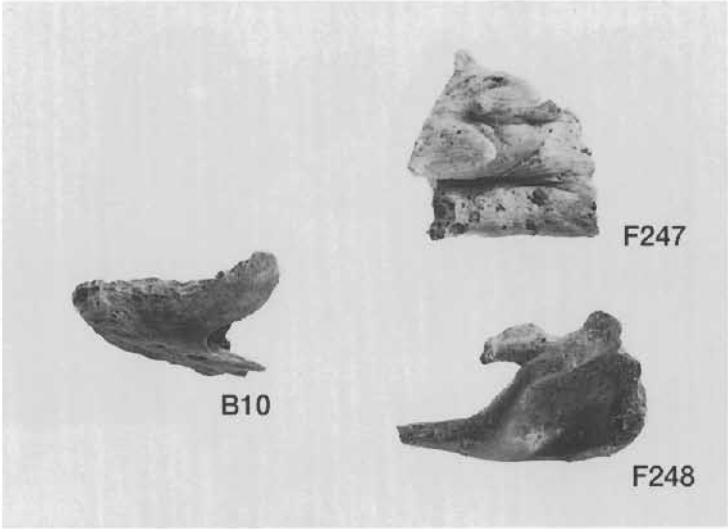

W237

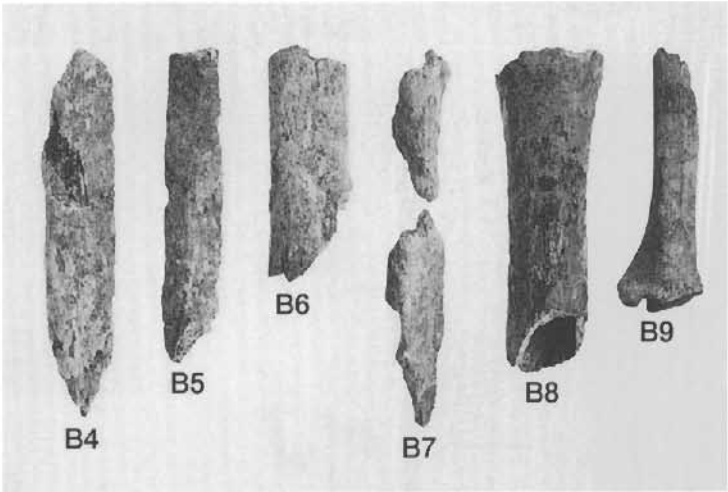
W238


W239

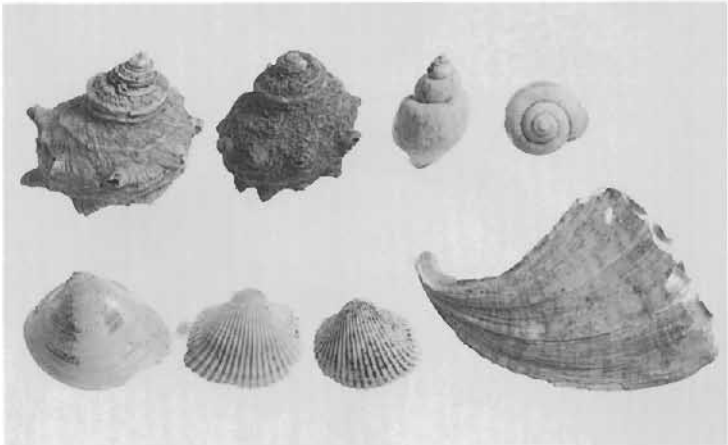
下駄・櫛・縄他


F246

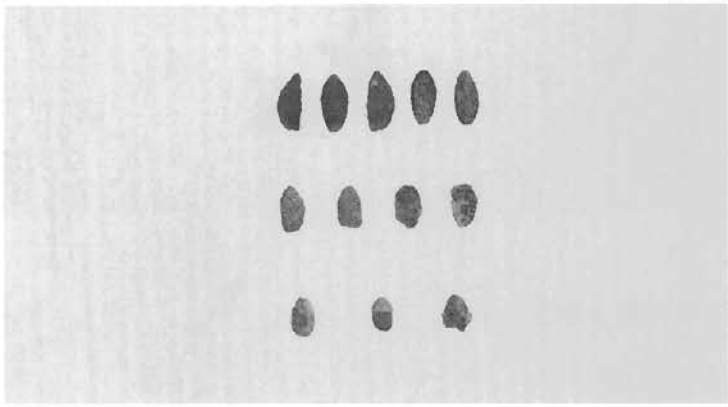

F247
B10
F248


B4
B5
B6
B7
B8
B9

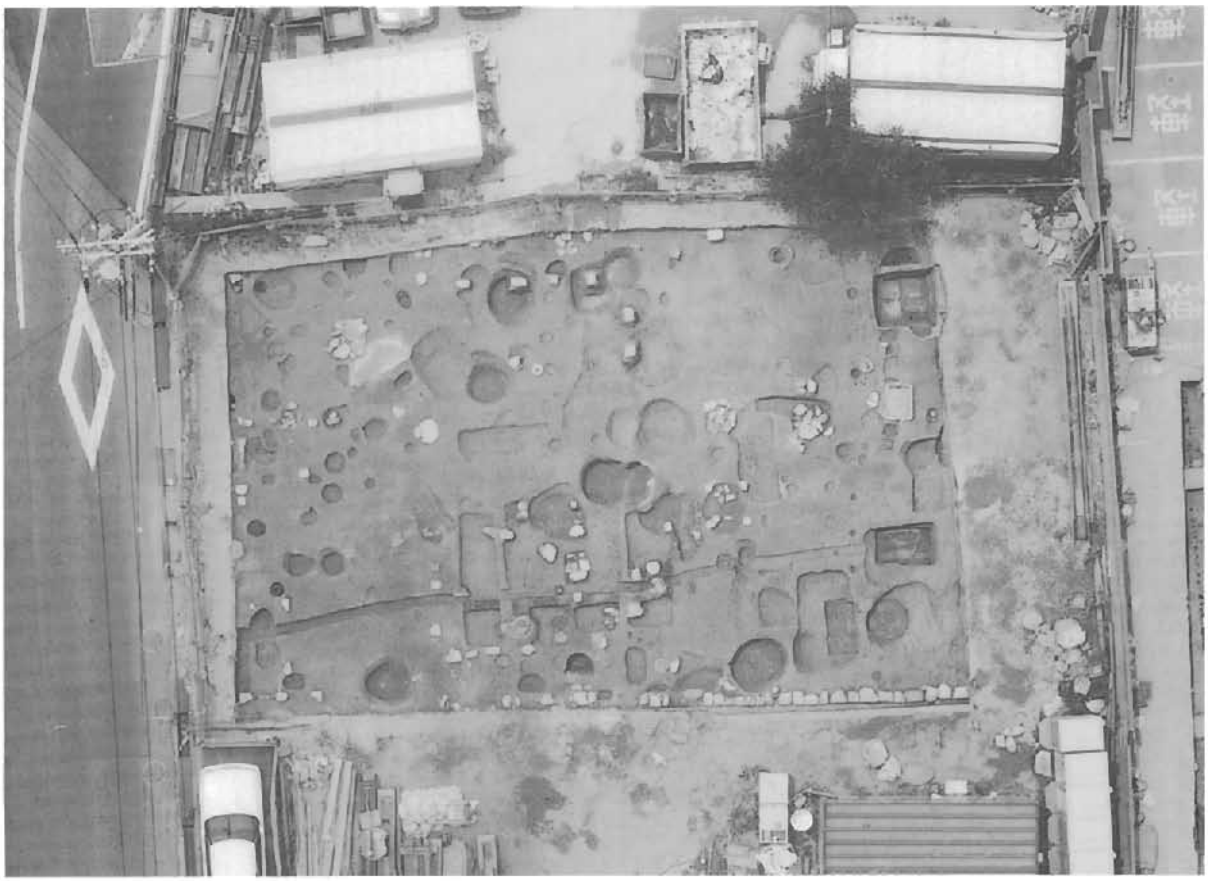
S64



S65



1. 西上空から



2. 東上空から

1. 調査区全景（北西から）

2. 調査区北半（東から）

1. 調査区北半（北から）

2. 調査区南半（北から）

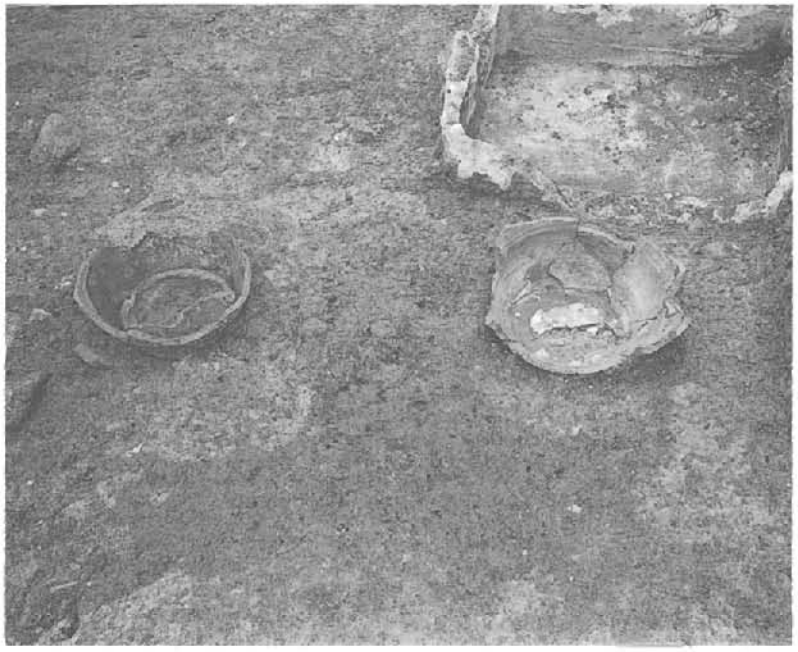
3. 礎石建物跡（東から）

上：水琴窟１検出状況
（北から）

中：水琴窟１断割り状況
（北から）

下：同上（北から）

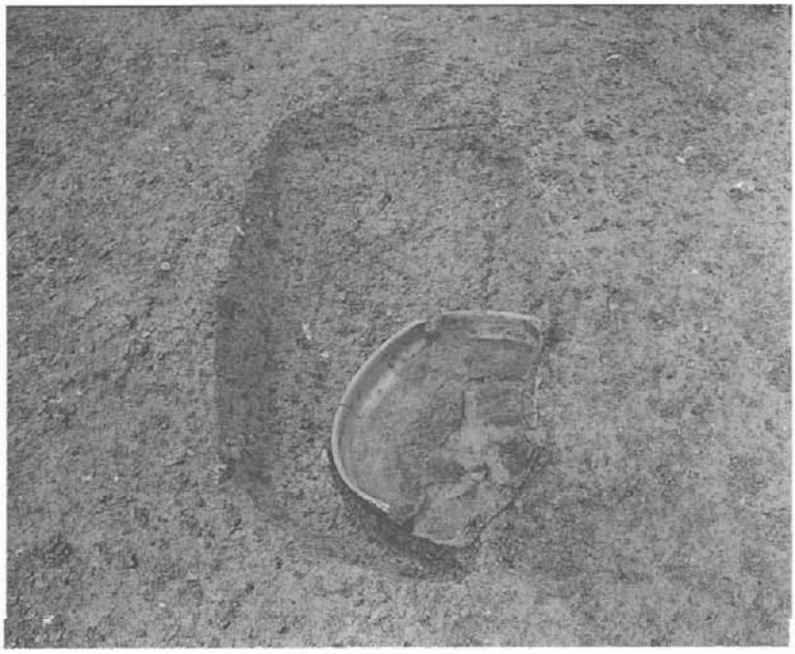
1. 水琴窟２検出状況
（北から）



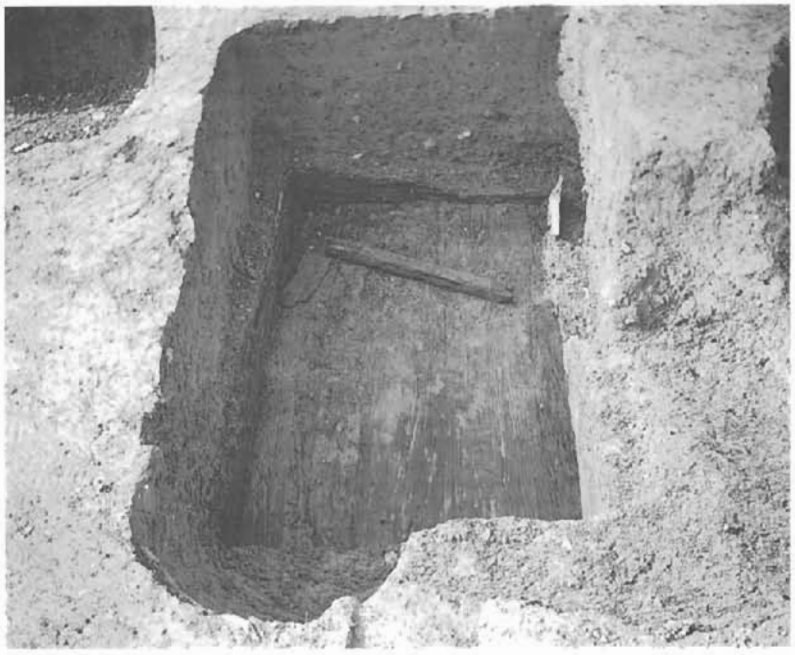
2. 便甕１・２検出状況
（南から）

3. カマド検出状況
（南から）

1. 石組側溝（北から）



2. SK 4（南から）



3. SK62（南から）

上：長方形焼土坑群
（西から）

中：同断面（西から）

下：SK79
（東から）

SK12検出状況（北から）

SK25検出状況（北から）

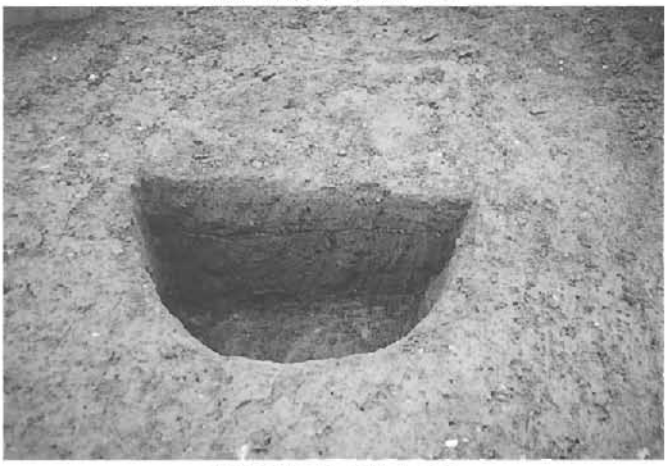
SK12断面（北から）

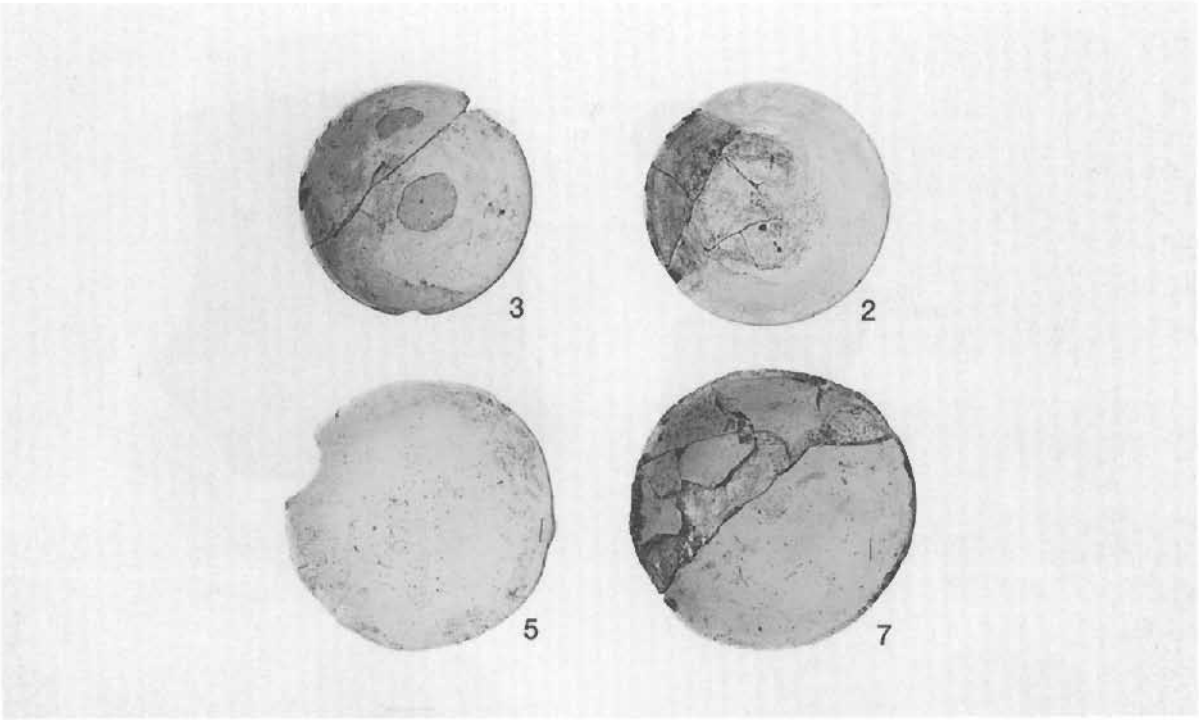
SK１断面（南から）

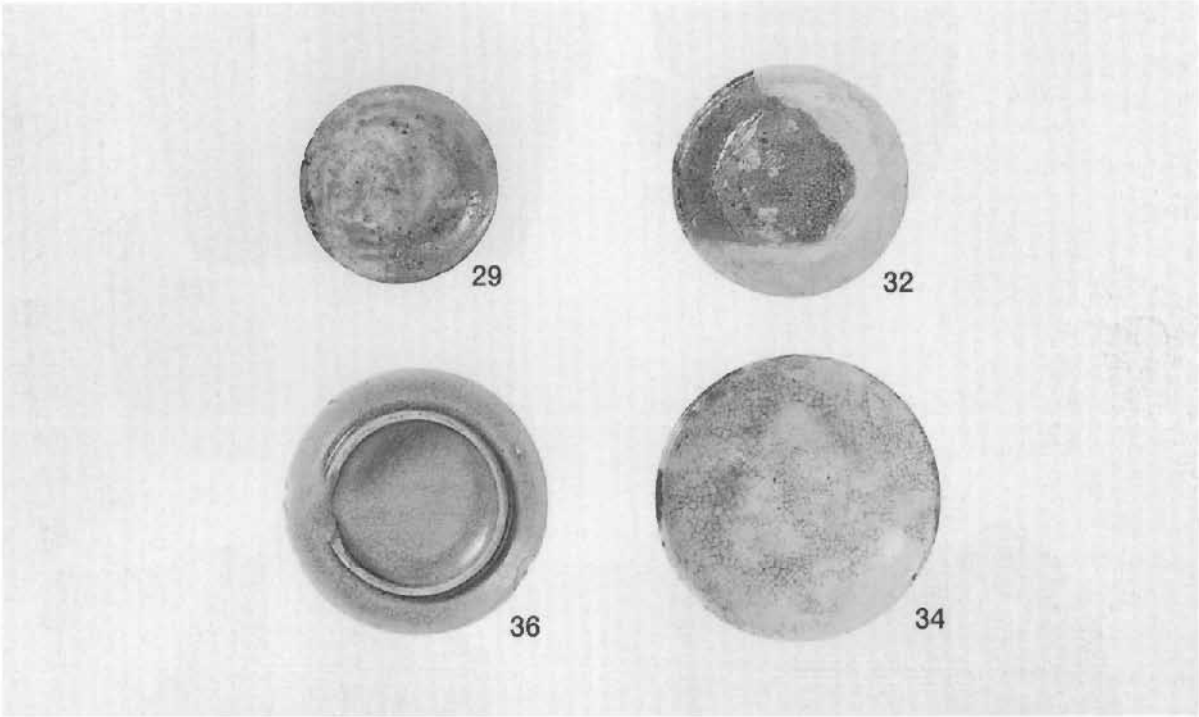
SK11断面（北から）

SK57断面（北から）

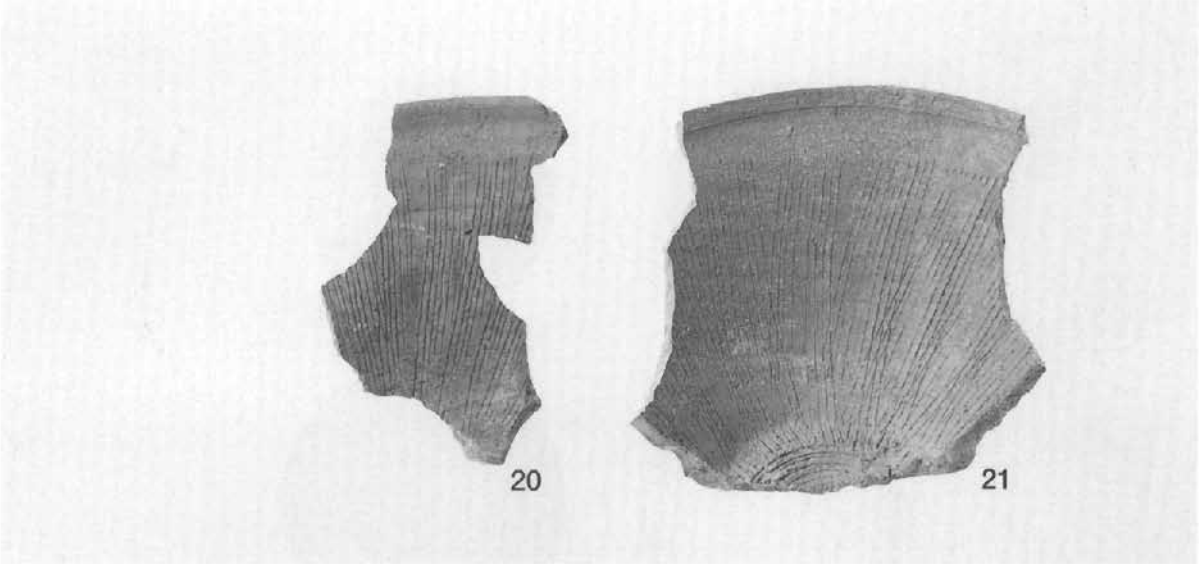
SK31断面（北から）

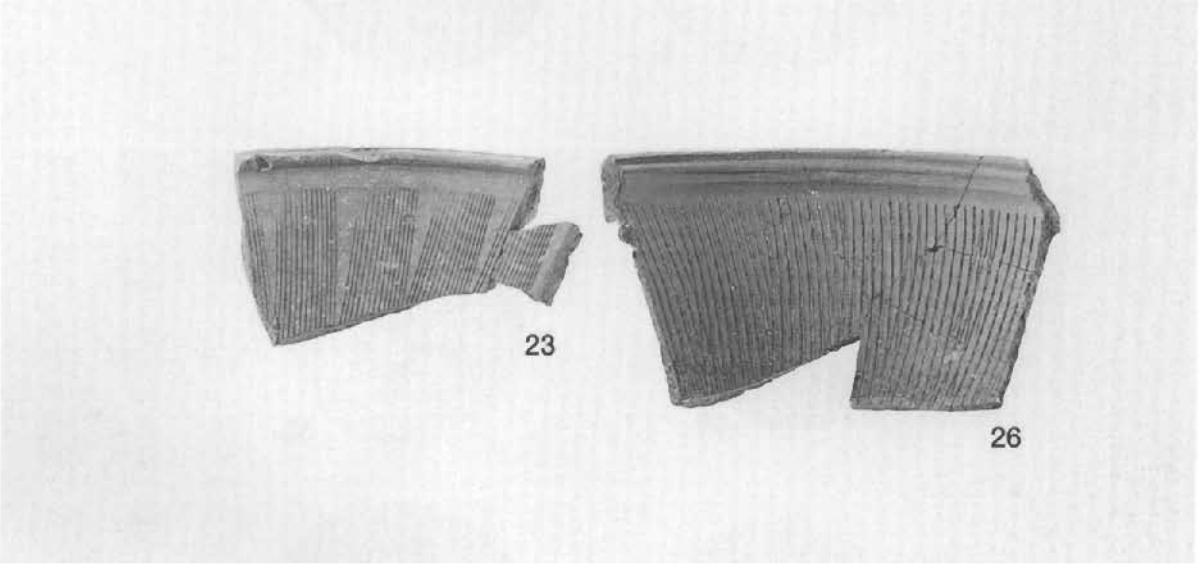

SK13断面（北から）

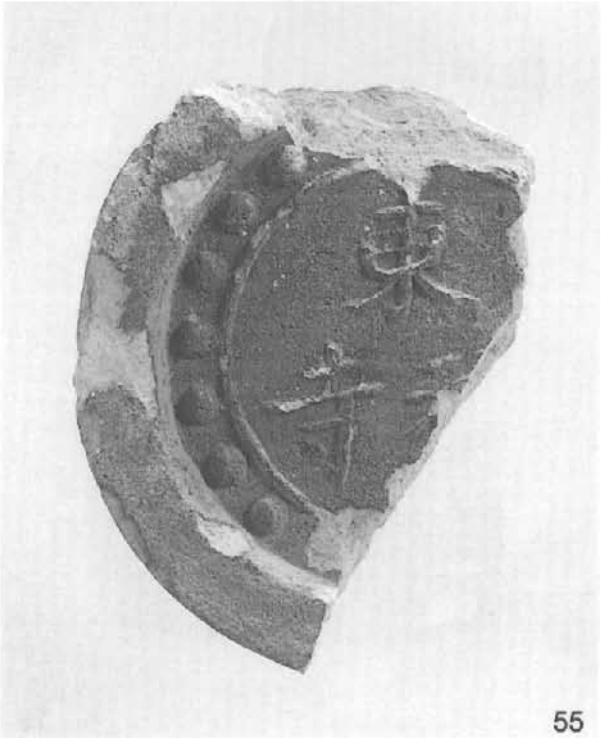


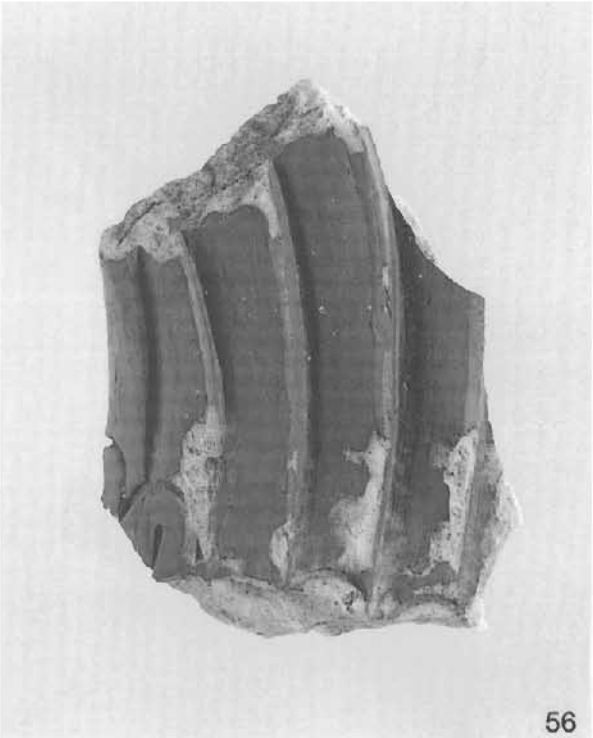


土師器・陶器









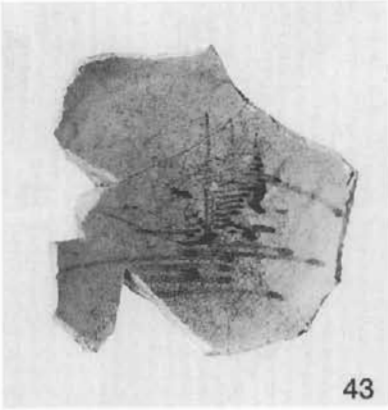
陶磁器(1)・瓦

38

40

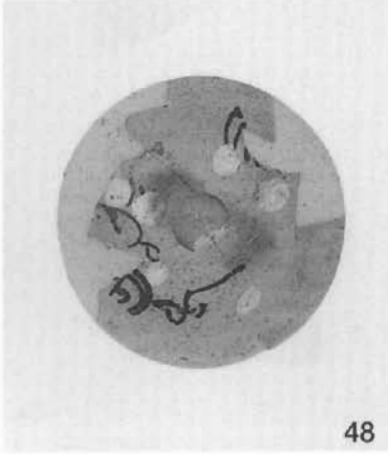
45

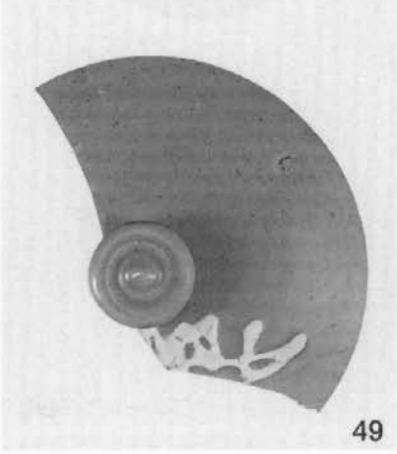
42


43

39

47

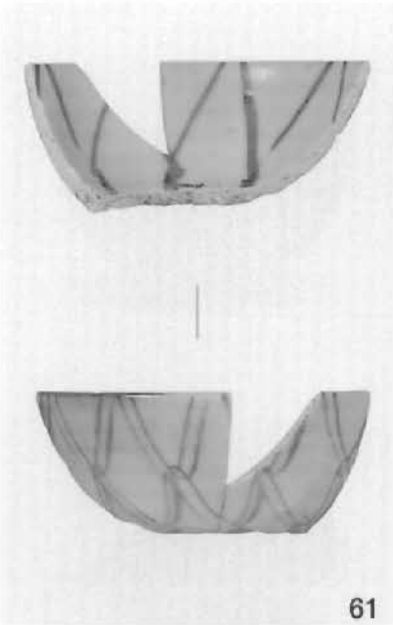

48

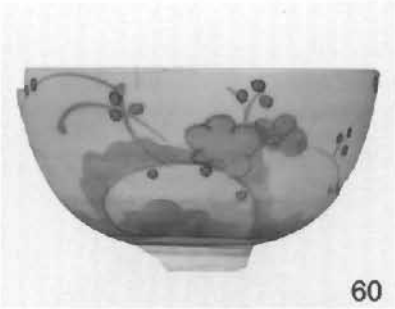

49

50

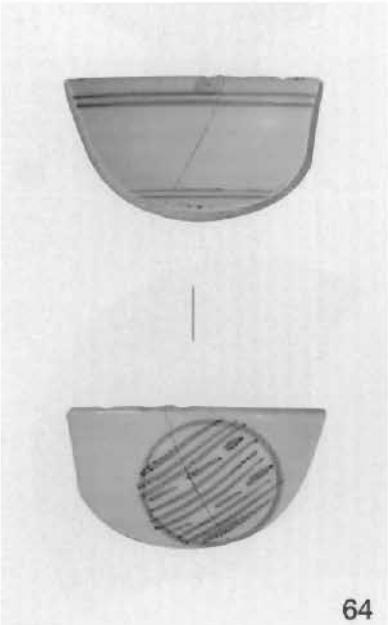
53

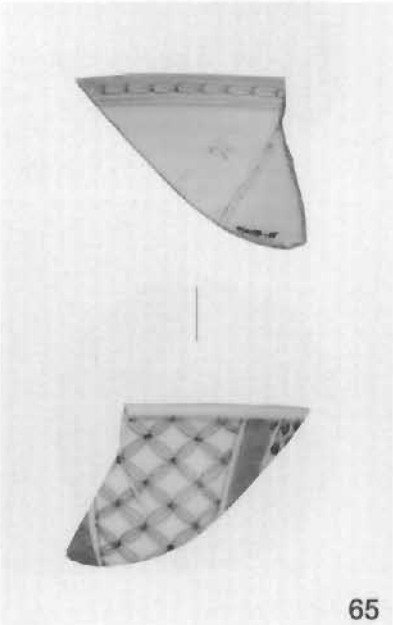
59


61


60

63


64


65

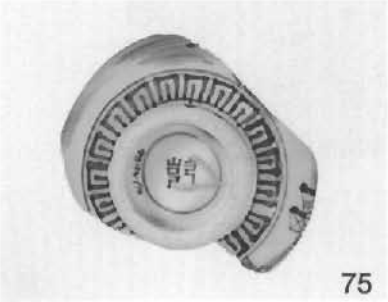
66

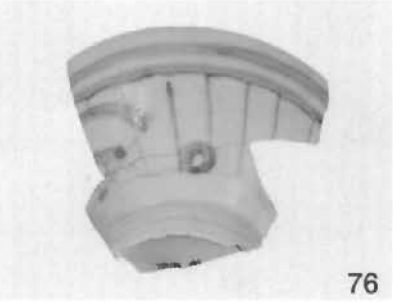
70

72

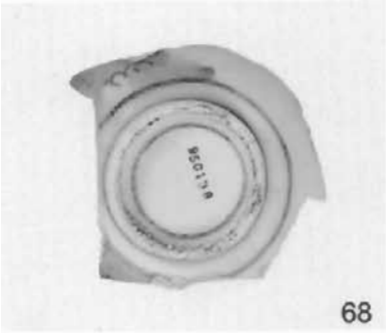
74

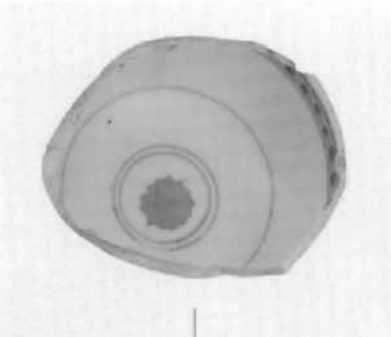
77

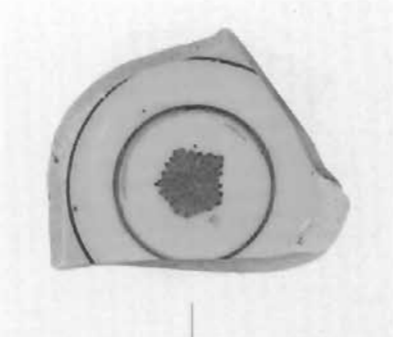

75

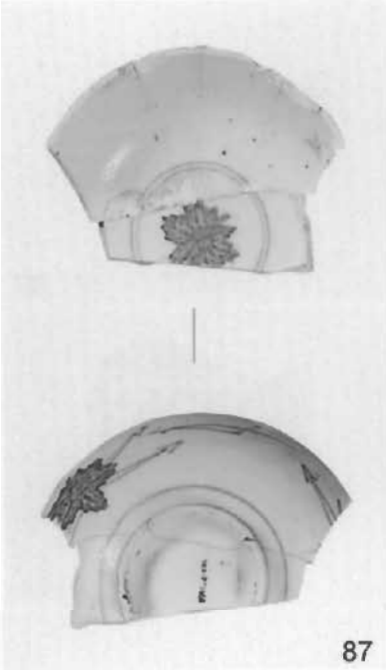

76

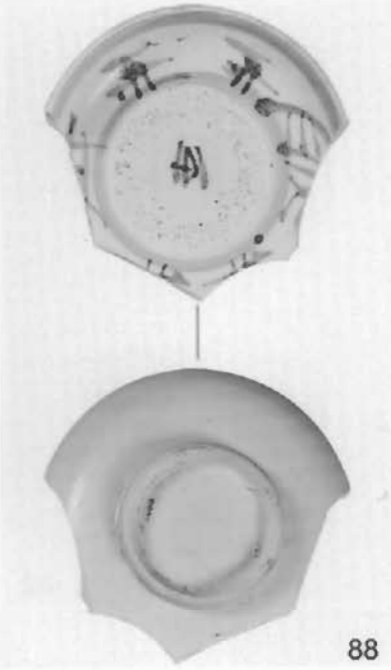
62

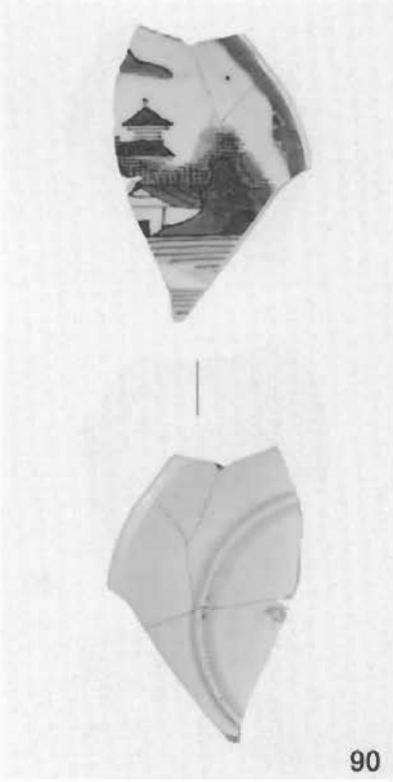

68

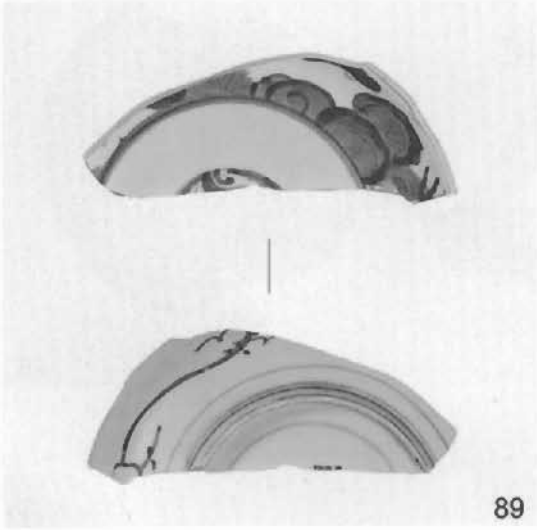

67


69

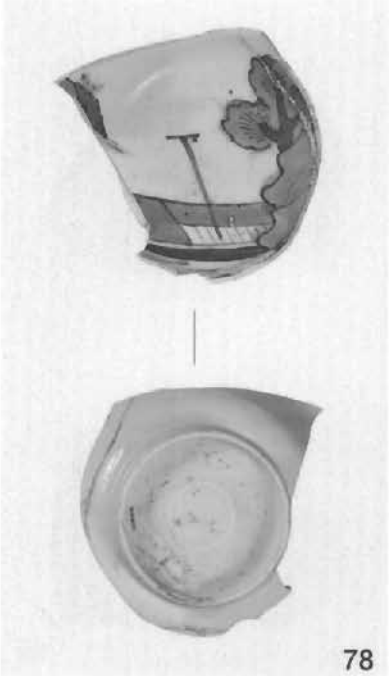

87

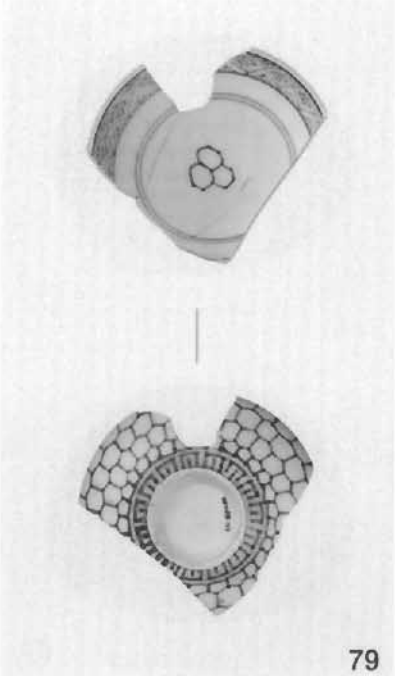

88

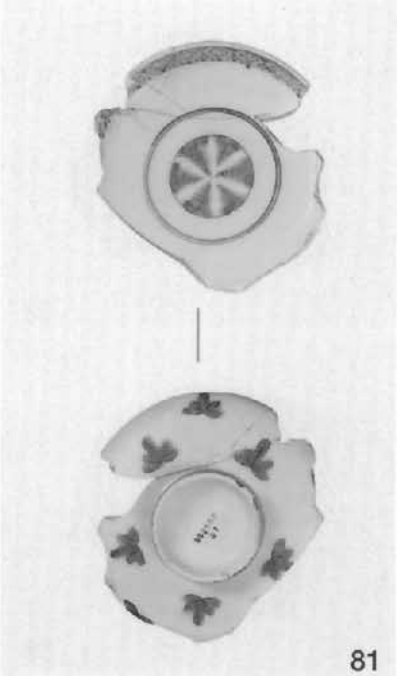

90

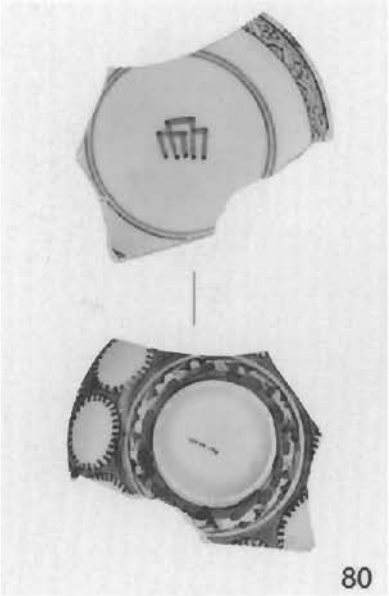

89

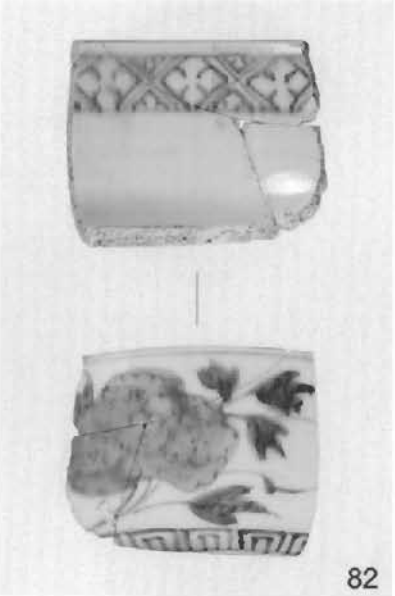
107

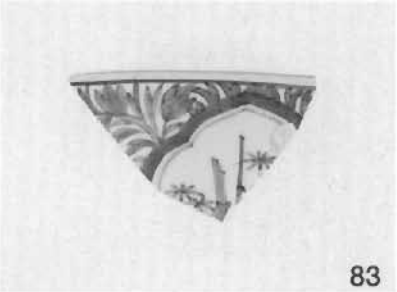

78


79

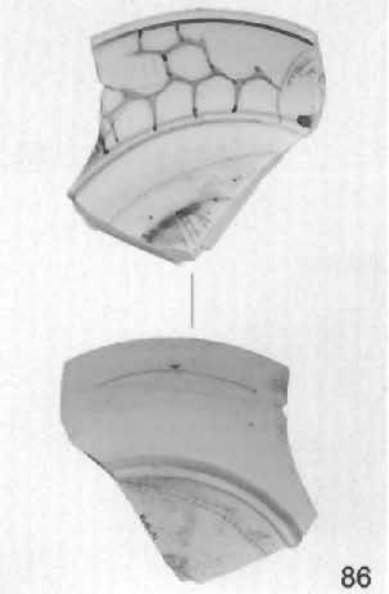

81

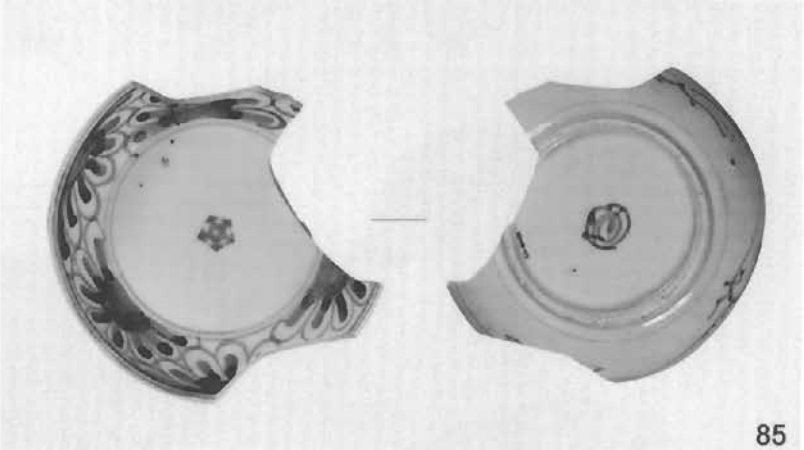

80


82

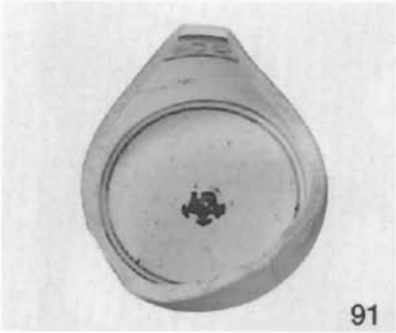

83

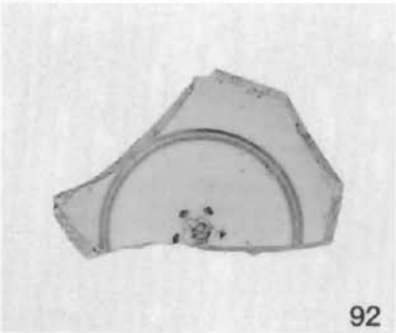
84

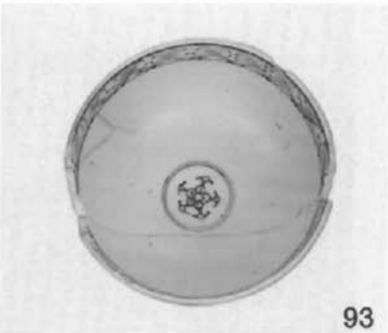

86


85

陶磁器(5)


91

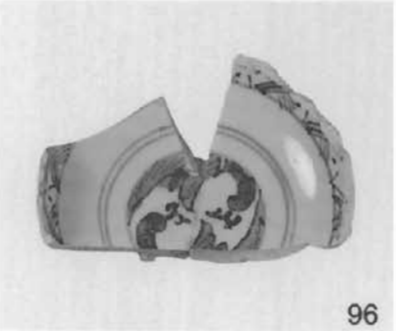

92

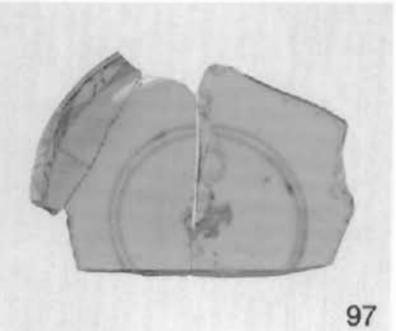

93

94

95

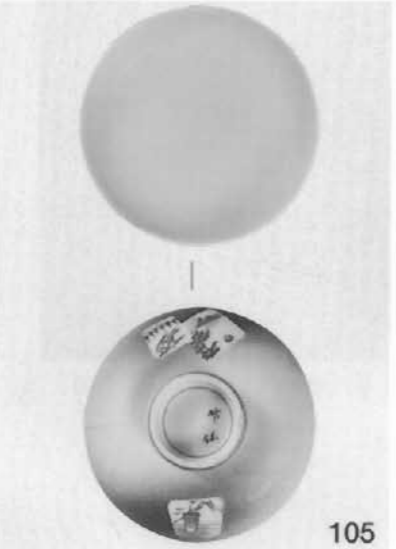
98

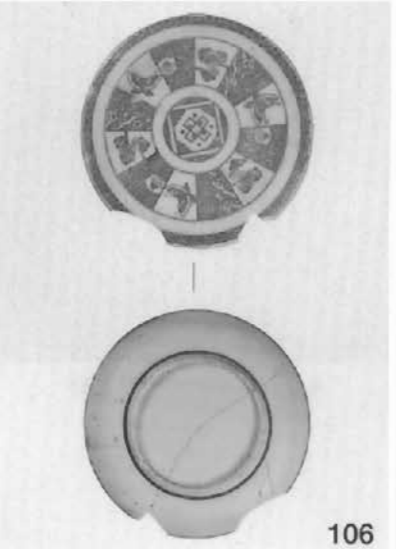

96


97

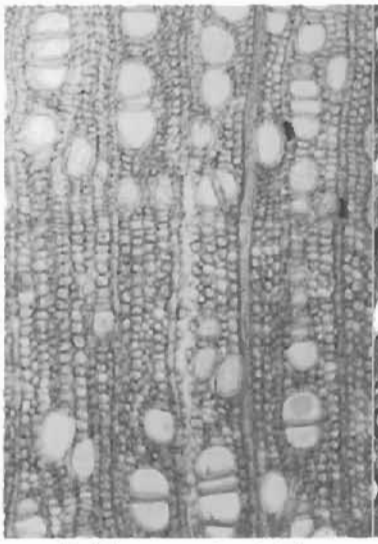
99

108

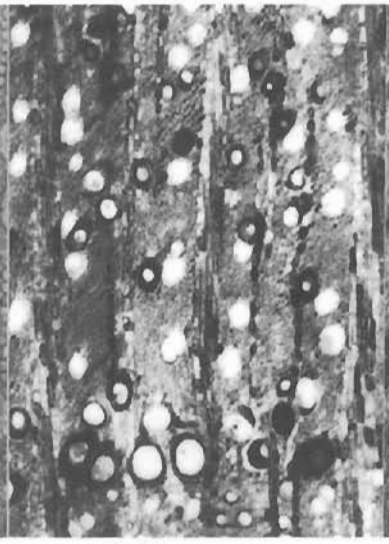

105


106

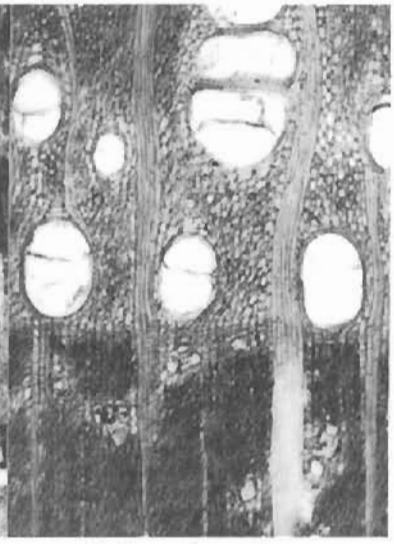
109



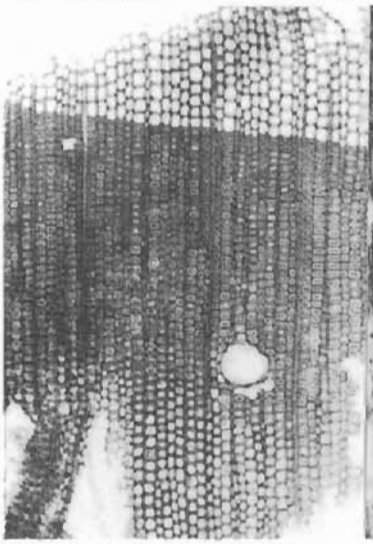
1. 資料No.1エゴノキ属×80



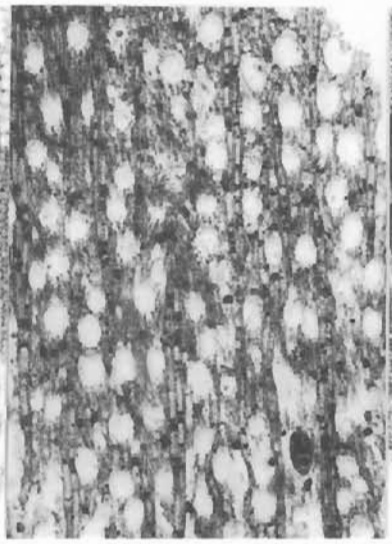
2. 資料No.2ウメ×80



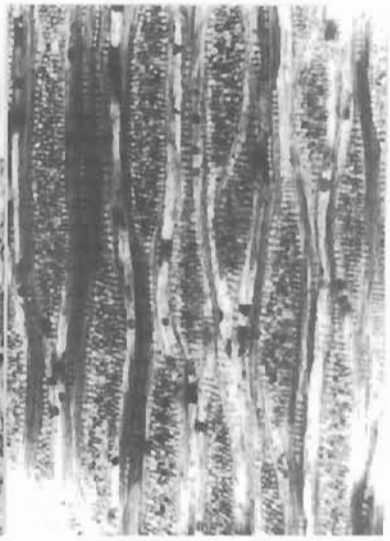
3. 資料No.3ヤマグワ×80



4. 資料No.4二葉マツ×30

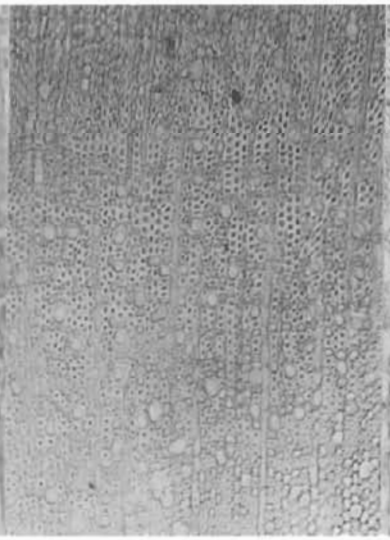


5. 資料No.5ナシ属×80

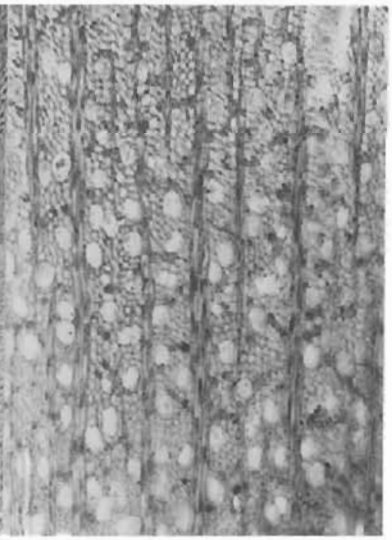


6. 資料No.7ウメ×30

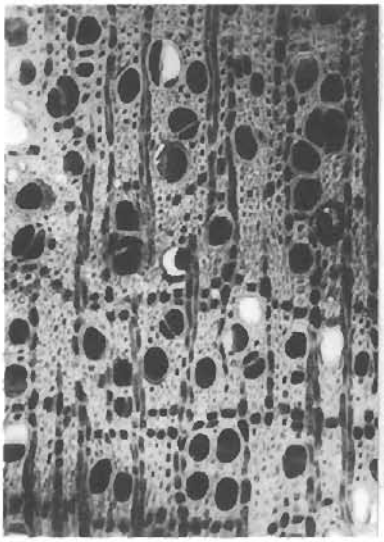
7. 資料No.8二葉マツ×300



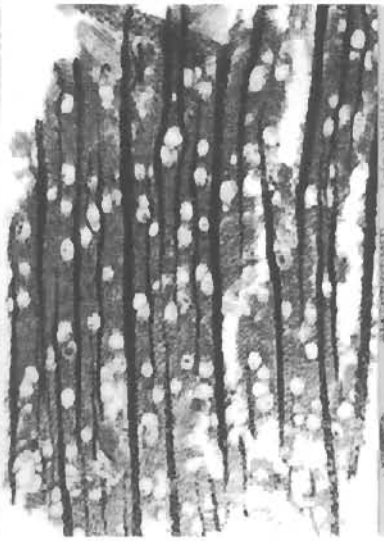
8. 資料No.9ツゲ×80



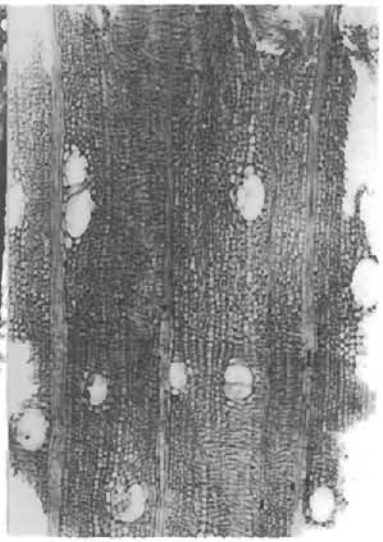
9. 資料No.10ナシ属×80



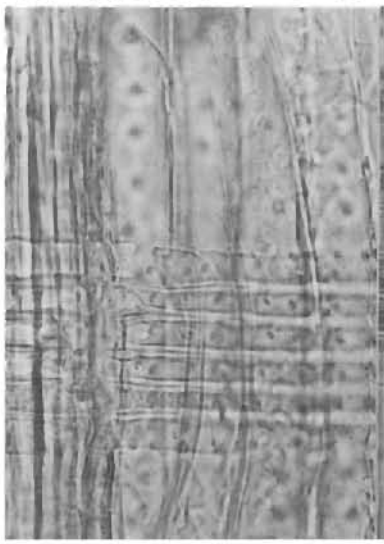
10. 資料No.11イスノキ×80



11. 資料No.12サクラ属×30

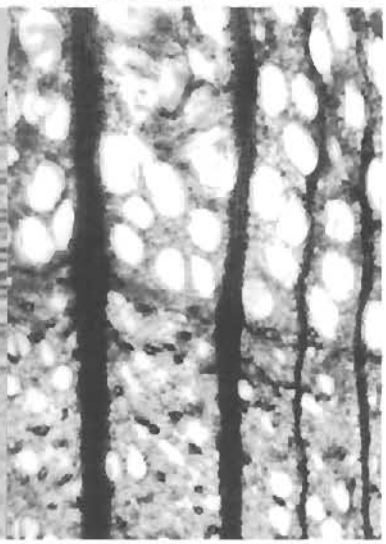


12. 資料No.13オニグルミ×30

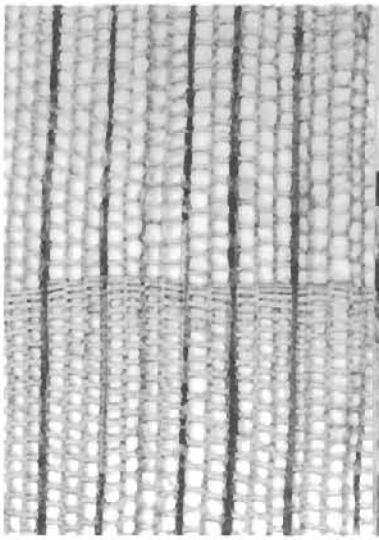


13. 資料No.15ヒノキ×300

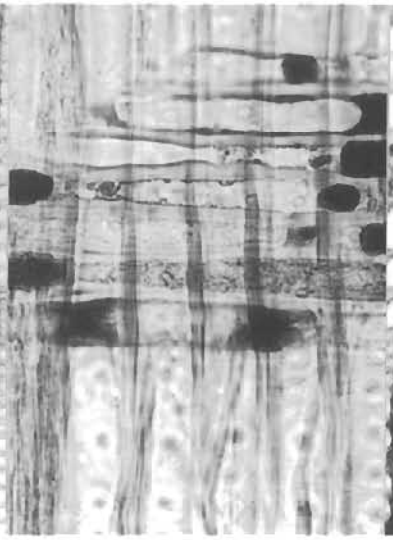
14. 資料No.16スギ×300



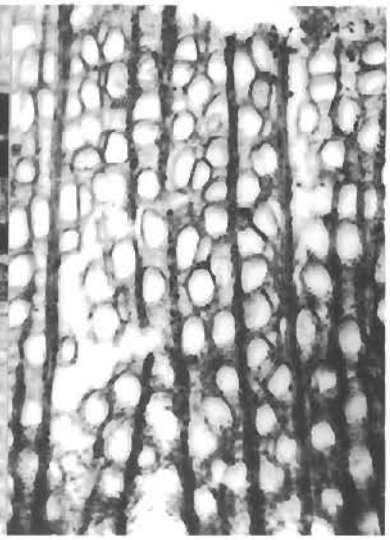
15. 資料No.17ブナ×80



16. 資料No.19ヒノキ×80



17. 資料No.21スギ×300



18. 資料No.22散孔材×80

報告書抄録

ふりがな	ありおかじょうせき・いたみごうちょう
書名	有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ
副書名	都市計画道路伊丹飛行場線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告（2）
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第207冊
編著者名	岡崎正雄・岡田章一・西口圭介・長谷川　眞・菱田淳子・長濱誠司・松岡千寿・山上雅弘・服部　寛 伊東隆夫
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　兵庫県神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL.078-531-7011
発行年月日	西暦2000（平成12年）３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
有岡城跡・伊丹郷町	兵庫県伊丹市宮ノ前2丁目宮ノ前1丁目	207	920181 950017	34°46′46″	135°25′13″	全面調査 19920714～19930114 19950621～19950803	1012㎡	県道伊丹飛行場線の道路改良に伴う調査、兵庫県西宮土木事務所の依頼を受けた

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有岡城跡・伊丹郷町	墓 城跡・近世都市遺跡 寺院・墓地 生産（酒造）	古墳 中世 近世～近代	木棺墓・溝・掘立柱建物跡・井戸・便桶・竈・土間・礎石建物 寺院本堂・墓・火災片付け・土坑 酒蔵・井戸・男柱・竈	須恵器 白磁碗・土師器・木製品 金属製品 木簡・副葬品 蔵骨器・瓦 陶磁器・瓦	

兵庫県文化財調査報告第207冊

有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ

都市計画道路伊丹飛行場線(中工区)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2000年3月発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

☎ (078) 531-7011

発　行　兵庫県教育委員会

〒650-8567　神戸市中央区下山手通り5 丁目1 番10号

印　刷　株式会社　リョーイン